バカと銀色と召喚獣

silver

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと銀色と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ２２４４Ｌ

【作者名】
ｓｉｌｖｅｒ

【あらすじ】
このお話は原作、バカとテストと召喚獣のキャラクターと、裏社会の中で生きる
オリキャラたちとの交わりを書いています。
明るい学園生活を送る原作キャラと、裏社会の暗闇の中で日々戦い続けるオリキャラたちとのお話をどうぞ。

（生意気なこと書いてすみません（汗））

リクエストには必ずお答えしますので、もう少しだけ辛抱お願いします。

ホントすみません。

主人公について（前書き）

新しく始めました。
何か感想・意見があったらどんどん送って下さい。

主人公について

この物語は主人公の氷花紫苑とバカとテストと召喚獣のメンバーとで織りなす物語です。

主人公　　氷花紫苑（ひょうかしおん）

身長　　明久と同じぐらい

性別　　男

性格　優しい　しかし、自分の大切な人が傷つけられると怒る
書いた後から気づいたのですが、主人公に関して全然説明不足でしたね。

主人公はボランティアで観察処分者の仕事をやっている。

得意教科は世界史、日本史、英語、因みに国家機密情報局で働いているため、他にもフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語などが話せる。ドイツ語を話せたので島田さんとはいち早くうち解けた。

主人公が国家機密情報局で働いているのを知っているのは今のところ西村先生のみ。

主人公の召喚獣について　　格好は西洋の黒が主の金色のラインがデザインされている鎧を装備している。顔には何も装備していない。左腕に小型の盾が着いている。

召喚された時は何も武器をもっていない。
この状態からは右の手のひらから無数の緑色の光弾を放つ事が出来る。
だがこの光弾はあまり拡散せずに直進する。
そこまで速くないのでよく動きを見てタイミングをあわせればだれでもかわせる。
だが当たった時の威力は絶大。至近距離で浴びれば教師の召喚獣でも即戦死する。

武器はもう一つ、召喚獣が呪文を唱えて異次元から鎧と同じデザインの槍と剣を足して2で割ったような武器を取り出せる。
この武器は剣としても槍としても使えて、持つところの両端に着いている。
この武器が召喚獣の手にない時、好きなタイミングで異次元に戻せる。
この武器を出している間は逆に光弾が出せなくなる。

腕輪の能力　左腕に白い波動衝撃腕（はどうしょうげきわん）という物が装備される。この腕から波動衝撃波と言う衝撃波を作り出せる。
だがこれらは腕の掴める範囲にしか出せない。

主人公の召喚獣も明久の召喚獣と同じように物理干渉が可能です。
その代わりフィードバックで痛みを受けます。

大切な人　明久・雄二・康太・瑞希・美波・翔子・愛子・真奈。
仕事仲間の皆さん・柚葉（木下母）・秀俊（木下父）　が特に大切だと思っている

ただし、秀吉・優子は別格　何故かはいずれ書くことになるのでそのときに

秀吉・優子とは幼なじみ。主人公が五歳の時、親は組織を裏切ったので殺されている。
現在主人公も親が所属していた国家機密情報局に所属している。所属したのは中三の始め。
国家機密情報局の存在は世界共通的にトップシークレット扱い。
主人公は射撃をする際に基本は麻酔銃を使う。実弾を使う事は滅多に無い。
西村先生とは仕事仲間。たまに他の仕事仲間も出します。
真奈はレギュラーです。

顔はかなりかっこいい。銀髪。料理、運動、武術、射撃が得意。学力は優子とほぼ同じ。
そのためよくもてる。ラブレターを貰った事を優子に見つかるたびに関節を外される。
だが鈍感なので優子の好意に気づかない。
本人も優子の事が好きなのだが自分が自分を認められるようになった時に告白するつもり。
優子も同じ事を思ってる。
主人公が優子に好意を持ってる事を知っているのは秀吉だけ。

主人公について（後書き）

次回　プロローグ

プロローグ

パンッ！

それは、僕の頬をはたく音

「何で、何で今まで連絡してくれなかったのよ！」

優子が僕に強く叫ぶ。

「僕が二人を守れずに誘拐されて、二人に怖い体験をさせてしまったし、挙げ句の果て僕自身が二人を恐がらせてしまったから。」

「確かにあの時のあなたは恐かったわ。でも、それはあなたが自分を責めることじゃない。あれはアタシと秀吉の心が弱かったからよ。だからあなたは何も責任を感じる必要は無いのよ。それに、こんなことする必要も。私たちがどれだけあなたのことを心配したかわかってるの！？　あなたが死んだってニュースで流れたときにはどれだけ後悔したか！」

「そうじゃ！確かにワシらは誘拐されてしまったがワシらは得になにもされておらんぞ。それはお主がいち早く駆けつけてワシらを助けてくれたからじゃ。じゃから姉上の言うとおりお主が責任を感じる必要なんてないのじゃ！」

秀吉も優子同様僕に強く言う。

「でも・・・・・・」

「じゃあ、あなたはこれ以上私たちを悲しませる気!?あなたがいなくなって私たちが悲しまないとでも思ってるの!?」

「っ！　そんなことは・・・・・・」

僕は言葉がつまる。

「アタシたちはあなたがいなくなって自分を責めたわ！　あの時にあんなことを言わなければあなたはいなくならかったんじゃないかって。だからもう手遅れになるのは嫌なの。あなたが今生きてここにいる。それだけで私は笑顔になれるの！　もう、勝手にいなくならないで！　私たちと一緒に今まで通り暮らしましょう?」

「二人はこれからも僕と一緒にいてくれるの?」

「そうに決まっておるじゃろ?」

「当たり前よ」

秀吉は力強く言った。優子は消えそうな声で言った後僕のことを抱きしめてくれた。そのときだったっけな。僕が優子にことを好きなんだって気付いたのは・・・・・・

「秀吉、優子、うわぁぁぁぁぁぁぁ！」

それから僕はしばらく泣き続けた。

ピピピピ、ピピピピ、ピピ　かちっ

僕は目覚まし時計を止めた。

「夢か」

僕は布団から出て着替え始める。朝にはランニングをしているからだ。

「さてと、行きますか」

走り終わり、家への帰路に着いたとき秀吉が前で走っているのが見えた。

「秀吉、おはよう」

秀吉がこちらに気づいたようで。

「おお！　紫苑おはようじゃ。お互い精がでるのう。前々から気になっておったのじゃが、お主はどのくらい走っておるのじゃ？」

と、秀吉が聞いてきたので軽いかんじに答える。

「別に大した距離は走ってないよ。たったの２０キロだよ？」

「えっ？　２０？　それは嘘偽りはないのかの？」

何故か秀吉が驚く。あれ?何か驚かせるようなこと言ったかな?・・・だめだ、分からない。

「そんなに驚く事かな?」

すると秀吉が呆れたように言う。

「そうじゃったな。お主は若干天然じゃから、仕方ないのかの」

秀吉があきらめたように言った。

「まあそんな話は置いといて、今日から二年生だよね? クラス分け楽しみだね?」

あのままだと永遠に続く気がしたので話題をそらす。

「そういえばそうじゃったな。まあワシはFクラスなんじゃろうが」

がっかりしたように言うので励まさなくてはと思い、

「大丈夫だよ。秀吉は演劇部のホープなんだから。それに僕もFクラスだし」

「お主は風邪じゃったからじゃろ?まあお主と一緒じゃからうれしいがの。もし試験召喚戦争をする時は紫苑とは戦いたく無いし。じゃが紫苑が味方なら心強いのう。しかし、残念じゃったのう」

風邪とゆうのは嘘で実は国家機密情報局の任務があったんだよな。でもそれを教える訳にはいかないから風邪という嘘をついたんだよね。

「？　残念って何が？」

「姉上と同じクラスにはなることが出来ないからじゃ」

し、しまった。話題が話題なだけに秀吉にからかわれている。なんか悔しいじゃないか。

「べ、別に気になんかなってないし／／／」

「やっぱりお主は姉上が好きなんじゃな」

「別にいいじゃないか。優子はかわいいし、やさしいし、かわいいとか言ったあとの赤くなるところなんか特にかわいいんだから。そ、それよりもほら、もう家だよ。じゃあまた後で」

僕は秀吉から逃げるようにその場を立ち去る。

「まったく、お主も姉上も両思いなのにのう」

秀吉が言った言葉は誰にも聞こえない。

朝食を食べ終え、二人を待つ。

「お主の方が早かったようじゃの」

「紫苑、おはよう」

二人が来た。僕らは学校に向けて歩き出す。たわいもない話をしながら。

それにしてもさっきあんな事話したから優子と顔を合わせにくいな。

すると優子が僕の考えを知ってか知らずか、僕の顔を手で押さえつけて自分の方に向けてきた。顔がかなり近いので僕の頬が赤くそまってしまった。

「何でさっきっからアタシとは顔を合わせてくれないのよ？」

ま、まずい、本当に顔が近い。こんなところをだれかに見られたりたら。だがやはり定番なのか見覚えのある二人の姿が。

「おっはよう。優子、弟くん、氷花くん」

「・・・・・・おはよう」

霧島さんと一年の終わりに転入してきた工藤さんだ。

「おはよう、愛子、翔子」

「おはようじゃ、工藤、霧島」

「お、おはよう、工藤さん、霧島さん」

僕たち三人も二人に返す。優子は去年この二人と同じクラスだったので友人になった。僕と秀吉は優子を迎えに行くときに会うことが

多いので仲良くなった。そんなことを思い出していると工藤さんがおもしろいものをみるような目でこちらを見た。やはりごまかせないか。

「それにしても優子は大胆だねぇ。代表もそうおもうでしょ？」

「・・・・・うん。大胆」

「え？　大胆って何が？」

優子が何のことだか解らないといった顔をする。・・・って素でやってたのか！？　びっくりだよ。もう。

「だって優子ったらこんな公然の前でキスしようとしてるんだもん。もしかして二人は付き合ってるの？」

それをきいたとたんに優子の顔が真っ赤に染まる。やっと気付いたんだね。僕はうれしいよ。

「ち、ちちち違うわよ！？　別にキスしよう「そうじゃ。この二人は付き合ってるんじゃ。」ともって、秀吉！」

秀吉、まさか日頃の仕返しかい！？　勇気あるな。僕が秀吉に感心していると話しがヒートアップしていた。

「へ～噂って本当だったんだ」

「・・・・・私も、いつか雄二に」

「秀吉、後で覚えときなさいよ」

いわんこっちゃない。というより僕はその噂とやらが聞きたい。霧島さんは雄二が好きなのか？

「あっ、そうだ。氷花くん、今度から紫苑くんってよんでいい？僕のことも愛子ってよんでいいから」

優子がにらんできた。やばぁい。

僕はそっと工藤さんに耳打ちする。

「呼ぶのはかまわないけど、僕は工藤さんのままでもいい？」

「いいけどどうして？」

「優子に怒られるから」

「なるほどねぇ～」

工藤さんは何かおもちゃを見つけたような目で優子をみた。

「お主ら、もう学校じゃぞ」

本当だ。気付かなかった。

「「「「「おはようございます。西村先生」」」」」

僕たちの声がハモった。

「おお、おはよう。霧島、工藤、木下姉弟、氷花。ほら、クラス分けの結果だ」

そう言って僕たち全員に紙の入った封筒を渡す。

「みんなはどこだった？」

「わたしと翔子と愛子はＡね」

「ワシはＦじゃ」

「まあ僕もＦだよね。そりゃ」

「あれ？紫苑くんＦクラスなの？」

「風邪だったもので」

「そうだったんだ」

どうやら女子三人はＡで僕たち男子はＦクラスらしい。すると西村先生が話しかけてきた。

「紫苑。おまえはちょっと残れ。話がある」

まあ任務についてだろう。

「了解です」

「紫苑、何かしたの？」

「いや、たぶん仕事についてだよ」

「そう。じゃあ先行ってるね」

「教室で待っておるからの」

四人を先に行かせる。因みに四人に言った仕事とは観察処分者の仕事の事だ。僕は部活に属さない代わりにこの仕事を手伝っている。理由は二つ。一つ目の理由は明久一人では大変そうだから。二つ目はこの仕事では召喚獣を使って雑用をするので。召喚獣の操作が上手くなるとおもったから。

実際、上手くなりましたけどね。四人が校舎に入って行ったのを見届けると西村先生が言ってきた。

「ついてないな。試験の日に任務だなんて、おまえならAクラスになれただろうに」

「いえ、問題ないですよ。優子はあの二人がいるから問題ないでしょうし、秀吉が一人とゆうのは心配ですから」

「そうか。ならいいんだが、木下以外にも面倒をみるやつがいるかもしれんがな」

「あっ！　じゃあ彼らもですか？」

「ああ、出来るだけ問題を起こさないようにおまえがあいつらを抑えてくれ」

「それは多分無理ですね。彼らのすることはおもしろいですから」

「その時はおれがおまえを止めるからな」

「それはこっちの台詞ですよ」

「まあ何はともあれ、これからしばらく任務は無いだろうから学園生活をエンジョイしてこい」

「そうですね。じゃあ行ってきます」

こうして僕の文月学園での生活がまくを上げる。彼らはどんな事をしでかしてくれるのか。今から楽しみだな。

プロローグ（後書き）

次回　僕とFクラスと試験召喚戦争

第一問　バカとFクラスと試験召喚戦争

問　以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え
『問題点・・・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点　　合金の例・・・・・ジュラルミン』

教師のコメント
正解です。合金なので『鉄』では駄目だという引っかけ問題なのですが、姫城さんは引っかかりませんでしたね。

氷花紫苑の答え
『問題点・・・・・マグネシウムを材料にしてしまった点』

教師のコメント
その通りですが、してしまったからどうなったかを答えてください。

土屋康太の答え
『問題点・・・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え
『合金の例・・・・・・未来合金（すごく強い）』

教師のコメント
すごく強いといわれても。

Fクラスに向かうため3階を歩いていると馬鹿でかいAクラスの教室が目にとまった。三人のことが気になったのでちょっと覗いてみる。するとAクラスの教室の設備は凄い物だった。

「プラズマディスプレイにノートパソコン、個人エアコンに冷蔵庫、リクライニングシートか」

本当に凄いな、思わず声に出ちゃったよ。そんなことを思いながら教室を見回していると三人が友人と喋っている姿が目にとまる。良かった、彼女たちは大丈夫みたいだな。秀吉が待っているだろうから行くか。そう言って僕も歩き出す。

「で、これがFクラスの教室か」

綿の入ってない座布団にちゃぶ台、一部割れている窓ガラス、キノコの生えている畳。
まさに雲泥の差、月とすっぽんだな。

「おう、おはよう、紫苑。風邪だったことは秀吉から聞いたぞ。残念だったな、おまえならAクラスになれただろうに」

「おはよう、雄二。確かにAクラスの設備は羨ましいけど、僕が欲しいのは楽しい思い出だから。
雄二達となら良い思い出が作れそうだから期待してるよ」

「へ～、嬉しいこと言ってくれるじゃねーか。ま、あのバカもここだろうから色々やれるとおもうぜ。
そのためにおまえも協力しろよ」

今話しているのは坂本雄二。去年知り合い、友人になった。明久、康太も同じく。

「今の発言からすると雄二が代表？」

「相変わらずおまえはするどいな。そうだ、おれがクラス代表だ」

「じゃあ一年間よろしくお願いします。代表殿？」

雄二が代表か。仕えるに値する人間でよかった。

「こっちもよろしくたのむ」

「ところで、席はどうなってるか教えてくれる？」

「自由席だそうだ」

それでいいのか学園よ！？

「じゃあ代表演説期待してるよ？」

「ああ、まかせておけ」

そう言いつつ秀吉の近くの席に座る。

「おお、紫苑。自主的にやっているとはいえ大変じゃの」

「まあね。ここいい？」

「うむ。一年間よろしくたのむぞ」

「こちらこそよろしく」

秀吉と話していると島田さんと康太が近寄ってくるのが見えた。

「はろはろ～今年もよろしくね、氷花」

「・・・・・・・・・・よろしく」

「こちらこそよろしく。島田さん。康太」

因みに僕は康太と呼ぶ。みんなはムッツリーニって呼んでるけどね。

「すいません、ちょっとおくれちゃいましたっ♪」

「早く座れこのウジ虫野郎。聞こえないのか？あぁ？」

あれからかるく教室内を把握した後で明久が来たみたいだ。雄二も相変わらず明久を罵倒している。

「・・・・・雄二、何やってんの？」

二人が話していると福原先生が来た。

「えー、おはようございます。二年Ｆ組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

二人が席に着いた後、先生が言った。名前を書かないことから、チョークすらないことが解る。どんだけ設備が悪いんだこの教室。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください」

不備だらけだよ！　そう叫びたいのをなんとか抑える。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

「あー、はい。我慢してください」

「先生俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

本当に設備が酷いな。廃屋という表現が似合うだろうな。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。窓側の人からお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておるーーーーーというわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

秀吉が終わり、次は康太の番だ。

「・・・・・・・・・・・・土屋康太」

少ない、少ないよ康太！　色々考えているといつの間にか島田さんが自己紹介を始めていた。

「ーーーです。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きは苦手です。あ、でも英語は苦手です。趣味はーーー吉井明久を殴ることです☆」

今笑顔でかるく恐ろしい事（面白いこと）を言い放ったな。

そんなこんなでついに僕の番がやって来た。自己紹介って苦手なんだけどな。

「氷花紫苑です。得意なことは「ああー！！」と、ん？」

あれは須川くん。たしかＦＦＦ団の会長の。しかし僕に何のようだろうか？

「おまえは今朝木下優子と公然の前でキスしていただろ！？」

「「「「「何だって！！！」」」」」

みんなの声がハモる。

何！？　見られていたのか！しかしあのときはキスなどしていないし、

ちゃんと説明すれば問題ないはず。

「いや、あの時僕と優子はキスなんかしてな「「「「「「殺せぇぇぇぇぇ！！」」」」」」いって、ば！」

ダメだ、聞く耳持たないらしい。

「紫苑、残念だよ。大切な友達を今日失う事になるなんて。死ねやぁぁぁ！」

「・・・・・・・・・・・・裏切り者には、死を」

くそっ！　明久と康太も加わってきたか。とりあえず僕は飛んできたカッターを避けたり掴み、他のカッターをはじく。

「えー、続けます。得意なのは「キン！」料理と運動です。「キン！」今年一年「キン！」よろしく」

まだ飛んでくるよ。もういいかげんにして欲しい。

「はいはい、次の人は自己紹介してください。あとカッターを投げるのは止めてください」

「ちっ、！　しかたないな。ーーコホン。えーっと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでくださいね！」

仕方ない！？

『ダァァーーリィーーン！！』

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

「あの、遅れて、すいま、せん」

ん？　あれは姫路さん。何故彼女がここに？

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！　あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・・・」

彼女はいつも順位が一桁の才女だったはずだが・・・

「はいっ！　質問です！」

「あ、は、はいっ。何ですか？」

「何でここにいるんですか？」

聞きようによっては失礼な質問だが、僕も知りたい。

「そ、その・・・・・・振り分け試験の最中、熱を出してしまいまして・・・・・・」

なるほど。試験中の途中退席は無得点扱いになるからな。

『そう言えば、俺も熱の問題が出たせいでＦクラスに』

『ああ。科学だろ？　アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

だめだ。僕はこのクラスが心配になってきた。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そう言って姫路さんは明久の席の近くに着く。僕は秀吉とさっきのことについて話し合う。

「ねえ秀吉。僕はこの先どうすれば良いんだろう？　というかどうして止めてくれなかったの！？」

「止めても聞く奴らでは無かろう？」

「そうだけどさ」

「はいはい。そこの人達静かにしてくださいね。」

福原先生が明久達にそう言いつつ教卓を叩くと教卓がばらばらになった。

「え～替えを用意してきます。少し待っていてください」

「そのうち床が無くなったりしないよね？」

「だといいのじゃが」

確信を持ってそれは無いと言えないこの教室の設備。何とかしたい物だな。

すると明久が雄二を連れて廊下に行った。何を話し合うんだろう？

「あの二人はどうしたんじゃ？」

「何か重要な内容なんじゃない？きっと演説で教えてくれるさ」

少し待っていると先生が戻って来たようで二人が戻ってきた。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

淡々とした自己紹介が終わり、雄二の番になった。さて、何をやってくれるのか。

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて雄二が席を立つ。

「坂本君はFクラス代表でしたよね？」

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。さて、皆に一つ聞きたい」

かび臭い教室。
古く汚れた座布団。
薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがーーーーーーーー不満はないか？」

『大ありじゃあっ！！』

おっと、まさかこの流れは！

「だろう？　俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！』

『そもそもＡクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！』

「みんなの意見はもっともだ。そこで」

「これは代表としての提案なのだがーーー「代表！」ん？　何だ須川？」

「その提案に紫苑を血祭りにあげる作戦を追加して欲しいであります！」

『そうだそうだ』

あれ？　何だか矛先がいきなり僕ののど元に突きつけられたよ？

「ちょっと待って！？　そんなことが許可されると思ってるの！？　そうだよね雄二！？」

姫路さんはなんのことか解らないといった顔をしていると秀吉が姫路さんに事情を話している。

「そうだぞ須川」

「さすが雄二。この誤解から生まれた馬鹿げた騒動を鎮めてくれるんだね！？」

やっぱり持つべきは良き友ーーー

「どうやって殺るかを考えるんだ」

前言撤回。持つべきは僕を癒してくれる優しい人だ。

「雄二貴様！」

「安心しろ紫苑」

「この状況下で何を安心しろと言うんだ！」

「骨は拾ってやる」

「くっそー！　上等だこの野郎！　やってやるよ！」

「じゃあ放課後に『第一回あなたを楽園（天国）へ連れて行ってあ・げ・る♪』鬼ごっこを開催するということでいいか？」

『おっしゃぁぁぁー！！』

「制限時間は一時間。逃げていいのはグラウンドも含むこの学園すべてだ、紫苑もそれでいいか？」

「ああ、やってやるよ」

「紫苑。本当に大丈夫かの？」

秀吉が話しかけてきた。心配するんだったら止めて欲しかった。

「これも告白するための試練の一つだと考えれば問題ないよ」

「さて、話を戻すぞ！」

雄二、覚えてろよ？

「俺の提案はＩＩＦクラスはＡクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

雄二が戦争と地獄の鬼ごっこの引き金を引いた。

第一問　バカとFクラスと試験召喚戦争（後書き）

次回　Fクラスと宣戦布告とミーティング

第二問　Fクラスと宣戦布告とミーティング

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。
『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希と氷花紫苑の答え
『（1）弘法も筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント
正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、
（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え
『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

雄二が言ったAクラスへの宣戦布告。Fクラスの生徒から言葉が飛び交う。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

みんなの言う通り。戦力差が半端無いことはFクラスだからこそ理解できる。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

言ってくれるな、雄二。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

否定的な意見が飛び交う。だがこれはあんなことを言い放った雄二のことだ、予想通りの反応のはず、さて、ここからどうやってこのクラスをその気にさせるのか、代表としての裁量が試される。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

教室がざわめく。

「それを今から説明してやる」

さあ、ここからどうするんだ雄二？

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

そんなことやってるからムッツリーニって呼ばれちゃうんだよ康太・・・・・・

「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙（ムッツリーニ）なる性職者だ」

ムッツリーニ、その名前は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムッツリーニだと・・・・・・？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・・・・・？』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして

いるぞ・・・・・・』

『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ・・・・・・』

もう隠さなくてもいいじゃないか。君がムッツリなのはみんな知ってるんだから。

「???」

どうやら姫路さんはあのあだ名の由来が解っていないらしいな。教えてあげた方が良いか？

「姫路と紫苑のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力は知っているはずだ」

「えっ？　わ、私ですかっ？」

「そこはちゃんとした風に言ってくれるんだな」

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった。紫苑は殺したいけど』

『あの二人ならＡクラスにも引けをとらないな。紫苑は殺したいけど』

『ああ。姫路さんがいれば何もいらないな。紫苑は殺したいけど』

「ねえ！　何で誰も止めてくれないの！？」

「紫苑、五月蠅いぞ。」

くそ！　何で僕はこんな扱いなんだ！？　こういうのは明久の役目だろう！？

「うわーん！　秀吉ぃみんなが僕を虐めるよう」

「おお～よしよし。あ～皆の衆、こう見えて紫苑はメンタル面が弱いからあまり虐めないでやってくれんかのう？」

ぐすん。酷いよみんな。

「そして、紫苑を慰めているこの木下秀吉だっている」

『おお・・・・・・！』

『ああ、アイツ確か、木下優子の・・・・・・』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はＡクラスレベルが三人もいるってことだよな！』

クラスの士気が上がっている。何だかんだ言ってさすがだな雄二。

「それに、吉井明久だっている」

・・・・・・シンーーー

何故この状況で明久の名前を出す必要性があったんだい雄二？　僕には検討もつかないよ。

「ちょっと雄二！　どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！　全くそんな必要ないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！　折角上がりかけていた士気に翳りが見えてるし！　僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いをーーーって、何で僕を睨むの？　士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

ごもっともだ。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

『・・・・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

その通り！

「ちっ違うよっ！　ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「あの、それってどうゆうものなんですか？」

まあ姫路さんは知らなくても仕方ないのかも。

その後、雄二が観察処分者について説明したり、出陣の準備ということで叫んだり、

そしてDクラスへの使者へ明久を逝かせたりした。

「騙されたぁっ！」

わからなかったんだね明久。だから君は観察処分者なのではないだろうか？

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ！　やっぱり使者へ暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「そりゃそうでしょ？」

「少しは悪びれろよ！」

「吉井君、大丈夫ですか？」

さすが姫路さん。優しい。ああ、優子にもされたいよ・・・・・・って何考えてんだよ僕！
長い付き合いのせいか、秀吉が僕の頬が赤くなってるのに気づいたらしい。まずい、弄られる。

「顔を赤くしてどうしたんじゃ？」

秀吉が楽しそうに聞いてくる。分かってるくせに。

「な、何でもないよ。」

「姉上にも優しくしてもらえればいいのう♪」

くっ！　やっぱり見透かされている！　僕は秀吉と優子に勝てる日が来るのかと心配になってきた。

「うっ！「ねえ、紫苑。Ｚｕｃｈｔｉｇｕｎｇって日本語で何だっけ？」」

た、助かった！　ナイスだよ島田さん！

「えっと、それは確か折檻、だったかな？」

「それ悪化してない？」

「そう？」

島田さんのおかげで助かった。もうすぐ屋上なので僕は秀吉に

「あっもうすぐ屋上だよ！　ということでその話はまた今度で」

「しかたないのう」

危ない危ない。優子のこと考えてるときはすぐにばれるから今度から気を付けないと。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

屋上に着き、みんなが座ったのを見計らって雄二が言った。

「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べろよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれると嬉しいんだけど」

「少しならおごろっか？」

「本当！　やっぱり紫苑は良き友達だよ」

だったら何故さっき殺そうとしたのかな？

「じゃあそゆことで」

「えっ？　吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

そりゃあ知らない人はまず疑問に思うだろう。

「いや。一応食べてるよ」

「・・・・・あれは食べてると言えるのか？

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食ってーーー水と塩だろう？」

確かに、果たしてあれは食べてるの内に入るのかはなはだ疑問である。

「きちんと砂糖だって食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ・・・・・」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

みんなが妙に優しく明久を見つめる。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

同じ一人暮らしなのにここまで差があるとは改めて驚嘆せざるをえない。

「・・・・・あの、良かったら私がお弁当作って来ましょうか？」

「ゑ？」

これはフラグがたったのでは！？

「本当にいいの？　僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼で避ければ」

「良かったね明久。夢にまでみた手作り弁当だよ？」

「うん！」

まるで子供みたいに喜ぶ明久。相当嬉しいんだな。

「・・・・・ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井にだけ作ってくるなんて」

あ～、明久が好きな島田さんとしてはこの状況が気に入らないんだね。

「あ、いえ！　その、皆さんにも・・・・・・」

「俺たちにも？　いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

おお！　なんて優しいんだ！

「それは楽しみじゃのう」

「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「・・・・・・お手並み拝見ね」

「ありがたいけど大丈夫？」

「はい。問題ないですよ」

「そっか。じゃあお言葉に甘えさせてもらうね」

「わかりました。それじゃ、皆に作って来ますね」

ということは明日の朝少し時間が空くな。溜まっていたＤＶＤでも見るかな。

「姫路さんって優しいんだね」

「そ、そんな・・・・・・」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き――」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「――にしたいと思ってました」

僕はここまでオープンな変態は見たことがない。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「だって・・・・・お弁当が・・・・・」

君は変態というレッテルを貼られてまで弁当を取るのか。明久におごるパンを増やしてあげようかな。

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻そう」

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？　段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「いきなりAとやってもまず勝ち目が無いからだよ。ロールプレイングゲームと同じだよ。何の経験値も積んでないうちにラスボスと戦っても即、敗北しちゃうでしょ？　細かい作戦は分からないけどまず僕たちFクラスから見てあえて強敵と戦って経験値を貯めたり、自分より強い相手と戦う際の対処方法を身につけさせたり、更に勝つことができれば皆のモチベーションを上げることだってできるから。今の説明で合ってるかい、雄二？」

「俺の言いたいことを殆ど言ってくれたな。」

「だったら、わざわざDクラスじゃなくても勝ちやすいEクラスで良いんじゃない？」

「確かに俺たちよりはクラスが上かもしれないが、姫路と紫苑が問題ない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる」

「？　それならＤクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「ふむ、なんだか難しいのう」

「あ、あの！」

「ん？　どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけた、って・・・・・・吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されてーーー」

「それはそうと！」

それをさっき廊下で話してたんだな。

「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

明久の心配を笑い飛ばす雄二。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

答えはもう僕の中ではとっくに決まってる。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは――――最強だ」

やっぱり君は、僕の中では最高の策士だ！

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Ａクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「・・・・・・・・・・（グッ）」

「が、頑張りますっ」

「任務了解。必ず勝とう！」

「ああ！　それじゃ、作戦を説明するぞ」

僕らＦクラスの無謀としか言いようのない試召戦争が始まる。

第二問　Fクラスと宣戦布告とミーティング（後書き）

次回　僕とDクラス戦と地獄の鬼ごっこ開幕

第三問　僕とDクラスと地獄の鬼ごっこ開幕

問　以下の英文を答えなさい。

「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｌｙ」

姫路瑞希・氷花紫苑の答え
「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント
正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え
「これは　　」

教師のコメント
訳せたのはＴｈｉｓだけですか。

吉井明久の答え
「☆●◆▽「♪＊×　　」

教師のコメント
できれば地球上の言語で。

現在僕はFクラスで姫路さんと共にテストを受けている。
テストを受けていない僕と体調不良だった姫路さんは0点扱いだからだ。

カリカリ・・・
カリカリ・・・
カリカリ・・・
カリカリ・・・
カリカリ・・・

すると秀吉とその部隊が戻って来た。

「あっ！　お帰り秀吉状況はどう？」

「こら！　氷花くん、テスト中ですよ？」

「すっすみません！」

つい気になったから聞いてしまった。

「ワシらの部隊はこの通りじゃ。今明久と島田が率いている部隊が交戦しているところじゃ」

つまり第一陣は撤退したということか。

「成る程。もう少しで終わるからちょっと待ってて」

僕と姫路さん、そして秀吉達の部隊が補給テストを終えた。

「ところで秀吉、作戦通りにやって来たか？」

「うむ、それについては問題ないのじゃ」

「そうか、ならいい。念のため明久と島田の部隊にもそのことを伝えておくか。伝言も兼ねてな。横田、これを明久と島田に伝えてくれ」

『分かった！』

そう言って横田君は二人の元へ走って行った。

「雄二。僕もそろそろ準備した方が良いよね？」

「ああ、頼む。姫路も準備は良いか？」

「はい、分かりました」

その後、僕は作戦のために一時的にグラウンドへ出た。とりあえずは合図が来るまでここで待機だ。すると放送が聞こえてきた。

『ピンポンパンポーン』

『ご連絡いたします』

『船越先生、船越先生――』

ん？　何だ何だ？

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

『生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうですーー』

・・・・・明久、君にそんな趣味は無いよね!?　万が一そんな趣味があったとしたら姫路さんと島田さんが可哀想だよ。

そのまましばらく待機しているとAクラスの三人が校舎を見上げて何かを待っている僕が気になったのか、こちらに向かって来た。

「紫苑、こんなところで何してるの?」

「何かを待っているとか?」

「まあそんな感じだよ。今FクラスとDクラスで戦争してるのは知ってるよね?それで今雄二の合図を待ってるんだ」

「・・・・・・合図?」

「そっ、合図」

明久ｓｉｄｅ

くそっ！　雄二の野郎どこいる！
ああ、早く合いたいなぁ。雄二、君はどこにいるの？　早く、早く会って――――殺さなくては！！

「イタァァ！」

でも駄目だ。雄二を守るために近衛兵が雄二を囲んでいて全然近づけやしない。

「援護に来たぞ！！　もう大丈夫だ！　取り囲まれないように周囲を見て動け！」

あれはDクラス代表の平賀君！
平賀君の指示でDクラスの人々が雄二を倒すために散り散りに動き出した。
だがそのせいで平賀君の周りに近衛兵がいなくなる。
チャンスだ！　ってことは雄二からそろそろ紫苑に合図が出るはず。

「Fクラスは一度撤退する。人混みに紛れてかく乱するんだ！」

合図だ、僕も合図に合わせて平賀君に攻撃を仕掛ける。

「向井先生！　Fクラス吉井がーー」

「Dクラス玉野実紀、試獣召喚（サモン）」

「なっ、近衛部隊！？」

僕の周りに他の近衛部隊が集まってくる。

「さっこれで終わりだ船越先生の彼氏くん？」

「だから違うって！！」

「くっここまでかーーー」

「そういうことだ諦めろ」

「――――僕の役目はね」

「何だと？」

「じゃ、後は任せるよ。紫苑！」

紫苑ｓｉｄｅ

「Ｆクラスは一度撤退する。人混みに紛れてかく乱するんだ！」

合図だ。

「合図があったから僕行くね！」

「あっ紫苑、私購買部の辺りで待ってるから」

「分かった。できるだけ早く行くね！」

「・・・・・合図があったのはいいけどここからどうやって３階に？」

「走って戻る訳じゃあ無いよね？」

二人が不思議そうに聞いてくる。

「ああ。こうやってだよ」

そして僕は校舎の外壁や階段の壁を蹴ったりして登り始める。

「すごーい！　紫苑君ってあんな事もできるんだ！」

「・・・・・・まるでＣＧ」

「・・・・・・格好いい」

「あれれー？　優子、今紫苑君に見とれたよね～？」

「・・・・・・うん。見とれてた」

「あ、やっその、これは／／／」

「まあまあ話をじっくり聞かせてくれればそれで良いから、ね？」

「いやぁぁぁ！」

「じゃ、後は任せるよ。紫苑！」

「ああ、後は任せて」

そう言って僕は秀吉の部隊が交戦しているすきに開けてくれた窓から校舎の中に入る。

「は？」

そりゃ驚くよな。だっていきなり3階の廊下の窓から人が入って来たのだから。

しかも来たのはAクラスだと思われている僕だし。それにより近衛部隊と平賀君の動きが止まる。

「竹中先生！　Fクラス氷花紫苑が近衛部隊五人に古典勝負を申し込みます」

召喚が了承され、僕が叫ぶ。

「試獣召喚（サモン）」

僕の足下に魔法陣が現れ、僕の召喚獣が姿を現す。

古典は得意じゃ無いけど大丈夫かな？　少し心配だよ。

『Fクラス　氷花紫苑　古典　３０２点』

ＶＳ

『Dクラス　近衛部隊五人　古典　合計５３２点』

よし、彼らを足止めするには十分な点数だな。

『な、何！？』

『氷花って言えばAクラスの上位メンバーのはずだろ!?』

『何でFクラスなんかに!?』

「ちょっと体調不良だったものでして。さて、君らは僕と一緒に雄二の手の上で踊って貰おうか!」

そう言って僕の召喚獣が呪文を唱えて武器を異次元から取り出し近衛兵の召喚獣に斬りかかる。

『平賀! お前だけでも撤退して補給しているメンバーを連れてくるんだ。お前が生きていればまだ勝機はある!』

「すまない!」

平賀君が自分の教室に戻っていく。

チェックメイトだ。

何故ならここからDクラス向かうルートには姫路さんが待ちかまえているからだ。

「ご、ごめんなさい!」

ちょうど近衛兵達を全滅させたところで向こうからそんな声が聞こえる。

『勝者、Fクラス!』

先生による勝利宣言とFクラスの歓喜の声が響き渡る。

みんなが雄二を讃える中、秀吉がこちらに向かって来た。

「秀吉、お疲れ様」

「うむ、紫苑もな」

「まずは一勝、だね？」

「このまま行けば、打倒Ａクラスも夢ではないかもしれんのう。ところで紫苑、良いのか？」

「えっ？何が？」

「この後地獄の鬼ごっこがあるというのにこんな所で油を売っておって良いのかということじゃ」

「あっ！」

しまった、完璧に忘れていた。

するとＤクラスとの交渉を終えた皆さんがこちらを向いた。

「ありがと秀吉！」

僕は全力で走り出す。

『逃がすな！　見つけ出して八つ裂きにしろ！』

『サーチ＆デス！』

「捕まってたまるかぁぁぁ！」

僕とＦクラス四十六人との鬼ごっこが幕を上げた。

第三問　僕とDクラスと地獄の鬼ごっこ開幕（後書き）

次回、同棲と柚葉さんと追跡者

木下姉弟と主人公が同棲します。

第四問　同棲と柚葉さんと追跡者（前書き）

テスト期間なので更新遅れるかもです。

題名変更しました。

題名と本文がまったくかみ合っていないので。

第四問　同棲と柚葉さんと追跡者

問　以下の問いに答えなさい。
『（１）４ｓｉｎＸ＋３ｃｏｓ３Ｘ＝２の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するＸの値を一つ答えなさい。
（２）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を示すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい。
？ｓｉｎＡ＋ｃｏｓＢ　　？ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ　　？ｓｉｎＡｃｏｓＢ　　？ｓｉｎｎＡｃｏｓＢ＋ｃｏｓＡｓｉｎＢ』

姫路瑞希と氷花紫苑の答え
『（１）Ｘ＝６／π
（２）？　』

教師のコメント
そうですね。角度を『。』ではなく『π』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え
『（１）Ｘ＝およそ３』

教師のコメント
およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え
『（２）およそ？』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

現在僕はＦクラス四十六人に勘違いで追われている。
勘違いの内容が僕と優子が公然の前でキスをした、というもので実際にやっていたならまだ良いんだが、それが勘違いだということで解せない。
優子と帰る約束をしているのでさっさと終わらせたいのだがどうすれば良いのやら。
体力に問題は無いとはいえしつこいな。

『くそっなんて早いんだ！』

『あいつ鉄人並みの体力を持ってるんじゃないか？』

『とにかく捕まえて火あぶりもしくはヒモなしバンジーをやらせなくては気が済まん！』

ダメだ。彼ら僕を殺す気だ。そう来るなら僕にも考えがあるぞ。
初めから考えていたが追っ手を全滅させれば強制的にこの鬼ごっこは終了になるはずだと！

「じゃあ、攻めますか」

国家機密情報局仕込みの戦闘術を見せてやる！

まずはあえて行き止まりの教室の中へ入り敵をおびき寄せる。

『行き止まりの方の教室へ入ったぞ！』

『遂に観念したか？』

そんな分けないでしょ？　僕を誰だと思ってるんですか？
これでも国家機密情報局の中では九番目に戦闘能力が高いんですからね？
僕は空き教室の扉が開く側へ身を潜める。敵が入ってきたら奇襲をかけるためだ。

『氷花覚悟！　って、あれ？』

『いないぞ？　どこに隠れた？』

入ってきたのは八人、二部隊ほどだろうか？
すぐに終わらせる。
扉の陰から姿を出しまず二人を絞め落とす。

『な、何！？』

『一瞬で二人が！』

『扉の陰に隠れていたのか！』

「悪いけど、こっちは人を待たせてるんだ。この鬼ごっこは追っ手が全滅という形で幕を下ろさせて貰うよ！」

残った六人に突っ込む。腹を殴ったり頸動脈を絞めたりしてあっと言う間に八人気絶。

「さて、次はどこを叩くか」

すると突如電話がかかってきた。柚葉さんからだ。
僕は電話に出る。

「はい、紫苑です」

『あっ、紫苑君？　良かったわぁ繋がって』

「何かあったんですか？」

何やら柚葉さんは慌てていたようすだったので聞いてみた。

『それがね、仕事の都合でしばらく出張しなくちゃいけなくなっちゃってね、でも行こうにもあの子達がいるからどうしたもんかと主人と相談していたら良い案が浮かんだのよ』

「おお！　してその案とは？」

『悪いんだけど紫苑君、しばらくあの二人を泊めてもらえないかしら？』

「えっ・・・・・・」

なっなんだと。あの二人、つまり秀吉と優子のことだが二人を泊めることに関しては問題ない。何が問題なのかというと・・・・・・

「あの、柚葉さん・・・・・・・」

『何かしら紫苑君？』

「二人を泊めることに関しては問題ないんですが・・・・・・・」

『あら！　それは良かったわ！』

心底嬉しそうだな柚葉さん・・・・・・・

まあ好きな相手と同棲できるというのは男としてこの上ない幸せだが・・・・・・・

「あの、優子は年頃な女の子な訳ですし、その・・・・・・同じ年頃な男の子と一つ屋根の下というのは何かまずい気が・・・・・・・」

『フフ、そこら辺はきちんと考えてあるから安心して』

「そうでしたか！　それは良かった」

さすが柚葉さん、何だかんだ言って昔からそう言うことには気が回ってたっけな。

そうだ、心配することなんて無いじゃないか！　一瞬でも柚葉さんに対してあんな事を言ってしまった

自分を反省せねば！

『紫苑君だったら襲われても優子も満更じゃないからＯＫよ！』

前言撤回、ダメだ、不安でいっぱいです。

「ちょっ、ちょっと待ってください柚葉さん！　例えそうだとして

も秀俊さんは許さないでしょう！？」

小さい頃はお義父さんと呼んでいたが、今は秀俊さんと呼んでいる。何より今お義父さんと呼んだら大変な目に遭う気がする。

『大丈夫よ紫苑君。主人も『紫苑君なら任せられるな』って言ってたもの』

秀俊さあぁぁぁん！

『じゃあそういうことでよろしくね紫苑君。家の冷蔵庫の中身使っちゃっていいから』

「りょ、了解です。秀吉と優子は知ってるんですよね？」

『ええ、紫苑君に電話する前に連絡しておいたわ』

「わかりました。それではしばらく娘さんと息子さんをお預かりします」

『一人増やしてくれてもいいからね』

「っ！！　き、切りますよ！」

そう言って僕は電話を切る。こんなに疲れた電話は初めてだ。

「さて、夕飯の準備をしなくてはいけなくなったから、さっさと終わらせよう」

そう言って教室を後にする。

「はあ！」

『ぐっ！』

「ふう、これで片づいたかな」

現在四人一組の部隊を十、三人一組の部隊を一つ潰したところである。

まだ遭遇してないのは、明久、雄二、康太の三人。そして生き残ってるのもその三人だけ。

すると再び携帯が鳴る。今度は秀吉だ。

「はい、もしもし？」

『紫苑、やはり無事じゃったか』

「一応ね」

『ところでお主、母上から連絡はあったか？』

「ああ、二人が家にしばらく泊まることでしょ？」

『うむ、連絡があったなら良いのじゃ。今どんな感じじゃ？』

「明久、雄二、康太以外は全滅させたとこだよ？」

『やはりお主は強いのう。ワシと姉上は校門の前で待っておるからの』

「分かった。ごめんね、待たせて。代わりに今晩は二人が食べたいのを作ってあげるから、僕がそっちに着くまでに優子と決めといて」

『おお！　それは誠か!?　わかった、決めておくのじゃ』

「じゃ、もう少し待っててね」

『了解じゃ』

通話ボタンをオフにする。

!!!　殺気!!!

殺気のした壁の陰にパクって来たチョークを投げつける。

「・・・・・・・・・・・・何故分かった?」

そう言って姿を現したのは康太だ。

「たしかに気配は感じなかったけど殺気が僅かに感じられたから」

「・・・・・・・・・・・・不覚」

だがさらに二人が三方向の通路に立ちはだかるようにして現れた。

「悪いな、紫苑ここで終わりにさせてもらうぜ?」

「紫苑、公然の前でキスだなんて、羨ましすぎるよ!」

「君たちは羨ましいだけで友人の命を狙うのか！？」

もしそうならＦクラスって一体・・・

「「当たり前だ！！！」」

「・・・・・仕方ない、強行突破する！」

「こい！」

僕は雄二がいる方向に駆け出す。

雄二がパンチを繰り出す。だが僕はそれを・・・・・・。

「君たちのことは殴らないよ！」

雄二の肩を踏み台にして飛び越える。

「何ぃ！？」

「じゃあね～」

「くっ、追うぞ明久、ムッツリーニ！」

だが僕の全力疾走についてこれずどんどん差が開く。

そして僕は屋上に逃げ込む。

「待ってたぞ、紫苑」

そこには予想外の人間が。

「何で西村先生がここに？」

「吉井達から聞いたぞ紫苑、公然の目の前でキスをして、それだけじゃ飽きたらず、あんな事やこんな事もしたそうじゃないか」

ちぃ！　またそれか。

「どうせ口で言っても聞かないんでしょう？だったらあなたを倒すまでです」

「ほう！　俺に勝つつもりか？」

「ええ、教官だった・・・・・・あなたに！」

教官というのは僕が国家機密情報局に入隊した当初、僕に戦闘術を教えてくれたのが
西村先生だったりする。
因みに西村先生は国家機密情報局で現在一番戦闘能力が高い。
僕より八つ上だ。

「行きます！」

覚悟を決め、踏み込む。だが余裕なのか先生は動こうとはしない。
だが僕は先生の懐に入り込み、顔面と腹に同時に突きを繰り出す。

「昔に比べたら早さも威力も上がってるな。だが・・・・・・！」

突きは受け止められて動けない僕に蹴りが繰り出される。
だが僕はその脚の上に立ち後ろに飛ぶ。

「それは俺が教えた技だ。俺が喰らうわけないだろ」

「くっ！　流石ですね」

その時屋上の扉が開く。

「はあ、はあ、やっと追いついたぞ！」

どうやら追いつかれた挙げ句人数差と場所で、追いつめられたようだ。

「さあ、追いつめたよ、紫苑」

「・・・・・・・・・・・・裁きを」

「くっ、追いつめられたか！」

だんだん角に追い込まれる。

「さあ紫苑おとなしく捕まれ！」

「なんてね！」

飛びかかってきた先生をかわし、
鉄格子をを飛び越える。

「ばっ、紫苑お前どうするつもりだ！？」

僕はみんなに背を向ける。

「それでは皆さん、ご機嫌よう」

僕は校舎を飛び降りる。

「うわあぁぁぁ大変だ！　紫苑が飛び降りちゃった！」

「いや、あいつは無事みたいだな」

「どうゆうことだ鉄人？」

「鉄人言うな。あれ見てみろ」

「あれ？・・・・・・！！」

そこには校舎を垂直に走り降りている紫苑の姿が。

「あいつあんなこともできたんだな」

「人間って思ってる以上にハイスペックなんだね」

「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「仕方ない、諦めてやるか」

「だね」

「お前達、帰るなら寄り道せずに帰れよ」

「「「はーい」」」

「お待たせ！　二人とも」

「まさか校舎を走って降りてくるとはのう」

「さすがに予想外だったわ」

「まあそれはさておき、夕飯の材料を買いに行くよ？」

「「はーい」」

こうして、僕と木下姉弟との同棲生活が幕を上げた。

第四問　同棲と柚葉さんと追跡者（後書き）

次回　キスと初夜と惨劇の前ぶれ

次回のも変更です。　すみません。

第五問　キスと初夜と惨劇の前ぶれ

問　以下の文章の（）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（　）である』

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

氷花紫苑の答え
『人々の心を照らす物』

教師のコメント
先生この解答嫌いじゃありません。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。

二人の要望にお応えして、今夜は中華とうどんということになった。
何故こうも違う物を選ぶのだろうか。
こんな事を考えつつ買い物を済ませ、三人で一度木下家による。
因みに僕の家とは一分と足らずで行き来できる。
二人の荷物をまとめ、三人で僕の家へ。

「えっと、まあ部屋は空いてるからそこに荷物とかは置いて来ちゃって」

「紫苑の家ってそんなに空き部屋あったっけ？」

「二つだけあるからそこを使ってくれるとありがたい。ベットは一つだから片方は毛布になるけど我慢してね」

「ではお主は何処で寝るのじゃ？」

「適当にリビングのソファーで寝るけど？」

「駄目よそれじゃあ！　体に悪いわよ？」

優子が強く言ってきた。

「でもそうなると片方と同じ部屋になるんだけどいいの？」

「幼なじみではないか、気にするでない」

優子もうなずく。

「で、お主はどっちと同じ部屋が良いんじゃ？」

うわっ、何か今の選択肢次第では何やらイベントが起こる気がする。
というかこの選択肢では答えは一つしかない気がする。

「そりゃ、僕は「優子と同じ部屋が良いな」って、秀吉君！？」

「え・・・・・えぇぇ！！／／／」

「ん？　何じゃ紫苑？」

優子は顔を真っ赤にして何やらぶつぶつ言い始めた。
秀吉はうって変わって何事も無かったかの様に振る舞っている。

「今明らかに僕の言葉に重ねて声真似したよね！？」

「ん？　何のことじゃ紫苑？」

「だって優子は女の子だよ！？　付き合ってる訳では無い女の子と同じ部屋で寝たいなんて言わないし、怖くて言い出せないよ！」

「ふむ、それはきっと紫苑の欲望がつい口に出てしまったんではないかの？」

「えっ！？　そうなの紫苑？」

何かを期待した目でこちらを見つめる優子。

何を期待してるのこの子は!?

「違うよ優子!?　確かに心の何処かではそんなこと思ったりしてるのかもしれないけど、同じ部屋で寝るのはまずいでしょ?　だから僕は「それでも優子と寝たいな」って、違う!僕はそんなこと言ってないよ!」

「はっはっは。紫苑も随分大胆じゃのう。で、姉上はどうなんじゃ?」

「良いわけ無いよね「別に・・・・・・良い・・・・・・よ」そうそう、別に良い・・・・・・って優子さん!?」

何で!?　何でOKなの優子さん!?

「別に一緒の部屋でも、良いよ」

優子が今にも消えてしまいそうな声で言った。顔も真っ赤だ。抱きしめてしまいたい衝動を何とか抑える。

「そ、そうか。良かったのう紫苑」

秀吉も驚いているようだ。さてはただからかうだけのつもりだったな。

「じゃ、じゃあ夕食できたら呼んで!」

優子は二階に大急ぎで駆け上がっていった。

「秀吉」

「いや～まさか姉上が承諾するとは思わなかったわい。でも良かったの紫苑、姉上と同じ部屋で寝れて」

「このことが柚葉さんにばれたらどうしよう・・・・・」

きっと手を出したかどうかなどを聞かれるだろうな。

「紫苑、そろそろ夕食にせんか？　ワシはもうお腹ぺこぺこじゃ」

「それもそうだね、もうこんな時間だし」

「ワシも手伝うぞい」

「優子に誤解を説明するのを手伝って欲しいよ」

僕と秀吉は共に台所へ向かっていった。

優子ｓｉｄｅ

さっきの同じ部屋で寝たいって紫苑の言葉、あれを聞いてからどきどきが止まらない。

でも、もう一つそれと同じくらい私の中で大きくなってる物がある。

それは秀吉から聞いた『紫苑がキスをしたからクラスのみんなに追いかけられてる』というもの。

追いかけられてるというのは問題じゃない。紫苑なら逃げ切れると

思ってるからだ。
問題は紫苑が『キスをした』ということだ・・

「紫苑のファーストキス、欲しかったな・・・・・・」

なんて事をつい声に出してしまう私、改めて自分が紫苑のことが好きなんだなと実感する。
私が紫苑を好きになったのは三年前のあの事件があったから。
当時はあの事件を憎んだ。あれが無ければ紫苑は苦しまずに済んだから。
でも、今じゃあの事件に感謝してるくらいだ。
紫苑、私はあなたの事が好きよ。あなたは、私の事、どう思ってるの？

それからしばらく思考の海に沈んでいると下から声が聞こえた。

「優子～、夕食できたよ～」

紫苑の声だ

「わかったわ、今行く」

私もリビングに向かう。

「ごめんね。待たせちゃったかな？」

そこにはどっかの高級レストランに出てきそうな豪華な料理が並んでいた。

「相変わらず凄いわね」

紫苑は何でもできる。
勉強、運動、家事、炊事、武術。
女の子からすればまさに理想の王子様、十中八九、紫苑はよくモテた。
その度に私は焼きもちを焼いて関節を外していた。そんな私に紫苑は振り向いてくれるのかな？
そもそも紫苑に私は釣り合うのかな？
暗い顔をしている私が心配になったのか紫苑が心配そうに私の顔をのぞき込んでいた。

「優子、何かあった？悩み事でもあるのなら僕で良ければ相談にのるよ？」

紫苑はいつも優しい。いつも自分の事は後回しにして周りの人のことを常に考えて行動している。
現に今だって私の事を心配してくれる。悩みの原因はあなたなのに。
でも、そんな優しさが私の不安や悩みを吹き飛ばしてくれる。また、笑顔になれる。

「心配してくれてありがとう。あなたはいつもそうやって気にかけてくれたわよね」

「当たり前だよ。だって二人は僕の大切な人なんだから」

こういう恥ずかしい台詞も平気で言ってのける。人前で言われるのは恥ずかしいけど今はとても嬉しい。私たちの事を大切にしてくれるって思えるから。

「そう、じゃあそんな嬉しい事を言ってくれる君にご褒美をあげます」

「はは、いったい何をくれるんだい？」

私は笑ってる紫苑に近づいて・・・・・・

その頬にキスをした。

「えっ・・・・・・えぇ！！／／／」

紫苑の顔が真っ赤に染まった。

「あ、あ、あ、姉上！？」

秀吉も驚きを隠せていない。

「さっ、夕食が冷めちゃうわよ？早く食べましょ？」

「え、や、あの、優子、さっきのって」

「あら？　頬じゃ嫌だった？」

「い、いえ、全然そんなことないであります！」

紫苑が顔を真っ赤にしてテンパってる。珍しいものを見たわね。
すると秀吉がこっちに来て何やら耳打ちをしてきた。

「あ、姉上、どういうつもり何じゃ？　いきなりキスなんかして」

「したかったからしただけよ。それにどうせ紫苑はキスをして彼女さんもいるんだからいいでしょ？
これはあんたが言ったのよ？」

「紫苑が追い掛けられてる理由を説明した時のやつかの？」

「そうよ。それ以外何があるのよ？」

すると秀吉が気まずそうにこう言ってきた。

「あ～姉上、実はあれは嘘なんじゃ」

「へっ？　嘘？」

何とも間抜けな声を出してしまったが問題なのはそこじゃない。

「正確には、今朝紫苑が公然の目の前でキスをしたって誤解をかけられたんじゃ。今朝姉上が紫苑の顔を押さえていたときがあったじゃろ？　その時のことじゃ。あの時二人の顔はかなり近かったからの、
遠くから見たらキスをしてる風に見えたんじゃろ」

「えっじゃあ紫苑は誰ともキスなんかしてないの!?」

驚愕の事実。ってことは紫苑はまだ誰にもキスとかされて無くて、私が初めてで・・・・・・

「大丈夫じゃよ姉上、紫苑のファーストキスはまだ健在じゃ」

「そう、良かった・・・・・・じゃないわよ！　何であんたはそんな嘘をついたのよ!?」

「ああでも言わんと、姉上は積極的になれんじゃろ?だからじゃ。でもいきなりキスをしだすとは思わんかったぞい」

秀吉が楽しそうに笑ってる。そう、そういうことだったの。フフ、ならちょっとお痛が過ぎるこの子にはお仕置きしなくちゃいけないわね。

「ん?　姉上、何故ワシの腕を掴んでおるのじゃ?」

「あなた、ちょっとお痛が過ぎたんじゃないかしら?」

「はっはっは、何を言っておるのじゃ?　ワシは姉上と紫苑の関係を発展させようと・・・・・・
あっ姉上ッ違っそこら辺の関節はそんな別々の方向には曲がらなっ・・・・・・!!」

フフ、仕方なかったわよね?

「・・・・・・はッ！　えっと、あれ?　何で秀吉は寝てるの?」

「きっと疲れちゃったんじゃないかしら？」

「仕方ない、とりあえず部屋に運んでくるから先に食べちゃってて」

「わかったわ」

紫苑ｓｉｄｅ

その後は起き（蘇った）てきた秀吉と一緒に夕食を食べ、別々にお風呂に入り、現在トランプをしている。

「はい。これで上がり」

「ワシも上がりじゃ」

「な、何故だ・・・・・・何故勝てない」

現在絶賛８連敗中です。

「まったく、何年付き合ってると思ってるのよ」

「うむ、紫苑の嘘は目を見れば簡単に分かるぞい」

「目！？　目で分かるの！？」

実はこの二人嘘発見器の代わりに成るのでは？（僕専用の）

「そう言えば、Fクラスって今日Dクラスに試召戦争で勝ったんですってね？」

「うむ、紫苑と姫路が大活躍じゃったぞい」

「そんなことないよ。秀吉が作戦通りに仕掛けをしておいてくれたからこそだよ」

「ありがとじゃ」

「でも、勝ったって事はこのままAクラスともいつか戦争をするって事？」

「まあ、ね」

そうである。我らFクラスの真の標的はAクラス。ということはいつか優子とも戦うことになるんだよな。

「それは楽しみね。ねえ、紫苑」

「ん？　何？」

「もしその試召戦争で私と戦うことになったら賭をしない？」

「いいけど、どんな？」

「負けた方が勝った方の言うことを一つ何でも聞く。当然拒否権は無し」

話は変わるが、僕は自分が自分を認められる様になったら優子に告

白しようと決めている。
この戦争でもし、Aクラスに勝つことができたなら、多分その時僕は僕を認めることができると思う。
なら、その賭とやらを利用させて貰おうかな。

「良いよ。その賭のった」

「じゃあ決まりね。そのためにも頑張らなくちゃね」

「ああ！」

その時秀吉はこう思っていた。「勝っても負けても同じ結果になるんじゃなかろうか？」

翌日
Fクラスの皆はテストを受けていた。
キーンコーン
カーンコーン

「うあーづがれたー」

「うむ、疲れたのぅ」

「こう頻繁にテストがあるのはちょっとね」

くたばってる明久に駆け寄る僕たち。

「よしッ昼飯食いに行くか！」

雄二の言葉で康太と島田さんが駆け寄って来る。

「あっ、ウチも一緒していい？」

「じゃ僕は贅沢にソルトウォーターでも・・・」

「あ、あの皆さん！」

姫路さんが声をかけてきた。あっそういえば弁当の約束をしてたよね。

「おお、もしや弁当かの？」

「は、はい。迷惑じゃなかったらどうぞ！」

それから僕たち、明久、秀吉、康太、姫路さんは屋上へ
雄二と島田さんは飲み物を買いに行った。

これから始まる惨劇のことなどつゆ知らず。

第五問　キスと初夜と惨劇の前ぶれ（後書き）

テスト前なのに良いのでしょうか？

次回　毒とお弁当とBクラス戦

第六問　毒とお弁当とBクラス戦

問　以下の問いに答えなさい。
『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え
『C６H６』

教師のコメント
簡単でしたかね?

土屋康太の答え
『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント
君は科学をなめていませんか。

吉井明久の答え
『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント
あとで土屋君と一緒に職員室へ来るように。

氷花紫苑の答え
『先生、解答を書かずに申し上げ在りませんが後で恋愛相談にのって貰えないでしょうか?』

教師のコメント
真面目なあなたがテストに書くなんて驚きましたが余程の事なので

すね。
分かりました。先生で良ければ相談相手になりましょう。

それは突然の出来事だった。
次々に倒れていく仲間達

「・・・・・・・・・・・・・（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムッツリーニっ」

「・・・・・・・・・・・・・（パク）」

バタン　　ガタガタガタガタ

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

「あっ雄二」

パク　　バタンーーーガシャガシャン、ガタガタガタガタ

何も知らずに逝ってしまった仲間「まだ死んでねぇ！」
さらに、自分は助かろうと仲間を犠牲にする者。次々と散ってゆく
命という儚き花。

さまざまな思考と戦略が交わるこの戦場（屋上）。
果たして最後に生き残るのは誰なのか!?「あれ？　これ本当にバカテス？」
劇場版バカとテストと召喚獣「彼女の料理は暗殺兵器!?　惨劇の幕開け編」近日公開!!
「編ってことはまだ続くのかの？」

「お主は頭の中で何を考えておるんじゃ？」

「あっ、ごめん秀吉」（だって今の光景があまりにも日常からかけ離れていたから）

（まあ、確かにのう）

（二人とも何暢気なこと言ってんの？　今はこの一お弁当（暗殺兵器）をどうやって処理するか考えようよ！）

そう、今僕たちの前に一立ちはだかっている（置いてある）お弁当を康太と雄二が食べ、倒れてしまったところだ。

（雄二、生きてる？）

一応聞いてみる。

（毒を盛ったな？）

アイコンタクトでそう言いかけてくる。

（毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ）

明久が僕の代わりに答える。

「あ、足が・・・・・・攣ってな・・・・・・」

さすが雄二姫路さんを傷つけないための良い判断だよ。

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りをしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「気を付けなきゃ駄目だよ、雄二」

「そうなの？　坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

まずい、島田さんが疑っている。

「ところで島田さん。その手のついてるあたりにさ」

「ん？　何？」

「さっきまで虫の死骸があったよ」

ナイスだ明久！

「えぇっ！？　早く言ってよ！」

これで島田さんは二人のような目にはあわないな。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方が良いよ」

「そうね。ちょっと行ってくる」

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「大変だね」

はっはっは、と笑っている裏では・・・・・・

（明久、今度はお前がいけ！）

（む、無理だよ！　僕だったらきっと死んじゃう！）

（流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る・・・・・・）

（秀吉、今だから言うけどあの時のジャガイモの芽を食べた後、僕が素早く秀吉の口に解毒剤を押し込んだんだよ）

（雄二がいきなよ！　姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

（そうかのう？　姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが）

（そんなことないよ！　乙女心をわかってないね！）

（多分このメンバーの中では明久が一番わかってないと思う）

（ええい、往生際が悪い！）

「あっ！　姫路さん、アレはなんだ！？」

ま、まさか明久、君は・・・・・・

（おらぁっ！）

（もごぁぁっ！？）

やっぱり、君は予告にある仲間を犠牲に自分は助かろうとする者だったんだね！

「ふぅ、これでよし」

「・・・・・お主、存外鬼畜じゃな」

「なんか試練を乗り越えた達成感があるな」

雄二、君の骨は拾ってあげるからね「だからまだ死んでねえって！」

「ごめん、見間違いだったよ」

「あ、そうだったんですか」

姫路さん、こんな手にひっかかるなんて、多分彼女は嘘をつくのには向いてないな。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

「今度どんな食材を使ってるのか教えて欲しいかな」

うん、是非教えて欲しい。人がぶっ倒れる料理に使ってる材料を。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。特に明久と雄二が凄い勢いで」

せめてこのくらいの情報を与えないと明久の為に作ってきた姫路さんが浮かばれないからな。

「そうですかー。うれしいですっ」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

雄二がかろうじて生きてる。大丈夫かな？

「う・・・・うぅ・・・・・・。あ、ありがとうな、姫路・・・・・・」

その後、喫茶店の話で話題を逸らすことに成功し、一安心してるところに爆弾が投下された。

「あ、そうでした」

姫路さんがポン、と手を打った。

「ん？どうしたの？」

「実はですねーーー」

ま、まさか。

「デザートもあるんです」

ひぃぃぃ！　暗殺兵器第二弾！！

「ああっ！姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！　次は俺でもきっと死ぬ！」

（明久！　俺を殺す気か！？）

（仕方がないんだよ！　こんな任務は雄二にしかできない！　ここは任せたぜっ）

（馬鹿を言うな！　そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできんものはできん！）

（この意気地なしっ！）

（そこまで言うならお前にやらせてやる！）

（なっ！　その構えは何！？　僕をどうする気！？）

（拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後存分に詰め込んでくれる！　歯を食いしばれ！）

（いやぁー！　殺人鬼――――！）

（・・・・・・ワシがいこう）

（秀吉!?　無茶だよ、死んじゃうよ！）

（俺のことは率先して犠牲にしたよな!?）

秀吉!?　駄目だ、僕は君を守るって約束したんだ。君を逝かせるわけにはいかない！

（いや、ここは僕が逝くよ）

（えぇ!?　紫苑、大丈夫なの!?）

（分からない。でも、僕は秀吉を守ると誓ったんだ！　だから、ここは僕が逝くよ）

「どうかしましたか？」

やばい。躊躇ってるのがバレたのか!?

「あ、もしかして・・・・・・」

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れて来ちゃいましたっ」

・・・・・・・・・・・・

「取ってきますね」

姫路さんが教室に戻っていく。このチャンスを逃すわけにはいかない！

「じゃあ、逝ってくるよ」

「・・・・・・すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

「紫苑、すぐに何かしらの応急処置をしてやるからの」

「そんな暗い顔しないでよ。それに、謝るくらいだったら次の戦争、よろしくね」

意を決し一気にかきこむ。

さあ、いったいどんな奇妙奇天烈破天荒な味がーーーあれ？

「ん？　意外と普通だけゴばぁっ！」

どうやら、最後に生き残るのは僕じゃ無いらしい。

薄れゆく意識の中でそんなことを考えていた。

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？　試召戦争のか？」

「うん」

雄二と僕の犠牲によりなんとか退けられた姫路さんのお弁当。
気を失った僕は秀吉に膝枕をしてもらっていた。
明久と康太が襲いかかってきたけど関節をきめ、二人を絡ませておいた。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

「どうしてBクラスなの？　目標はAクラスなんでしょう？」

「正直に言おう」

雄二が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てはしない」

「だよね」

僕は雄二と同意見だ。

悲しきかな、AクラスとFクラスでは戦力差が天と地ほどの差がある。
特に上位十人が相手だと並の生徒では歯が立たない。

「それじゃ、ウチらの最終目的はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

明久が雄二に言う。

「違うよ、明久。雄二はあくまで、総合的な戦力では勝てないと言っているんだよ」

「その通りだ。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに？　どうやって？」

「Bクラスを使う」

ああ、成る程。そういうことか。でもそれだと、色々とやっかいだよ、Bクラスは。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？　も、もちろん！」

あの顔は、さては知らないな。

「設備のランクが落とされるんだよ」

姫路さん、耳打ちしてあげるなんて優しいな。

「・・・・・まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に

落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

その常識を君は知らなかったってことわかってる？

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

呆れてものが言えない。

「ムッツリーニ、ペンチ」

「ややっ。僕を詰め切り要らずの身体にする動きがっ」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

再び姫路さんのフォローが入った。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備に入れ替えられるわけだね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、ですか？」

「Ｂクラスに勝った後、Ａクラスに Ｂクラスを攻め込ませるぞと脅迫するんだよ。設備の交換をチャラにする代わりにね」

「その通り」

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力は辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それにーーー」

「それに？」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？　こちらに姫路と紫苑いることは既に知れ渡っていることじゃろう？」

さすがにそのへんは雄二の考えあってのことだろう。

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

まっ、作戦無しに挑めるほど、楽な相手ではないからな。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

まあ以前酷い目に遭ったんだからそりゃそうだよな。

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？　ＯＫ。乗った」

「よし。負けた方が行く、で良いな？　ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいこう」

心理戦ありだと戦略を作るのが旨い雄二が一枚上手だな。明久もそのくらいわかってるだろうからな。どうなるんだ？

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

「そうか。それなら俺は――――」

さあ、どう出るんだ、雄二？

「お前がグーを出さなかったらぶち殺す」

えっ！？　なにその心理戦！？

「いくぞ、ジャンケン」

「わぁぁっ！」

雄二　パー
明久　グー

「決まりだ。行って来い」

「絶対に嫌だ！」

「Ｄクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する」

雄二がまっすぐ明久を見つめる。あれ？　こんな感じの描写を以前見たことがあるような・・・・・・

「なぜなら、Ｂクラスは美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

「でも、お前不細工だしな・・・・・・」

「失礼な！　３６５度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「５度多いぞ」

「実質５度じゃな」

「二人なんて嫌いだっ」

一年の日数と混ざるなんて・・・・・・

「とにかく、頼んだぞー」

放課後・・・

「言い訳を聞こうか」

ぼろぼろになって帰ってきた明久がなんか言ってる。

「予想通りだ」

「くきぃー！　殺す！　殺しきるーっ！」

「落ち着け」

「ぐふぁっ！」

うわぁ。鳩尾にクリティカルヒット！　効果は抜群だ！

「先に帰ってるぞ。明日もテストなんだから、あんまり寝るんじゃないぞ」

「明久、ファイト！」

とりあえず声をかけておく。

なんだか挙動不審な動きをしている姫路さんが気になるが、夕食の準備があるので帰らせてもらうか。

後日・・・

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

今日はＢクラス戦。張り切っていくか。

「午後はＢクラス戦との試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

『おおーっ！』

相変わらず士気だけはどこにも負けないな。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路と紫苑に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

「が、がんばります」

「とりあえず一言、戦死だけはしないでくれ」

『うおおーっ！』

キーンコーン

カーンコーン

開戦開始の合図だ！！

第六問　毒とお弁当とBクラス戦（後書き）

次回　罠と協定とCクラス

第七問　罠と協定とCクラス（前書き）

ついにテスト終わった。　（二つの意味で）

ＰＴ数が１００を超えました。評価してくれた方々、私感謝感激です。

これからもがんばっていくので応援よろしくお願いします。

第七問　罠と協定とCクラス

問　以下の問いに答えなさい。

『ｇｏｏｄおよびｂａｄの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希と氷花紫苑の答え

『ｇｏｏｄ－－－－－ｂｅｔｔｅｒ－－－－－ｂｅｓｔ

Ｂａｄ－－－－－ｗｏｒｓｅ－－－－－ｗｏｒｓｔ』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『ｇｏｏｄ－－－－－ｇｏｏｄｅｒ－－－－－ｇｏｏｄｅｓｔ』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾にｅｒやｅｓｔをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『ｂａｄ－－－－ｂｕｔｔｅｒ－－－－ｂｕｓｔ』

教師のコメント

『悪い』　『乳製品』　『おっぱい』

「いたぞ、Ｂクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

なるほど、総合科目で一気に勝負に出るつもりだな。

「みんな、敵戦力はこちらより数で劣る。さっき説明したフォーメーションＡでいくよ！」

『了解』

読み通り。Ｂクラスが送り込んできたのは十人という様子見程度の人数こちらと比べれば四分の一だ。

「生かして帰すなーっ！」

『Ｂクラス　野中長男　総合　１９４３点
ＶＳ
Ｆクラス　近藤吉宗　総合　７６４点　武藤啓太　総合７５８点
君島博　総合　７４５点』

「くっ！　Ｆクラスのくせに！」

よし、多対一で当たっていけば勝てる！

「お、遅れ、まし、た・・・・・。ごめ、んな、さい・・・・・・」

よし、姫路さんが来た。ここで一気にたたみかける！

「来たぞ！　姫路瑞希だ！」

やっぱり警戒されてるよね。

「姫路さん、大丈夫そうなら行くよ！」

「は、はい。行って、きます」

トタトタと歩く姫路さん。　大丈夫かな？

「長谷川先生、Ｂクラス岩下律子です。Ｆクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「長谷川先生、Ｂクラス井川健吾です。同じく氷花紫苑に数学勝負を申し込む！」

えっ、数学かぁ。苦手なんだよなぁ。

さらに僕と姫路さんにもう一人ずつ加わり、二対一の組み合わせが二つになった。

『試獣召喚（サモン）！』

『Ｆクラス　氷花紫苑　数学　２４２点
ＶＳ
Ｂクラス　井川健吾　数学　１６４点＆小野明　数学　１７２点』

うわお！　危ない。

「いくぞ！」

敵の召喚獣二体が突っ込んでくる。
距離があるので呪文を唱えて武器を取り出す僕の召喚獣。
敵の武器は剣と槍。

「うおお！」

剣を持った召喚獣が斬りかかってくる。
僕のは槍と剣を足して二で割ったような武器（以後、槍剣とする）で受け止める。

「今だ明！」

そしてもう一体の召喚獣が槍を構えて僕の召喚獣の腹を目掛けて槍を突き出している。

「そう簡単には行かせないよ。これでも部隊長だからね」

召喚獣の足を屈ませ、左腕に装備されている小型の盾の上をスライドさせるように受け流す。

「「何！？」」

そして、槍剣と盾を思いっきり上に跳ね上げボディががら空きになった召喚獣を斬りつける。

『Ｂクラス　　井川健吾　数学　０点＆小野明　数学　０点』

「戦死者は補修！」

すぐさま西村先生が現れ、姫路さんに舜殺された二人と僕に敗れた二人を連れて行った。

「このまま残りの連中も戦死させるんだ！　こんなところで無駄死にだけはしないでね」

「相変わらず見事な戦略じゃのう」

秀吉がこちらにやって来た。

「そりゃどうも。何かあったのかい？」

「うむ、紫苑、ワシらは教室に戻るぞ」

「え？　どうして？　根本を警戒してかい？」

「知っておったか。そうじゃ、根本を警戒してじゃ」

根本と言えば、良い噂を聞かない一言で言えば卑怯者。

「なるほど。戻っておいたほうが良さそうだね」

「雄二に何があるとは思えんが、念の為にの」

そうして、僕と明久と秀吉は教室に戻った。

「・・・・・うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「油断してたな」

僕たち三人が戻った時の教室は荒れ果てたものになっていた。
穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャープや消しゴムなどなとｅｃｔ・・・・・・・

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「だけど、雄二はどこへ？」

すると雄二が教室に入ってきた。

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

「僕としては何故雄二が教室を空にしていたかが気になる」

どうやら明久と秀吉も同じ事を思っていたようで、僕の言葉に頷いた。

「協定を結びたいという申し出があってな。調印の為に教室を離れたんだ」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午後九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「なるほど、姫路さんのことを考えてだな」

「そうだ」

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね

「その時はクラス全体の戦力よりも姫路や紫苑の個人の戦闘力の方が重要になる」

作戦には姫路さんの火力は不可欠だからな。雄二の判断は正しいと思う。

「だから受けたの？　姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

「雄二、その協定は僕たちにとってはかなり都合が良い。でも、だからこそ、注意しなければならないことがあるよね？」

「それは一体何なのじゃ？」

「普通、敵対戦力には塩を送るようなことはしないってことだよ。だが今回、根本はそれをしてきた。何故だと思う？」

「それは体力で劣るからでしょ？」

「それもあるかもしれないけど、先ほどの戦闘で敵も学んだであろう姫路さんの強大な力。何故それをわざわざ回復させる時間をあたえる必要がある？　普通こういうのは大将などを倒して敵の士気を下げるのが普通じゃない？　いくら姫路さんといえども、十人に囲まれたら勝てるかどうか分からない。だったら姫路さんに狙いを絞って集中攻撃すればいい。でも、それをしないってことは、姫路瑞希という脅威を退ける秘策があるってことだと僕は思うんだが？」

あの根本だ。姫路さんの弱みでも握っているということも考えられる。

「確かに、それは考えて無かったな。俺のミスだ」

「いや、普通誰でも雄二と同じ立場だったら雄二と同じ判断していたと思う。無論、僕も。まあ過ぎてしまったことをどうこう言っても仕方ないから僕は前線に戻るよ」

「ではワシも戻るとするぞい。向こうでも何かされていてはかなわんからのう」

「そうだね。雄二、文房具の手配よろしく」

「その辺は任せておけ」

僕らは前線に帰還した後須川君が駆け寄ってきた。

「おお！　戻ってきたか」

「それで、戦況は？」

「やっかいなことに、島田が人質にとられた。ほとんど戦死せずに生き残っているからこのまま本陣に突撃と行きたかったんだが」

「なっ！？」

島田さんが人質に！？　だが島田さんなら日々明久というサンドバックで鍛えた関節技やら打撃技があるはずなのに・・・・・・

「紫苑、今僕に対して酷い見方をしてなかった？」

「はは、まさか。とりあえず状況を見ようよ」

明久って読心術使えたのか！？

「それもそうだね」

「島田さん！」

「よ、吉井！」

なんかドラマみたいだな

「そこで止まれ！　それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

ふむ、王道の展開だな。だけど、ここは明久が島田さんを助けた方が彼女も喜ぶだろうから明久に託すかな。
すると明久が何かを決心したようだ。

「総員突撃用意ぃーっ！」

「隊長それでいいのか！？」

「明久！　その判断は色々な物が危険に晒される！」

特に君の命とか命とか命とか・・・・・・

「ま、待て、吉井！」

待ったコールがかかる。ふう、とりあえず明久の寿命が延びたな。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

人質に気圧されている人初めて見た。

「コイツ、お前が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

おお！　島田さん明久を心配するなんて良いとこあるじゃん。

「島田さん・・・・・・」

「な、なによ」

島田さんの頬が赤い。これなら明久だって島田さんの優しさに気づくだろう。

「怪我した僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違うわよ！」

明久が島田さんをどう見ているかがわかる瞬間だな。

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？　これでも心配したんだからね！」

おお！　爆弾発言だ！

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

これでさっきの信頼関係も修復されるだろう。

「へっ。やっとわかったか。それじゃ、おとなしく」

だがこのままだといつまで経ってもこのままだ。

「総員突撃ぃーっ！」

「どうしてよっ！？」

うわぁ。やっちゃったよ明久。まあこれでこの状態は崩れるけど。

「あの島田さんは偽物だ！　変装している敵だぞ！」

「おい待てって！　コイツ本当に本物の島田だって！」

「黙れ！　見破られた作戦に固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当に――――！」

『Ｂクラス　鈴木二郎　ＶＳ　Ｆクラス　田中明
英語Ｗ　３３点　ＶＳ　６５点　』

『Ｂクラス　吉田卓夫　ＶＳ　Ｆクラス　須川亮
英語Ｗ　１８点　ＶＳ　５９点　』

とりあえず死にかけの二人を撃破！

「ぎゃぁぁぁー・・・・・・」

「たすけてぇー・・・・・・」

「皆、気をつけろ！　変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

流石に島田さんが可哀想なので助け船をだすかな。

「あ～島田さん。一体どんな情報を聞いたんだい？」

「吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなったって」

どんな嘘だよ。

「包囲中止！　コレ本物の島田さんだ！」

やっと気づいた上にコレ扱いって、どうよ？

「島田さん、大丈夫だった？」

「・・・・・・・」

あっ、島田さん無言だよ。やばぁいな。

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「・・・・・・・」

本当に？

「・・・・・・・」

「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう？」

「・・・・・・・」

「それにしても卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

おそらくそれは君のことだと思う。

「あー、島田さん。実はね」

「・・・・・なによ」

おお、反応した。これから言う台詞で明久の生死が決まる。

「僕、本物の島田さんだって最初から気づいていたんだよ？」

アウチッ！　最悪なチョイスだよ！

とか言ってるそばから明久が虐殺にあっている。

助けられないけど。

教室・・・

明久はなんとか一命を取り留めたみたいで、姫路さんに心配されている。因みに今は協定通り休戦中である。

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。だが紫苑のおかげでこちらの被害は最小限に留められた」

今雄二が現在の戦況を読み終えたところだ。

「ハプニングはあったけど、今のところ順調なわけだね」

「まぁな」

だが向こうの代表が根本だから油断はできない。

「・・・・・・・・・・・・・（トントン）」

「お、ムッツリーニか。何か変わったことはあったか？」

今回は康太が情報係だからな。

「ん？　Ｃクラスの様子が怪しいだと？」

「・・・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

Ａクラスに攻め込むとは考えられないし・・・・・・

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

とは言っても、これは戦争だからな。

「雄二、どうするの？」

「んー、そうだなー」

雄二がチラリと時計を見た。まだ４時３０分。

「Ｃクラスと協定を結ぶか。Ｄクラスを攻め込ませるぞと、とか言って脅してやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろ」

「それに僕らが勝つとは思ってもいないだろうしね」

「よし。それじゃ今から行ってくるか」

「そうだね」

「秀吉は念のためここに残ってくれ」

「ん？　なんじゃ？　ワシは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

「よくわからんが、雄二がそう言うであれば従おう」

ふむ、だがこの人数だと何か不安だな。

「雄二、もうちょっと人数増やした方が良くない？」

「とは言っても、その人がいなくてな」

そう言って廊下に出たら島田さんと須川君が歩いてきた。

「吉井。アンタの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれんのよ」

「それって吉井が悪いのか？」

どうなんだろ？

「あ、島田さんに須川君。ちょうど良かった。Ｃクラスまで付き合ってよ」

明久が代わりに言ってくれた。

「んー、別にいいけど？」

「ああ。俺も大丈夫だ」

これで人数が増えてパーティが強化されたな。

「急がんとCクラスの代表が帰ってしまうぞい」

「うん。急ごう」

そしてCクラス・・・

「Fクラス代表坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

それにしてもずいぶんな数が残ってるな。戦争についてのミーティングか？

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？　ふぅん・・・・・・」

何だ、この嫌な胸騒ぎは。それに何で小山さんは笑っている？　普通ならどんな内容の交渉をするのかという確認をしたりするはずな

のに・・・・・何かを知っている？

「ああ。不可侵条約を結びたい」

だとしたら何を知っている？　今やっているのはＦクラスとＢクラス間の戦争のみ。

発送の転換をしてみるか？　例えば、根本はあの時何故あんな条約をした？

そういえば根本は誰かと付き合ってるという噂を聞いたことがある。

それがこの小山さんだとしたら？　・・・・・まさか！　そうか、確かにそれなら姫路さんを封じること以外の説明がつく。

「雄二！　これは罠だ！」

叫んでみたがもう遅い。雄二はクラス間交渉の不可侵条約という戦争を仕掛けさせないための条約を結びたいと言ってしまったのだから。

「紫苑。罠ってどういう「不可侵条約ねぇ・・・・・・。どうしようかしらね、根本君？」えっ！」

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

やっぱり。明久達も驚愕を隠せない様子だ。

「酷いじゃないかＦクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為の一切禁止にしたよな？」

「何を言ってーーー」

まずい、まずい、まずい。

「先に協定を破ったのはソッチだからな？　これはお互い様、だよな！」

やばい、囲まれた。しかも人影に隠れて見えなかったが数学の長谷川先生と船越先生がいる。

「長谷川先生！　Ｂクラス芳野が召喚をーーー」

「やらせない！　Ｆクラス　氷花が受ける！　試獣召喚（サモン）！」

数学だとどこまで保つかな。

「みんな逃げろ！　今は圧倒的に不利だ！　ただ生き延びることだけを考えて逃げるんだ！」

「くっ、すまない紫苑。みんな撤退するぞ！」

「でも紫苑が・・・・・・」

「大丈夫。必ず戻るから」

「信じてるからな」

「あいよ」

そう言って皆はＣクラスから撤退して行った。

「逃がすな！　坂本を討ち取れ！」

追撃部隊などやらせるか！

「させないっての！」

僕と召喚獣はバックステップをとり、Ｃクラスの廊下に立ちはだかるように構える。

「たった一人だけでどうにかなると思うな！　試獣召喚（サモン）！」

『Ｂクラス　芳野孝之＆加西真一　ＶＳ　Ｆクラス　氷花紫苑
数学　１６１点＆１７８点　ＶＳ　２２８点』

「今のうちだ！」

やばい突破される！

「行かせる「すきあり！」くっ！」

危ない、鎌に当たるところだったが咄嗟に盾でガードした。だが敵の追撃部隊を出撃させてしまった。

「そらっ！」

もう一体が追撃に剣で攻撃してきた。がそれを避け、槍剣ですれ違いざまに斬りつける。

「一方的なのは嫌なんでね」

『加西真一　数学　８７点』

「くそ！」

倒しきれなかったか。浅かったらしいな。

「二人とも援護する試獣召喚（サモン）！」

『田中玲　数学　１５４点』

三人目が出てきたな。しかも装備が弓というのが若干辛いな。

「くらえ！」

召喚獣が弓を乱れ撃ちしてくる。だがそれは避けたり、槍剣で叩き落としたりしている。だがその隙に他の召喚獣の接近を許してしまい、攻撃されるが難なく避ける。

観察処分者と同じ仕事していて良かった。

「こいつ、三体一なのに」

「倒せない・・・・・・」

「こっちも行くぞ！」

こんどは僕が突っ込む。弓で迎撃してくる召喚獣の攻撃は全て避け、点数が余っている方の鎌を持った召喚獣に斬りかかる。だが相手はそれを防御し、鍔迫り合いになる。

それをチャンスだと思い、僕に弓を放っていた召喚獣が矢を放つ瞬間に槍剣を引いて、敵がバランスを崩した時に後ろに回り込む。そ

して放った矢は敵の召喚獣へ。

ドス

バランスを崩したのが原因で前屈みになったので矢が召喚獣の頭に突き刺さる。

『Ｂクラス　芳野孝之　０点』

「うわぁぁぁー！　やられた！」

「す、すまんっ」

続いて点数の減っている召喚獣に斬りかかって点数差の力の差を利用し、撃破。

残る一人は矢を放ってくる際に槍剣を思いっきり回転させて投げつけた。

槍剣はそのまま、敵の召喚獣と矢をまっぷたつにした。

『Ｂクラス　加西真一　０点　田中玲　０点』

「戦死者は補習！」

西村先生登場！　どうやって戦死した人の場所とタイミングが解るんだろう。

「て、鉄人！」

「嫌だ！　補習室だけは嫌だ！」

「助けてくれぇぇぇー！」

あわれ、戦死者達よ・・・・・・・

「よし、ひとまずみんなの所へ戻るかな」

教室・・・

「たっだいまー！」

「おお！　紫苑。無事じゃったか」

「流石だな」

「紫苑も無事みたいだから万事ＯＫだね」

秀吉が駆け寄ってきてくれた。ちょっと嬉しいかな。

明久達も無事だったみたいだし、変わっていることといえば明久が島田さんのことを美波って呼ぶようになっていたことと逆に島田さんが明久のことをアキ、と呼ぶようになっていたことかな。

「さて、お前ら」

「ん？」

雄二がＦクラスの皆を見回してから言う。

「こうなった以上、Ｃクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Ｂクラス戦の直後のＣクラス戦はきつい」

さっきの行動からすれば確実に攻め込まれるだろうからな。

「それならどうしようか？　このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな・・・・・・」

「心配するな」

雄二が自信ありげな発言を！

「向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を。だ」

今日はこれで解散になったが雄二の作戦を楽しみに待つかな。

第七問　罠と協定とCクラス（後書き）

次回　根本と奇襲と怒りの明久

第八問　根本と奇襲と怒りの明久

第八問

問　以下の問いに答えなさい。

『女性は（　）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え
『初潮』

教師のコメント
正解です。

氷花紫苑の答え
『成人式』

教師のコメント
大人になります。

吉井明久の答え
『明日』

教師のコメント
随分と急な話ですね。

土屋康太の答え
『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の

ことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が４３?に達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント
詳し過ぎです。

教室・・・

「昨日言っていた作戦を実行する」

「作戦？　でも、開戦時刻はまだだよ？」

「料理で言う下ごしらえでもするの？」

「ああ。だが、対象はＣクラスだがな」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にコイツを着てもらう」

そう言って雄二は鞄から何故か文月学園の女子の制服。
因みに巷ではかなり人気らしい。まあかわいいからね。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「秀吉よ、そこで構わないから第三性別として見られるって解らない？」

「秀吉には木下優子として、Ａクラスの使者を装ってもらう」

なるほど、それでＡクラスへＣクラスを仕向けさせようって魂胆だな。

何気に無視されたのは傷ついた。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ・・・・・・」

制服を受け取り、生で着替え始める秀吉。女子もいるのに。

そういえば以前一回だけ優子の着替えを偶然とはいえ覗いてしまって殺されかけたんだよな。改めて思うけどホントに秀吉と優子って瓜二つだよな。

こうやって秀吉が優子の格好で着替えしていたら・・・・・・・っ！！

「よし、着替え終わったぞい。ん？　紫苑は解らんでもないが皆どうした？」

「さぁな？　俺にもよくわからん」

すると秀吉がこちらに近寄ってきて・・・・・・

「姉上の下着姿でも思い出して興奮したかのう？」

と小声でささやいてきた。

「いっ、や断じてそんなことはない！」

だが秀吉はニヤリと笑い。

「そうか、では姉上に言っておこう。紫苑は姉上の下着姿など興奮する要素が無いと言っておったとな」

「や、止めて秀吉！　そんなことを言われたら僕は明日のお天道様が拝めるかわからなくなっちゃう！」

な、なんて恐ろしいことを言い出すんだこの子は。

「秀吉、そろそろ行くぞ」

助かったよ雄二。ん？でも待てよ・・・・・・

「雄二、つまりこの作戦は優子の姿となった秀吉がＣクラスの連中を挑発してＡクラスに仕向けさせるってことだよね？」

「そうだが？」

「その場合、秀吉が日頃の恨みを晴らすためにちょっと過激にやる危険性がある。そうなった場合、優子の評判に傷が付く。だからこの作戦はちょっと反対」

恨みを晴らす為って言ったとき秀吉がビクッとしていたので図星だろう。

「ふう、なら仕方ないな。秀吉、頼む」

「うむ」

秀吉がこっちに向き直る。な、何だ？

「ねえ、紫苑」

「っ！！」

何！？　秀吉が優子の声を真似てきたぞ！？　しかも今秀吉は優子の格好だからよりリアルに感じられる！

「あのね、紫苑。私、ずっと言えなかったんだけど・・・・・・」

な、何だ？　ずっと何を言えなかったんだ！？　ま、まさかこの展開は！

「アタシ・・・・・・その、紫苑の事が好きなの！」

「んなっ！？」

うぉぉぉーー！！　ずっと僕が言われたかった言葉ランキング第一位のこの台詞！

さっきも言ったが、例え相手が秀吉だとしても今は優子の格好をしている為、

本物の優子に言われた錯覚に陥るわけで・・・・・・

そんなことを考えている内に優子（秀吉）がこちらに近づいてきて。

「紫苑は、アタシのこと、どう思ってる？」

今にも消えそうな声で言ってきた。くそっ！　これが演劇部の実力なのか！？

「えっと、その、あの」

ダメだ、ここではいと答えてしまったらＦＦＦ団が襲い掛かってくる！　こんなラブコメ展開全開中のこの状況に襲われたら対処できない！？

「そう、だよね、紫苑もこんなこと言われて迷惑だよね・・・・・・。ごめんねっ」

なんと言おうか考えている時にまたもや消えそうな声でっ！　考える時間も与えてくれないのか！

だが、このままでは僕の本音が・・・・・。助けを求めて周りを見てもＦＦＦ団と何故かこちらを真剣な目で見ている姫路さんと島田さん。ダメだ、味方はいないようだ・・・・・。

「いや、あの、その、僕も二年前からずっと優子のことが好きだった・・・・・・」

やってもうた！

『ええー！！』

『そうだったのか。ということはあの二つの噂はガセということになるよな』

『ああ。木下優子と付き合っているというのと、実は男好きってい

う噂だろ？』

ほほう。その噂というのは詳しく、聞かせて欲しいものだな。
だが今はこの状況を何とか打開する方法を見つけ出さなくては！

「本当！　嬉しい！」

「うおっ！」

『ああー！！』

いきなり優子（秀吉）が僕の首に腕を絡めて抱きついてきた。相手は秀吉なのにドキドキが止まらない！

「ねえ、紫苑」

「な、なんだい？」

上目遣いで僕を見る優子（秀吉）。正直もう堪りません！

「キス、しよう？」

ああ、もう、ダメですね。
そしてだんだん僕と優子（秀吉）の顔が近づいていき・・・・・・

「紫苑ごめんね？」

バチッ！　（スタンガンの音）

そのまま僕の意識は遠のいていった。

Ｂクラス前廊下・・・

明久ｓｉｄｅ

「壁とドアをうまく使うんじゃ！　戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。現在Ｂクラスと交戦中である。
雄二曰く、『敵を教室内に閉じこめろ』とのこと。
そんなわけで指示通りに作戦を遂行しようとしてるんだけど、ここで二つの問題が発生しているんだ。
まず姫路さんの様子がおかしいこと。指揮官の彼女だが一向に指示を出さない。
むしろ、わざと参加しないようにしているように思える。何かあったのかな？
そしてもう一つが・・・・・・

「のう、紫苑。さっきはワシが悪かったから機嫌を直してくれんかのう？」

「どうせ、どうせ僕なんて・・・・・・」

かるく壊れちゃっている紫苑である。原因は先ほどの秀吉の見事な演技。
今は廊下でうずくまっている。
紫苑は秀吉の変装だと解っているのに、引っかかってしまった自分

が情けなく感じているらしい。
まあ誰だって好きな人からあんな風に言われたら抵抗できないと思う。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！　援軍を頼む！」

そうこうしている間に戦線がまずい状況に！　しかも紫苑の指揮が無いから押し戻すことさえ難しい。

「姫路さんか紫苑、左側へ援護を！」

本当は作戦があるからあまり姫路さんと紫苑に頼るわけにはいかないんだけどこういう場合は仕方ない。

「あ、そ、そのっ・・・・・・！」

「はは、は、あはははは！」

ダメだっ！　姫路さんは泣きそうな顔でオロオロしていて、紫苑は完全にアウト。
こうなったら、奥の手を使うまでだ！

「だぁぁっ！」

素晴らしいステップで一気に立会人をやっている竹中先生の耳元でささやく。

「・・・・・ヅラ、ずれてますよ」

「っ！！」

必殺！　『いざという時の教師脅迫～古典教師編～』

「少々席を外します！」

効果は抜群だ！　竹中は逃げ出した。

「古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！　消耗した人は補給に回って！」

脅迫のおかげで少しの間ができる。この隙に。

「姫路さん、どうかしたの？」

「そ、その、なんでもないですっ」

首を大きく振る姫路さん。オーバーリアクションだから何かがあるのは見え見えだ。

「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし」

「ほ、本当になんでもないんです！」

相変わらず泣きそうな顔をしながら言われても。

「左側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Ｂクラス内に拉致された模様！」

教科が理系から文理系に変更されてしまった！　これはやばいかも。

「私が行きますっ！　あ・・・・・・」

姫路さんが戦線に加わろうとして何かを見て加わるのを止めた。

一体何を見たんだ？

不思議に思い、姫路さんの目線を追ってみると、そこにはあの卑怯者根本恭二の姿が。

だがその根本君の手には手紙らしき物が握られているのが見えた。

あれは！　三日前の放課後に姫路さんが恥ずかしがって僕から隠した、封筒があった。

「・・・・・なるほどね。そういうことか」

確かにこの方法なら紫苑が疑問に思っていた姫路さんを何故回復させたのかっていう疑問はなくなる。

紫苑が警戒していたのはこのことだったんだな。

「姫路さん」

「は、はい・・・・・・？」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「・・・・・・はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね。あと紫苑には元気出してって言っといてもらえるかな？」

「あ・・・・・・！」

何か言いたげだった姫路さんを気にしないで教室に急ぐ。

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

つい声に出てしまう。隠せない気持ち。

「あの野郎、ブチ殺す」

紫苑ｓｉｄｅ

今、明久が内なる怒りを秘めた目で本陣に戻って行った。
彼があんなにも怒りを露わにしているのは初めて見た。
だったら僕はその彼の怒りをぶつける相手の場所まで彼を導く剣となろう。

「あの、氷花くん・・・・・・」

姫路さんが何か言いたげな様子で話しかけてきた。
でも、何を言いたいのかは大体把握できる。

「もう大丈夫だよ。姫路さん」

「えっ？」

「僕も、明久に心を動かされる物の一人だって事」

「まずいっ！　突破される！」

さてと、サボった分きっちりと働きますか。

「横田君、藤堂君、召喚獣を後退させて！」

「逃がすかっ！」

「試獣（サモン）召喚！」

お決まりの台詞を言った直後に追撃してきたＢクラスの召喚獣に光弾が当たりまくる。
そしてその召喚獣は戦死した。

「何っ！？」

「皆、立ち直るのが遅れてごめん。しかし、今この時をもってＢクラス左側出入り口は僕が指揮を取る。右側は秀吉、君に任せる」

「了解じゃ」

「皆、Ｂクラスに勝つため、この戦線は何としても抑えるぞ！」

『『『おっしゃー！』』』

少し経ってから明久が来て作戦の説明をしてくれた。

「分かった。つまりここを抑えておかないと話にならない訳だね」

「そういうことだね。紫苑、頼める？」

「大丈夫。この程度ができないんじゃあ指揮官なんか勤まらないよ。ここは任せて、明久」

「うん。じゃ、任せたよ。相棒！」

明久が手を挙げてハイタッチのポーズをしてきた。

「そっちこそ、任せたよ。相棒！」

僕らは力強くハイタッチをした。

そして明久はDクラスへ。僕は教室前廊下へ。

それにしても相棒、か・・・・・・

仕事仲間にもそんなのがいるっけな。

でも、やっぱり相棒って言われると嬉しいよね。

「おう。紫苑。復帰したらしいな」

室外機を止めるように指示を出してきたであろう雄二が来た。

「いつまでもああしている訳にもいかんでしょ？」

「ああ。作戦は明久から聞いてるな？」

「うん。あの作戦は明久のがんばり次第だけどね」

かなり堅くて痛いだろうけどがんばってね明久。

「全くもってその通りだな。さて、俺も時間を稼ぐとするかな」

そう言って左側の出入り口に向かう。

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

「どうした？　軟弱なＢクラス代サマはそろそろギブアップか？」

「ハァ？　ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？　頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「・・・・・お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ。それにウチの頼みの綱は姫路だけじゃないぜ？」

「けっ！　口だけは達者だな。負け組代表さんよぉ」

「負け組？　それがＦクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな」

やっぱり僕はこの根本は嫌いだ。

「・・・・・さっきからドンドンと、壁がうるせぇな。何かやっているのか？」

「さぁな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「けっ。言ってろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

「・・・・・態勢を立て直す！　一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

作戦開始時刻だ！　そして雄二が叫ぶ。

「あとは任せたぞ、明久」

「だぁぁーーっしゃぁーっ！」

ドゴォッ！

「ンなっ！？」

明久が召喚中を使い、Ｂクラスの壁をぶち破った。
それを合図に僕もＢクラス内へ突入する。
そして生徒の肩を踏み台にして一気に根本ととの距離を詰める。

「「くたばれ、根本恭二ぃーっ！」」

僕と明久が同時に叫ぶ。

「遠藤先生！　Ｆクラス島田がーーー」

「遠藤先生！　Ｆクラスの氷花がーーー」

「Ｂクラス山本が受けます！　試獣召喚（サモン）！」

「同じく入江が受けます！　試獣召喚（サモン）！」

「ちっ！　近衛部隊・・・・・・」

にしても、一応代表だからとはいえこんな奴を本当に守りたいとは近衛部隊も思っていないだろう。

「は、ははっ！　驚かせやがって！　残念だったな！　お前らの奇襲は失敗だ！」

まっ、目的は達成したからいいんだけどね。
ここで話は変わるが教科の先生についての説明をしようと思ったけれど、明久がやってくれてるので任せよう。（知りたい人はバカとテストと召喚獣第一巻２１９ページを見てね！）

ダン、ダンッ！

僕らの勝利への最後のステップ

室外機が止められているため熱気がこもった教室。涼を求めるために開け放たれた窓。
そこから康太と保健体育の担当教師、大島先生がＢクラス内へ着地。

「・・・・・Ｆクラス。土屋康太」

「き、キサマ・・・・・・！」

「・・・・・Ｂクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムッツリィニィーッ！」

僕と明久達が道を塞いでいるため根本に逃げるのびる方法は康太に勝つことのみ。

「ーーー試獣召喚（サモン）」

『Ｆクラス　土屋康太　ＶＳ　Ｂクラス　根本恭二
保健体育　４４１点　ＶＳ　２０３点』

さらに康太は鬼畜とも言えるほどに腕輪の能力の『加速』を使い、根本の召喚獣を
惨殺した。

これにより、Ｂクラス戦は幕を降ろした。

第八問　根本と奇襲と怒りの明久（後書き）

次回　手紙と最終決戦と卑怯者の末路

第九問　手紙と最終決戦と卑怯者の末路（前書き）

最近とくに自分に文才が無いと思えてきます。

だれか良い文の書き方を教えてください！

第九問　手紙と最終決戦と卑怯者の末路

問　以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大要素を全て書きなさい』

姫路瑞希と氷花紫苑の答え

『？　脂質　？炭水化物　？タンパク質　？ビタミン　？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さんと紫苑君。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖　？塩　？水道水　？雨水　？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経という、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい・・・・・』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

「明久　随分と思い切った行動に出たのう」
明久に秀吉がそんなことを言っている。
「うぅ・・・・・痛いよう、痛いよう・・・・・・」
「まあコンクリートの壁を素手で壊したんだから当たり前だね」
「なんとも・・・・・・お主らしい作戦じゃったな」
「で、でしょ？　もっと褒めてもいいと思うよ？」
「後のことを何も考えず」
「自分の立場を追い詰める、素晴らしい作戦じゃな」
僕が言った後に秀吉が続く。
「・・・・・遠まわしに馬鹿って言ってない？」
よく気がついたね。百点だよ！
「ま、それが明久の強みだからな」
雄二が明久の肩を叩きながら言う。
でも、馬鹿が強みって、どうよ？
「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「・・・・・・・・」

さっきと打ってかわっておとなしい根本。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に周りがざわつく。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」

『なるほど』

『たしかにな』

その一言ですぐに静まる。ここまで自分たちを導いてくれた雄二を皆が信頼している証だ。

もちろん僕もね。

「ここはあくまで、通過点だ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

「・・・・・条件とはなんだ」

力なく聞く根本。

「条件？　それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

今の発言は一歩誤れば腐女子とかが好きな世界に・・・・・・

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

それには恐らくここにいる殆どの人が同じことを考えていただろう。

「そこで、おまえらＢクラスに特別チャンスだ」

雄二の取引が始まる。

「Ａクラスに行って試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意志と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・・・それだけでいいのか？」

雄二にしては意外と簡単なことにしたんだな。

「ああ。Ｂクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

雄二が取り出したのは先ほどの女子用の制服。さすが雄二。思いっきり個人的感情がはいってるぜ☆

「ば、馬鹿なことを言うな！　この俺がそんなふざけたことを・・・・・！」

残念だが根本よ、君に逃げ場は無いんだよ！

『Ｂクラス全員で必ず実行させよう！』

『任せて！　必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

さすが根本、まるで信頼がない。

「んじゃ、決定だな」

「くっ、よ、寄るな！　変態ぐふぅっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

うんうん。言い光景だね。僕も一発殴りたいけど。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

何やら明久が捜し物をがあるような仕草で根本の制服を脱がしていく。

何かあるのか？

「う、うぅ・・・・・」

こ、これはチャンス！

「ふんっ！」

「ぐぼぁっ！」

一発土手っ腹に決めておいた。これでスッキリ。

この後の根本の女装は僕からすれば悪趣味以外の何者でもないように見えた。

因みに女装根本の写真集『生まれ変わったワタシを見て！』が、近日発売するらしい。

制服を脱がしている時にチラッと見えたあのラブレターらしき手紙は姫路さんの物なのかな？

自宅・・・

「へぇ～それでBクラスにも勝った訳ね」

「そゆこと」

「じゃな」

今は夕食を三人で食べているところだ。

「にしてもまさかFクラスがここまで来るとは思わなかったわ。それとは別に気色悪い物を見てしまったけど」

そりゃ思わないだろう。何たって最下位クラスが四段階上のBクラスに勝利するなんて。

気色悪い物というと女装した根本だろうか？

「そうなると次は私たちAクラスに攻め込むのかしら？」

「悪いけどここまでだよ。しゃべれるのは」

「教えてくれないの？」

「ッ！！」

まさか上目遣いで聞き出そうとするとはッ！

「ダメじゃよ姉上。これは戦争なんじゃから。教えられんものは教えられんのじゃ」

助かったよ秀吉。

「そうね。戦争だもんね。仕方ないわね」

意外とあっさり引き下がったな。

「ところで、約束は忘れてないわよね？」

「もちろんだよ」

優子は勝ったら僕に何をお願いするんだろう？

「紫苑は私に何をお願いするつもりなの？」

「そ、それは・・・・・お楽しみってことで」

僕と付き合って欲しいってお願いするつもりだ。

なんて言えるわけないでしょうが！

「ワシの予想では二人とも同じことを考えておるのではないかの？」

まさか、ね。

「だったらうれしいけどね」

「まったくだな」

はっはっは、と笑って夕食の時間は過ぎる。

現在それぞれが入浴の時間です。

「紫苑。お風呂空いたわよ」

「わかった」

優子がお風呂から出てきて次は僕の番だ。

結局部屋割りは僕と秀吉の共同部屋になったんだけどね。

勉強を止め、僕は着替えを持って脱衣所に行く。

さて、二日後はＡクラス戦だ。
雄二曰くＡクラス戦は一騎打ちで行うらしい。僕も一応何か考えておかないとな。
考え事をしながら服を脱いでいく。
だが僕はこの時気づかなかった。
作戦を考えていたせいである物を見落としていたことに・・・・・・

「うーん。なかなか思いつかない、な・・・・・・」

「えっ？」

アレ？

おかしい。何がおかしいかって、そりゃ・・・・・・

「えっと・・・・・・何で紫苑が・・・・・・？」

何故か全裸の優子さんが目の前にいたからだよ。

うん。そっか。これは幻想だな。僕が自分でも気がつかない間に全裸の優子が見たくて勝手に妄想してしまったんだな。そうだ、そうに違いない。

すぅー、ハァー

一度目を閉じ、深呼吸をして再び目を開ける。フッ、これで万事解決・・・・・・・

「「・・・・・・・」」

ダメだ優子がまだ目の前にいる。くそッ！　最近の妄想ってのはタチが悪いな！」

「妄想じゃ、ないんだけど・・・・・・・」

「へっ・・・・・・・？」

いつの間にか口に出していたようだ。

でも、妄想じゃないんだとしたら、色々何故こうなったのか考える必要性が出てくるな・・・・・・・

まず、何で優子がここにいるのかだな。僕はさっき確実に優子の声を聞き、空いてるということを知り、ここに来た。十年以上幼なじみをやっている僕が言うんだからその点は間違いないだろう。だとしたら何でまだここにいるんだ？　一緒に入りたかったから？

いや、それは絶対にない。僕と優子は付き合っている訳じゃないんだし・・・・・・・

それに先ほどの反応から優子が自らこのような行為をしたとは考えにくい。

なら何故、一体誰がこんなことを・・・・・・・！！

一人だけいる！　今この状況下でこのような犯行が可能な人物が、

その名は・・・・・・・

木下秀吉ただ一人だ！！

秀吉なら今ここに住んでいてこの犯行は可能。さらに先ほどトイレに行ってくると言ってまだ戻ってきていなかったし。身近に声真似ができる人物の一人だ。
それに秀吉は最近僕や優子を弄って楽しんでいるし。
なるほど、これは全て秀吉の犯行だなそれに脱衣所の外から何やら人の気配がするし。
しかもよく脱衣所を見渡せば優子の着替えが置いてあるし。考え事をしていたとはいえ、これでは完全に僕が優子の裸を見に来た変態になるじゃないか。
やってくれたな秀吉!!
これじゃあ僕に残された道は・・・・・死、あるのみじゃないか!!!!

ここまで僅か二秒。

「えっと、優子」

「な、何？」

「き、綺麗な身体だね」

ここにきて僕はセクハラ発言をしてしまった。

「キャアァァァァ!!」

そこで僕の意識は途絶えている。

2日後の朝、Fクラス・・・

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能と言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

壇上の雄二が聞いたことのないようなことを言った。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

なんだかこっちまで照れてくるな。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねぇんだーっ！』

こうやって気持ちを一つにできるFクラスが僕は好きだ。

「皆ありがとう。そしてのこるFクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

するとクラスがざわめき出す。

『どういうことだ?』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二の一言でクラスが静まる。

「やるのは当然俺と翔子だ」

まあお互いに代表同士だし、そうしないと格好がつかないし、打倒だろうな。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなぁぁっ!?」

明久が雄二に対して言い終わる前に雄二が明久に対してカッターを投げつける。

雄二、時たま僕は雄二が明久のことを友達と思ってるかどうかが気になるんだ。

「次は耳だ」

おいおい。

「まぁ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば

勝ち目はないかもしれない。だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？　まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

でも、雄二の見事な作戦とFクラスの皆で勝ち進んできている。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ちは揺るがない」

Fクラスをここまで導いてきた雄二の言葉だ。誰も否定などしない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおぉーーーっ！！』

Fクラスの皆が心から叫ぶ。

「さて、具体的なやり方だが・・・・・・一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？　何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史は暗記科目だからきちんと暗記していればどうこうなる、という訳じゃないだろうな。相手が相手だし、雄二のことだから何か秘策があるはずだけど。

「ただし内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の

上限あり、召喚獣の勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生レベルの上限あり。つまり一問のミスすら許されない。

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？　そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？　いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「？？　それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとか？」

「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

確かに僕も気になるから早く言って欲しい。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

改めて雄二が口を開く。

「俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツハ確実に間違えると知っているからだ」

「それは一体どんな問題なんだい？」

「その問題は――――『大化の改新』」

「大化の改新？　誰が何をしたのか説明しろ、とか？　そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純にというと――――何年に起きた、とかかのう？」

「おっ。ビンゴだ秀吉。おまえの言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

たしか６４５年に起きたんだよね？

「大化の改新が起きたのは、６４５年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

ふう。当ってて良かった。でも明久がしめじめとしてるのは見なかったことにしておこう。

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

まあその作戦は理解できたが・・・・・・。

「あの、坂本君」

「ん？　なんだ姫路」

「霧島さんとは、その・・・・・・仲が良いんですか？」

うんうん。名前で呼んでいる時点で怪しいよね。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙えぇっ！」

「なっ！？　なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！　Ａクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？　それにだったら紫苑だって木下姉弟と幼なじみじゃないか！」

な、何！？　雄二、この状況で君は僕を巻きこむのかい！？

『殺せぇぇっ！！』

「ちょっ、ちょっと待ってよ！？　幼なじみだからって怒られるようなことじゃないだろ！？」

「二人とも遺言はそれだけか？　・・・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むのもだ」

「了解です隊長」

まあいざとなったら窓から飛び降りればいいかな。

「あの、吉井君」

「ん？　なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんや木下さんが好みなんですか？」

おっ！　この展開は。

「そりゃ、まあ。美人だし」

「・・・・・・・・・・・・」

「え？　なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢をとるの！？　それと美波、どうして君は教卓なんて危険なものを投げようとしているの！？」

これで戦力が一人減ったな。

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

「む。秀吉は雄二や紫苑が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？　男である雄二に興味があるとは思えんじゃろうが。それに紫苑はワシら姉弟と両親共々信頼しておるし大丈夫じゃ」

改めて言われるとちょっと照れる。

「むしろ、興味があるとすれば・・・・・・」

「・・・・・・そうだね」

皆の視線が姫路さんに集中する。
あれ？　でも霧島さんは雄二が・・・・・・・
そうこうしているうちにＡクラスとの交渉に。

Ａクラス前・・・

「一騎打ち？」

「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎打ちを申し込む」

もう恒例となった宣戦布告。僕らは今、雄二、明久、康太、秀吉、僕、姫路さんというＦクラス首脳陣勢揃いで来ていた。
そして我らがＦクラスの交渉の相手を務めるのが優子である。

「うーん、何が狙いなの？」

「もちろん俺たちＦクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

優子は頭がキレる。学年でもトップファイブに入るほどの実力者だ。
だがそれは雄二も承知の上のはず。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？　何の問題もなし。作戦を何も考えずにただ突っ込んでくるだけだったし」

いくら挑発に乗ったとしても作戦も何も無しに感情に乗せられるようでは小山さんは代表としてまずいと思う。

「では、Bクラスとやり合う気はあるか？」

「Bクラスって・・・・・昨日来ていたあの・・・・・・」

はい。あの卑怯・変態・女装趣味と、三拍子揃った外道のことだよ。

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「確かBクラス戦とDクラス戦は『和平交渉にて終結』ってなっているんだっけ？　だからまだ試召戦争しかけられる。もし一騎打ちを断ったら二クラスの矛先をこっちに向けて戦争や回復テストで体力を消耗させるってことね？　仕方ないわね、何か秘策があるんでしょうし、その提案を受けるよ。ただし・・・・・」

「ただし？」

「こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ。そしてその五回の内の一回に私と紫苑の対戦を組み込んで欲しいな」

「紫苑との？」

「そうよ」

雄二が考え込む。悪いけど・・・・・・

「雄二。僕からもお願いだ」

「うーん。まあいいだろ。もともと紫苑は出すつもりだったしな」

「じゃ、決定ね」

そこから交渉は進んでいき、簡単にまとめると・・・・・・

・　対戦は一騎打ちが五回戦で三勝したクラスの勝ち

・　五回の内三回こちらが教科を選択し、二回はＡクラスが選択する。

・　そして、負けた方は何でも一つ言うことを聞く。

（多分雄二と僕だけ）

午前１０時　Ａクラス内・・・

「では、両名共準備は良いですか？」

立会人として着いているのはAクラス担任の高橋先生。
Aクラス担任なのだから相当頭が良いのだろう。

「ああ」

「・・・・・問題ない」

「それでは一人目の方、どうぞ」

そしてAクラスとFクラスの戦いが幕を開ける。

第九問　手紙と最終決戦と卑怯者の末路（後書き）

次回　　思いと願いと最終決戦テイク２

次回予告を度々忘れてすみません。

第十問　思いと願いと最終決戦テイク２（前書き）

すみませんが、こちらの都合により今回バカテストは省略させていただきます。

更新遅れてしまいすみませんでした。

第十問　思いと願いと最終決戦テイク2

「それでは一人目の方、どうぞ」

「私から行きます。科目は物理でお願いします」

相手は佐藤さん。この5対5の勝負に出てくるということは相当な実力者だろう。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え!?　僕!?」

まあ他の誰かを出すよりは観察処分者で召喚獣の操作に慣れている明久が適任だろう。
生け贄としても・・・・・・

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

雄二、君はそこまで明久のことを信頼しているんだね。

「ふぅ・・・・・・やれやれ、僕に本気を出せってこと?」

本気?　まさか僕が知らない明久の真の力があるというのか!?

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか?』

『いや、そんな話は聞いたことはないが』

『いつものジョークだろ？』

「吉井君、でしたか？　あなた、まさか・・・・・・」

対戦相手の佐藤さんが何かに気づいてしまったかのように戦く。

「あれ、気づいた？　ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

明久はそう言い終わると袖をまくり、手首を振る。

「それじゃ、あなたは・・・・・・！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――――」

大きく息を吸い・・・・・・

「――――左利きなんだ」

言い放った。少しでも期待した僕は何なんだろ・・・・・・

『Ａクラス　佐藤美穂　ＶＳ　Ｆクラス　吉井明久
物理　３８９点　ＶＳ　６２点　』

「このバカ！　テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！　フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

「よし。勝負はここからだ」

「ちょっと待った雄二！　アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？　何ソレ？　食えんの？」

「では、二人目の方どうぞ」

「・・・・・・・・・・・・（スック）」

康太が立ち上がる。

「じゃ、ボクが行こうかな」

あ、あれは工藤さん！　僕の知り合いの中で保健体育が特化して得意なこの二人が戦うなんて。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

自己紹介をする工藤さん。まあ僕と秀吉は既に友人だが。

「教科は何にしますか？」

「・・・・・・・・・・・保健体育」

Ｆクラスのリーサルウエポンのムッツリーニこと土屋康太はＡクラ

スの猛者を超えられるのか？

「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね？」

さすがにライバル的な位置に存在する康太のことは調べてあるのか。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？　・・・・・キミとは違って、実技で、ね♪」

わあ！　色々と問題発言！

「そっちのキミ、吉井君だっけ？　勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えようか？　もちろん実技で」

明久、あんなにときめいた顔をしていたら工藤さんにばれるよな。

「フッ。望むところ――――」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！　永遠に必要ありません！」

「・・・・・・・・・・」

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しい顔をしているんだが」

「なんて残酷なことを」

「紫苑君はどう？」

ここで僕に振ってくるとは思ってなかったからな、なんて答えよう・・・・・・

「えっと、その、そういうことはその、好きな人とするべきだよ／／」

やべ、顔が赤いな。

「紫苑君顔赤いよ？　かわいいなぁもう」

「うぅ・・・・・・」

困った。完全に工藤さんのペースだよ。何とかして話を逸らさなくては。しかもなんか優子がもの凄い形相をして僕をにらんでるんだよなぁ。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はーい。試獣召喚（サモン）」

「・・・・・・・・・・・・試獣召喚（サモン）」

先生のおかげで助かった。

さて、二人の召喚獣は康太がクナイを持った忍者の姿で工藤さんの召喚獣は巨大な斧を持っていて、しかも腕輪まで装備していた。だがそれは康太だって同じ。これはどちらが勝つか解らないんじゃないか？

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

それと同時に康太の召喚獣目掛けてジャンプする工藤さんの召喚獣。
するとその召喚獣は異常な速さで降下し、康太の召喚獣目掛けて斧を振る。

「ムッツリーニっ！」

「・・・・・・・・・・・・加速」

だがその攻撃は空を切るだけで康太の召喚獣には届かない。
そしていつの間にか攻撃の射程圏外へ。

「・・・・・・・え？」

工藤さんの戸惑う顔。

「・・・・・・・・・・・・加速、終了」

康太がつぶやいた瞬間に工藤さんの召喚獣が倒れた。

『Ａクラス　工藤愛子　ＶＳ　Ｆクラス　土屋康太
保健体育　４４６点　ＶＳ　５７６点　』

５７６点かぁ。僕の得意科目でもそこまではいかないなぁ。
さすがにムッツリーニのあだ名は伊達じゃないということか。

「そ、そんな・・・・・・！　この、ボクが・・・・・・！」

膝をつく工藤さん。相当ショックだったんだな。

「・・・・・・・・・・・・またいつでも相手になる」

おお。康太が工藤さんに言った言葉は思いの外工藤さんに効いたみたいで。

「次は負けないからね！　ムッツリーニ君！」

その後は何も言わずに戻ってくる康太。
何だか格好良く思えた。

「では三人目の方、どうぞ」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

ここで姫路さんが投入される。体調不良でなければ学年次席の座もとれていたであろう
才女だ。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスからは久保利光。現、学年次席だ。

「やはり来たか、学年次席」

「姫路さん。勝てるかな？」

「ここが一番の心配どころだな」

「大丈夫だよ。二人とも」

「「え？」」

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

久保君が答える。

「ちょっと待った！　何を勝手に――――」

明久がそれを遮る。

「構いません」

「姫路さん？」

明久が心配そうに姫路さんを見ている。

「総合科目は自分の全てが出る科目なんだよ。だから姫路さんはこのFクラスでの全てをここで出し切るつもりなんだ」

「なるほど」

僕が明久と雄二に説明する。

「紫苑、さっきの大丈夫っていうのは・・・・・・」

「さっきも言ったけど、総合科目は自分の全てが出る教科。つまり、姫路さんがFクラスのことをどう思って努力したかが出る。簡単に言えば思いの力だよ。そして姫路さんの思いは・・・」

「それでは・・・・・・」

高橋先生が召喚の承認をする。

「「試獣召喚(サモン)！！」」

『Ａクラス　久保利光　ＶＳ　Ｆクラス　姫路瑞希
総合科目　３９９７点　ＶＳ　４４０９点』

「多分、ここにいる全ての人の中で、誰よりも強い」

「「！！」」

二人も驚きを隠せないようだ。

「ぐっ・・・・・・・！　姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ・・・・・・・？」

「・・・・・・私、このクラスが好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいるＦクラスが」

「Ｆクラスが好き？」

他の人には理解できないだろう。学年の最下層で設備も最悪なＦクラスが好きだなんて
言葉は。

「はい、だから決めたんです。かんばろうって！！」

姫路さんと久保君の召喚獣の戦闘が始まる。
まず久保君の召喚獣が魔法の光弾を放つ。
しかし姫路さんの召喚獣はロイヤルガードでそれを防ぐ。（ｍｉｘｉの姫路さんの召喚獣の必殺技です。）
効かないと見るや久保君の召喚獣が腕輪の能力、『召喚』を使い、魔神を喚ぶが点数差が響き姫路さんの召喚獣のキングブレード（ｍｉｘｉの以下省略）に粉砕される。
その後、空中で三回転して久保君の召喚獣を切り捨てる。
勝負ありだ。

「これで二対一です。四人目の方、どうぞ」

高橋先生のポーカーフェイスが崩れた。そりゃそうだろう。自分が担任の学年の成績上位者だけが集められたクラスが成績が低い者ばかり集めたクラスに負けているんだから。

「紫苑。来なさい」

「ああ。決着をつけようか」

そして僕と優子の番が来た。
二人で向かい合うように立つ。

「あっ、ちょっと待って貰える？」

「えっ？　別に良いけど？」

優子が突然待ったをかけた。なんだろう？

「秀吉、Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、だれじゃ？」

小山さんというとCクラス代表で根本の彼女だったかな？　でもそれが何の関係があるんだ？

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっち来てくれる？」

「うん？　ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

どうするんだろうね？

Aクラス前廊下・・・

「姉上、紫苑との勝負は・・・どうしてワシの腕を掴む？　悪いがワシは姉上を恋愛対象には見れんぞ？」

「そんなおふざけはどうでも良いのよ。それよりアンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？　どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなぁ？　それと土屋君の店で売られていたこの写真は何よ？」

「はっはっは。前者はじゃな、姉上の本性をワシなりに推測したもので、後者は紫苑がやって欲しいって言っておったから姉上の姿をしてワシがやってあげたんじゃ。良かったのう姉上。紫苑は姉上のことを関節技をかけてくる恐ろしい幼なじみだと思ってなく・・・・・あ、姉上っ！　ちがっ・・・・・・！　その関節はそっちには

曲がらなっ・・・・・・・！」

Ａクラス・・・

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ」

「さ、さいですか」

秀吉、何かやらかしたな。後で関節を戻してあげないとな。
優子が再び僕の正面に立つ。

「科目の選択権はこっちにあるけど、何にしたい？」

「任せるよ」

ここでは向こうに選択権がある。でも、多分優子なら・・・・・・

「それじゃあ、総合科目でお願いします」

やっぱり。さっきの姫路さんの思いを見たら総合科目での勝負になるだろうね。

「今なら、姫路さんが言っていた『人の為に一生懸命な皆がいる、Ｆクラスが好き』って言葉も、わかる気がする」

「優子・・・・・・」

「でも、私もこのＡクラスが好きなの。設備が良いとか、そんなの

は関係なく、大切な友達がいるＡクラスが」

優子もそういうことを人前で言うようになったんだな。ちょっと感動。

「それだったら僕も二人と同じだよ。そしてこの戦いに出る以上、負けるわけにはいかない！」

「それこそ私だって同じよ。それにこっちは、もう後がない」

「そうだ。だから僕も優子も・・・・・・」

「「負けるわけにはいかない！」」

二度同じ台詞を言っているけど、もう一度言う。負けるわけにはいかない！

「約束なんて今はどうでもいい！」

「そんなの忘れて、全神経をあなたに勝つためだけに使うわっ！」

「いくぞ！」

「「試獣召喚（サモン）！！」」

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　氷花紫苑
総合科目　４４１０点　ＶＳ　４４１０点』

『す、すごい！』

『さっきの姫路といい、この二人といい、なんて点数だ！』

『三人とも霧島翔子に匹敵する点数だぞ！？』

いろんな言葉が飛び交っている。が、そんなのは今どうでもいい。

「さすがね」

「そっちこそ。じゃあ、いくよ！」

僕は召喚獣に光弾を放つモーションをとらせる。

そして光弾を放つがあっさり避けられる。優子の召喚獣が接近してくるが構わず武器を取り出す呪文を唱えさせる。

「それ、五秒ほど掛かる上に動けないんでしょ？」

「でもそのスピードとこの距離なら問題ないよ」

「確かにこれが。トップスピードならね！」

「っ！？」

いきなり優子の召喚獣のスピードが上昇した。

油断させるためにあえて初めから本気で来なかったのか！

「くっ！」

ぎりぎりでかわすが、顔に若干こすれたが問題ない。

「うおぉぉ！」

武器を取り出し、斬りかかる。
何度も槍剣と大型の槍がぶつかり合っていると徐々に優子の召喚獣が押され始める。

「流石に、召喚獣の扱いに長けている分強いわね。だったらこっちは奥の手を使わせてもらうわ」

奥の手とは恐らく腕輪の能力だろう。
すると予想通り優子の召喚獣の腕輪が光り、同時に槍も輝き始めた。

「いくわよっ！」

「昔、ある大佐が言っていたよ。当たらなければどうということは無い！　ってね」

僕の召喚獣は突き出された光り輝く槍を少しだけ右に避けてかわし、優子の召喚獣にすれ違いざまに斬りつけて・・・・・・

『Ｆクラス　　氷花紫苑　　総合科目　　１６８３点』

「ぐうっ！？」

召喚獣の点数が減ったと同時に僕の身体に穴を開けられたかのような激痛が数カ所から同時にきている。
何だ！？　何が起きたんだ！？

「当たらなければ、ねぇ？」

「雄二、今いったい何が起きたの！？　紫苑の召喚獣は明らかに槍

を避けていたよね！？」

「確かに、槍は避けていたように見えるが、俺には解らん。まあ、一つだけ解るのは木下姉の召喚獣の腕輪の能力のしわざということだ」

明久と雄二の会話が聞こえる。

僕の召喚獣は突き出された槍による攻撃には当たっていないはず。

ならどんな能力だ？

『力』とかだろうか？　でもそれの場合数カ所から来る痛みは説明がつかない。こういうときにはフィードバックが役に立つんだよな。なら『スピード』だろうか？　だがスピードなら今も使い、僕の召喚獣に対して攻撃を仕掛けてきているはず。じゃあ何だ？　試して見るか。

「これで、どうだっ！？」

持っていた槍剣を回転させて床すれすれで投げつける。

「当たらないわよ」

だがあっさりとジャンプして避けられる。が、これが狙いだ。

「えっ！」

なげられた槍剣を異次元に戻し、光弾を放つモーションをとらせる。

「空中だったら避けられないでしょ？」

「くっ！」

光弾を放つ。放った光弾はまっすぐ優子の召喚獣の方へ。
これが決まればぼくの勝ち。

「負けるわけにはいかないって言ってるでしょ！？」

すると優子の召喚獣の点数が減り、いきなり優子の召喚獣の前に八本の槍が出現し、その槍が回転して全ての光弾をはじく。
そして何事も無かったかの様に着地する。

「それがさっきのダメージの正体か」

「そうよ。私の召喚獣の腕輪の能力は『槍を八本に増やして好きなタイミングで結合と分離を行う』ことよ。まあ結合と分離を行うときには点数を消費するけど」

つまり、先ほどは僕の召喚獣が避ける瞬間に分離してダメージを与えたということか。
しかもその槍は宙に浮いているから接近戦はかなり不利だ。

「辛いな」

「どんどん行くわよ！」

優子の召喚獣が接近してくる。
とりあえず槍剣を構えさせ、防御させるが同時に別々の槍が別々のタイミングで突き出されるため防戦一方になり、どんどん点数が減らされていく。
どうやら結合していると結合している槍の数だけ威力が上がるらしい。

「くっ！」

だけど、そう一方的にやられるわけにはいかないので、多少のダメージ覚悟で捨て身の攻撃に出る。

まず突き出される槍の間を見切り、槍剣を犠牲にすり抜ける。

だがやはり召喚獣だと生身の肉体とは勝手が違うため左肩に一発もらうが致命傷じゃないので腕は飛ばない。

懐に潜り込んでまず顔に一発、続いて腹に正拳突き。さらに一発フックをかまし、そのまま回転して回し蹴りを喰らわせる。

「くっ！　やってくれるじゃない」

『Ａクラス　木下優子　２４４７点』

ダメか。先ほど点数をかなり減らされたのと素手で攻撃したのが原因か。

点数差は約８００点。総合科目とはいえこれは辛い。

「今度こそっ！」

言ったとたんに優子の召喚獣が槍を投げてきた。

何とか避けて、再び接近する。

「もう一発っ！」

残る槍は二本だけ、いけるっ！

「それは読んでるわ！」

拳を突き出そうとしている僕の召喚獣だがいきなり優子の召喚獣の周りにある槍が猛スピードで回転し始めた。

「やべっ！」

距離の問題で避けることができないのでギリギリ盾でガードする。
が、回転が強く盾は壊れ僕の召喚獣が吹っ飛ぶ。
なんとか壁にぶつかる前に回転して壁に立つような体勢になる。
だがそれと同時に優子の召喚獣が投げた全ての槍を回収し一つにまとめて突っ込んできた。
優子が槍を一つにして突き出そうとしている今しかチャンスはない！

「終わりにしよう！　優子！」

僕も腕輪の能力を使い左腕に白銀に輝く波動衝撃腕を（以後、白銀の腕とする）装備させる。
壁を蹴り、優子の召喚獣に突っ込む。

「そんな腕一本で、何ができるっていうのよ！」

そして優子の八本分の槍と波動衝撃がぶつかり合う。
点数差があるせいか、優子の方が押しているように見えるが、槍にヒビがはいっていく。
そのまま優子の召喚獣は後ろに押されていく。

「そんなっ！」

「うおぉぉぉ！」

ついに八本分の槍を破壊して優子の召喚獣の攻撃手段を全て奪った

が、先ほど肩にダメージを受けたせいで白銀の腕ごと左腕が吹き飛んだ。
激痛が走るけどチャンスは今しかないので逃すわけにはいかない。
右腕に光弾を溜めて・・・・・・

「くらえっ！」

「間に合って！」

優子の召喚獣に放った光弾は見事に命中し、優子の召喚獣を吹き飛ばす。

「やったよ雄二。これで僕らの勝ちだ！」

そんな声がＦクラスから聞こえる。

「そんな、届かなかったの・・・・・・？」

絶望したような顔で言う優子。
そんなことはないよ。

「いや、届いているよ。優子」

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　氷花紫苑
総合科目　５点　ＶＳ　０点　』

よく見ると僕の召喚獣の腹に槍が一本突き刺さっていた。
どうやら、破壊される直前に一本だけ分離させて僕の召喚獣で僕に見えないように死角を作って攻撃したらしい。

「僕の負け、だね？」

「これで二対二です」

宣言された後僕と優子は自分のクラスへ戻っていく。

「ごめん。雄二。負けちゃった・・・・・・」

「いや、あんなに良い試合を見せてもらったんだ。それにお前も全力で戦ったんだ、誰もお前を責めたりしない」

「紫苑、お疲れ」

明久がそう言って僕に近づいてくる。

「ありがとう。みんな」

「最後の一人、どうぞ」

「・・・・・・はい」

「俺の出番だな」

さて、この戦いに終止符を打つべくこの男が立ち上がる。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の言葉でAクラスにざわめきが生まれた。
『上限ありだって？』
『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』
『注意力と集中力の勝負になるぞ・・・・・・』
「わかりました。そうなると問題を用意しなければいけませんね。少しこのまま待っていてください」
先生が出て行った後、皆が雄二に駆け寄る。
「雄二、後は任せたよ」
「ああ。任された」
「・・・・・・・・・・・・・（ビッ）」
「お前の力には随分助けられた。感謝している」
「・・・・・・・・・・・・・（フッ）」
「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」
「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」
「はいっ」
「雄二、君は僕が出会った中で一番優秀な指揮官だった。ここまで

僕らを導いてくれてありがとう」

「こちらこそ、ここまで俺に着いてきてくれて礼を言う。」

「これからも、僕たちは雄二の兵隊だからね」

「じゃあ俺も、これからもお前らの指揮官だな」

「行ってらっしゃい」

「おう、行ってくる」

それぞれが言いたいことを言った。

視聴覚室・・・

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は１００点です』

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『・・・・・・はい』

『わかっているさ』

『では、始めてください』

黙々と問題を解いていく二人。
果たしてあの問題はあるのか？

《次の（　）に正しい年号を記入しなさい》

（　）年　平城京に遷都
（　）年　平安京に遷都
（　）年　鎌倉幕府設立
（　）年　大化の改新

あ・・・・・・！　あった！

「秀吉、これで・・・・・・」

「うむ、ワシらの卓袱台が」

因みに秀吉は雄二が出て行った後回収して関節を戻してあげた。

『システムデスクに！』

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うぉぉぉっ！』

明久の声と共に皆が叫ぶ。

《日本史勝負　限定テスト　１００点満点》

《Ａクラス　霧島翔子　　９７点》
ＶＳ

《Fクラス　坂本雄二　　５３点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

第十問　思いと願いと最終決戦テイク２（後書き）

次回　鉄人と敗者と勝者達の願い

私の独断で、総合科目での戦闘で腕輪を使うには３６００点以上を取る必要があるということにしました。
もう一つあります。工藤さんの腕輪の能力を身勝手ではありますが変更させていただきました。能力は『重力を操る』というのにしました。

第十一問　鉄人と敗者と勝者達の願い

問　次の（　）に正しい年号を記入しなさい。

『（　）年　キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『１５４９年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『降り積もる雪の中、寒さに震える君の手を握った１９９３年』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

「三対二でＡクラスの勝利です」

無情にも響き渡る高橋先生の声。

「・・・・・・雄二、私の勝ち」

「・・・・・・殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！　歯を食いしばれ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

姫路さんが明久を止めるために後ろから抱きつく。

明久、胸当たってるのに気づいて無いのかな？

「だいたい、５３点ってなんだよ！　０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だとーーー」

「いかにも俺の実力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！　アンタだったら３０点も取れないでしょうが！」

「それについて否定はしない！」

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！　なぜ止めるんだ姫路さんに美波！　この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

「・・・・・でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねぇ」

「・・・・・ところで、約束」

さてさて、霧島さんは何てお願いするんだろ？

「・・・・・・・・・・・・！（カチャカチャカチャ）！」

流石は康太早くも撮影の準備をしている。

まあ霧島さんには女好きという噂が流れて・・・・・・

そういえば霧島さんがいつだか雄二のことが好きみたいな発言をしていたような・・・・・？

「わかっている。何でも言え」

「・・・・・・それじゃーーー」

霧島さんが姫路さんの方を向き、雄二に視線を戻す。

そして小さく息を吸って、

「・・・・・雄二、私と付き合って」

言い放った。

やっぱり霧島さんは雄二が好きだったんだな。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「・・・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

諦めないってことは何度か告白してたんだな。

そんな強い思いを抱かせるなんて、雄二も隅にはおけないなぁ。

「その話は何度も断っただろ？　他の男と付き合う気はないのか？」

「・・・・・私には雄二しかいない。他のひとなんて、興味ない」

一途ですなぁ。

よし！　僕はこの二人を全力で応援しよう。

「拒否権は？」

「・・・・・無い。約束だから。今からデートに行く」

「ぐぁっ！　放せ！　やっぱこの約束はなかったことにーーー」

デート、かぁ。いつか僕も優子とそういうことをしてみたいよ。

「はぁ」

思わずため息がこぼれる。

「さて、Ｆクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

この野太い声、まさか！

「あれ？　西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がＦクラスに補習についての説明をしようと思ってな」

ＴＥ☆ＴＵ☆ＺＩ☆Ｎ！？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるようだ。
これから一年、死にものぐるいで勉強できるぞ」

『なにぃっ！？』

優子ｓｉｄｅ

なんとか試召戦争には勝ったわね。
何やらＦクラスの方は担任が西村先生に変わるらしいわね。ご愁傷様。
でも、これで私は紫苑に一つだけ願いを言える。
ここで告白すれば約束だからということで紫苑と付き合うことができるかもしれない。
でも、紫苑には好きな人がいるかもしれない。
それに私は自分に自信がない。
姫路さんみたいに胸は大きくないし、
島田さんみたいにスレンダーではないし、
代表みたいに『好きだ』って本当の気持ちを言えないし、
愛子みたいに男の子が喜びそうなことは言えない。
ダメだな、私。欠点だらけね。
よく感じる。私と紫苑じゃ釣り合わないんじゃないかって。
その度に悲しい気分になる。どうすれば良いんだろ？

「それで、優子の願いは何？」

声を聞いて顔を上げるとぐったりとした秀吉を抱えている笑顔の紫苑の姿があった。

「何でも聞きますけど？」

「あっ、えっと、その・・・・・・」

言葉が詰まる。初めは付き合って欲しいってお願いするつもりだったんだけど、よくよく考えてみたら紫苑の気持ちを無視するわけにはいかないわよね？

「実は、その、まだ決まってないから持ち越しってことで良い？」

「おいおい。決まってないのに言い出したの？　まあ構わないけどね」

呆れたように紫苑が言う。

「じゃあ皆も帰ったみたいだし私達も帰りましょ？」

「あ、えっと、その、さ・・・・・・／／／」

紫苑が顔を赤らめて何か言いにくそうにしている。

「何か言いたいことがあるなら言ったら？」

「うん。じゃあ、さ、これから映画でも見に行かない？　二人で／／／」

「えっ！？」

えっ！？　これって所謂デートってやつ？　でも紫苑がデートなんて今まで無かったのに。
これって脈あり！？　でも、でも・・・・・・／／／／

「あはは、やっぱりダメだったかな？　うん。じゃあ、また「待って！」え？」

「その、いいよ。映画／／／」

「あ、そ、そうなんだ！　じゃあ、行こうか」

やった！　よし、何としてもデートにしよう！

「うん！」

この時、二人は初めてデートして気がつかないうちに手を繋いでいた。

第十一問　鉄人と敗者と勝者達の願い（後書き）

次回　ｍｉｓｓｉｏｎ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｂａｋａ　二人の暗殺者（盗撮者）

第一巻終了です。
これからも一巻終了ごとにアニメの話やオリジナルの話を組み込んでいこうと思います。

番外編　ｍｉｓｓｉｏｎ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ　Ｂａｋａ（前書き）

ＤＶＤ特典映像のものです。

次巻が発売され次第続きを投稿していきます。

番外編　mission impossible Baka

mission impossible Baka

実行不可能の指令を受け、頭脳と体力の限りを尽くし、これを実行する。

プロフェッショナル達の秘密機関である。

mission impossible Baka

製作　ムッツリ商会

食堂・・・

明久がカレーを食べている。

ムッツリーニが食券を買ったら、ＭＩＢと記されたアタッシュケースが出てきた。

「・・・・・・・・・・・・紫苑、任務。屋上へ」

「了解」

二人は屋上へ向かう。

屋上・・・

屋上でアタッシュケースを開けるとテープレコーダーと入って秀吉の写真が入っていた。

明久は食堂でカレーを食べている。

「おはよう。ムッツリーニ君、紫苑君。その人物は文月学園二年Ｆクラス、木下秀吉。
校内ランキングにおいて男性部門、総合部門、共に一に輝いたばかりか、新設された秀吉部門においてまで一位を獲得した超絶的な人気を誇る人物である。
とあるルートの情報によると、組織票を含め、女性部門のおいても一位を獲得したといわれる要注意人物である。そこで今回君たちの使命はこの木下秀吉のお、お宝映像を入手して欲しいのだ。
例によって君たち、もしくは君たちのメンバーが捕らえられ、あるいはしばき倒されたり、全身の関節を外されて折檻されても当局は一切関知しないのでそのつもりで。
因みに、より良質な映像を取ってきた者にはその映像のレア度により報酬を渡すのでがんばってくれたまえ。
なお、このテープはお約束通り自動的に消滅する。
成功を祈る」

ドカァン！！

明久が食堂で耳を塞ぐ。

「・・・・・・・・・・・・任務了解！」

「任務了解だけど何か釈然としないなぁ」

そしてスーツを着たムッツリーニは屋上からバンジージャンプ！

「わざわざバンジーする必要はないかな」

紫苑は普通に校舎に入っていく。

文月学園とある廊下・・・

「「「～～～♪」」」

ドン！

「きゃあ！　ミルクでビショビショです～」

食堂で明久が興奮している。

「せっかく買ったクリームパンが～」

食堂の明久は興味がないようだ。

「これはシャワーを浴びねばならんのう」

食堂の明久が喜んでいる。

「・・・・・・・・・・・・チャンス到来」

離れて見ていたムッツリーニが言う。

「これはチャンスだな」

同じく紫苑が言う。

女子シャワー室内のロッカーの中・・・

「ここで待っていれば着替えに現れる。来た！」

だが入って来たのは女子二人。

「・・・・・・・・・・ちっ、ターゲットは秀吉のみ、雑魚に用は・・・・・・ん！？」

女子二人はどんどん服を脱いでいき、下着だけになった。

食堂の明久が顔を赤くしている。

「着替えどうしましょう？」

「体操服でいいんじゃない？」

食堂の明久が顔を赤くしてカレーを食べまくる。

ムッツリーニの鼻から鼻血が出ている。

『ムッツリ商会の掟は非常である。作戦実行のためには情けを捨て、

どんな苦難も・・・・・・』

「そうですよね。洗わないと匂いがついちゃいますよね？」

「しっかし、瑞希って本当に胸が大きいわよね？」

「そ、そんなことないですよ。普通です」

食堂の明久が顔を赤くしてカレーを掻き込む。

「何よ？　それじゃあ私は普通じゃないって言うの？　そんな大きな物を自慢げに下げてて、どこが普通よ？」

「自慢じゃありませんよ。これけっこう面倒なんですよ？　大きいとブラの種類もないし」

ムッツリーニの鼻から滝のように鼻血が出る。

「小さいのだって種類ないわよ？」

「そうなんですか。お互い大変ですね」

「ウチのは大変小さいって言うの！？」

「きゃあ！」

島田さんが姫路さんの胸をもむ。

それと同時に姫路さんのブラがとれる。

男が見たら大喜びだ。

「おかわり～！！」

食堂の明久が叫ぶ。

「～（ハート）」　↑な会話

「美波ちゃんだって」

「きゃあ！」

今度は立場が逆転。

そして島田さんのブラもとれる。

「～（ハート）」　↑な会話

我慢の限界のムッツリーニの鼻血がついにロッカーの中を埋め尽くし・・・・・・。

ゴゴゴゴ・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・だあは！？」

「「きゃあーーー！！！」」

ロッカーからムッツリーニが飛び出てきた。

秀吉シャワー室・・・

「なんじゃ？」

（バカだな康太。秀吉シャワー室の存在を忘れて女子シャワー室へ行くなんて・・・・・・・）

「ごちそうさま」

食堂の明久が言う。

紫苑ｓｉｄｅ

さて、秀吉の生着替え映像を入手して、僕はそれなりの報酬を貰ったわけだが・・・

「す、凄い・・・・・・」

僕が報酬として貰ったのは優子のかなり際どい写真だ。
いったいどうやって盗撮してるんだろう？
見つけたら三分の三殺しにしてやるかな。
しかし、僕はこの写真でかなりやばくなれそうだな。
まあ僕は健全な男子高校生が持っている物を持ってないからなぁ。
そういうものに対しての免疫がないみたいだな。
とにかくこの写真を早く家に保管しなくては！
優子に見られたらどうなるかわからな「何の写真見てるの？」「あっ！？」

突然優子が現れて僕が持っていた優子の写真を全部盗られてしまった。

「・・・・・・」

優子が写真を見て呆然としている。

今の内に逃げよう。

「な、何よこれー!?　紫苑ちょっと待ちなさい！」

捕まったら死ぬ！

その後結局捕まり写真は全部没収。そして臨死体験をした。

優子ｓｉｄｅ

何だったのよさっきの写真。

でもあれはあれで嬉しいかも。紫苑がちゃんと女に興味があるって解ったから。

だっていままで紫苑の家のどこを探しても健全な男子高校生が持ってそうな物が出てこないから女に興味が無いのかと思うときもあったわよ。

それと、アタシとあなたがいつか恋人になったらもっと凄いことし

てあげるわよ。

番外編　ｍｉｓｓｉｏｎ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ　Ｂａｋａ（後書き）

次回　デートと暴徒とラブレター

第十二問　デートと暴徒とラブレター

文月新聞

二年Ｆ組　吉井明久のコメント

僕が小さな頃、祖父がよくこう言っていました。

『明久、泥棒でも何でもいい。一番を目指して精進しなさい』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげたいと思います。

爺ちゃん・・・・・・

これで、いいかい・・・・・・？

以上

【女装が似合いそうな男子ランキングＮＯ、１】

【こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキングＮＯ、１】

【モテそうな男子（同性愛編）ランキングＮＯ、１】

の三冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

＊尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下秀吉さんは審議の結果、アンフェアであるとの結論に達した為除外されています。

二年Ｆ組　氷菓紫苑のコメント

えっと、なんと言ったら良いのかわかりませんが、とりあえずありがとう。

以上

【彼氏にしたい男子ランキングＮＯ、１】
【万能な男子ランキングＮＯ、１】
【漫研で発売されているＢＬ同人誌に使用された男子キャラＮＯ、１】
の三冠を達成した氷花紫苑さんからのコメントでした。

＊尚、ＢＬ同人誌に使用された男子キャラにノミネートされていた木下秀吉さんは使用すると、ＮＬになるなど氷花紫苑さんと共に使用する度にかなりピーーーなことになる為除外されました。
そして、現在氷花紫苑さんと木下秀吉さんのＢＬ本？『ワシの婿になるのじゃ！』は好評発売中です。

何やかんやで映画館前・・・

「映画館なんて久しぶりね～」

「確かに最近来てなかったからな」

僕と優子は現在映画を見に来ている。

「あっ、明久たちだ」

「代表もいるわね」

すると映画館の中に明久、姫路さん、島田さん、霧島さん、黒こげの人？　の姿があった。

「そういえば彼らも映画を見に行くとか何とか言っていたな。そうだ！　せっかくだから姫路さんと島田さんとメルアドでも交換してきたら？」

「それもそうね。あの二人とは仲良くなれそうだし」

「とりあえず中に入ろうか？」

「うん」

僕と優子は映画館の中へ入り、僕は明久、優子は女子三人の元へ。

「明久はどの映画見るの？」

「正直言うと僕は見ないで節約したいんだ」

塩、水、砂糖が主食だからな。

「まあまあ、あの二人は明久と見たいからここに来ているんだし、一緒に見るのが普通だよ」

「でも何で僕なんだろ？」

「自分が好意を寄せられてるとは考えないの？」

それが事実なのに・・・・・・

「そんなわけないよ。二人が僕に好意を寄せてるなんて」

まあ彼は鈍感だからな。

「それに比べて紫苑は良いよなぁ」

「何が？」

「木下さんなんて美人とデートだなんて」

「デート：異性と待ち合わせて会うこと。また、その約束。この説明を聞いて何かわからない？」

君もデートをしているってことだよ。

「えっ？　てことは僕もデートをしているってこと!?」

「しかも両手に花だぞ」

「うおお！　そうか僕は今、デートをしているのか！　なら、映画程度の出費など！」

「そうだ、この程度の出費、どうということはないだろ？」

一応額を見てみると・・・・・・

一般１８００円
大学・高校生１５００円
小・中学生１０００円
幼児（３歳～）９００円
大金持ち７５８９０円
大地妻ＯＫ

イチャつくのは程々に

上の四行だけで十分だと思うんだけど？

すると女子たちが戻ってきた。

「優子ちゃん、翔子ちゃん、アドレスありがとうございました。これからよろしくお願いしますね」

「お互い相談しあえるから便利よね」

「こちらこそありがとね二人とも」

「・・・・・お互い恋はがんばろう」

「仲良くなれたみたいだね？」

「仲良くしていきたいわね」

「因みに優子はどの映画が見たいの？」

「う～ん、どうやら瑞希たちは『世界の中心で僕の初恋』を、代表は『地獄の黙示録：完全版』を見るみたいよ？　アタシも瑞希たちと同じにしようと思うんだけどいいかな？」

地獄の黙示録：完全版って3時間23分の長編だったような・・・・・

「うん。じゃあそれにしようか？」

「ええ！」

その後、明久たちと共に映画を見た。なかなか良いシナリオだったと思う。

翌朝、昇降口・・・

何やら今日は優子が先生に呼ばれてるらしいので一人早めに登校していた。
秀吉と二人で昇降口に着いたら明久と雄二が話しているのを見かけた。

「昨日はどうだった？」

「目が覚めたら、繋がれた牛が殺されるシーンだった」

なんでそんな映画が上映されているんだ？

「隙をみて逃げだそうとしたら、また電気ショックをくらって気を失い、目が覚めたらまた牛が殺されるシーンだった」

タイミングが悪い？

「本当に二回見たんだ」

「何やら随分と濃い内容を話しておるように聞こえるのう」

「あっ、秀吉に紫苑。おはよう」

「うむ、こちらこそおはようじゃ」

「同じくおはよう」

「おう、おはよう」

「さっきの会話の内容を聞く限りじゃ、僕たちは随分と幸せな時間を過ごしたんだな」

本当に、幸せな時間だったと思う。

「同感だよ。雄二、因みに続きは？」

「また起きて、再び逃げだそうとしたら、また気を失って永遠に牛が殺されるシーンで目が覚め続けるんじゃないかって強迫観念に襲われて、逃げられなくなった」

「つまり、永遠に映画の最初は見られないんだね」

「せめてもう少し興味のある物にすれば少しは楽しめただろうに」

「トラウマにならなければ良いがのう」

僕と秀吉も上履きを取り出そうと靴箱を開けると・・・・・・

「・・・・・・」

「ん？　どうしたんじゃ紫苑何か入っておったのか？」

「え？　ああ、これが」

ラブレターが入ってました。

「ほほう。お主はもてるからのう。雄二、明久、紫苑がラブレターを貰ったそうじゃぞ！」

えっ？　秀吉君、今僕を売った？
ならばとりあえず迎撃態勢を・・・・・って、あれ？　いつものように襲い掛かってこないぞ？

「そ、そうなんだ良かったね」

おかしい、いつもなら真っ先に襲い掛かってくるのに、それには秀吉も気がついたみたいだな。何かあるねこりゃ。

「と、とにかく早く教室行こうよ！　ＨＲ始まっちゃうよ！」

そう言って走り出す明久。隠し事下手だなぁ。

Ｆクラス教室・・・

「工藤」「はい」「久保」「はい」

淡々と出席確認がされていく。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

何も起きないから暇だなぁ。まあ国家機密情報局員がそんなことを

言ってはいけないんだろうけど。でも何かないかなぁ。

「坂本」「・・・・・・・・・・・・・・・・・・明久と紫苑がラブレターを貰ったようだ」

『殺せぇぇっ！！』

何か起きました。

「ゆ、雄二！　いきなりなんてことを言い出すのさ！」

「まあまあ、落ち着くんだ明久」

『どういうことだ！？　吉井がそんな物を貰うなんて』

『それなら俺たちだって貰っていてもおかしくないはずだ！　自分の席の近くを探してみろ！』

『ダメだ！　腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

『もっとよく探せ！』

『・・・・・出てきた！　未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ！？』

ラブレター一つでこの騒ぎ。まあ嫌いじゃないけどね。

「お前らっ！　静かにしろ！」

――――シン

さすが西村だあっさりこの場を静めるなんて。

「それでは出席確認を続けるぞ」

「手塚」　「吉井コロス」　「藤堂」　「氷花コロス」　「戸沢」
　「吉井コロス」

「皆落ち着くんだ！　なぜだか返事が『吉井コロス』と『氷花コロス』に変わっているよ！」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう！？　このままだとクラスの皆は僕らに殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」　「吉井コロス」　「布田」　「氷花マジ殺す」　「根岸」
　「吉井ブチ殺す」

西村、明久の言葉にも耳を傾けてあげなよ。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

「待って先生！　行かないで！　可愛い生徒を見殺しにしないで！」

明久必死だな。

「吉井、勘違いするな」

勘違い？　いったい何を勘違いするというのだろう？

「お前は不細工だ」

そういうあんたはホントに教師か？

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」

「授業は真面目に受けるように」

「先生待って！　せんせーい！」

そう言って西村先生は出て行き、明久は姫路さんと島田さんに手紙を見せるように脅迫されていた。とにかく雄二がまだ動いてないうちに逃走しておくか。

窓から・・・・・・

『逃がすなぁっ！　追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！　吉井と氷花を殺せ！』

『サーチ&デス！』

「そこはせめてデストロイで！」

飛び降りて校舎にもたれかかってラブレターを読もうとしたらそんな声が聞こえてきた。

明久、君に幸あれ。

さて、とりあえず読んでみるかな。

氷花紫苑さまへ

突然ですが、あなたのことが好きです。
こんな始まり方でごめんなさい。でも、これが私の本当の気持ちなんです。
私はずっと前からあなたのことが好きでした。
ある時、私のことを助けてくれたのを覚えていますか？
もしあの時あなたに助けられていなければ今私はここにはいないでしょう。
あなたはいつも自分のことは後回しにして人のことを先にしますよね？
とても優しい方だと思いました。
何でもできるあなたに私なんかがこんな手紙を送ってしまい困らせてしまったならすみません。
でも、今はこうやって手紙でしか気持ちを伝えられません。
しかし、いつかこの気持ちを面と面を向かって伝えたいと思います。
もう一度書きますがあなたのことが好きです。

・・・・・ふむ。初めてのタイプだな。
でも、この筆跡は優子のに似ているような気がするんだよな。
まっ、ありえないよな。優子みたいな子が僕なんかにラブレターなんて。
それに僕は何でもできるわけでもないんだけどな。
とりあえずこれは保管しておくか。
そういえば明久はどうなったかな？　僕の方には一人も来てないけ

ど。
この学校の告白スポットである屋上にでも行ってみるかな。

「よいしょっ、と」

Dクラス戦の時みたいに壁キックを使い、一気に屋上へ・・・・・・

「まだ誰も来てないのか」

だがすぐに屋上に続く階段の扉が開いた。

「おっ、なんだ、紫苑もここに来てたのか？」

「うん。明久がどうなったか気になったからね」

「まあ安心しろ。俺はお前に危害を加える気はない」

「それは助かるな」

多分戦うことになったら返り討ちにするけど。

「で、どうだったんだ？　ラブレターは？」

「どうと言われてもな、僕は優子が好きだから送ってくれた子の気持ちには答えられないんだよ」

「氷花くんは本当に優子ちゃんのことが好きなんですね」

「うん。まあ、その気持ちに気づいたのはあの事件があってこそだけどね」

そう、僕の人生が１８０度変わったあの事件。

「事件、ですか？」

「そっ、事件」

「まあ、あまり深くは詮索しないがな」

「いつか話すつもりだからその時にね」

僕も、そろそろ腹を決めるかな。ちょうど今週末に柚葉さんと秀俊さんが帰ってくるわけだし、秀吉と優子には話しておこう。結構前にいつか話すって約束したからな。

そんなことを考えている時に扉が開いた。明久が来たらしい。

「やはりここに来たか、明久」

「吉井君、言うことを聞いてください」

「雄二に紫苑、それに姫路さん・・・・・・！」

明久の前に二人がラスボスのように立ちはだかる。

「どうして僕がここに来ると？」

「屋上はこの学校の告白スポットだからな。単純なお前なら下見も兼ねてここに来ると思っていた」

「雄二の方が一枚上手だったね」

「くっ、紫苑・・・・・・！　君も僕の邪魔をするの？」

「いんや、僕が手を加える必要はないでしょ？」

「そういうわけだから諦めるんだな明久」

「雄二、どうしてそこまで僕の邪魔をするのさ！　そんなことをしても、雄二にとってのメリットは何もないはずなのに！」

「そうだな。確かにお前の言うとおり、こんな行動は俺にとってなんのメリットもない。いや、それ以前に俺は、彼女が欲しいなんていう気持ち自体が全くない」

ほほう。だったらどうして雄二はここまでのことを？

「だったら、どうして・・・・・・？」

「そう言う問題じゃないんだよ、明久。俺はただ、純粋に・・・・・・」

迷いのない目で・・・・・・。

「お前の幸せがムカつくんだよ」

言い放った。

「アンタは最低の友達だ！」

「さて明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことは言わ

ねぇ。本気でかかってこい。姫路。上着を持っていてくれるか？」

「あ、はい」

雄二が軽くシャドーをして見せている。
あれはかなりケンカなれしているな。
明久がどのくらいの技量なのか知らないが、勝つのは厳しいだろう。

「吉井君、やめておいた方が・・・・・・」

「心配ありがとう。けど、僕はやめる気なんてないから」

「そうですか・・・・・・。わかりました。もう止めません」

「・・・・・ごめん。心配してくれたのに」

「いえ・・・・・・。なんだか吉井君らしいです。」

「僕らしい？　――っと。これ、僕のも持っていてもらえる？」

「あ、はい」

あ、バカがいる。

「・・・・・・・・・・・・・明久」

「雄二、勝負だ！」

「・・・・・・・・・・・・・お前、バカだろう」

「へ？」

呆れたような雄二の声。そりゃそうだよな。戦う理由を明久は・・・・・。

「あ、あの、手紙がポケットに入っているみたいなんですけど・・・・・見ちゃってもいいんですか・・・・・・？」

姫路さんに渡してしまったのだから。

「だ、ダメだよッ！　戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

「お前がバカなだけだろうが！　やれ、姫路！　その手紙を始末するんだ！」

「自爆したな。諦めるんだね」

「・・・・・・・・・・・・あれ？　こ、これってまさか・・・・・？」

手紙を読んでいた姫路さんが何かに気がついたようだ。何に気がついたんだ？

「・・・・・・・・・・・・」

さらに黙り続ける姫路さん。

「姫路さん」

「えっ！？　あ、はい。なんですか？」

「僕にはわかってるよ。優しい姫路さんには手紙に込められた人の気持ちを踏みにじるようなことなんてできないってこと。だから、おとなしくーーー」

ここぞとばかりに姫路さんに情を訴えかけようとしている明久。以前追い掛けられたし、仕返ししてみようかな。

「その手紙を細切れにするんだ」

「違うっ！　そうじゃない！　僕の声で言葉をつなげるのは反則だよ！　ていうか紫苑声真似できたの！？」

国家機密情報局員には必須能力だったりするんでね。

「はいっ！　わかりました！」

「いや、『はいっ！』じゃないよ姫路さんってあああっ！　そんなに丁寧に手紙を裂かなくても！　それじゃあもう絶対読めないよね！？　返してっ！　僕の幸せな未来と大切なラブレターと十七行前の台詞を返してぇっ！」

あれ？　他人のラブレターを勝手に破いちゃまずいんじゃ・・・・・・ってああ、なるほど。

「まさか、本当に姫路が破るとは思わなかった。・・・・・・すまん、明久」

雄二がビリビリになった手紙をかき集めながら言う。

「せめてものわびに・・・・・・」

「ありがとう、雄二。最後の可能性にかけて、この紙クズをつなぎ合わせ」

「ああっと、手が滑ったよ雄二」

「すまん。俺も手が滑った」

僕が雄二にチャッカマンを投げ、雄二が華麗な動きでラブレターを燃やす。

シュボッ　　メラメラ・・・・・・

「ってうそぉっ!?　ここまでやった挙げ句、容赦なく燃やすの!?　もうこれ１００パーセント読めないよね!?　僕の幸せな未来はどこへいったの!?」

「明久、まあ今度からあんなバカなミスはしないように気をつけるようにね?」

消火活動空しくラブレターは灰と化した。

「坂本君と氷花くんは手紙の主が誰だか気にならないんですか?」

「ていうかもうわかってるようなものだし」

「え?」

「ああ。他人の書いた手紙を破り捨てたら問題があるよな?」

「そ、それは、その・・・・・っ！」

「雄二、その話をもっと詳しく」

明久が凄い勢いでこちらの会話に入ってきた。

「ああああ明久君は聞いちゃダメですっ！」

「こぺっ！？」

「明久の首が真後ろを向いている！」

「ご、ごめんなさいっ！　私、大変なことを！」

「まあ気にするな。どうせ生かしておいてもあの連中に殺されるだけだからな」

『ア～キ～～～～！　アンタよくもやってくらたわね～～～～？』

『吉井ぃっ！　絶対殺すぅぅっ！』

『ガンホー！　ガンホー！』

『氷花もブチ殺せぇぇ～～！』

「はいはい。一分で終わらせてあげるよ」

その後どっかの漫画に出ていた技を使ってボコボコにしてあげた。

明久の命が不安だな。

週末の夜の自宅・・・

「今日も楽しかったわね」

「優子結構はしゃいでたもんね？」

「二人ともお帰りじゃ。今日のデートはどうじゃった？」

今日も優子と映画を見たり、色々な所を回って帰ってきたところで秀吉がリビングから顔を出して言ってきた。

「べ、べべべ別にデートってわけじゃ・・・・・・／／／」

「そ、そうだよ。ただ一緒に出かけてきただけだよ／／／」

「そんな顔で言われてものう」

いつも通りの会話。夕食を食べ、少し落ち着いたところで、僕が口を開く。

「あのさ、二人に大切な話があるんだけれど。いいかな？」

「何じゃ？」

「何？」

「やっと、決心が付いたんだ。やっぱり、二人には話しておくべきだよな。三年前のあの事件から二人が中学卒業まで、僕がどこで何をしていたのか」

そうだ。今日、ここで二人に話す！

「やっと、教えてくれるのね」

「待ちくたびれたぞい？」

「ごめんごめん。じゃあ、話そう。やっぱり話すとしたらあの事件の数日後に警察が木下家に来たあたりからだよね？」

そして僕は二人に僕が国家機密情報局員だってこと、なった経緯などを話した。

第十二問　デートと暴徒とラブレター（後書き）

次回　戦友（とも）と一目惚れと演劇バカ

次回、女のオリキャラ出します。秀吉と恋仲になる予定です。

第十三問　戦友と一目惚れと演劇バカ（前書き）

キャラ設定です

宮野　真奈

身長は優子と同じくらい。
髪は赤で、肩より少し下まで伸ばしている。
バストはＤ
スタイルは抜群で顔もかわいい。所謂美少女。
紫苑と同じく国家機密情報局員。
戦闘員でランクはＳ。
ナンバーはトップ１０。
紫苑とは優子と秀吉が中三に成った辺りで出会う。

紫苑の過去については強化合宿の時に書かせていただきますので。

真奈の召喚獣

●双ゲームとかに出てきそうな和風の立派な装備。
濃い赤が主の白のラインが引かれている。下半身はスカート。
武器は獣の爪。
腕輪の能力は『飛翔翼』背中に翼が生えて、制空権を握ることができる。

総合評価が２００を超えました。読んでくださっている皆様。ありがとうございます。

こんなところです。

それでは本編を、どうぞ！

第十三問　戦友と一目惚れと演劇バカ

国家機密情報局とは・・・？

世界各国で多発する警察などでは対処できない凶悪な組織やその計画を阻止すべく
創設された組織である。

世界各国から選び抜かれた精鋭たち。
その存在と情報はＳ＋の情報として扱われる。

その精鋭たちにもランクがあり
上から　Ｓ　Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ　となっている。
因みにＳランクの人数には制限があり、常に十人となっている。
我らが鉄人こと西村宗一はＳランクのトップ１
紫苑はトップ９
そのほかの８人は世界各国に散らばっている。

そして国家機密情報局では部署があり、
鉄人、紫苑がいる、戦闘関係の部署、
その戦闘員たちをオペレートしてサポートする通信部署、
武器やワイヤーなどのアシスト兵器を開発する技術部署、
の三つがある。

それぞれの部署には上で説明したとおり、ランクが存在する。

戦闘員たちは世界各国のその存在を知っている僅かな代表たちや自分たちが察知した犯行を任務という形で受ける。

組織を裏切った者は殺害次第その人物のことを知っている全ての人間から記憶を消し、その人物に関する全ての情報は抹消される。この時、Sランクの人物のみ、記憶を消されない。
もしもの時に対処するためである。
国家機密情報局に所属した瞬間から世界からその人物のデータは抹消される。

「こんな感じかな？　以上、氷花紫苑による国家機密情報局とは・・・・？　でした！」

Aクラス・・・

Side　out

「えー、今回皆さんに転入生を紹介したいと思います」

Aクラスに響き渡る高橋先生の声。

ざわざわ・・・

教室にざわめきが起こる。

『どんなヤツかな？』

『美人かな？』

『イケメンだったらいいなぁ』

それぞれの意見が飛び交っている。

「それでは、入ってください」

「はい」

声と共に入ってきたのは赤色の肩より少し下まで伸ばした長い髪が印象的な所謂美少女だった。

「では、自己紹介をお願いします」

「はい。宮野真奈です。これから約一年間、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる。

「彼女はアメリカからの帰国子女だそうです。日本語は話せるそうです。皆さん、仲良くしてくださいね」

Aクラスで暗黙の了解。

「では、木下さんの席の隣があなたの席です」

「わかりました」

とことこと席に向かい、席に着く。

「よろしく、木下さん」

「こちらこそよろしくね、宮野さん」

「木下さんは後ほど、校内を案内してあげてください」

「わかりました」

自己紹介が終わると、質問攻めにされる宮野。

昼休み・・・

質問も少なくなってきた時。

「それじゃあ、改めて自己紹介するわね。アタシは木下優子。よろしく。優子でいいわよ」

「よろしくね優子。私も真奈でいいから」

「じゃあ、とりあえずこのクラスの代表を紹介するね」

「・・・・・・私は霧島翔子。このクラスの代表をやってる。よろしく」

「こちらこそ。代表って読んだ方が良いのかな？」

「・・・・・・名前でも代表でも構わない。皆は代表って呼んでる」

「じゃあ私も皆にあわせるね。私のことは真奈って呼んで」

「・・・・・うん」

「じゃあ今度はボクの番かな。ボクは工藤愛子っていうんだ。呼ぶなら愛子でいいからね」

「オッケー。じゃあ私も真奈って呼んで」

こんな感じで仲良くなった四人。

「じゃあ代表と愛子も一緒に校内を一通り案内するわね」

「ありがとね」

一通りの案内が終了・・・

「大体こんな感じかな。何か分からないことはあった?」

「ううん。だいたいわかったよ。ありがと。ところで人を探してるんだけど、知ってたらどこにいるか教えてくれる?」

「だれだれ~? もしかして好きな人とか?」

「あ、違うんだけど、ちょっと知り合いでこの学校に通ってるらしいんだけど、Aクラスにいると思ってたから・・・・・・」

「・・・・・名前を言ってくれればクラスに案内できる」

「ありがとう。それじゃ・・・・・・

氷花紫苑ってどのクラスにいるかわかる？」

Ｆクラス・・・

紫苑ｓｉｄｅ

「おい明久、聞いたか？どうやらＡクラスに転入生が来たらしいぞ。しかもかなりの美人でスタイルも良いらしい」

雄二が転入生の噂をする。

「あ、その噂知ってる。早くも有名人だよね」

「・・・・・・・・・・・・新たな被写体の予感」

「ワシも少し興味があるのう」

「というわけで行ってみないか？　Ａクラスへ」

「霧島さんに会いたい口実だね」

「ほほう、良い度胸だな」

何か怒らせたみたい。

「冗談はさておき、Ａクラスへ行こうよ！　ね？」

「まあいいだろ。女子は来るか？」

雄二が女子二人に聞く。

「あ、じゃあ一応行きます」

「ウチも」

「じゃあ行くか」

メンバーが決まりＡクラスへ行こうと皆が腰を上げた瞬間Ｆクラスのふすまが開いた。

「こっんにっちわー！」

「ほわぁぁあーーー！！！」

知り合いの顔がそこにあった。

勢い余って倒れ込む。

「あ！　本当に紫苑ここにいたー！」

「な、な、何でここに君が・・・？」

「あれ？　連絡行ってない？　私今日からここに転入したんだよ？」

「何だと！？」

マジか！？

「お、おい紫苑。知り合いか？」

雄二からの質問。まあ当然の疑問だろう。だがここで問題が発生する。

何故なら彼女も国家機密情報局員だからだ。

軽率な言葉はまずい・・・・・・。

僕は真奈とアイコンタクトをとる。

（おい！　どういうことだ！？　君はアメリカの担当だろ！？　何で日本にいるんだよ！？）

（なんか知らないけどアメリカの危険組織は全部壊滅させたから母国での任務につけってさ。まあ通う学校はここって指定されたけどね）

（当たり前だ。ここは世間的にも注目されてる進学校なんだから。だから僕と西村の二人でこの学校の防衛を任務としているんだから）

（そんなこんなで三人目というわけだよ）

（わかったわかった。とにかく君とは幼少期に一度だけあったことがあるということにするからな。あわせてよ？）

（もちのろんだよ）

「幼少期のころに一度だけあったことがあってね。親の仕事仲間ってことで。ね？」

「そゆこと」

「それで、随分仲が良いみたいだけど？　どんな関係かしらね？」

なんかドス黒いオーラをだしながら優子が聞いてくる。

その後ろには霧島さんと工藤さんが見える。さしずめ、校舎の案内を任されたんだろう。

「ただの遠いしんせk「人には言えないことを一緒にする仲だよ」え？」

『人には言えないこと！？』

皆が反応する。

人には言えないこと？

まあ確かに、射撃訓練やらスパイ活動やらミサイル発射を阻止したり色々やったな。

「確かに人には言えないことをする仲だな」

殺気！

『殺せぇぇぇ！！！』

「畳替えしエクストラ！」

自分の周りの畳を全てひっくり返し、カッターを防ぐ。

『貴様―！　転入生に手を出したのか！？』

『許せん！』

『こんな可憐な女の子を身も心もボロボロにするなんて！』

ん？　なんかおかしいぞ？

「ちょっと待つんだ！　僕はそういう意味でいったんじゃない！僕と真奈はそう言う関係じゃない！」

「酷い！　私の初めてを奪っておきながら・・・・・・！」

「お前はもう黙ってろ！」

何か秀吉と優子からもの凄い殺気を感じる。

「紫苑！　どういうことよ！？　真奈とそういうことをしたの！？」

優子が僕の関節をへし折る勢いで言う。

「違う！　さっきも言ったが、僕と真奈はそういう関係じゃない！」

「確かに真奈の初めてを奪ったなら「話聞いてよ！」責任をとるべきだわ。「だから聞いて！」だったらあなたに裸見られたアタシの方も責任とりなさいよ！」

「優子！　その発言は今はまずい！　それと責任って、それは僕と優子がけっこｎ『拷問してからグロテスクに殺せぇえ！！』ああもう！　とりあえず話の続きはお前らを殲滅した後だ！」

５分後・・・

「はぁ、はぁ」

なんだか今日のＦＦＦ団は強かったな。
でも今は誤解を解く方が先決だ！

「優子。話を聞いてくれますか？」

優子の両肩に手を置き、真剣な目で優子の目を見つめる。

「なによ」

不機嫌そうな目だが僕から目を反らしたらこういう場合有利に立てる。

「僕は今まで女性と付き合ったりした経験は一切ない。だから真奈とはそういう関係ではないし、そういうことはしていない。信じてくれる？」

「どうやって信じるのよ？」

「僕には好きな人がいるから」

「っ！」

優子が驚き一瞬こちらを見るが直ぐにまた目を反らした。
でも今度は何かを決意したような目でこちらを向き、

「わかった。信じてあげる」

「優子にだけは勘違いされたくないからね」

とりあえず、優子の勘違いは証明できたから良いかな。

秀吉　ｓｉｄｅ

言葉を失う。　そんな言葉が適切じゃろうか？

いきなりＦクラスに入ってきた転入生。どうやら真奈というらしい。確かに噂通りの美少女じゃな。これなら直ぐに有名人になるのも頷ける。

見とれてしまい、声が出なかった。

そしてワシは・・・

人生初めての恋をした。

所謂一目惚れというやつじゃろうか？

しばらくは演劇が忙しくて恋などしないじゃろうと思っていたんじゃが、そうもいかないらしい。

初めて見たときからドキドキがとまらんのじゃ。顔も赤くなっているのじゃろうが、今は紫苑に皆、目線がいっているのでばれなくてすんだのは幸いじゃったな。

たまに紫苑に殺意がわくような会話が聞こえるが、おそらく冗談なので、直ぐに殺意は引っ込めた。これが姉上が紫苑に対してよく抱

く感情、嫉妬じゃろうか？
確かに今なら姉上の気持ちが少しだけ話から気がするぞい。

放課後、帰り道・・・

紫苑ｓｉｄｅ

「まったく、冗談も程々にしてくれよ？　僕の命が危うくなるんだから」

「わかったわかった。　それにしてもこんな美少女と幼なじみで仲が良いなんて、紫苑も隅に置けないわね。もしかして優子に惚れてる？」

「ふえっ！？」

優子から何やら可愛い声が。

「そ、そんなことないよ！　それに僕なんかに惚れられても優子が困るだろうし・・・・・／／／」

「べ、別に私は、そんなこと・・・・・／／／」

こんな時にも顔を赤くしている優子が可愛いなんて思ってたり。

「さて、二人だけの世界に入ってしまった二人は放っておいて、秀吉君、これからよろしくね？」

「う、うむ！　こちらこそよろしくなのじゃ／／／」

「あれ？　顔赤いよ？　大丈夫？」

「だ、大丈夫じゃ！　問題ないのじゃ！　ところで真奈の家はどこなのじゃ？」

「あ、そうだった言い忘れてたな。　ねえ紫苑一つお願いしていい？」

秀吉と話をしていた真奈が話しかけてきた。秀吉顔が赤いな。真奈に惚れた？

「とりあえず聞こうか？」

「ありがと。じゃあ・・・・・・

家が見つかるまで紫苑の家に泊めて！」

「「「・・・・・・・・・・」」」

僕は最近三度目の臨死体験を迎えた。

紫苑家に真奈と木下姉弟が居候することになった！

てってれ～！

紫苑宅・・・

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

なんでこんな沈黙しているんだ？

真奈が居候させてと言ったときから優子が妙に不機嫌だし、

秀吉と真奈はお互いに相手をチラチラと見てはいるが目が合うとお互いに反らすし、

僕はこの重い空気を変化させられないからなにも言えないし。

くそっ！　これを耐えろって言うのか！？　辛いにもほどがあるよ！

そもそも秀吉と優子は良かったのかな？

せっかく柚葉さんと秀俊さんが帰って来たってのに。

まああの二人は僕がいるから安心だって言ってたけれどさ。

因みに真奈がいることは伏せておいた。ややこしくなりそうだからな。

そんなこんなで部屋割り決め・・・

「いい？　こっちの部屋でアタシと真奈が寝るから、そっちの部屋

で紫苑と秀吉は寝ること！　文句はないわよね？」

何故かそれは僕にだけ言ってる気がする。

「私は良いよ。　女の子同士話したいことあるし」

「ワシも構わんぞ」

「右に同じ」

「秀吉、紫苑になにかされたら直ぐに声を出すのよ？」

「ワシらは男同士なんじゃが・・・・・・」

「僕ってそんなに信頼ないのかな・・・・・・」

「それじゃ、お休み。紫苑、秀吉君」

「「お休み」」

それぞれがそれぞれの部屋へ・・・・・・

男子部屋・・・

「なんで優子は不機嫌なんだろ？」

「そりゃ紫苑が美少女と一つ屋根の下で暮らすことになりそうじゃったからじゃろ？」

「僕は優子しか興味ないのに・・・・・」

「だったら早く告白するんじゃな」

「そうだね。優子があれだから秀吉には先に話しておくけれど」

「なにをじゃ？」

「真奈も僕と同じ国家機密情報局員なんだよ」

「何じゃと！？」

これについては先ほど真奈と話し合っておいた。
どうやら国家機密情報局の皆さんは大切な人には案外話しているらしい。

「まったく同じ時期に入ったんだ。同じ場所でね」

「では、真奈も辛い過去を？」

「多分そうだけど、個人の過去については詮索しないっていうのがルールだからわからないな」

「そうなのか。ワシが少しでも支えに成れればいいんじゃがのう」

「それって真奈が好きだから？」

「ち、違うのじゃ！　そんなんじゃないのじゃ！／／／」

いつもと攻守逆転だな。

「隠しても無駄だよ～、さっさと吐いて楽になりなよ」

「むぅ～、いつもの逆になっておるのじゃ」

「今のところはここまでにしといてあげるよ」

そして僕と秀吉は眠りについた。

翌朝、優子の機嫌が直っていた。
どうやら女子部屋でも同じような話をしたみたいだ。
ま、賑やかな食卓の方が好きだけどね。

第十三問　戦友と一目惚れと演劇バカ（後書き）

次回　僕とFクラスと清涼祭

第二巻突入です！

第十四問　僕とFクラスと清涼祭（前書き）

テスト期間とはいえ、更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。
テストが終了次第、更新をスピードアップさせようと思いますのでもう少しだけご辛抱下さい。ご迷惑をおかけしてしまいますがこれからもよろしくお願いします。

話は変わりますが、ＰＶが８５０００を、ユニークが１００００を超えました！
この小説を読んでくださるってる方々、ありがとうございます！

そんな・・・・・・！
血が・・・・・・
血が止まらない！
このままじゃコイツが死んじゃうよ！

鮮血に染まる学園ーーー！

お願いです！
誰か・・・・・・誰か・・・・・・
誰かーーーコイツの鼻血を止めてください！

『中華喫茶ヨーロピアンへようこそっ！』

「ご注文はお決まりですかぁ？　当店は胡麻団子がオススメですよ！」

「そ、それじゃ・・・・・・」

客は姫路さんの胸元へ目が・・・・・・・

「・・・・・肉まんを二つ」

「お待たせしました！　胡麻団子と二皿とウーロン茶二つにになりま～す♪」

だが客は姫路さんの方を向いている。

ざわざわ・・・・・・

（三番テーブルにウーロン茶・・・・・・と）

ざわざわ・・・・・・

皆さん秀吉の丈がやや短いチャイナドレスに釘付け。

「さすが秀吉」

それを見て満足げな明久。

「僕らのためにありがとうね葉月ちゃん」

島田の妹である葉月ちゃんにお礼を言う明久。

「ううん。葉月も楽しいもん。それにお兄ちゃんが愛してるって言ってくれたし！」

満面の笑みで言う葉月ちゃん。

「え、」

空気が凍る。

『た、大変だっ』

『今度はウェイターが血まみれだぞ！？』

「あー・・・・・・そろそろ召喚大会行ってもいいか？」

鼻血を塞ぐ康太。

「後生じゃ・・・・・・置いていかんでくれ」

「秀吉、僕らも召喚大会行くよ？」

それじゃ本編へＧＯ！

第十四問　僕とFクラスと清涼祭

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。

写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本　ではなく　成人向けの写真集』

教師のコメント

訂正の意味があるんでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

氷花紫苑の答え

『家族』

教師のコメント
すいませんでした。

桜が消え、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節には文月学園の今年最初の行事『清涼祭』が行われる。よって、各クラスはその出し物を決め、準備に勤しむ時期なのだが・・・

「吉井！　こいっ！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

「言ったな！？　こうなれば意地でも打たせるもんか！」

姫路さん、島田さん、秀吉、そして僕以外の４６人は野球やらで遊んでいた。

「どうだ？　出し物は決まったか・・・・・・これはどういうことだ？」

「校庭を、どうぞ！」

僕が道を空けて西村先生を通す。そして校庭を見た西村先生の反応は・・・

「そうか、よ～くわかった。お前ら、ちょっと待ってろ」

「まったくあやつらは」

「いつも通り？」

「疑問系で返されても困るのじゃが」

その後校庭から悲鳴が聞こえた。

その後Ｆクラス・・・

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだがーーー」

うわっ。雄二やる気ゼロだな。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

「雄二はやる気ゼロのようじゃのう」

「代表なんだからもっとしっかりして欲しいけど、雄二をやる気にさせる材料が何かないとな」

「そういえば召喚大会というのがイベントの一つとして在るのを知っておるか？」

「もちろん。出場してみる？」

召喚大会というのは召喚獣同士を戦わせて勝者が勝ち進んでいくという大会である。

試召戦争と違うのは、それがトーナメント制ということと、二人一組で戦うということである。

「折角だしお主となら出てみようかと思ってのう。しかも今年は特別な賞品が出るらしいのう」

「白銀の腕輪だっけ？」

「うむ。それと、毎年恒例の如月ハイランドのペアチケットじゃ」

「秀吉はどっちが欲しいの？」

「う、うむ。どっちかと言われてもな」

「因みに真奈は遊園地とかには行ったことがないらしいけど？」

「おお！　では誘ってみようかの・・・・・・って違うのじゃ！　そういうことではないのじゃ！」

「うんうん。わかってるって」

最近仕返しができるので嬉しい。

「だったら紫苑も姉上を誘ってみたらどうじゃ？　案外すんなりＯＫしてくれるかもしれぬぞ？」

「だったらいいんだけどね」

優子と如月ハイランドか・・・・・・夢のまた夢だな。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでいいか？」

あ。実行委員を決めているのを忘れてた。

「え？　ウチがやるの？　う～ん・・・・・・、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

「雄二。実行委員なら美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？　私ですか？」

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いてるうちにタイムアップになる」

何やら難航してるみたいだな。

数分後・・・

島田さんが雄二が提案した副実行員次第ではやってもいいということらしいので副実行委員の候補を挙げることとなった。

『吉井が適任だと思う』

『やはり坂本がやるべきなんじゃないか?』

『氷花はどうだ?』

何やら僕の名前が挙がったりもしているが。

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

「同じく」

ここは明久に任せようと思う。

「って、秀吉に紫苑。僕もそういう面倒な役はできればパスしたいな~なんて」

「それは他の皆とて同意見じゃ。ならば適任の者にやってもらった方が良いじゃろう?」

「まあ最終的には島田さんに決めてもらおうよ?」

「と、いうわけだ。島田、今挙がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね~。それじゃ・・・・・・」

そう言って島田さんは黒板に名前を書いていく。

『候補?・・・・・・吉井』

まあ予想通りだな。

『候補？・・・・・・明久』

突っ込まない。突っ込まないからね！

「さて。この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねぇ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

『どうする？　どっちが良いと思う？』

『そうだなぁ・・・・・・。どちらもクズに変わりないんだが・・・・』

「こらぁっ！　真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！　あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

「ほらほらアキってば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まったんだから、前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされてる気がするよ・・・・・」

明久ドンマイ！

再び数分後・・・

結果的に候補はこの三つとなった。

【候補？　写真館『秘密の覗き部屋』】

康太が出した意見である。まあ確実に営業停止処分になるだろうな。
しかし凄いネーミングセンスだな。

【候補？　ウエディング喫茶『人生の墓場』】

うん。これになったら厨房決定。

【候？　中華喫茶『ヨーロピアン』】

須川君が熱弁した意見だ。残りの二つは色々厳しいからこの３つの中から選ぶならこれにするかな。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

西村先生が戻ってきた。

「・・・・・補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

うえっ！　それはご勘弁を。

『せ、先生！　それは違うんです！』

『そうです！　それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

皆が明久をバカ扱いしている。

「馬鹿者！　みっともない言い訳をするな！」

西村先生が一喝。ほほう。あの人が明久をかばうなんて意外だ・・・

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

前言撤回。同級生だったらシバき倒されてるな。

「まったくお前達は・・・・・。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

『そうか！　その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

さすがにあんなことを言われれば活気づくだろうな。

「み、皆さんっ！　頑張りましょう！」

珍しく姫路さんが立ち上がってやる気を示していた。

何かあるのかな？

『出し物はどうする？』

『初期投資の少ない写真館の方が』

『いや、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

う～ん。まとまらないな。

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと真新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

『ウェディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たったの二日間じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

さてさて、どうなることやら。

「はいはい！　ちょっと静かにして！」

島田さんが手を叩いて皆を静止させようとするが・・・・・・

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

この通り。皆さん試召戦争の時のまとまりはどこへ？

「まとまらないのう」

「それがFクラスということかな。司令塔がしっかりすれば、このクラスはきちんと機能するんだがなぁ。そこが島田さんと明久の腕の見せ所というわけだが」

「もうっ。とにかく静かにして！　決まりそうにないから、店はさっき挙がった候補の中から選ぶからね！　ほらっ！　ブーブー言わないの！　この3つの中から一つだけ選んで手を挙げること！　いいわね！」

「島田もやるのう。ワシにはできんぞい」

「彼女も案外人をまとめるのには向いてるかもね」

そんなこんなでFクラスの出し物は中華喫茶に決まった。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「・・・・・・・・・・・・（スクッ）」

そう言って須川君と康太が立ち上がる。

「ムッツリーニ、料理なんてできるの？」

「・・・・・・・・・・・・紳士の嗜み」

わかってるじゃん康太。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって！」

僕はどうしようかな？

「ダメだ姫路さん！　キミはホール班じゃないと！」

とか思案している内に無自覚必殺料理人の肩書きを持つ姫路さんが厨房班にしようなどという恐ろしい発言を明久が止めていた。

『明久、グッジョブじゃ』

『・・・・・・・・・・・・（コクコク！）』

『君は英雄だね』

ふぅ。危なかった。食中毒になってしまっては成功はまずないからな。

さんざん迷った結果、僕自身は厨房班にした。

厨房・・・・・・僕・康太・須川君・その他

ホール・・・・・・姫路さん・島田さん・明久・雄二・秀吉・その他

こんな感じにわかれた。さ～て、がんばりますか！

第十四問　僕とFクラスと清涼祭（後書き）

次回　交渉と野外プレイと妖怪藤堂カオ「学園長さね！」

ちょっ！？　課題プリント増やさないでくださいよ！？

第十五問　交渉と野外プレイと妖怪藤堂カオ「学園長さね！」

以下の問いに答えなさい。
『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え
『リトアニア　エストニア　ラトビア』

教師のコメント
そのとおりです。

氷花紫苑の答え
『リトアニア　エストニア　サウジアラビア』

教師のコメント
あなたが世界史の問題をケアレスミスするとは珍しいですね。
サウジアラビアではなくラトビアです。

土屋康太の答え
『アジア　ヨーロッパ　浦安』

教師のコメント
土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え
『香川　徳島　愛媛　高知』

教師のコメント
正解不正解の前に、数があっていないことに違和感を覚えましょう。

放課後・・・

「でも、アキが頼めばきっと動いてくれるよね？」

島田さんと明久が何やら話しているので、秀吉と共に近づいてみる。

「え？　別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

「ううん、そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だってーーー」

「そりゃ確かに、よくつるんではいるけど、だからといって別に」

「だってアンタたち、愛し合ってるんでしょう？」

初耳だ。

「もう僕お婿にいけないっ！」

うん。大丈夫だよ明久。きっと・・・・・・。

「誰が雄二なんかと！　だったら僕は、断然秀吉の方が良いよ！」

「・・・・・あ、明久？」

残念だったな明久。それは絶対に叶わないよ。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われてもワシには好きな女子がいるのじゃ。じゃから、無理じゃ」

「うわぁぁぁ！　なんか勘違いで振られたぁぁぁ！」

「大体、明久と雄二が愛し合っているというのはＢＬの同人誌の中だけであって・・・・・・」

「え？　じゃあアンタのは？」

「どゆこと？」

「だって、氷花と木下っていくとこまでいった関係なんじゃないの？」

「ありえない！」

バカな！　僕と秀吉がいくとこまで行った関係ってどういうことだよ！？

「し、紫苑。お主もなのか？　まあ、紫苑なら、まだ・・・・・・」

「秀吉くぅん！　なに満更でもないみたいな顔してるんだよ！？僕たち男同士じゃん！」

ま、まさか秀吉、そっちの世界に・・・・・・！？

「え？　あ、そうじゃったの！　ワシらは男同士じゃったな！」

まさか忘れてたのか？

「まあとにかく、深刻な問題でも起きたの？」

「いや、喫茶店の経営とクラスの設備の問題でーーー」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なのよ・・・・・・」

「え？　どういうこと？」

島田さんが深刻そうな表情を見せる。

これはマジなようだな。

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし・・・・・・。

けど、一応秘密の話だからね？」

「う、うん。わかった」

「実は、瑞希なんだけど」

「姫路さん？　姫路さんがどうかしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほぇ？」

明久がマヌケな声を出すが、今はそんなことどうでもいい。

「島田さん。姫路さんの転校の理由が大体想像がつくんだけど。やっぱりFクラスの環境？」

「そうなのよ。まず、瑞希って身体弱いでしょ？」

「確かに。ござとミカン箱っていう設備にAクラスのトップレベルの学力を持つ身体が弱い娘を置いておきたくないだろうな。例えそれが、姫路さんから好きな人を奪うことになっても」

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

なにやら島田さんと話している間に明久が処理落ちしかけてたらしい。

「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親に見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

「でも召喚大会には姫路さん以外のFクラスメンバーに優勝してもらわないとあまり効果は期待できないよ？　もし姫路さんの家族が見に来るんだとしたら尚更。学年でトップクラスの実力を持つ自分の娘が優勝してもあまり家族には響かないだろうし」

「そうよね。・・・・・・アキはその・・・・・・瑞希が転校したりとか、嫌だよね・・・・・・？」

「もちろん嫌に決まってる！　姫路さんに限らず、それが美波や秀吉、紫苑であっても！」

明久。やっぱり君には人を引きつける力があるよ。
僕もそれに引きつけられた一人だけど。

「そっか・・・・・・。うん。アンタはそうだよね！」

「そういうことなら、なんとしても雄二を焚き付けてやるさ！」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「とりあえず雄二に連絡してみたら？」

「だね」

Ｐｒｒｒ

現在明久が電話中・・・

「あ、雄二。ちょっと話がーーー」

繋がったみたいだな。

「え？　雄二今何をしてるの？　雄二！？　もしもし！　もしもーし！」

「坂本は何て言ってた？」

「えっと、『見つかっちまった』とか『鞄を頼む』とか言ってた」

「・・・・・なにそれ？」

まあまあ、そんな目で睨まないであげてよ。

「大方、霧島翔子から逃げ回っておるんじゃろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

「そうすると、坂本と連絡を取るのは難しいわね」

「いや、これはチャンスだ」

その通り！

「え？　どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引っ張り出すには丁度良い状況なんだよ。うん。ちょっと三人とも協力してくれるかな？」

「それはいいけど・・・・・・坂本の居場所はわかっているの？」

「それについては明久ならわかるでしょ」

「うん。大体目星はついてるからね。じゃ、行ってくる」

「同じく護衛に」

体育館女子更衣室内・・・

「やぁ雄二。奇遇だね」

あっさり雄二は見つかった。まさか女子皇室に隠れていようとは・・・・・

「・・・・・どういう偶然があれば女子更衣室で鉢合わせするのか教えてくれ」

「偶然だよ雄二。気にしないで」

「紫苑もなぁ、こんな場所で偶然会うワケが」

ガチャッ

あ。

「えーっと・・・・・あれ？　Ｆクラスの問題児コンビに紫苑？　ここ女子更衣室だよね？」

「やぁ木下優子さん。奇遇だね」

「秀吉の姉さんか。奇遇じゃないか」

「あ、うん。奇遇だね」

体操服の優子可愛いなぁ。

「体操服姿なんて可愛いね」

「えっ！？　あ、ありがとう／／／」

しまった！　つい口から本音が！　でも、どうやら僕が着いてきた意味があったみたいだな。

「先生！　のぞ「させるか！」むぅぅぅ！？」

僕はの護衛についてきた理由はこんなイレギュラーの時のため、明久と雄二を一旦接触させたのち、補習室以外の場所につれていくことだから。

とりあえず優子の口を押さえて、更衣室に押し倒す。

「明久、雄二、行け！　ここはなんとかやっておくから」

「ありがと紫苑」

「恩に着る」

「むぅぅぅ、むぅぅぅ」

優子が僕の下で暴れてるので押さえつけて身動きできないようにする。

「国家機密情報局って便利だな。こうやってあっさり優子の身動きを封じれたし。フフ、これで逃げたり、助けを呼ぼうと叫ぼうとしても無駄だよ」

「む！？　むぅぅぅ／／／」

あれ？　何故だか優子の頬が赤いんだけど？

「さて、この後どうするかなぁ？」

西村さん呼ばれちゃあ敵わないし、もう少しこのままでいてもらおうかな。

「むぅぅぅ」

「とりあえずいい加減抵抗をやめない悪い子にはお仕置きが必要かな？」

軽くデコピンでもしようかな。

「むぅぅぅ！／／／／」

そして僕は優子にデコピンをしようと手を伸ばしたら・・・・・・。

ガチャッ

「今優子の声がしたんだけ・・・・・・ど・・・・・・」

「気のせいだっ・・・・・・た？」

あ。工藤さんと真奈だ。

「え～っと、紫苑。なにしてるの？」

「ちょっと抵抗をやめない優子にお仕置きしようかと」

「お仕置きっていったいなんなのカナ～？」

「ちょっとデコピンをしようかと」

「その状況でデコピンをしようかとって嘘には無理があるよ紫苑」

「え？　それはいったいどういう・・・・・・！！！」

しまった！　今の僕の状況、これはまずい！

まず、

僕は優子を押し倒している。

叫ばせないように口は塞いでいるので声は出せない。。

優子を押さえつけて身動きをとれないようにしている。

先ほどお仕置きをするつもりと言ってしまった。

しかも丁度僕の手は優子の胸元で止まっている。

獣のレッテルは確定だな。

「ち、違うんだ三人とも！　これは優子が叫びそうだったから「そりゃ獣のように襲われたんだから誰だって叫ぶよ」違う！　優子が叫ぼうとしたのは明久と雄二とここにいたからで「証拠はあるのカナ～？」ゆ、優子が承認だよ！　いたよね！？」

「紫苑にいきなり襲われたことしか覚えてない／／／」

「そ、そんなぁ」

「だってさ。優子も信じ切ってた幼なじみにいきなり獣のように襲われたんじゃあ、ね」

「まさかボクも紫苑君が無理矢理女子を襲うとは思ってなかったよ」

「本当に、その為に襲ったんじゃ、ないんだ・・・・・・」

ダメだ！　僕の圧倒的不利である。

「うんうん。わかってるって。紫苑が欲望に負けて優子を獣のように襲い」

「野外プレイ、しかも拘束してしようとしてるくらいわかってるよ♪」

「うう・・・・・・。本当に、違うのに・・・・・・」

その時優子が僕の制服の裾を引っ張っていた。

「何？」

殺されるかなぁ？

「あの、その、今度からは無理矢理じゃなく、せめて私の同意を得てからにしてね？　そうすれば、まだ、あなたの欲望を、満たしてあげられるかも、しれない、から」

「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」

この時、真奈と工藤さんがいなかったら確実に僕の理性がイィィヤッホウォォー！　なことになっていただろう。

Fクラス・・・

「ただいま」

「あっ、おかえり、紫苑」

「無事だったようだな」

「うん。全然問題ないよ」

理性以外は。

「丁度良いタイミングだったな。これから俺と明久、秀吉の三人で学園長にクラス設備の向上を交渉しに行くところだったんだ。紫苑も来るか？」

それは良いタイミングで戻ってきたな。

「もちろん」

僕たちは学園長室を目指して歩いていった。

学園長室前・・・

『・・・・・・賞品の・・・・・・・として隠し・・・・・・・』

『・・・・・・こそ・・・・・・・勝手に・・・・・・・如月ハイランドに・・・・・・・』

何やら声が聞こえてきた。

「どうした、明久」

「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと入るぞ」

「失礼しまーす！」

えっ？　何言っているのこの子たち？　普通はノックとかするもんだよね？

「ちょっ！？　お主ら、ノックとかするもんじゃろ？」

「そいつの言うとおりさね。本当に失礼なガキどもだねぇ。普通は返事を待つもんだよ」

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。・・・・・・まさか、貴方の差し金ですか？」

中にいたのは学園長の藤堂カオルと教頭の竹原先生だ。

しかし、差し金って何のことだ？　何か聞かれたくない話でもしていたのだろうけど。

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

何だ？　この二人。仲が悪いのか？　大人の醜いの権力争いか・・・・・？

とは言っても、学園長に頼るしかないっていうのがシャクだな。まあ教頭よりはマシだけど。

「さっきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「・・・・・そうですか。そこまで否定されるのならこの場はそういうことにしておきましょう。それでは、この場は失礼させて頂きます」

そう言い残して教頭は部屋から出て行った。

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があって来ました」

雄二が僕らを代表して言う。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが礼儀ってモンだ。覚えておきな」

アンタこそ礼儀作法は大丈夫なのかと突っ込みたかったが、今は我慢する。

「失礼しました。俺は二年Ｆクラス代表の坂本雄二」

「氷花紫苑です」

「同じく木下秀吉じゃ」

「そしてこっちがーーー二年生を代表するバカです」

凄い自己紹介だな。

「ほぅ・・・・・・。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本、吉井かい。そっちの二人も演劇やら運動神経やらで名を聞くけど」

「ちょっと待って学園長！　僕はまだ名前を言ってませんよね！？」

学園長の明久への認識って・・・・・・

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

なんだか今日の雄二はよく我慢してるなぁ。

「Fクラスの設備について改善を要求しにきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

まあ僕も口の利き方が悪い大人にはそれ相応の話し方をするからべつに問題ないかなって思う。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

雄二もキレてんだな。秀吉も呆れてるし。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババァ、というワケです」

思案顔になる学園長。普通ならここで既に追い出されると思うんだけど。まあ向こうも問題があったからいいのかな?

「あの、学園長・・・・・・?」

「・・・・・ふむ、丁度いいタイミングさね・・・・・・・」

「何が丁度いいんですか?」

「ん?　何のことだい?」

「そうでしたか。聞き間違いでした。すいません」

因みに僕には学園長の小声がはっきりと聞こえる。

「よしよし。お前達の言いたいことはよくわかった」

「え？　それじゃ、直してもらえるんですね！」

「却下だね」

だよね。

「雄二、このババァをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「いや、それだと即死しちゃうから、より苦しみを味合わせたいならブルーシートなんかにに巻き付けて捨てた方が良いよ。それに川や森だと案外見つかりやすいから気を付けた方が良い」

「・・・・・お主らもう少し態度に気を付けた方が良いぞい？」

「まったく、この二人が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババァ」

「そうですね、教えてください、ババァ」

「・・・・・お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

今回は耐えたぞ。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」

うわっ、もし学園長じゃなかったら殴りたい！　いや、ここは明鏡

止水だ。国家機密情報局に所属しているのならこの程度でキレてはいけない。

「それは困ります！　そうなると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」

「――――と、いつもなら言っているんだけどね」

明久の言葉を遮るかのように学園長が言う。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやろうじゃないか」

交換条件か。

「・・・・・・・・・・・・」

雄二が考え込んでいる。確かにそれが正解だな。

「その条件って何ですか？」

明久が雄二の代わりに聞く。

「清涼祭で行われる召喚大会は知っているかい？」

「ええ、まぁ」

「じゃ、その優勝賞品は知っているかい？」

「優勝チームには、『白銀の腕輪』と『如月ハイランド　プレオー

プンプレミアムペアチケット』が用意されてるんですよね？」

ペアチケットと聞いて雄二が反応した。

「そうさね、そこでアンタたちに頼みがある。そのペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「どんな噂ですか？」

つまらない内容なんだけどね、と前置きして学園長が説明しだした。

「如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジンクスをね」

成る程、そういうことね。

「つまり、権力を使い、この学園からカップルをゴールインさせて、一気に企業としての力を付けたいというわけですか」

「多少強引な手を使ってもね」

「な、なんだと！？」

雄二が突然大声を上げる。

まあ雄二にとっては大問題なんだろうけどね。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まっているだろう！　今ババァと紫苑が言ったことは、『プレオープンプレミアムペアチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ！？」

「良いんじゃない？　霧島さんが相手だったら」

「全然良くない！　くそっ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までいけばジンクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことか」

悔しそうに唇をかむ雄二。

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことじゃないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

きっと霧島さんと何かしらの約束をしたんだろうな。

「・・・・・絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる・・・・・。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚・・・・・。俺の、将来は・・・・・・！」

何か雄二の目がやばいんだけど？

でもそうなると、秀吉が真奈を誘ったりできないわけだよな。

まあ結婚の意思があるなら話は別だけど。

「ま、そんなワケで、本人の意志を無視して、うちの可愛い生徒の未来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

可愛いと思ってるかどうかは甚だ疑問だがね。

うちの技術部門のトップ1の博士は、人間より機械やらに恋してるそうだからな。

「つまり交換条件ってのはーーー」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室の改修くらいしてやろうじゃないか」

まあ正々堂々勝ち上がって優勝すれば何の問題もあるまい。

「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前たちに召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

当たり前だ。

「・・・・・僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

他のクラスに不満が出るだろうからな。

「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってや

ってもいい」

「そこをなんとか設備向上もお願いできませんかのう？」

「無理さね」

「そこをなんとか」

「無駄だよ。明久、秀吉。教室の改修をやってくれるだけマシってもんだよ。用は喫茶店を成功させればいいんだから、ね？」

「わかりました。この話、引き受けます」

「そうかい。それなら交渉成立だね」

相手にあえて乗せられるというのも一つの手だからな。

「ただし、こちらにも提案がある」

雄二め、学園長に更なる交渉をする気だな。

流石策士。

「なんだい？　言ってみな」

「召喚大会は二対にのタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は科学、といった具合で進めていくと聞いている」

「それがどうかしたかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

成る程。これで僕たちだけにこの話をしているかどうかがわかるということか。

「ふむ・・・・・・。いいだろう。点数の水差しとかだったら一蹴していたけれど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「・・・・・・ありがとうございます」

答えはイエス。

つまり学園長はこの話があまり多くに人に知られたくないということ。

だとしたら何故僕たちなんだ？　どうしても勝ちたいならばそれこそAクラスの霧島さんや優子、工藤さん、真奈にでも頼めばいいのに・・・・・・

明らかに裏があるけれど、今はこのままの状況でやっていくしかない。

できれば情報は教えて欲しいんだけどな。その方が動きやすいし。

「さて。ここまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね？」

「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

僕が知る高校生で最も策士肌の男雄二。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

文月学園二年生を代表するバカであり、優しき心を持つ観察処分者

明久。

「姫路の転校はワシらが阻止して見せようぞ」

演技への熱意なら誰にも負けない演劇バカ秀吉。

「ベストを尽くします。と、その前にチーム分けをしようよ」

そして、国家機密情報局員の僕。

「それもそうだな。まあチームは俺が考えるに、俺&明久、秀吉&紫苑の組み合わせが打倒だろうな。お互い召喚獣の扱いに慣れている者が一人づつの方が勝率が上がる」

同感だ。

「よし。では、紫苑。よろしく頼むぞ？」

「こちらこそお手やわらかに」

「おっと、言い忘れていたが、紫苑、お前は優勝するな」

「何で？　あっ！　そういうことね」

「何でだよ雄二？」

「明久、そもそも僕らは姫路さんの転校を阻止するためにやってるんだから、さっきの雄二と話したであろう会話を思い出してごらんよ」

「雄二との会話？　う～ん。あっ！　そういうことか！」

「バカのお前でも覚えていたようだな。紫苑の成績は学年で見ても、トップファイブに入るであろう成績だ。そんなヤツが優勝しても、姫路の親にはＦクラスの凄さをアピールできないんだよ」

と、いうわけだよ。

「ごめん秀吉。『白銀の腕輪』は諦められる？」

「何を言っておるのじゃ？　さっきお主が言っていたであろう？　ワシらは『姫路の転校』を阻止するためにやっておるんじゃ。賞品には執着せんぞい」

「ありがと。秀吉」

「話はまとまったかい？　それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「「「おうよっ！！」」」」

こうして、僕らの戦いが始まった。

第十五問　交渉と野外プレイと妖怪藤堂カオ「学園長さね！」（後書き）

次回　妨害と脅迫と召喚大会前半

第十六問　妨害と脅迫と召喚大会前半

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え
『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント
いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

氷花紫苑の答え
『その喫茶店に適した服装。
例を挙げるなら、僕らのクラスがやる、中華喫茶ならチャイナドレス。など』

教師のコメント
なるほど、適材適所というわけですね。

土屋康太の答え
『スカートは１５センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は５センチ程度のヒールをーーー』

教師のコメント
裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え
『ブラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています。

紫苑宅・・・

「「ただいま～」」

「あ、お帰り！　秀吉君、紫苑」

学園長との交渉があったため、帰りが若干遅くなったので優子と真奈が先に家に帰宅していた。

「遅かったじゃない。何かあったの？」

「ちょっと、ね？」

「うむ、ちょっとあったんじゃよ」

「教えてくれる？」

「教えてくれると嬉しいな」

何故だか優子が僕に、秀吉には真奈がそれぞれ笑顔で腕をがっちり

と捕獲した状態で言ってきた。あれ？　脅迫？

「いや、大したことじゃないんだよ優子？　だからサブミッションをしようとしないでねって痛ぁ！　優子痛い痛い痛い！　わかった、話す、話すから！」

何でこんな理不尽なことをされなくてはいけないんだ？

説明中・・・

「なるほどね。瑞希の転校を阻止するためにね」

「あ！　そういえば私まだ姫路さんたちと下の名前で呼び合えてない！　清涼祭が終わったら仲良くなろう・・・・・・」

「清涼祭といえば、真奈と姉上のクラスは何をすることになったんじゃ？」

「私たちは【メイド喫茶『ご主人様とお呼び！】になったんだよね？」

「そうよね。まさかメイド服着る羽目になるなんて」

優子のメイド服かぁ。時間があれば入店したいところだ。

「まあまあ姉上。人間生きてれば一度くらいメイド服を着るもんじゃ」

それは違うと思う。

「二人とも遊びに来てくれると嬉しいな♪」

「もちろん行くぞい。のう？　紫苑」

「う、うん。まあ、そうだね」

「あれれ～？　何だか紫苑の顔がやらしいぞ。まあ十中八九優子のメイド服姿でも想像してたんでしょ？」

くっ！　流石に長年一緒に仕事してるだけあって心が読まれるな。

「な、何想像してんのよバカぁ！／／／」

「あっ優子ッちがっ・・・・・・！　その関節はそっちには曲がらなっ・・・・・・！」

理不尽だ。確かに想像したけど。

清涼祭初日、Ｆクラス・・・

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

見るも無惨だったＦクラスの教室は一見本当にＦクラスの教室かと見間違えるくらい喫茶店らしいものになっていた。

「このテーブルなんて、パッと見は本物と区別がつかないよ」

「あ、これは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

きっとそのクロスは演劇部のだろうな。

演劇にもこういった準備が必要になってくるだろうから慣れているんだろうな。

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

クロスを捲ると見慣れたミカン箱が。

「これを見られたらみせの評判はガタ落ちね」

「きっと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもみたとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」

「だといいんだけどね」

営業妨害とかが来るかもしれないしな。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

ピンポンパンポーン！

ん？　何だ？

『ご連絡します。二年Ｆクラス、氷花紫苑君、教頭先生がお呼びです。直ちに教頭室へ向かってください。繰り返しますーーー』

僕が教頭に？　一体何の用だろう？

「紫苑って教頭先生と接点あったっけ？」

「いや、あの人とは喋ったことすらないはずだが？」

「とにかく呼ばれていたのだから、行ってみれば呼ばれた訳もわかるじゃろ」

「それもそうだね。悪いけどちょっと行ってくるよ。召喚大会の一回戦開始十分前までに戻ってこなかったら向こうで待っててくれるかな？」

「うむ。了解じゃ」

そう言って僕は教頭室へ向かった。

教頭室前・・・

コンコンッ

「入りたまえ」

ガチャッ

「失礼します」

一応目上なのでこんな感じに礼儀を払う。

「あの、どのようなご用件でしょうか？」

「いや、なに。君とちょっとした取引がしたくてね」

「取引、ですか？」

取引？　僕がこの人とするような物などないはずだが？

「そう。君は学園長側の人間だろう？」

「何のことでしょうか？」

この人はさっきの会話を知っているのか？　今は様子を見るために隠しておくか。

「いや、隠さなくていい。如月ハイランドのチケットを回収して欲しいとでも頼まれたのだろう？」

「すいませんが自分にはサッパリなのですが」

先ほど険悪な感じだったからな。互いの情報を多少は集めているんだろう。

「まあ隠すというならそれでもいいがね」

「それで、本題の取引というのは？」

「簡単な話さ。君には私の邪魔をしないで欲しいんだよ」

「邪魔というのは？」

「学園長が君などの生徒に頼み事をしているのと同じように、私にも協力してくれる生徒がいてね。彼らの邪魔をしないでもらいたいんだよ」

成る程。要は学園長を引きずり落としたいから、その為の計画を邪魔するなということかな？

だけど、僕は姫路さんの転校を阻止する為にやっているんだ。

そんなことができるわけがない。

「断ると言ったら？」

所詮この人には僕を動かせる為のカードは持っていないだろう。

それにこの人の為に動く気もないし、義理もない。

「そうだな、これが世界中にばらまかれるかな？」

そう言って教頭は書類を僕に渡して自分は仕事をしているであろう席に着いた。

「なっ！？　こ、これは！」

僕に渡されたのは僕の過去に関する情報が細々とまとめられた書類。

「アンタ、これをどこで手に入れた？」

「まあまあ、そう怖い顔をするな。とあるルートから手に入れてね」

「ふざけるなっ！　僕に関する情報はSランクの人間だけが見ることが許される物だ！　アンタの様な一般人が見られる様な物じゃない！」

どういうことだ!?　何で情報が漏れている!?　しかも僕の情報が。

まさか、組織内での裏切り者がいるのか!?　しかも、Sランクの人間の。

因みに今まで裏切りは何度かあったが、Sランクの人間が裏切るようなことは今までで一度しかなかったのに。その一回ってのは僕の両親なんだけどね。

でも僕はそれを認めていない。僕の両親は戦闘員の部署で二人ともSランク。

父がトップ1。母がトップ2。まさに最強のコンビだったらしい。

このことはSランクになって初めて聞いた。裏切り者の情報は裏切り者を始末した後、

Sランクの以外の者は記憶を消され、その者のことはもう覚えていない。

このことはSランクの人間だけが閲覧できるようになっている。

以前説明したように国家機密情報局員の情報はトップシークレット。

しかも、Sランクの人間の情報となると、同じSランクの人間だけが見ることができるようになっている。そうなると必然的に世界中から抹消された僕の情報をこうして見ることのできるのは国家機密情報局員のSランクの人間ということになる。

「色々あってね。それにしても驚きだね。まさか君が生きているとは。死んだと報道されていたが？」

「くっ！」

残念ながら現在メン・イン・ブ○ックの映画みたいに持ち歩ける記憶抹消装置は試験中で実用段階にはもう少しだけ時間がかかる。今は何としてもこの情報の流失は抑えなくては・・・・・！

「・・・・・わかりました。協力します」

ごめん。皆。

「おお！　それはよかっ「ただし、こちらにも条件があります」何かね？」

「僕の大切な人たちを傷つけるな」

「君の大切な人達というと？」

「わかってるはずだ」

「まあ、大体ね。いいだろう。彼らを傷つけないと約束しよう。これで、交渉成立だね？」

こちらが主導権を握っているということで余裕があるらしいな。舐められたモンだな。

「はい」

こうして、銀のＪ（ジャック）は魔の手に墜ちた。

秀吉ｓｉｄｅ

紫苑が十分前になっても戻ってこなかったので、現在試合会場へ向かっているところじゃ。

「あっ！　秀吉～」

「ん？」

すると紫苑が小走りで向かってきた。

「おお！　よかった、用事は済んだようじゃの」

「ごめんね遅くなって」

「気にするでない。実際、一回戦には遅れておらんのじゃし」

「それもそうだね。じゃあ試合会場へ行こうか」

試合会場・・・

「それでは、試験召喚大会一回戦を始めたいと思います」

因みにワシらはCブロック。
明久と雄二のペアがDブロックで参加している。
Aブロックには姉上と霧島という強力なペアがおるから心配じゃが、今はワシらも心配ばかりはしておれんのう。同じブロックには真奈と工藤という同じく強力なペアがおるのじゃから。
真奈はチケットをもらったら誰と行くつもりなんじゃろう？

気になるのう。

「秀吉、そろそろいくよ？」

「う、うむ」

考え事をしておったから負けたなどでは話にならんからな。
しっかりせんと！　まあ紫苑がおるからそう簡単には負けないんじゃろうがいつまでも
紫苑に頼り続ける訳にはいかんし、頑張らなくては。

「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

『Ｄクラス　笹島圭吾　＆　Ｄクラス　鈴木一郎
英語Ｒ　１０２点　＆　１２７点

ＶＳ

Ｆクラス　木下秀吉　＆　Ｆクラス　氷花紫苑
英語Ｒ　５８点　＆　４１６点　』

相変わらず紫苑は勉強ができるのう。
ワシの約８倍じゃ。

「すまぬ紫苑。ワシはあまり役に立てそうにない」

「そんなことないって。秀吉がいるいないじゃ随分変わってくるよ？」

「そうかのう？」

「そうだって。「それでは、始めてください」！　来るよ秀吉」

「うむ！」

相手の召喚獣はオーソドックスな剣と槍。
すると二対ともワシの召喚獣の方に突っ込んできた。

「秀吉、防御だ！」

「了解じゃ！」

長刀で二体の攻撃を受ける。若干点数が減ったがまだいける。

「二体とも秀吉の方へ行っちゃって良かったの？　僕がフリーだけど？」

すると紫苑の召喚獣が武器を取り出し、刃の部分で斧の様に思い切り相手の召喚獣の武器に叩き付ける。すると・・・・・。

「げっ！　剣が折られたぞ！」

「お、俺も折られた！」

「今だよ秀吉！」

「くらえっ！」

長刀で相手の召喚獣を二体とも真っ二つに切り裂いた。

「勝者、木下・氷花ペア」

「やったね秀吉」

「お主のサポートのおかげじゃよ」

「そんなことないってば。二体とも秀吉が倒したじゃないか」

「な、何かそう言われると嬉しいのう」

やっぱり紫苑といると安心できるのう。

「・・・・・・・・・・・・秀吉、紫苑。ちょっと来て欲しい」

「ん？　ムッツリーニ、いったいどうしたんじゃ？」

「・・・・・・・・・・・・営業妨害がいる」

「何じゃと!?　それなら早く戻るぞ紫苑」

「あ、うん・・・・・・」

何やら紫苑の様子がおかしいのじゃが？

「どうしたのじゃ紫苑？」

「あ、ううん。何でもないよ！　それじゃあ早く戻ろうか！」

そう言ってワシらは教室へ戻って行った。

Ｆクラスの教室前廊下・・・

紫苑ｓｉｄｅ

「む。あの連中じゃな。ってもう雄二がおるではないか」

確かに、廊下まで聞こえる大声でしゃべってる奴らがいる。

もしかしてあいつらが教頭の言ってた協力者か？

好き勝手言ってるな。　僕が手を出せば『劈掛拳（ひかけん）（中国拳法の一種）で始まる交渉術』から『八極拳（はっきょくけん）（中国拳法の一種）でつなぐ交渉術』、そして、『必殺技で締める交渉術』をおみまいしてやったのに。

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなぁ』

客が一人、また一人と席を立つ。その中には教頭の姿も。

『店、変えるか』

『そうしようか』

「あ、お客さん！」

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたので、暫定的にこのような物を使ってしまいました。ですが、たった

今本物のテーブルが届きましたのでご安心下さい」

雄二が頭を下げている後ろにはFクラスの皆が演劇部で見たことがあるテーブルを運んでいた。
すると何人かの客は残ってくれたが、やはり数は減ってしまった。

「あれ？　テーブルを入れ替えてるの？」

「あ、おかえり。美波に姫路さん。一回戦はどうだった？」

「はいっ。なんとか勝てました」

どうやら姫路さんと島田さんが試合に勝利し、帰還したもようだ。

「そんなことより、テーブル入れ替えちゃってもいいの？　演劇部にあるテーブルなんて。そこまで多くはないはずでしょう？」

ないなら、調達してくれば良いんだけど、生憎僕は厨房が忙しいらしいので、調達にはいけないらしい。

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせて頂きますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおくつろぎ下さい」

じゃ、僕も日々の料理の腕を振るうかな。

試合会場・・・

しばらく仕事をしていると二回戦の時間になったので試合会場に来ている。

「それでは二回戦を始めます」

「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

『Cクラス　黒崎トオル　＆　Bクラス　工藤信二
化学　１４６点　＆　１８１点
VS
Fクラス　木下秀吉　＆　Fクラス　氷花紫苑
化学　７８点　＆　２８６点』

「そうだ！　秀吉。今回は折角だから自分より強い相手との戦闘の練習しておく？」

「そうじゃな。基本的にワシは点数の高い者とばかりやるのじゃろうから、学んでおきたいのう」

「じゃ、やりますか」

秀吉強化作戦だな。

「それでは、始めてください」

「どうすれば良いかって言うと、まず敵をできるだけ引きつけるんだ」

小さい声で秀吉にアドバイスを送る。

「う、うむ」

「そして、攻撃瞬間に少しだけ避けるんだ」

「こ、こうか？」

ちょうど秀吉の方に向かっていた召喚獣の攻撃が空を切る。

「例え、自分より強い相手でも、ギリギリまで引きつけて、最小限の動きだけで避けることができれば、ついていくことができるはずだよ」

「た、確かに互角に渡り合えておるがなかなか難しいのう」

「接近戦ではね。でも、慣れれば召喚獣バトルの時には大いに役立つはずだよ」

見ると、秀吉の召喚獣が相手の召喚獣の攻撃をかわしつつ、地味ながら点数を減らしている。

「流石秀吉。物覚えが早いね。伊達に演劇の内容を覚えてないね」

「紫苑、お主の方は、ってもう倒しておるんじゃな」

「今倒したばかりだよ。そのまま頑張って！」

「うう。何か紫苑が厳しい気がするのじゃ」

そのまま秀吉は順調に点数を減らしていったが、最後に攻撃に当たってしまい、相打ちとなった。

「勝者、木下・氷花ペア」

「ふう、なんとか相打ちにできたぞい」

「相打ちじゃあ秀吉がクラス代表になった時には負けちゃうよ？
さあ、このままＡクラスの連中とも渡り合えるくらいになろうよ！」

「うう～。がんばるのじゃ」

「その息だよ」

さあ、次に試合も頑張るぞ！

第十六問　妨害と脅迫と召喚大会前半（後書き）

次回　メイドと女装と裁きの鉄槌

第十七問　メイドと女装と裁きの鉄槌（前書き）

ユニークが十万を超えました！！

読者の皆様、ありがとうございます！
これからも頑張りますので、応援してくれると嬉しいです。

テストがいろんな意味で終了！
更新スピードを頑張って上げていきます。

第十七問　メイドと女装と裁きの鉄槌

以下の問いに答えなさい。
『ＰＫＯとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希と氷花紫苑の答え
『Ｐｅａｃｅ－Ｋｅｅｐｉｎｇ－Ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓ』

教師のコメント
そうですね。Ｕｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎｓ　Ｐｅａｃｅｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓとも呼ばれたりします。
余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え
『Ｐａｎｔｓ　Ｋｏｓｈｉ－ｔｓｕｋｉ　Ｏｐｐａｉ　の略。
世界中のスリーサイズを規定する下着メーカーのこと』

教師のコメント
君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え
『パウエル・金本・岡田　の略』

教師のコメント
それはセ界の平和を守る人達です。

「ただいま戻ったぞい・・・・・・ってあまり客はおらんようじゃの・・・・・・」

「あっ、お帰り二人とも。試合はどうだった？」

客があまりいないので、皆さんも暇そうだな。やはりさっきの妨害が痛かったか・・・・・・

「ばっちり勝ってきたぞい。そっちはどうじゃった？」

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」

「うん。トイレに寄ってくるってさ」

「あの後妨害はあったの？」

「・・・・・・・・・・・・あれから、営業妨害は来てない。ここ以外で何かが起きてる可能性が高い」

「確かにな」

そうやって四人で考え込んでいると、

『お兄さん、すいませんです』

『いや。きにするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

ん？　これは雄二と誰かさんの声だ。声の高さからまだ小学生くらいだろうか？

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「あ、うん。そうみたいだね」

『んで、探してるのはどんなヤツだ？』

人捜しか？　後で手伝ってやるかな・・・・・・

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな～。ねぇ、5年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなぁ』

最後のヤツ、ロリコンか？

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ』

『お兄ちゃん？　名前はなんて言うんだ？』

『あぅ・・・・・・。わからないです・・・・・・』

『？　家族の兄じゃないのか？　それなら、何か特徴は？』

特徴次第では多少特定しやすくなるんだが、

『えっと・・・・・バカなお兄ちゃんでした！』

言葉を失うとは正にこのことだね。

『そうか』

流石に雄二でもこの特徴じゃあ・・・・・・

『・・・・・沢山いるんだが？』

多すぎて特定できないだろう。

『あ、あの、そうじゃなくて、その・・・・・・』

『うん？　他に何か特徴があるのか？』

『その・・・・・すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『『吉井だな』』』　明久だな。

あれ？　明久泣いてる？

「全く失礼な！　僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違いーーー」

「あっ！　バカなお兄ちゃんだっ！」

葉月とか言う女の子が明久に抱きついた。凄い、あの女の子、的確に明久の鳩尾に頭突きをヒットさせている！

「絶対に人違い、がどうした？」

「・・・・・人違いだと、いいなぁ・・・・・・。って、キミは誰？　見たところ小学生だけど、僕にそんな知り合いはいないよ？」

明久キミは何てことを！

「え？　お兄ちゃん・・・・・・知らないって、ひどい・・・・・・」

泣かせてるし・・・・・・

「バカなお兄ちゃんのバカぁっ！　バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

純粋とは、時に残酷なんだな・・・・・・

「明久――じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「後でバカなお兄ちゃんはこの人ですって皆に教えておくから、今は勘弁してやってね？」

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのにー」

ガラッ！

あ、姫路さんと島田さんだ。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「ごぶぁっ！？」

凄いタイミングと連携で明久のライフポイントを一気に大幅に奪ったな。

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「こ、こうですか？」

明久がやばそうだな。

「ちょっと待って！　結婚の約束なんて僕は全然――」

「ふえぇんっ！　酷いですっ！　ファーストキスもあげたのにーっ！」

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」

「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」
「お願いひまふっ！　はなひをきいてくらはいっ！」
「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちょっと待ってなさい」
「あのね、美波。包丁って一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」
「止めるんだ二人とも、明久のライフはもうとっくにゼロだよ」
「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」
ん？　お姉ちゃんってことはこの子は島田さんの妹？
「ああっ！　あのときのぬいぐるみの子か！」
どうやら知り合いみたいだな。
「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月です」
「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」
「はいですっ！」
「うんうん。それは良かった。それにしてもよく学校がわかったね？」
「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」

「あれ？　葉月ってアキと知り合いなの？」

「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「へ？」

さっきそれらしきことを言ってたじゃん。

なんか姫路さんがブツブツ言っているが、聞かなかったことにしよう。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！　ぬいぐるみありがとうでしたっ！」

礼儀正しい子だな。姫路さんとも知り合いだろうか？

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！　毎日一緒に寝てるです」

「良かった～。気に入ってくれたんだ」

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

そういえばそのことについて話し合ってたんだよね！

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？　どんな話だ？」

「えっとね、中華喫茶は汚いから聞かない方がいい、って」

さっきの常夏コンビとやらの仕業かな？　だとしたら、ボコボコにしてボロ雑巾のようにしてやる。

「ふむ・・・・・。例の連中の妨害が続いてるんだろうな。探し出してシバき倒すか」

僕も同意見だ。

「例の連中って常夏コンビ？　まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「そうだね。少なくとも、噂が流れてどこまで広がっているかを確認しないと」

悪事千里を走るって言うしな。

「お兄ちゃん、葉月と一緒にいこっ」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あまり遊べないんだ」

なだすように明久が葉月ちゃんの頭を撫でる。

「む～。折角会いに来たのに～」

「それなら、そのチビッ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要もあるからな」

偵察は戦略を立てるための基本中の基本だからね。

「ん～、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯も食べに行く？」

「うんっ」

嬉しそうだな。明久って結構もてるよね・・・・・・性別なんて関係なく。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

「ワシも同行しても良いかの？」

「構わんぞ」

「・・・・・・・・・・喫茶店なら任せておけ」

「そうか。悪いな、ムッツリーニ」

「いいんですか？　ありがとうございます。土屋君」

「僕も行くよ」

これで合計7人。ちょっと多い気がするけどね。

「それでチビッ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えっとですね・・・・・・短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店――」

「なんだって!?　雄二、それはすぐに向かわないと!」

「そうだな明久!　我がクラスの成功のために、低いアングルから綿密に調査しないとな!」

そう言って二人は走り去っていった。場所わかるのかなあの二人?

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです・・・・・・」

「お兄ちゃんのバカ!」

「あやつら・・・・・・」

「仕方ないよ秀吉。だってあの二人だもの」

Aクラス前・・・

「頼む!　ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ!」

まさかと思ったが本当にここ(Aクラス)だったとは、

「そっか。ここって坂本の大好きな翔子のいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだからーー」

「・・・・・・・・・・・・・・（パシャパシャパシャ！）」

さっき任せとけって言ってたばかりなのに・・・・・・

「・・・・・・ムッツリーニ？」

「・・・・・・・・・・・・・人違い」

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・盗撮」

正直者め。

「ムッツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られてる女の子が可哀想だとーーー」

「・・・・・・・・・・・・・一枚百円」

「2ダース貰おうーーー可哀想だと思わないのかい？」

「ムッツリーニよ。真奈のがあったらワシも欲しいんじゃが」

あっ、ここにも正直者が二人いる。

「二人とも、普通に注文してるわよ」

最近秀吉は恋してるからなぁ。

「・・・・・・・・・・・・そろそろ当番だから戻る」

そしてさり気なく二人に写真を渡している。
いつの間にプリントアウトを済ませたんだ？

「まったく、ムッツリーニにも困ったものだね」

「はっはっは。まったくじゃな」

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

バレてるし。

「やだな～。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それよりそろそろお店に入ろう？　もうすごくお腹が減っちゃったよ」

「あ、そうですね。入りましょうか」

姫路さん、騙されてるよ？

「うんうん。早く敵情視察も済ませないとーーー写ってるのは男の足ばかりじゃないか畜生！」

「やっぱり見てるじゃないですかっ！」

「ご、ごめんなひゃい！　くひをひっぱらないで！」

「真奈は相変わらず可愛いのう」

「秀吉、早く仕舞わないと、真奈に見つかるよ？」

「そ、それは困るっ！」

直ぐさま懐に写真を仕舞う秀吉。

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

「・・・・・おかえりなさいませ、お嬢様」

島田さんが開けたドアから出迎えてくれたのは、霧島さんだ。

「わぁ、綺麗・・・・・・」

思わず姫路さんが感嘆の声を漏らすのも頷けるくらいによく似合っている。

霧島さんは和服が似合いそうだがメイド服も中々似合っているから驚きだ。

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ～！」

「邪魔になるぞい」

「同じく」

「・・・・・・おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

「・・・・・・チッ」

渋々雄二も入店。

「・・・・・・おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

かなりアレンジされていた。

「霧島さん、大胆です・・・・・・！」

「ウチも見習わないとね・・・・・・」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

葉月ちゃん、キミはそのままでいいんだよ。

「「おかえりなさいませ。ご主人様、お嬢様」」

真奈と工藤さんも出迎えてくれた。

「いらっしゃい。秀吉君」

「う、うむ。似合っておるのう／／／」

「あ、ありがと／／／」

この二人は両思いなのに、もったいないなぁ。

「お席にご案内します、と、言いたい所だけとさ」

「紫苑、あのバカ。殺っちゃっていいよ？」

「・・・・・優子が困ってる」

「え？　誰かいるの？」

霧島さんが指を指した方向を見ていると、

『な～良いだろ？　一緒に回ろうぜ？』

『あ、あの。そういうのはちょっと、』

『え～、彼氏とかと約束してんの？』

『っ！　いえ、そういうわけではないんですが・・・・・』

『じゃあ良いじゃん！　ホラ、行こうぜ』

『あっ！　そ、その、困ります！　お店の方もあるので・・・・・』

クソ野郎がいた。

「成る程。わかった。直ちに処理するよ。悪いけど、ゴミ箱を用意

しといて貰えるかな？
皆は先に席に着いてて」

「あいあい」

そう言い残して、クソ野郎の元へ向かう。
アイツ、よくも優子に触ったな。しかもナンパ目的で。ブチ殺す！

「唸れッ！　僕の小宇宙（コスモ）―！！」

「おごぁっ！？」

「あ、紫苑」

全身全霊をかけた拳を顔面にたたき込む。
チッ！　後方に飛んで、打点をずらされたか。

「優子、大丈夫？」

「え、ええ。大丈夫よ」

「特に何もされてない？」

「今、腕を掴まれたくらいよ」

「くっ、よくも・・・・・・！　優子、後で保健室に行って消毒して貰おう？」

「う、うん。後、その・・・・・・」

「何？　何かされた？」

「顔が近い」

「え？　あ！　ご、ごめん」

いかんいかん。我を忘れていたとはいえ、確かに顔が近かったな。

「すぐに焼却炉にぶち込んで来るからちょっと待っててね？」

「え？　焼却炉？」

さて、さっさとこいつをぶちのめすか。

「てめぇ、何しやがる！？」

「黙れクソ野郎。後方に飛んで、威力を弱めたくせに。クソ野郎」

「それとこれとは話が別だろう！？　それよりも先輩に向かってクソ野郎を連呼するな！」

「うるさいぞクソ野郎。僕の中ではアンタはチンピラと変態を足して、２でかけたような存在なんだよクソ野郎」

「かけるのか！？　そこは普通２で割るんじゃないのか！？」

「うるさいですよ。変態先輩」

「好き勝手言いやがって、やるか？」

「上等ですクソ野郎」

多分読者の皆様はこいつ誰？　という方もいらっしゃるでしょう。
仕方なく、僕がこいつの自己紹介を簡単にしますね。
こいつはアレン・ブラン。国家機密情報局員、戦闘員のSランクの人間で、トップ3の人間である。
国籍はイギリス。暇さえあれば、ナンパするようなヤツです。
それにしても、こいつに優子が触れられるなんて。許せない！

「「喰らえっ！」」

秀吉ｓｉｄｅ

先ほど姉上をナンパしようとしていたヤツは紫苑と何の映画ですか？　と聞かれてもいいくらいの激しい戦闘をしていた。紫苑ってあんなに強かったんじゃのう。

「改めて、お席にご案内します」

ワシらは席に着くこととした。

「・・・・・では、メニューをどうぞ」

流石Ａクラス、メニューも無駄に豪華じゃのう。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「ワシは『アーモンドクッキー』じゃ」

「んじゃ、俺はーーー」

「・・・・・・ご注文を繰り返します」

うむ？　雄二の言葉を遮るように霧島が注文を繰り返しておるが、良いのか？

「・・・・・『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、『アーモンドクッキー』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいでしょうか？」

「全然よろしくねぇぞっ！？」

雄二は霧島に滅法弱いのう。

「・・・・・・では食器をご用意致します」

それぞれ頼んだ物に合う食器が目の前に置かれる。

「しょ、翔子！　コレ本当にうちの実印だぞ！　どうやって手に入れたんだ！？」

「・・・・・・では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下

さい」

「・・・・・明久、秀吉。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ・・・・・・！」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

「お主も大変じゃのう」

「あの～、ちょっといいかしら？」

すると、突然女性の声がする。

「あれ？　雫さん？　どうしてここに？」

うむ？　真奈の知り合いかの？　それにしても、美人じゃな。大人の女性、というやつじゃろうか？

「初めまして、皆さん。私は『鈴野　雫』です。あなた方は、真奈ちゃんと紫苑君のお友達ですか？」

「「「「「「「はい」」」」」」」

その場にいた真奈以外の皆が同時に答える。

「そうでしたか、皆さん。これからも二人と友達でいてくださいね？　それと、私の連れのバカがご迷惑かけてすいません。きちんと言い聞かせておくので勘弁してくださいね？」

ワシは恋仲にもなりたいがのう。

「あの、失礼かもしれませんが、あなたは宮野さんの義理のお姉さんとかですか？」

姫路がワシも気になっている事を聞いてくれた。

確かにそれくらいの若さに見えるが、

「あら、そんなに若く見えるかしら？」

ちょっと嬉しそうに鈴野さんが言う。

「そんなことないよ、この人は今二十ｎ「あ、あなたが噂の秀吉君？」」

「は、はい」

思わず敬語になってしもうた。

「あのね～真奈ちゃんったら、私と合う度にあなたのこｔ「きゃー！　きゃー！」ちょっと、他のお客さんに迷惑でしょ？」

「あ、すみません。ってそうじゃなくて！　それは言わない約束でしたよね！？」

「あなたが私の年齢を言おうとしたからでしょ？　女性の実年齢は永遠に秘密にしておくものなのよ」

「うっ、す、すみません・・・・・・」

「わかればよろしい。さて、私はあのバカを回収して行くわね。そ

れでは皆さん。二人のことをよろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げて言う鈴野さん、礼儀正しい。

「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」

当然ワシらは、はいと答える。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

丁度その時、例の二人組が入ってきた。

「あ、あの人達だよ。さっき大声で『中華喫茶は汚い』って言ってたの」

さっきということは何度も来ているという事じゃろうか？

『それにしても、この中華喫茶は綺麗でいいな！』

『そうだな。さっきいった二―Ｆの中華喫茶は酷かったからな！』

『テーブルが腐った箱だったし、虫も沸いていたもんな！』

わざわざ大声で叫びあっている。マナーもへったくれもない。

ＴＰＯというものを知らないんじゃろうか？

「待て、明久」

雄二が明久を止める。

「雄二、どうして止めるのさ！　あの連中を早く止めないと！」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ」

「でも、このまま見ているというのは」

「いや、やるなら頭を使えということだ。おい、翔子」

「・・・・・・何？」

「あの連中がここに来たのは始めてか？」

「・・・・・さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきとかわらない。ずっと同じようなことを言っている」

「ホント、迷惑だよね」

「あんな事を言うためだけに入ってこないで欲しいわ」

工藤と姉上が霧島と同じようにあの連中のことを迷惑そうに言う。

「そうか・・・・・・。よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

「・・・・・・わかった」

メイド服を借りてどうするんじゃ？　まさかワシが着るのか？　それは姉上に折檻されるからごめんなんじゃがーーーん？　何故だか視界が急に暗くなったような、

「秀吉君は見ちゃダメ」

「ま、真奈!?　何も見えんのじゃが一体何が起こっておるのじゃ!?」

「し、翔子ちゃん!?　こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ!」

「そうよ!　ここにはケダモノが沢山いるのよ!?」

「わぁ～。お姉さん、胸おっきいです～」

「だ、代表!　いくら何でも」

「代表大胆だね!」

成る程、大体の想像はついた。

「・・・・・雄二が欲しいって言ったから」

「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいと言った!?　予備のヤツがあれば貸してくれって意味だ!」

「・・・・・今、持って来る」

「その必要は無いみたいだよ?」

「どういうことじゃ?　真奈?」

「ホラっ、紫苑が既にやってる」

「「「「「「「「えっ？　どこで？」」」」」」」」

真奈以外の皆は真奈が指刺す方へ向いてみるが紫苑らしき姿はどこにもない。

「ホラ、今接触してるメイドさんだよ」

『お客様、ちょっとよろしいでしょうか？』

『なんだ？　――――へぇ。こんなコもいたんだな』

『結構可愛いな』

「おい、もしかして、あれか？」

「そうだよ。相変わらず女子に見えるよね〜。紫苑の変装」

現在あの連中と銀髪の真奈と同じくらいの髪の長さをしたメイドが接触している。

『テーブルの下を掃除致しますので、少々席を立ってもらえないでしょうか？』

『掃除？　さっさと済ませくれよな？』

二人とも席を立つ。

『ありがとうございます。それではーーー』

二人の方を向き直り――――

『裡門頂肘(りもんちゅうちゅう)！』

『ぐぼぉっ！？』

一人に向かって、肘打ちを入れる。

くらった一人は吹っ飛ぶ。

『なっ！？　てめぇ！　何しやがｔ』

『浸透勁(しんとうけい)！』

『おぶっ！？』

手を密着させたらいきなりもう一人もその場に崩れ落ちた。

何をしたのかよくここからではわからないが、あの二人をのしたのは事実じゃろう。

『きゃー！　この人に今お尻を撫でられました！』

『ちょ、ちょっとまーーーぐぶぁっ！』

『こんな公衆の面前で痴漢行為とはこのゲス野郎が！』

『触られた方の身にもなってみるんだねこの変態どもが！』

チャンスは逃すまいと明久と雄二の二人が紫苑？　のもとへ向かって行った。

『な、何を見て・・・・・・』

『黙れ！　たった今、コイツはこのウェイトレスのお尻を撫でまくってただろうが！　俺の目は節穴ではないぞ！』

すまぬ。正直節穴だと思う。

『今のでこのコがどれだけ深い傷を負ったか考えてみろや！』

『だから・・・・・・傷を、負って・・・・・・いるのは、こっち・・・・・・』

『さて。抵抗しないのなら痴漢行為取り調べの為、ちょっと来てもらおうか』

紫苑？　にやられた痛みが相当痛むのだろう。随分一方的な会話に聞こえる。

『逃げる、ぞ。夏川』

『逃がすか！　追うぞ明久！　紫苑ちゃん！』

『オッケー！』

『何言ってるんですかご主人様？　私の名前は雨咲智美（あまざきさとみ）ですよ？それに、もうすぐ試合が始まるので、後は任せましたよご主人様！』

そう言って、こちらに戻ってくる雨咲さん。それに咄嗟に偽名を使うなんて、初めから考えていたんじゃろうか？

「何なんでしょう？　この敗北感」

「本当の敵は女子だと思ってたのに」

「・・・・・羨ましい」

「ちょっと自信なくしちゃうなぁ」

「秀吉以外にも、こんな・・・」

「私も初めは凹んだよ」

女子がそれぞれの感想？　を言っている。

「それでは秀吉君、先に会場で待っていてくださいね？」

「りょ、了解じゃ」

危ない危ない。ワシとしたことが一瞬見入ってしまった。

第十七問　メイドと女装と裁きの鉄槌（後書き）

次回　チンピラとチャイナ服と召喚大会後編

鈴野さんも国家機密情報局員で、サポートでのSランクの人間。トップ5。

髪の色は青、真奈と同じくらいの長さ。スタイルは抜群で、ハーバード大学出身。吉井玲さんとは友人。

簡単に説明したつもりですが、何かわからない点があったらどうぞ。

後、召喚大会ですが、BブロックとCブロックでは明久雄二ペアの方とは教科が出るタイミングが違います。

説明しておらず、すいませんでした。

第十八問　チンピラとチャイナ服と召喚大会後編

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。
『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？
【？　可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（　）】
また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え
『【？可愛らしさ】候補・・・・・・姫路瑞希＆島田美波』

教師のコメント
甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え
『【？可愛らしさ】候補・・・・・・姫路瑞希×　木下秀吉×　島田美波』

教師のコメント
用紙についている血痕が気になるところです。

坂本雄二の答え
『【？その他（結婚相手）】候補・・・・・・霧島翔子』

教師のコメント
どうしてＡクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

氷花紫苑の答え

『【?統率力】候補・・・・・・島田美波　霧島翔子　木下優子などの発言力のある人』

教師のコメント
指揮する人がいないと始まりませんからね。

木下秀吉の答え
『【?可愛らしさ】候補・・・・・・宮野真奈』

教師のコメント
木下君にも気になる人ができましたか。

「さて、次は四回戦だけど」

「強敵じゃのう」

変装を解いて三回戦を難なく勝ち上がってきた僕たち。
でも四回戦の相手はそう簡単に勝てる相手じゃない。次の対戦相手は工藤さん&真奈ペア。
しかも教科は保健体育。工藤さんは確実に４００点オーバーしてきそうだし、真奈も苦手じゃないし。
う～ん。どうしたものか。
因みに明久達のペアは不戦勝だったらしい。何でも、対戦相手が食中毒だとか。
原因がウチの喫茶ではないことを祈りたい。

「それについてはまた後で考えるとして、今は喫茶店の建て直しを考えるぞ」

「あいあい」

現在片手で数えきれるくらいしか客がいない。

あの常夏コンビめ～！

「やはりインパクトがあることを遣る必要があるよな」

「ふむ。それで何をするか、じゃが・・・・・・」

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。中華とコレでは安直すぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」

そう言って雄二はチャイナ服を取り出した。

一体雄二はどこからそんな物を仕入れているんだろう？

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパクトがあるじゃろうな。コレを宣伝用にーーー」

女子二人と多分秀吉がーーー

「ああ。コレをーーー明久が着る」

ビックインパクト！

「ちょっ・・・・・！　お願い、許して！　チャイナ服を着たら、

きっと僕は女装趣味の変態だって皆に認識されちゃう！」

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田に着てもらう」

「あ、なんだ。良かった～」

「ワシが着るのは冗談ではないのかのぅ・・・・・・？」

仕方ないよ秀吉。いっそのこと、もう運命として認めてみたらどうかな？

「諦めなよ秀吉」

「何を言ってるんだ紫苑。お前も着るんだぞ？」

「え？　でも三人が着れば十分宣伝になると思うけど？　それに僕厨房だし」

「それは男性客にはな。だからお前には男性用のを着てもらう。厨房は何とかなるだろう」

「なるほど！　それで女性客の数を増やそうという訳じゃな！」

「え！？　それって僕に死ねって言ってるの！？」

冗談じゃない！　それで女性客に言い寄られてるのを優子に見られたらどんな目に遭わされるかわからないというのに！

「大丈夫だろ？　紫苑が大好きな木下姉は召喚大会やら店があるだろうから遊びに来ることはあまりないだろうし」

「でも秀吉が優子に言いそうなんだけど？」

「紫苑。お主はワシを信じてくれんのか？」

「今までその手に何度引っかかってきたことか・・・・・・。だけどもう騙されないぞ！」

「というか大好きだというのは否定しないんだな」

そりゃそうだ。好きなんだし。それに既にばれている雄二達に隠してもどうしようもないし。

「チッ。後で姉上に紫苑がナンパしてたと報告するつもりじゃったのに」

出たっ！　腹黒秀吉！　恐らくいつも通り何かしらの報酬を用意されているのだろう。

今回は多分、真奈関係の報酬だろう。

「まあいいよ。どうせ渋ったって仕方ないんだし」

「よし！　後は姫路と島田だな」

ガラッ！

「たっだいま～！」

「ただいま戻りました～」

その二人が帰ってきた。

「帰ってきたばかりで悪いが二人とも、クラスの売り上げの為にも協力してもらうぞ」

「そう言うことだよ二人とも」

明久と雄二が言い寄る。

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ・・・・・・？」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど・・・・・・」

二人とも明らかに引いている。

「やれ、明久」

「オーケー！　へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛ぁっ！　マジすんませんした！　自分チョーシくれてましたっ！」

「「弱いな（ね）、お前（明久）」」

「どうしてまた、急にそんなこと言い出すのよ？　前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたと思うけど」

まあ当然の反応だよね。

「店の宣伝の為と、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

「大好――――愛してる」

正直者め。

「・・・・・・お前は本当に嘘がつけないヤツだな」

「し、仕方ないわね。売り上げの為に、仕方なく協力してあげるわ」

「そ、そうですね！　お店の為ですしね！」

雄二って二人を扱うのが上手いよな。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？　葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い・・・・・・？　あ、うん！　手伝うから、あの服葉月にもちょうだい！」

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数がーーー」

「・・・・・・・・・・・・・・・！！（チクチクチクチク）」

いきなり康太が現れたかと思ったら裁縫を始めだした。

「ム、ムッツリーニ！　どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？　っていうかさっきまでいなかったよね！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・俺の嗅覚を舐めるな」

嗅覚？

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

「いや、今着替えてもらいたい」

「「え？」」

二人の声がハモる。

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

「こ、これを来て出場しろって言うの・・・・・・？」

「流石に恥ずかしいです・・・・・・」

「二人とも、お願いだ」

明久が頭を下げる。

「明久・・・・・・。お前は本当にーーーチャイナが好きなんだな・・・・・・」

「もしかして吉井君、私の事情を知ってーーー」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

島田さんが姫路さんの言葉を遮るように言った。

ナイス判断だ。

「あ。は、はいっ！　これくらいお安いご用です！」

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たちの所属がＦクラスであることを強調するんだぞ」

「オッケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

二人は会場に向かって行った。

「秀吉、紫苑、お前らもだ」

「了解じゃ」

「仕方ないよね」

「・・・・・・・・・・・・できた」

「わ、このお兄ちゃん凄いです！」

まだ5分と経っていないのにチャイナドレスを作り上げてしまった康太。

未来の奥さんは大助かりだな。

「ふむ。それでは着替えるとするかの」

「ちょ、ちょっと秀吉！　ここで着替えるの！？　きちんと女子更

衣室で着替えないとダメだよ！」

「まったく、ワシは男じゃというのに。では紫苑、一緒に着替えようぞ」

「あいあい」

ん？　殺気がする。

「いぃっしゃぁぁぁ！」

ヒュッ！　（明久がハイキックをする音）

パシッ！　（明久のハイキックを掴む音）

「ど、どうしたの明久？　いきなり蹴りを繰り出すなんて」

「許さん！　秀吉と一緒に着替えるなど！　秀吉を紫苑の魔の手から守るんだ！」

「大丈夫じゃ明久よ。紫苑とは子供の頃からよく一緒に風呂も入っておるのじゃから今更ワシの裸を見てもどうこうならんぞい。それにワシらは男同士じゃし」

「「何だって！」」

その後、明久と康太がいつものように襲い掛かってきたから軽くあしらってあげた。

「たっだいま！」

「ただいま戻りました！」

二人が帰還したみたいだな。

「丁度良かったよ。二人とも疲れてるところ悪いけど、ホールに回ってくれる？」

二人の活躍や、団子の味などもあり、席がだんだん埋まってきた。
ん？　あれは・・・・・・。

『君。注文をしてもいいかな？』

教頭の竹原が来ていた。
何でこの場所に？　僕の監視のつもりか？

「紫苑、どうしたのじゃ？　む、あれは竹原教頭じゃのう。あの人がどうかしたのかの？」

秀吉や皆を僕たち国家機密情報局のことに巻きこみたくない。

「いや、ちょっと珍しかったもんだからさ。」

すると明久が教室を出て行った。
気になって教室から出て明久を目で追うと誰だかわからないが数人で明久を追っていた。

「おーい紫苑、明久を追い掛けて餡子も持ってきて欲しいって言っ

て来てくれ」

「わかった。そんなわけだからちょっとの間任せるよ？」

「うむ。任せておくのじゃ」

空き教室・・・

「明久、無事かい？」

「あ、紫苑丁度良かった」

「チッ、見られた以上ただでは帰さねぇ！」

やはりそういうことか。竹原！

「明久、とりあえず荷物は僕が適当に持っていくから念の為に数を聞いて来てくれない？
そのころには終わってるから」

「わかった！」

明久をとりあえずここから一旦教室に戻す。

「逃がすな！」

「おっと！　君たちの相手は僕だよ？」

僕は明久を追わせまいとこいつらの前に立ちはだかる。

「いいだろう。先にお前からボコしてやるよ！」

一人が顔面に向かって拳を振るう。

だがケンカしかしたことのない人間と特別な訓練をした人間では力量に違いがあるんだよねぇ。

「なっ！？　き、消えた！？」

いんや、消えてないよぉ？

「後ろだよ」

「うっ！」

首に手刀をいれて気絶させる。

こんな感じでまず一人。

「こ、こいつ、相当できるぞ・・・・・・！」

ただのチンピラが国家機密情報局員に勝てるわけないでしょ？

「さて、ここで君たちに質問。君たちは何故こんな事をしているの？　目的、君たちを雇った人物を教えてくれるかな？」

「言うわけねえだろうがっ！」

「じゃあとりあえず君たちから一人一人聞きだそう」

殴りかかってきたのを顔を左に逸らしてかわし、手加減して腹に掌底（手を平にして突く技のこと）をいれる。

「おぶっ！」

これで二人目。

「さあ、後は君だけだよ？　おとなしく吐いてくれないかなぁ？」

「ち、ちくしょう！」

やけくそに殴りかかってくるが簡単にかわす。

「フッ！！　シッ！！」

腕を受け流し、頬を叩く、もう一度左右逆で同じ事をし、手で頬を抑えて足払いをする。

すると簡単にチンピラは倒れる。当然手加減をする。

「はい。教えてくれるかな？」

「お、俺たちは吉井ってやつをやれって言われただけだ！　それ以外は何も教えてくれなかったから」

「やれって言ったのは誰だ？」

「フードを被ってたから顔は見えなかった」

流石にそう簡単に尻尾は掴ませてくれないか。

「そう。ありがとう。もう行っていいよ。ただし、また手を出そうとしたら容赦しないからね？」

「は、はいっ！」

そのチンピラは気絶した二人を抱えて部屋から出て行った。
その後、戻ってきた明久と一緒に頼まれていた物を運んだ。

そんなこんなで時間が過ぎ、召喚大会の会場・・・

「いよいよじゃな」

「うん。正直、勝てるかわからない試合だね」

「しかも教科は保健体育じゃから間違いなく工藤は４００点越えをしてくるじゃろうし、真奈もかなりの点数を取ってくるはずじゃ。しかも姫路や島田みたいに弱点を作りにくじゃろうし。強敵じゃな」

「どうするかねえ・・・・・」

とりあえず最終手段として秀吉を使って真奈を封じる作戦を考えているけど、あまり使いたくないんだよなぁ。

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』

どうやら始まるみたいだな。

「さて、どんな風に戦うのかなぁ？」

「悪いけど手加減はしないからね？」

よし、とりあえず一つ仕掛けてみるか。

「真奈、工藤さん、二人は何が目的でこの大会に出場しているの？」

「わ、私は白銀の腕輪に興味があって」

「まったまた～。正直じゃないなぁ。真奈は」

「な、何よ？」

おっと！　これは何かあるのか？

「もし優勝してチケットが手に入ったらひでｙ「きゃあぁぁぁ！！」」

「な、何じゃ？」

「ちょちょちょちょっと愛子！　それは言わない約束じゃない！」

「だって言った方が楽になれるよ～？」

「だったら愛子だってムッツリ「ちょっとー！！」」

「それこそ言わない約束だよ！」

「先に言ったのは愛子だよ？」

へぇ～。工藤さんって康太のこと好きなのか？

『そろそろ始めますよ？』

マイクを持った先生が苦笑いをしながら言ってきた。

「何じゃかよくわからんがとにかくいくぞい、紫苑」

「オッケー！」

「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

『Ｆクラス　木下秀吉　＆　Ｆクラス　氷花紫苑
保健体育　８８点　＆　３３３点
ＶＳ
Ａクラス　工藤愛子　＆　Ａクラス　宮野真奈
保健体育　４６４点　＆　４０１点』

うわぁお！　これはこれは、どうしたものか。
こちらのペアは腕輪は使えず、向こうのペアは二人とも腕輪の能力が使用できる。
しかも僕らは向こうの腕輪の能力を知らない。対応しようにもどうにもできない。
先ほど秀吉に保健体育を詰め込んで貰ったが、約５倍の相手だから焼け石に水というやつでろうか。

「じゃ、行っくよー！」

そう言って二体の召喚獣が突進してきた。こうなったらやるしかない！

「秀吉、打ち合わせ通りにいくよ！」

「それしかあるまい」

僕たちの打ち合わせとはまだ召喚獣を大して行っていない真奈を二人がかりで倒してから工藤さんを二人がかりで倒すという物だ。もはや作戦なのかすらサッパリだ。

「やっぱり来たね、でもお見通しだよ！」

すると真奈の召喚獣の腕輪が光り、真奈の召喚獣に翼が生えた。そうか真奈の召喚獣の腕輪の能力は飛翔能力を得ることか！

「やばいっ！」

完全に意表を突かれた僕たちは一瞬対応が遅れて直ぐさま急降下して腕に装備している爪で突いてくる真奈の召喚獣をなんとか防御するものの、工藤さんの召喚獣が迫ってきていた。

「秀吉！　何とかできる！？」

「やれるだけやってみるぞい！」

真奈の召喚獣に手一杯な僕には工藤さんに対応する術がない。ここは秀吉に任せるしかない。

「やるねぇ、弟君。でも、いつまで持つかな？」

「ち、力の差が有りすぎるぞい！」

「秀吉！」

「よそ見は禁物だよ！」

秀吉を助けに行きたいけど、真奈が再び空中から攻撃を仕掛けてきた。

ん？　何だか急にスピードが上がったような・・・・・・！？

防御したのは良いものの、フィードバックが先ほどよりも凄い。

何があったんだ！？

「ナイス、愛子！」

「まっかせてよ！」

どうやら工藤さんの召喚獣の能力らしい。

「紫苑！　やばいのじゃ！」

「わかってるけど・・・！」

正直八方手詰まりだ。どうしよう。

「よいしょお！」

「うおっ！　武器が！」

秀吉の召喚獣の武器が壊されたみたいだ。しかもまた腕輪の能力を使われたみたいだ。

僕の方も防戦一方になっている。完全に制空権を握られているため

防御が精一杯だ。
光弾を放つにしても当たるとはとても思えない。
こうなったら捨て身の作戦でいくか。でも痛いんだよなぁ。

「秀吉、最終手段でいこう！」

「そうじゃな、もはやここまでじゃろう」

そう言って秀吉の召喚獣が僕の召喚獣の後ろに立つ。

「あれ？　もう逃げないの？」

「悪いけど、勝たせて貰うわよ！」

真奈と工藤さんの召喚獣が突っ込んでくる。
だが僕の召喚獣はそこ攻撃を避けずにあえてくらう。

『Ｆクラス　氷花紫苑　保健体育　１６点』

「ぐうぅぅ！」

「な、何で避けないのよ？」

流石この点数の召喚獣の攻撃だ。フィードバックがめちゃくちゃ痛い。
でも勝利の条件は全て揃った！

「今だ秀吉！　僕の召喚獣もろともぶった切るんだ！」

「すまぬ紫苑！」

「えっ！？　でも弟君の召喚獣の武器はもうないはず・・・・・・」

「いや、僕の召喚獣の武器があるでしょ？」

「しまった！」

そう、この作戦は僕の召喚獣がわざと攻撃をその身に受けて、後ろにいる秀吉の召喚獣が僕の召喚獣の武器を使って、僕の召喚獣ごと相手の召喚獣を倒すという作戦だ。
とは言っても、僕の召喚獣が攻撃を耐えきれるかが問題だったけど、その最大の問題はクリアされた。しかも・・・・・・。

「ダメ！　逃げられない！」

そう、この作戦の最大の利点は僕の召喚獣が相手の召喚獣を捕らえているため、逃げられなくなり、確実にこちらの攻撃が当たるということだ！

「これでっ！」

「チェックメイトだ！」

秀吉の召喚獣が僕の召喚獣ごと工藤さんと真奈の召喚獣を真っ二つにする。
当然、三人の召喚獣は戦闘不能になる。そして・・・・・・。

「ぐおぉぉ！　全身が真っ二つに割れるような痛みがっ！」

戦死したときのフィードバックってこんなに痛いんだね。

『木下、氷花ペアの勝利です』

それでも何とか勝つことができたのでよしとしよう。

Fクラスの教室・・・

「あ、お帰り。二人とも。試合どうだった？」

「紫苑の作戦のおかげで何とか勝てたぞい」

「それは何より。さっそく悪いが、秀吉。お前に仕事を頼みたい」

「ワシにか？　いったいどんな仕事じゃ？」

「俺たちの次の対戦相手が翔子、木下姉のペアなんだ。そこで秀吉には姉とすり替わって貰いたい」

「優子を封じて霧島さんを三人がかりで倒そうというわけだね？」

「そういうことだ」

でもね、雄二その作戦には致命的な欠点があることを教えてあげよう。

「雄二、その作戦には有る致命的な欠点がある！」

「な、何！？　一体、どんな？」

それはね、

「それはーーー」

僕は今まで秀吉と優子を十数年見てきて言えることがあるんだ。

「その作戦はまず秀吉が優子を無力化する必要があるけれど、秀吉は優子に一度も勝っていないんだよ！そう、断言できる。秀吉は、優子には勝てないんだよ！」

これがその作戦に存在するち致命的な欠点だよ雄二。

「紫苑、歯を食いしばるのじゃ」

「避けてみせるよ」

何やら秀吉が喝でも入れてくれるらしいが、遠慮しておこう。

「まったく。とにかく、要は姉上を無力化できれば良いのじゃろう？」

「まあ、おおむねそんな感じだ」

「じゃったら、もっと有効で、確実に成功させられる方法があるぞい」

召喚大会の会場・・・

「ねえ秀吉、結局優子を封じる為の作戦って一体何だったの？」

「そのうち教えてあげるのじゃ」

「さいですか」

「さて、準決勝は例の常夏コンビが相手のようじゃのう」

そうだ、準決勝の相手はあの竹原側の人間の常夏コンビ。
契約があるから僕は彼らの邪魔はできない。

『それでは、これより準決勝を始めたいと思います！　出場選手の入場です！』

常夏コンビと僕たちが向き合うように対峙する。

「よう、ご苦労さん。あのやっかいなペアを片づけてくれてよ」

「あいつらと当たってたら正直勝てたかわからなかったしな」

もし、ここで僕が彼らの邪魔をして、彼らに勝利してしまったら？
その場合、竹原との契約は無効になる。
彼らに危害が及ぶ。

「さてと、わかってるよな？」

「この場合どうするのか」

でも、僕は決めたんだ。

「前に、僕に居場所をくれた人が言っていた」

「なんだ？　皆の役に立てない時を謝り方でも教えてくれたのか？」

ギャハハハ、と笑う坊主の先輩。

「『あなたが今生きてここにいる。それだけで私は笑顔になれる』って」

「ハァ？　コイツ何言ってんだか」

「その言葉を聞いたとき、本当に嬉しかったんだ。僕のことなど嫌いになって忘れているであろうと思っていた人がまだ僕のことを覚えていて、しかも、また今まで通りに暮らそう？　って言ってくれたから」

「紫苑」

そうだ、あの時、僕は決めた。誓った。

「そして僕は自分自身に誓った。その人と、その周りの人達の笑顔を守ってみせるって。貴様らの、自分自身の欲望の為の計画はその人と、その人の周りから笑顔を奪うことに繋がる。だからーーー」

もう迷わない。僕は今自分が持っている力は全て優子と秀吉、そしてその周りの人達の笑顔を守る為に使う。

「お前たちは僕が倒す。今日、ここで！　それが、少しでも自分の保身の為に皆を助けられなかった僕の罪滅ぼしだ！」

「なっ！？　てめぇ、裏切るのか！？」

「裏切る？　違うな。僕はお前たちのことを一度も仲間だと思っていない」

「あの情報がどうなってもいいのかよ！？」

「あの情報？」

秀吉が知りたそうだけど、これに巻き込むわけにはいかない。

「一つ質問です。あなた方はその内容を知っているんですか？」

「どんな情報かは知らねぇが、相当やばい情報だって事は知ってるぜ」

「そうですか。ならいいや。とっとと始めましょうか先輩？　ギャラリーも先生も待っている」

「まあいい。このことは報告させて貰うなからな！」

「いくよ！　秀吉！」

「うむ！」

「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

『Ａクラス　常村勇作　＆　Ａクラス　夏川俊平
英語Ｗ　２７６点　＆　２９３点

ＶＳ

Ｆクラス　木下秀吉　＆　Ｆクラス　氷花紫苑

英語Ｗ　５３点　＆　４２９点　』

「絶対に負けられないんだよ！」

僕は武器を取り出させて突撃させる。

「こいつ！　点数が高い！」

「はぁぁぁ！」

僕の召喚獣が繰り出す剣撃を防御する先輩の召喚獣。

だけどそれが僕の狙いだ！

「悪いけど速攻で方をつける！」

皆に報復が来る前に何としても戻らないと。一応真奈がいるだろうけど。

僕は今大会初使用の腕輪の能力を使い、左腕に白銀の腕を装備する。

そしてその腕で防御している先輩の召喚獣の頭を鷲づかみにする。

そしてそのまま波動衝撃波を放つ。

『Ａクラス　夏川俊平　英語Ｗ　０点』

「う、嘘だろ！？」

「後一人！」

「紫苑、こっちはワシがやる！」

「チッ！　舐めてんじゃねぇ！」

「秀吉！　だったらコレを使うんだ！」

そう言って僕は自分の召喚獣の槍剣を秀吉の召喚獣向けてパスをする。

「すまぬっ」

キャッチして再び斬りかかっていく秀吉。
先輩の召喚獣は縦に剣を振るが、難なくかわして一撃をいれる。

「こいつっ！　何で当たらない！？」

「これで、終わりじゃあ！」

『Ａクラス　常村勇作　英語Ｗ　０点』

『勝者　木下、氷花ペア！』

これで、あいつらの計画は阻止できた。後は、皆の安全を確認するだけだ！

第十八問　チンピラとチャイナ服と召喚大会後編（後書き）

次回　真相と誘拐と大切な人達

第十九問　真相と誘拐と大切な人達

以下の文章の（　）に入る正しい物質を答えなさい。
『ハーバー法を呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（　）である』

姫路瑞希と氷花紫苑の答え
『水酸化カルシウム』

教師のコメント
正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え
『塩化吸収剤』

教師のコメント
勝手に便利な物を作らないように。

吉井明久の答え
『アンモニア』

教師のコメント
それは反則です。

常夏コンビに勝った僕と秀吉のペアは急いで教室に向かっている。
その途中で明久と雄二、康太に出会った。

「皆、ここで何してるの？」

「それが大変なんだよ！　ウェイトレスが連れて行かれたらしいんだ！」

くそっ！　間に合わなかったのか！

「だんだん手段を選ばなくなってきたな」

「一応予想の範疇とはいえ、これは誘拐沙汰だぞ。最悪清涼祭そのものが中止になるかもしれないな」

「それでは姫路の転校は必然的に防げなくなってしまうということじゃろう！？」

「・・・・・・・・・・・・かなりまずい」

「康太、連れて行かれたメンバーは？　場所は特定できる？」

「連れて行かれたのは、姫路、島田、とその妹、あと、遊びに来ていた霧島、工藤、木下姉、宮野。場所は盗聴の受信機でわかる」

「オーケー。敢えて何で持っているのかは聞かないよ」

しまった！　秀吉と優子は知っているけれど真奈はいざというときの為に学校では本気を出さないで、最悪の事態に陥った時まではそこら辺にいる普通の女子校生を演じて貰ってるから本気を出せなか

ったんだ！

「さて、場所がわかるなら簡単だ。かる～くお姫様たちを助け出すとしましょうか、王子様？」

「それには雄二も含まれてるよね？」

「黙れ明久」

「とにかく、まずはあいつらを助けだそう。ムッツリーニと秀吉はタイミングを見て裏から姫路たちを助けてやってくれ」

「・・・・・・・・・・・・わかった」

「了解じゃ」

「雄二、悪いんだけど、作戦とかには従えそうにない。手遅れになるのは、もう嫌だから」

カラオケボックス・・・

優子ｓｉｄｅ

折角紫苑に会いに来たのにこんな事に捲き込まれるなんて最悪よ！

「さてどうする？　坂本とーーー吉井だったか？　そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？」

「いや、もう一人追加があったよな。確か氷花とか言ったか？　まあとにかく吉井ってのと氷花ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな」

なんなのこいつら？　紫苑たちを呼び出して何するつもりよ？

「坂本って、まさかあの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくないんだが・・・・・・。とは言ってもあの嘘か誠かわからんが『水色の死神』の噂にはあの坂本も見劣りするぜ」

『水色の死神』？

「ああ。知ってるぜその噂。確か見た目は中学生程度なのにケンカが抜群に強くて、ここら一帯の暴力団を全て壊滅させたってヤツだろ？　水色の髪でそいつの目が虚ろでまるで死んでいるかの様だからその異名なんだろ？」

それって！　昔の事件の時の・・・・・・

「確かニュースにもなってたよな。最終的にそれをやったのが中学生だって知った時は信じられなかったぜ」

「だよな」

「お、お姉ちゃん・・・・・・」

「アンタたち！　いい加減葉月を放しなさいよ！」

美波がチンピラどもに言っている。恐らく効果は無いと思うけど。

「お姉ちゃん、だってさ！　かっわいぃー！」

「ギャはははは！」

正直気持ち悪い。紫苑みたいな素敵な（自分から見た）男もいるのにこんなクズとも言えるようなヤツらもいるという事実が信じられない。

「・・・・・灰皿をお取り替えします」

「何かご注文はありますか？」

あれって秀吉と土屋君？　何でこんな所に？

「注文はまた後でいいから今は下がってくれ」

「かしこまりました」

「ところでこのオネーチャンたちどうする？　ヤっちゃっていいの？」

「だったら俺はこの巨乳チャンがいいなー！」

「あっ！　ズリー！　それなら俺二番ね！」

こいつらが話してることがやばい！　この状況でヤるとかって多分一つしかないわよね？

だとしたらそんなの絶対嫌！　こんなヤツらに初めてを奪われるなんて！
初めては紫苑以外にはあげないって決めてるのに！

「あ、あのっ！　葉月ちゃんを話して、私たちを帰らせて下さい！」

「だってさ～。どうする？」

「それはオネーチャンの頑張り次第だよな？」

「やっ！　さ、触らないでーーー」

「ちょっと、やめなさいよ！」

「こんなことして絶対後悔するわよ！？」

思わず叫ぶ私。

「あーもう。うっせぇ女だな！」

「生意気なんだよ！」

殴られる！　すぐ感じるであろう痛みに耐える為に目を閉じる。――でも、痛みはいつになってもやって来なかった。
目を開けてみると、そこには私と美波に手を挙げようとした二人の腕を掴んでいる幼なじみがいた。

「紫苑？」

「止めろ。頼むから、止めてくれ」

「ハァ？　お前誰よ？」

「もう、味わいたくないんだよ。あんな感情は。だから自分なりに考えた。どうすればあんな事にならなくて済んだんだろうって。そして、僕は一つの答えを出した。
それがーーー」

「「～つっ！」」

紫苑が手を放し、捕まれていた二人が紫苑に捕まれていた所を抑えている。

「大切な人が傷ついてからじゃ、もう遅いんだって！！」

紫苑がチンピラの方を向き直って言う。
！！　何！？　何故か体が震えだしている。冷房の効きすぎなんかじゃない！
この紫苑の周りから出てくるこれって何！？

「な、何だよ、これ。震えが止まらねぇ・・・・・・！」

「れ、冷房の効きすぎじゃねぇのか！？」

何？　この紫苑。こんな紫苑見たことーーー！　いや、ある！　一度だけだけど。

「紫苑っ！」

真奈が紫苑に向かって叫ぶ。

「ああ。わかってる。大丈夫、君たちは絶対に傷つけさせないから」

あれ？　震えが、止まった？

「僕に力をくれた人が言ってた。
『力は使う人間次第で善にも悪にも染まる。特に、まだお前のような子供はな。だからお前自身でその力の使い方を決めるんだ』って。だから僕は決めた。この力は大切な人を守る為に使う！　だから今こそ使おう、この力を。今こそ振るおう、この拳を。
見せてやろう！　お前たちのする暴力じゃなく、本物の武術を！」

「な、なめてんじゃねぇ！」

一人が紫苑に殴りかかる。
だが紫苑は軽くその突きをかわして、

「単把（たんぱ）！」

紫苑が腹に手を平の状態で押すと、殴ってきたヤツが吹っ飛んだ。

「ぐおっ！」

「ヤスオッ!?」

「てめぇ・・・！　何しやがった!?」

「ただの中国拳法だよ。そのヤスオとかいう人は大丈夫だよ？　かなり手加減したからどこも折れてないから」

そういう問題ではないような気がするのは私だけなのかしら？
でも紫苑って中国拳法なんて使えたんだ。

「このっ！」

「くたばれっ！」

また二人殴りかかっていった。

「はぁっ！」

素早く右側の人の懐に入り込んで、数回突いた後、腕を顔の正面からぶつけて、足払いをする。それでその人は倒れ込む。

「ぐふっ！」

「な、何!?　いつ間に!?」

そしてもう一人の方にも近寄って、

「天王托搭（てんのうたくとう）！」

天井に吹っ飛ばした。

「こ、こいつ！　かなりできるぞ！」

「これじゃまるで『水色の死神』みたいじゃねぇか！」

「どうしたの？　もう終わり？」

紫苑。やっぱり凄い。

ガチャッ！

「おじゃましまーす！」

あ、吉井君。

「よ、吉井君？」

「アキ・・・・・・」

瑞希と美波の王子様の登場ってとこかしら？

「ハァ？　お前誰よ？」

「それでは失礼して・・・・・・」

吉井君が一番近い人の手を握り、

「死にくされやぁぁっ！」

その人の股間を思い切り蹴り上げた。

「ほごあぁぁぁっ！」

かなり痛そうだけどどのくらい痛いのかしら？

紫苑ｓｉｄｅ

やっと来たね。ヒーローは遅れてくるのもだけれどさ。

「てっ。てめぇ！　何しやがる！」

明久にそう言ったヤツが殴りかかろうとしている。

「させるかっての！」

「ぐぼっ！」

明久に殴りかかろうとしていたヤツを弾き飛ばす。

「明久！　そのまま行け！」

「イィッシャァァーー！」

「ごぶぁぁっ！」

「テメェら、よくも美波に手をあげようとしたな！　全員ブチ殺してやる！」

「まったく、お前らはーーーおらっ！」

「くはっ！」

「雄二っ！」

「・・・・・雄二」

「こいつら、吉井って野郎と坂本だ！」

「氷花ってヤツだけでも手一杯なのに！」

「坂本よぉ。こいつらがどうなってもいいのかァ？」

しまった！　僕としたことが、工藤さんと真奈を人質に取られてしまうなんて！

真奈は問題ないだろうけど。

「いいか？　おとなしくしていろよ？　さもないとヒデェ傷をーー」

「・・・・・・・・・・・・負うのはお前（お主じゃ）」

ゴインッ×2

「あがぁっ！」

「こぺっ！」

ナイス！　秀吉、康太。

「秀吉君」

「ムッツリーニ君」

ふう、これで一息つけるかな？

「お、お姉ちゃん！　お姉ちゃーん！」

「葉月っ！　良かった・・・・・・。怖かったよね・・・・・・？」

姉妹の感動の再会だな。

「吉井君っ！」

おお！　姫路さんが明久に向かって腕を広げて駆け寄っている。

良かったね明久。

「姫路さんっ！」

あ、感動シーンを怖そうとしている無粋なヤツがいる。

「吉井ぃ！　よくも「人の恋路は邪魔するもんじゃないよ！」ぐぼぉっ！」

姫路さんと明久が抱き合っている。

うんうん。やっぱ良いもんだよねぇ。

今頃気づいたけれど、僕以外の男子は女子の皆様から見たら王子様だよなぁ。

僕だけ場違いだな。

「くはははは！　それにしても丁度良いストレス発散相手ができたな！　生まれてきたことを後悔させてやるぜぇぇっ！」

「こ、これが坂本か・・・・・・！」

「悪鬼羅刹の噂は本当だったか・・・・・・」

今のストレス発散ができていない雄二と喧嘩なんてご愁傷様だな。

「はいはい。雑魚どもの始末は雄二に任せて、王子様とお姫様の皆さんは先に学校に戻ろうね？」

Fクラス・・・

「皆、そろそろ来る時間だ」

現在、誘拐されたメンバーと助け出したメンバーでFクラスの教室を貸し切っている。
僕が巻きこまれた皆には真相を知る権利があるからと言った為だ。

「？　来るって、誰が？」

「ババァだ」

「学園長がわざわざここに来るの？」

「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、『話を聞かせろ』ってな」

「話ねぇ・・・・・。ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

その通りだが交渉に行った時にババァって言ってなかったっけ？

「用事もクソも・・・・・この一連の妨害はあのババァに原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

「ババァに原因がーーーえぇぇっ!?」

明久がすっとんきょうな声を上げる。

「あ、あのババァ！　僕らに何か隠していたのか！」

『ババァって言ってるじゃん!!』多分、明久と雄二以外の皆の考えが一致した瞬間だと思う。

「・・・・・やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねぇ、ガキどもが。
これまた大人数で」

「「「「「「「「「「こんにちは学園長」」」」」」」」」」

流石女子＋秀吉＋康太。きちんと挨拶したね。

「彼女たちは捲き込まれて誘拐されたんだ。知る権利くらいあるはずだ」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」

その通りだ。作戦成功の確率を上昇させるには情報が不可欠。なのにこの人はその情報を持っているにも関わらず、それを僕たちに明かさなかった。これは明らかな裏切り行為だ。

「ふむ・・・・・。やれやれ。賢しいヤツだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。例えばここにいるAクラスの才女たちに頼めば良かったんだからな」

「・・・・・雄二、取引って？」

事情を知らない人達からすればもっともな質問を霧島さんが雄二に問うた。

「この際だから隠す必要もないだろう。良いか明久？」

「うん。姫路さん、ごめんね？」

「え？　どういうことですか？」

「実はーーー」

説明中・・・

「そうだったんだ」

「少しだけなら知ってたけど、こんな風になっていたなんてね」

「吉井君、やっぱりーーー」

「まあとにかく、どうなんだバババァ？　わざわざ俺たちを擁立するなんて効率が悪いことをしたんだ？」

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい？」

「それなら教室の補修に関して渋ったりなんかしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、交渉の場にいた少なくとも僕以外の三人に召喚大会に出場させる為にわざと渋ったってことですよね？」

「どうして紫苑以外なの？」

「さっきも雄二が言った通り、Ａクラスの才女たちに頼まなかったんだからそういうことになるんじゃない？　ねえ雄二？」

「ああ。あの時に俺がババァに一つ提案をしたのを覚えているか？」

「提案？　えーっと」

科目を決めさせるってヤツだ。

「科目を決めさせるってヤツかい。なるほどね。アレでアタシを試したってワケかい」

「ああ。めぼしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな。もしそうだとしたら、俺たちだけが有利になるような話には乗ってこない。だが、ババァは提案を呑んだ」

「それに、学園祭の喫茶店をわざわざ妨害したり、明久を襲撃したり最終的には誘拐だ。ただの嫌がらせには到底思えない」

まあ国家機密情報局員の名にかけて、事件にだけはさせないけどね。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか・・・・・・すまなかったね」

プライドが高いであろう研究者兼、学園長が頭を下げた。

「アンタらの点数だったら集中力を乱す程度で勝手に潰れるだろうと最初は考えていたんのだろうけど・・・・・決勝まで進まれて焦ったんだろうね。裏切りもあったみたいだし」

「裏切り？」

チッ！　学園長め。まあ確かにここで確認しておかないとあっちとしても危ないだろうからな。

「そういえば紫苑が常夏コンビと裏切るだか何だかを口走っていたような・・・・・・」

「その通り。学園長や秀吉の言う通り。僕は黒幕である教頭と繋がっている」

「何だって!?」

明久が憎しみのこもった眼差しで僕を見ている。
当然の反応だな。

「いや、まて明久」

「何でだよ雄二！　紫苑は僕らを裏切ってたんだよ!?」

「バカが・・・・・・。どうしてお前はそう単純なんだ?
だったら何で紫苑は常夏コンビの妨害を阻止するのに協力したんだ?
何で誘拐された女子たちを真っ先に助けに向かったんだ?」

「それは・・・・・・」

「何か理由があるんだろ?　でもお前は教頭を裏切り、いや、正確には初めから仲間じゃなかなったんだからこの言葉は適切ではないが、俺たち助けることを選んだ。違うか?」

「それは・・・・・・」

流石は雄二この程度の芝居では見透かされるか。

「紫苑、ちょっとこっち向いて?」

突然優子から声が掛かる。

「何だい？」

グイッと顔を引き寄せられる。

「！？」

突然優子の顔がドアップになったのでかなりビックリした。

「む～。よし！」

「えーっと、何が？」

「坂本君、どうやらあなたの推測で間違いなさそうよ？」

「そうか。ならば話の続きに戻ろう」

「えっと、何したの木下さん？」

「ワシら姉弟は紫苑とは長い付き合いじゃ。目を見れば隠し事をしているかしてないかくらいわかるのじゃ。じゃから姉上は紫苑が嘘をついて、実はまだ教頭側についてるのではないかという事を確認したんじゃろう。まあ紫苑がワシらを傷つける事なんてないじゃろうけどな」

そういえば以前目でわかるって言ってたっけな。

「そうだったんだ。ごめん、紫苑。一瞬でも疑ったりして」

明久が僕に頭を下げている。

「いや、相談しなかった僕も悪い。むしろ、教頭の言葉に負けてしまった僕が悪いんだから」

僕も頭を下げる。

「さて、これでアンタも安心して俺たちに種明かしができるよな？」

「はぁ・・・・・。アタシの無能を晒け出すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね・・・・・・」

だから誰にも公言しないで欲しい。そんな前置きをして学園長は僕らに真相を明かし始めた。

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」

だろうな。

「ペアチケットじゃない！？　どういうことですか！？」

「アタシにとっちゃあ企業の企みなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう一つの賞品の方なのさ」

「『白銀の腕輪』か」

「そうさ。その腕輪を吉井と坂本のペアに勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕らが勝ち取る？　回収して欲しいわけじゃなくて？　しかも何

で僕らのペアなんですか？」

「あのな・・・・・。回収が目的だったら俺たちに依頼する必要はないだろう？　そもそも回収なんて真似は極力避けたいだろうし、な」

「研究者としては、新技術は見せびらかしたいだろうし、しかも何故かＡクラスの才女たちを使わずにーーー」

「俺や明久という低得点者を選んだ。つまり高得点者を使わなかったんじゃない。
使えなかったんじゃないのか？」

「本当に頭の回転が良いねぇ。その通りさね。入出力が一定水準を超えると暴走してしまうっていう不具合があるからだよ」

「なるほどな」

「えーっとつまり・・・・・？」

「アンタらみたいな『優勝の可能性を持つ低得点者』ってのが一番都合が良かったってわけさ」

「よくわからないけど、とりあえず褒められているってことでいいのかな？」

「いや、お前らはバカだと言われているんだ」

「なんだとババァ！」

明久、泣けてくるよ。君の理解能力ってこんなに低かったの？

「吉井君・・・・・・」

「アキ・・・・・・」

「本当にバカなお兄ちゃん・・・・・・」

女子三人に呆れられてるし。

「説明されないとわからない時点で否定できないと思うんだが・・・・・」

ごもっともである。

「二つある腕輪のうち片方の召喚フィールド作成用はある程度まで耐えられるんだけどねぇ・・・・・。もう片方の同時召喚用は、現状のままだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

「雄二、これは褒められていると取っていいんだよね？」

「いや、バカにされている。もの凄い勢いで」

「なんだとババァ！」

「いい加減自分で気づけ！」

明久～。あ、学園長が若干ほくそ笑んだ！

「つまり、さっき紫苑が言った通り、教頭が黒幕で間違いなさそうだな」

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにもいかないからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものと見て間違いなさそうさね」

明久が何のことだかわからないって顔をしているけど今は面倒なので後で説明してあげよう。

「それじゃ、僕らの邪魔をしてきた常夏コンビやら例のチンピラとかは」

「教頭の差し金だろうな。最終的には紫苑が送り込まれていたかもしれないがな」

そうなったらまず教頭を襲撃するけどね。

「あのさ、コレってーーーかなりマズい話じゃない？」

「そうだな。文月学園の存亡が懸かっている話しになっていたかもな」

「なっていたかも？」

「そうだろ？　教頭側の人間である常夏コンビは秀吉と紫苑が、チンピラどもはたった今俺たちが、紫苑は俺たちを取ったんだから、教頭にはもう戦力は残されていないさ」

「できることといっても闇討ちくらいだろうけど、さっきのでチン

ピラどもは懲りてるだろうしね」

いわば、万事解決ってところかな。

「だが、最後までは気を抜くなよ？　しつこい常夏コンビのことだ、まだ何か奥の手があるかもしれない」

「わかってるさ！」

「まあ今日のところは何もしてこないだろう。ご苦労だったねガキども。これで少しは枕を高くして寝ることができるよ。男どもはまた女子が誘拐されちゃ敵わんだろうから、家まで送ってやんな」

「「「「「はーい！」」」」」

こうして学園祭初日は幕を降ろした。

第十九問　真相と誘拐と大切な人達（後書き）

次回　けじめと追跡とデストローイ！

第二十問　けじめと追跡とデストローイ！（前書き）

総合評価が３００を超えました！

読者の皆様、ありがとうございます！

第二十問　けじめと追跡とデストローイ！

以下の問いに答えなさい。
『冠位十二階が制定されたのは西暦（　）年のことである』

姫路瑞希と氷花紫苑の答え
『６０３』

教師のコメント
正解です。

坂本雄二と木下秀吉の答え
『６０３』

教師のコメント
一体どうしたのですか？　驚いたことに正解です。

吉井明久と土屋康太の答え
『６０３』

教師のコメント
君たちの名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

実はまだ一日目で帰り道・・・

「格好良かったよ、秀吉君！」

「そんなことないぞい。一番格好良かったのは真っ先に飛び込んでいった紫苑じゃ」

ふう。なんだかこの二人を見てると嫉妬しちゃうな。

「ううん。私からすれば秀吉君が一番格好良かったよ」

「そ、そうかのう／／／」

「そうだって！」

この二人はいつ恋仲になるのか楽しみだな。

「紫苑。ありがとね。また助けてくれて」

「お礼を言われるには及びませんよ、お姫様？」

ちょっと臭い台詞に聞こえるけど、何故だか言いたくなった。

「ふふっ。そうかしら？　じゃあ紫苑は私のナイトね」

「そう認めてくれるなら嬉しいな」

ナイト、か。ちょっと気分がいいな。

そんなことを話している内に家に着いた。

因みに、明久が姫路さんと島田姉妹を、雄二が霧島さんを、康太が工藤さんを、

そして僕と秀吉が優子と真奈を家まで送ることになった。

当然僕が秀吉と優子と真奈と同棲していることは秘密だ。また何されるかわかったもんじゃないからね。

「ふう。特に何もなく帰宅することができたな」

「一応一安心ね」

「ん？　紫苑よ、郵便が届いておるぞ」

よかった。何とか間に合ったみたいだな。

「ありがと秀吉」

「何が届いたの？」

「まあちょっと待ってよ。真奈、君の分だ。ご丁寧に外装はただのライトにしか見えないな。
まあ他にも機能を付けてくれているんだろうだけどね。流石エピスティミ博士だね」

「エピスティミ博士？」

「国家機密情報局の兵器開発最高責任者だよ。大半はの兵器はこの人から作られてるんだ。例えばこのハンドガンとかね」

そう言って真奈は肩と太ももの辺りからハンドガンを取り出した。

「私は普段人から見られない場所に隠してるんだ。太ももなんて日常生活では見られないでしょ？」

真奈が太ももに付けているハンドガン用のホルスターを見せる。

「っ！！／／／」

ああ。太ももなんて堂々と見せるから秀吉が顔を真っ赤にしてるよ。

「えっ！　ちょっ！　秀吉君！？　顔真っ赤だけど大丈夫！？」

「真奈、無防備すぎじゃ／／／」

「秀吉、真奈はスパッツを穿いてるから下着は見えないよ」

残念だったね秀吉。

あれ？　何故だか左腕の感覚がなくなってきたよ？

「何で紫苑がそんなこと知ってるのかしら？」

笑顔？　の優子が聞いてきた。あ、これは逃げられませんね。

「訓練の組み手の時に蹴りを入れられそうになった時にスパッツが見えてーーーあっ！　優子！　その関節はそっちには曲がらなっ！」

「もしかして秀吉君ガッカリした？」

「べ、別にそんなことはないぞい／／／」

「見たい？」

「な、何を言っておるのじゃ！？　真奈、止すのじゃ、ってや、止めるのじゃー！」

最近真奈が工藤さんの影響を受けたせいか大胆になってきている気がする。

紫苑&秀吉の部屋・・・

「・・・・・・／／／」

「お～い。秀吉？　大丈夫？」

先ほどから秀吉はこのようにトリップ状態だ。
僕が気絶している間に何があったのやら。
因みに時間は十二時を回りそうなところである。

「秀吉～？」

反応がない。ただの屍のｙ「はっ！　こ、ここは？」うではなかった。
反応があった。普通の秀吉ようだ。

「やっと現実に復帰したね」

「あ、ああ。すまぬ。ちょっとワシには刺激が強すぎたらしい／／／」

まだ顔が赤い。一体何をしたんだい？　真奈。

「思い出すだけでも・・・・・っ！！／／／／　これではムッツリ

ーニみたいじゃ！」

「本当に何されたの？」

「こ、今夜は眠れんかもしれぬ／／／」

「おいおい・・・・・・」

こんなことを言い合っててもエンドレスなので、寝床に付くことにした。

「ＺＺＺ・・・・・・」

寝てるし。まあ今日は疲れたしな。寝られない方がおかしいかもしれないな。

「ふわぁーあ」

大きくあくびをかく僕。寝ますか。

ガチャッ！

ん？　扉が開いた？　誰だろう？

国家機密情報局員は寝ている時は足音などで目を覚ますように訓練されている。

足音がだんだん僕の方に近づいてきた。秀吉は隣で寝てるし、となるとこの足音は優子か真奈ということになるよね？

「ありがとう。私のナイト」

微かに聞こえた優子の声。次の瞬間にはーーー頬に柔らかい感触があった。

!!!?　何!?　何々!?　何だ今の感触は!?　でもこの感触は以前も一度同じような感触の物が頬に触れたようなーーーそうだ!あれは確か僕の家に秀吉と優子が居候することになった日のーーーじゃあ今のは、まさか!

キスされたのか!?

僕が?　誰に?　優子に。優子に!?

足音が聞こえなくなってからガバッと起きて感触があった所をさすってみる。

確かに何かが触れたような跡がある。どうやら夢じゃないみたいだ。

それと、眠れなくなるのは僕の方みたいだ。

翌朝・・・

Pi　PiPiPiPiPiPiPiPiPiPi　カチッ!

「ん。おはようじゃ、紫苑」

目覚まし時計を止めて秀吉が起きあがる。結局僕はあの後一睡もできなかった。

でも僕は五日間ぐらい寝てなくても問題ない身体になっている。

「おはよう秀吉／／／」

「何じゃ？　今度はお主が顔が赤いのう。姉上と何かあったのか？」
やっぱり僕がこうなる理由は優子関係だと見抜かれてるらしい。
「うん。ちょっと、ね」
「ふむ。まあいいじゃろ。今日はランニング休むかの。学園祭が忙しくなるじゃろうし」
「そうだね。じゃあ昼食の準備をしようかな」
「姉上の寝顔は見なくて良いのか？」
からかうように言ってきた。
「バレた時の僕の関節が惜しいから」
「確かに」
苦笑いする秀吉。
着替えてリビングに降りると、
「あ、二人とも起きたんだ。おはよう」
「あれ？　何故真奈が？」
「一応居候している身だからね。多少の家事は手伝うよ」
どうやら朝食の用意をしてくれていたみたいだ。大いに助かる。

「うんうん。いい心がけだね。向こうにいる時とは大違いだ」
「例え下僕にお世話になっていたとしてもね」
下僕？
「紫苑は真奈の下僕じゃったのか？」
「いや、違うからね？　冗談だよね？」
「うん。冗談だって」
一瞬本気にしてしまった。
「手伝うことはあるかの？」
「同じくだが？」
「大丈夫大丈夫。簡単な物くらいなら作れるからさ。朝食の準備は私に任せてやりたいことをしちゃったら？」
真奈がそう言うなら僕はとりあえず武器の手入れをしてくるか。
「ふむ。そうか？　ならワシは発声練習でもしてくるかの」
「僕は武器の手入れをしてるよ。真奈の分もやっちゃうね」
「ども」

小一時間後・・・

僕が手入れを終えてリビングに戻ると優子が起きてきていた。

「おはよう、優子」

「おはよう、紫苑」

うん。でもやっぱりキス？　の件があるから目を合わせにくいな。

「皆早いのね」

「姉上も今の内から早く起きた方が良いぞ？　そんなんでは嫁のもらい手が痛ぁぁ！
痛いのじゃ姉上」

「よけいなお世話よ」

多分足を踏まれたな。
もしその時は僕が貰いたいものだ。

「まあその時は紫苑が貰ってくれるんじゃない？　ねえ？」

「何故そこで僕に振ったんだ！？」

思った瞬間に聞かれるとは思わなかったよ。

「で、どうなの？」

「どうなんじゃ？」

「／／／」

ヤベっ。何だか答えなきゃいけない雰囲気になってきた。

「ま、まあ、その時は、ね」

「「おお！」」

「！！／／／」

何だか驚かれた。

「よかったの姉上。キチンと貰い手がいて」

「ご両親も安心だね」

「ははは。だと良いけど」

学園祭が終了した後に今の会話を録音したのを柚葉さんと秀俊さんに聞かれて、疲れることになるのはまた別の話である。

Fクラス

「元気そうで良かったよ。それで、今朝は特に問題はーーー」

「なかったよ」

「同じくじゃ」

「そっか。ありがとう」

明久と姫路さん島田さんが話しているのを見かけたので声をかけた。

「・・・・・・・・・・・こっちも異常なし」

康太も来たみたいだ。

「これで後は雄二のとこだけだけどーーー」

「お、朝は無事だったか二人とも」

「あ、雄二おはよう」

これで全ての所は無事みたいだ。

「吉井君も坂本君も早いですね～」

「朝一番でテストを受けてたからね。ふわぁ・・・・・・」

明久は寝てないのかな？

「もう、そんなんで決勝戦は大丈夫なの？　瑞希のお父さんが見に来てるんだから格好良く勝たないといけないってのに」

そう。決勝戦は僕と秀吉のペアは負ける算段になっている。

点数の高い人でも勝てないということはないと知ってもらいたいからだ。
腕輪の件もあるけど。

「こいつがちょっとでも見栄えを良くしたいと言って徹夜で勉強教えてたからな。
ふわぁ・・・・・・」

「どうする秀吉？　僕らも受けとく？」

「そうじゃな。あやつらが頑張っておったのじゃからワシらも多少見栄えを良くすべきじゃろうな」

「じゃあ僕たちもテストを受けとくよ。終わり次第喫茶店の手伝いをするからさ」

「わかったわ。少しの間だけなら任せてよ」

「すみません。私の為に」

「気にするでない。助け合うのがクラスメイトと言うのものじゃ」

「その通り」

そう言って僕たちはテストを受けに行った。

召喚大会会場・・・

あの後すぐに喫茶店の手伝いをした。宣伝の効果もあってか大繁盛だった。

「お互い頑張ろうね」

「まあワシらは勝たんがな」

「まあバレないよね？」

「大丈夫だろ。というか騙し通してみせる」

「よ～し、行くよ皆」

「「「おう！」」」

明久のかけ声と共に入場のアナウンスが聞こえてきた。

『さて皆様。長らくお待たせ致しました！　これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

観客の注目を集めるが上手いな。先生にしては上手すぎるからプロでも雇ったのか？

ビックスポンサーがバックにいるだけあるな。

『出場選手の入場です！』

明久と雄二が入場するのが見える。

『二年Ｆクラス所属・坂本雄二君と、同じくＦクラス所属・吉井明久君です！　皆様拍手でお迎え下さい！』

拍手が聞こえる。流石に決勝戦だけあって客の数も違うな。

『なんと、最高成績のＡクラスを抑えて決勝に進んだのは、二年生の最下級であるＦクラスの生徒コンビです！　これはＦクラスが最下級であるという認識を改める必要があるかもしれません！』

「良いこと言ってくれたね、あの司会の人」

「姫路の父上には好印象じゃろうな」

『そして対する選手は、なんとこちらもＦクラスの生徒コンビです！　Ｆクラス所属・木下秀吉君と、同じくＦクラス所属・氷花紫苑君です！　拍手でお迎え下さい！　二年生と三年生のＡクラスの生徒を抑え込み、決勝に進んできました！』

先生の合図で僕たちも入場する。

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは点数に比例したーーー』

まあ僕たちは知り尽くしていることなので、受け流す。

『それでは試合に入りましょう！　選手の皆さん、どうぞ！』

「良い決勝にしようね？」

「もちろんさ」

「同じクラスだからって、手加減はせんぞ？」

「俺たちだってするつもりはないぜ。いくぞ！」

「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

『Ｆクラス　坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久
日本史　２１５点　＆　１６６点
ＶＳ
Ｆクラス　木下秀吉　＆　Ｆクラス　氷花紫苑
日本史　１８４点　＆　４４５点　』

「秀吉って日本史得意だったんだね」

「紫苑に日本史と世界史を教えてもらってるからの。気づいたらこうなっておったんじゃ」

「流石に一夜漬けじゃあ日頃の成果には敵わなかったな」

「でも一夜漬けでここまで取れるなんて凄いね」

「お主ら、そろそろ始めるぞい」

「先制攻撃ってことで！」

僕の召喚獣が明久と雄二の召喚獣を左右に引き離すような位置に光弾を打ち込む。

「当たんねーぜ！」

まあ当然かわされる。でもそれが狙い。

「秀吉！」

「いくぞい雄二」

「おもしれぇ！」

「紫苑覚悟！」

武器を取り出している僕の召喚獣に明久の召喚獣が突っ込んでくる。
このままでは取り出すより先に明久の召喚獣が懐に入り込んでくる。

「あまいよ！」

「危なっ！」

実は今まで行っていた武器を取り出すモーションはフェイクで初めから、突っ込んできた明久の召喚獣に光弾を打ち込むのが狙いだった。
でも算段しておいた通りに明久は間一髪召喚獣を跳ばせてかわす。

「危なかった」

「惜しいなぁ」

一度明久の召喚獣から距離を取り、武器を取り出す。
先ほどのを警戒してか突っ込んでこない。

「いくよ明久」

今度は僕が召喚獣を突進させる。
まず三回突く。だが全てかわす明久の召喚獣。左下方向になぎ払いを入れると、
右下の方向に伏せてかわし、横に回り込まれ、すれ違いざまに一撃を入れてくる。

「僕だって召喚獣の扱いには少々自信がある。何も観察処分者である明久の先輩特許じゃないよ」

その一撃を僕の召喚獣は槍剣を横にして受け止める。
そして足払いをして素早く横に槍剣を振る。
だがなんとか明久の召喚獣は木刀でガードする。

「流石だね」

「これくらいはね」

吹っ飛んだ明久の召喚獣に槍剣を振り下ろす。
体勢を直す時間がなかった為にガードするしかない明久の召喚獣。

「あれ？」

「フェイントだよ！」

振り下ろす間に右手だけに持ち替えて、木刀には振り下ろさずそのまま空を切る。
そして右手で持った槍剣で木刀を吹っ飛ばす。

「やばっ！」

「トドメ！」

両手で槍剣を振り下ろしたが槍剣は明久の召喚獣にはとどかずに目と鼻の先で止められていた。所謂白羽撮りというヤツだ。

「何！」

「まさか本当にできるとは」

現在膠着状態。だけど秀吉と雄二の方も、

「トドメじゃ！」

召喚獣の操作に長けていた秀吉に軍配が挙がったみたいで今トドメを刺すところだ。

だがそこに先ほど吹っ飛ばした木刀が倒れている雄二の召喚獣のもとへ。

「ラッキー」

「なぬ！」

木刀で長刀を受け止め、空いた片方の腕のメリケンサックで一撃！

これで秀吉の召喚獣は戦死した。

「うっ！　すまぬ紫苑」

「後は何とかしてみるさ」

因みにここまで算段通り。

「援護するぜ明久」

雄二が木刀を明久の召喚獣の足下へパスする。
そして雄二の召喚獣自信は僕の背後から迫ってきた。

「待ってました！」

「おらぁ！」

「ちょっとやばいかな」

槍剣を空中に投げて戻して。素早く背後から迫る雄二の召喚獣の拳をかわして、
雄二の召喚獣を木刀を拾っている明久の召喚獣に向けて投げ飛ばす。

「痛っ！」

「すまねぇ明久」

「ここで一気にぃ！」

投げ飛ばされた雄二の召喚獣に捲き込まれた明久の召喚獣もろとも吹っ飛んでいるので
体勢を立て直せない。そこで僕は召喚獣を跳ばせて上空から光弾を放つ。

「一か八か、飛べ明久」

「オッケー。やってみる価値はあるね」

「吹き飛べやぁあっ！」

もはや回避不可能と判断した雄二が明久の召喚獣を自分の召喚獣のメリケンサックの上に乗せて僕の召喚獣に向けて飛ばす。でも光弾に当たり雄二の召喚獣は戦死した。

「うおぉぉお！」

「っ！　ぐ、あ・・・・・・！」

光弾の見事かわして僕の召喚獣の喉元に木刀を突き立てた明久の召喚獣。

喉元という部位だったので僕の召喚獣は一撃で戦死する。

戦死した時のフィードバックがかなり痛い。しかも今回は喉元という部位もかなり痛い。

「上出来だぜ明久」

『坂本・吉井ペアの勝利です！』

「いぃぃよっしゃぁああー！」

花を持たせるというのも苦労するなぁ。

これで姫路さんのお父さんも認めてくれるかなぁ。

後は、僕自身のけじめを付けに行かなくちゃな。

清涼祭が終わり、学園長への報告を明久たちに任せ、今僕はある人

に会いに来ている。

ガチャッ！

「契約違反ですよね、教頭？」

教頭室前・・・

「それは君の方だろう？」

「そうですね。でも、先に契約を破ったのはあなたですよ？」

「何のことだい？」

しらばっくれるか・・・・・・

「先に明久にチンピラをけしかけたじゃないですか」

「それが私が指示したと？　吉井君に何らかの恨みがあった連中がやっただけじゃないのかね？」

「そうかもしれませんね。では女子を誘拐したのは？」

「それも知らないな」

「あくまでしらを切るつもりならそれでもいいですが」

「それより君の方はどうなんだね？」

「ああ、常夏コンビの事ですか？　何か問題でも？」

「ないというのかね？　君が邪魔してくれたおかげで計画がメチャクチャだよ」

「その割には余裕そうですね。まだ何か指示をしたということですか？　まあ彼らに任せておけば大丈夫でしょうけど。それに準決勝での件は僕の考えあっての行動ですよ？」

「何？」

「ではこんな時貴方ならどうしますか？　兵力が全く同じの部隊が二つあります。
そしてその二つの部隊に同じ内容の任務が言い渡されました。
しかし、その任務を受けられるのはどちらか一つの部隊のみ。
そんな時あなたならどちらの隊を行かせますか？」

「ふむ。そうだね・・・・・。私なら二つの部隊に模擬戦をやらせて、勝った方の部隊を行かせるね」

「僕もそう思います」

「なるほど。君が彼らと戦ったのもそれと同じだと？」

「ええ。その通りです。実際、賭けてもいい。彼らでは絶対に明久たちには勝てない」

「ほう。何故だね？」

「覚悟があるかないかですよ。明久たちには大切な友人を転校させない為に頑張るっていう覚悟がありましたからね。それに以前僕の

クラスメイトが言っていました。そして、明久ならこの言葉を言っていたでしょう。『好きな人の為なら頑張れる』って」

「それが彼らの、彼の覚悟だということかい？」

「そうです」

「まあいい。でもここに来たからには、無事で帰れるとは思っていないだろうね？」

その言葉に反応して扉からチンピラどもが数人入ってきた。

「ええ。思っていませんよ」

「いい覚悟だ。それとこの情報はバラまかせてもらうよ？」

「やれるものなら」

「いいだろう・・・・・・。　何！？　バカな！？」

「残念でしたね。先日に仲間に連絡してハッキングをさせていただきました」

先日、雫さんに来てもらったのはその為だ。彼女はハッキングのエキスパートだからね。

「バカな！　どうやって・・・・・・！」

「テロ組織の基地に潜入してるんですから、民間人の家に侵入するなんて、かるいもんですよ。盗まれたのがバレないように同機種の

メモリーチップを置いておきましたがね」

「やってくれたな！」

「あれ高いんですよ？　大事に使ってくださいね？　もっとも、それを使うにしろ、職業がなくなっちゃうのでどうしようもないですがね」

「そいつをやれっ！」

「おらぁっ！」

「やれやれ、こんな連中で僕に敵うわけないでしょう？」

省略・・・

「流石、国家機密情報局員というところか」

「感謝してくださいよ？　僕の携帯型記憶抹消装置を最初に使われるんですから」

昨日届いた荷物とはこのことだ。博士に頼んで急ピッチで開発してもらったんだ。

まあ、また博士の趣味で作る怪しげな薬の実験体になる約束だけど・・・・・

そして僕は設定をしてボタンを押す。すると閃光が放たれた。

「？、？」

成功みたいだ。何が起きたかわからないって顔をしている。

あ、もちろん国家機密情報局に関する記憶だけを消したんだよ？
全部を消したワケじゃないよ。

「それじゃ、お休みなさい！」

「うっ！」

正拳突きを入れる。教頭は気絶した。

「さてと、君たちからも消しておかないとね」

意識があるチンピラどもにも記憶抹消装置を使う。
そして、気絶させる。

「邪な奴らは退治したな」

すると携帯が鳴りだした。

「もしもし？」

『紫苑か？　通じて良かったぞい』

「慌ててるけど、どうしたの？」

『それが常夏コンビにしてやられての、学園長との約束に関する会話を盗聴されてしもうての。それで今捜索しておるんじゃ！』

それはまずいな。

「わかった！　皆の配置はどうなってる？」

『ワシとムッツリーニは外を探しておる。明久と雄二は屋内を探しておる。
今ムッツリーニが工藤たちにも協力してもらうように連絡しておる』

「わかった。僕も僕なりに探してみるよ！」

『見つけたら連絡をするのじゃぞ』

「あいあい！」

とりあえず居られるとまずい場所から当たってみよう。

その後、放送室などの場所を当たってみたが見つからない。
どこだ、どこにいる・・・・・・？

『紫苑！　見つけたぞい！　常夏コンビは新校舎の屋上じゃ！』

新校舎の屋上か！　盲点だった！

「了解！　すぐに向かう！」

『明久たちにも伝えておくぞい』

「任せた！」

幸い僕は新校舎の四階にいる。すぐに着く。

屋上・・・

バンッ！

「そこまでだ常夏コンビ！」

「げっ！　てめぇは！？」

「ここまで来て邪魔が入るか・・・・・・！」

「放送機材とはね。盲点だったよ。でも放送なんてさせない！」

「夏川！　俺が足止めするからその内に放送しろ！」

「わかった！」

「させるかっての！」

「は、速ぇ！」

僕が片割れを蹴散らし、もう一人を放送機材から引き離そうとした
その時――

ドォン！　パラパラパラ

んん？　何だ今の？
思わず屋上にいた全員の動きが止まる。

「な、何だ今の！？」

「あ、あいつらだ！　吉井と坂本が打ち上げ花火の火薬を召喚獣で投げつけてきてやがる！」

「な、何だと！？」

「あの二人僕が見えてないのか！？」

やばい、いくら僕でもあんな物に当たったら唯では済まない！

「おいあいつらもう一発投げてくるぞ！」

「このままじゃお前まで危険だぞ！」

「仕方ない、試獣召喚（サモン）！」

僕は召喚獣を呼び出す。

「おお！　そういえばお前の召喚獣も物理干渉できるんだよな？」

「それで一体どうするんだ！？」

「こうする！」

僕は召喚獣で放送機材をブッ壊した。

「バカ野郎！　放送機材ブッ壊してどうするんだよ！？」

「知ったことか！　僕は生きなくちゃいけないんだ！」

「だから生きる為にはこの状況ｗ「また来たぞ！」ひいっ！」

ドォン！

「それではさらばだ常夏コンビ！」

「おいさらばってどういうこって何！？　あいつ飛び降りたぞ！」

「しかも校舎の壁をを垂直で走ってやがる！」

以前鬼ごっこをした時にやったのと同じ事をやっている。

「身を乗り出して危ないですよ先輩」

「何言って、ってうおっ！　危ねぇ！」

「後は任せたよ二人とも」

素早く西村が見えた方向にダッシュ！

「オッケー」

「もう一発いくぞ明久」

「貴様らぁっ！　何をやっているかぁっ！」

鉄人到着。

僕は西村とすれ違う時に、

「記憶は消しておきましたから」

「ご苦労。今回は見逃してやる」

こんな会話をしている。

さてさて、あの二人大丈夫かな？

第二十問　けじめと追跡とデストローイ！（後書き）

次回　酒と打ち上げと酔っぱらいの恐怖

第二十一問　酒と打ち上げと酔っぱらいの恐怖（前書き）

すみません。

サブタイトル変更しました。

第二十一問　酒と打ち上げと酔っぱらいの恐怖

それでは最後に、頭の体操として一風変わった英語のクイズをどうぞ。

【？】と【？】に当てはまる語を答えて下さい。

『マザー（母）から【？】を取ったら【？】（他人）です』

姫路瑞希の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【ｏｔｈｅｒ】です』

教師のコメント

その通りです。Ｍｏｔｈｅｒから『M』がなくなるとｏｔｈｅｒ（他人）という単語になります。

こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

氷花紫苑の答え

『マザー（母）から【愛】を取ったら【ｏｔｈｅｒ】（他人）です』

教師のコメント

その通りｄ・・・・・。何故でしょう。間違っているのに正解にしたいと思いました。

土屋康太の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【S】（他人）です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『ＭＳ』でも『ＳＭ』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え
『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁は切られるの】（他人）です』

教師のコメント
英語関係ないじゃないですか。

「何はともあれ、中華喫茶『ヨーロピアン』の成功を祝って、乾杯！！」

『『『『乾杯！！』』』』

明久と雄二は西村に何らかの処分を下されているだろうから遅くなるということなので、二人には悪いが先に打ち上げを始めさせてもらった。

「無事清涼祭を乗り切り、喫茶店を成功させることができたようじゃな」

「ああ。若干売り上げが足りないけど、上出来だと僕は思う」

「・・・・・・・・・・・・バンバンザイ」

「あ、どうやら今学園で一番有名な二人組が来たみたいだよ」

教頭室に火薬を投げつけデストロイした二人だ。

「む。やっと来たようじゃな。遅かったのう」

「・・・・・・・・・・・・先に始めておいた」

「ご愁傷様」

「ああ、ゴメンゴメン。ちょっと鉄人がしつこくてさ」

「お主ら、もはや学園で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「退学やら停学にならなくてなによりだよ」

そこは学園長が手を回してくれたんだろう。

「・・・・・コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ・・・・・・」

「あれだけのことをやっておいて、退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？　ウチらは事情を知っているけど」

そういって島田さんが明久に飲み物を渡す。

「そういえば、お店の売り上げってどうだったの？」

「それについてはさっき僕たちで目を通したけど、畳と卓袱台がせいぜいじゃないかな？」

そういって収支の書かれたノートを渡す。

「確かにこれだと畳と卓袱台がせいぜいだな」

「う～ん・・・・・・。やっぱり出だしの妨害が痛かったよね」

明久が唸っている時に秀吉が声をかけてきた。

「そういえば真奈から連絡があったんじゃが、霧島たちと共に遊びに来るらしいぞい？」

「何だと！？　翔子がか！？　ならば今からでも逃亡を・・・・・・！」

「・・・・・逃がさない」

霧島さんが疾風のように登場。

真奈や霧島さん「翔子待て！　落ち着ぎゃぁぁぁあああっ！」がくるなら優子や工藤さんも来るのかな？

「秀吉君！」

真奈が秀吉に後ろから飛びかかり抱きついた。

「うおっ！？　何じゃ、真奈か、いきなりじゃったから驚いたぞい」

「えへへ。ごめんごめん」

「そんなに慌てなくたって秀吉は逃げないわよ」

「むしろ来てくれるって」

噂をすれば何とやら。優子と工藤さんも来たみたいだ。

「いらっしゃい。飲み物を取ってくるね」

「「「ありがとう」」」

若干華やかさが増したFクラスの打ち上げ。

「霧島さんは雄二に掛かりっきりだけどいるかな？」

とりあえず四つの紙コップを持ってAクラスの女子四人に渡す。

「邪魔しちゃったかな？」

「そんなことないって。むしろ皆大喜びさ。美人が四人も来てくれたんだから」

「び、美人／／／」

「ホンット紫苑って天然たらしだよね？」

「まったくじゃな」

むむ、何だか聞き捨てならない会話が。

「天然たらしとはどういうことだよ？」

「そのまんまの意味だよ」

「気付いておらんところがまた」

「失礼な。僕のどこが天然でたらしだと言うんだい？」

「そりゃあ「紫苑！」」

「うおおっ！？」

何だ！？　いきなり優子が抱きついてきたんだが！？　普通に嬉しい。

「にゅ～。紫苑～」

「えっと？　どうしたんだい優子？」

優子が顔を僕の胸に埋めている。やべぇ、かなり可愛い。ああ、抱きしめたい！

「ねえ紫苑。あの録音機に録音されていたことって本当？」

「？　何のこと？」

録音機？　一体何のことだろう？

「『如月ハイランド　プレオープンプレミアムチケットが手に入ったから一緒に行こう』ってやつ」

「何だと!?」

プレオープンプレミアムチケットといえば行ったカップルは如月グループの力によって
多少強引に結婚まで持ち込ませるというあのチケットのことか!?
僕はそんなの持ってないぞ!?　貰ってるのは優勝したペアだけだし、雄二は明久に譲ったんだろうし・・・・・。一体何故そんな話になっているんだ!?
でもとりあえずこの場はその録音の僕は僕ではないと説明しなくては。

「あのね、優子。その録音されている僕の声なんだけど、僕じゃなくて・・・・・秀吉か!?
そうだ、秀吉が僕の声を真似て録音したもので決して僕が言った訳じゃないし、チケットが手に入った訳でも・・・・・」

「え・・・・・。違うの?　紫苑はアタシじゃ、嫌なの?」

「ち、違うよ!　断じて優子に不満があるわけじゃなくてだね、行きたくても、僕はチケットを持っていないわけでだね」

「姉上」

秀吉、助けてくれるんだね!　いつもは悪のりして更に状況を悪化させる困った子だと思っていたけど・・・・・

「紫苑はギリギリまで秘密にしておきたかったんじゃよ」

前言撤回。本当に困った子だ。

「そうだよ優子。秘密にしておいて最後の最後に喜ばせようとしてたんだよ」

「本当!?」

ううう。この目には弱いんだよなぁ。

でもここではっきり伝えておかないと、優子が僕なんかと結婚する羽目になっちゃう。

だからここは心を鬼にして・・・・・・

「（ジー）×3」

「うん。まあ、そうかな」

やってもうた。

「紫苑。今の一連の会話は録音させて貰ったからね?」

「何!?」

くっ！　またしてもやられた。

「まあ安心せい。チケットのことはワシらが学園長に頼んでおいたから問題ないぞい」

「問題大ありだよ!」

はあ録音されてしまった以上あの録音機を破壊でもしない限りどうしようもないな。
さて、どうやって破壊しようｋ「紫苑だ～い好き！」・・・・・・・
僕の時が止まった。
何故って？　そんなの理由は簡単。勘がいい人は気付くだろう。

僕の唇に優子の唇が重ねられたから。

「えへへ／／／　紫苑のファーストキス、やっと手に入れた。ずっと欲しかったんだ～」
「あ、姉上。酔っているとここまで変わるのか？」
「紫苑は一体どんな反応をｌーーー」
「（ドサッ）」
「え？　ちょ、紫苑大丈夫！？　ねえ、お～い？」
「紫苑には気絶するほど衝撃的だったんじゃな」

僕の今までの人生で一番衝撃的だった一日が終わった。

第二十一問　酒と打ち上げと酔っぱらいの恐怖（後書き）

次回　地図と宝とストライカー・シグマⅤ

予習の話しについては飛ばします。楽しみにしていた方、申し訳ありません。

これが終わったら3、5巻に入ります。

第二十二問　地図と宝とストライカーシグマⅤ

以下の問いに答えなさい。
『地図と方位磁石を頼りにチェックポイントを辿るスポーツを、何と呼ぶでしょう?』

姫路瑞希の答え
『オリエンテーリング』

教師のコメント
正解です。さすがですね、姫路さん。長い距離を歩くスポーツで、上り下りのある山道で行われる事もあります。体の弱い姫路さんには大変かもしれませんが、体力作りの為にも頑張って参加してください。

氷花紫苑の答え
『敵基地の探索、および潜入』

教師のコメント
それは常人にはできません。

吉井明久の答え
『ロールプレイングゲーム!』

教師のコメント
そう答えると思っていました・・・。

学園長室・・・

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「さてと、どうしたもんかねぇ・・・・・・」

思案顔の学園長。その前には三匹の狐のストラップと二つの腕輪が置いてある。

「うん」

何かを思いついた学園長。

「ちょいと遊んでやるか」

Ｆクラス・・・

「どうしたの雄二？」

教室に入ってきたのは文月学園初の観察処分者である吉井明久。

「何かやるらしいぞ」

その質問に答えるのは彼の悪友である坂本雄二。

「何かって？」

クラスメイトの目線の先に張ってあるチラシを明久も覗き込む。
そしてそこにはーーー

「文月学園主催、豪華賞品争奪戦、オリエンテーリング大会～！？」

と、書かれていた。

話は今朝に戻って、明久宅・・・

ナレーションｓｉｄｅ

吉井明久は宝を見つけた。
１ｕｐ！

「今日は久々にリッチな朝食だなぁ」

彼の前にあるのは彼の得意料理の一つである文月印のパン粉丼である。

「いただきます！」

ガガガガガ！

「流石は文月印のパン粉、パンの味がするよねぇ～」

ガガガガガ！

「これでジャムでもあれば、文句ない朝食なんだけどなぁ～」

文句の言える筋合いではない。

登校中の道・・・

明久ｓｉｄｅ

「あぁ・・・・・・粉だと消化が速いのかな？　ん？」

あれ？　横断歩道の上に何かが落ちてる。

「これは如月ハイランドの狐のマスコット、フィーじゃないか。落とした子が拾いに来るかもしれないな。元の場所に戻しておこう」

僕はそのままマスコットを元の場所に戻しておいた。

これが正しい判断のはずだ。

「ん？」

横断歩道を渡ったところでどこかで見たことがあるような後ろ姿が目にとまる。

「う～、ない、ないよぉ～」

あれは美波の妹の葉月ちゃんだ。

何かを捜してるみたいだけど。

「おはよう葉月ちゃん。こんな所で何を？」

「あ、おはようです。バカなお兄ちゃん」

相変わらず元気だなぁ。

「落とし物を捜してたです」

「落とし物？」

「フィーちゃんのストラップ。亡くしちゃったです。限定版でもう売ってないのに」

「なぁんだ！　それだったらあそこにーーー」

すぐそこの横断歩道のところにあったはず。これで万事解決――

ブオォォン！　（車が通りすぎる音）

信号が赤になり、車が勢いよく二人と一匹の前を通り過ぎていく。

「うわぁぁ！　ヤバイ、どうしよう！？」

「フィーちゃん！」

その時、救世主が、

「どうしました？　吉井君」

「ふ、福原先生！？　ちょうど良かった。召喚許可を下さい！」

助かった～！　これで車をすり抜けフィーちゃんを助けることができる！

「おや？　どのような理由でしょう？」

メガネを弄って僕に聞き返す。ああもう！　急がなくちゃいけないってのに！

「急いでるんです、速く！」

「仕方ないですね。今回は時別ですよ？」

先生の許可が下りたことにより、フィールドが形成される。

「いやった！　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！」

召喚獣が見慣れた魔法陣から出現される。

急がないと車にフィーちゃんが！

「よし！　あのストラップを」

僕は召喚獣をフィーちゃんへ突進させる。

「フィーちゃんを助けるんだ～！」

ブオォォン！　（車が接近する音）

「んえ？　うぅぅお！？」

突如として僕の身体が召喚獣と共に地面にめり込む。

「大丈夫ですか!?　お兄ちゃん!　バカなお兄ちゃん!」

「うう。フィードバックが・・・・・・」

まったく、いきなり飛び出してきて人様の召喚獣を轢き逃げだなんて。困った人もいるもんだね。

「まったく、何をバカをやってるんだ?」

逃げなかっただけ褒めてやろう。でもこの妖怪みたいな声はどっかで・・・・・・?

「おはようございます。学園長」

ああ。あの妖怪ババァか!

「驚いたじゃないか。召喚獣で悪さなんかするんじゃないよ」

悪さだって!?　今の発言はちょっとカチンときたよ。

「悪さなんかじゃないですよ!　落とし物をーーー」

そう言ってる間に一大のダンプカーがーーー

「あ」

フィーちゃんのストラップをスクラップに早変わりさせた。

「あぁぁぁー！」

やっちまったー！　僕としたことがこんな妖怪婆ババァと話してる暇があったらさっさとストラップを回収すべきだった！

「ふん。おもちゃなんかにうつつをぬかすなってことだよ」

なんだと！？　あれは葉月ちゃんの大切な物だったのに！

「そんな言い方をしなくても、いいじゃないですか！」

学園長に突撃する召喚獣。だが学園長には辿り着かずに消えてゆく。

「召喚許可を取り消しました。召喚獣で暴力を振るってはいけません」

「暴力！？　僕はただ、葉月ちゃんの為――――」

「召喚獣はバカのおもちゃじゃないよ！」

学園長が一喝。思わず固まる。

「だったら、バカじゃなければいいって事ですよね？」

「あ、おはよう。紫苑、秀吉、木下さん、宮野さん」

「「「「おはよう明久（吉井君）。おはようございます学園長、竹原先生」」」」

全員が挨拶を済ませた。何だか紫苑が羨ましいよ。美少女三人と一

緒に登校だなんて。
今度異端審問会に報告しようかな。

「さて、話は戻りますが、学園長、用はバカでないところを見せてみろ、と？」

「そうさね。そこのバカがバカでないところを見せてくれたら、そいつの欲しい物が手にはいるかもね」

そう言って学園長は来るまで一足先に学園に向かって行った。

再びＦクラス・・・

紫苑ｓｉｄｅ

「学園長が言っていたのはこのことだったのか」

「何じゃ？　この人だかりは？」

「何かやるのかい？」

僕と秀吉が明久より一歩遅れて教室に入ると、人だかりができていた。
壁に何やら張ってあったので見てみるとーーー

「文月学園主催「それ僕が今やった」あ、そうなの？　学園長が「それもやった」はい。しかし何故オリエンテーリング大会なんだ？」

「賞品ならここに書いてあるわよ」

「学食の食券一年分!?　新作ゲームの引換券!?」

へぇ～。学校なのにゲームの引換券なんて出して良いのか突っ込みたいが、がまんするか。

えっと他にはーーー

『文房セット　特別参考書　文学小説２０冊　特別教室「一日」貸出券

一日生徒会長になれる券　学食デザート一年分の食券

西村先生の「一週間個別授業」引換券　高橋先生の「一週間個別授業」引換券

遠征もＯＫ練習試合チケット　特別!!文月学園三日間の宿泊券

硬式野球ボール３０個セット　テニスラケット2本　ＣＤアルバム引換券

ＭＰ３プレイヤー　喫茶ラペディス２０００円分の商品券

洋服３着無料引換券　フィー・ノイン・アインのストラップ

如月ハイランドパークプレオープンプレミアムチケット　シークレットアイテム

無料携帯機種変チケット』

が、あるらしい。如月ハイランドのチケットは秀吉たちが手回ししたのだろう。

まったく、おかげで優子は行く気満々だよ。ウエディング体験なんてのがなければ、僕も喜んで行くんだけどな。

「随分と豪華じゃのう」

「シークレットアイテムもあるってかいてありますね」

シークレットアイテムというのには興味あるな。
明久と雄二が召喚大会の優勝したときに貰ったのみたいなものだろうか？

「ああ！　フィーとノインとアインの限定版ストラップセット！これこれこれこれこれー！」

「何だ明久？　そんな物が欲しいのか？」

「良いだろべつに」

お尻をクネクネさせるな。

「どうやったらこれが貰えるの？」

「これが学園内の地図じゃ」

秀吉が宝の地図みたいな見た目の文月学園の地図を取り出した。まあ今回は宝探しだけどね。

「この中から探し出すのか。僕ＲＰＧで宝箱探すの得意なんだー」

「そしてこれが、試験問題じゃ」

「えっ」

秀吉が山のように積み上げられた試験問題を卓袱台の上に置く。

「試験の答えがチェックポイントの座標になっていて、そこに隠し

てあるチケットが賞品の引換券だ」

雄二が簡単に説明してくれる。

「そ、それじゃあ、テストが説けなきゃ貰えないじゃないかー！」

「しかも早い者勝ちで、他のチームとぶつかった場合は、召喚獣バトルで奪い取ってもいいそうじゃ」

「何から何まで不利じゃないかー！」

確かに、バカには不利な条件だな。でも、バカにはバカなりの戦い方があるってところを見せて貰いたいな。

「そうだ！　姫路さんか紫苑となら「皆席に着けー！」」

西村がちょうど入ってきた為、一時的に全員が席に着く。

「何気にオリエンテーリングのチーム分けを発表するぞ」

さてさて、僕は一体誰と同じチームなんだ？

『一・有藤・工藤・武藤
二、遠藤・加藤・近藤
三、浅賀・朝倉・飯島
四、竹中・田中・平田
五、坂本・木下・吉井
六、横溝・氷室・手塚
七、島田・土屋・姫路
八、須川・瀬戸・竹中

九、君島・布田・真中
十、仲野・中村・斉藤・・・・・・
十七、氷花　　』

ん？　何かおかしくない？

「問題児は一カ所に集めておいた。何をするかわからんからな」

「そんな、不公平じゃないですか！？　秀吉は可愛いからいいとして、」

秀吉、眉間にシワが寄ってるよ？

「雄二じゃ全然戦力にならないですよ！」

「その言葉、のしつけて返してやる」

「異議あり！　先生、明らかに僕のチーム分けがおかしくないですか？」

「お前は点数がＡクラス並みで、しかも召喚獣の扱いにも長けている。さらには運動神経が学校で一番良いじゃないか。教員の間でも満場一致の結果だ。諦めろ」

「そんな～」

頭数が少ないってどんなに辛いか知ってる癖に、くそっ！
これじゃあチケットを手に入れられるかわからないじゃないか！

「制限時間は放課後のチャイムまで、これも授業の一環だ、真面目

に取り組むように！」

屋上・・・

秀吉　ｓｉｄｅ

「問題は三問に線」

現在ワシらのチームは屋上で作戦会議をしておる。

「一問目の答えが地図のＸ座標。二問目がＹ座標。三問目がＺ座標。つまり、何階にあるかじゃな」

「なんだぁ。全部選択問題じゃないか～」

むむ？　何やら明久が得意げな顔をしておるぞい。

「それなら、楽勝だね」

「お前、選択問題得意なのか？」

ワシも気になる。

「僕の得意分野を知らないのかい？　いいよ。見せてあげる」

そう言って自信満々に明久が取り出したのはーーー

コロコロ、（鉛筆が転がる音）

「はぁ」

「一瞬でも期待した俺がバカだった」

同じくじゃ。

「数学はこの、ストライカーシグマＶ！」

青と赤と白に色をした普通の鉛筆にしか見えんのじゃが？

「現国は、プログレムブレイカー！」

今度は緑と黄緑と白の鉛筆。

「歴史は、シャイニングアンサーだ！」

じゃから普通の黄色とピンクと白の鉛筆にか見えんのじゃが？

「正解率高いんだー！」

「お前の人生は、サイコロの性能に左右されてきたのか？」

「バカにするな！　見てろ！」

「見てなきゃならんのか」

見てなきゃならんのかのう。

「唸れっ！　ストライカーシグマＶ！」

コロコロと音を立てながら転がる明久の鉛筆。これでチケットに辿り着けるとは思えんがのう。

「いよし。よーし、わかった！」

どうやら答えが出たようじゃな。

「X座標６５２、Y座標２３７、Z座標は５、発見！」

おお！　してその場所は？

「ターゲットは、あそこだぁー！」

勢いよく指を出た場所に向けて指す明久その指の指す場所はーーー

思いっきり空中じゃった。

「思いっきり空中じゃのう」

「お前取って来い」

「おかしいな？　問題が間違ってるのかな？」

「答えが間違ってんだろ！？」

『あったー！』

「「「ん？」」」

呆れているワシらの元に聞こえてきたのは聞いたことのある声じゃ

った。

『うおぉぉぉー！』

声のする方を見てみると、そこには霧島・姉上・工藤・真奈のチームがチケットの入ったカプセルを持って校庭にいた。向こうも人数上の問題で四人になったんじゃな。Ｆクラスにもあるのじゃし。

『あった。賞品の引換チケットだ』

『最初から正解ね』

『やったやった』

「Ｘ軸とＹ軸は当たっていたようじゃな」

意外じゃったな。

「ほら！　ストライカーシグマＶは凄いだろー！」

「信じてるお前の方が凄いと思うわ」

『学食のデザート一年分だよこれ～。四人で分けよう！』

『ところで代表、今日は機嫌が良いみたいだけど、何かあったの？』

『・・・・・うん。優しい人からこれ、貰ったの』

『あー！　それって召喚大会の優勝賞品のチケットだ！　いいな～』

『彼氏と行くんだね！』

『・・・・・ううん。ウチの夫と』

「はあぁぁぁ！　ちょっと今悪寒が・・・・・」

「お主も苦労が多いのう」

よりにもよってあの四人が同じチームじゃなんて。
そうなると紫苑が不憫に思えてくるのう。

Ｆクラス・・・

康太　ｓｉｄｅ

「うぅ～、数学以外はお手上げだわっ！　あ、凄いわね土屋」

「保健体育だけ。他はお手上げ」

「えぇ・・・・・」

ふっ、俺の実力を舐めるな。

「はいっ。終わりましたよ」

流石は姫路。

「凄―い！　早速探しに行こう！」

さて、一体どこに宝があるんだ――――ん!?

「ん?　こっ、この座標はーーー」

俺の鼻血ゲージが5上がった。

女子更衣室前・・・

「ご、合法的に女子更衣室・・・・・・（ダバババ）」

「よし!　賞品を探すわよっ!」

「ん!?　とう!」

素早く前進し、獲物を構える。目標物を探索――――

「ふぅ、ふぅ、ふぅ。女子更衣室なのに、女子が更衣していない!」

当然である。（ナレーションのつっこみ）

「ちゃんと片付けないと大変ですね～」

「男子に見えない所なんて、こんなもんよねぇ」

「着替え中以外、ここに価値はない、はぁ」

折角合法的に女子更衣室に入ったというのに、残念だ。

ガチャッ（ロッカーが開く音）

俺の中の種が、今、割れる！

パリーン！（ＳＯＥＤ覚醒！）

そしてその中には女子用の制服が。

「・・・・・・・・・・・・（ピュー）」

こ、これは。まだ、温もりがあると思われる女子用の制服！

「・・・・・・・・・・・・んがぐか（ドサッ）」

「どうしたの土屋？　大丈夫？」

くっ！　俺としたことが制服ごときでここまでいってしまうとは！

しかし、まだまだ俺を負かすことなんて到底無理だ！

「平気。これくらいーーーんはっ！」

ガチャッ（ロッカーが開く音）

俺は更なる境地へ！

パリーン！（ＳＯＥＤ覚醒！）

そのロッカーの中にはスク水が！

「・・・・・・・・・・・・ッ（ブシャァアアア！）」

ぐはっ！　スク水だと！？　くっ！　そのような露出が少ない格好ごときで！

「土屋君！？」

「この程度で、負ける訳には！」

そうだ！　俺にはこんな所で負ける訳にはいかない！　もっともっと、女子を盗撮――

ガチャッ（ロッカーが開く音）

俺は限界を超えてみせる！

パリーン（S○ED覚醒！）

今度は一体何だ！？　ふっ、何でも来い！　今の俺はどんな物にも動じない！

な、何・・・・・・ブラジャー、だと・・・・・・・

「んおぉぉぉー！　（ブシャァアアア！！！）」

「土屋！？」

「か、感無量・・・・・・」

体育館用具入れ・・・

紫苑　ｓｉｄｅ

「ええい！　無理だっての！」

現在僕は問題を解いている。だが、やはり頭数が違う。
いくら召喚獣バトルが強くたって宝の在処がわからなければ何の意味もないんだっての！

「くっそ、数学が、解けない。仕方ない。この手は使いたくなかったが・・・・・。誰も見てないよな？」

僕は数学が苦手。Ｄクラス戦の時は偶然あんだけとれたけど、普段は平均点より下回ることの方が多いのである。その度に優子や真奈に教えて貰っていたんだけどね。
でも今回の問題は運が良いことに選択問題。もうこうなったら奥の手を使うしかない！

「貫けっ！　パーフェクトグングニル！」

コロコロ・・・・・・

ふむふむ。なるほど。この答えによると、どうやらこの跳び箱の中に入ってるみたいなんだがーーーあ、あった！

「やったね。流石はパーフェクトグングニルだよ」

えっと、中身は・・・・・お！　やった！　如月ハイランドプレオープンプレミアムチケット引換券だ！

「これで、優子にどやされずに済むかな。しかし、優子は僕なんかで良いのかな？　やはり事情を話してからの方が良いような、それともーーー」

しばらくこれは続いた。

学園長室・・・

「さて、見せて貰おうかね。バカの一面を」

制限時間も残り少なくなってしたし、ここが最後の目的地かな。
現在僕は屋上へ向かって移動中だ。

「さて、どこにあるのかな、と」

屋上に到着ってこれは召喚フィールドか？

「「「「試獣（サモン）召喚！」」」」

「「「試獣（サモン）召喚！」」」

全員が召喚時のポーズをとって召喚獣を呼び出す。

「まずいぞ、数でも質でも負けておる」

「まさかこいつらとあたることになるなんてな」
「折角ここまで来たのに」
「・・・・・手加減はしない」
「覚悟はいい？」
「悪いけど、勝たせて貰うよ？」
「それじゃ、バイバイ」
『Ｆクラス　坂本雄二　＆　吉井明久　＆　木下秀吉
日本史　２３６点　＆　１８３点　＆　２０５点
ＶＳ
Ａクラス　霧島翔子　＆　木下優子　＆　宮野真奈
＆　工藤愛子
日本史　４２３点　＆　４５８点　＆　４２１点　＆
４０３点』
圧倒的だな。
Ａクラスの四人が召喚獣を突撃させる。
やっぱりここはーーー
「やらせないよ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！」
僕もポーズをとって召喚する。
『Ｆクラス　氷花紫苑
日本史　４６２点』

「水差しだけどね！」

二つの戦力を分断するように光弾を放つ。

「紫苑！　助かったよ！」

「これならまだ勝機がある」

「これで、数の上での有利はなくなったのじゃ」

「数だけ同じでも仕方ないでしょ？」

まったく、その通りだよ。

「・・・・・・バトル再開。氷花から倒してあげる」

「な、何！？　身体が引き寄せられる！？」

凄い力に引っ張られている。床に槍剣を突き刺して抵抗してみるも、皆無だ。

「うおぉぉぉ！？」

「紫苑！」

「これで！」

優子が腕輪の能力を使って槍を八本に増やしてきた。この状態でかわすのはほぼ不可能だ。

でも、霧島さんの召喚獣の腕輪が光っているので恐らくこれは霧島さんの召喚獣の腕輪の能力だろう。

「まずい！　俺と明久で翔子の召喚獣を狙う。秀吉は紫苑を援護しろ！」

「了解！」

「うむ！」

「やらせないよ！」

「足止めさせてもらうよ？」

「召喚獣が膝をついたぞい！？」

「何だろう。身体が重い！」

ダメだ！　向こうは工藤さんと真奈で足止めされている。
しかも工藤さんは腕輪を使っているらしい。
こうなったら僕一人で切り抜けるしかない。

「そらっ！」

「それは見切ってるわ！」

槍剣を投げてみたが、あっさり叩き落とされる。でもそれを異次元に戻して、光弾を作る。

「それでどうするつもりかしら？」

「こうするのさっ！」

僕は光弾を地面に当てて、優子の召喚獣を跳び越えさせる。

「やるじゃない」

「どうも、もし相手を引きつける能力ならば、自ら近づけばどうと言うことはない」

「・・・・・・ハズレ」

召喚獣を霧島さんの召喚獣に接近させると、いきなり弾き飛ばされた。

「くっ！　まさか『引力と斥力を操る』能力か！？」

「・・・・・違う。私の召喚獣の能力は『磁力を操ること』その証拠にこんなことだってできる」

「召喚獣が動かない！？」

「・・・・・床と氷花の召喚獣の足の磁極を逆にした。これでもうその場から動くことはできない」

「攻撃、防御、サポート。その全てを行える能力か。流石学年主席。敵わないな・・・・・」

強すぎだよ。勝てねぇっす。

「向こうも、万策尽きたみたいよ？」

「皆！」

敗北を覚悟していたその時にさらに最悪な情報が舞い込んできた。

「すまぬ。紫苑」

「戦略が意味をなさなかった・・・・・・くそっ！」

「何としてもあのストラップを手に入れなきゃいけないのに・・・・・！」

「それじゃ、トドメ！」

全滅を覚悟したその時、召喚フィールドが消えた。

「えっ！？」

「な、何！？」

「時間切れです」

その時僕たちは命拾いをした。

「あー、危なかった」

「運が良かったのう」

「次までに対策を考えておくか」

今回は何とか乗り切れたけど、もし次に戦うことがあったら、まず勝てないからなぁ。
せめて、僕自身が戦えたなら別だけど・・・・・・。
そうだ！　忘れてたけど、優子を正式にデ、デートというヤツに誘うか／／／

「優子、ちょっといい？」

「え？　何？」

そういえば、今何故か優子はチャイナ服を着ている。喫茶店の時に優子のも見てみたいなぁとか思っていたりしたので、ちょっと感動！

「あ～、えっと、その格好似合ってるね」

「・・・・・・バカ／／／」

あ、かわいい！

「あのさ、ちょうどこのイベントで如月ハイランドのプレオープンプレミアムチケットが手に入ったからさ、その、一緒に行かない？　責任は取るから」

優子の唇を奪ってしまった責任とか・・・・・・

「え？　本当に、手に入ったの？　それと責任って？」

「ああ。運良く手に入ったよ。奥の手を使ったかいがあったよ。責任については、僕からは言えない／／／」

ヤベッ、あの時の感触を思い出しちゃったよ／／／
柔らかかったな。優子の唇。

「そう、なの？　冷静に考えたら秀吉の声真似の可能性も考えてたから、嬉しい」

「それで、答えは？」

「もちろんＯＫよ！」

「良かった～。じゃあ、その日に迎えに行くね」

「うん！　楽しみにしてる」

「あの～？　ボクたちもいるんだけど？」

「「あ」」

「やれやれ、ピンク色の空間を築いている二人は放っておいて、先に戻るとしようかのう」

「「「「「賛成！」」」」」

この後、教室に戻るまで散々からかわれたのは言うまでもない。
因みに、最後に明久が手に入れたチケットは例のストラップの引換券だったみたいだ。

Fクラス

「やった！　フィー・ノイン・アインの限定版ストラップセット！　葉月ちゃん喜ぶぞー！」

「よかったね明久。あれ？　何だろこの紙？」

「どうしたんじゃ？」

「何々？　『この後、腕輪を持っていない、同じクラスの信頼できる人を連れて、学園長室へ来ること』だって」

「ババァからの呼び出しとは、ドンマイ」

「ハハハ、怒られなければ良いんだけどね」

でも何故腕輪を持っていない生徒限定なんだろう？

「さて、じゃあ秀吉。一緒に来てくれる？」

「うむ。ワシで良ければ」

まあ実際、今教室にいるのは僕・秀吉・明久・雄二の四人な訳で。

明久と雄二は

『白銀の腕輪』を持ってるので、消去法でいっても秀吉しかいないんだけどね。

まあ同じクラスで信頼できるって言ったら、まず秀吉が思いつくし。

「じゃあ、俺と明久は先に帰ってるからな」

「また明日ね」

「またの」

「またね」

「さて、では、行くかのう？」

「そうだね」

僕と秀吉は学園長室へ向かった。

第二十二問　地図と宝とストライカーシグマⅤ（後書き）

次回　　僕と秀吉とハーフリング

すみません。３．５巻に入れませんでした。

第二十三問　僕と秀吉とハーフリング（前書き）

今回は腕輪の説明だけなので、かなり短いです。

第二十三問　僕と秀吉とハーフリング

学園長室・・・

コンコンッ！

「入んな」

ガチャッ！

「「失礼します」」

そう言って僕と秀吉は学園長室に入る。

「ふむ。ちゃんと連れてきたようだね」

「はい」

「さて、確認だが、そいつがあんたのパートナーで良いんだね？」

「パートナー、ですか？　まあ一番信頼の置けるクラスメイトであり、幼なじみです」

「そう言ってもらえると嬉しいのう」

「よし。ならお前たちに良い物をやろう」

「良い物、ですか？」

何だろう？

「ほらっ。プレゼントさ。こっちがお前さんで、こっちがアンタだ」

「「どうも」」

これって、

「これって腕輪、ですか？　明久と雄二が持っているのと同型の」

「確かに、色以外は殆ど同じじゃ」

僕たちに渡されたのは黒い腕輪。

「そうさ。それはアンタたち用に作った腕輪さ。氷花が持ってるのは『黒空（こっくう）の腕輪』木下が持ってるのは『極光（きょっこう）の腕輪』だよ」

無駄に格好いい名前に聞こえる。

「学園長。紫苑の腕輪は名前からして黒いカラーリングであっておるが、ワシのが黒というのは名前からしておかしくないかのう？」

「確かに、そうだね」

「それは、ハーフリングだからだよ」

「「ハーフリング？」」

つまり、半分の腕輪ってこと？

「でもちゃんと腕輪の形をしてますし、どこも半分には見えませんよ？」

「半分なのは、性能の方さね」

「性能、ですか？」

どういうことだろう？

「木下の腕輪が黒い理由もそれさね。今の状態では本当の能力を使うことはできないさね」

「本当ということは何か別の能力を使うことはできるのかの？」

「ああ。今の状態だと、『召喚フィールドの形成』と『形成したフィールド内では召喚獣は物理干渉できる』という能力が使えるさね」

「普通に彼らの持ってる腕輪より強くないですか？」

正直こっちを賞品として出すべきだと思う。

「慌てるでないさね。当然不備があるよ」

「どのような不備ですか？」

「まず、形成したフィールド３０秒と保たない。それに坂本が持ってる方のヤツは科目が設定できるけど、これはできない。しかも、狭い」

「どのくらいなのじゃ？」

「ざっと、3分の1さね」

せ、狭い！

「そいつは、辛いですね」

「しかも、そんなに狭いところで、物理干渉されたら危なっかしいしね」

「では、本来の能力はどうやって使うのじゃ？」

すっかり忘れてた。

「それを今から教えてやるさね。アンタたち、『アンロック』って言ってみな」

「「アンロック」」

パキッ！×2

「「ふぬわぁぁぁ！　腕輪が壊れたー！」」

えっ!?　どうすんのこれ!?　僕弁償できませんよ!?

「が、が、が、学園長！　壊れてしまったんですけど!?」

「はっはっは！　それで良いんだよ」

「どういうことじゃ!?」

「アンタたち、今度は半分になった腕輪のパーツをどっちでも良いから交換して、『ロック』と、言ってみな」

「は、はぁ」

僕と秀吉は腕輪のパーツを交換して、

「「ロック」」

カチッ！×2

「あ、はまった」

「ワシのは色づいて七色になったぞい」

「その状態がその腕輪の本来の姿さ」

「でも、わざわざ、二つにわける必要はないんじゃないですか？初めからこの状態にすればーーー」

「それが、調整がね」

なるほどね。

「どのような不備ですか？」

「その状態は、５分が限界なんだよ。５分たったら自動的に分離する」

「じゃからこうなっとる訳じゃな」

「それで、この状態の能力は何です？」

「氷花の腕輪は、『リンク』と召喚獣を呼び出している時に言うと、『召喚獣に意識を挿入できる』さね」

おお！　それはかなり便利だ！

「つまり僕が召喚獣になれる訳ですね！？」

「そう。でも、意識を挿入した本来の体は多分その場に倒れるだろうね。しかも、召喚獣になるってことはフィードバックについても、それなりに覚悟しときな」

「了解です」

当たらなければ良いだけの話だな。

「次に木下の方だが、召喚獣の呼び出してる時に『コピー』というと『同じフィールド内にいる腕輪の能力を使うことができる召喚獣の腕輪の能力を自分の点数が足りなくとも、使うことができる』さね」

これも中々便利な能力だな。

「おお！　例えば姉上の召喚獣の腕輪の能力をワシも使うことができるのかの？

一度使ってみたかったんじゃ」

「でも、何故これを僕らに？」

「さっき言った通り、フィードバックが激しくなるだろうから、それなりに体力があるヤツじゃないとね。それにハーフリングだから息のあったパートナーが必要だったんだよ」

つまり僕は生贄ですか。

「まあ、便利な腕輪が手に入ったんで文句は言いませんけどね」

「話は以上だ、大事に使っておくれよ？」

「「はーい！」」

この腕輪があれば、優子や真奈たちにも勝てるかもしれないな。

帰宅路・・・

「良い物を貰ってしまったのう？」

「ああ。そうだ！　あとで、秀吉も召喚獣の操作の練習をしたらどうかな？」

「それは妙案じゃな！　真奈と姉上には、秘密じゃよな？」

「さすがに、ねぇ？」

ちょっと心が痛むけどここは耐えるんだ。

「では、帰ったら早速練習じゃ！」

「おおー！」

第二十三問　僕と秀吉とハーフリング（後書き）

次回　番外編　バカ限定女装大会！

番外編　バカ限定女装大会（前書き）

今回はＤＶＤ第三巻に収録されている『バカ限定女装大会』を書いてみました。

最後のあたりはオリジナルです。
多分わかると思いますけど。

番外編　バカ限定女装大会

『文月学園主催・女装コンテスト』

『おおー！！』

「さて始まりました。文月学園らしい企画。時期はいつなのか？
目的は何なのか？
場所はどこなのか？　そういった細かいことは全て無視していきましょう。解説を務めますはのは、私、放送部の新野すみれと」

「学年主任の高橋洋子です」

「「よろしくお願いします」」

因みにセットは豪華で、ファッションショーなどで使われるステージが用意されている。

姫路さんの男装のカットが入る。

「それでは、エントリーナンバー1、卑怯・変態・女装趣味と、三拍子揃った外道。２Ｂ代表、根本恭二さんでーす」

うえっ。あれって試験召喚戦争の時に根本に女装させた時に着せた、女子用の制服じゃないか！？　まさか自信あるのか？

「いやぁ、これは思った以上に汚い絵ですねぇ～。初っ端から誰得～な企画かわからなくなってきました」

解説の新野さん正直だな。

「そんなことを言ってはいけませんよ新野さん。彼の変態としてのプライドを傷つけてしまっては可哀想です」

あんたも正直だな高橋先生！

「変態としてのプライドなんてものは、むしろズタズタにされるべきだと思いますが、気にしないで行きましょう」

気にしようよ！？

まあ正直キモいのでーーーポチっとな。

カチッ！（手元のボタンを押す音）

これにより、根本は折り返し地点であえなく落下。

「なお、審査員は点数を付ける代わりに、出場者を強制的に退場させる権限を持ちます」

説明ありがとう。審査員は、僕・優子・真奈・久保君の四名だ。因みに他の三人もボタンを押したようだ。

「審査員がこれは見るに堪えないと思ったらボタンを押す訳ですね？」

「はい。そうなります」

高橋先生って結構毒舌？

島田さんの男装のカットが入る。

「エントリーナンバー2番。Fクラス代表、坂本雄二さんで～す」

雄二。まあ無理矢理だったし、仕方ないよね？　そんな花柄の浴衣を着てーーー

カチッ！（手元のボタンを押す音）

――この方が速く終わってありがたかったでしょ？

「これは厳しい評価。ターンすらさせてもらえませんでしたね」

厳しいのはこの企画だと思います。特に男子にとっては。

「坂本君は中央。つまり平均点の届かずに終わってしまったようですね」

「そうなりますね」

それがどうしたんだ高橋先生？

「平均点以下。つまり赤点ということはーーー」

えっ！？　この展開ってもしかして・・・・・・

「補習の必要があるかもしれませんね」

・・・・・・雄二、ゴメン。今度何かおごるよ。

「紫苑、やっちゃったわね」

隣に座ってる優子が小さな声で話しかけてくる。

「うん。でも優子も真奈も押してるんだから結局こうなってたんじゃない？」

「坂本君、ご愁傷様だね」

真奈もどうやら雄二の無事を祈ってくれるらしい。

「いえ、そんな補習、必要ないと思います」

おお！　新野さんそのまま頑張って！

「彼にあの格好のまま、後で職員室へ来るよう伝えてください。どこが悪かったのか一緒に考えましょう」

（（（（うわぁ。高橋先生、何て酷なことを））））

その時審査員席の皆の気持ちが一つになった。

「これほど余計なお世話という言葉を体現しているセリフを、私は聞いたことがありません」

（（僕もです））　（私もです）　（アタシもです）

もう一度、気持ちが一つになった。

霧島さんの男装のカットが入る。

「さて、エントリーナンバー3番。本日は撮る側でなく撮られる側。ムッツリ商会の若き経営者、土屋康太こと、ムッツリーニさんで～す」

『おー！』

銀のトレイを持った、ウェイトレスの姿で登場。

観客からも声援が聞こえる。おお、これは確かに中々かわいーーー

痛ぁっ！

「何するんだよ優子！？」

足を思いっきり踏まれた。

「フン！」

「あ～あ。優子怒っちゃったよ？」

「何でだよ～？」

「氷花君。君は鈍いのだな」

「え？　どゆこと」

まさか久保君にまで言われるなんて。一体何なんだ？

「これはレベルが高い。普通に可愛いです」

「土屋君は小柄で無口ですからね。雰囲気も出ていたのでしょうか

？」

解説の二人からも好印象だな。

「歩ききりましたねー」

「審査員もこれなら見ていられると思ったのでしょう」

はい。

工藤さんの男装のカットが入る。

「続いて、エントリーナンバー４番。文月学園を代表するバカ。吉井明久さんで～す」

ああ。明久。君も姫路さんと島田さんに無理矢理参加させられたんだし、仕方ないよね。

まあ僕は審査員をやるという仕事を素早く見つけて逃げた訳だが。

う～ん。ゴスロリ、というヤツだろうか？　黒と白の胸元が開いている服を着ているな。

ってうおっ！？　久保君が身を乗り出して見てる。

ってああ！　優子がボタンを押そうとしてる！

「っちょ、優子。ダメだって！」

「どうしてよ！？　Ａクラスの威厳を保つ為よ！？」

ボタンを押そうとしてる優子を必死で抑える。

「久保君があんなに見てるんだから、っね？」

「でも・・・・・・」

ふう、何とかボタンを押すのをーーー

カチッ！（手元のボタンを押す音）

――――阻止できなかった。真奈、久保君の事を考えてあげようよ？

「以外です。結構可愛かったのに落とされていまいました」

真奈が無情にも落としました。

「審査員席の久保君が震えながら下唇を噛んでいます」

「何故でしょう？　今の久保君からは学年次席の貫禄が欠片も感じられません」

「宮野真奈さんはＡクラスの威厳を保つ為に、ボタンを押したのかもしれませんね」

本当にそうなのかな？　何故だろう。イマイチ真奈が本当にそんなことを思って押したと思えない。昔よくからかわれたし。

葉月ちゃんの男装のカットが入る。

ああ。最後のこれは、どうなるかは火を見るよりも明らかだよ。

「それでは、最後のお一人、エントリーナンバー５番。本命中の本命と言われ、「カチッ！」ゆー勝、候補」

うん。予想通り。だって最後は秀吉だもん。優子がそんなこと許す訳がない。

だいたい格好からちょっと変だったと思う。下半身がスカート。上半身は男子制服という格好だったし。運良く？　全身男子制服だったらＯＫだったかもしれないのに。

まあ女装コンテストだから無理な話だが。この後秀吉の関節が大変な事になるんだろうな。

「はい。それではこれで文月学園女装コンテストを終了します。皆様、またの機会にお会いしましょう。さようならー」

流石、すぐに気を取り直して進めたな。

スタッフロールが流れる。

「あーの、ところで、私の出番ってこれっきりだったりしないですよねー？」

「さようなら」

ああ無情。

優子の男装のカットが入る。

『お疲れ様でしたー！』

無事、女装コンテストを終了させることができた。

「皆さんお疲れ様でしたー」

「なかなか可愛かったわよ、アキ」

観客にいた、女子たちが出場者である明久たちと合流した。

「ああ。また女装することになるなんて」

「お前はまだいいだろ!?　俺なんてこの後職員室行かなきゃいけないんだぞ!?　まあ当然行くわけが「・・・・・・雄二、職員室行く」っな!?　翔子!　俺は絶対行かないからギャァァァ!」

「・・・・・・・・・・・・っく!　工藤、何故俺が参加する必要があった!?」

「いいじゃんムッツリーニ君。可愛かったんだし?」

「・・・・・・・・・・・・全然良くない!」

「じゃあこれで許してよ。えいっ（チラッ）」

「ぐぼぁっ!　（ブババっ）」

「さーて、秀吉。覚悟は良い?」

「まっ、待つのじゃ姉上!　その関節はそっちには曲がらなっ・・・・・・!」

「秀吉、何でこうなるとわかっていてコンテストなんかに出たの?」

「本人曰く、女装コンテストとは聞かされていなかったみたいだよ？」

「おいおい」

情報の確認を怠るから・・・・・・・

真奈の男装のカットが入る。

帰宅途中・・・

「あ～あ。紫苑の女装姿見たかったな」

ごめん被る。

「きっと紫苑が女装すると、本当に女の子みたいになっちゃうからあんまり意味ないと思うよ？」

女子がそんな話をしている中、僕は優子の折檻を受け、くたばっている秀吉をおぶっている。

「大丈夫秀吉？」

「う、うむ。何とかの」

「ホント、秀吉って優子には頭が上がらないよね～」

「否定できんとこが悔しいのう」

「優子の言うことなら何だって聞いちゃう感じ？」

「多分、脅迫されるからのう」

まあ、そんなこったろうと思ったけどね。

「しかし、それじゃったら紫苑もじゃろう？」

「まあね」

「姉上が、『私と付き合いなさい』なんて、言ってきたらどうするのじゃ？」

その時は・・・・・・

「その時は、できれば僕の口から言いたいな。一応男なんだし、女の子にそんなことを言わせるわけにはいかないし」

「お主はそういうヤツじゃからのう。そういえばお主はどうやってワシが姉上に成りすました時ワシと姉上を見分けておるのじゃ？」

「基本は顔でわかるよ？　幼なじみを舐めちゃいけないよ？　まあ寝起きとか頭が働いてない時は胸の大きさかな？」

でも何故そんなことを聞くんだ？　また何か僕で遊ぼうということか？

家に着いたから、秀吉を降ろす。

「なるほどのう。でも姉上の胸はAじゃから小さ「アニメだったら

もっと大きいわよ！」姉上、その関節はギャァァァ！」

「優子ってAだったんだ／／／」

「紫苑ってやっぱりムッツリスケベ？」

「またそうやって広める気か！？」

黒歴史を再現させて溜まるか！

「だって本当のことじゃない？」

「違うわっ！」

「キャァァ！　優子、秀吉君助けて！　紫苑に犯されそう！」

何てことを叫ぶんだこの女！？

「「紫苑。ちょっとお話しようか？」」

「はい・・・・・」

凄く良い笑顔で優子と秀吉が言ってきた。さっきまであんなだったのにどうしてこんな時に限ってコンビネーションが良いんだろう？こうやって考えることすら危うくーーーここで僕の意識は消えている。

「フフ。やっぱり紫苑で遊ぶのって楽しいな」

真奈、覚えてろよ？

番外編　バカ限定女装大会（後書き）

次回　番外編　視聴覚室で主張しよう（クリスマス編）

番外編　視聴覚室で主張しよう（クリスマス編）（前書き）

同じくＤＶＤの第三巻に収録されている『視聴覚室で主張しよう（クリスマス編）』を書いてみました。
今回はこの小説なりにアレンジしてみました。

あと、今更ですが、優子の一人称が『私』になっている件については作者のミスです。大変申し訳ありません！
でもあえてこのままで行きたいと思います。
でもこだわりのある読者様がおりましたら、どうぞ申請して貰えれば直しますので、ガンガン、言っちゃってください。

もう一つ、今回から、アニメの次回予告みたく、登場キャラクターの次回についての語りを入れたいと思います。

番外編　視聴覚室で主張しよう（クリスマス編）

問題　クリスマスについて答えなさい。

姫路瑞希の答え

『えっと、クリスマスは大好きな人と一緒に過ごす、素敵な日です。月と星とロウソクの明かりに照らされた、『サクッ、サクッ』』

待っていた人が来たようだ。その役は明久。姫路さんがその姿を確認すると、嬉しそうに明久の元に駆け寄る。

『真っ白の雪の輝きと二人して戯れる。恋人たちのとっても素敵な時間です』

そして、二人の距離が近づき・・・・・・

ＦＦＦ団・・・

「違うわー！！」

ここでＦＦＦ団登場！

まあいつも通り嫉妬をブチ巻いてもらおう。

「クリスマスはキリストの生誕を祝う日じゃー！！」

『おー！！』

「それ以外の、何物でもないんじゃー！！」

『おー！！』

サンタの格好をした姫路さんが現れ、

「バカと銀色と召喚獣！」

あかんべーをしながら言った。

なかなかアドリブが良いな。

『Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ』

西村がナレーションで言う。

これで、姫路さんは終了。

「はう～。ちょっと恥ずかしかったです」

「お疲れ、姫路さん」

「あ、ありがとうございます。吉井君」

明久が姫路さんに飲み物を渡す。

「いや～。それにしても、作者が僕たちに頼み事なんてね。僕さっきので理性がちょっと・・・・・・」

「ちょっと意外だったが、まあやるからには全力でやるさ！　後者についてはまあ、わからないでもないがな」

「秀吉監督。今のどうだった？」

現在監督という重大な立場の秀吉に聞きに行く。

「そうじゃな、明久の動きがちょっとぎこちなかったが、まあ問題ないじゃろ」

「だそうだから、二回目頑張って明久」

「今度は上手くやってみせるよ！」

「次、島田。いくぞい。準備はしてあるかの？」

「ＯＫよ。いつでもいけるわ！」

「では、アクションッ！」

そもそも何でこんなことになっているのかというと、話は先日に戻る。

先日の学園長室・・・

作者　ｓｉｄｅ

『バカと銀色と召喚獣の宣伝小説（嘘）作りー！！？』

僕を含め、皆が声を揃えて言った。

今、学園長室には学園長・高橋先生・西村・僕・明久・雄二・康太・秀吉・姫路さん・

島田さん・霧島さん・工藤さん・優子・真奈、がいる。
正直ちょっと狭い。

「そうさね。この小説のレギュラーである、あんたたちにアニメ版ＤＶＤ第三巻に収録されている、『視聴覚室で主張しよう（クリスマス編）』のバカと銀色と召喚獣バージョンを、撮影して欲しいとの作者からの依頼さね」

「おいおい、いいのかよ？　作者の存在をキャラクターである俺たちが知っていて」

「別に問題ないはずさね。というか、作者にアタシたちは逆らえないからね」

まあそういうことに。

「だよね～。最悪、出番が減らされて、消滅しかねないし」

しないって。

「でも何故クリスマスがお題なんじゃ？」

「きっと、ＤＶＤのやつと別のを考えるのが面倒だったからだよ」

すみません。

「まあそういう訳だから、出演者はお前たちだ。吉井に坂本、真面目にやれよ？」

「「わかってますって」」

「場所とセットは演劇部から借りれるので、頑張って下さい」

『はーい』

紫苑　ｓｉｄｅ

という訳で、作者の依頼を遂行している。と、いうわけさ。
そして今は島田さんの撮影。
因みに、待っている時に近づいて来る人役は女子の希望で選ばれる。

問題　クリスマスについて答えなさい

島田美波の答え
『えっと、クリスマスは好きな男の子と一緒に過ごす素敵な日です。一緒にケーキ食べたり、プレゼント交換したり、『サクッ、サクッ』』

再び明久が登場。今度は先ほどよりも滑らかな動きだな。

『一つのマフラーを二人で巻いて歩いたり。恋人たちのとっても幸せな時間です』

そして、二人の顔が近づく。

ＦＦＦ団＋α・・・

「いけませんお姉様！　クリスマスを男などの薄汚い豚と過ごすな

んて、以ての外です！」

『おー！！』

ＦＦＦ団と清水さんがもはや決まりきったセリフを言う。

思ったんだが、顔が近づいて終了って、生殺しじゃね？

「お姉様のクリスマスと純情は、美春の物なんです！」

それはない。

『美波様―！！』

同じくサンタの格好をした島田さんが登場。

「バカと銀色と召喚獣」

「Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ、お姉様！」

「えっ、うわあぁー！？」

清水さんが乱入。これで良いのか？

「カット！　うむ、最後の清水の乱入が案外良かったかもしれぬ」

マジですか。

「明久よ、今度は滑らかに動きすぎじゃ。恋人とクリスマスに会うのじゃからもう少し緊張した感じで歩くのじゃ」

「結構難しいね」

「それが演劇の世界じゃ」

演劇については秀吉がここにいるメンバーの中で、誰よりも詳しいからな。

「良し、では次、霧島と雄二、準備はいいかの？」

「・・・・・・いつでもいける」

「たく、何で俺が」

「頑張ってね、坂本夫婦」

「・・・・・・夫と素晴らしい演技をしてみせる」

「おい明久。勝手に翔子を入籍させるな！」

いずれそうなるって。

「アクションッ！」

問題　クリスマスについて答えなさい

霧島翔子の答え

『クリスマスは、たった一人の愛する人と一緒に過ごす素敵な日。相手が逃げないように、スタンガンを使ったり、あらかじめ監禁しておいたり、『サクッ、サク、ダッ！』』

ああ！　雄二が今の霧島さんの答えを聞いて逃げ出した！
だが霧島さんが雄二をもの凄い速さで追い掛ける。

『アイアンクローを「ぐわっ！　放せ翔子、アイアンクローはギャアァァァ！」かましたり。恋人たちの幸せな時間を過ごせる日』

そして霧島さんが雄二を引きずっている。
ノーコメントということで。

「違うわー！！」

ＦＦＦ団も大変だな。

「そんな二人きりでイチャイチャするなど、キリストへの冒涜じゃー！！」

『ちくしょー！！　羨ましいんじゃー！！』

本音が混ざってる。

「俺たちが、全力で邪魔するぞー！！」

『おー！！』

本当にやったら最低だぞ？

サンタの格好をした霧島さんが登場。

「バカと銀色と召喚獣」

『Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ』

西村。お疲れ様です。

「なるほど、あれで二人だけの時間を過ごせるという訳ね」

「勉強になるわね」

優子に真奈よ、君たちはあれで良いのか？

「うむ、流石霧島じゃな。よくわかっとる」

・・・・・・

「では次じゃな。紫苑、姉上いくぞい」

「あいあい」

「大丈夫よ」

ううう。次は僕と優子なんだよな。緊張する。でも何で優子は僕を選んだんだろう？

「ではアクションッ！」

問題　クリスマスについて答えなさい

木下優子の答え

『えっと、クリスマスは、好きな人と一緒に過ごす素晴らしい日よ。白と黒のコントラストが織りなす夜を二人でデートして、『サクッ、

サクッ』』

いつかクリスマスの夜にこうやって、優子が僕を待っていてくれる日が来るのかな？

『デートの最後には、キスなんかをして互いの絆を確かめ合い、深く、固くする。恋人たちのとっても素敵な時間が過ごせる日よ』

優子の顔が近い！　顔が赤くなってるのがバレバレだよ／／／でも優子も顔が赤くなってるぞ？

「絆など、すぐに壊れるんじゃー！！」

『離婚―！！　不倫―！！』

とことんやるんだね。何度も叫んでて疲れない？

「どうせ壊れるなら、初めから作るなー！！」

『その通りじゃー！！』

サンタの格好をした優子が出てくる。ああ、可愛い。

「バカと銀色と召喚獣」

『Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ』

ちょっと顔を赤らめれて言ってたのがさらに可愛い。

って、これだと僕は変態みたいじゃないかー！

「やっぱりこの格好恥ずかしいわね／／／」
「でもかなり似合ってて可愛いよ？」
「もう・・・・・・バカ／／／」
「えっ、何でバカ？」
「う、五月蠅いわよっ！　良いじゃない、別に」
「そんなぁ～」
何でバカって言われたんだろ？
「相変わらず仲が良いですね」
「優子も正直なれば良いのに」
「・・・・・素直になるべき」
「早くしないと誰かに盗られちゃうかもよ？」
「結構狙ってる人多いよ？」
「ううぅ～」
女子たちからそんな会話が聞こえる。何が盗られて、何が狙われてるんだ？
「次は監督、自ら出陣だね？」

「うむ。まさかワシが指名されるとはの」

「真奈が相手で良かったね」

「やっぱり緊張するのじゃ」

「じゃあ秀吉におまじないをかけてあげよう」

取って置きのをね。

「ん？　どんなじゃ？」

「ここで見せなかったら男じゃないよ？」

「男じゃない・・・・・・」

「じゃあいくよ？　アクションッ！」

秀吉の代わりに僕が言う。

問題　クリスマスについて答えなさい

宮野真奈の答え

『えっと、クリスマスは大好きな人と過ごす素敵な日です。どんな服を着ていくか選びつつ、相手がどんな格好で来るのか考えたり、『サクッ、サクッ』』

流石秀吉、上手いな。真奈も当然だが上手だ。この二人は相性抜群なのかもしれないな。

『好きな人を待つ時間さえも愛しく感じられて。そしてその姿を見つけたときには、思いっきり甘えられる。恋人たちのとっても素敵な時間だよ』

秀吉が真奈の腰に手を伸ばしてる。大胆だな。まさかここまでやるとは・・・・・・

今までの組とは違って、女の子の方が赤くなってるよ。

「秀吉―！！」

何だかＦＦＦ団が何て言うのか楽しみになってきたな。

「俺たちを、見捨てないでくれー！！」

『俺たちは、こんなにも好きなのにー！！』

「諦めないからなー！！」

『おー！！』

サンタ真奈が登場。

「バ、バカと銀色と召喚獣」

『Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ』

真奈がセリフを噛んだな。多分先ほどの秀吉の行動が予想外だったんだろう。

「ふぅ～。どうじゃたかのう？」

「うん。大胆だったね」

「それを言わないで欲しいのじゃ・・・・・・」

自分でも予想外だったのか。

「普段の秀吉からは考えられないね」

「そうじゃな。真奈に嫌われてしまうのう」

「そんなことないって。満更でも無いと思うけど？」

「そんなわけないと思うぞい」

「まあまあ」

秀吉を慰めてから撮影再開。
最後は康太と工藤さんの組だ。

「アクションッ！」

問題　クリスマスについて答えなさい

工藤愛子の答え
『えっと、クリスマスは恋人と過ごす素敵な日だよ。カラフルな光の中デートをして、ちょっと相手をからかってみたり、『サクッ、サクッ』』

因みにこの組を最後にしたのには理由がある。

『デートが終っても家に帰りたくない恋人を家に連れ帰って、
「・・・・・・・・・・（ポタポタ）」その後にピーーーーなんかをしちゃったりする
「・・・・・・・・・・（ブシャアァァァ！）」恋人たちのとっても素敵な日だよ』

工藤さんが倒れた康太にかかんで言った。

「ムッツリーニ！」

明久が叫ぶ。まあこれが理由だ。康太の鼻血によって、セットが鮮血の赤に染まってしまうからである。

「・・・・・・・」

あれ？　ＦＦＦ団が何も言わないぞ？

『・・・・・・』

よく見たら皆鼻血で倒れている。
意外と弱いのか？

サンタの格好をした工藤さんが登場。

「バカと銀色と召喚獣」

『Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ』

これで女子の撮影は終了だ。

「それでは、最後じゃのう」

「やれやれ、僕の本気の演技を見せてあげるよ」

「おう。頑張れよ明久」

「・・・・・・・・・・・・応援してる」

康太も復帰が早いな。

「ファイト」

「では、アクションッ」

問題　クリスマスについて答えなさい

野郎共の答え

『えっと、クリスマスは大好きな人と過ごす素敵な日です。どんな服を着ていくか選びつつ、相手がどんな格好で来るのか考えたり』

これは明久。

まあ今まで女子がやっていた恋人を待つ恋人役を明久がやっているのだ。

しかもセリフはパクリ。

『一緒にケーキ食べたり、プレゼント交換したり、スタンガンで相手が逃げないようにしたり』

これは雄二。

『監禁して、一つのマフラーを巻いたりして、絆を深めたり』

これは康太。監禁の時点で絆も何もないと思う。

『月と星とロウソクの明かりに照らされたカラフルな色の中デートをして』

これは秀吉。

『デートが終わっても帰りたくない恋人を連れ帰って、幸せな時間を過ごす』

これが僕。工藤さんのセリフは土下座して、端折ってもらった。
僕には恥ずかしすぎて言えない。

『素敵な日です』

全員でしめる。

「寒いんじゃー！！」

これでも言うのかい？

「俺も寂しいんじゃー！！」

『じゃー！！』

明久・雄二・秀吉がサンタ。康太と僕がトナカイの格好で登場。

「バカと」

「銀色と」

「召喚獣」

「Ｍｅｒｒｙ」

「Ｃｈｒｉｓｔｍａｓじゃ」

上から順に明久・雄二・康太・僕・秀吉だ。

「おめでとう。吉井君」

あ、サンタの格好をした久保君だ。

「嫌あぁぁぁ！」

先ほどから雄二と康太が笑っていたのはこれが理由か。

さて、これで良いかい？　作者さん？

ＯＫです！！

番外編　視聴覚室で主張しよう（クリスマス編）（後書き）

今回の語り部は紫苑です。

僕と雄二は互いの思い人を連れて、如月ハイランドへ行くことになっている。
ウエディング体験を必死に阻止しようとする僕と雄二、だが暗躍者と女子二名がそれを許すはずもない。

次回　バカと銀色と召喚獣　『四人と暗躍者とウエディング体験』

いくぞ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第二十四問　四人と暗躍者とウエディング体験（前書き）

すみません。長いです。

第二十四問　四人と暗躍者とウエディング体験

『坂本夫婦のマル秘、恋愛テクニック講座』

「・・・・・・おい翔子。とりあえず俺にわかるように状況を説明しろ」

「・・・・・・これは、私たち夫婦が恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」

「驚いた。このタイトル、『の』以外全部嘘のことしか書いてないぞ」

「・・・・・・でもちゃんとゲストが来ている」

「「「「よろしくお願いします！」」」」

「どうやらここにまともな人間は俺しかいないようだな」

「・・・・・・では、ハガキの紹介」

「たまには俺の話を聞け」

「・・・・・・『突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談です』」

「ハガキの差出人よ、よく聞いてくれ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。
コイツが本当に恋愛相談の相手に相応しいか、もう一度考えてみて欲しい」

「・・・・・心配ない。これが私たちの愛の形」

「愛する人を束縛するのがお前の愛なのか？」

「でも、今だったらヤンデレっていうのがありますし」

「別に良いんじゃない？」

「坂本君がMってことで解決じゃない？」

「ここに俺の味方はいないんだな」

「・・・・・ハガキの続き。『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の子の誘惑に負けて浮気をしないか心配です。どうしたら良いでしょうか？』」

「いや、どうしたらと言われてもな」

「・・・・・夫の浮気には私も困っている。他人事とは思えない」

「頼むから他人事だと思ってくれ」

「・・・・・まずはゲストに意見を聞いてみる」

「私はとりあえず浮気現場を写真に納めて、その人の関係じゃ全員にバラまくかな？
それで周りからの視線とかに耐えられなくなったら、『助けて欲しい？』って聞いて話し合う」

「宮野、お前結構Ｓだな」

「ボクだったら、浮気したら監禁したりして「そっからはＮＧだっ！」
仕方ないなぁ～」

「・・・・・・様々な意見が出たけど、それではまだ不十分」

「そうだな。夫への信頼が不十分だな」

「・・・・・・そこで、私の考えた浮気防止法を教えてあげる」

「そうか、あれだけ酷い目にあわせた夫への恐怖がまだ不十分ということか。
お前ら夫を信頼してみるという選択肢は持ってないのか！？
それと翔子よ。それは俺の身に降りかかる不幸の予告として見なしていいんだろうか」

「・・・・・・用意する物は三つ」

「？　浮気防止に道具が必要なのか？　それとお前らメモなんてする必要ないぞ？」

「・・・・・・一つめはーーー」

「一つ目は？」

「――――『手錠』」

「翔子、ストップだ。いきなり犯罪臭がする」

「・・・・・二つ目はーーー」

「やっぱり聞いてないな。んで、二つ目は？」

「――――『エプロン』」

「ちょっと待ってくれ。急にお前の考えが読めなくなった。というか、その組み合わせで俺に何をするつもりなんだ」

「・・・・・そして三つ目はーーー」

「三つ目は？」

「――――『ビデオカメラ』」

「貴様何を撮るつもりだ!?　エプロンと手錠でドレスアップされた俺の何を撮るつもりだ!?」

「・・・・・その三つを用意して、夫に浮気の恐さを教えてあげるといい」

「俺は今、何よりお前が怖い」

「・・・・・以上、『バカなお兄ちゃん大好き（十一歳）』ちゃんからのおハガキでした」

「差出人小学生かよっ!?　世も末だな!」

「・・・・・ゲストの皆も浮気には気を付けるように」

「「「「「「ありがとうございました！」」」」」」

「・・・・・・ところで翔子。さっきのは冗談だよな？」

「・・・・・・カメラは五台以上が望ましい」

「まぁ待て。じっくりと話し合おうじゃないか」

自宅・・・

鳥の鳴き声も冴え渡る静かな朝。僕は目を覚ました。

「うっ、くあ～。ふう。今日は約束の日か」

そう。今日は優子を如月ハイランドへ連れて行く日だ。
僕としてはどうやってウエディング体験をかわして、無事、家へ帰って来れるかが勝負だ。

「ウダウダ言っていてもしょうがないよな。とりあえずランニングしつつ、考えるか。そう言えば秀吉の姿がないけど、リビングかな？」

ランニングする時の格好に着替えてリビングに降りると秀吉と真奈がいた。
邪魔したかな？

「おはよう。秀吉、真奈」

「うむ、おはようじゃ」

「おはよう。紫苑」

「僕はこれからランニングに行ってくるけど、秀吉はどうする？」

何やら真奈に耳打ちされた後に返事が返ってきた。

「ワシも行くぞい。ちょっと待ってて欲しいのじゃ」

「玄関にいるからね」

少しだけ待った後に秀吉が降りてきた。

「さあ、紫苑。行くぞい！」

「やけに今日は張り切ってるね？」

「そうかの？」

「ちょっとね」

玄関を出たところでまた秀吉と真奈が目配せしていた。何だ？

「何かあったの？」

「い、いや、何でもないぞい」

「そう？」

僕たちはその後しばらくランニングしていた。

真奈　　ｓｉｄｅ

「ふう。行ったわね」

秀吉君に協力してもらって、紫苑を家から遠ざけてもらった。

「優子は選び終わったかな？」

何故かというと、優子が今日の為に早起きして何を着て行くかなどを悩んでいるのだ。

その姿を紫苑に見せるわけにはいかないからね。

「優子―。どう？」

私がドアを開けると下着姿の優子。

これも見せるわけにはいかない理由の一つなんだけどね。

「うぅ～。どうしよう。紫苑って何色が好きなんだろ？」

「そんなに悩まなくても大丈夫だって。あいつは女の子に対する免疫がないからさ。

デートって時点ですでにドキドキだって」

「そうかな？　でも少しでも可愛く見られたいし」

「優子はそのままでも充分だと思うけどな～。紫苑も勿体ないことするよね～？
こんな可愛い幼なじみが一途に思ってくれてるのに、それに気付かないなんて」

優子も紫苑の好意に気付いてないけどね。

「そうよ！　ちょっと位気付いて欲しいわよっ！」

ご愁傷様。あいつもかなり鈍感だからさ。

「とにかく、秀吉君が時間稼ぎしてくれてる間に選び終わりましょう？」

「はぁ。夜の内に決めきれていれば良かったんだけど・・・・・・」

私は味わったことはないけど、好きな人とのデートの前ってこんなもんよね？

紫苑　ｓｉｄｅ

何故だろう？　今日は秀吉が珍しく寄り道をしている。たまにはいいけど。
その後家に戻って、秀吉と順番でシャワーを浴びる。
そして現在朝食を作っている。

「秀吉。優子を起こして来てくれる？」

「う、うむ」

秀吉が起こしに向かった。
すると上から会話が聞こえてきた。

「なっ！？・・・・・・終わって・・・・・・・か！？」

「仕方・・・・・・・」

「・・・・・・がない・・・・・・紫苑・・・・・・・よ！？」

何だ？　二階で何かあるのか？　でも今手が離せないからそちらには行けない

数分後・・・

「お～い？　朝食できたけど～？」

朝食ができたので呼びに行く。

「もう・・・・・・・よ！？」

「とにか・・・・・・どっち・・・・・・・じゃ！」

「・・・・・・ち！」

「入るよ～？」

ノックをしてドアを開けようとするとーーー

バンッ！（ドアが開く音）

ガスッ！（僕の顔面にドアが衝突する音）

「ぐおぉぉ！　鼻が、痛いっ！」

「あっ、ごめん」

どうやら真奈が思いっきりドアを開けたようで、
ドアの前にいた僕はドアのダイレクトアタックをまともに喰らった。

「あのね～。わかっててやったでしょ？」

「あはは。でも、セーフかな？」

「何、が・・・・・・」

真奈をちょっと睨んだ後に、部屋の中を見てみると、そこには色々な服と秀吉。
そして、膝が出る長さの緑色のスカートに、薄いピンク色のノースリーブのワンピースにブルーの上着をした優子がいた。あんまりファッションについてはわからないけど。

「ど、どうかな？／／／」

「・・・・・あっ！　え～と、その、似合ってるよ。とっても」

「・・・・・・っ！？／／／」

顔が真っ赤な優子がとっても魅力的に見える。
僕の理性は持つのかな？

「じゃあ朝食を食べて、楽しんで来なよ。お二人さん？」

その後、朝食を食べて、電車とバスを乗り継ぎーーー

如月ハイランド前・・・

――――如月ハイランドに到着した。

「やっと着いたわね」

「とりあえず入場するかい？」

入場しようとしたところで霧島さんと雄二も到着したようだ。

「あ、代表」

「・・・・・・おはよう二人とも」

「・・・・・・俺は・・・・・・無力だ・・・・・・」

「おはよう。霧島さん、雄二」

何だか朝から雄二がブルーだな。

「どったの雄二？」

「実はこんな事があってなーーー」

説明中・・・

「なるほど。まあ、頑張ってね」

「他人事だと思いやがってっ！　まあいい。翔子」

「・・・・・・うん」

「帰ろう」

おいおい。

ミシッ

あ。何か嫌な音が聞こえた。

「・・・・・・ダメ。絶対に入る」

「はっはっは。翔子、俺の肘関節はそっち側には曲がらないぞ？」

「私たちも行きましょう？」

「ああ」

サブミッションを決めているカップル？　と手を繋いでいるカップル？
が同時に入場ゲートに到着した。

「いらっしゃいませ！　如月ハイランドへようこそ！」

何をやっているんだ。

「真奈。何で係員の格好をしているんだ？」

「本日はプレオープンなのですが、「聞いてる？」チケットはお持ちでしょうか？」

ダメだ。完全にスパイモードだよ。

「・・・・・・はい」

「これを」

優子と霧島さんがチケットを出す。
その隙に雄二と会話とする。

「おい、あの係員が宮野だってのは本当なのか！？」

「ああ。あれは真奈の変装レパートリーの内の一人だ」

「ってことは他の連中も来ているってことか！？」

「多分、そうなる」

「「ウエディングシフト？」」

あっ、何かやばい。

「そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

雄二が慌てて係員、もとい真奈に言う。

「そんなこと言わずに、お世話をさせてくれませんか？」

「不要だ」

「そこを何とか」

「ダメだ」

「この通り」

「却下だ」

何だか面白い。

「あ、僕たちもね」

「断ればアナタがたの実家に大量のエロ本を送りつけます」

耳元で恐ろしいことを囁いてきた真奈。

「「やめろっ！そんなことをされたら俺の（僕の）命が大変なこと

になってしまう！」」

女子二人が首を傾げている。

こ、こいつ・・・・・・！　覚えてろよ！

「では、まず最初に記念写真を撮りますね？　無料なので、金銭の心配は要りませんよ？」

「・・・・・・記念写真？」

「良いじゃない。撮ってもらおうよ？」

「え？　あ、ああ」

「まあ写真くらいなら良いか」

素直じゃないなぁ。

「お待たせしました。カメラです」

あ。明久だ。

「ありがとね、よ、浅野さん。助かるわ」

「悪いがちょっと電話させてくれ」

「どうぞ」

試すのかい？

Ｐｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒｒ

「ああ、すいません。僕の携帯ですね」

ビンゴだ。ということは康太や秀吉も来ているな？

「・・・・・いよう明久。テメェ、面白いことしてるじゃねぇか・・・・・！」

「人違いですっ」

ダッ！

あ。逃げたな。

「雄二。明久は放っておいて、もっとわかりやすい康太辺りを」

「ちっ、それもそうか。翔子、すまんがちょっと我慢してくれ」

「・・・・・・？？？」

よし。このまま雄二が誘き寄せてくれるなら楽なんだがーーーって雄二！

いきなり霧島さんのスカートを捲りあげるなんて！

「・・・・・・・・・・・・っ！！（ギラッ）」

カメラを構えるいかにも怪しい黒子がいる。康太と見て間違いないだろう。

「紫苑。見た？」

「え？　何を？　優子、何で僕の関節を外そうとしているの！？僕は何も見てないって！　その関節はそっちには曲がらなっ・・・・・！」

何でこんな目に！？

「では、写真を撮りますね。はい、チーズ」

え？　この体勢で撮るの？

「すぐに印刷しますので、そのまま待っていてください」

「わかったわ」

「いやいや、わからないでよ！」

結局このまま待つことになり、僕の関節が酷いことになっていないか心配だ。

「はい、どうぞ」

「ふえっ！／／／」

優子が写真を見て赤面したぞ？　何が写っていたんだ？

「うわ、これは、ちょっと／／／」

「サービス加工も入れておきました」

何故か関節技を決められている僕と決めている優子とその二人を囲うようにある
ハートマークと『私たち結婚します』という文字。
しかも天使までいる。どう考えてもこの二人は結婚しそうにない。
向こうも同じような感じだし。

「えーっと、これをパークの写真館に飾る、べき？」

真奈は何だかんだ言って常識人だから流石に悩むだろう。

「私たちは遠慮しとくわ」

「だよね」

優子もこれを飾らせるわけにはいかないと判断してくれたようだ。

『あぁっ！　写真撮影してる！　アタシらも撮ってもらおーよ！』

『オレたちの結婚の記念に、か？　そうだな。おい係員。おれたちも写ってやんよ』

何で上から目線なんだ？　見るからにチャラい。

「すみません。こちらは特別企画ですので・・・・・・」

『あぁっ！！　いいじゃねーか！　オレたちゃオキャクサマだぞコルァ！』

『きゃーっ。リュータ、かっこいーっ！』

お客様だからなんだと言うんだ？　まあいいや、ここは真奈に任せよう。

「優子、行こう？」

「え？　良いの？」

「真奈なら大丈夫」

優子を連れてここから離れる。

「わかりました。それではちょっとお待ち下さい。すみませーん！ちょっと来て貰えますか？」

「はい。何でしょう？」

「このお二人の写真撮影をお願いします」

「え？　あ、はいわかりました。それでは、はい、チーズ」

ガッ！×２

バタッ！×２

「はい、お疲れ。それではお客様。ごゆっくりどうぞ！」

「あ、ああ」

「さて、どこから回る？」

「う～ん。そうね」

考えていると、ピンク色のキツネが近寄ってきた。

確か、如月ハイランドのマスコット、フィーだったはず。

『お兄さんたち、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』

「あら？　聞き覚えのある声と髪の毛ね」

「姫路さん。君も来てたんだね・・・・・・」

『ち、違うよ？　フィーは姫路なんて人じゃないよ？　見たとおりの普通のキツネの女の子だよっ♪』

ちょっと可愛く思えてきた。

「ふう。じゃあ瑞、じゃなかった。フィーちゃん、オススメの場所とかある？」

『えっとね、フィーのオススメは向こうに見えるお化け屋敷だよっ』

あれが有名な廃病院を改造したというヤツか。

「折角だから行ってみる？」

「そうね。ありがとう、フィーちゃん！」

皆も大変だな。特に雄二＆霧島さんカップルを誘導するのは。まあ僕は抵抗があるのはウエディングシフトだけだから、こっちの誘導は楽だろうね。

廃病院内・・・

姫路さん。もといフィーちゃんのオススメであるここに入ったのだが、中々本格的な作りだと思う。

「・・・・・・紫苑」

「大丈夫だよ。本物はいないから」

優子ってこういうの苦手だからな。無意識なのか、僕の腕に抱きついてきている。

そんな訳で胸が当たってる訳なんだが、どうすれば良いんだろう？

理性持つかな？

当たってると言って関節を外される位ならこのままの方が良いと判断させてもらった。

それにこっちの方が、あれだし。

【――――じの方がーーーーよりもーーーー】

一階は特に何もなく、二階に上がって少し進んだところで、声が聞こえてきた。

この声は僕？

「この声って、紫苑？」

「みたいだけど、多分秀吉の声真似だよ」

タネがわかっていれば怖くなどーーー

【姫路の方が優子よりも好みだな。胸も大きいし】

――前言撤回。メチャクチャ怖いですっ！

「へぇ、そう。ふ～ん」

「待って優子！　僕はそんな、胸の大きさなんかで好みを判断したりしないんだけど！？」

ＹＡＢＡＩ。とにかく説得は無理だろうから、何とかして逃げないと、殺される！

バンッ！

演出に感謝だよ！　ファインプレイーーー

「気が利いてるじゃない」

――じゃない！　大体何で鞭なんだよ！？　僕がＭだって思われてるのか！？

「ゆ、優子。落ち着いて判断しようよ？　さっきのは秀吉の声真似だって、うわぁっ！

危ないよ!?　ちょっ、痛いから!」

「フフ、痛めつけてあげる」

「はぁ、はぁ、何でこんな時に限って身体能力が上がるんだ?」

結局あの後優子に散々叩かれた。腫れてなければいいんだけど。

「お疲れ様でした。どうでしたか?　廃病院の演出は?」

「ああ。最っ高に怖かったよ。まったく」

真奈が僕たちに近づいてきた。

「それは良かったです。そろそろお昼の時間ですが、豪華なランチを用意してありますので、こちらへどうぞ」

僕と優子はその後を追い掛けた。

レストラン前・・・

中々洒落たレストランだな。高級そうだが、ここでは何もされないだろう。

ちょっと安心した趣で中に入る。

「こちらでランチをお楽しみ下さい」

真奈が去って行く。案内されたレストランはどちらかというと、クイズ会場に近い作りだった。

「クイズ大会でもやるのかしら？」

「多分、そうだよね」

すると僕たちの前にボーイが現れた。

「いらっしゃいませ、木下優子様、紫苑様」

ああ。秀吉ね。

「秀吉。ボーイの真似事かしら？」

「秀吉？　何のことでしょうか？」

「後ね、僕と優子は結婚してないんだから、入籍させないでね？」

秀吉はもう完全に役者魂に火がついてるみたいだからどうしようもないだろう。

「それでは、こちらへどうぞ」

案内されてる途中で、秀吉に囁く。

「携帯の電源を切っておいた方が良い。真奈にも言われてるだろうけど」

明久は切ってなかったけどね。

「お客様は未成年とのことなので、こちらをご用意させて頂きました」

席に着くとノンアルコールのシャンパンを注ぐ。ラベルをちゃんと見えるようにしているので、百点をあげたい。

「オードブルでございます」

秀吉が去ってからオードブルが並ぶ。
近くを見回すと雄二と霧島さんも入ってきた。

食事が終わって何もされなかったことに若干拍子抜けをしていたのだが、

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加いただき、誠にありがとうございます！》

何か始まるのか？

《なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている
高校生のカップルが二組いらっしゃっているのです！》

「け、けけけ結婚！？／／／」

優子が顔真っ赤になる。大方自分たちだということは想像着くだろ

う。プレミアムチケットということもあり、サービスがあったし、周りには高校生といったら、僕たちと雄二たちだけだし。

《そこで、当如月グループとしてはそんな二組のカップルを応援する為の催しを企画させて頂きました！　題して、【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズ～！》

やっぱり何かやらせるのか？

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事五問正解したら弊社は最高級のウエディング体験を体験して頂けるというものです！
もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありません》

大問題だよバカ。

《それでは坂本雄二さん＆翔子さん！　木下優子さん＆紫苑さん！　前方のステージへとお進み下さい！》

「結婚、結婚。紫苑と結婚・・・・・・」

「優子～？　戻ってきて～」

先ほどの司会者の結婚という発言に何やらブツブツ言い出した優子。大丈夫かな？

《それでは【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズを始めます！》

ブツブツ言っている優子は戦力にはにはならないだろう。
このまま霧島さんが正解してくれることを祈ろう。

《では、第一問！》

どんな問題で来る？　地理？　科学？　雑学？

《二組のカップルの結婚記念日はいつでしょうかっ？》

はい？　それって結婚していることが前提の問題であって、未婚の僕たちが答えられる訳――

――ピンポーン！

――あれ？　霧島さんがボタンを押した。でもいくら霧島さんでも答えが存在しない問題に答えられるわけないよね？

《はいっ！　答えをどうぞっ！》

「・・・・・毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！　恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

《お見事！　正解です！》

正解！？　フッ、流石霧島さん。僕の想像を超えた行動をしてくれるじゃないか！

「あれ？　もうクイズ始まってるの？」

あ。優子が我に返ったようだ。

「まあそんなところだよ」

「私たちもやるわよ！？」

「はい」

まあこうなるよね。

《第二問！　あなたがたの結婚式はどちらで挙げられるのでしょうかっ？》

またそんな結婚をするのが前提の話をーーー

――ーピンポーン！

――今度は雄二がボタンを押した。さてはワザと間違える気だな。

《はいっ！　答えをどうぞっ！》

「鯖の味噌煮！」

《正解です！》

「「なにぃっ！？」」

有り得ない！　場所を聞かれたのに何で鯖の味噌煮が答えなんだ！？

そのあまりの不自然さに思わず叫んでしまったじゃないか！

《二組のカップルの挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！》

「待ていっ！　絶対その別名はこの場で命名しただろ！　強引にも程があるぞ！」

《第三問！　二組のカップルの出会いはどこでしょうかっ？》

――ピンポーン！

しまった。唖然としている内に優子にボタンを押された。

「私の家！」

《正解です！　お二人は幼なじみの長い付き合いで結婚にまで至るという、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです！》

隣で雄二がナイスだと言わんばかりの顔をしている。

《第四問参ります！》

今度はどんな問題が来る？

《キスをした回数は何回でしょうか？》

こ、この問題は・・・・・！　優子に答えさせるわけにはいかない！

――ピンポーン！

この中では手業の速さならば僕が一番早い！

《はい、解答をどうぞ！》

「い、一回しました！」

《正解です！　こちらのお二人は誤って酒を飲んでしまった際にキスをしてしまったというちょっと羨ましいカップルです！》

「えぇぇぇ！　ちょ、紫苑！　いつ私の唇を奪ったのよ！？／／／」

「ち、違うよ！　酔ったのは優子で僕は奪われた方で寧ろ被害者であって」

「何よ！　私とキスするのは嫌だって言うの！？」

「そ、そんなこと言ってないっ・・・・・・！」

《それでは第五問いきます！》

ちょっと！？　僕は今関節を外されて危険な状態になっているというのに次の問題を始めるな！

『ちょっとちょっとおかしくな～い？　アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ～？』

ああ。あの時の迷惑な二人組か。真奈が気絶させたはずなのに、しぶといな。

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうかーーー』

『あぁっ!?　グダグダうるせーんだよ!　オレたちゃオキャクサマだぞコルァ!』

五月蠅いな。今度は僕が静めて来ようかな?

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど~?』

『で、ですがーーー』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルァ!　オレたちもクイズに参加してやるって一転だボケがっ!』

『うんうんっ!　じゃあ、こいしよーよ!　アタシらがあいつらに問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで!』

『そ、そんなーーー』

「ちょっと、待った。僕たちの勝った時には何がどうなって、あなたたちが勝った時にはどうなるのかという点が明らかになってないんだけど?」

『オレたちが負けた時には素直に諦めて、オレたちが勝った時はウエディング体験はオレたちがやるってことに決まってんダロが!』

かかった!　これでオレたちが負けた時がウエディング体験をやらせてもらうなんてことは言えなくなった。

『じゃあ、問題だ』

マイクを引ったくり、チンピラが問題を言う。

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

な、何だと!?　バカな、何でこんなチンピラがそんなことを知っている!?

ヨーロッパの首都というのは存在しない。それが普通の民間人の常識。

だが実際にはドイツのシュヴァルツヴァルトという森の地下深くに基地があり、

そこにはヨーロッパ中の選りすぐられた人間がいる。

テロ対策特殊部隊の基地だ。そのには国家機密情報局もお世話になっている。

そこ人間だと言えば大概のことは問題なくなる。

別名：ヨーロッパの首都

『オラ、答えろよ。わかんねぇのか?』

わかる。だがしかし、これを答える訳にはいかない！　この情報がどこかに漏れて攻撃を受ける可能性がある。そうなった場合は日本にも危害が及ぶ。

何でこいつらはそれを答えさせようとしている!?　まさかこいつらテロ組織の人間か!?

《・・・・・坂本雄二さん、翔子さん。木下優子さん、紫苑さん。おめでとうございます。【如月ハイランドウエディング体験】をプレゼントします》

だがしかし、いや・・・・・。
思考の海に沈んでいた僕にはその言葉は届かず、気づいたら終わっていたのだった。

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！　皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！》

よくよく考えてみれば、あんな連中がそんなこと知っている訳ないよね？
一応連絡を取り、監視させているけど。

「紫苑、出番だよ」

「もう諦めて、やるだけやるか」

真奈と舞台裏で話をする。二組ということで、ウエディングドレスの準備が先にできた
僕と優子が先にやることになった。

「優子、とっても綺麗だよ？　期待していいよ」

「ああ。そうさせてもらうよ」

《それでは新郎のプロフィールの紹介をーーー》

え？　そんなに本格的にやるの？

《――省略します》

おいおい。

《ま、紹介なんていらねぇよな》

《興味ナシ～》

《ここがオレたちの結婚式に使えるかどうかが問題だからな》

《だよね～》

またあいつらか。

あ。真奈が背後から接近して気絶させた。周りの客も迷惑だったようだから見なかったことにしてくれるみたいだ。

《それでは、いよいよ新婦のご登場です》

どんな姿かな？　何度かは夢見たんだよな、優子の花嫁姿。

《本イベントの主役、木下優子さんです！》

アナウンスと同時にいくつものスポットライトとともに優子が現れた。

でも、その姿は今まで見てきたどの女性よりも綺麗で、可愛くて、美しかった。

『・・・・・・わぁ』

僕もこのセリフを言った人と同じ気持ちだ。こんな気持ちになった

は初めてだ。
優子がこちらに歩いてくる。優子に見とれていた為、服装については残念ながら何も言えない。

「・・・・・紫苑・・・・・・」

「綺麗だ、今までで、一番」

「ありがと／／／」

ここで言わなきゃ男じゃないよね？
やっぱり、伝えたい。

「すみません。司会者さん。マイク、貸して貰ってもよろしいですか？」

《？　はい、構いませんよ》

僕は司会者さんからマイクを受け取り、客の方に向き直る。

《あの、まず、ここにいる皆さんと、如月グループの関係者の皆さんに謝らなければならないことがあります》

僕がマイクを使っていわせて貰う。

《現在、僕とここにいる優子はカップルとか、結婚相手とかとは違い、ただの幼なじみなんです。ですから、皆さんの期待にはお答えすることはできません。ごめんなさい》

「っ！！」

ごめん、優子。最近の優子の言動から薄々だけど、もしかしたら優子は僕に気があるんじゃないかとは、感じていた。

《ですから、ここで僕の気持ちをはっきりさせておこうと思います》

マイクを降ろして優子の方へ向き直るが優子はこちらに背を向け、今にも去ってしまいそうだ。

「待って、優子」

「・・・・・・」

優子は黙ったまま。でも、歩き出そうとしていた足は止まった。

「僕の話を聞いてくれるかな?」

「・・・・・・なきゃ・・・・・・」

「え?」

「何でアンタの話を聞かなきゃいけないのよ!? ここまで私に恥をかかせておいて、恥を上塗りするつもり!? ここで私が紫苑に『幼なじみでいよう?』なんて言われたら、私はどうすればいいのよ!? 今まで、ずっと紫苑のこと好きだったのに・・・・・・。こんなに惨めな思いは初めてよ! 紫苑なんか大嫌い! もう顔も見たくない!」

最低だな、僕。優子を泣かせちゃったよ、笑顔を守るって、約束し

たのに。
でも、それでも僕は・・・・・・。

「僕を嫌いになろうと構わない。でも、僕の正直な気持ちは、あの時から、ずっと変わらない僕の優子に対する思いは、言わせて貰うよ？」

「え？」

「優子、ううん。木下優子さん。あなたのことが好きです。もし、こんな僕で宜しければ、お付き合いしていただけませんか？」

生まれて初めてする好きな人への告白。
あれだけ怒らせちゃったんだから、答えは大体想像がつく。
でも、振られたとしても、それで良かったと思う。優子に僕は相応しくない。

「夢じゃ・・・・・・ないの？」

優子が聞き返してくる。涙のせいで可愛い顔が台無しだな。

「今なら、何度でも言える。僕は、優子のことが好きだ」

すると優子が自分の頬をつねる。

「痛い。夢じゃ、ないんだ」

「現実だよ、全部」

「そっか、紫苑。目、つぶって」

「うん」

言われるままに目を閉じる。

チュッ

唇に柔らかい感触がある。恐る恐る目を開けると、顔を赤くした優子が目の前にいた。

「これが答えじゃ、ダメかな？」

えっと、キス、されたのか？　ってことは付き合っても良い、ってこと？

「良いの？　僕で？」

「私は、あなたじゃなくちゃ嫌なの。これから、よろしくお願いします」

ペコリと優子が僕に頭を下げてきた。今は、なにも考えることができないや。

ただただ、幸せという感情に浸っていたい。

「ありがとう。優子」

「んぅ」

今度は僕の方からキスをする。そしてお互いに抱き合った。観客席からは拍手喝采が巻き起こっていた。

その後、僕たちはステージに引っ込み雄二と霧島さんが代わりにステージに上がることになる。

「紫苑、お前ってヤツは」

「格好良かったよ、紫苑」

待機している雄二と真奈に会った。

「今度は雄二の番だよ」

「お前らの次が俺らなんて、如月グループも客もがっかりだろうよ」

「雄二が格好いいことを言えば大丈夫だよ」

「検討しておこう」

「頑張って」

「ああ」

僕と雄二はハイタッチをし、雄二はステージへ上がっていった。

「まさか紫苑がこの場で告白するとは思わなかったよ」

「ウエディングドレスを着た優子を見て、告白したいって、本気で思った」

「そっか。優子を泣かせたら承知しないからね？」

「わかってる」

すると向こうから優子と明久たちが駆け寄って来て、色々とからかわれた。

ステージにいる二人を見ながら少しの間話していると、

『あーあ、つまんなーい！』

この声は、あの二人！？　おかしい、回復が早い。

『マジつまんないこのイベントぉ～。人のノロケなんてどうでもいいからぁ、早く演出とか見せてくれな～い？』

『だよな～。お前らのことなんてどうでもいいっての』

何てことを！

「真奈、カメラの位置は？　止めさせなきゃ」

「だよね」

僕と真奈は撮影の為に使われていたカメラを止めに行く。

その最中も連中の大声で叫び続ける。

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ？　なに？

キャラ作り？　このスタッフの脚本？　バカみてぇ。ぶっちゃけキモいんだよ！　それに前のヤツらもよぉ、何だぁ～？　何が大嫌いだよ、結局付き合ってじゃねぇか。だったら最初から言えよ！　まどろっこしいんだよ！　そんなごっこ遊びは家でやってろよ！』

『授愛ごっこでもやってんの？　そんなもん見る為に貴重な時間を割いてるんじゃないんだケドぉ～。あのオンナども、マジでアタマおかしいんじゃない？　ギャグにしか思えないんだケドぉ』

『そっか！　コレってコントじゃねぇ？　あんなキモい夢やら演技をこんなところでやるんじゃねぇよ！　発表会ででもやってろ！』

『え～っ！？　コレってコントなのぉ？　だとしたら、超ウケるんだケドぉ～！』

いかなる時も冷静でいるべし。国家機密情報局の教訓の一つ。でも、大切な人が傷つけられても、冷静でいなければいけないハズがない。

《んだとテメェらっ！　もういっぺん言ってみやがれ！》

《あ、明久君！　落ちついてっ！　ステージが台無しになっちゃいます！》

もう充分台無しだよ姫路さん。

ブルルルル

国家機密情報局からの通信が入る。

「何かありましたか？」

『紫苑が監視しておいて欲しいって言った連中、その内の女の方、テロ組織のヤツらだったわよ。ビンゴね』

相手は雫さんだ。そうか、あいつらテロ組織の、だったら思う存分やらせてもらおうか。

いたいた。雄二もいるな。

「ねぇ、面白いことやってるよね？　僕も混ぜてよ？」

もう雄二が男の方をのしてしまっているようなので、この男への報復は諦める。

「おう。紫苑。残念だがこいつはしめたぞ。女には手をあげる訳にはいかないからな」

「ガキが、生意気言うじゃないか！」

女がナイフを取り出し、こちらを向いている雄二に襲い掛かった。

「危ないですよ？　ナイフなんて持って」

「なっ！？」

僕が雄二の前に出てナイフを止める。この程度の腕じゃあゲリラ程度か。下っ端か？

ガッ！

バタッ！

腹に一発入れて、気絶させる。

「す、すまねぇ」

「早く行ってあげなよ？」

「お前もだろうが」

「だね」

僕と雄二は互いの思い人のもとへ向かって行った。

如月ハイランド前・・・

「優子」

「・・・・・紫苑」

ああ。いきなり約束守れてない。また泣かせてしまった。

「帰ろう？」

「・・・・・うん」

帰路に着き、いつもと歩幅が狭く歩いたせいか、歩くスピードが遅く感じられた。

「優子、一つ言っておくよ？」

「何？」

「優子は、自分自身で、僕のことを、選んでくれたんでしょ？」

「・・・・・・うん」

「だったら、自分自身を信じなきゃ！　自分の考えは正しいって。少なくとも僕は、今までそういう生き方をしてきたよ？」

「紫苑」

「だから、さ。そんな風に凹む必要なんてないんだよ！　笑顔の方がずっと、優子は綺麗だ」

「うん。ありがとう」

やっと、元気出してくれたかな。

「じゃあこのままお母さんとお父さんにあいさつに行きましょ？」

「そうだね。何て言われるかわからないけど」

僕たちはそのまま柚葉さんと秀俊さんにあいさつに行った。

第二十四問　四人と暗躍者とウエディング体験（後書き）

今回も紫苑です。

掃除をする代わりにプールを使えることになった僕たち、女子の水着にちょっと
期待する男子。だがそこは色々な意味で危険地帯だった。

次回　バカと銀色と召喚獣　『プールと銭湯と水着の楽園』

いくぞ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第二十五問　プールと銭湯と水着の楽園（前書き）

すみません。また長くなってしまいました（汗）

今度から長いのは二回に分けて投稿します。

それと、これから学校の合宿が始まるのでしばらく更新出来なくなります。

申し訳ありません。

第二十五問　プールと銭湯と水着の楽園

「・・・・・・・・・・・・・・土屋と」

「工藤の」

「「性活小噺っ！」」

「はい。このコーナーでは、日々の生活に根ざしたちょっとエッチな小噺をボクこと
工藤愛子とムッツーーー」

「・・・・・・・・・・・・・・土屋康太」

「ムッツリーニ君が紹介していくというものです」

「・・・・・・・・・・・・・・最近、紫苑からしか本名を呼ばれない・・・・・・」

「そうなの？　じゃ、じゃあ、ボクが呼んであげよっか？」

「・・・・・・・・・・・・・・その方がちょっと嬉しい」

「う、うん！　じゃあ、康太君で良い？」

「・・・・・・・・・・・・・・それで頼む」

「じゃあボクのことも愛子って呼んでくれない？」

「・・・・・・・・・・・・お安いご用」

（やった！）

「それでは、気を取り直して本日のお題ですがーーー『シャワーの正しい使い方です』」

「・・・・・・・・・・・・っっ！！（ドバッ）」

「えぇっ！？　もう鼻血！？　ムッツ・・・・・じゃなくて康太君、想像力豊かすぎない！？」

「・・・・・・・・・・・・構わず続けろ」

「う、うん。えっと、ちょっとエッチなお話ということなので、ボクの体験談をお話しします。実は先日、学校帰りに急に雨が降ってきて」

「・・・・・・・・・・・・っ！（ダラダラ）」

「運の悪いことに、その日は部活でふざけていたらプールに着替えを落としちゃって、下着がビショビショになっちゃったんだ」

「・・・・・・・・・・・・っっ！！（ダバダバ）」

「下は流石に我慢して穿いていたんだけど、上はーーーって康太君！？
もう二リッターくらい血が出てるみたいだけど本当に大丈夫なの！？」

「・・・・・・・・・・・・・・構わずに、続けるんだ・・・・・・っ！！」

「そ、それで、雨でシャツが透けてきちゃって」

「・・・・・・・・・・・・・・っっっっ！！！（ブシャァァァアア）」

「やっぱりこの企画無理があるよ！　まだシャワーの話に入っていないのに相方がグロッキーになってるんだもん！」

「・・・・・・・・・・・・・・死して尚、魂で聞き続ける・・・・・・っ！」

「そんなの無理に決まってるでしょ！？　とにかく今回はこれで終わり！　それではまた次回でお会いしましょう！　お元気でー！」

「・・・・・・・・・・・・・・続きが気になる」

「それより先に保健室！」

木下家・・・

今僕は優子、秀吉とともに木下家にいる。如月ハイランドの出来事で優子と付き合うこととなったからである。因みに真奈はお留守番だ。

それにしても、嬉しそうだな柚葉さんと秀俊さん。

「え～、この度、娘の優子さんとお付き合いさせて頂くこととなりました。氷花紫苑です」

何年も本当の家族のように暮らしてきた人たちとはいえ、このような場は初めて会ったような態度でいかせてもらう。

「あらあら～、別に改まることないのに～」

「そうだぞ、私たちはほとんど家族みたいなものじゃないか」

そうはいかない。

「ですが、娘さんを頂く訳ですから」

「っ！？／／／」

あれ？　何で優子の顔が赤くなってんだ？

「紫苑よ、それは姉上へのプロポーズと受け取っていいのかの？」

「えっ？　あ、いや、今のはその、言葉のチョイスを誤ったというか、決してそういう意味ではなくてですね」

「紫苑、私とじゃ、嫌？」

優子が上目遣いで目を潤わせて言ってきた。当然だが断れる訳がない。

それに、僕自身にも、そんな願望が有る訳だから。

「許可があるなら、僕は優子とそういう関係になりたいとは思う」

「嬉しいっ！」

「うをっ！？」

優子が抱きついてきた。今ならこんなことまで普通にしてくれるから幸せだと思える。

「どうするのあなた？　この初々しいカップルに許可与えちゃう？」

「良いんじゃないか？　紫苑君だったら優子を任せられる」

許可が降りちゃった。

「良かったのう、二人とも」

自宅・・・

「それで、許嫁となったのね？」

リビングで真奈に結果を報告し終えたところだ。

「それにしても、あんな人前で大胆にも告白するとは、思わなかったぞい」

「今それを言われると恥ずかしいな」

「女性としては、あんなに情熱的に告白されたら、コロっと落ちちゃうわよね？」

「嬉しかったわ。本当に」

真奈が若干羨ましそうに僕と優子を見ている。今度は僕が手伝ってあげるよ。

「折角許嫁になったんじゃし、寝室を同じにしてみてはどうかの？」

「「え？」」

「それ良いかもね秀吉君」

つまり僕と優子は同じ部屋で寝ろってことだよね？

「でもそれだと必然的に秀吉と真奈も一緒の部屋になるよね？」

「あ、やっぱりさっきのはナシじゃ！　忘れて欲しいのじゃ！」

さては考えてなかったな？

「べつに私は構わないよ？　秀吉君と一緒の部屋でも」

「なぬ！？」

「良かったねー秀吉」

「べ、別にワシは・・・・・・／／／」

「じゃあ早速今夜から実行しましょう」

結局寝る部屋の割り振りは、僕と優子。秀吉と真奈、という組み合わせで寝た。

翌日のＦクラス・・・

「ってなことがあって、おかげで散々な週末だったよ」

「そうじゃったのか。それは災難じゃったのう」

教室で明久と雄二の週末の出来事についていつものメンバーで聞いていたところだ。

「オマケに今週末はプールの罰掃除だよ。はぁ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・重労働」

「結構大変だもんね、プール掃除って」

「だよね。あんなに広いところを掃除するなんて、考えただけでも気が滅入るよ」

僕も任務が続くと気が滅入るよ。

「褒美というほどじゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「え？　そうなの？」

意外だ。あの鉄人にもちょっとした一面があったなんて。

「ああ。だから秀吉とムッツリーニと紫苑も今週末プールに来ないか？」

プールか、近年行ってないな。まあ任務だから仕方ないんだけどね。

「ただし、ムッツリーニと紫苑には掃除を手伝ってもらうけどな」

その程度なら気にしない。

「・・・・・・・・・・・・・・」

「僕はいいよ？」

「因みに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」

「・・・・・・・・・・・・・・ブラシと洗剤を用意しておけ」

正直だよね～康太って。

「うむ、そうじゃな。貸し切りのプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじゃろうし、相伴させてもらうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「え？　結構大変だけど、いいの？」

「うむ。お安い御用じゃ」

良い心がけだよね。
最近秀吉が成長していってる気がして、ちょっと嬉しいような寂しいような・・・・・・

「んじゃ、あとは向こうの二人だな、おーい、姫路、島田―」

雄二の声に気付いた二人がこちらにやって来る。

「どうしたの坂本？　何か用？」

「呼びましたか、坂本君？」

「二人とも今週末は暇か？　学校のプールを貸しきりで使えるんだが、良かったらどうだ？」

「「え・・・・・・？」」

こちらに来た二人に雄二がプールを使えるので勧誘したのだが、プールという言葉に反応する二人。何だろう？

「あ、さては二人とも予定があったりする？」

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな・・・・・？　プールっていうと、やっぱり水着だし・・・・・・」

「そ、そうですよね。水着ですよね・・・・・・。その、えっと・・・・・・」

あぁ、女の子特有の悩みってヤツか。優子や真奈もそんなことを以

前言っていたよな。

「まぁ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが・・・・・。一つ言っておくと、秀吉は来るぞ。水着を明久に見せに、な」

本当に雄二は人の心を揺らすことが得意だよな。
それを活かせば将来良い職に就けると思うんだけどな。

「ひ、卑怯よ木下！　自分は自信があるからって！」

「そ、そうですっ！　木下君はズルいです！」

「別にワシは明久に見せに行く訳ではないんじゃが。それにワシは男じゃし」

ごもっともである。まあそんな思いは今の二人には通じないんだけどね。

「で、どうするんだ二人とも？」

「い、行くわ。その、イロイロ準備をして・・・・・」

「そ、そうですよね。準備は大事ですよね」

それについては賛成だ。

「そう言えば、いい加減水着を新調せねばならんのう。丁度良い機会じゃから買いに行ってくるとするかの」

「だったら僕も行くよ。帰りに寄ってく？」

「そうじゃな。雄二よ、他に人を誘っても良いかの？」

「問題ないハズだ。多い方が楽しいしな」

「済まんの。紫苑よ、姉上と真奈を誘いに行くぞい」

なるほど。だから雄二に聞いていたのか。

「わかった。雄二、ちょっとAクラスに行ってくるよ」

「それだったら翔子も誘っといてくれ」

「へぇ～、坂本も正直になったじゃない」

僕もそう思う。いつもなら「絶対に誘うな！」とか言い出しそうなのに。

「いや、そういう問題じゃない」

じゃあどんな問題なんだ？

「？？？　それじゃ、どういう問題さ」

明久が僕の疑問を代弁したかのように聞く。

「いいか、想像してみろ明久。俺の立場で、後々になってからこのことが翔子に知られるという状況を」

・・・・・・グス

「樹海の奥・・・・・・いや、湖の底・・・・・・」

「雄二・・・・・・君のことは忘れないよ・・・・・・」

友人の死は辛いけど、殺したのがその妻で、夫を愛し過ぎた結果だというのなら僕は何も言えない。

「俺の死体の処理方法まで想像する必要はないぞ？　それと紫苑はどんな悲しい結末を想像したんだ？」

霧島さんにピーやらピーピーみたいに殺られる姿。

「とにかく全員オッケーのようだな。んじゃ、土曜日の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

その後、僕と秀吉はＡクラスに行き、いつもの四人を誘った。

校門前・・・

「おはよー。絶好のプール日和だね」

手を挙げてこちらに向かってくるのは明久。

「おはようじゃ明久。良い天気じゃな」

「雨じゃなくて何よりだ」

「おはようございます明久君。今日は良い一日になりそうですね」

「私たちまでありがとね」

「プールだなんて久しぶりだから嬉しいよ」

先に来ていたメンバーが明久にあいさつする。
ちなみに昨日僕・秀吉・優子・真奈の四人で水着を買いに行ったのだが、
秀吉の関節が大変なことになったのは、言うまでもない。

「準備といえば、秀吉は新品の水着を買うとか言ってたよね？　忘れずに買ってきた？」

「うむ。無論じゃ」

「色々あったけどね」

「因みに、買ってきた水着じゃがーーー」

「・・・・・・・・・・・・・・！！（くわっ！）」

優子が何だか怒ってそうなので、必死に止める。

「――――トランクスタイプじゃ」

「「バカなぁぁあああっ！！」」

地面に突っ伏す二人。そこまでガッカリしなくとも良いと思うけどなぁ。

「最近お主らはワシを女として見ておるようじゃからな。ここらで一度ワシが男じゃということを再確認させようとーーー二人とも聞いておるか？」

聞いてないと思う。

「酷いよ秀吉！　君は僕のことが嫌いなのかい！？」

「・・・・・・・・・・・・・見損なった・・・・・・・！」

「な、なんじゃ！？　何故ワシは責められておるのじゃ！？」

「き、気にしなくていいと思いますよ。木下君」

「その通りだよ」

姫路さんと真奈が言う。

「皆来てたんだ。早いね」

工藤さんが来たようだ。向こうでは葉月ちゃんが明久に飛びついている。

「皆おはよう。私ちょっと遅れちゃったからビリかと思っちゃったよ」

「おはよう愛子。今代表と坂本君が鍵を取りに行ってるわ」

「ちょうど来たみたいだよ」

後者から雄二と霧島さんが歩いてこちらに来ている。

「おはよう雄二、霧島さん」

「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

「・・・・・皆おはよう」

「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

するとこちらに何故か葉月ちゃんがついてくる。

「こらこら。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室でしょ。霧島さんについていかないとダメだよ」

「こらこら、秀吉は男だよ?」

秀吉は男だってのに。まあ康太が危険な目に遭うことは間違いないんだが。

「えへへ、冗談ですっ」

「ワシは冗談ではないのじゃが・・・・・・?」

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

島田さんも!?

「し、島田！？　ついにお主までそんな目でワシを見るように！？　嫌じゃ！　女子更衣室で着替えるのだけは嫌なのじゃ！」

「いやいや、美波。秀吉男だから一緒に着替えるのは不味い気がするのは私だけかしら？」

「大丈夫。僕もだよ」

優子と僕が同じ意見らしい。存外まともな考えの持ち主がいないんだな。

「おっと、覗くならバレないようにね♪」

「・・・・・雄二。私以外の女の子を見ないように」

「明久君、覗くなら、私だけにしてくださいね」

「紫苑、アンタもよ」

「秀吉君はどうする？」

何だろう、この強烈な殺気と期待に満ちた目をしている人たちは・・・・・。

康太が鼻血を出しつつ輸血作業をしているのが手に取るようにわかる。

まあ行かないけど、命が惜しいし。

この後、秀吉更衣室なるものがあるのを思い出した為、秀吉はそこで着替えることとなった。

更衣室・・・

「じゃあ僕たちは先に行ってるね」

「ちょっとしたら行くよ」

明久たちは先に着替え終わって更衣室を出て行く。

「さて、準備をしていくかな」

何の準備かというと秀吉の水着の準備である。
当然秀吉は男物のトランクスタイプを持ってきている。
でも、万が一大変なことになった場合の為に秀吉には悪いが女物のトランクスタイプを持ってきている。

「秀吉を迎えに行くかな」

その後秀吉と一緒にプールサイドへ向かった。

プールサイド・・・

ブシャァアアア

あれ？　何だろう？　プールサイドから鼻血を思われる液体が噴出している。

「ムッツリィーニィーーーーー！！」

明久の声だ。康太に何かあったのか!?

「待たせてすまぬ。着替えはさほど手間は取らんかったのじゃが、いかんせん校舎からプールまでが遠くての」

「同じくだが康太に何があったの!?」

僕と秀吉が皆のところへ向かう。どうやら最後という訳ではないらしく、優子と真奈以外のメンバーは来ていた。

「うわわわダメだよ秀吉!　何で隠さないんだよ!?　胸が見えちゃうよ!?」

「明久よ、ワシは男じゃ!　じゃから隠す必要なんてないのじゃ!」

あぁ。やっぱりこんなことに。

「でも、ムッツリーニが!」

「・・・・・・・・・・・・大丈夫だ明久」

「ムッツリーニ?」

康太が明久の方を借りながら立ち上がり秀吉の方を見る。

「・・・・・・・・・・・・俺は、こんなところで、負けはしないっ!（ブシャァアアア）」

「ムッツリィーニィーーーー!!」

「ちょっ!?　康太君、本当に大丈夫!?」

ダメだ、工藤さん今君が近づいたらっ!

「・・・・・・・・・・・・幸せ（ブシャァアアア）」

「きゃぁぁぁあ!　康太君!?」

「急げ!　輸血の準備だ!　一刻を争うぞ!」

「ムッツリーニの鞄はどこだ!?」

「く、工藤さん康太から離れないと康太が出血多量で死んじゃうよ!」

「一体私たちがいない間に何があったのよ?」

「・・・・・・・・・・・・っ!（ブシャァアアア）」

いつの間にか優子と真奈も来ていたようだ。優子の水着姿を見たいけど、今は康太の命を救うことが優先だ!

「畜生!　逝くなムッツリーニ!　君が逝ってしまったら、誰がムッツリ商会を引き継ぐって言うんだい!?　僕の楽しみが買えなくなるじゃないか!」

「そうだ!　男子の皆がお前を必要としているんだぞ!?」

どうしてこの二人はこんな時まで欲望に忠実なんだろう?

「ええい！　とりあえず女子の皆さん＋秀吉は一時的に隠れてて！　それと秀吉は僕がこんなこともあろうかと持ってきている女子用水着に着替えなさい！」

「し、紫苑！？　ついにお主までワシを女として見始めおったのか！？」

「し、紫苑、今の話本当！？」

反論されるがそれどころではない。それと明久、目を輝かせない。

「康太の命と男の水着、どっちを取る？」

「し、仕方あるまい」

その後、僕たちの迅速な行動により康太は一命を取り留めた。

「ふぅ、一件落着」

「Fクラスっていつもこうなの？」

康太の救命活動にちょっと疲れた為、座り込んでいると優子がちょっと呆れたように話しかけてきた。

「あはは、そう、だね・・・・・・」

「？　どうしたの？」

その時僕は優子の水着に見入っていた。優子が着ていたのは青いビキニタイプの水着。
足が大胆に露出されていてとても魅力的に見える。

「お～い、紫苑？」

優子が僕の目の前で手をヒラヒラさせている。
屈んでいるのでちょっといけないところが見えそうになる。
というか僕の視線が問題の場所を凝視している気がする。

「？　紫苑どこ見て・・・・・・っ！／／／　どこ見てんのよバカっ！」

「ゆ、優子、ごめっ・・・・・・・！！」

うん。今回の関節決めには僕の方に否があるので、甘んじて受け入れよう。

『――こうして見ていると、美波がＡで姫路さんがＦみたいだよね』

明久がそんなことを言っているのが聞こえる。
ＡとかＦとか何なんだ？

『寄せて上げればＢくらいあるわよっ！！』

『ぐべぁっ！？』

島田さんが回し蹴りを放つ。なかなか見事な回し蹴りだ。

その回し蹴りを喰らって明久はプールの中へ落下する。

『あ、明久君・・・・・・。そういうことは面と向かって言われると、その・・・・・・／／／』

姫路さんが顔を赤くしている。

『・・・・・雄二。因みに私はCクラス』

『？　何を言ってるんだお前は？』

雄二と霧島さんの所でも言っている。

『ボクはAなんだよなぁ。瑞希が羨ましいよ』

『・・・・・・・・・・・・（ポタポタ）』

康太を看病している工藤さんも。

『私は、Dだよ／／／』

『ま、真奈！？　そういうことは人前で言うものではないぞい！』

秀吉は何のことかわかったらしいけど、後で教えて貰おうかな？

真奈が着ているのは真っ赤なビキニタイプ。

「私はまだ、Aだから」

「優子まで、一体何のこと？」

康太も無事回復したみたいで、皆プール遊んでいる。

「おーい、霧島さーん！　木下さーん！」

突然明久が優子と霧島さんを呼んだ。二人に何か話している。

「それで秀吉、結局あのＡやらＦやらの意味って何だったの？」

「そ、それはじゃな」

「ムッツリだね。紫苑」

真奈がまたそんなことを言う。

「だから僕にはそんなつもりはなくって！？」

何だ！？　いきなり水中に引きずり込まれたぞ！？　だ、誰がやってるんだ！？

水中で目を開けて見てみると優子だった。

「ちょっ！　優子、何するんだ！？」

「いいから早く溺れなさい！」

「ひ、酷い！　僕がいったい何をしたと！？」

『ね？　危ないでしょ？』

『はいです・・・・・・。葉月、水中鬼は諦めるです・・・・・・』

そんな会話が聞こえてくる。
君の仕業か明久！

「明久っ！　てめぇの差し金だな！？」

「優子を使って、卑怯だぞ！」

雄二も同じ目に遭っているんだろう。僕と同じように明久の差し金という結論に至ったようだ。

「うわっ！　ダメだよ霧島さん、木下さん！　きちんと捕まえておいてくれないと！」

「「・・・・・・ごめん」」

水中鬼、スタート。

休憩をするということで、ジャンケンに負けた僕が飲み物を奢るということになり、
買って来たのでプールサイドに戻ると険悪な雰囲気で水中バレーをしている女子の姿が、
ってお！　垂直に曲がるビーチボールが！　ん？　あの子は確か清水さん。いつの間に来たんだろ？

「あ、お帰り紫苑。今の見た！？　ビーチボールが垂直に曲がったよ！？」

「どうやればビーチボールであんな芸当ができるのじゃ！？」

「流石の翔子もあれは取れないな・・・・・・」

『お姉さまごめんなさい！　美春は嘘をついていました！』

『いいのよ美春！　これからも友達でいましょうね！』

何だろ、この寸劇。

「あ、氷花君良いところへ！」

「ん？　何？」

「翔子ちゃん、すみませんが代わってもらってもいいでしょうか？」

「・・・・・うん。ちょっと疲れたし」

「という訳で翔子ちゃんの代わりをやってもらってもいいでしょうか？」

つまり、あのサーブを取って欲しい、と。

「僕で良いならやらせてもらうよ。あ、とりあえず飲み物ね」

皆に買って来た飲み物を渡してからプールに入る。

「いきますっ！」

清水さんがサーブを繰り出す。
でも僕は飛んできたビーチボール素早く反応し、垂直に曲がるサーブをレシーブする。

「「「「嘘っ！？」」」」

何か皆の声がハモったんだけど。

「姫路さん、つないで！」

「あ、は、はい！」

姫路さんがビーチボールを打ち上げる。僕はそのビーチボール目掛けて飛ぶ。

「「「「飛んだ！？」」」」

「いーやっと！」

腕を鞭のように使う劈掛拳（ひかけん）を使える為、その要領でビーチボールを相手陣地へ叩き付ける。だが二人は反応仕切れず、こちらに一点が入る。

「や、やりますね・・・・・・！」

「そっちもね」

試合は続き――パアンッ！

ビーチボールが割れた為、試合は中止となった。

「あ・・・・・！　ごめんなさい。美春、ちょっと力入れすぎてしまいました。代わりを探して来るので、お姉さまたちは休憩していて下さい」

僕たちはプールサイドから上がる。

「紫苑、お疲れ様」

「ありがとう、優子」

優子が駆け寄ってくる。

「しかし、よく垂直に曲がるサーブなんて取れるわね」

「伊達に鍛えられてないよ、それに優子が見てくれてるから」

「紫苑／／／」

今の自分の発言が何だか恥ずかしくなってきた。

「第一回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（明久の声）

「「ガチンコ、水泳対決――――っ！！」」（明久と雄二の声）

「「イェーッ！」」（秀吉と康太の合いの手）

何か始まるみたいだ。

「何？　アレ？」

「さぁ？　ってあれはっ！」

僕の目に飛び込んできたのは姫路さんの手に抱えられたワッフル！
そういうことか。

ナレーションが入る。

『姫路の作った殺人ワッフルは三つ、メンバーは五名「くそっ！
逃げられなかった！」
つまり、優勝した二名が食べることを免れることができる計算である』

プールの飛び込み場所として、作られている台の上に男子五人が左から康太・雄二・僕・明久・秀吉の順で立つ。

「はい、行くよ！　位置についてーーー」

女子の暢気な会話が聞こえる。だが、他の四人には悪いが、この勝負僕が勝たせてもらう！

「よーいーーー」

工藤さんのコールが響く。

「――スタートっ！」

「「くたばれぇぇっ！！」」

「うわっ！　ちょっと、二人とも、これは水泳勝負じゃなかったの！？」

突然明久と雄二が僕に向かって跳び蹴りを放ってきた。
だが僕は瞬時に反応し、蹴りを受け流してそのまま二人の足を掴んで、
二人をプールへ投げ入れる。

「くっ！　流石紫苑、一筋縄ではいかないらしいなっ！」

「雄二、ここは一時休戦だからね！？」

「卑怯な！」

どうやら二人は僕を妨害する為にこのような卑劣な攻撃を仕掛けてきたらしい。

「あのさ、三人とも。取っ組み合いもいいけど、木下君と康太君はそろそろ折り返しだよ？」

あぁ！　本当だ！　早く僕も飛び込まないと！

「おい明久！　ムッツリーニと秀吉がいつの間にか折り返して来ているぞ！？」

「ホントだ！　紫苑を相手にしている場合じゃない！　雄二！　このままじゃ僕らの負けは確定だよ！？」

「そうは行くかっ！　俺はムッツリーニを止める！　明久は秀吉をやれ！」

「了解！」

ナイス！　このまま僕はゴールさせてもらう！

三十五メートルほど泳いでいたら声が聞こえてきた。

『あ、明久君っ！　なにをしているんですかっ！？』

『へ？』

『それです、それ！』

何かあったのかな？

『あはは、そういえばコレ、秀吉の水着に似ているね』

『んむ？　そういえば胸元が涼しいのう』

え、もしかして、また？

僕もとりあえず足をついて状況を確認する。

ってうわわ！　プールの水が赤く変色し出したぞ！？

「・・・・・・・・・・死して尚、一片の悔い無し・・・・・・・！！」

「って、やっぱりコレ秀吉の水着！？　ごごごめんなさいっ！

今度こそ何も見ていないから！」

「待つのじゃ明久！　ワシは男じゃぞ！　どうしてそこまで慌てるのじゃ！？」

「うおっ！　大丈夫かムッツリーニ！？　この出血量はマジでヤバくないか！？」

「・・・・・・・・・・・・構わない。むしろ本望・・・・・・！」

「いやいやいや、ダメだからね！？　真奈！　輸血の準備だ！」

「え～、秀吉君の裸みたいのに～」

「それだったら家に帰ってから一緒に風呂にでも入れば済む話だから！」

「え！　良いの！？　やったー！」

「待つのじゃ二人とも！　それは色々とまずいじゃろうが！」

「あはは、お掃除大変そうだね」

帰宅途中・・・

「楽しかったですね？」

「うん」

「・・・・・・・・・・・・何か凄い疲労感が」

「疲労じゃなくて貧血だって、康太君の場合」

「大変そうね、Ｆクラス」

「でも、それが楽しいんだよな。日常を思い出させてくれるから」

ちょっと黄昏れていると雄二が

「それじゃ、一っ風呂浴びていくか？」

雄二の提案

「はーい！」

葉月ちゃんの掛け声と共に皆が賛成した。

銭湯入り口・・・

「こらこら。葉月ちゃんと秀吉は女湯だよ」

「えへへ。冗談ですっ」

「じゃからワシは冗談ではないのじゃが・・・・・・？」

もう諦めるというのも一つの選択肢だと僕は思う。

すると雄二から声が掛かる。

「あ～大丈夫だ秀吉。ほらっ」

雄二が掛かっているのれんを外すと、

秀吉湯

と、書かれていた。

『世間に認知されてるんだ』

皆の心が一つになった、瞬間だと思っている。

男湯・・・

「ふぅ～良い湯」

「暖まるね～」

どうやら僕たちの貸し切りみたいだ、ラッキー☆

「ところで康太、何で壁を見つめているの？」

「この向こう、女湯」

「何っ！？」

明久が湯船から立ち上がる。というか先に体洗わないの？

女子の方から島田さんのだと思われる叫び声が聞こえたが心配ないだろう

他の皆と入れ違いになるように僕は湯船に浸かる。

「明久、シャンプー貸してくれ」

「はい」

「こ、これは俺が買った石鹸だ」

「これでも泡はでるからわざわざ買わなくてもいいかなと」

おいおい。

「お前に頼んだ俺がバカだったよ。おい翔子、シャンプー貸してくれ」

壁を越えて、シャンプーが投げ込まれる。

「・・・・・雄二、石鹸貸して」

すると今度は霧島さんから声が掛かる。

「ほらよ」

雄二が石鹸を投げる。

「し、紫苑。私も貸して！」

優子からもきた。

「は～い」

僕も自分が使ったので申し訳ないが、壁の向こうに投げる。

「何だか四人とも、新婚夫婦みたいですね」

「あ、確かに」

「ひ、姫路余計なことを言うな！　そいつは、うおぉ！　ぐはっ！」

無数のオケが投げ込まれた、雄二はそれに当たってのびている。

「あはは、ちょっと恥ずかしいかな」

「ね～え、知ってる～？」

不意に工藤さんの声が聞こえてきた。

「銭湯の湯船って、繋がってるんだよね～」

明久と康太が何かを感じたようだ。

「潜ったら何か見えたりして～」

「あーいこちゅわーん！」

すると二人がル○ン三世の有名なダイブで湯船に飛び込む。

「「あっつー！！」」

当たり前だ。

「あそこは女湯が覗ける高温地帯だ！」

「・・・・・・・・・・・水でよく冷やしてから！」

二人が何度も冷水を被る。風邪引くよ？

「「再チャレーンジ！！」」

再び例のダイブをする。

「のぉぉぉー！」

「目が、目がぁぁぁー！」

「あっはははは！　残念だったみたいだね～」

工藤さんの勝ち誇った声がする。

「くっそー！　よくもからかったな！」

「・・・・・・・・・・・・許すまじ！」

どうやら今ので二人の闘志（下心）に火を付けたようだ。

「こうなったら、何としても覗いてやるっ！　雄二！」

「仕方ねぇ、いっちょやるか！」

雄二が白銀の腕輪を装備すると同時にナレーションが入る。

『この白銀の腕輪は立ち会いの教師がいなくとも、召喚獣を呼び出せるのである』

「ほら、紫苑も」

「えぇ～」

「起動（アウェイクン）！」

「「「試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！」」」

ポンッ！　と音を立てて呼び出される僕たちの召喚獣。

「よし、行けっ！」

明久の召喚獣が最初に男湯と女湯の境目の壁に乗る。

「見えた？」

「あぁ！　召喚獣が見えても僕は全然楽しくない！」

明久が頭を抱えて悶絶している。

「あぁぁうぁぁぁ！」

「はいよ、ほら」

そう言って康太が差し出したのはデジカメ。

「そうか、召喚獣にデジカメを持たせれば『試験召喚獣』」

あ。向こうでも召喚が開始された。

『試獣召喚（サモン）！×７』

『Ｆクラス　吉井明久　＆　Ｆクラス　土屋康太　＆
Ｆクラス　氷花紫苑
保健体育　７８点　＆　５２７点　＆　３２５点』

流石康太、保健体育は教師にも勝る点数だ。

対する女子は。

『Ａクラス　工藤愛子　保健体育　４２４点　愛』
『Ａクラス　霧島翔子　保健体育　３７６点　冷』
『Ａクラス　木下優子　保健体育　３３８点　棘』
『Ａクラス　宮野真奈　保健体育　３５０点　積極』
『Ｄクラス　清水美春　保健体育　１２５点　殺す』
『Ｆクラス　島田美波　保健体育　８７点　貧』
『Ｆクラス　姫路瑞希　保健体育　３４１点　巨』

何だか余計な文字を背景にバスタオルを巻いた召喚獣が召喚された。

『悪さしようたって、そうはいかないんだからね！』

『あっはは！　君たちの召喚獣じゃ、この防衛戦を突破するのは無理かな～』

「絶対に突破してやる、いくぞー！」

康太の召喚獣が明久の召喚獣の後に続く。

止めといた方が良いと思うけどな。

戦闘が終了したらしく、二人の召喚獣は戦死した。

「いった～！　うおうぉあぁぁぁ～、きゅ～」

明久がその場に倒れ込む。

「後は、お前だけだ、紫苑！」

「・・・・・・・・・・・・任せる！」

いや、任せられても。

「康太は自分の心配をした方が良いと思うけど？」

「・・・・・・・・・・・・へ？」

「０点になった戦死者は補習―！」

西村が湯船の中から出現した。

「「どうしてここに鉄人がー！！？」」

「恐ろしく運の無いヤツらだ」

二人が連れ去られた後、僕は湯船から出て、秀吉と一緒に牛乳を飲んでいた。

雄二はまだ浸かっていたいそうなので中にいる。

「お、当たりじゃ」

「もう一本もらって来ようよ」

第二十五問　プールと銭湯と水着の楽園（後書き）

今回は明久です。

とある人物からお金の供給を止められてしまった。そこで僕はいつもの四人を誘ってアルバイトをすることになったのだが、まさか、あんなことになるなんて。

次回　バカと銀色と召喚獣　『僕らとバイトと危険な週末前編』

よし！　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第二十六問　僕らとバイトと危険な週末　前編（前書き）

皆様すみませんでしたっ！

合宿が連続してあり、それが終了し、ようやく、ようやく更新することができました！

今回の話から長いと思われるのは数回に分けて執筆いたしますので。

因みに分けた場合前編以外にはバカテストは存在しません。ご了承下さい。

～Fクラスの日常の巻～

Fクラスの卓袱台の上で雄二と明久がくたばっている。

「これはまた随分とよわっておるのう」

「二人とも大丈夫ですか？」

「「なんとか・・・・・・」」

本当に大丈夫か？

「こんなになるなんて二人ともどんな朝を過ごしているんでしょうね？」

「どんな朝って・・・・・・」

「ワシらとは全然違う朝なのじゃろうな」

「それではＶＴＲどうぞっ！」

木下秀吉の場合

ＡＭ６：００　起床
初めのうちは優子と間違えて大慌てしたなぁ。

ＡＭ６：２０　ランニング（紫苑と一緒に）＆発声練習
僕は最近１５キロ走ってる。真奈にも秀吉を見習ってもらいたいものだ。

ＡＭ７：２０　朝食（紫苑・優子・真奈と一緒）
今朝はみそ汁が会心のできでした。

ＡＭ８：００　登校（紫苑・優子・真奈と一緒）
優子にやられた関節がまだ若干痛いなか登校した。

坂本雄二の場合

ＡＭ６：３０　起床×　奇襲○
まったく、夫婦なんだから仲良く一緒に帰ればいいのに。

ＡＭ６：４０　ランニング＆発声練習（どちらも霧島さんと一緒）
凄い！　霧島さんあれだけ走ったのに汗をまったくかかないなんて！

ＡＭ７：２０　朝食
既に雄二の母親とは仲が良いんだね。

ＡＭ８：００　登校×　投降○
アイアンクロー炸裂！　字が秀吉の時と違うって突っ込むべきなのかな？

木下優子の場合

ＡＭ７：２０　起床＆赤面＆関節技
あれは僕が悪い訳じゃないのに、偶然顔が近かっただけなのに。

ＡＭ７：４０　ノロケ（紫苑と一緒）
キスとかしました。もう定番ですかね。ＦＦＦ団の奇襲！？

ＡＭ８：００　登校（秀吉・紫苑・真奈と一緒）
優子が口聞いてくれなかったです。

吉井明久の場合

ＡＭ７：３０　起床ーーーできず　電池切れ
おいおい。予備の電池はーーーってないじゃん！

ＡＭ８：１０　朝食ーーー抜き　材料切れ
本当に何も入ってないよ（汗）

ＡＭ８：１５　登校　栄養切れ

もう何もかも無いな。

「「普通の朝だが？（だけど？）」」

「・・・・・・・・・・・・苦労してる」

「それ絶対普通じゃないから」

島田さんと姫路さんが苦笑いを浮かべている。

こんなカンジで短編へＧＯ！

第二十六問　僕らとバイトと危険な週末　前編

『～特別コラム～　　鉄拳人生相談』

三年生　T村Y作のご相談

『鉄拳先生、僕の悩みを聞いてください。実は僕には好きな人がいます。

その人はとても可愛らしくて人気があります。ですがそのK下H吉さんはどうやら戸籍上では♂のようなのです。これは同性愛になってしまうのでしょうか。

先生、僕はどうしたら良いか教えてください』

鉄拳先生のアドバイス

『すまない。いきなり凄い相談が来たので困っている。正直、このコラムを引き受けなければ良かったと後悔しているくらいだ。君が好きになったその相手には恐らく双子の姉がいるはずだ。容姿に惚れたのであれば彼女に思いを告げるべきだが、そんなことは絶対にするな！　君の命に関わる。容姿ではなく内面に惹かれたのであればーーー諦めることだ。噂ではK下H吉君は好意を寄せている女子がいるらしい。元々叶わなかった恋だと思い、潔く諦めることを強くすすめる』

二年生　K保T光さんのご相談

『最近、寝ても覚めても僕の頭から離れない人がいます、彼――Y井A久君が笑う姿を見ると僕も幸せな気持ちになり、彼が沈んだ表情をしていると僕も悲しくなります。相手は同棲なのですが・・・・この気持ちは恋愛感情なのでしょうか』

鉄拳先生のアドバイス

『君はここ最近の間に強く頭を打ってはいないだろうか。記憶にないとしても年の為に病院で診察を受けることを推奨する。同性愛云々の話はその後だ』

二年生　S水M春さんのご相談
『私には一年生の頃からずっと好きなお姉さまがいます。ですが、最近そのお姉さまが悪い男に騙されています。
どうしたらその男を殲滅できるか教えて下さい』

鉄拳先生のアドバイス
『貴様らには同性愛以外の悩みは無いのか！』

国家機密情報局基地内部・・・

パンッ　パンッ　パンッ　パンッ　ドゴォッ！

エンディング・・・・・・

Ｒｅｓｕｌｔ

氷花紫苑　９２７４００　　宮野真奈　９４２８００

「ま、また負けた・・・・・・！」

「ふふん。まだまだだね、紫苑」

今僕と真奈は仕事が終わったので帰る前に恒例のシューティングゲームをやっている。
因みにこれは普通のゲームセンターには置いて無く、国家機密情報局オリジナルである。
それでもストーリー性があり中々面白い。ステージが１０までとちょっと長めだが、今となっては大したことはない。
最高は西村が一人プレイで叩き出した１３８５２００点だ。
これは一人プレイだから出せる点数である。
秀吉と優子を待たせる訳にはいかないので協力プレイだ。

「何故だ・・・・・・」

「これで私何連勝だっけ？　１００以上やってるけど、一回も勝ててないよね～？」

「悔しい・・・・・・！」

そう、恒例というのは帰る時間が一緒の時に毎回やっているのだ。
だが僕は真奈に一回も勝てていない。
しかも負けた方はケーキを奢るという罰ゲーム付きで。何回奢ったんだろ？

「さーってと、今回は何奢ってもらおうかな？　あっ、そうだ優子と秀吉君にも聞かなきゃね」

「それについては良いんだけどね。そういえば今日給料が貰える日だっけ？」

「そういえばそうだったわね。だから皆のテンションが高かったんだ」

僕と真奈は未成年だけども、ちゃんと給料制だ。一応それなりに貰っているのでお金にはあまり困らない。

「あ～、ここにいたんだね紫苑君、真奈君」

ん？　この声は。

「あ、エピスティミ博士。こんにちは」

「お世話になってます」

そう。この人が携帯記憶抹消装置を開発したエピスティミ博士だ。僕と真奈は仲が良い。実験台になってサンプルを頻繁に取られているからだ。

「この前はどうも。良い結果が取れたよ～。相変わらず君は良い結果を出してくれるね」

「あはは、そりゃどうも」

これって喜ぶべきことなのかな？

「博士も今から給料を貰いに行くんですか？」

「給、料？　ああ、そういえば今日はそんな日だったね！　すっかり忘れてたよ」

やっぱりこの人も忘れてたよ。

「今ちょうど休憩しようと思ってたとこなんだ。糖分を摂取したかったし～」

「でも、今日は大事な実験があるんじゃ？」

真奈が博士に聞く。確かにそんなことを言ってたような気がする。

「博士―！　こんなところにいたんですか！？」

あ、やっぱり迎えが来た。

「あれ？　マリア君、何の用？」

「何の用？　じゃないですよ！　今大事な実験の最中なのに勝手にいなくなったりして、
い・い・か・げ・ん・にしてください！」

「い、痛い！　痛いよマリア君！　耳を引っ張らないで！？」

「あ、紫苑君、真奈ちゃん。ごめんなさいね？　また何か迷惑かけちゃった？」

この人は博士の助手であるマリア・ルーミーさんだ。ランクはAだが、この緩くて実験の途中でいなくなるような自由人の博士を唯一調教とめられるできる人物だ。
２０代で中々の美人で、薄橙の短髪の髪の毛が特徴だ。

「いえ、いつも通りですよ？」

「そう？　なら良い「ねえ、僕のことは無視なの？」んだけど」

「いつも大変ですね。ストレスとか大丈夫ですか？」

真奈が肌に関しての話題を入れる。女性の永遠の悩みだろうか？

「そうなの。最近「ねえ、僕のこと」肌が荒れてないか心配で」

博士、正直惨めです。

「マリアさん、大事な実験があったんじゃ」

「あ！　そうだったわね！　それじゃ、二人ともまたね！」

「ちょっ！　だからマリア君!?　耳を引っ張ったまま引きずらないで!?」

僕と真奈は手を振る。これじゃどっちが上司かわからないな。

「んじゃ、給料をもらって帰ろうか？」

「そうだね。ケーキ楽しみだな～」

忘れてなかったのか。

僕たちはこの後給料を受け取り、基地を出た。

「何で同性愛以外の悩みが無いのだー！」

基地を出る時に西村の声が聞こえた。

自宅・・・

「紫苑お帰り！」

「ただいま優子」

帰ってくると同時に優子が抱きついてきた。

「お疲れ様じゃ二人とも」

「ありがと秀吉君」

「それじゃ、買って来たケーキ食べるかい？」

軽くリラックスした後に僕たちはケーキを食べた。

あ、このケーキ美味しい。

翌朝Ｆクラス・・・

「あ、秀吉と紫苑。おはよう」

「うむ、おはようじゃ」

「同じくおはよう」

今朝優子が何故か中々起きなかったのでいつもより少し遅い登校だ。

でも授業には充分間に合う時間なので問題はない。

「丁度良いところに来たな。今俺たち三人でバイトをしようという話になったんだ」

「バイト？　お金に困っておるのか？　明久はいつものことじゃとして」

「実は僕、今とある凶悪な人物に脅されて学校の成績を定期的に教えなくちゃいけないんだけど、それを教えてないから仕送りをとめられてるんだ」

「どう考えても両親じゃん」

「成績を教えれば良いのでは・・・・・・あ、すまぬ明久」

秀吉、さては言いかけたけど明久の成績が悪いんだと気付いたな。

「じゃあ雄二は？」

「自分の部屋に鍵をつけたくてな。とびきり頑丈なのを」

霧島さん対策だな。でも恋する乙女の行動力には頑丈な鍵如きじゃ、何の役にも立たないと思うけどな。

「ムッツリーニは何じゃ？」

「・・・・・・・・・・・・カメラの購入資金の足しになるから」

妥当だな。

「因みにそのバイトの募集は何人じゃ？」

「確か、４～５人だったはずだ」

それなら。

「ではワシもバイトをするかの。演技の幅が広がるかもしれんし」

「僕も良いかな？　折角なら皆とやりたいし」

「本当！？　そうと決まれば、早速今日の帰りに面接に行こうよ。募集がおわっちゃっても困るし」

「そうだな。そうすっか」

「了解じゃ」

「・・・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

「異議無し」

そんなわけで僕たち五人は学校帰りに件の喫茶店により、その場で面接を受けて全員採用ということになった。

ラ・ペディス・・・

「ああ・・・・・・。よく来てくれたね・・・・・・・・。今日一日宜しく頼むよ・・・・・・」

「は、はい。宜しくお願いします」

バイト当日、喫茶店ラ・ペディスに来たものの、店長がちょっとやばい。

（ねぇ。この店長さん、本当に大丈夫なのかな？）

（むぅ・・・・・。何かきっかけがあればスグにでも富士の樹海に向かいそうなほど弱っておるのう）

明久と秀吉が小声で会話しているが、秀吉の考えは間違ってはいないと思う。

（これは噂なんだが・・・・・この店長、どうやら奥さんと娘に逃げられたらしい）

雄二が声を二人より更に潜めて言う。確かにそんなことになっていればこのような状態になっているのも頷ける。

（あれ？　でも、前に来たときはバイトの女の子も何人かいたはずだけど・・・・・）

（その連中がどうしたのかは知らないな。ここにいないってことは何かあったんだろ）

（前にって誰かと来たの？）

（うん。美波と一緒に）

姫路さんにバレたらどうするんだろ？

「それじゃあこれ、君たちの制服・・・・・・。サイズが合わなかったら言ってね・・・・・・」

「「「サイズが合いません」」」

僕と秀吉以外の三人の声が見事にハモった。

「性別が合いませぬ」

まあ秀吉のコレはもうお約束だよね。

「あれ・・・・・？　おかしいな・・・・・・。きちんと目測したつもりだけど・・・・・・」

僕以外サイズ、もしくは性別が合わないのでは残念ながらきちんと目測したとは言えない。

「店長。僕のは若干小さいだけですけど、雄二とムッツリーニーニーじゃなくて坂本と土屋のサイズは明らかに合っていないと思います」

でもこのミスの仕方だと渡す順番が逆。という線も考えられるけどーーー

「そうかな・・・・・。でも、坂本君はSで、吉井君はMで、土屋君はエローーーじゃなくてLに見えたんだけど・・・・・。木下君はM、氷花君はLで合ってたよね？」

前言撤回。この店長中々良い目を持ってる。

「・・・・・・・・・・・・エロなどに興味はない」

「「なにぃっ!?」」　「ウソっ!?」　「なぬっ!?」

有り得ないウソをつく友人に対して僕たち四人の声が見事にハモった。

「ムッツリーニ。いくらなんでもそのウソはないよ」

「そうだぞムッツリーニ。ウソは人を騙せる範囲でつくものだ」

「知り合いには通じないよ?」

「存外ウソをつくのは苦手のようじゃな」

「・・・・・・・・・・・・!!（ブンブン）」

いやぁ、それにしてもここまで大それたウソをつくとは恐れ入ったよ。

「まぁ、それは置いといて僕のサイズは多分Ｌだから、ムッツリーニと交換しますね」

明久と康太が制服を取り替える。

「・・・・・・・・・・・・Ｍなら丁度いい」

「店長。俺はきっとＬＬになるので、交換してもらえますか?」

「そっか・・・・・そうだよね・・・・・・。うっかりして制服と性癖を間違えちゃったよ・・・・・・」

制服○　性癖×

「もうワシは無視なのかのう・・・・・・」

「後で制服を探そうよ」

☆

ロッカー室はあまり広くないらしいので明久と康太が先に着替える。

「お待たせ、二人とも」

「・・・・・・・・・・・・待たせた」

出てきた二人はいつもと違う服を着ていたせいか、かなり違う印象を与えてくれた。

中々似合ってる。ここでのバイトは正解だったみたいだな。

「ははっ。意外と似合うもんだな。それっぽいじゃないか」

「中々の男前じゃぞ、二人とも」

「こういう職があながち向いてるのかもよ」

「そ、そうかな・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・照れ臭い」

「では、ワシらも着替えるとするかの」

「そうだね」

「俺は廊下でいいか」

『バカ紫苑！　何を堂々と秀吉と一緒に着替えようとしているのさ！』

『・・・・・・・・・・・・万死に値する・・・・・・っ！』

堂々とって言われても風呂すら一緒に入ることもあるのに着替え程度でいまさらどうこう言われても。まあ最近は秀吉の裸が意識すれば優子のに見えたり見えなかったりする。

しかも秀吉はそれに気付いて、優子の声真似を偶にしたりするので、僕の理性がまずいことになったりしてる。

「秀吉の裸なんて何回も見てるんだから今更何もないよ」

『それって木下さんの裸も見てるってことか！？』

「いやいや、それはないから」

ありますけどね。

「でも紫苑は姉上の入浴を覗きに行ったことがあったのう」

『何だと!?　いくら付き合ってるからって無理矢理襲うなんて!
木下さんが可哀想だよ!』

『・・・・・・・・・・・死んでも償いきれない!』

「あれは秀吉が仕組んだ巧妙な罠で、僕に悪気は無かったんだからね?」

『『そういう問題じゃないっ!!』』

ダメだ。このままじゃエンドレスだ。

「紫苑、背中のファスナー上げてくれない?」

「っ!?」

いやいやいやいや、慌ててはいけない!　いきなり優子の声が聞こえたんで驚いたがコレは秀吉の声真似。いつものことだ。いつもどおり対処すればいい。
男性用の制服がもう一着あれば良かったんだけど・・・・・・。

「はいはい。わかりましたよ」

「最近反応がつまらんのう」

「ザ・耐性さ」

フフ、舐めてもらっては困る。
一応こんな状況にも対応できるように訓練を受けているのだから!

「じゃあ、裸見せてあげるって言ったら？」

「フフ、秀吉君。流石に優子の体と秀吉の体くらいは見抜けるよ？」

「それなら見ても平気だよね？」

そう言って秀吉はこちらに振り返る。っ！？　くっ、髪留めの止め方が優子と同じだ。

これだけで殆どの人が間違える。でも僕なら大丈夫な、はず・・・・・！

廊下がギャーギャーうるさいが気にしない。

シュル、パサッ

「・・・・・・」

「なんじゃ、ダメダメではないか」

「なぁっ！？」

しまった！　結局凝視しちゃった！　イヤらしい目で。

「ひ、秀吉。今のは違うんだ！」

「おやおや、困った義兄上じゃのう」

秀吉の目が恐いっ！　何かを見下しているような目だ！　秀吉ってMじゃなかったの！？

このままでは優子に言いつけられて僕の命が危険に晒されてしまう！

「お願いだから優子には言わないでください！」

「わかったわかった。じゃから泣き付くでない」

秀吉が最近黒く感じる。

「とりあえずサッサと着替えるぞい」

「僕にこういう服は似合わないと思うけどなぁ」

「物は試し。とにかく着てみるのじゃ」

「すまぬ。この服は存外複雑な作りでの」

あの後、秀吉に着付けられ、ようやく着ることができた。

「ひ、秀吉。その・・・・・、凄く似合ってーーー」

明久が秀吉を褒めようとしていると、

「ディア・マイ・ドウタァアアアーーーッッッ！！」

秀吉を見るなり店長が秀吉目掛けて飛びかかってきた。

このままでは秀吉が危ないっ！

「させるかぁっ！」

「ディア・マイ・ドウタァアアアアーーーッッッ！！」

何っ！？　防いだっ！？　一般人が僕の回し蹴りを！？　それでも！

「そんな手で秀吉に触るなぁー！」

「ディア・マイ・ドウタァアアアアーーーッッッ！！」

僕と店長の攻防が続く。でも流石に一般人には負けない！

「皆！　僕が店長（変態）を抑えてる間に！」

「わかった！　秀吉は下がってて！　いくよ二人とも！」

「「了解っ！」」

「ディア・マイ・ドウタァアアアアーーーッッッ！！」

最大出力のスタンガンを四回押し付けてようやく店長は沈んだ。

第二十六問　僕らとバイトと危険な週末　前編（後書き）

今回も引き続き明久です。

店長（変態）を沈めた僕らに新たな試練が立ち塞がる。ＯＬ、知り合いの女子たち。そして新手の変態。この濃くて特殊なメンバー＋αに僕たちに接客が通じるのだろうか？

次回　バカと銀色と召喚獣　『僕らとバイトと危険な週末　後編』

よし！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第二十六問　僕らとバイトと危険な週末　後編（前書き）

以前優子の口調については『私』でいくと書きましたがやはり『アタシ』にします。度々変更すみません。
明日から優子の口調の訂正をしていきます。

第二十六問　僕らとバイトと危険な週末　後編

「で、どうしようか」

「どうするもクソも、店長がこんなんじゃ何もでないだろ。『本日臨時休業』とでも書いて入り口に張っておこうぜ」

先ほどの『店長変態化事件』があった為やむなく店長を沈めたのだがこれでは店を経営するのは難しい。流石にこんな状況は想定されていないからな。

「バイトはまたの機会じゃな」

秀吉が言う。そうなるよね。

「仕方ないな。また他のバイトを探すとするか」

「・・・・・・・・・・・・残念」

「え？　ってことは、バイト代はーーー」

「出ないよね。働いてないんだし」

「そ、そっか・・・・・・。そうだよね・・・・・・」

う～ん。皆残念だって顔をしているな。僕も折角だから学園祭の時にできないようなことをしてみたかったが、それも今は叶わぬ夢。とりあえず『本日臨時休業』と書かれたプレートを探しに店の奥に入ーーー

――カランコロン

「いらっしゃいませっ」

ん？

「良かった、あいてるみたい。時間を潰す場所がなくて困ってたのよね～」

「ほんと、助かったね」

ありゃりゃ。何故だか明久がいらっしゃいませって招き入れちゃったんだけど？

これでもう追い返すことはできないし。でもこれで否が応でもバイトができるな。

今回は明久の行動に感謝だ。

（おーい紫苑。今から担当を分けるぞ）

（あいあい）

皆のとこへ行くと雄二が担当分けをするみたいだ。

（明久と秀吉はウェイター、ムッツリーニはキッチンを頼む。俺はドリンクをやる。紫苑は人手が足りなくなったところでそれぞれ作業をしてくれ）

（了解じゃ）

（・・・・・・・・・・わかった）

（イエス、ボス）

ああは言われたけど今客はあの二人だけだ。とくに人手が足りなくなるとは思えない。
とりあえず今はウェイターをしよう。

（まずはワシが行こう。他の客が来たらそっちを頼むぞい）

そう言って秀吉が先ほど入店した客の元へ行く。

「二名様ですね？　それではこちらへどうぞ」

客を窓側の席へ案内し、席を座りかけたところでお冷をトレイに乗せて客の目の前に置く。
なるほど、ああやるのか。

「雄二、飲み物は大丈夫？」

「ま、簡単な物ならなんとかなるだろ。食べ物もムッツリーニに任せておけば問題ないだろうし」

「混んできたら僕もそっちにまわるから」

雄二と軽い会話をしている間に次のお客さんが来たみたいだ。
明久に任せていいかな？

――――カランコロン

「いらっチャッ！」

噛んだな。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」」」

ああ、お客様が笑いを堪えてる姿が痛々しい。

（明久、一度くらいこんなこともあるさ）

（うん。そうだよね。こんなこともあるよね？　よし、今度こそ！）

うん。そのイキだ明久。

「いらっチャ」

ダッ！（明久敵前逃亡）

「あっ！　キミ、案内は！？」

「大丈夫だよ！　私たち全然笑ってないから！」

「もう一回だけ頑張ってみて！」

ご氏名だよ明久。

「す、すみません。ちょっと気が動転してしまいました・・・・・・」

「それでは、こちらのお席へどうぞ」

キチンと席へ客を案内する明久。やればできる子だな明久。

「・・・・・紫苑。そろそろ最初の客が注文を決めたようじゃ。今度は紫苑が行くかの？」

「うん。経験を積んで慣れておかないと」

よし、今度は僕の番だ。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「あ・・・・・あ、はい！　エスプレッソとレモンティーと季節のシャーベットを二つ下さい」

「畏まりました。エスプレッソとレモンティーと季節のシャーベットをお二つですね。少々お待ち下さい」

ふぅ。かんとか噛まずにいけたな。
客は僕が去ってから小声で何か話し始めた。

「ねえ、・・・・・かっこ・・・・・？」

「だよ・・・・・もし・・・らさっきの・・・・・合ってるのかな？」

よく聞き取れないな。まあでも用があったら呼んでくれるだろうし。
それより注文を忘れないようにメモをっと。

「エスプレッソ1、レモンティー1、シャーベット2だよ」

「あいよ」

「・・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

なんとかできたな。

「明久。向こうの客の注文が決まったようじゃぞ」

「あ、ホントだ。行ってくるよ」

「今度こそ噛まないようにね」

「う、うん」

先ほど明久が爆笑の渦に巻きこんだ客の注文が決まったようだ。今度こそしっかりしてるところを見せてあげるんだ明久！

ブバァッ

何故だか知らないが明久が注文を聞きに行った客たちが虹のアーチを作り出したぞ？

注文を聞き、メモを取った明久が戻って来て注文を読み上げる。

「ホットココア、オレンジジュース、ミルクティー、チーズケーキ、ホットケーキ、

モンブランを一つずつと、頑張ってを三つ」

「・・・・・・なんでお前は客に励まされているんだ？」

「・・・・・・・・・・早速何かあった？」

本当に何があったんだろう？

――カランコロン

「いらっしゃいませ。何名様ですか？」

最初よりも客が増えてきてる。そろそろ厨房も忙しくなってくるかな？

今気付いたけどまだ女性客しか来てないな。しかも何故か目線を感じる。

――カランコロン

「いらっしゃいませ。何名様ですか？」

明久が対応する。お、初めての男性客だ。って、あの坊主頭とモヒカンは！

「おう。二人だーーーって吉井か！？　お前何やってるんだ！？」

喫茶店の時にお世話になった常夏コンビだ。

「ああっ！　変態先輩だ！」

「どんだけ人間からｄｉｓｔａｎｃｅな名前だよ！？」

「常村と夏川だ！　お前はどういう記憶力をしているんだ！？」

あんなです。

「おい、ウェイターの三人」

「どうしたの雄二？」

常夏コンビを席に案内した明久も来る。

「ドリンクなんだが、今日はミルクの搬入が遅れているようで、もう在庫がない。
注文が入ったら気を付けてくれ」

それは大変だ。間違ってミルクの注文を受けないようにしないと。

「了解じゃ。ミルクを使うものには気を付けよう」

「ああ。宜しく頼む」

『ウェイターさん』

客からお呼びが掛かった。あれは僕が担当してた客だよな。

「はい、ご注文はお決まりですか？」

「ミルクココアとアップルパイを一つずつお願いします」

さっそくきたな。

「申し訳ありませんお客様。只今ミルクを切らしておりまして、ミルクココアはただのココアになってしまうのですが、それでも宜しいですか？」

「あ、そうなんですか。それじゃあミルクココアじゃなくてアイスココアに変えてもらってもいいですか？」

「はい。わかりました。ご注文を確認致します。アイスココアをお一つ。
アップルパイをお一つ。以上で宜しいですか？」

「はい」

「わかりました。少々お待ち下さい」

メモを取って厨房へ。

「アイスココアとアップルパイを一つずつだよ」

「了解」

「・・・・・・・・・・・・わかった」

「紫苑、俺はちょっとトイレに行ってくる。少しここを任せてもいいか？」

アイスココアを入れ終わった雄二が聞いてきた。

「うん。大丈夫だよ」

「すまん」

さて、ドリンクの担当を少しの間やることになった訳だが。
できれば簡単なのにして欲しいな。

「雄二、注文――ってあれ？　紫苑、雄二どこにいるか知ってる？」

「今トイレに行ってる。ドリンクの注文なら僕が引き受けてるから。それで、注文は？」

「そうなのか。わかった。注文はブレンドだって」

「わかった」

ブレンド？　飲んだことはあるけどどれとどれを混ぜれば良いんだろう？

「まあホットとアイス以外ならなんでも良いかな？」

とりあえずコレとコレを。

「よくわからないけど、はい明久」

「ありがと。じゃあ行ってくる」

よりによって何でブレンドなんだ。今まで通りレモンティーやら、ココアだったらよかったのに。

「すまねぇ紫苑。終わったぜ」

「あ、雄二。よかった。じゃあ僕は向こうに戻るね」

「おう。サンキューな」

すぐさまウェイターに逆戻り。なんだか常夏コンビと明久が騒いでるぞ？　あれでは周りの客に迷惑が掛かるな。仕方ない、またあの二人を気絶させれば。

「てめぇ表へ出ろやコラぁっ！」

ああ！　カップの中身をぶっかける気だな！　明久は多分避けるだろうし。

そうなると斜線軸上にいる秀吉に被害が！

「食らうかっ！」

やはり明久は避けた。ならこのまま！

「よっ、と」

「ん？　何じゃ？」

僕はトレイを盾に秀吉に飛んでいくブレンドを防ぐ。

ブレンドを運良く床に零さずにトレイの上だけに留めることができたのでよかった。

「す、すまねぇ。後ろのウェイターさんにかからなくて良かった。ついカッなっちまって・・・・・・」

「ゴメン紫苑。秀吉」

「すまぬの、紫苑。助かったぞい」

「気にしなくていいよ。誰にも被害がなかったんだし」

――カランコロン

しばらくして客が入ってきた。

あれ？　姫路さんと島田さんだ。あと霧島さんがもの凄いスピードで雄二の背後へ。

『・・・・・・雄二。妻への隠し事は浮気の始まり』

『なんだ!?　いるはずのない翔子の声が聞こえるぞ!?　呪いか!?』

雄二、後ろ後ろ！

「紫苑、姫路たちによるとどうやら姉上たちも来るみたいじゃぞ？」

「優子も？」

となると、真奈や工藤さんも来るだろう。いつものメンバーが揃いそうだな。

「秀吉、明久が悶え苦しんでいるんだけど、助けた方が良いのかな？」

「いつものことじゃから良いのではないかの？　でも他の客に迷惑になりそうじゃし、行ってくるかの」

「じゃあ僕m「すみませーん」っと、ゴメン。僕はこっち行くよ」

「あっちは任せるのじゃ」

「お願いね」

それぞれ僕は客の元へ。秀吉は明久たちの元へ向かう。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

もう言い慣れたいつものセリフを言う。

「あの、すみません！　実はその注文じゃなくて聞きたいことがあって、その・・・・・・／／／」

「大丈夫ですよ、それで、聞きたいこととはどのようなことですか？」

一人で来店している客に呼ばれた。質問か。初めてされるが多分答えられるだろう。

それにしても何で顔が赤いんだろう？　聞くのが恥ずかしいことなのかな？

「あの・・・・・あなたと、向こうの女性のウェイターさんは付

き合ってるんですか？」

「・・・・・・はい？」

予想外の質問に返すのが若干遅れた。

「あ、あの！　言えないなら別に／／／」

「あ、いえ。そんなことはないですよ？」

いけないいけない。このままではお客様を不安にさせてしまう。何が目的で聞いたのかわからないが、答えておかなくては。

「えっと、僕――じゃなくて、私とあの人は付き合ってませんよ」

だって秀吉男だし。

「そ、そうなんですか？　それじゃあ彼女とかいますか？」

「お恥ずかしいのですか、いますね。先ほどのウェイターの姉とお付き合いしてます」

う～ん。まさかこんな恥ずかしいことを聞かれるとは思ってなかった。

「あ、そうなんですか・・・・・・」

「はい。あの、何かお気に召さないことでも？」

「あ、いえ！　違うんです！　気にしないでください／／／」

「そうですか？」

「はい。ホントに大丈夫です！　あの、もしかして・・・・・・」

「はい？」

今話しているお客様が僕の後ろを指さして言う。

「そのお姉さんってあの子ですか？」

「え？」

ゴゴゴゴゴ！

振り返るとそんな効果音を立てながら仁王立ちする優子の姿が。

しかも何故だかご機嫌斜めな様子。とりあえずその殺気を仕舞って頂きたい。

「し～お～ん～！」

「は、はい！」

優子が近づいて来て言う。

「アタシっていう許嫁がいるってのに、店の中でなにナンパなんてしてんのよ！？」

「ナンパ！？　この光景がナンパに見えたの！？」

だとしたら今度病院へ行く必要が「失礼なこと考えてるでしょ？」

「ぐおぉぉ！　関節が！」

「とにかくちょっとこっち来なさい！」

優子の読心術（僕専用）は健在か。でも関節を決められた状態じゃどうしようもない。

秀吉あたりに援護を！

『・・・・・雄二。許可が下りた。高橋先生とのデートのこと、全部聞かせてもらう』

『なんのことだ!?　それと聞かせろ言いながら聞く耳持たないように見えるのは気のせいか!?』

『あ、あの、明久君！　さっきの話ですけど、本当は美波ちゃんと二人きりだったんじゃ・・・・・・！』

『ちちち違うのよ瑞希！　アキはバカだから記憶が違っているだけで・・・・・・！』

『あがぁっ！　美波、落ち着いてまずは僕の腕を解放して！　このままだと関節が一つ増えちゃう！』

『先ほどは危なかったのう』

『あはは。それにしても秀吉君って女の子の格好よく似合うよね？』

『はぁ。よく言われるんじゃ』

『折角だからいろんな服着てコスプレしてみようよ！』

『なぬ！？　それは勘弁して欲しいのじゃ！　そんなことをやっていると本当に女として見られてしまう！』

『それで良いじゃない！』　（そうすればライバル減るし）

『嫌じゃー！』

『あ、康太君ここにいたんだ』

『・・・・・・・・・・・・愛子？　何故ここに？』

『ちょっと康太君に見て欲しいものがあってね』

『・・・・・・・・・・・・なんだ？』

『えいっ（チラッ）』

『ぐはぁっ！（ブバババ）』

ダメだ。どこも彼処も地獄絵図という名の無法地帯と化している。

「さ～て、さっきのナンパについて詳しく聞かせてもらおうかしら？」

トイレに連れ込まれてもはや絶体絶命！

「いや、だからね、さっきのは客の質問に答えてただけで、けっし

てナンパではないよ・・・・・・って、何で答えてる間に関節をぐぎゃぁぁぁ！」

酷すぎる！　聞かせてと言われたから答えていたらその間に関節を決められていたなんて！　初めから聞く気なんてなかったな！　次からはそこにも注意を払っておこう。

「このままじっくり痛ぶってあげるわ」

「今痛ぶるって言った！？　言ったよね！？
もう初めからそう言った方が良かったと思うんだ！」

「アタシがいるのにナンパなんてしてるのが悪いんでしょ？」

そこまでナンパと言い張るなら、証明してやる。

「じゃあ証明すれば良いんでしょ？」

「何をって、キャ！」

「初めからこうすれば良かったよ」

優子の関節技から抜け出し、両手を封じて壁に押さえつける。

「え？　ちょっと／／／」

「まったく、僕が好きなのはキミだけなのに」

そう言って僕は優子にキスをする。

「・・・んんっ！？・・・ふ・・・っぁ・・・・・・」

でもただのキスじゃなくて深い方。つまりディープキスだ。

「ん・・・ふぅ・・・はぁ・・・・・・」

舌を優子の口の中へ潜り込ませる。すると優子も自分の舌を僕の舌に絡ませてきた。

「・・・んむ・・・んっ・・・はぁ・・・・・・」

僕と優子の口からつぅ・・・っと銀色の糸が僕と優子を繋いでいる。

「はぁ・・・・・紫苑・・・・・・」

やばい、今の優子凄く色っぽい。顔の頬を紅潮させて目は潤んでいて、しかも身長差から上目遣い。僕の理性が弾け飛びそう。

「もっと・・・・・・して？」

「うん・・・・・・」

ダメだ。自分の衝動を止められない。僕の理性っていったい・・・・・

「ん・・・んう・・・んはぁ・・・・・・」

「うっ！・・・ん・・・・・・」

僕もかなりやばいな。

「・・・あっ・・・ん・・・・・・・」

このままだと本当に理性が！　初めてが外だなんて嫌だぞ。

「あ、うう／／／」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

先ほど僕が話していた客が今の僕と優子の行為を見ていた。
しまった。ここは女子トイレでしかも迂闊だったことに個室に入り忘れていた。
こ、このままでは僕が優子を襲っているようにした見えない為僕の悪評が広まってしまう！

「ええい！　こんなことの為に使いたくなかったけど！　これを見てください！」

ピカッ

ふぅ。まさかこんなことで記憶抹消装置を使うことになるなんて。
今見られた光景の記憶だけ消した。

「とりあえず席まで運ぶかな。優子は自分で歩ける？」

「な、なんとか／／／（ガクガク）」

「足震えてるよ？　この人を運んだら戻るからちょっと待ってて？」

「うん・・・・・・」

さてと、こっちはどうなって・・・・・・

「ディア・マイ・ドウタァアアアァーーーッ!!」

僕がいなかった間に何があったんだろう?

さっきよりももっと酷い地獄絵図を止める為に僕はまず店長をボコした。

第二十六問　僕らとバイトと危険な週末　後編（後書き）

今回は紫苑です。

静寂の中、僕らは紙を引く。皆の運命をわける紙を。誰もが自分の願いを叶える為に。そう、今僕たちは・・・・・・王様になるんだぁー！

次回　バカと銀色と召喚獣　『王様ゲーム in 文月学園』

いくぞ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

番外編　王様ゲームｉｎ文月学園

二年Ｆ組・・・

一つの卓袱台を囲み、何時にも増して真剣な表情のいつものメンバー。

何故彼らがこんなにも真剣な表情なのかというとーーー

「王様ゲーム！！」

『いぇー！！』

これである。

雄二の掛け声と共に皆のテンションが上昇する。

「明久、ルールの説明を頼む！」

「オーケー！」

親指を出し、いつにも増してテンションが高い。

「ここに、『１』～『１０』までの数字と『王』と書かれたクジがあります」

明久が全てのカードを半分ずつにおり、カゴの中に入れる。

「この王様のクジを引いた人は他の番号を引いた人に命令ができます。

例えば、１番が王の肩を揉むとか、２番が３番にしっぺをするとか。

そして、王様の命令は『絶対！』」

そう、この王様の命令に逆らえないというのがこの王様ゲームを醍醐味。

今度基地の方でもやろうかな？

「それじゃあ、始めるぞ！？」

雄二が言ったと同時に皆が一斉にクジを引く。

「いくぞ、せーのっ！」

『王様だーれだ！！？』

王様ゲーム一回戦。果たして王様は誰の手に！？

「よっしゃー！」

ちぃ！　雄二だったか！

「それじゃあ命令だ。そうだな、５番と６番が鉄人に『好きです、付き合ってください（ハート）』と、告って来い」

ガックリとひざまずく明久と康太。どうやらあの二人だったみたいだな。

女子じゃなくて良かったな。

「「貴様―！！」」

「何て命令するんだ！？　そんなことをしたら、完全に誤解される

じゃないか！？」

「不名誉なっ！」

雄二に取ってかかる二人。でも誰がなっても同じことになってただろう。

「ダメよアキ。さっき自分で説明したばかりでしょうが！？」

「そうだよ二人とも」

島田さんと工藤さんが二人をなだめる。

『王様の命令は』

「「絶対！！」」

目と口から血を流している。ご愁傷様。

「「だぁぁー！！」」

「行ってらっしゃーい」

血を流しながら西村（地獄）へ走ってゆく二人を見送る工藤さん。

数分後・・・

『私は教師をからかった事を反省しています』

と、書かれているプラカードを首から提げて二人は帰った来た。

「二回戦、いくぞー！」

『イェーイ！』

「せーのっ！」

『王様だーれだ！！？』

「あ、ボクだね」

次は工藤さんか！　一体どんな命令をしてくるんだ！？

「それじゃあ、2番が4番の、8番が9番の、ホッペにチュウを」

「本当ですかー！？」

わぁ、姫路さん大喜び！　2番が明久なのかな？

「あ、明久君。明久君のクジの番号は、2番ですよね？」

「姫路さん」

明久はゆっくりと姫路さんに見えるようにクジを開く。そして書かれていた番号はーーー

『3』

と、書かれていた。

「え・・・・・・？」

それならば2番の持ち主は？

『2』

姫路さんの肩をつつき、『2』のクジを見せているのはーーー

「いらっしゃい。瑞希」

島田さんだった。

しかし工藤さんも意外とベタな命令をしたな。工藤さんだからこそなのかもしれないが、

それにしてももう一組の二人っていったい？　そう思いながら自分のクジを開くとそこには。

『9』

ベタだー！　くっ！　相手はいったい誰だ!?　優子以外の女子ならば優子に殺される可能性が！

「んむ？　『8』はどうやらワシのようじゃのう」

ある意味最悪の相手だー！

ダッ！（僕がその場から離脱しようとする音）

ガシッ×2！（優子と真奈が僕を捕らえる音）

ゴギギギギ！（僕の関節が大変な事になっている音）

ドォンッ！（パイルドライバーをやられた音）

ズドドドド！（明久と康太が僕にカッターの刃を突き立てる音）

「ぎゃぁぁぁー！！」（僕の叫び声）

理不尽だ。あまりにも理不尽だ！

しかもまだ凄く良い笑顔で瀕死寸前の僕を優子と真奈が見下ろしている。

向こうでは明久と康太がＦＦＦ団を呼んでいるし！

「紫苑。な～に二ヤついてるのかしら？　そんなに秀吉にキスされるのが嬉しい？」

「秀吉君の唇を奪ったら、どうなるか、わかるわよね？」

「ちょ、ちょっと待ってよ！　これはアクまで王様ゲームだよ！？　命令なんだから仕方ないじゃないか！　それに僕と秀吉は男同士なんだし、しかも頬だよ！？　キスした回数には計算されないよ！」

「「それでもむかつくのよ！」」

「なんて理不尽なんだ！」

「まあまあ、それくらいにしておくのじゃ」

キミが原因だって理解してる？

「紫苑が言う通り、これはアクまでゲームじゃ。そこまでムキになる必要はあるまい」

「「だって」」

「ワシがした後に存分にすれば良かろう？」

あれ？　何か今軽く生贄にされなかった？

チュッ

「ふぅ。男からじゃから嬉しくないじゃろが、受け取ってくれると嬉しいぞい。
ワシも紫苑にならあげても良かったし」

「秀吉／／／」

あ、ヤベッ！　猛烈な殺気が後方から多数！

しばらくお待ち下さい・・・

制服、身、心、全てボロボロになって俯せに倒れている僕。よく生きてたなと思う。僕の処刑を終えたＦＦＦ団は帰って行った。

「わかりました。そういうエッチなのもオーケーなんですね。それならば私だって、容赦しませんっ！」

「この恨み晴らさずにおくべきかっ！」

「普通は女の子はいやらしい罰ゲームは嫌がるものなんじゃが」

僕はここ最近学んだことがある。

（秀吉）

（何じゃ？）

小声で話しかける。

（このメンバーにはね）

（うむ）

（普通という言葉は通用しない！）

（否定・・・・・できん・・・・・・！）

さっきのも然り。

「いきますよー！　せーのっ！」

何だか迫力に満ちている姫路さん。

『王様だーれだ！！？』

「どうやら私のようだね」

真奈か！　いったいどんな残虐非道な命令をしてくるんだ！？

「それじゃ、１～９番が１０番に、一言ずつ言いたいことを言う！」

なるほど、その１０番悲惨だな。僕は７番だけど。

「僕かよぉー！」

明久か。でも罵倒されんのは慣れてるから大丈夫だよね？

「それじゃあ、どうぞ！」

「「「「「この鈍感やろう！！」」」」」

「ぐはっ！　って僕のどこが鈍感なの！？」

女子の皆さんから『鈍感やろう』のプレゼント。確かに言ってやりたいよね。

そして僕たち男子からは。

「「「「「このバカやろう！！」」」」」

「その言葉を聞いて大して傷つかない自分か恐い！」

やっぱり明久に言うんならこれだよね～。

「くっそー！　今度こそなってやる！　せーのっ！」

『王様だーれだ！！？』

『・・・・・・』

沈黙が続く。

『王』

そのクジを見せつけているのは。

「・・・・・・！！！！！」

霧島さんだ。雄二、そうとう恐いんだね。

「すまんが急用がっ！」

「「逃がすかぁっ！」」

雄二の捕獲に成功しました。

「さあ王様、ご命令を！」

「・・・・・・うん」

明久と康太が雄二の動きを完全に封じている。

「放しやがれー！」

「・・・・・・じゃあ、雄二は今から私に何をされても、抵抗しちゃダメ」

「待てお前！　俺に何をする気なんだ！？」

それを聞いたとたん、霧島さんが雄二から目を背けて、

「そんなこと、恥ずかしくて、言えない／／／」

頬を赤らめて言った。

「こいつ変態だー！」

「・・・・・・・・・・・・・・（ブシャア）」

だがここに雄二にとって救世主が。

「じゃが霧島よ、さっきの命令は残念ながら無効じゃ。きちんと番号で宣言せんと、
ルール違反になってしまうぞい」

ならばそのルールに『参加者に暴行を加えない』を、追加して欲しい。

「そうだ、秀吉の言う通りだ！」

雄二が明久と康太の拘束から抜け出す。

「じゃあ、４番」

『・・・・・・・・・・・・』

霧島さんが言ってからさっきよりも長い沈黙が訪れる。
これは、もしかしてーーー

ダッ！

ガシッ×２！

しばらくお待ち下さい・・・

「いったい何があったのじゃろうか？」

「まるで拷問の後みたいね」

雄二がＳＭプレイでやるようなロープで縛られ方をしていた。
しかも霧島さんが口をハンカチで拭ってるんだけど？

「それじゃ、ラストー。せーのっ！」

『王様だーれだ！！？』

「よし、僕だー！」

くそう。結局一回もなれなかった。
帰ったら木下家で柚葉さんと秀俊さんを交えてやろう。

「そんじゃ、１～１０までの全員は、隠し持ってる僕らの女装写真を焼き捨てる～！」

「「「「「そ、そんなー！！！」」」」」

「それは名案じゃな！」

何で真奈以外の女子は全員反応してんの！？

「そんなの酷いです！　あんまりですー！」

「そうよアキ！　しかもそれだと、木下の写真まで燃やすことになるのよ！？」

そりゃあこの二人はガッカリするよね。

「そ、それに吉井君以外の写真だったらまだ良いんじゃないかな？」

「「（コクコク）」」

ああ。でもそうなると優子は僕の写真を持ってるということになるよね？

それならば処分してもらいたいんだけど？

「う～ん。まあ僕じゃないなら良いかな。それに、僕が持ってない秀吉の写真なんて存在しないから」

「「「やったー！」」」

「待て！　お主今何と！？」

「・・・・・・・・・・・・一安心」

「さぁ、大人しく写真を渡すんだ！」

「「いやぁぁぁー！！」」

ああ無情。

かなりカオスな状況だな。

姫路さんと島田さんの目からは光がなくなって、康太は工藤さんによって流血状態。

工藤さんは康太を流血状態にしつつ、優子と霧島さんと写真を見せ合ってて、

明久はどんな写真があったのかを確認して、その写真を秀吉と共に焼却中。

無事なのは僕と真奈だけだな。

「す、凄い光景だね」

「こんな光景は滅多に見られないよ」

「人に見られたら誤解されそう」

「手遅れだけどね」

僕らの後ろには福原先生がその後継を覗いていた。

『解散！』

番外編　王様ゲームｉｎ文月学園（後書き）

今回は雄二です。

学力強化合宿。それは、俺と明久の人生と名誉のタイムリミット。
いつものメンバーで、犯人を捜すだけだったのに、まさかあんな事になるなんて・・・・・・

次回　バカと銀色と召喚獣　『僕とＦクラスと学力強化合宿』

いくぜ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第二十七問　僕とFクラスと学力強化合宿（前書き）

夏と呼ぶには少し早いこの季節
僕らは学力強化合宿にやってきた
数え切れない星と儚げな三日月が夜を彩るこの日ーーー

「紫苑、ちょっとこっちに来て」

「優子？」

「誰もいない所で、二人だけになれる。そんな場所に行きたいの」

「え？　優子、それって・・・・・・？」

「うん。やっぱり私、我慢できないの」

「そっか、そういうことだよね・・・・・・」

「うん、だから、大人しくーーー」

僕は少し大胆になった幼なじみから・・・・・・

「一覗きをした罪を償いなさい《お仕置き》！」

「ち、違うよ！　僕たちは覗きなんかしていない！

ってその関節はそっちには曲がらなっ・・・・・・！
ちょっ！　その関節もそっちにはまがらなっ・・・・・・」
お仕置きを受けていた

「うう・・・・・・」

お仕置きが終わり部屋にただでは済まなく部屋に集合した僕たち。

「覗いたって証拠もないのに酷い目に遭ったね」

「まったくじゃ、おかげでドS真奈に虐められたのじゃ」

それってMの秀吉には嬉しいんじゃないの？

「こうなりゃ俺たちで真犯人を捕まえるぞ！」

「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

バンッ！

『犯人の証拠を押さえる為のカメラ！』

バンッ！

『犯人に密かに近付く為の服！』

ババンッ！

『そして隠密行動に長けたエキスパート！』

「・・・・・・僕が警官だったら迷わず逮捕してるね」

「・・・・・・言い逃れはできないな」

「やはりここは強行手段に出るしかないのか・・・・・・？」

「ムッツリーニ、この作戦はナシじゃ」

「・・・・・・・・・・・・っ！？」

てなわけで本編へＧＯ！

第二十七問　僕とFクラスと学力強化合宿

（　）内『私』がなぜこのような痛みを感じたのか答えなさい。

父が沈痛の面持ちで私に告げた。

『彼は今朝早く出て行った。もう忘れなさい』

その話を聞いた時、（私は身を引き裂かれるような痛みを感じた。）

彼のことはなんとも

思っていなかった。彼がどうなろうとも知ったことではなかった。

私と彼は何の関係も

ない。そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ちが揺れるのだろう。

姫路瑞希の答え

『私にとって彼は自分の半身のように大切な存在であったから』

教師のコメント

そうですね。自分の半身のように大切であった為、いなくなったことで『私』はまさに身を引き裂かれたかのような痛みを感じたということです。

氷花紫苑の答え

『私の中で彼は既にかなり大きな存在だったから』

教師のコメント

残念ですが間違いです。『身を引き裂かれるような痛み』と、書いてあるので半身という言葉がなければ点はあげられません。

吉井明久の答え

『私にとって彼は自分の下半身のように大切な存在だったから』

教師のコメント
どうして下半身に限定するのですか。

土屋康太の答え
『私にとって彼は下半身の存在だったから』

教師のコメント
その認識はあんまりだと思います。

「む？　今朝は早いのう明久」

「ホントだ。珍しいね」

「おはよう秀吉と紫苑。何か早く目が覚めちゃってね」

新学期になって二ヶ月。試験召喚戦争に敗れても同じく二ヶ月。再び仕掛けるにはまだ一ヶ月あるな。それにしても良い天気だ。これなら明日からの学力強化合宿も楽しみして良さそうだな。

「おはようじゃ。さてはお主、明日からの強化合宿で浮かれておるな？」

「あはは。そうかもしれないね」

「学力強化、つまり勉強を多量にするのに明久が楽しみって事にちょっと驚き」

卓袱台に鞄を降ろしながら言う。

「だって合宿だよ！？　皆で一緒なんだよ！？　何かあるんじゃないかって考えるとドキドキだよ！」

「そうじゃな。ワシだって胸が躍っておるしの」

「そうだね。色々と面白いことがあるかも」

とりあえず、楽しいことが起これればいいな。

「やだなぁ。胸が躍るって言うほど大きくないくせに」

「いや、ワシの胸は大きくなっては困るのじゃが・・・・・・」

優子からの制裁があるしね・・・・・・。

「でも、確かに四泊五日なんて修学旅行みたいだから楽しみでーーん？　なんだろう？」

「――――っ！！」

何だか明久の様子が変だぞ？

「うん？　どうしたんじゃ明久？」

「何かまずい物があったの？」

「ｗｈａｔ’ｓ　ｕｐ，　Ｈｉｄｅｙｏｓｈｉ　ａｎｄ　Ｓｈｉｏｎ？　Ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ｇｏｅｓ　ｓｏ　ｗｅｌｌ…」

「異常事態じゃな（だね）」

「さ、流石は秀吉と紫苑・・・・・・。僕の完璧な演技を一瞬で見破るなんて・・・・・・」

「いや、演技以前に」

「言語の問題なんだけど？」

明久がこんなになるまで隠したい物って何だろう？

「と、とにかく大したことじゃないから、見なかったことにしてくれない？」

胸の前で両手を合わせられてもなぁ。

「む、むぅ・・・・・・。明久がそう言うのであれば深くは聞かんが・・・・・・」

「まぁ秀吉がいいなら・・・・・・」

「ありがとう助かるよ！　それじゃっ！」

走って教室を出て行く明久。一体何だったんだろう？

「何だったんじゃ？」

「さぁ？」

僕たちはただ立ちつくすだけだった。

「明久。一体何があったのじゃ？」

「べ、別になんでもないよ。あははっ」

怪しいな。何か隠してるな、これは。

「ウソばっかり。さっき窓から妙な叫び声が聞こえてきたし、何か隠してるでしょ？」

「あ、美波。おはよう」

「おはようアキ。それで、何を隠しているのかしら？　まさか・・・・」

あぁ。島田さんが戦闘態勢に入ろうとしている。

「やだなぁ美波。本当に何も隠してなんか」

「まさか、またラブレターを貰ったなんて言わないわよね？」

「島田さん、今の言葉に反応してＦＦＦ団の皆さんがカッターを投擲しようとしている」

相変わらず凄い。級友なのにあっさり刺殺する意志があるなんて。
僕も散々やられたけど。

「皆、カッターはまだ早いわ。落ち着きなさい。だいたい、どう考えてもアキがラブレターなんてもらえるわけないでしょう？　隠しているのは別の物に決まっているわ」

挑発して出方を見る作戦かい島田さん？　上手く誘導して是非、明久の隠している物を暴いて欲しい。

「ふふん！　そのまさかさ！　今朝僕の靴箱にラブレターが」

ドスッ！（カッターが床に突き刺さる音）

「次は耳よ」

「心の底からごめんなさい」

キミにプライドってもんはないのかっ！？

「それじゃ、正直に答えなさい。何を隠しているの？」

「はい。実は僕が隠していたのは、きょーーー」

そこで明久は口を閉じた。きょ？　何だろ？　きょから始まる単語といえばーーーまさか！

「きょ、きょ・・・・・・」

「もしかして、脅迫文！？」

これがよく聞く『きょ』から始まる。単語っていうのはまずいのかな？

「えぇっ！？　何でわかったの！？」

「『きょ』って言ったら脅迫文じゃない？」

「絶対ドラマとかの見過ぎだと思うわ」

むむ！　失礼な。仕事柄こういう単語をよく聞くだけであって、けっして、ドラマとかの見過ぎじゃないんだぞ！

「して、その脅迫文には何て書いてあったのじゃ？」

「これには『あなたの傍にいる異性にこれ以上近づかないこと』って書いてあるんだ」

「つまり、姫路さんか島田さんにこれ以上近づくなと、いうことだね」

「え？　姫路さんと秀吉の間違いでしょ？」

「明久。金属バットを取りに行った島田が戻ってこないうちに逃げるのじゃ」

秀吉は男だという突っ込みはもう・・・・・・。というか秀吉否定しようよ・・・・・・。

「ところで何をネタに脅迫を受けておるのじゃ？」

「あ、そういえばまだ知らないや。なになに、『この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します』か。写真って、こっちの封筒に入ってるやつかな？」

三人で見てみると、そこには三枚の写真が入っていて、一枚目がメイド姿の明久。
二枚目以降は本人の希望により、見ることはできなかった。しかし、明久の自我が崩壊するレベルの物が写っていたらしい。

「明久君、木下君、氷花君、おはようございます」

「この声はーーーやっぱり姫路さんか。おはよう」

「姫路か。おはよう。今朝は遅かったんじゃな」

「はい。途中で忘れ物に気がついて一度家に帰ったので、ギリギリになっちゃいました」

「おはよう姫路さん。そういうの結構あるよね」

「丁度良い。先ほどの写真が騒ぐほどの物でもないと姫路に証明してもらうとしようかの。姫路、少々いいか？」

ふむ、そりゃいい。

「はい、何でしょうか？」

「うむ。姫路に質問なのじゃが、明久のメイド服姿の写真があった

らどう思うかのう？」

その切り込みは間違いのような・・・・・・。

「う～ん、そうですね・・・・・・」

悩む姫路さん。そりゃそうだろう。好意を寄せている人のレア女装写真があるのだとしたら悩むに違いない。

「もしそんな写真があったらーーーとりあえずスキャナーを買います」

「へ？　スキャナー？　何で？」

ごもっとも。一体何故？

「だって、その・・・・・・」

何だ？　何故モジモジしているんだ？　優子がやってくれたら可愛いかも。

「そうしないと、明久君の魅力を全世界にＷＥＢ（ウェブ）で発信できないじゃないですか・・・・・・」

流石姫路さん！　色々なところが素っ飛んだ考え方Ｄ☆Ａ☆Ｚ☆Ｅ。

「明久落ち着くのじゃ！　飛び降りなんて早まった真似をするでない！」

「話して秀吉！　僕はもう生きていける気がしないんだ！」

弄られるのにも慣れれば平気なのに。本音じゃないよね姫路さん？

「まあとりあえず康太に相談してみればーーー」

「ムッツリーニに笑われる？」

「違う！　事情を説明して脅迫犯を見つけ出してもらうのじゃ！」

「おおっ！　なるほど！」

とりあえず、僕も手伝うか。

「ナイスアドバイスだよ秀吉！　流石は僕のお嫁さんだ！」

「婿の間違いじゃろう！？」

「秀吉、今の発言を真奈に報告して来るよ」

「待って欲しいのじゃ！　真奈には、真奈には勘弁して欲しいのじゃ！」

「困った義弟君だなぁ」

「く、屈辱じゃ。紫苑に弄られるなど・・・・・・！」

「え？　それ酷くない？」

屈辱って・・・・・・。僕って秀吉からすると何々だろう？

「それじゃ、僕はムッツリーニに話があるから！」

そう言って明久は康太の所へ向かう。

「ところで、明久君のメイド姿がどうとか・・・・・・」

「ひ、姫路！　ワシと話でもせんかの！？」

姫路さんがメイド服の写真に感づく前に秀吉が足止めをする。

日頃の仕返しに真奈には後でコッソリ教えておこう。

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。ＨＲを始めるから席についてくれ」

姫路さんを足止めしていると西村が来た。とりあえず席に着く。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まぁ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題ないはずだが」

冊子が回ってきたので受け取る。

「集合時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

一応そこら辺に関しての知識はあるので迷ったりすることはないだろう。

とりあえずは時間内に着けるかだな。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

優子と真奈はリムジンバスとかで向かうのかな？　そういう派手なのは金目当てのヤツらから狙われやすいからできれば控えて欲しいよ。まあ真奈がいるから大丈夫だろうけど。

「いいか、他のクラスと違って我々Ｆクラスはーーー現地集合だからな」

『『『案内すらないのかよっ！？』』』

どこまで酷い扱いなんだＦクラス・・・・・・。

第二十七問　僕とFクラスと学力強化合宿（後書き）

今回は康太です。

姫路の弁当により仮死状態になった明久。覗きの疑いをかけられる俺たち。

いいだろう。そっちがその気なら、こちらも裸体の撮影という名の狩りを始めようじゃないか！

次回　バカと銀色と召喚獣　『火傷とお仕置きと覗きの始まり前編』

・・・・・・・・・・・・・・忍！　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第二十八問　火傷とお仕置きと覗きの始まり　前編

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌
『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつもくらしている街とは違う場所で、何か素敵なことが起きるような、そんな予感がしました』

教師のコメント
環境が変わることで良い刺激が得られたようですね。姫路さんに高校二年生という今この時しか作ることのできない思い出が沢山できることを願っています。

土屋康太の日誌
『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れた。あの感覚はなんだったのだろうか』

教師のコメント
乗り物酔いです。

坂本雄二の日誌
『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような、不思議な何かの香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだな、と感慨深く思った』

教師のコメント
隣で土屋君が吐いていなければもっと違った香りがしたかもしれませんね。

氷花紫苑の日誌
『どこかで嗅いだことのある匂いがすると思い、辺りを見回すと上手く表現できない
ドロドロの物体Aがあった。このままではいけないと思い、できるだけの処理をした。
後から来る人にこの町の匂いを勘違いされないことを祈るばかりである』

教師のコメント
清掃ご苦労様です。ですが坂本君は既に勘違いしてしまったようです。

電車内・・・

合宿所がある卯月高原へ電車で移動中。こうやって緑あふれる高原を見ていると、
平和なんだな、と感じてしまう僕はまだ未熟なのかもしれない。
まだまだ平和を脅かす存在はたくさんいるってのに・・・・・・。

「後二時間くらいはこのままじゃ。流石にすることがないのう」

ちょっと黄昏れていると秀吉が声をかけてくれた。そうだよな、僕

にはこうして守るべき存在がいるんだから黄昏れている暇なんてないよな。

「紫苑、明久たちの所が楽しそうじゃから行ってみぬか？」

「そうだね」

「ワシらも参加していいかの？」

「別にいいけど」

何やら島田さんはご立腹のようだ。話を聞くと心理テストをやっていたらしい。

「それはありがたい。・・・・・ところで明久。さっきの答えじゃが」

「ん？」

さっき？　多分黄昏れていた時にでも秀吉が聞いたのだろう。僕はそういう時耳にあまり入らないからなぁ。

「『次の色でイメージする異性を挙げて下さい』とあったのじゃが、オレンジでイメージするのは誰じゃ？」

「秀吉」

コラコラ。

「・・・・・少し、嬉しいから困る・・・・・」

あれ？　秀吉、今異性として見られてるのに否定しなかったよね？
　しかも俯きながら
顔を赤くしてるし・・・・・・。

「これは是非真奈に報告しておかねば・・・・・・」

「ま、待つのじゃ！　それは色々とまずいから勘弁して欲しいのじゃ！」

「あ、因みに康太は熟睡中だから」

「無視するでない！」

「そっとしておいた方が良さそうだね」

「うん」

何やら秀吉がギャーギャー言っているが気にしない。

「あの、私もいいですか？」

「そうだね。皆でやろうよ」

「ところで美波ちゃん。さっきの問題の『青で連想する異性』ってーーー」

「・・・・・教えない、絶対に・・・・・・」

「そ、そんなぁ・・・・・・」

これは多分『その人が今あなたの一番好意を寄せてる女性です』とかだろう。

「はぁ・・・・・。ま、いいわ。第二問いくわよ」

僕は何故本が真ん中から引き裂かれているのか疑問を持っている。

「『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つ挙げて下さい』だって。どう？」

「俺は5・6だな」　と雄二。
「ワシは2・7じゃな」　と秀吉。
「僕は1・4かな」　と明久。
「私は3・9です」　と姫路さん。
「僕は4・8だね」　これは僕。

皆が回答を言った後、島田さんがページを捲り、どんな心理テストだったのかを言う。

「えっと、『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれーーー」

「クールでシニカル」　↓雄二
「落ち着いた常識人」　↓秀吉
「死になさい」　↓明久
「温厚で慎重」　↓姫路さん
「誰にでも優しい」　↓僕

と、告げた。明久だけ罵倒だったけど。

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「ねぇ、僕だけ罵倒されてなかった？」

「温厚で慎重ですか～」

「そう言われるのは素直に嬉しい」

皆が口々に感想を述べる。

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり人には見せない本当の顔』だって。
それぞれーーー」

「公平で優しい人」　↓雄二
「色香の強い人」　↓秀吉
「惨たらしく死になさい」　↓明久
「意志の強い人」　↓姫路さん
「寂しがり屋」　↓僕

と、告げた。

「確かに秀吉の色香に何度騙されたことか・・・・・・」

「姫路は意志が強そうじゃな」

「ねぇ、僕の罵倒エスカレートしてなかった？」

「坂本君は優しいそうです」

「紫苑は意外と寂しがり屋なんだな」

何だかんだいってもこの心理テスト結構当たっている気がする。

「・・・・・・・・・・・・（トントン）」

「あ、ムッツリーニ。おはよう」

「目が覚めたようじゃな」

どうやら康太が起きたようだな。

「・・・・・・・・・・・・空腹で起きた」

「あれ？　もうそんな時間？」

言われてみれば現在１時１５分。昼時だろう。

「確かに頃合じゃの。そろそろ昼にせんか？」

「そうだね。あまり遅くなると夕飯が入らないし」

でもこの時に必殺料理人の称号を持つ姫路さんが黙っているハズもなく・・・・・・。

「あ、お昼ですね。それならーーー」

嫌な予感しかしない。

「――実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら・・・・・・」

まあこんな事になろうかと既に対策法は確認済みさ！

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまっての」

「・・・・・・・・・・調達済み」

「ゴメン。僕もなんだ。そんなわけで、栄養が不足しているであろう明久に姫路さんの栄養満点の弁当をご馳走してあげてよ」

自分たちの身の安全を確保しつつ、全てを明久に押し付ける。コレが最善の手だ。

「ごめん。実は僕もこうして惣菜パンを」

何！？　明久の癖に生意気なっ！

「おっと、手が滑った（バシッ）」

「・・・・・・・・・・足が滑った（グシャッ）」

「ああっ！　パン！　僕のパン！」

ナイスだ二人とも！

「あはは。気をつけてよ。まったく、食べ物を粗末にーーー」

「――してはいけないからな。これは俺が責任を持って処分させてもらおう。明久は姫路の弁当を分けてもらってくれ」

「「・・・・・・・・・・・・！！（ガンのくれ合い）」」

「おっと、ゴメン雄二。僕も手がーーー」

「滑らないようにきっちり掴んでおいてやるからな」

「「・・・・・・・・・・・・！！（メンチの切り合い）」」

凄いな雄二。明久の行動パターンを読み切っている。

「あの、明久君。良かったら・・・・・・」

「あ～、えっと、その～・・・・・・」

中身が中身なだけにどんなリアクションを取ったら良いかわからないという心境だろう。

「アキ。良かったらウチのお弁当も食べてみる？」

「ありがとう！　美波も分けてくれるんだね！　それならいっそのこと、
皆でお弁当を広げて少しずつ摘もうよ！」

何てこと言うんだ！

「わ、ワシらは向こうの席なので遠慮させて頂こうかの」

「・・・・・・・・・・・・！（コクコク）」

「ご、ゴメンね」

秀吉のおかげで助かった。

「ありがと秀吉。命拾いした」

小声で秀吉に話しかける。

「・・・・・・・・・・・・今度割引させてもらう」

「気にするでない二人とも。ところでムッツリーニ、新しい入荷は入っておるかの？」

こちらはこちらで楽しく食事をした。

ただ一つ問題だったのが、明久が天に召されそうな状態ということだ。

合宿所、僕たちの部屋・・・

「明久、起きたか！　良かった・・・・・・。電気ショックが効いたようだな・・・・・・」

「心配したよ」

僕たちの必死の救命活動により、明久は一命を取り留めた。

「ところで、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り替えたらしいぞ」

「じゃあ僕は先生に報告して来るよ」

先ほど明久が目覚めないと先生に言ってしまったので心配されてるかもしれないし。

部屋を出て行くとき秀吉に明久の無事を報告して臨時職員室に向かった。

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕か」

僕が報告に行ってる間に何やら会議が始まってたみたいだ。

「あ、お帰り紫苑」

「ただいま。ところで今何の会議中？」

「ムッツリーニが校内に仕掛けた小型録音機からの情報を聞いていたのじゃ」

「これで僕を脅迫している犯人の特定ができれば良かったんだけど・・・・・・」

その後、僕と秀吉は大方の説明を受けた。

「つまり今わかっているのは『犯人は女子』と『お尻に火傷の痕がある』ということだけか」

まだまだ足りないな。

「犯人を特定できる有益な情報だけど、お尻の火傷か・・・・・・。仮にスカートを捲ったとしてもわからない可能性もあるし、う～ん・・・・・・」

「赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らないだろうしなぁ・・・・・・」

最悪、優子や真奈などの知り合いの女子に見てもらうという荒技があるけど。

それはできれば使いたくないんだよな。

「そうだ！　もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

「明久。何故にワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじゃ？」

そういえばこっちに秀吉湯はあるのかな？

「それは無理だ、明久」

雄二が明久に強化合宿のしおりを投げる。

「どうして無理なのさ？」

「いや、じゃからワシは男じゃと」

「３ページ目を開いてみろ」

明久が開くしおりを一緒に見させてもらった。

～合宿所での入浴について～

・　男子ＡＢＣクラス・・・２０：００～２１：００　大浴場（男）
・　男子ＤＥＦクラス・・・２１：００～２２：００　大浴場（男）
・　女子ＡＢＣクラス・・・２０：００～２１：００　大浴場（女）
・　女子ＤＥＦクラス・・・２１：００～２２：００　大浴場（女）
・　Ｆクラス木下秀吉・・・２０：００～２１：００　個室風呂？

「・・・・・くそっ！　これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ！？」

「多分以前プールで康太が鼻血を出しすぎて汚したプールサイドについての報告をしたときに・・・・・」

こちらでは秀吉湯の代わりに個室風呂？を使うことになりそうだね。

・・・・・ん？　何やら大勢がどこかに走って向かっている様な

音がする。

「ちょっと足音がするから廊下を見てくる」

いったい何があったんだ？　様子を見ようしてドアを開けようとした次の瞬間――――

――――ドバン！

ゴスッ！

「ふぬぁぁぁあ！　顔面に直撃！　というかデジャブ！」

いつぞやと同じような痛みが！　しかし何故こんな大量の女子が押し寄せてきたんだ！？

「な、なにごとじゃ！？」

「あ、ゴメン。そこのバカ三人は抵抗を止めなさい！」

「何故お主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ・・・・・・？」

え？　常識でしょ？

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

窓を閉め、雄二が女子たちに問う。

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だってことくらいすぐにわかるというのに」

ムカツク発言をしてきたのはCクラス代表の小山さん。
今の発言から彼女は感情で動くタイプの人間だな。戦場では真っ先に死ぬタイプ。

「犯人？　犯人ってなんのことさ？」

「コレのことよ」

小山さんが明久に何かを突きつけた。

「・・・・・・・・・・・・ＣＣＤカメラと小型集合マイク」

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

つまり盗撮。まさか男子の誰かか！？　もし優子の着替えが映っていたなら処分して犯人はボコボコにしなくては・・・・・・。

「え！？　それって盗撮じゃないか！　一体誰がそんなことを」

「いや、ここに女子が攻め込んで来ている時点で僕たちがあらぬ疑いをかけられていることに気付こうよ・・・・・・」

「とぼけないで。あなたたち以外に誰がこんなことをするっていうの？」

僕としてはここは是非とも反論したいところだ。

「いるでしょ？　たくさん。他の男子やら、同性愛者さんとか」

少なくとも清水さんという同性愛者がいるし。

「そうじゃ！　まだワシらを犯人として扱うのは早いと思うぞい！」

「でもそこにいる土屋君なんかは日々盗撮してるじゃない。だからここでしていてもおかしくはないはずよ」

「違う！　いくら僕らでも限度は弁えている！　それにムッツリーニは設置する前に鼻血で倒れるから無理だ！」

「・・・・・・・・・・・・ちょっとショック」

凹んでいる場合では無いと思う。

「否定できるとでも？」

「・・・・・・否定・・・・・・できん・・・・・・っ！」

「秀吉！？」

「えぇっ！？　信頼足りなくない！？」

何故だろう。秀吉は僕たちが本気で覗きをするとでも思っているのだろうか？

幼なじみなのにあまり信頼されていなかった事実に涙が出る。

「実際、紫苑は姉上の入浴を覗いたことがあるわけじゃし・・・・・！」

「ちょっ！　それは今言っちゃいけないよね！？　しかもあれは秀

吉が声真似をしたせいでしょ！？」

「死すべし！」

「うわぁっ！？」

いきなり明久がカッターを投げてきた。

「紫苑、やっぱりキミは・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・・・異端審問会の名において処刑する」

「今仲間割れしている場合！？」

ダメだこいつら、早く何とかしないと・・・・・・。

「まさか、本当に明久君たちがこんなことしていたなんて・・・・・・」

救世主？　が現れた。

「アキ・・・・・・。信じていたのに、どうしてこんなことを・・・・・」

「「美波（島田さん）信じていたなら拷問器具は用意してこないよね？」」

言動の不一致に思わず僕と明久の声がハモる。

「姫路さん、違うんだ！本当に僕らはーーー」

「もう怒りました！　よりによってお夕飯を欲張って食べちゃった時に覗きをしようなんて・・・・・！　い、いつもはもう少しその、スリムなんですからね！？」

怒る点はそこではないと思う。

「う、ウチだってそのいつもはもう少し胸が大きいんだからね！？」

胸の大きさはそう簡単に変化しないと思う。

「それはウソ」

「皆、やっておしまい」

明久なんてことを！？

「ご、ごめんなさい！　つい咄嗟に本音が！」

明久と康太がそれぞれ石畳に、雄二はーーー

『・・・・・浮気は許さない』

『翔子待て！　落ち着ぎゃぁぁあああっ！』

既に霧島さんがアイアンクローをかましている。

「秀吉、今の内に・・・・・・」

「うむ。皆には悪いが、ワシらだけでも」

そう言って窓から逃げだそうとしたとき。

「あら、どこに行くのかしら？」

「ここは三階だよ？」

「「っ！？」」

バレた。

「紫苑、他の女子の裸を覗くってことは、浮気と受け取っていいのかしら？」

「秀吉君。罪と罰って言葉、知ってるよね？」

「ちょ！　待って優子！　ホントに僕らはやってな利き腕の関節がぁぁぁああー！」

「ま、真奈。ワシをもう少し信頼してくれても良いのでは！？」

「うんうん。向こうの部屋でゆっくり聞かせてもらうからね？　優子も移動しよ？」

「そうね」

「待って！　関節を曲げたまま歩かないで！　ああっ！　僕の体にもう一つの関節が！」

幼なじみなのに、もう少し信頼して欲しかった。

第二十八問　火傷とお仕置きと覗きの始まり　前編（後書き）

今回は紫苑です。

ここまでやられたのなら！　と、マジで覗くことを提案する雄二。
でも困っている友人を救う為、あらぬ疑いを晴らす為、僕らは女子風呂を覗かせてもらう！
そして、僕は皆に・・・・・・・

次回　バカと銀色と召喚獣　『火傷とお仕置きと覗きの始まり　後編』

いくぞ！　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第二十八問　火傷とお仕置きと覗きの始まり　後編

「なんか、今日はいつもより更に生命の危機が多いよ・・・・・・」

折檻にあってから３０分。ようやく僕らは解放された。腕が痛いです。

「酷い濡れ衣じゃったよな・・・・・・。」

「ホント勘弁して欲しいよ」

「・・・・・・・・・・・・見つかるようなヘマはしないのに」

確かに、覗くのであれば見つかるようなヘマをするつもりはない。

「雄二、大丈夫？　さっきから黙ってるけど」

「・・・・・・上等じゃねえか」

雄二が何かを決意した目で立ち上がった。

「え？　雄二。どうしたの？」

「どうせここまでされたんだ。本当にやってやろうじゃねぇか」

え？　まさか、この状況で？

「もしかして、覗き？」

「ああ、そうだ。あっちがそう来るなら、本当に覗いてやろうじゃねぇか！」

マジデスカ？　まぁ優子の裸に興味が無い訳じゃないし・・・・・・。

「雄二。そんなに霧島さんの裸が見たいなら、個人的にお願いしたらいいんじゃない？」

確かに。

「バ、バカを言うな！　翔子の裸なんかに興味があるか！」

やっぱり雄二って霧島さん関係だと弱く思える。

「ふむ。先ほどの話に出てきた尻に火傷のある犯人探しかの？」

「そうだ。流石に覗きなんて真似はやりすぎだと思って遠慮していたが・・・・・向こうがあんな態度で来るなら遠慮は無用だ。思う存分覗いて犯人を見つけてやろうじゃないか」

覗くことに対しては抵抗があるけど、友人を救うという点では・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・さっきのカメラとマイクは、脅迫犯の物と同じだった」

「なんじゃと？　それは本当かの、ムッツリーニ？」

「・・・・・・・・・・・・間違いない」

「そうか。それは嬉しい事実だな」

「そうじゃな」

「うん」

「・・・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

「つまり、どういうこと？」

えぇ・・・・・・。流石にそれくらいわかろうよ・・・・・・。

「流石明久、この程度の話にも付いてこられなかったか。つまり、こういうことだ」

雄二が明久の為に紙とペンで説明をする。今回図は省略する。
（図が見たい人は、『バカとテストと召喚獣第３巻』の５９ページを見てね☆）

「一言で言うと、この覗き騒動の真犯人が火傷の痕がある人、ってこと」

「ああ、なるほど！　つまりその真犯人を捕まえれば全て解決って事だね！？」

「これでもう迷う余地はないな」

「そうだね！　やってやろう！」

ゴメン優子。覗きをすることになりそうです。

「ってそれにしても、相変わらず雄二は霧島さんのことになるとやる気が凄いよね。どうしてそこまで頑張るのかって疑問に思うくらいだよ」

他のFクラスの野郎共なら泣いて喜びそうなのに・・・・・・。

「・・・・・実はこの前、いつものように翔子にクスリをかがされて気を失ったんだが」

えぇ・・・・・・。何その前置き。

「ごめん。その前置きから既にイロイロ厳しいと思う」

「目が覚めたらヤツの家に拉致られていたんだ」

「ふぅん。そこで霧島さんの両親と挨拶をしたとか？」

霧島さんは一途だからなぁ。でもこれってもはやヤンデレじゃね？

「既に雄二の部屋が用意されていたとか？」

「紫苑、笑えない冗談はよせ」

あれ？　雄二が震えている。もしや図星？

「あんな台詞を聞かされたら、間違いなく俺は、俺の未来は・・・・

・・！」

「そ、そうとなれば、すぐにでも向かわねば風呂の時間が終わってしまうぞ！」

「・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「善は急げっってね」

「え？　皆手伝ってくれるの？」

「うむ。友人の危機なのじゃ。当然じゃろう」

「・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「もち」

でも、ちょっと厳しいかな？　女子風呂到達は。

「・・・・・・雄二の台詞には責任があるしのう・・・・・・」

え？　何それ？　僕知らないよ？

「・・・・・・・・・・・・女子風呂の場所なら確認済み」

流石康太！　さてはこうならなくても初めから覗く気満々だったな？

「よし。雄二起きて！　覗きに行くよ！（ボゴッ）」

「ぐふっ！　――――はっ！？」

うわぁ。

「明久も雄二の治し方が手慣れてきたのう」

「・・・・・・・・・・・・後半組の入浴時間、残り四十分」

確かに現在の時刻は九時二十分だ。

「時間がないね。急ごう」

「そうだな。走るか」

「了解じゃ」

足音をたてない為に靴下で行動するのは正しいと思う。それにしても人がいないなぁ。

男女ともに入浴時間だったとはいえ、誰にも会わなかったのは不幸中の幸いというやつだ。

「・・・・・・・・・・・・この階段を降りて、しばらく廊下を進めば女子風呂」

僕たちの部屋は合宿所の三階。大浴場は地下一階。まず地下という時点で外部から覗くことはできない。そこは男子のこういった行動を考えてのことだろう。まったくやっかいな形状にしてくれたよ。

もし僕たちの覗きがこの一階で成功し、かつ真犯人を特定することに成功したら良いんだが、もし失敗した場合、次からは覗くのに一手間も二手間も掛かることになるな。

「よし。時間がない。一気に突っ込むぞ」

目的地に到着。この場所での目的は女子風呂に進入し、お尻に火傷の痕がある生徒を発見すること。

「・・・・・・・・・・・・（（（（コクリ））））」

僕たちはアイコンタクトで黙って頷く。

その後僕がやや先行し、女子風呂へと続く廊下を駆ける。

壁を背にし、次の角の様子を窺う。するとそこには化学が担当の布施先生がいた。

覗き騒ぎがあったのだから教師側としては警備を着けて置くくらいするだろう。

だが布施先生が今いる場所は階段から降りて二回曲がったやや短い通路だ。

運良く他の見張りはいない。わざわざ正々堂々と勝負し、時間稼ぎや援軍を呼ばれたのではかなわない。ここは僕が行って気絶させるのが得策だろう。

「・・・・・・（スッ）」

僕が後ろの四人に待機するように指示を出す。そして布施先生がいる廊下に飛び出す。

後ろを向いていた先生に背後から手刀を食らわし、気絶させる。

四人に合図をして再び壁を背にして次の廊下の様子を窺う。

「出てきなよ。紫苑」

「っ！」

しまった、見つかった。でもこの声は・・・・・・。

「真奈か」

僕は姿を現す。僕が見つかったならば恐らく後ろの四人も見つかっているだろう。
しかもその廊下には真奈だけでなく、保健体育の大島先生、さらには西村もいた。
この布陣とこの戦力では厳しいな・・・・・・！

「紫苑がいるんだからいつもの皆もいるんでしょ？　バレてるんだから出てきなよ。
大島先生。土屋君は任せます。西村先生、後ろをお願いしますね？」

「わかっている」

四人も姿を現す。

「まさかキミがいるとは思わなかったよ。いるとしても西村先生だけかと思ったのに」

「あのね、私が紫苑の行動パターンを読めないとでも思ってるの？
一応パートナーなんだからわかって当然でしょ？」

「確かにな」

苦笑しながら言う。

「それよりも秀吉君」

「は、はいっ！」

何故か敬語になってるよ？

「どうしてこんなことしているのカナ～？」

「そ、その、これはじゃな・・・・・・！」

「もしかして私の裸を見たいの？」

「なっ！？　べべべ別にそんなことはない！／／／」

両手を顔の前で振って否定のポーズを取っているが、まったく説得力がない。

「あはは！　それじゃバレバレだよ秀吉君」

「あう、あう／／／」

口をパクパクさせている秀吉。ここまで乱れた秀吉は久しぶりに見たような気がする。

真奈が後ろ向きちょっと恥ずかしそうに頬を赤らめて顔の半分だけが見えるようなくらい、

振り返りーーー

「そんなに見たいのならーーー今度一緒にお風呂入ろっか？」

かなり大胆な発言をした。相変わらず積極的だなぁ。

「「・・・・・・・・・・・・（（ブシャァアアッ））！！」」

ああぁぁ！　秀吉と康太が！

「よし！　大島先生今です！　今の土屋君なら簡単に倒せるはずです！」

「あ、あぁ」

大島先生も若干苦笑い。って、笑っている場合ではない。
戦局上、数の上での利は無くなったことになる。

「どうする紫苑？　秀吉君はノックアウト。土屋君には大島先生がトドメを刺しに行った。
それに比べこっちはまだ三人が健在。しかも一人はあの西村先生だよ？」

「やるだけやるさ。明久！　雄二！　真奈は僕が食い止めるから二人は先に行け！」

「宮野さんは女の子だよ！？　相手をするなら鉄人を「あら。女の子だって強いんだよ？」えっ！？」

真奈がいとも簡単に明久の背後に周り顔に手を添える。

「なっ！？　い、いつの間に！？」

「全然見えなかった・・・・・！」

そう、コレが僕たちの実力。

「とまあこんな風に真奈も相当強いから今回西村先生は任せる。明久の召喚獣ならまだ勝機があるかもしれないし」

「先に進むにしても、これじゃあ・・・・・・」

「いいよ。紫苑に免じて通してあげる」

真奈が明久から離れて明久と雄二は先へ行く。

「どうする？　一戦交える？」

「面倒だしヤダ」

「ていうか、もう私が戦う意味はなくなっちゃったし。それに西村に任せておけば大丈夫でしょ？」

「確かに、な」

案の定。明久と雄二は西村に破れ鼻血で負傷？　した秀吉と康太も大島先生に連れてこられた。その後、僕たちは廊下で英語の反省文を書かされる羽目になった。

僕たちの部屋・・・

「やっと終わった・・・・・・」

「お疲れ様」

全員が反省文を書き終わり、現在布団を敷いてねる準備をしていたところだ。

「おい紫苑。ようやく全員揃ったんだ。これで聞かせてくれるんだろう？」

「紫苑、本当に話すのかの？」

秀吉が心配そうに聞いてくる。

「え？　何の話？」

「僕や真奈についての話さ」

「紫苑や宮野さんの？」

「・・・・・・・・・・・・紫苑と宮野の動き、常人の比じゃない」

「確かに、尋常じゃないけど、それがどうしたの？」

「さっき宮野が紫苑に言っていたろ？　『パートナー』って。以前紫苑は宮野とは小さい頃に会っただけだと言っていたがそれだけでパートナーと言うのはおかしい。
それに宮野は体育の成績は普通だったはずだ。なのにあの動き。何か隠しているんじゃないかと思ってな。まあ大したことではないだろうがな」

「そうだったっけ？」

「うん。雄二の言う通りだ。僕と真奈は隠している。重大な秘密を。でも元々僕は皆には話そうと思っていたから良いんだけどね。でも、約束して欲しい。今から言うことは君たちと優子たち以外には絶対に喋らないで欲しい」

「・・・・・・（（（コクリ）））」

つまり、僕を含め、いつもの十一人以外には喋らないで欲しいということだ。

「ありがとう。じゃあ話すよ。まず僕の三つの重大な秘密を教えるよ。まず一つ目がーーー
僕が『国家機密情報局員だということ』」

「『国家機密情報局』？」

「それについての説明は後でするね。二つ目は『僕の本名』」

「本名？　『氷花紫苑』じゃないの？」

「それはコードネーム。僕が国家機密情報局に所属しているからね。じゃあ改めて自己紹介のしようか」

さて、ちょっと長話になるかな。

「はじめまして、僕の名前は『蒼月（そうづき）　銀（ぎん）』

国家機密情報局Sランク、今の任務は『文月学園とその周辺の防衛』をやっているんだ」

第二十八問　火傷とお仕置きと覗きの始まり　後編（後書き）

今回は秀吉です。

紫苑とワシら家族の過去。まさか友人とはいえ、誰かに語ることになるとはのう。

まだあの時までは誰もが笑えて、幸せだったのかもしれぬに・・・・・。

次回　バカと銀色と召喚獣　『僕と木下姉弟と過去の記憶』

いくぞい！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第二十九問　僕と木下姉弟と過去の記憶（前書き）

更新おくれてすみません！

只今学校がテスト期間なのでこれからも数回、更新が遅れると思います。

ご了承下さい。でも気長に待っていてくださると、幸いです。

もう一つ。

今回からはじまる過去編を執筆するにあたって、誠に勝手ながら、女子のレギュラーメンバー六人を一緒の部屋という設定にさせてもらいました。

（霧島翔子、木下優子、工藤愛子、宮野真奈（偽名）、姫路瑞希、島田美波）です

そこのところを読者様方の広い心で、大目に見ていただけると嬉しいです。

第二十九問　僕と木下姉弟と過去の記憶

問　以下の問いに答えなさい。
せき髄動物に共通していることとは何でしょうか。

姫路瑞希の答え
『背骨がある』

教師のコメント
正解です。ほかにも「ヘモグロビンを含む血液の持つ」などの特徴がありますが、
一部例外もあるので注意が必要ですね。

氷花紫苑の答え
『皆が皆辛い経験をしたり、悲しい過去を背負って生きている』

教師のコメント
せき髄関係ないじゃないですか。

木下秀吉の答え
『関節を理不尽に曲げられる』

教師のコメント
この答えからは哀愁を感じるのですが何故でしょう。

吉井明久の答え
『背骨が折れる』

教師のコメント

手遅れになる前に、タップ（降参）した方がよいと思います。

男子が補習を受けている頃の女子部屋・・・

優子ｓｉｄｅ

「まさか本当に来るとは思ってなかったよ」

アタシたちの部屋の全員が入浴を終えて、雑談をしていると真奈が報告をしてきた。
そう、本当に覗きに来たんだね。紫苑、明日が楽しみね？

「・・・・・浮気は許さない。明日、お仕置きをする必要があるかも」

「そうですよね。お仕置きが必要ですよね」

「そうよねアキにもいい加減学習してもらわなくてはね」

『前書きでも説明しているが、この部屋には都合良くいつもの女子メンバーが揃っているのだ！』

え？　何、上の・・・・・。変な電波を受信しちゃったのかしら？
それよりも確かに紫苑の浮気は許せないわね。代表から浮気対策を教えてもらおうかしら？

「ねえねえ、ところで優子さぁ。紫苑君とはどこまでいったの？」

愛子がアタシに聞いてきた。嫌な予感が・・・・・・。

「え、どこまでと言われても・・・・・・」

「もしかしてもう大人の階段を上っちゃった？」

「そ、そ、そんなことまでしてないわよ！／／／」

うぅ。だって最近だとアタシに触れようとすらしないし・・・・・・。

「え？　そうだったの？　意外だなぁ。
一緒のベットに寝ているんだから紫苑が優子を襲っているかと思ってたけど」

「えぇ！？　優子もしかして氷花と一緒に寝ているの！？」

「う、うん・・・・・・／／／」

もう！　真奈のバカ！　皆に知られちゃったじゃない！

「うわ～。それで優子に手を出さないなんて、相当な奥手だね。もしくはーーー」

「ただのヘタレか」

愛子と真奈が今の紫苑を率直に言う。
アタシとしてはどちらかと言うと前者であって欲しいけど。

「・・・・・雄二も見習うべき」

「あの、優子ちゃん。一緒に住んでいるとどんなことがありますか？

今後の参考に聞いておきたいんですが・・・・・・」

瑞希が聞いてきた。こうなったら話さなくてはいけない雰囲気になってしまったらしい。

「特に凄いようなことはないけど。でも悩みなら生まれてくるかな」

「どんな？」

「一緒のベットに寝てるのはいいんだけど、紫苑が何もしてこないのよ」

「つまり、抱きついて寝たりするのも優子からだし、紫苑が抱き返してくれない、と」

「それに最近キスの回数が減ったような気がするし。アタシって魅力ないのかな・・・・・・」

最近真面目に悩んでいる。

「それ絶対氷花君我慢してるよね」

「うん。多分キスしたら理性が無くなるとか考えてるんじゃない？」

「え？」

「まあ要するに、氷花君と保健体育の実技がしたいなら、優子が襲っちゃえばいい！
って話！」

「押し倒すとかね。絶対紫苑は優子のことを意識してる。自分から理性を破らないなら、
こっちからその理性を壊しちゃえばいいのよ！」

こういう話になると愛子と真奈のテンションがやや高くなることが最近わかった。

「そ、そういうもの？」

「「うん！」」

やっぱり友人に相談しておいて良かった。家に帰ったら紫苑を・・・・。
それと家で紫苑に言われたけど、
アレを話していいって事は皆の中でも『氷花　紫苑』ではなく、『蒼月　銀』でありたいってことよね。
だったらアタシはその願いを叶えてあげるだけ。アタシにできることはそれくらいしかないから。

「皆、ちょっといいかしら？」

「・・・・・何？」

「今ここにいる皆は、アタシにとってかけがいのない大切な人たちよ。そして、信頼できる」

「急に改まってどうしたの？」

「今から皆に、昔話を聞いて欲しいの。アタシと秀吉と紫苑の。いいえ、『蒼月　銀』のーーー」

男子部屋・・・

銀ｓｉｄｅ

「蒼月、銀・・・・・・・？」

皆呆然としている。まあ当然かもしれないな。

「そう。それが僕の本名」

「そうか・・・・・・。でも、何で俺たちに話したんだ？　コードネームっていうのは普通教えない物だろ？」

雄二が疑問をぶつけてくる。

「皆と距離があるような気がするんだ。氷花紫苑のままだと。見えない壁がさ。それが嫌になったんだ。僕は皆の前では本来の自分でいたいから」

「秘密にしていたのは悪かったと思っておる。じゃから銀のことを責めないでやって欲しいんじゃ」

「秀吉・・・・・・」

秀吉が僕を庇うような事を言ってくれた。嬉しいよ。

「・・・・・・・・・・・・俺たちが銀のことを責めるハズがない」

「寧ろその逆だよ。嬉しいんだ。僕たちにその秘密を教えてくれて」

「全部受け止めてやるからよ」

「ありがとう。皆」

やっぱり、僕は皆が大好きだ。

「そして三つ目の秘密、『僕の過去について』だ」

「銀の過去・・・・・・」

「ちょっと長話になるけど、聞いてくれる?」

「「「もち!」」」

「悪いね。じゃあ話そうか。僕の過去――」

約11年前、僕の五歳の誕生日。その年に両親がくれたのは『孤独』

その日は嵐だった。まだ幼かった僕には何と表現して良いかわからない感情があった。
多分それは嫌な予感ってヤツだったと思う。
そしてその日、両親は帰って来なかった。

翌日、僕は両親が自分たちにもしもの時があった場合は自分たちの息子を頼むと、頼んであったらしい木下家に引き取られ、育てられることになった。
後から知ったんだけど、木下家の両親は国家機密情報局のことを知ってたみたい。
僕の両親が話したんだろうけど。
木下家では僕の名前は『蒼月　銀』のままで良いらしい。両親のことを殆ど覚えていなく、
形見と呼べる物を持っていなかった僕の為に両親の姓のあえて使わせてくれたんだと思う。

木下家に来た夜・・・

過去の銀ｓｉｄｅ

僕は月を見ていた。何故だか昔から月を見ると落ち着くから。

「何してるの？」

後ろから声があったので振り返ってみると、そこにはこの家の娘であろう女の子がいた。

「何してるの？」

女の子が近づいてきてもう一度聞いてきた。

「月を見てるんだ」

「お月様を？」

「うん。落ち着くから」

「へぇ～」

その女の子は相槌をうった後、僕の隣に座った。

「今日は三日月だね」

「うん」

「そういえば、キミの名前は？」

「僕？　僕は『蒼月　銀』だよ」

「アタシは『木下　優子』よろしくね？　お友達になろう？」

お友達？　何で僕なんかと？

「僕と？」

「うん」

でも僕には友達と呼べる人はいないし、ちょっと嬉しいし。

「いいよ！　なろう！？」

「じゃあ今からアタシたちはお友達ね！」

初めての友達。そもそも友達ってどんなことするんだろう？

すると後ろから、

「お姉ちゃん、後、誰だっけ？」

同じような、いや、まったく同じ顔の双子が来た。

「あ！　秀吉！　良いところに来たわね」

すると優子ちゃんが秀吉君？　ちゃん？　を僕の前まで引っ張ってきた。

「この子は秀吉。アタシの弟よ」

「よ、よろしく」

「あ、うん。改めてはじめまして」

男の子だったんだ。危うくちゃん付けで呼ぶところだったよ。

「秀吉、彼は銀。『蒼月　銀』よ。アタシのお友達」

「もうお友達になったんだね」

「だからあんたも自己紹介してお友達になりなさい」

「う、うん」

何だか緊張した感じで言う。

「僕は秀吉。『木下　秀吉』。優子お姉ちゃんとは双子の弟なんだ。よろしくね？」

「うん。よろしく」

一日で二人目もお友達ができた。いままでになかったことだよ。

その日は三人で騒いで遊んでいたから疲れて寝てしまっていたらしい。

柚葉さんが毛布を掛けてくれたんだろう。

放課後の小学校・・・

この時六年生。その日は僕と秀君と優子ちゃんで帰っていた。

（補足だけど、僕は秀吉のことを秀君。優子のことを優ちゃんと呼んでいる）

だけど優ちゃんが何故かご機嫌斜めだった。

「むぅ～」

「どうしたの優ちゃん？」

「良いわよね、銀は。よくモテて」

「えっ？」

この頃僕は女子から告白されるようになった。今日も告白された。
居候させてもらっている身の僕としては恋なんて許されないんだろうけど・・・・・・
ソンな訳で、告白してくれる女子には悪いけど告白の件は全てお断りさせてもらっている。

「まったくだよ。僕なんかお姉ちゃん目当ての男子に間違われて告白されて・・・・・・」

「それだったらまだ良いじゃない！　アタシなんかアンタ目当ての男子に間違われて告白されてんよ！？大体男のアンタに何で男子は告白しようとしてるのよ！？
それに何で男のアンタと女のアタシを見間違うのよ！？　格好だって違うのを選んで着て来ているに！」

どうやら姉弟揃って同じ悩みをお持ちのようで・・・・・・
しかも秀君に男子が告白とはまた・・・・・・

「それに比べて、銀は・・・・・・。はぁ・・・・・・」

「な、何？」

優ちゃんに溜め息をつかれた。

「銀が羨ましいよ。僕だって女子に告白されてみたいよ・・・・・・」

「じゃあさ秀君。好きな人はいるの？」

「僕の好きな人？　う～ん、そういえばいないなぁ～」

「それじゃあ意味無いよ。告白されたいんだったらまず恋をしないと」

「そういう銀はどうなのよ？　お目当ての女の子はいたの？」

唐突に優ちゃんが聞いてきた。

「いや、唯でさえ僕は居候の身なんだ。恋なんて許されないさ」

「でも銀を狙ってる女の子いっぱいいるわよ？
秀才で運動神経抜群。人も良く家事もそつなくこなす。威張ったりしないし、自惚れない。
コレ以上ないって位ね」

確かにこの頃家事の手伝いをしようと柚葉さんに教えてもらって手伝ったりしているが、
まだまだ全然ヘタッピだ。それに秀才といわれても優ちゃんや秀君だって１００点取ったりしてるじゃないか。

「それに居候しているなんてアタシたちは思っていないけど？　何をしようと銀の自由よ？　恋の一つや二つしてみたら？」

「ううん。好きな人に関しては本当にいないんだ」

「じゃあ銀の理想の女子ってどんなの？」

秀君が聞いてきた。

「え？　急に言われてもな・・・・・・。強いて言うなら、こんな僕でも好きでいてくれる人かな？」

「それっておかしくない？　銀のことを好きになったんなら銀のことを好きでいるのが当たり前でしょ？」

「そうじゃなくて、本当の意味で僕を理解していて、尚かつ僕を好きでいてくれる人が良いんだよ。本当の僕は良い人でも何でもない。唯の何にもできないダメ人間さ」

「それじゃあ銀より何もできないアタシたちは何なのよ・・・・・・」

「あっ！　ゴメン！　そんなつもりで言ったんじゃないんだ！　まあもう一つ理由があるんだけどね」

「理由？　どんなの？」

「世話の焼ける幼なじみがいるっていうこと」

フフン、とコミックでは効果音が出る感じに言ってみた。

「あ！　何よそれー！　バカな秀吉はまだしもアタシまで言うとはどういう意味よ！？」

「そうだよ！　家ではずぼらなお姉ちゃんはまだしも僕まで言われる筋合いはないよ！？」

「「何です（だ）って!?」」

ああ。いつも通り始まった。

「そういうところが世話掛かるんだってば」

「「ぐっ！」」

二人を宥めて家への帰路を急ぐ。ヤレヤレ、当分恋なんてできそうにないな。

翌日・・・

いつものように朝ご飯の用意を手伝っている。

柚葉さんは「大丈夫だからゆっくりしてなさい」と言ってくれるけどそうはいかない。

そうこうしている間に秀君が降りてきた。

「おはよう秀君」

「うん・・・・・じゃなかった。うむ、おはようじゃ！　銀、母上」

？　何故に爺言葉？

「昨夜色々考えたんじゃが、男しかしない喋り方をすれば男として見てもらえるじゃろうと思ったんじゃ！」

名案？　なのか？

「あらあら、喋り方を変えるのはいいけど、すぐには慣れないわよ？」

「そこのところは重々承知しておる。大丈夫じゃ」

「ならいいけど」

柚葉さんはそれほど驚いていないようだな。
まあそれほど驚くことでもないのかもしれないな。

「銀～。優子を起こして来てくれる？」

「は～い」

味噌汁を茶碗にすくいながら柚葉さんが僕に言って来た。
そこで僕は優ちゃんの寝室へ入った。

「ｚｚｚ・・・・・」

それはまぁ寝てますね。でもパジャマを脱ぎかけたままはどうかと思うよ？
学校では早くも女性の体に興味を持ち始めた連中もいるが、僕はそんなのには興味が沸かなかったので受け流していた。なので優ちゃんのこの姿にも大して慌てなかった。
それは僕がまだ子供だったからだと思うけど。

「優ちゃん、優ちゃん。起きて。優ちゃん、朝ご飯だよ」

「ううん・・・・・」

多少揺さぶってみたけれどうめき声をあげるだけだ。どうやって優ちゃんを起こしているのか今度聞いておこう。

「もうちょっとだけ・・・・・」

「ダメだよ。もうできてるんだから」

もう一度揺さぶってみた。するとーーー

「う～る～さ～い～！」

「うをっ！？」

急に腕を引っ張られて優ちゃんのベットに引きずり込まれた。まぁ問題はないけどね。

「うっ、・・・・・ん・・・・・？」

ここで優ちゃんが起きなければ。

「「・・・・・」」

顔を見合わせて互いに沈黙を破らない。

「へ、変態っ！」

「好きで入った訳じゃないんだけど!?　というか優ちゃん僕の関節を取って何をする気!?
って、ちょっ、その関節はそっちには曲がらなっ・・・・・・!」

最近関節技を柚葉さんから教わっているらしい。

そして中学生になった。半年くらい経ち、学校にも慣れてきたこの頃から、
秀吉は完全に女の子扱いだったんだよね。どうやら今日も告白されたようで・・・・・・

「「はぁ・・・・・・」」

もうこの溜め息にも見られてしまったのはマズいと思う。

「悩みはまた告白に関して?」

「「そうな（んじゃ）のよ!!」」

今日も秀吉が（男子から）告白された事や、優子が秀吉と間違われたこととかなどの愚痴を聞いた。　→（ココ重要!　テストに出ます）

「「「ただいま〜!」」」

「あら、お帰り。今日は早かったのね」

玄関を開けると、そこには柚葉さんがいて出迎えてくれた。

「今日は４５分授業で、一斉下校をしたんだ」

「あ～。そうよね。最近物騒だものね」

「今朝のＨＲで決まったんじゃ」

「だからこっちにも連絡が来てないのね」

「きっと昨日のニュースを教師が見て、今朝に緊急会議を開いたんじゃない？」

「やっぱりあのニュースが原因かしらね」

そのニュースを要約すると『昨夜、会社員の男性三名が暴力団かヤクザに絡まれて病院送りになった。しかも身ぐるみ剥がされて財布を抜き取られていた』というものだ。

「秀俊さんは大丈夫ですか？」

「ええ。多少帰りが遅くなってもいいから大通りの真ん中を歩いて帰ってくるように言っておいたわ」

僕たちはリビングに寛ぎだす。

「お父さんも酒は家だけにいてもらわないとね」

「そうね。ほら！　洗い物はココに置いて、一旦部屋に行って制服から着替えて来なさい」

「「「は〜い」」」

そう言って僕と秀吉は同じ部屋に、優子は別室の自分の部屋へ戻って行った。

数分後、再びリビングに着替えて集合した。

「あなたたち丁度いいタイミングで帰って来たわね。今から今夜の夕食の買い物に行こうと思ってたのよ」

うっ！　帰って来るタイミングを見誤ったか！？

「じゃあ、僕が行って来ます」

四行前ではあんなことを思ってはいるが、ココはやはり僕が行くべきだろう。

「あら、ありがとね銀。助かるわ。あなたたちは？」

「「面倒くさい〜」」

だよね。

「まったく。あなたたちは、もう。少しは銀を見習ったら？」

「そんなこと言われてもさ〜」

優子が覇気のない返事をする。因みに中学に入ってから呼び方は優子と秀吉にしている。

「はぁ。そんなにダラけてると嫁の貰い手いなくなるわよ？」

「大丈夫、大丈夫」

「はっはっは。母上、残念ながらもう手遅れじゃと・・・・・ちょっ！？　姉上！？
す、すまぬ！　ワシが、ワシが悪かった！　だからその関節をそんな方向にわぁぁあーーー！！」

秀吉、ご愁傷様。

「ごめんね銀。二人はあんな調子だから一人で行ける？」

「勿論です。とりあえすメモをもらえますか？」

「はい。コレが買って来て欲しい物のメモと代金よ。多めに渡しておくからね。
余ったら好きな物買っちゃって良いからね。暗くなる前に帰って来なさいよ？」

「了解です。では行って来ます」

僕はそう行って家を出た。出るときにも
『姉上！　もういい加減勘弁して欲しいのじゃ！　こんなに暴力的ではさらに貰い手が・・・・・っ！　し、しまっ！　つい口が滑っ・・・・・・！　ぎゃぁぁあーーー！』

うん。平和だね。
とりあえずコレで良かったと思う。最悪、例の暴力団やらヤクザに絡まれても、あの二人を捲き込まずに済むからな。

しかし、優子もいつか誰かと結婚するんだよな。幼なじみとして良い人であって欲しいと願うばかりだ。

ふう。買い物は終了！
５００円ちょい余ったな。別に買いたい物は無いんだよな。どうするか？
そういえば二人とも頻繁に間違われて困ってるんだろうな。
まったく！　優子と秀吉を間違えるなよ！　少なくとも絶対そんなヤツには優子を任せられないな。
間違われないようにする何か良い手があると良いんだけどもーーーあっ！　良い物見っけた！

木下家・・・

「ただいま」

「お帰りなさい」

靴を脱ぎ、買って来た物を柚葉さんに渡す。

「ごめんなさい柚葉さん。おつりがこれだけに・・・・・・」

「いいのよいいのよ！　何か欲しい物があったんでしょ？」

「はい」

「よかった。銀ったらあんまり欲しい物とか言わないんだもの！
でも今回でちょっと安心しちゃった！」

そう言ってくれると、僕も罪悪感を感じずに済むのでありがたい。

「あの、秀吉と優子は？」

「二人なら部屋にいると思うけど？　ともかく、ありがとね」

「いえ、それでは」

僕は二階に向かった。
そして優子に部屋の前に立つ。

「優子～いる？」

「秀吉もいるわよ」

返事はすぐに返ってきた。

「丁度良かった。入るよ？」

「えぇ」

入ってみると二人とも寝っ転がっていた。そこで二人はゲームをしていたみたいだ。

「お帰り」

「すまんのう」

「気にしないで。こっちも良い物買えたから」

「何買ったの？」

「コレだよ。二人とも、手を出して」

「「？」」

何だかわからないといった表情の二人はとりあえず手を出す。

「はい」

僕は二人の手の上にある物を乗せた。

「コレは？」

「髪留めさ。よくよく考えたら二人とも髪型も似てるからさ。髪型変えたら少しでも効果があるんじゃないかと思ってね。安物だけど許してね」

喜んでくれると良いんだけど・・・・・・

「ありがとう銀！　大切にするね！」

「明日から早速着けてみるのじゃ！」

二人は嬉しそうに受け取ってくれた。こっちもその笑顔で癒される。

現在の男子部屋・・・

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「へぇ～。いつも身に着けてるその髪留めは銀があげた物だったんだ」

「久しぶりに会ったときにまだ着けていてくれたときは嬉しかったなぁ」

「当たり前じゃろ？　お主がワシらに初めて送ってくれたプレゼントじゃったからな」

「安物だったから捨てても良かったのに」

「そんなことするわけ無かろう？」

過去・・・

過去の優子　ｓｉｄｅ

２月１４日それは女の子を後押ししてくれる、女の子の為のイベント！

アタシは決めた。今年のバレンタインデーに、銀に告白する！

アタシが銀のことが好きだって感じ始めたのは今年の始め。

始めはこの気持ちが何なのかわからなかったからお母さんに聞いてｌｌｌ

『フフ、それは恋ね。』

『えっ！　コレが、恋。人を好きになるってこと・・・・・・。ってじゃあアタシはーーー！』

『そう！　何と優子は、銀に恋をしていたのだぁー！』

『えぇー！？』

『うんうん。良かった良かった。やっと優子にも好きな人ができたのね。母さん嬉しいわ』

『う、うん／／／』

『もう！　赤くなっちゃって～！　そういう顔は銀の前でしなさい』

『わ、わかった／／／』

『そういえば銀ってかなりモテるんでしょ？』

『うん』

『だったら優子かなり有利じゃない？』

『え？　何で？』

『だってまず一緒に住んでるのよ！？　コレは他の女の子に対して大きなアドバンテージになるわよ！』

『？』

『わからないの？　まず、一緒に住んでいるってことは、相手のことをよく知っているってことよ？
つまり、銀の好みや、性格を一番知っているのは優子ってこと』

『あっ！』

『それだけじゃないわ！　他にも一緒に住んでいると会う機会や話す機会が必然的に
多くなるから、アピールするチャンスが増えるってこと！　さらに、一緒に住んでいるならではの
イベントが沢山あるでしょ？　それを活かすのよ！
銀だってお年頃なんだから女の子に興味が無いわけ無いんだから！
ガンガン、アピールしていきなさい！　お母さんも手伝うから』

『うん！』

銀を除く家族は大騒ぎになったわ。
でもやっぱりちょっと不安が残るのよね。
というわけで・・・・・・

「いったい何用じゃ姉上？」

「別に大したことではないわ。ちょっと頼み事をするだけよ」

そう。パシリとして使っている我が愚弟に協力してもらうのよ。

「はぁ。それで、今回は何を買ってくれば良いのかの？」

「ちょっと待ちなさい。何で既にアタシが何かを買いに行かせることが前提なのよ？」

「んむ？　違うのかの？」

「違うわよ・・・・・・・」

コ、コイツ・・・・・・！

「ほほう。姉上がワシをパシらせないとは珍しいのう。では一体頼みとは何なのじゃ？」

「うん。ちょっと、その・・・・・・ねぇ？」

「いや、ハッキリ言って貰わぬとわからんのじゃが・・・・・・・」

「その・・・・・・銀が、アタシのことをどう思っているのかなあ、って」

「はい？」

だ、だって気になるじゃない。何年も一緒に住んでる割には特に気がある素振りを見せてくれないし・・・・・・。まあ見せてないだけかもしれないけど。

「なるほど。つまり銀が姉上のことをどう思っているかを聞いてくれば良いのじゃな？」

「そ、そうよ／／／」

「姉上も意外と恋する乙女、みたいな一面があったんじゃのう」

「な、何ですって!?」

それってアタシが恋しているようには見えていないってこと!?

「冗談じゃよ姉上。まぁ、その件についてはワシも気になっておったから今日辺りに聞いてみようと思っていたところじゃったし、丁度良い機会じゃな。それでは、聞いて来る故、暫し待っているのじゃ」

「た、頼んだわよ?」

「任せておくのじゃ」

こういう時ってあの愚弟が頼りになる。今度関節技を決める時に手加減してあげようかしら?

side out

「銀、おるかの?」

「うん。丁度良かった。今から秀吉に聞いて欲しいことがあったから」

銀は扉を開けて秀吉を入れ、二人で座る。

「先に秀吉からどうぞ?」

「いや、偶には銀からじゃ」

「そう？　わかった。えっと相談なんだけどさ」

「うむ。ワシで良ければ聞かせてもらうぞい」

「ありがとう。相談の内容なんだけどね、僕、病気かもしれないんだ」

「病気？　それならワシではなく医師に相談すべきじゃろうに」

「いや、何か恥ずかしくてさ。その病気が」

「恥ずかしい？」

「うん。なんだか最近いつでもどこでも優子の事ばかり考えちゃうんだ・・・・・・」

「・・・・・・はい？」

「いや、だからさ。朝食の時も登下校の時も授業を受けている時も。他にも入浴の時とか寝る時も。とにかく何故か優子のことばかり考えちゃうんだ」

「なるほどのう」

「え？　秀吉コレがなんなのかわかるの！？」

「うむ。じゃがそれはワシの他に適任がいるのでのう。その人から

聞いた方が、いや
わからせて貰った方が良いじゃろうからな」

「適任？」

「うむ。後数日待っておれ。そうすればその人が現れて、答えを教えてくれるぞい」

「そうなんだ。わかった。じゃあ数日待ってみるよ」

「うむ。それが一番じゃよ。ではワシはこれで」

「あれ？　何か用があったんじゃないの？」

「いや、今の銀の言葉で聞くまでもなくなったことがわかったのでな」

「そ、そうなんだ。とにかくありがとう」

「気にするでない」

秀吉は部屋から出て優子の部屋へ入る。

「ど、どうだった？」

「フフ、どうやら銀は病気のようじゃ」

「え？　びょ、病気？　だったら早く病院へーーー」

「待つのじゃ姉上。銀の病気は病院では治らんぞい」

「えっ!?　それってまずいんじゃ・・・・・・」

「銀の病名は、恋、じゃ。銀は恋と言う名の病気にかかっているんじゃ」

「え?　恋の、病気・・・・・・。それじゃ、銀にはやっぱり好きな人がいて・・・・・・」

「そうじゃな、銀には好きな女性がおる」

「・・・・・・」

「でももし、そんな中姉上が告白しても、銀は断ったりしないはずじゃ」

「・・・・・・え?」

「ワシから言えるのはそれだけじゃ。後は姉上の努力次第じゃ」

「ちょっ、ちょっと待って!　今のって・・・・・・」

「さあ?　ワシには何のことだかサッパリじゃわい。ただ、姉想いの弟から言えるのは一言ーーー
頑張るのじゃぞ」

その言葉を言い残して、秀吉は優子の部屋から出た。

第二十九問　僕と木下姉弟と過去の記憶（後書き）

今回は優子です。

そして、バレンタインがやってくる。アタシたちには忘れることのできない日が。

あの日、アタシが銀を壊してしまった。殺してしまった。アタシって罪深い女よね

次回　バカと銀色と召喚獣　『別れと狂気とバレンタインデー』

覚悟はいい？　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第三十問　別れと狂気とバレンタインデー（前書き）

明日でようやくテストが終了！
更新速度も若干上がるかと思います。

《今回のお話には暴力シーンやグロテスクな表現が含まれています》

→の事を了解してから、お読み下さい。
『暴力シーンは見たくない！』　という方は物語の前半と終盤だけ読むと
良いでしょう。

第三十問　別れと狂気とバレンタインデー

問　以下の文章で（　）に正しい言葉を入れなさい。
織田信長、豊臣秀吉か政権を握っていた時代を（　）時代という。

姫路瑞希の答え
『安土桃山』

教師のコメント
正解です。織田と豊臣から一文字ずつ取って、織豊（しょくほう）時代と呼ばれることもあります。おぼえておくとよいでしょう。

土屋康太の答え
『安土桃色』

教師のコメント
遊郭ばかり並んでいそうですね。

吉井明久の答え
『果実桃色』

教師のコメント
そんなに桃が食べたいんですか。

氷花紫苑の答え
『あの頃は、色々ありましたよね』

教師のコメント
知りません。

学校・・・

今日は金曜日。今日が終われば明日から休暇がもらえるってんだから、
少しやる気が出てくる。

「ん？」

「どうしたんじゃ？　銀」

「チョコが・・・・・・」

「あぁ・・・・・・」

自分の下駄箱を開けると、そこにはチョコが入っていた。チョコをくれるのは嬉しいんだが、僕はお付き合いというのはできないよ？

「ほほう。しかし今年も結構貰ったのう」

「でも優子のが一番美味しいんだよな」

「それは姉上に言ってやるのじゃ。さぞかし喜ぶじゃろうからな」

「恥ずかしいよ・・・・・」

「今までそんなの気にしなかったではないか」

「今は違うんだよ！」

最近優子にそういうことを言えなくなってきた。はて・・・・・・？　何故だろう？

昼休みが終わって五時間目の国語のノートを開くと、

「手紙？」

そこには可愛らしい封筒に入れられた手紙が書いてあった。
そこにはーーー

『今夜、１８：００に○○公園に来てくれませんか？
渡したい物と伝えたいことがあるんです』

と、書かれていた。

「よし、では蒼月、読んでみろ」

「今夜、１８：００に○○公園に来てくれませんか？　渡したい物と伝えたいことがあるんです」

『『『・・・・・・』』』

あれ？

「なんだ蒼月。ラブレターを貰ったのか？　よかったじゃないか！」

「えっ？　あっ！　その、す、すみません／／／」

「気にするな、青春を謳歌しているんだな。だが、授業中は学問に集中してくれよ？」

「は、はい／／／」

ちくしょ～！　恥かいた！　優子の前で格好悪いところ見せちゃったじゃないか！

いったい誰だよ！　ノートに手紙を挟んだのは！

等と手紙と送り主に対してやつあたりをする。

秀吉を見ると腹を抱えて笑っている。絶対柚葉さんと秀俊さんに言われる！

優子はというと・・・・・何で顔が赤いんだろう？

優子　ｓｉｄｅ

もう！　銀のバカ！　どうして授業中に手紙の内容を大々的に言っちゃってるのよ！？

これじゃあ手紙にした意味がないじゃない！

「姉上、ちょっと良いかの？」

秀吉だ。

「いいわよ」

「邪魔するぞい」

「何？」

「いや、いよいよじゃなって」

「う、うん／／／」

そう。今日はバレンタインデー。今日アタシは、手紙に書いた通り、○○公園で銀に告白する。

「イエスだったら良いのう」

「うん。もしノーだったら気不味過ぎるでしょ・・・・・・」

「そうじゃ！　姉上、銀から聞いて欲しいと頼まれておったんじゃが・・・・・・」

「何を？」

「今年優子は誰かにチョコをあげるのか？　とな」

「？　何でそんなことを？　もしかして、欲しいのかな？」

だったら結構嬉しい。

「恐らく、いや。確実にそうじゃろ！　今朝銀が姉上のチョコが一番好きじゃと言っておったしな」

「そ、そうなんだ／／／」

もしかして銀も？　でも銀は鈍いし、でも・・・・・・

「まあ姉上、吉報を期待しておるぞい」

「うん」

「えっと、ちょっと出掛けてきます」

「いってらっしゃい。夕飯までには戻って来てね？」

「わかってますよ」

そして、約束の時間の二十分前、〇〇公園は近いのだから五分前に出れば余裕で間に合うのに二十分前に出たのは相手を待たせない為の銀の配慮だろう。
その相手はアタシだって事は知らないみたいだけど。

五分後・・・

えっと、チョコは持ったし、服装は、大丈夫よね？

「それじゃ、行って来ます！」

「行ってらっしゃい優子。彼氏もとい、銀をゲットしてくるのよ！？」

「帰って来るのを楽しみにしておるのじゃ！」

「うん！」

アタシは期待八割、不安二割の心で家を出た。銀を手に入れる為に！

「それでは、ワシも行くかの」

「頼むわよ秀吉！　優子と銀のあんな場面やこんな場面を永久保存する為に！」

「お任せあれ！　じゃ」

→　家を出た後にこんな会話が玄関でされているなんてつゆ知らず・・・・・

〇〇公園・・・

約束の時間には間に合ったわよね？　今アタシは待ち合わせの〇〇公園の前にいる。

銀は公園の長いすに座って相手を待っているみたいね。

よし！　いくわよ優子！

アタシは意を決し、公園の中に入る。

「っ！？」

銀はアタシの姿を目視した時、かなり驚いてることがすぐにわかった。
アタシは座っている銀に近づく。
銀も立ち上がる。

「え、っと、何で、優子が、ここに？」

「待ち合わせよ」

「そ、そうなんだ。奇遇だね。僕もなんだ」

相当慌ててるわね。まるで浮気現場を妻に見つかった夫みたい。

「銀」

「な、何？」

「今日の五時間目の、アレ」

「あ、いや、違うんだよ！？」

「何が？」

「えっと、それは、その・・・・・・」

今の銀。弄りがいがあるわね。でも今は銀を弄ることが目的じゃないから

この辺にしておこうかしら?

「あ~あ、折角手紙にしてノートに挟んどいたのに、皆の前で読まれちゃったから意味無くなっちゃった」

「ゴ、ゴメン・・・・・・って、えっ? 今、何て?」

「だから、手紙をコッソリノートに挟んでおいたのに皆に知られちゃったってこと」

「じゃ、じゃあ、あの手紙は・・・・・・」

「そっ、アタシが書いたのよ」

「な、何でそんなことを?」

「今日がバレンタインだからよ」

バックの中からチョコを取り出す。今まで渡して来た義理じゃなく、本命のチョコを。

「コレあげる。一応言っておくけど、手作りだからね?」

「ありがとう///」

「銀、聞いて欲しいことがあるんだけど」

「う、うん」

「ア、アタシは、その、あなたが・・・・・銀の、ことが・・・・

・・」

うぅ。どうして『好き』っていう二文字が出てこないのよ！？
散々練習してきたじゃない！

「優子・・・・・・その、僕も、優子のことが・・・・・・」

えっ！？　何！？　僕もってことは、もしかして・・・・・・！
お互いに顔を紅潮させて、『好き』という二文字を言い出そうとしたーーー

『銀！』

「「っ！？」」

だが、それは叶わなかった。一つの悲鳴と思われる声が二人の注意を引きつける。
声のした方向を見ると・・・・・・

「「秀吉！」」

声がした方向には秀吉がいた。えっ！？　何で秀吉がここに！？
でも今はそんなことを
考えている場合じゃない！　秀吉を抑えている男は今にも用意してあったと思われる車に秀吉を入れようとしている。

「銀！　姉う・・・・・・ぇ・・・・・・」

秀吉が何か嗅がされたのだろうか？　意識を失った。

「優子はここで待ってて!?」

「うん」

銀が秀吉の方へ書けだして行く。でもアタシは気が付かなかった。自分の背後から迫り来るもう一人の男に・・・・・・

銀　ｓｉｄｅ

気が付いた時には手遅れだった。秀吉と優子が薬品か何かを嗅がされ眠らされてしまった。

「動くなよ～。この二人の顔がメチャクチャにされたくなかったらなぁ」

「貴様ら・・・・・・！」

「いや～しっかし羨ましいねぇ。こんな美人姉妹に想われていてよぉ」

「最初に眠らした方は男だぞ?」

「そんなウソが通用すると思ってるのか？　こんな可愛い男なんて漫画の中だけだぜ?」

チッ！　秀吉を完全に女だと認識している！　仕方ないと言えば仕方ないが。

だがそんなことより今の状況はヤバイ！　非常にヤバイ！

「二人を返せっ！」

「嫌だね。こんな上玉滅多に手に入らないからなぁ。年齢がまだ中学生辺りか？　まだ熟し切ってないのが残念だが、親分はこっちの方が好きだからなぁ。丁度いいぜ」

周りのヤツらからも声が上がる。コイツら・・・・・・！
まるで二人を物の様に・・・・・・！

「まっ、立ち話は嫌いなんでな、ここいらで終わりにしようや」

「ふざけ！　ぐっ！？」

何、だ・・・・・・？　何かで、殴られたのか？

「じゃあな、自分の無力さを噛み締めてるんだな！」

高らかな笑い声を上げ、車に乗り込む誘拐犯ども。
このままだと二人は・・・・・・！　そうは、させないっ！

「くっ・・・・・・！」

頭に痛みが残るが、そんなのに構っていられない！
あの車は右折しようとしている。あっちは大通りに出るはず。
ならば、一か八かだけど・・・・・・！　細い道を全速力で車より速く通路を抜ける。
あった！　歩道橋だ！　これも全速力で駆け上がり車が出てくる方向を見る。
よし！　こっちに来た！　今の車のガラスって強固だからわからな

いけど・・・・・・！
携帯を構え、歩道橋から飛び降りる。
『っ！？』
「うぉぉぉおおお！！」
バンッ！
ピシッ！×２
「ぐあっ！」
車の急停止の勢いで道路に投げ出される。ハハッ！　痛いな・・・・・・！
でも、携帯を犠牲にガラスにヒビが入り車を止められた。これだけでも充分だ。
「おいおいおい！　何してくれちゃってんの？　えぇっ！？」
連中が車を降りて言う。
「それはこっちの台詞だ！　さっさと二人を返せ！」
「はぁ？　何言ってんの？　それって俺たちが誘拐したみたいじゃねえか。
作り話でっち上げてんじゃねぇぞ！」
「ふざけるなっ！　その車の中にいる秀吉と優子の事だ！　忘れたとは言わせないぞ！」

僕と誘拐犯との口論が続く、するとーーー

「何やってるんですか！？」

見ると警察官がこちらに向かって来る。周りを見ると野次馬がここら一帯を囲んでいる。

誰かが知らせたんだろう。近くに交番があることだし。

「おぉ～。ちょっど良かったぜ。お巡りさんよぉ。この子が今歩道橋から、飛び降りて、俺たちの車のフロントガラスにヒビを入れてくれちゃったんだよ」

「それはこいつらの「君！　何をやってるんだ！？　大体何で歩道橋から飛び降りるなんて真似をしたんだ！？」」

「そんなのどうだっていい！　早くコイツらの車の中を調べてください！」

「おいおい、コイツらとは何だよ？　仮にも今お前がヒビを入れた車の持ち主だぜ？

所謂俺は被害者だぜ？　それに向かってコイツって口の利き方は無いんじゃないの？」

「そうだぞ、ちゃんと謝りなさい！」

「知ったことか！「いいから謝る！」」

コイツ・・・・・！

「そいじゃ、お巡りさんよ、そいつの面倒は任せるぜ？」

「はい「待て！　二人を返せ！」」

子供の話を聞かない無能の警察官が・・・・・・！

「しかし、フロントガラスはそのままでいいので？」

「ああ。俺たちゃ心が広いからな。このままでいい。お巡りさんに苦労を掛けさせたくないしな」

「恐れ入ります」

まずい！　このままじゃアイツらが！

「じゃあな、ボウヤ？」

僕に最後にこの言葉を浴びせ、走り去ってしまった。一応ナンバープレートは覚えたけど、

この警察官が邪魔だな。ホントに・・・・・・

「さあ、署で親も呼んでタップリお説教だ」

無能が僕の両手を押さえる。

「・・・・・・黙れ」

「ん？　何だって？」

「事故を未然に防げもせずに、目撃者の話を聞こうともしない無能

が！」

「むかつくのはわかるけど、逆ギレはやめてくれよ？」

「放せ」

「できるわけないでしょ？」

「放せ」

「だから・・・・・・」

「放せって言ってんだよ！！！」

オレは無能の足を思い切り踏んづけた。

「いっ！」

案外コレは耐えられることがあるが、一応鍛えていたので効いたみたいだな。

「ぐっ！　ぐはっ！」

自由になった両手で、まず顔面にジャブを入れる。そして正拳突き。

「おうっ！　がっ！」

隙だらけの下半身に金的を入れ、前屈みになったところで頭部を掴み、顔面に膝蹴りを
入れる。意識がもうろうとしているのか、若干ふらついている。

「がっ！　がはっ！」

鳩尾と思わしき所に肘を一発。かかと落としを入れる。

ドサッ！

存外早く気絶したな。しかも野次馬が誰も一切助けに来なかったのも意外だ。

「さっさと放せばよかったのに・・・・・・」

この無能な男の顔面を思い切り二度三度踏みつける。

しまった！　こんなクズにかまっている暇はない！　早く追わないと！

オレはすぐさま走り出した。野次馬どもは道を空けるかのように両脇へ避けていった。

しかも体が軽い。先ほどまであった痛みがない。しかもいつもより早く走っている。

不思議だ。この時、少年のいつもの蒼い空色の瞳は真っ黒に染まっていた。

「くそっ！　どっちだ!?」

左折したところで、わからなくなった。まずい！　急がなくちゃいけないのに！

「何を探しているの?」

「え?」

そこには赤毛の女の子がいた。一瞬見取れてしまうような美少女だった。
でも、不思議なのはその格好だ。エプロンを着けて、長袖だったんだろうか？
だがその両腕はむき出しだ。というか破られたような跡がある。
しかも、そのエプロンには赤い斑点が付いて、否、付着している。
下に穿いているスカートにも同じく赤い斑点がある。
まさか、血？　でも、それよりも僕にはもっと重要なことがある！

「フロントガラスにヒビが入った車を見なかった！？」

「知ってる。着いて着て？」

「ありがとう！」

優子　ｓｉｄｅ

ん？　ここは・・・・・・？　目を覚ますと見慣れない部屋が存在した。
何で自分はこんな所にいるんだろう？　記憶を蘇らせると・・・・・・

「そうだ！　秀吉・・・・・・！」

見るとアタシのすぐ横でアタシと同じく後ろで腕を縛られて転がされている。

「秀吉！　秀吉！　起きなさいよ秀吉！」

「ん？　んむ・・・・・・姉上？　ここはどこじゃ？」

「良かった！　特に何もされていないようね」

「ここは一体・・・・・・？　！　そ、そうじゃ！　確かワシは・・・・・・！」

「えぇ。アンタが誘拐されてたのを見たのよ」

「では何故姉上までここに？　まさか姉上も誘拐されたのか!?」

「そうよ」

まったく、油断したわ。

「とにかくここを出るわよ？」

「りょうか「ところがどっこい、そうはいかないんだなぁ～」っ！？」

まずい！　アタシたちを誘拐したやつらが戻って来た！　全部で六人。

リーダーと思わしき人物がアタシに近づいてきて顎をクイッと上げてきた。

「へぇ～。確かに上玉じゃねえか。よくやった武（たけし）」

「へいっ！　どうも！」

嫌だ！　こんなやつらに何かされるなんて！　触られるだけでも嫌なのに！
アタシはキッ、と睨み付けた。
「おいおい、そんなに睨むなよ。まあ気の強い方が俺は好みだがな」
「親分、ところでこの二人、どうするんですかい？」
ニヤニヤしながら言う武とかいう男。
「決まってんだろ？　お前らだって溜まってないか？」
『イェー！』
ま、まさかこいつら！　アタシたちで！？
アタシだってこんな状況で何をされるかわからないワケがない！
その、性行為をされるって事よね？　そんなの絶対嫌！
「嫌っ！」
「嫌だってよぉ？　可愛いねー！」
「姉上には手を出すな！」
秀吉がアタシを庇うように言った。
「へぇー！　だったらお望み通りお前から犯してやるよ！」
だがそれもこの性欲の塊みたいな連中の前ではその性欲を逆撫です

るだけで意味なかった。

「いやいやいや、待て。こういう時はそんなことを言ったヤツの前で犯してやるのが一番だぜ？」

！？　今、何て言った？

「それもそうだな。それじゃ、こっちの可愛子ちゃんから犯してやるか。そっち押さえとけよ？」

「嫌っ！　嫌ぁっ！」

アタシはただ嫌としか言えなかった・・・・・・

「姉上っ！　姉上！」

「さぁーてと」

男がのしかかってきた。

「嫌っ！　やだよ・・・・・・！　助けてよ・・・・・・・・銀・・・・・・！」

「どんなに叫んでも、その銀とかいうヤツは来ないぜ？」

「いやぁぁぁあ！！！」

その男の手が伸びてきて、アタシの体に触れようとしたその時――

ガチャッ！

「ん？　おぉ！　聡（さとし）、遅かったじゃねぇか」

「今から良い物見られるぜ？　ん？　おい聡？」

その聡とかいう男がドアの所でいっこうに動かない。変だと思った他の男が触れようとするとーーー

ガンッ！

鈍い音と主に金属状の細長い物で近づいた男が顔面を殴られ倒れ込む。

そして聡とかいう男も倒れる。え？　どういうこと？

「迎えに来たよ・・・・・・優子、秀吉・・・・・・」

あぁ・・・・・・！　もう会えないかとも思ったアタシの初恋の人・・・・・・

そして、アタシが今一番会いたいと願った・・・・・・

「「銀！！」」

「てめぇよくもっ！」

一人が銀に殴りかかる、でも銀は避けてそのまま金属バットを顔面に力一杯叩き込む。

「ぐばぁっ！」

「ガキがっ！」

他の男が銀に転がってあった鉄パイプで殴りかかる。でもそれを銀は左腕で受け止め、
その男の股間を蹴り上げる。

「おうっ！」

悶絶している男にバットを振り下ろそうとするが、

「おらぁっ！」

「っ！」

木刀と鉄パイプが連続で銀の腹に直撃する。

「「銀！」」

しかし銀は腹を押さえるどころかバットを落とさず、そのまま何事も無かったかのように
振り下ろす。殴られた男の頭からは血が出ている。
え・・・・・・？　何、これ・・・・・・？

「お、お前・・・・・・！　何で痛がらないんだ！？」

「ば、化け物か！？」

男たちが怯え始める。この頃になるとアタシに馬乗りしていた男も立ち上がる。

「クク・・・・・・！」

銀が狂ったような微笑をする。

「習わなかったか？　アドレナリンの多量分泌・・・・・・もう俺は痛みを感じない・・・・・・！」

俺？　銀の一人称は僕だったはず。

それに何だろう。銀が助けに来てくれたはずなのに、喜べない・・・・・・

「さぁ、来いよ。好きなだけ殴るがいいさ！　だが、俺はその倍の力でお前らを殴る。

俺はその二人を守るんだ・・・・・・。それが俺の、唯一の存在理由だ！」

「ぐはっ！」

立ちすくんでいた一人の顔面にバットを叩き込む。まだ気絶していないのか、顔を押さえて痛がっている。

「死ねよっ！」

ガンッ！

また鈍い金属音と共に一人が頭から血を流して動かなくなった。

「うわぁぁああ！」

鉄パイプを持っていた男が銀の後頭部を鉄パイプで殴る。

今度は銀の後頭部から血が流れる。でもーーー

「ハハハッ！　ハハハハハッ！」

銀が高らかに笑い声を上げ、振り返りざまに横払いしたバットが当たる。

その男の歯が何本か飛び散った。

「や、やめろ・・・・・・！　こっちに来るなっ！」

「似たような事を言った優子と秀吉にお前らは何て言った？」

『嫌だってよぉ？　可愛いねー！』

『犯してやる』　『助けなんか来ない』

アタシの中に先ほど言われた言葉がリプレイされる。

「ハ、ハハハ・・・・・・！」

ゴンッ！

また・・・・・・

「さぁ。あとはアンタだけだ」

「うぉぉおお！！」

！　先ほどアタシに馬乗りしていた男がナイフを銀に突き立てた。

ナイフは左腕に刺さっている。でも銀は顔色一つ変えずに言い放った。

「さっき言ったろ？　痛みを感じないんだって・・・・・・！」

「ぐわっ！」

バットを顔面に当てる。その男は倒れ込む。

「や、やめろ・・・・・・！」

「貴様らは、二人を泣かせたな？」

「あ、謝る！　誘拐したのは謝る！　二人は返す！　だから！」

「許すとでも？　笑わせるなっ！　お前は今までそうやって逃れて来たのか？」

「ち、違うっ！」

「どうだかな・・・・・・。一つ聞こう。お前は二人以外に、何人泣かせてきた？」

「・・・・・・」

男は何も答えない。

「覚えていないほどか・・・・・・。お前は泣かされて、笑顔を奪われた人の事を考えたことがあるか？　無いだろう！？　無いだろうなぁ！？　お前はそういう人間だ！
だってそうだろう？　善悪なんて意味は無い。力のあるやつのやることは善悪関係なく

まかり通る。そう思っているんだろう？」

その男の体がビクッと反応する。

「図星だろう？　だから、俺がその人たちの気持ちを代弁してやるよ」

「え・・・・・？」

情けなく尻餅をついている男はこれまた情けない声で聞いた。

「復讐してやるってことだよ。お前もその人たちから聞いただろう？　悲鳴を、苦痛に歪んだ声を。見ただろう？　その人たちの涙を、恐怖した顔を」

「ひ・・・・・・！」

後ずさりするも、後ろは壁。

「さぁ、聞かせてみろよ。　お前の悲鳴を、苦痛に歪んだ声を。見せてみろよ。
お前の薄汚い涙を！　恐怖した顔をなぁ！！！」

まさに地獄絵図だった。身を固め、怯えて何もできずにただひたすら殴られ続ける男。
哀れだった。でも助ける気にはなれなかった。否、できなかった。
ハッキリ言って、今の銀はーーー

『恐い』

気絶しても殴り続ける銀。そして、その手を止め、こちらを向き直る。
その顔には返り血がたくさんついていた。

「二人を泣かせたヤツらはやっつけたよ？　さぁ、一緒に帰ろう？」

そう言って銀は手を伸ばしてきた。でもアタシたちはその手を取ることができなかった。
恐かったからだ。そしてアタシはこの一言で、銀を壊して、殺してしまった。

「嫌・・・・・恐い・・・・・・！　来ないで！！」

「っ！！！」

ハッ！！　アタシ、今、何てことを・・・・・・！
銀はクルリと向きを変え、

「帰ろっか？」

それだけ言って歩き出した。アタシも秀吉を立たせて歩き始める。
秀吉もショックだったんだろう。先ほどから何も喋らない。
誘拐犯どものアジトから出る際に数人の男が倒れていた。多分、これも銀が・・・・・・
道行く人々はアタシたちに見て道を空ける人もいれば、
大丈夫なのかと話している人もいた。でも、誰一人として話しかけようとはしなかった。

そのまま家に着いた。インターホンを鳴らす。すると慌てた様子のお母さんが出て来た。

「遅かったわね。大丈夫？」

いつもの明るいお母さん。でも・・・・・・

「ちょっと、どうしたのよ？　皆黙って・・・・・・！　銀！　あなたその傷どうしたの！？」

お母さんが銀の異様なまでの様子に気付く。
この時、銀の瞳はいつもの蒼い物に戻っていた。

「ごめん・・・・・・なさい。柚葉さん。僕は、二人を・・・・・・」

銀は意識を失った。

「え・・・・・・？　銀！？　銀！？」

銀はすぐさま病院へ運ばれた。入院をして回復に専念する必要があるようだ。
どうやら左腕の骨にヒビが入っているらしい。刺し傷もあり、しばらくは動かすと激痛が走るので、動かさない方が良いとのこと。頭は何針か縫う手術をした。
病院で何があったのかお母さんとお父さんに聞かれたけど、答えられなかった。恐かった。思い出したくなかった。

side　out

ピンポーン！

昨日のあの事件があり、静まりかえった木下家に不釣り合いな音が鳴り響いた。
土曜日の昼頃だ。

「はーい！」

ドアを開けると、スーツ姿の男が二人。

「あの、どちら様でしょうか？」

「我々はこういう物です」

男は名詞を渡す。

「え・・・・・？　警察、ですか？」

「はい。昨夜通報を受けて聞き込みをしたところ、お宅の銀君が「銀は何も悪くない！！」」

警察の声を遮ったのは秀吉だった。

秀吉　side

今朝、家に警察が来た。母上と話しているのが聞こえたので、話を聞いていたら銀の話になった。ワシは咄嗟に叫んでしまった。

「銀は何も悪くない！！」

母上と警察がワシに気付いたようで、視線がワシに集まっている。

「銀は何も悪くないんじゃ・・・・・・！　悪いのはワシらで・・・・・銀はワシらを助けようとして・・・・・・！　だからーーー」

言うだけで涙が出てきた。きっと酷い顔なんじゃろうな。

「秀吉・・・・・・」

母上がワシを抱きしめてくれた。

「コレをどうぞ」

「え、いいんですか？」

「泣いている人をほっとけませんから」

「ありがとうございます」

警官は二人いて若い方の警官がワシにハンカチを差し出した。

「すみません。取り乱しました。こちらは息子の秀吉です」

「初めまして、秀吉君。昨日何があったか知ってる？」

「知ってる！　知ってるのじゃ！　だから銀を悪く言わんでやってくれ！」

「秀吉、話せるの？」

「昨夜、姉上と話し合ったんじゃ。明日になったら全部話そうって。それと、銀に謝りたいんじゃ」

「今、銀君はここにはいないんですか？」

「はい。昨夜、秀吉とその双子の姉の優子と帰ってきたら全身血だらけで。
今は入院しているんです」

「何病院ですか？」

「○○病院です」

「母上、病院へ行くならワシらも行きたいのじゃ！」

「わかったわ。あの、二人の用意ができたら行くということでよろしいでしょうか？
良かったらそれまでお茶でも」

「・・・・・では、それで。お茶、ご馳走になります」

少し思案顔になって結論を出した。市民との交流を深めておこうとかだろう。

ワシらは今車に乗って銀が入院している病院に着いた。
中々設備が充実している病院で、庭は広く花もたくさんあり、木々も生い茂っている。
散歩をするにはもってこいのコースじゃろう。
手続きをすまして、銀が入院している部屋へ向かった。
スライド式のドアを開け、部屋に入る。他にもベットが五つほどあったがいたのは一人。
ワシらを見て少々驚いているようじゃな。

「あれ？　いない」

銀の姿はそこにはなかった。布団も綺麗にたたまれていた。

「トイレかしら？」

ワシはベットの脇にある小さなテーブルの上に紙が折りたたまれて置いてあるのに気が付いた。

「何じゃ？」

紙を広げてみると、そこには文字が書いてあった。
銀の筆跡でハッキリとこう書いてあったーーー

『さようなら』

第三十問　別れと狂気とバレンタインデー（後書き）

今回は真奈（偽名）です。

銀は皆に自分の過去について話した。自分の過去を明かすのって結構恐いはず
なのに。銀が話したんなら、次は私の番だよね？

次回　バカと銀色と召喚獣　『私とお姉ちゃんとひまわり園』

さぁいくよ！　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第三十一問　私とお姉ちゃんとひまわり園

問　以下の問いに答えなさい。
『フランス・ブルターニュ地方発祥の料理で、薄く焼いたパンケーキの一種とは何でしょうか』

姫路瑞希の答え
『クレープ』

教師のコメント
正解です。元は「ガレット」という、そば粉を薄く焼いた料理だったそうです。
この文月学園周辺ではラ・ペディスという喫茶店のクレープがおいしいと評判ですね。

吉井明久の答え
『ティッシュペーパー』

教師のコメント
薄ければいい、というものではありません。

宮野真奈の答え
『親子の絆』

教師のコメント
何があったんですか。今度先生で良かったら相談に乗りますよ。

女子部屋・・・

光　ｓｉｄｅ

「――――アタシが話せるのはここまでね」

『・・・・・・・』

銀・・・・・・・。あなたも壮絶な過去を生き抜いて来たんだね。私も含め、皆黙り込んでいる。

「アタシと秀吉が中学を卒業して、春休み中に銀はフラッと戻って来たわ。
理由は何であれ、アタシたちには銀が生きて戻って来てくれたことだけで充分だった。
あ、こんなこと話すべきじゃ無かったわね。空気を盛り下げちゃってごめんなさい」

「そんなことないよ！」

「え？」

そんなことない。今まで私は銀とはパートナーだった。でも、国家機密情報局の禁則で、
『自分の過去を他人に話してはいけない』というのがあったから、本当の意味では銀の事をわかってなかった。でも今、私は本当の意味で銀を知ることができた。だからーーー

「臭いことを言うけどさ、今優子が話してくれたおかげで私は本当の銀を知ることができた。実際、自分の過去を他人に話すのは結構辛いことなんだよ。特に、銀や私みたいな人間はね・・・・・。でも銀はそれを打ち明けてくれた。自分の過去を。弱さを・・・・・。・。これって、本当の意味で、銀は私たちのことを信用してて、友達だって、思ってくれているってことじゃないかな？」

「真奈・・・・・・！」

「ううん。私は光。『紅光（くれないひかり）』だよ？」

銀。あなたが皆に勇気を出して話したように、私も勇気を出してみるね。

「え・・・・・・？　それじゃあ真奈ちゃんも？」

「そう。私も、銀と同じく国家機密情報局員なんだ。だから、『宮野　真奈』っていうのはコードネーム。『紅　光』が私の本名だよ。でも、私のことを知っていて、尚かつ覚えている人はそういないから、このメンバーと向こうの男子メンバーの中では光って呼んでも大丈夫だからね」

「光も、だったんだね」

「黙っていてごめんなさい。嫌われてもしょうがないって思っている「嫌うわけないでしょ？」」

優子が言った。

「だって、さっき自分で言っていたじゃないですか」

瑞希が・・・・・・

「自分の過去を、弱さを打ち明けるのはーーー」

美波が・・・・・・・

「・・・・・・私たちを本当の意味で信用していて、友達だって思ってくれているって」

代表が・・・・・・・

「ボクたち、そんな些細な事で、光のことを嫌いになんてならないからさっ！」

愛子が・・・・・・・

「だから、教えて欲しい。光の過去を・・・・・・」

もう一度優子が・・・・・・

こういうのって、漫画やアニメの世界だけだって思っていたけど、現実にもあるんだね。

「ありがとう、皆・・・・・・！　それじゃあ話すねーーー」

私の家は両親と私、お姉ちゃんの四人暮らし。平凡な家庭だったけど、幸せだった。

両親もお姉ちゃんもとても優しかった・・・・・・。あの日が来る

までは・・・・・・
その日、私とお姉ちゃんとお母さんの三人で買い物をしていたの。
でも・・・・・・・

過去の光　ｓｉｄｅ

「わぁっ！　お姉ちゃん、お姉ちゃん！　ちょっと来て！」

「ん？　何か見つけたの？」

ショーウィンドの前で私は姉を呼んだ。

「ねぇねぇ、コレ可愛いくない！？」

「ホントだ、光には似合うかもね？」

「私よりお姉ちゃんの方が似合うよー」

「私にはちょっと子供っぽいわ」

「何言っているのよ？　私からすれば水鳥もまだまだ子供よ？」

「母さん～」

水鳥、『紅（くれない）　水鳥（みどり）』私の自慢の姉だ。
学力は学校では一桁の順位を取り、運動神経も良く、家庭的で、スタイルも良い。
人望も厚く、よくモテた。でも我が姉は・・・・・・

「ねぇお姉ちゃん」

「何？　光」

「どうしてお姉ちゃんはあんなにいっぱい告白されているのに誰とも付き合わないの？」

「あ～、光にもそういうことは教えておこうかしら」

私は首を傾げる。

「私に告白してくる男共は私の容姿や身体が目的っぽいんだもんな～。

視線とかでわかるんだよ。しかも、自分も容姿に自信があって女ったらしで有名なヤツがいてね、そいつが自信満々に告白してきた時にムカついたから言ってやったのよ。

『私はアンタみたいな性格が悪くて自信過剰で、女ったらしのようなヤツとは付き合う気ないから』ってね？」

「へぇ～。それでその人どうなった？」

「そうそう！　フッてやった時のそいつの顔が面白いのよ。打ち砕かれてたわね。

多分今までフラれたことなかったのね。いい？　光。　男ってのは顔だけで決めちゃダメ。

性格や、本質、どんなことをしているかとかを、全部知って、この人だって思える人を

好きになりなさい？　その時は私にも見せてね？」

「うん！　わかった！」

「まったく、水鳥もそんなこと言って、結局彼氏ができなかったらどうするのよ？」

「大丈夫だって」

買い物を済ませ、こんなことを話し合って家への帰路へ着いていた。だがその時――

『危ないっ！』

「「「っ！！」」」

一瞬の出来事で何があったのか最初はわからなかった。自分の中の時が動き始めた。

「お・・・・・お母・・・・・さん？」

お母さんが私とお姉ちゃんを抱いている。

「お母さん・・・・・何・・・・・やってるの？・・・・・・・・恥ずかしいよ・・・・・・」

お姉ちゃんが言う。私は空いていた手でお母さんの背中に手を回す。すると、お母さんの背中が濡れていた。何でだろうと思い、手を見るとーーー

真っ赤な血が付いていた。

「・・・・・・え？　お母さん？」

するとお母さんは笑顔を作り、私たちに笑いかけるとお母さんは道ばたに倒れ込んだ。

背中には果物ナイフが深々と刺さっていた。

「「――――――――――――――――――――――ッ！！！」」

私とお姉ちゃんは言葉とは言えないような悲鳴を上げた。

その後、お母さんは病院へ運ばれた。でも、ナイフの位置がまずかったらしく母は息を引き取った。私は泣いた。私だけじゃない。お姉ちゃんも、お父さんも。

犯人は逮捕されたが、今の私にはどうでもよかった。ただ、いつものように四人で暮らせれば。それで良かったのに・・・・・・

「何だこのメシは！？　作り直せ！」

いつもの怒号が家に響く。お母さんが死んでからお父さんは変わってしまった。
もともとお父さんは家事が苦手だった為、家事はお母さんとお姉ちゃんと私がやっていた。
それでもお父さんは偶に手伝ってはくれたので文句はあまり言った事はない。
でも、お母さんが死んでからお父さんは家事を一切手伝わなくなり、この有様だ。
渋々私とお姉ちゃんが片付ける。そもそもお姉ちゃんは料理ができない訳ではない。
でも簡単な物なら作れるのだが、それでは今のお父さんは満足しない。
私はまだ料理については教わってなかったので、手伝うことくらいしかできない。

「やっと終わったね・・・・・・」

「うん・・・・・・」

「光、大丈夫？　痣、痛くない？」

「大丈夫だよ。この位へっちゃらだよ！」

「よかった・・・・・・」

今日も痣が一つ増えた。何があったかは大体想像が着くだろう。
顔や足、腕にも痣ができている。隠すのには苦労している。学校に

バレる訳にはいかない。
お父さんは・・・・・・ううん。あの男は居間でグッスリ寝てしまっている。
実は今日のビールには睡眠薬を入れておいたのだ。いずれ実行しようと思っていた計画を実行する為だ。あの男が寝ている間に私たちは家を出る。
荷物はまとめてあるので、それほど時間は掛からなかった。
最後に、勉強机の上に飾ってある家族の記念写真を詰め込んだ。

とりあえず遠くへ行きたかった。あの男に見つからない場所へ。
もはやどこかもわからない場所へ来てしまった。
どうやら結構な田舎のようで、見渡す限り畑、畑、畑だ。
とりあえず一日目は野宿することとなった。

二日目、せめて屋根がある所を探していると、子供たちの楽しそうな声が聞こえてきた。
建物の入り口に看板があったので見てみると、

『ひまわり園』

と書かれていた。

「あら？　珍しいけど、お客さん？」

「あっ」

不意に声をかけられたので少々取り乱してしまったが、声の主を見ると四十代くらいの

優しそうな女性が建物の庭の野菜を植えている場所からこちらを見ていた。

「一人かい？」

「いえ、お姉ちゃんと一緒です」

「こんな田舎までどうしたの？」

「えっと、その・・・・・・」

迷ったが私はその人に訳を話した。何故かこの人には話しても大丈夫な気がしたのだ。

「そうだったの・・・・・・大変だったね」

「・・・・・・うん」

「つまり今、住む所が無いんでしょ？」

「はい」

「じゃあ、お姉ちゃんと一緒にここに住まないかい？」

「え・・・・・・？　良いんですか？」

「もちろん。ここはもともと孤児院だもの。それに、最近は手が足りなくなってきたところだったの。子供の世話を手伝うってことなら、大歓迎よ？」

「っ！　はい！　もちろんです！　ありがとうございますっ！」

こうして私とお姉ちゃんはここ、ひまわり園で暮らすこととなった。

「はいはい、皆、ちょっと集まって！」

パンパンッ！　と手を叩き子供を集める。

「何々～？」

「その人たち誰～？」

好奇心旺盛な子供たちが集まって来る。言うことを聞いているということはこの人のことを信頼しているんだろうなぁ。

「実は、この二人は新しく、ひまわり園のお手伝いをしてくれる事となったのよ。
さっ、自己紹介をして？」

お姉ちゃんが一歩前に出る。

「初めまして、皆。私は紅水鳥よ。よろしくね？　皆とは早く仲良く成りたいと思っているので、これからいっぱい遊ぼうね？」

子供たちから拍手が送られる。お姉ちゃんが肘で私を小突いてくる。
わかってるって。

「初めまして。私は紅光よ。こっちの水鳥お姉ちゃんとは姉妹なの。

私はまだ何もわからないけど、これからいっぱい学んでいくので、
私が間違ってたら皆が教えて欲しいの。
これからよろしくね？」

再び拍手が送られる。緊張したなぁ～。

「はい。じゃあ皆もお姉ちゃんたちに名前を教えてあげてね？」

それから順々に子供たちが自己紹介をしていく。子供の人数は九人かな。

「じゃあ最後に私ね。私は『如月（きさらぎ）　千代（ちよ）』よ。
皆は千代おばちゃんって呼んでるから、あなたたちも千代って呼んでね？」

「「はい！　よろしくお願いします！　千代おばさん」」

それからひまわり園の案内をしてもらった。
寝室、遊具の置き場所、お風呂やトイレの場所。野菜畑などなど。
今日一日で覚えきれるか心配だなぁ。明日はここら辺の地理をおしえてもらうことに
なった。しかも驚いたのが、千代さんは私たちは学生なのだから学校に通うべきだと言い、
私たちを学校に通わせてくれた。当然もといた学校からは転校という形だが、充分嬉しい。
昼間は学校、放課後はひまわり園のお手伝いという形で整った。
流石に田舎の学校なので生徒の数が数えるほどしかいなかった。
しかも私の学年には男子がいなかった。でもそれはそれで新鮮だった。
数日が経ち作業に慣れ始めると些細な事とはいえ、色々な事があっ

た。

「それは僕のだよー！」

「私のだもん！」

太一君と静佳ちゃんがいつものように遊具の取り合いをしている。

「こーら、ダメだよ？　二人で仲良く使わないと」

「だって～」

「だってじゃないよ？　またケンカをするようなら、コレ隠しちゃうよ？」

「やだ～」

「でしょ？　じゃあ、二人で仲良く使ってね？」

「「は～い」」

渋々といった感じだが、言うことを聞いてくれたことが嬉しい。

この二人から、仲裁の方法を学んだんだよなぁ。

「えーっと、こうで良いのかな？」

「違うよ」

「あうっ」

「こうやってやった方が取りやすいよ？」

「あ、ホントだ。教えてくれてありがと。弘樹君」

苦笑しながら私に野菜の収穫の方法を教えてくれたのは弘樹君だ。
ひまわり園の孤児の
なかでは一番年長で小学二年生だ。私としてはまだ二年生なのに大人っぽい雰囲気を
漂わせている弘樹君が若干羨ましかったりする。

「光ちゃん。コレ読んで～？」

「もう、沙耶ちゃん。今の時間は寝る時間でしょ？　また明日読んであげるよ？」

「やだ～。コレ読んでくれなきゃ私寝ない」

「え～、お、お姉ちゃん」

近くにいたお姉ちゃんに助けを求める。

「ん～？　フフ、しょうがない！　よし、私が読んであげる。ただし、読んだら寝るんだよ？」

「は～い！」

お姉ちゃんが沙耶ちゃんに本を読んであげていると、

「光お姉ちゃん・・・・・・」

「どうしたの健人君？」

「眠れないの・・・・・・」

偶に眠れなくなる健人君だ。でも彼は添い寝をしてあげるとすぐに寝付くらしいので、

「わかった。じゃあ私と一緒に寝よっか？」

「うん」

一緒に寝てあげることにしている。

「お姉ちゃん、健人君と寝室にいるからね？」

「あーい」

「行こ？」

「うん」

布団に入り、添い寝をする。すると安心しきった顔でスヤスヤと夢の中へ入ってゆく。

なかなか治らなかったんだよね～

カリカリ・・・・・・

「何描いているの？」

「あっ、光さん」

「さん付けじゃなくて良いよ？」

「ごめんなさい。なかなか慣れなくて。千代おばさん以外の年上の女の人と話すの初めてで。あ、描いていたのは野菜ですよ？」

「ゆっくり慣れていけば良いよ。それにしても絵が上手だね！　将来の夢は画家？」

「それはわかりません。私はただ、絵を描くのが好きなだけだから。絵を描ければそれで良いんです」

この子は由梨ちゃん。敬語を使っていておとなしい子で、絵を描くのが本当に上手。

小学校一年生だ。学校で絵について褒められたこともあるらしい。

内気なのが偶にキズ。

「そだ、私に絵を上手く描くコツを教えてよ」

「えっ、む、無理ですよ～。私なんかより光さんの方が上手ですって！」

「そんな事ないよ～。由梨ちゃんの方が上手いって！　だから私に教えて！　お願い！」

「あぅ、わ、わかりました。あの、私、まだまだ下手ですけど、こんな私で良かったら・・・・・・」

「由梨ちゃんで良いよ！　ううん由梨ちゃんが良い！」

内気な子には多少無理矢理でも接近してみるのが良いと思う。だって由梨ちゃんは
だんだん感情を表に出すようになっていったのだから・・・・・・

「～♪」

畑で野菜を収穫していると突然――

「おっぱいアタァーック！」

「きゃぁぁぁああ！！」

突然服の隙間から手が入り込んできて、私の胸を揉んできた。
しかも下着の中に手を突っ込んできたので直に揉まれた。
ちょっ！　まだ彼氏にも触らせてあげてないのに！（まだ彼氏いない）

「柔らか～い」

「え!?　聡くん!?」

まさか小学生にもなっていない子にセクハラされるとは・・・・・・

「でも水鳥お姉ちゃんの方が大っきい」

「まだ私のは成長途中なの!」

聡君の手を払いのける。というかお姉ちゃんと私は年齢差があるんだから仕方ないじゃん。

「まったく・・・・・・！　あのね聡君、女の子の胸はそんな簡単に触っちゃいけないんだよ!?」

「は〜い」

ガミガミと説教を始めているとーーー

「えいっ」

「きゃぁぁぁああ!!」

「わ〜光お姉ちゃんが怒った〜」

「聡君っ!」

くっ!　この子はまったく・・・・・・！　女性の胸を平気で触れるのは幼い子の特権ね。

まあこれでセクハラへのガードが堅くなったのは聡君のおかげかも。

「光お姉さま」

「ん？　何？」

声を掛けてくれたのは樹理ちゃんだ。ですわ口調を使う人ってホントにいたんだってことを教えて貰った。

「えっと、光お姉さまに聞きたいことがあるのですが・・・・・・」

「私に答えられることだったら何でも聞いてよ！」

「それでは・・・・・・」

樹理ちゃんは少し間を開けて・・・・・・

「光お姉さまは××××をしたことありますか？」

「なうっ！？／／／」

な、何てことを聞いてくるの樹理ちゃん！？

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待って樹理ちゃん！　そして落ち着いて落ち着いてｃａｌｌ　ｄｏｕｗするのよ私！」

「随分取り乱しているようですが、大丈夫ですか？」

「う、うん。大丈夫だよ？」

いや、取り乱したのは樹理ちゃんの予想外過ぎる質問のせいなんだけど。

「えっとね、樹理ちゃん、まずその言葉の意味を理解している？」

「もちもんですわ！　オブラートに包み込んだ言い方をすれば生殖行為で、ストレートに言えば、男性の×××を女性の××××にぶっ込む事ですわ！」

「いやぁぁあ！　樹理ちゃんがそんな言葉使わないで！　そしてどっちもストレートだよ！」

最近の幼女は中学生よりもそういうことに関しての知識が豊富なの！？

大人の階段を全力で駆け上がっているの！？　あ、私が知っているのはお姉ちゃんとかお母さんが色々と、その・・・・・／／／。って今はそんなこと言っている場合じゃない！

「樹理ちゃん、そんな言葉を誰から聞いたの？」

「いえ、書いてあったんですわ！」

「書いてあった！？」

ちょっと千代さーん！　なんてこと書いてある本を置いているんですか！？

「そ、その本はどこにあるの？」

「いえ、本ではなくてインターネットに」

「え・・・・・樹理ちゃんパソコン使えるの？」

「はい！　パソコンで色々調べていたら××××に至ったのです！」

一体どんな経路だったの樹理ちゃん？

「と、とりあえず、××××なんて単語も×、××××・・・・・・／／／／。なんて単語も
使っちゃダメだよ！？」

「え～、何故ですか？　それとお姉さま、顔が真っ赤ですよ？　××なんて簡単に言えますわよ？」

「と、とにかく！　使っちゃダメ！　樹理ちゃんも大きくなれば何でダメなのか
わかるから！」

はうぅ、樹理ちゃんは既に私よりも大人っぽい・・・・・・
でも、いつか私も彼氏ができたらそういうことを・・・・・・／／／／

「お姉さま？　お姉さま！？　顔が真っ赤ですわよ！？　あっ！
ちょっ、ホントに
大丈夫ですか！？」

「ダ、ダメだよぉ～。そんなこと恥ずかしくてできないよぉ～。で、
でもどうしてもって
言うなら私・・・・・・」

「あぁっ！　お姉さまが妄想の世界に！　水鳥お姉さま～！　ヘループ！」

その後私はお姉ちゃんに現実に連れ戻された。だけど私は大切な何かを色々失った気がする。樹理ちゃん恐るべし・・・・・・！

「僕と結婚してください！」

「・・・・・・はい？」

プロポーズをしてきたのは史弥君。えっと、どうすれば良いんだろう？

「えっと、史弥君。冗談だよね？」

「冗談じゃありません！　僕は光お姉ちゃんが好きなんです！」

ヤ、ヤバイ。どうしよう・・・・・・。下手に断ったら泣かせて仕舞わないだろうか？

「光お姉ちゃん誰とも付き合ってないんでしょう！？」

「そ、そうだけどね。えっとね、史弥君、そういうのはもっと大人になって、
ゆっくり考えるべきだよ？　それにその内、私以外に好きな人ができるかもだし・・・・・・」

「そんなことありません！　僕は光お姉ちゃんだけが好きです！」

う〜ん、どうしよう・・・・・。私だってまだ恋とかしてないのにいきなりプロポーズされてもなぁ。

「それにね、いきなりプロポーズするんじゃなくて、その前に色々過程があってね？
それを済ませてから普通プロポーズするんだよ？
それに、私にだって好きな人ができるかもしれないし。
だから、史弥君がもっと大きくなってもまだ私のことが好きだった時は、考えよう？」

「・・・・・うん。わかった」

「よし、じゃあ、その時になるまでね？」

実際プロポーズされて悪い気はしなかった。でもまだ可能性があるこの子に私なんかを
好きなままにさせておくわけにはいかないんだよなぁ。

「どう？　光ちゃん、ここでの仕事には慣れたかしら？」

「はい、おかげさまで」

「そう、よかったわ。あっ、そうそう、何月かに一度、都会の方へ行くことになってるのよ」

「え・・・・・そうなんですか・・・・・・」

「そう、それに私だけじゃ持ち切れなくて持って帰ってくる物にも限りがあるでしょ？
事情が事情なのは知っているわ。でも悪いんだけど、一緒に行ってくれないかしら？」

都会の方へいけばあの男に会うことがあるかもしれない。でも、この子たちの為なら・・・・・・！

「わかりました。私が行きます」

「ごめんなさいね。頼んじゃいけないことだってわかってはいるんだけど・・・・・・」

「いえ、気にしないで下さい。ここに住まわしてもらっているのですから、
これくらい当然です」

「ありがとうね。出掛けるのは今月の〇〇日だからね？」

「わかりました」

いくら都会って言っても、あの男に会う確率なんてかなり低いはず。
そう簡単に会う事なんて無いわよね？
でも久しぶりの都会かぁ、結構楽しみかも！

第三十一問　私とお姉ちゃんとひまわり園（後書き）

今回は光です。

あれから数ヶ月。すっかり田舎での暮らしに落ち着いた私たち。でも、そんな中
お姉ちゃんが突然姿を消す。その時から、私の運命の歯車は大きく回り始めたの
かもしれない。

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『失踪と再開と一年後』

さあいくよ！　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第三十二問　失踪と再開と一年後（前書き）

更新遅くてすみません。

それと今回も後半に以前と同じく若干な暴力的な表現が含まれていますので
ご覧になる際にはご注意下さい。

第三十二問　失踪と再開と一年後

問　次の問に答えなさい。
『ドイツ軍の重戦車、キングタイガー（ティーガー?）が初めて実戦投入された戦いは何と呼ばれているでしょうか』

姫路瑞希の答え
『ノルマンディー上陸作戦』

教師のコメント
正解です。１９４４年６月６日に開始されたこの作戦は第二次世界大戦中、屈指の大作戦として知られています。映画やゲームの題材として扱われることも多いようですね。

紅水鳥の答え
『メダル・オブ・オナー』

教師のコメント
このゲームは先生も好きです。

吉井明久の答え
『阪神－巨人戦』

教師のコメント
タイガー違いです。

水鳥　ｓｉｄｅ

「それじゃ、水鳥ちゃんお願いね？」

「はい。じゃあ行って来ます」

そういって私はひまわり園を出る。買い物へ行く為だ。既に私と光が家を出て数ヶ月が経った。
もうすっかりひまわり園での生活には慣れてしまった。

「はぁ・・・・・・」

思わず溜め息が出る。私って、何してるのかしらね・・・・・・？

「ははっ・・・・・・グス」

あ、涙・・・・・・。久しぶりに流したかも。そのまま歩く訳にはいかないので近くの川の土手に
座り込む。

「ゴメンね、光。こんなダメなお姉ちゃんで・・・・・・」

最近こんなことばかり考えてしまう。ダメだとは思っているけれど考えてしまう。
私は光に何をしてあげられるの？

「こんなダメなお姉ちゃんならいっそ、いない方が・・・・・・」

『死にたいのか？』

「えっ？」

不意に声を掛けられる。振り向くとそこには『キン○ダムハーツ』に出てくる○？機関のような全身を黒のコートを着て、フードで顔を隠した服装をして人が私の後ろに立っていた。

『死にたいのか？』

同じ質問を聞いてくる。

「そうなのかもね・・・・・・どうせこのまま光の為に何もできないなら・・・・・・」

『そうか・・・・・・ならば・・・・・・一つお前に質問がある』

「私に？　死にたいと思っている私なんかに？　答えてあげても良いけど、一体何を聞くというの？」

『お前は何が欲しい？』

「はい？」

『答えろ』

一体何を聞きたいんだろう？

『では少し答えやすくしよう』

選択肢でもあるのだろうか？

『倫理は学校で習ったか？』

「まあ、一応」

一応現代社会は得意科目だけど・・・・・・

『では、四元徳（しげんとく）は知っているか？』

四元徳？　確か・・・・・・

「古代ギリシャで重んじられた四つの基本的な徳の事でしょ？
確か、知恵・勇気・節制・正義の四つ」

当たってるよね？　多分・・・・・・

『そうだ。よく勉強しているみたいだな』

「それで、四元徳が何の関係があるの？」

『では質問をしよう。お前は、知恵・勇気・節制・正義。この四つの中でいずれかが手に入るとしたら、何を望む？』

「え？　う～ん」

ハテ、どれもコレも私は欲しいしなぁ～

『だが、ここで追加だ』

「追加？」

『知恵・勇気・節制・正義。そしてもう一つ。居場所。このいずれかが手に入るなら、どれが欲しい？』

居場所・・・・・・正直、その言葉に強く反応してしまった。

でも、仕方ないと思う。人間誰しも居場所が欲しいと願うのだから。

『さあ、答えろ』

私は・・・・・・どうせ手に入るなら・・・・・・

「どれかが手に入るって言うんなら、私はいらない」

『ほう・・・・・・』

「私は、どれか一つだけじゃなく、全て欲しい。　知恵も勇気も節制も正義も居場所も全部欲しい！」

『・・・・・・フッ。良い答えだ』

「えっ？　てっきり『欲深い人間だな』って言われて終わりだと思っていたけど」

『いや、あれで良いんだ。人間から欲が消えることは無い。寧ろ、その欲で人は変われる。

良くも悪くも、な』

確かに。この人の言っている事は正しいと思う。

『お前は自分に変化を望んでいるのだろう？　強くなりたいと』

「ええ」

『ならば・・・・・共に来ないか？』

「えっ？」

『共に来れば、先ほどお前が望んだ物を急激な速度で手に入れられるだろう』

「ホ、ホントに！？」

だとしたらこれは相当魅力的な話だ。

『だが、その代わり・・・・・お前は二度と今の生活には戻れないだろう。
しかも、こちらの世界は死と隣り合わせだ。何時死ぬかもわからない。それでも良いのならば・・・・・』

「・・・・・少し、時間を貰えないかしら？」

『どのくらいだ？』

「一日だけでいいの。妹に、光に。最後に」

『・・・・・いいだろう。では、明日の深夜。もう一度、ここで・

・・・・・』

「えぇ。ありがとう・・・・・・そういえばあなたの名前は・・・・・・」

振り向き様に聞いたがその男の姿は既に無かった。

「さて、と。サッサと買い物を済ませて帰りますかっ！」

光、私は強くなる。もうあなたと会えなくなるとしても、
あなたが笑顔で暮らせる日常を守れるのならば、私は・・・・・・

光　ｓｉｄｅ

夕食を食べ終えて皆が寝付いた頃、お姉ちゃんが話しかけてきた。

「ねぇ、光。久しぶりに一緒にお風呂入らない？」

「？　別にいいよ？」

珍しい。普段は恥ずかしがってそんなこと言わないのに。

「ゴメン。待たせた？」

「ううん。待ってないよ」

バスタオルを持ってお姉ちゃんが入って来た。くっ！　やっぱり色々負けてる・・・・・！
まぁ女の子同士なんだから恥ずかしがることは無いんだが、こう、何というか、
見せ付けられている様な気がして悔しい・・・・・・！

「？　どうしたの光？」

「いや、その・・・・・・お姉ちゃんスタイルが良くて良いなぁって」

「フフッ。そんなこと悩んでいたの？」

「そりゃ、私だってそういうのを気にするお年頃ってやつだからさ」

「大丈夫よ。その内光だってこうなるわよ」

「そうかなぁ？」

「えぇ。まぁとりあえず身体洗わない？」

「そだね。じゃあ久しぶりに背中洗ってよ」

「いいよ。終わったら私のもね」

そんな会話をした後、お互いに身体を洗いあった。時折お姉ちゃんの胸を触ってみた。
柔らかいし大きい・・・・・・！　私とお姉ちゃんは浴槽に浸かる。

「ふぅ。良い湯ね」

「まったくだよぉ～」

「ねぇ光、明日お姉ちゃんと一緒に姉妹水いらずでどこか出かけない？」

「そうしたいけど皆の面倒を見なくちゃだよ？」

「それについては大丈夫よ。千代さんには許可を取ってあるわ。働き過ぎだから息抜きして来なさいって」

「ホント！？　やったぁ！　久しぶりにお姉ちゃんと出かけられる！」

「そんなに喜ばれるとこっちも嬉しいわ」

私とお姉ちゃんは笑い合った。

「ねぇ光」

「うん？」

「もうあなたは私がいなくても平気？」

「そんなことない！　私はいつまでも半人前だよ・・・・・・」

だからお姉ちゃんがいないとダメなのに・・・・・・

「ダメよ光。もうあなたは私がいなくても大丈夫なようにならないとね？」

「でも・・・・・・」

「じゃないと、私も安心できないから」

「お姉ちゃん。どこか行っちゃうの？」

「行かないよ。光が一人前になるまでは」

「だったｒ「だからって、いつまでも半人前はダメだって言ってるでしょ？」うぅ～」

「ちょっと真面目な話しをするわよ？　・・・・・・光は幸福になりたいと思ってる？」

「そりゃそうだよ。というか幸福になりたいとは思わない人なんていないよ」

「そう。誰だって幸福になりたいと思ってる。でも、他人の幸せには他人の不幸が必要なんだってわかる？」

「ドラマとかでやってるやつだよね」

「そう。でもね、光・・・・・・私は、幸福を望まない」

「えっ・・・・・・」

「綺麗事のように聞こえるでしょうけど、私は他人を不幸にしてまで幸福を望まない。
寧ろ、自分が不幸になって誰かが幸福になるのであれば、喜んで私

は不幸になる。
光、ワザと不幸になれって言ってる訳じゃないことはわかるわよね？」

「うん」

「誰かの幸せの為なら、自分が傷ついても構わない。人の為の人になりなさい？」

「わかった。お姉ちゃんがそうしているように私もそんな人になるよ！」

「そう言ってくれると思ってた。流石は私の妹ね」

「もちろんだよ！」

後日、私とお姉ちゃんは都会へ遊びに行った。そしてそれが、私とお姉ちゃんとの最後の思い出になった。

水鳥　ｓｉｄｅ

もう光は、私がいなくても大丈夫・・・・・・
光、私は・・・・・・あなたの姉であったことを誇りに思うよ。

『良かったのか？　一日で。もう一日待っても良いが？』

「良いの。そうなると、別れにくくなっちゃうから」

『そうか・・・・・・ならば行くぞ？』

「えぇ・・・・・・」

この人が連れて行ってくれる場所で、私が欲しい物が手に入るなら・・・・・！

そして、私のやりたいこともいつか叶うかもしれない、そんな気がする・・・・・・

一年後・・・

光　ｓｉｄｅ

約一年前、お姉ちゃんがいなくなった。今思えば、あの時のお風呂場での会話は別れの
言葉だったのかもしれない・・・・・・
それに気付かなかった私って、バカなのかしらね・・・・・・

「光ちゃん、準備はいい？」

「はーい！　今行きまーす！」

私は中学二年生に進学。お姉ちゃんがいなくなってからは大人っぽく振る舞った。
お姉ちゃんがあんなだったのだから、妹の私がしっかりしないとお姉ちゃんの評判に泥を
塗りたくないしね。できることなら、もう一度お姉ちゃんに会いたい。

テレビでお姉ちゃんは行方不明と報道された。何か事件に捲き込まれたとかだろうか？
などと暗中模索したが無駄だと思いすぐに止めた。いつか必ず見つけ出してみせるからね？
そして今日は定期的に都会へ行く日だ。しかも今回は子供たちも一緒だ。
そう駅までは遠くないので徒歩で行く。その後駅で電車を使い都会へ行く。片道が一時間とまた長い。子供たちは皆寝ている。これでは都会へ何しに行くんだかわからないじゃん。

都会・・・

「わぁ～すっご～い！」

「大きい建物がいっぱい！」

「人もこんなにいるよ！？」

太一君、静佳ちゃん、沙耶ちゃんがそれぞれの感想を興奮気味に言う。
まあ仕方ないだろう。皆都会へ来るのは初めてなんだし。

「ほら三人とも、いつまでもそこにいたら置いてくよ？」

そう言うと三人ともちゃんと着いて来た。なにせ今日はーーー

？？？・・・

「はい！　じゃあ思う存分遊ぼうね！？」

『わ～い！』

そう、今日は遊園地に来ているのだ。実はこの前福引きで当たったのでここへ来ている。

「光お姉ちゃん一緒に乗ろう！？」

「千代おばさん！」

「そんなにいっぺんには乗れないわよ」

「そうですよ。一つ一つ楽しんでから次のに乗りましょう？」

などと私と千代おばさんは引っ張りだこ状態だ。まあこんなのも悪くないかな。

「ふぅ。疲れた～」

「まったくですよね。あの子たちはまだ遊び足りないみたいですけどね」

「えぇ」

今千代おばさんとベンチで休憩中。彼らは今クマやらウサギの被り

物を着た人に風船を
貰う為に並んでいる。

「ノド乾いたんで飲み物を買って来ますね？　何か飲みたい物はありますか？」

「そうねぇ、普通にお茶で良いわ」

「わかりました」

そう言ってベンチを立ち、近くの自販機の元へ行く。
お金を入れてボタンを押し、落ちてきたペットボトルを抱え、おばさんの元へ戻ろうと
立ち上がりつつ振り返ったその時――

ドンッ

「あっ」

誰かとぶつかっていくつかペットボトルを落としてしまった。

「す、すみませんっ！」

「いやっ、こちらこそすみまっ・・・・・・！」

？　相手が何故か喋るのを止めた。様子が気になったのでその相手の顔を見るとーーー

――忘れもしない、あの男の顔があった。

しばらくお互い何も言わず動けなかった。

えっ・・・・・・!?　何であの男がこんな所に!?　どうして!?　どうしてどうしてどうして

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして!?

何で・・・・・・!　何であの男がここにいるのよ!?

「光・・・・・・!　貴様こんな所に・・・・・・!」

父が腕を掴んできた。痛いっ!

「放してよ!　もう私はあなたの所へは戻らないっ!」

「知ったことか!　お前がいないせいでどれだけ苦労したかわかっているのか!?」

「それこそ知った事じゃないわよ!　自分が私とお姉ちゃんに家事を押し付けてたのが悪いんじゃない!　それを恰も私が一方的に悪いかの様にーーー」

パンッ!

突然頬を叩かれた。先ほどの会話で既に周りの人が注目していたのにこれで更にまた注目を浴びることになった。

「黙れっ！　いいから来い！」

「いやっ！　放してよ！」

でも私はそのまま父の車まで引きずられるような形で連れて行かれた。

この男に連れて行かれたことと、回りにいた人が誰も助けてくれなかった事が同じくらい辛い。

紅家・・・

「くっ！」

「さぁ、早く片づけろ！」

私を投げ捨てるように床に放った後、父は言い放った。

「・・・・・」

私がするのを躊躇っていると・・・・・・

「早くしろっ！」

パンッ！

「っ！」

また頬を叩かれた。また・・・・・・この生活に逆戻りか・・・・・・

それからはやはり以前と同じ様なことの繰り返しだった。
しかも今回は私がまた家出をするかもしれないから、ご丁寧に自分が外出をする時にはどこから手に入れて来たのかは知らないが、手錠で私を逃がさないようにしていた。
当然学校には行っていない。あの男が戻ってくるまではただただ時の流れを待つばかり。

数日後・・・

ある日、何だかいつもよりイライラして帰ってきた。いつも通り私に夕食を作らせる為に手錠を外す。
夕食を父のいるテーブルへ置こうとするとーーー

「飯はいらんっ！」

ガシャンッ！

父が置こうとした夕食を払い、私の手から落ちた食器が割れる音だ。
自分から作らせるようにしている癖に何なんだ。

「イライラしているんだから要らないことくらいわかるだろっ！」

わかる訳がない。人は他人の考えている事を読めないのだから。相変わらず理不尽な事ばかりを言う。

だが今回いつもと違いーーー

「だいだいお前はいつもいつも・・・・・・！」

ガンッ！

テーブルの上にあったガラス皿で私を殴りつけてきた。痛いっ！

いつもいつも何だ？　私があんたに何をした？　ちゃんと言いつけ通りにしているだろ？

いつもいつもはこっちの台詞だ。父はそのままのしかかってきた。そしてひたすら私のことを殴ってきた。頭を両手で守るがいつまで続くか・・・・・。このままじゃ殺される！　こんな所で死にたくない！　お姉ちゃんを見つけなきゃいけないのに！　死にたくないの一心から私は父の腕に噛み付いた。

「くっ！」

私は振り払われたが運良く父は持っていたガラス皿を落とした。

私は自慢の運動神経を活かして、素早くガラス皿を拾い、父の顔面を殴りつけた。

怯んだのを見逃さず、数度殴りつける。すると父は一転し、怯えたように言った。

「ま、待ってくれ光！　お父さんは本当はこんなことしたくなかったんだ！」

「・・・・・・」

「本当は光ともう一度暮らしたかったんだ！　でもどうしたらいいかわからず、また光がどこかへ行ってしまうんじゃないかと思って・・・・・・」

「・・・・・・」

「だ、だから・・・・・・もうあんなことしないから、もう一度父さんと一緒に暮らさないか？」

「・・・・・・」

フフ・・・・・・父さん、何でそんなことを言い出すの？
今まであんな酷いことをしてきたのに・・・・・・今更そんなことを言い出すなんて狡いよ・・・・・・
始めからそう言ってくれれば良かったのに。そうすれば私、まだ少し信じられたよ？
でもね、父さん私はそんな言葉、信じられないよ・・・・・・
もしその言葉が本当なら、その右手の動きは何？　左手で私を制しながら何かを探すような動き
をしているその左手は何？　残念だけどそこら辺には何も落ちてないよ？　あなたが私を痛め付け
る道具は、何も落ちてないんだよ？

「お父さん・・・・・・」

「光・・・・・・！」

父が安心しきった様で、私を抱きしめようとして、近づいてくる。
でも右手は私が左手で持っている
ガラス皿へ真っ直ぐ伸びていった。私は奪われる前に一歩後ろへ下がり、両手で思いっきり父の顔面にガラス皿を叩き付けた。

「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・はぁ」

鉄製だったせいか、その一撃で父は頭から血を流して床に倒れ込んだ。
よく私も気絶しなかったよね・・・・・・もしくは死ななかったよね・・・・・・運が良かったのかな？　！　今はこんな事を考えている場合じゃなかった。とにかくこの場から逃げ出したい衝動に駆られた私は家を飛び出した。電話をすることやエプロンを脱ぐことをせずに何故か靴を履くことだけは忘れずに・・・・・・

そして私は走り続けた。いつの日かお姉ちゃんと家出をした時の様にただただ走り続けた。
どこか遠い場所へ行く為に・・・・・・

第三十二問　失踪と再開と一年後（後書き）

今回は銀と光です。

もう、あの二人に、僕は必要ない。あの二人に必要とされないなら、僕の存在理由は無い。ならーーー

私は、もう彼らの元へは戻れない。居場所を失った私はただただ、夜の街を彷徨うだけーーー

次回　バカと銀色と召喚獣　『僕と私と黄泉の国？　前編』

いくぞ、光！　ええ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！！

第三十三問　僕と私と黄泉の国？　前編（前書き）

サブタイトル変更です。

たびたびすみません！

それともう一つ皆様に謝らなければならないことができました。
自分はＷｏｒｄ２００３で執筆し、それをコピーして貼り付けて、ここに掲載しております。前々から本文がＷｏｒｄ２００３で書いたのと行がズレていたので直そうとしていたのですが、どうも直らないようです。
これから先も行のおかしなズレがありますが、そこは皆様の寛大な心とスルースキルで見逃して下さい！（ぺこぺこ）

本当にすみません！

第三十三問　僕と私と黄泉の国？　前編

問　次の問題に答えなさい。
メルカトル図法で作成された地図は、どのような性質を持っているでしょうか。

姫路瑞希の答え
『角度は性格だが、方位と面積は不正確である』

教師のコメント
正解です。メルカトル図法の地図は海図として使われています。他にも、
モルワイデ図法の地図は分布図に、正距方位図法はの地図は航空図に使われています。性質の違いによって、用途にも違いがあるということですね。

氷花紫苑の答え
『偵察機なので多分正確な地図だと思います』

教師のコメント
イギリスの無人偵察機のメルカトルではなく、メルカトル図法です。

吉井明久の答え
『どんな性質の持っていたとしても、分け隔たり無く接したいと思います』

教師のコメント
殊勝な意見ですね。

男子部屋・・・

自分の教えておきたい過去の部分は話せたし、明日からは皆と本当の意味での友人になれそうだと思う。そんなことを考えながら僕は布団に入っていた。僕は皆と出会えて、本当に良かったと思っている。大切な、守りたいと思える存在に出会えたから。本当は出会えなかったと思う。僕は――

女子部屋・・・

光　ｓｉｄｅ

私は自分の過去を打ち明けた。本当は聞かせるべきじゃなかったと、今でも少し思う。
でも、いつかこうしておいて良かったと思える日が来る事を願っている。だって、皆とはこれから作っていくんだから。いろんな事を・・・・・だからーーー

『あの時、死にたいと思ったあの時。死ななくて良かったと、今でならハッキリと思える』

過去の光　ｓｉｄｅ

「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・はぁ」

とある日の夜、少女が走っていた。その少女の容姿からか、はたまたその格好からなのか、道行く大半の人々が振り返る。

「はぁ・・・・・・はぁ。これからどうしよう・・・・・・」

ホントに、どうしよう・・・・・・。今走って来て、疲れたので座り込んでいる。

お父さんは死んだのかな？　まあ今となってはどうでも良いけどね・・・・・

あ、どうも寒いと思ったらいつの間にか服が破れて長袖から半袖になっている。

それにエプロン付けたままだし。

「ん？」

何やら向こうで人だかりができている。何だろう？

興味をそそられ、人だかりの方へ歩み寄って行くと、フロントガラスにヒビが入った車が猛スピードでこちらに向かって来た。まったく、危ない運転をするなぁ・・・・・・でも何でヒビが入っているんだろう？　何かあったのかな？　何があったのかを確かめる為に人だかりの方へ再度歩いていくと、今度は人だかりの中から水色の髪をした男の子が出てきた。すごく慌てている様子で何かを探していた。

「何を探しているの？」

「え？」

折角だから最後に人助けというヤツをやろうと思い、声を掛けた。
こちらに振り返った男の子は丁度私と同い年くらいの子だった。し
かも顔は俗に言う
イケメンというヤツだ。年が近い男の子と話すの久しぶりだなぁ。

「フロントガラスにヒビが入った車を見なかった！？」

フロントガラスにヒビ？　そういえばさっき猛スピードでこちらに
向かってきた車にもヒビがあった。あの車のことだよね？

「知ってる。着いて来て？」

「ありがとう！」

そう言った後、私と彼は走り出した。相当慌てているみたい。あの
車に何があるんだろう？

「どうして慌てているの？」

気になったので聞いてみた。

「幼なじみがその車に誘拐されたんだ」

「え・・・・・・」

「だから俺はその車を見つけて二人を助けなきゃいけないんだ。俺

はあの二人とその笑顔を守る為だけに存在しているんだから・・・・・！」

「そうなんだ・・・・・・・」

私は正直彼が羨ましい。今彼は生きる目的を持っている。それに比べて私は・・・・・・・

「ゴメン。わかるのはここまでなんだ」

「そうか・・・・・・でも大分絞れたよ！　ありがとう！」

「まだだよ。私も手伝うよ」

「本当!?　ホントに助かる！」

その後私と彼はその車が車庫に入っているのを見つけた。

「ホントにありがとう！　この恩は忘れないよ！」

「気にしないで。私も、最後に人助けができて良かったよ」

「え・・・・・・？　最後・・・・・・・？」

「それじゃ！　幼なじみを助けるの頑張ってね!?」

「えっ、あ、うん。絶対助けてみせるさ！」

私は彼と手を振って別れた。本当のヒロインやら主人公ならあそこで彼と一緒に助けに行くべきなんだろう。でも私はそうする気には

なれなかった。それは多分私が、
ヒロインや主人公ではないからだと思う。

数日後・・・

しばらく歩いた。もうここがどこかなんてどうでも良いことだ。唯単に、疲れた。
その場に座り込む。流石に冬なのでコンクリートでできた道路は冷たかった。

「ごめんね。お姉ちゃん。私、何もできないまま、死んじゃいそうだよ」

お腹も空いた。手を見れば手錠の痕が残っている。女の子としてはちょっと致命的だよね?
それにあの時より痩せたなって思う。気持ち悪いくらいに。

「最後は醜く死んでいくのか・・・・・・一回くらい恋とかしたかったな・・・・・・」

でも近い年代の男の子なんて知らないし、まぁ知っているといえば、数日前に会った
彼くらいだろう。そういえば彼、格好良かったな。顔で判断するつもりはないけど、
幼なじみの為に単身で誘拐犯のアジトに入っていった彼は高く評価すべきだろう。
彼だったら、初恋の相手でも良かったかも・・・・・・

「でも、これならお姉ちゃんが目指した人に成れたのかな・・・・・・」

視界が薄れてゆく・・・・・・ん？　冷たい物が・・・・・・

「雪・・・・・・」

暗くなった空から、時期より少し遅れた雪が降り注いでいた。
久しぶりに見たなぁ。去年は降らなかったし・・・・・・

「私も、こうやって溶けて、誰にも気付かれず消えて無くなる。そうなるのかな・・・・・・」

それも良いかもしれない。私は最初からいなかった。存在しなかった、ウソのような
存在。結構傑作かも・・・・・・

「黄泉の国でお母さんに会えるかな・・・・・・」

もしかしたらお姉ちゃんやお父さんもいるかもしれないけど、あっちの世界でもう一度、幸せな家族をやり直せたら良いな・・・・・・

そして少女は力尽き、その場に横たわった・・・・・・

過去の銀？　ｓｉｄｅ

あれから何日経ったんだ・・・・・・？
人の目を盗んで病室の窓から飛び降りたあの日から、俺はこの辺の

チンピラや不良やらを叩きのめす日々を送っていた。とりあえず、もうあの二人が誘拐されないように元を絶っておこうと思ったからだ。そして今日もーーー

ドンッ

「よぉ兄ちゃん、ぶつかっといて素通りはないんじゃないの？」

さて・・・・・今日のヤツは楽しませてくれるのか？

「ククッ・・・・・・見ツケタ」

「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・はぁ」

今日も終わった。俺もチンピラも返り血を浴びている。もっとも、俺の場合今日の分の血だけじゃないがな。そういえば左腕がまったく動かなかったなぁ・・・・・・

病院を抜け出して、最初の連中を潰した時に左腕に包帯が巻かれていたっけなぁ。

骨折でもしてんのか。やっぱり。でも痛みをまったく感じないから、便利だなぁ。

しばらく歩き、とりあえず近くのベンチに座る。冷てぇ。そういえば冬だっけなぁ。

「おい・・・・・そろそろ起きてくれ。視界がぼやけてきやがった。俺も寝かせてくれ・・・・・・とりあえず、お前の望むことをやっといたからよ・・・・・・」

ダメだ、流石に身体が動かねぇ。俺はベンチに横になる。

「雪、か・・・・・・」

暗くなった空から、時期より少し遅れた雪が降り注いでいた。
俺は初めて見るな・・・・・・冷たい。これが雪・・・・・・

「このまま俺たちも消えるかもな・・・・・・」

意味も無く、空へ手を伸ばす。何故か何かに届きそうな気がしたから・・・・・・

やがて、その手はダラン、と力を亡くし、少年の意識と共に崩れ落ちていった。

???・・・

過去の銀　ｓｉｄｅ

「・・・・・・ん・・・・・・・・？」

目が覚めた。あれ？　何でだろう？　何で生きているんだ？　それと、何で暖かいんだ？他にもわからないことがたくさんある。何で僕は布団に入っているんだ？
それに左腕が動く。頭部のキズの痛みも無い。それと、僕が抱きしめている柔らかい物は何だ？とりあえず柔らかい物から確認しよう

と自分から放した。するとーーー

「・・・・・・ん？」

ん？　何だ、コレは？　いや、コレと言っては失礼だな。訂正、何で女の子が僕と一緒の布団で寝ているの？　とりあえず数多の有り得ない状況が何故起こっているのか確かめる為、一度ムクリと上半身だけ起きあがる。

「・・・・・・・んぅ・・・・・・・」

はっ！　いけない！　急に布団が無くなり空気に触れたせいか女の子が起きてしまった。これでは回りの状況などを確認するどころではない！
見知らぬ男が自分と同じベッドで寝ていたのだ。驚かない訳がない。叫ばれたら人が来て僕は社会的に死を迎えることに・・・・・・！！
それにしてもこの子、どっかで見たことあるような気が・・・・・・

「・・・・・・あれ？」

やばい・・・・・・・

「（ジー）」

やばい、やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい。

「・・・・・・おはよう（ニコッ）」

だが、少女から返ってきたのは、僕が想像だにもしない言葉だった。
あと、笑顔が眩しい。

「寒いよ・・・・・・まだ寝ていようよ？」

・・・・・あれ？　何でこの子は何とも思わないんだろう？

「えっと、あの、僕・・・・・・男だよ？」

耐えきれなくなったので聞いてみた。

「？　知ってるよ？　そんなのいいから一緒に寝て暖まろう？」

ダメだ。僕の中の常識が崩れていく・・・・・・
女性って普通彼氏とかでもない限り男性とは自ら望んで『一緒に寝よう？』などど爆弾発言はしないはずなのに・・・・・・！

「もぉー！　寒いんだから早くしてよっ！」

「うわっ！？」

少女はいきなり僕を押し倒して、僕が捲った布団を自分と僕の上に掛けて自分も僕の上にのしかかってきた。え？　これ何てエロゲ？

「あったか～い」

「ちょっ！？　ちょっと！？」

さらにこの子は両腕で僕をガッチリ固定して逃がさない気だ。それにこの子の肩の下まで伸ばした赤毛と声で思い出したが、あの時誘

拐犯共の車を一緒に探してくれた子だ！　でもこの状況は色々ときつい！　心臓の鼓動がバックンバックンですよ！

「何でこんなに鼓動が早いの？」

気付かれた・・・・・・！

「キ、キミのせいなんだけど？」

「え？　私キミに何かしたっけ？　したといえば一緒に車を探したくらいだけど？」

覚えていたのか・・・・・・だったら話しが若干早い・・・・・・はず。

「と、とりあえず！　その・・・・・・離れてくれないかな？　僕が、色々とやばいから・・・・・・」

「私そんなに強く抱きしめてないけど？　それともなに？　私が重いと言いたいの？」

しまった！　怒らせてしまったか！？　遠回しに言ったのがまずかったか！？
こうなったら多少の恥は覚悟で言うしかないか・・・・・・！

「い、いや！　断じてそんなことはない！　重くはなくて、むしろ軽い方だし！　それに女の子に抱きしめられている時点で嬉しいよ！？　だから、その・・・・・・
僕が言いたいのは・・・・・・キ、キミみたいな、可愛い子に一緒のベッドに寝ていて、しかも押し倒されているから・・・・・・そ

の、僕が興奮しちゃって色々と間違いが起こってしまうから離れて欲しいってこと！／／／」

た、頼む！　通じてくれ！

「か、可愛い・・・・・・／／／」

って反応するところはそこ！？

「い、いや、そこは『興奮しちゃうから』ってところに反応してもらわないと困るんだけど・・・・・・」

「え・・・・・？　興、奮？　あっ！　そういうこと？」

「そういうこと」

ようやく伝わったみたいだな。

「で、でも・・・・・・その・・・・・・」

「どうしたの？」

「私、温もりが欲しいの・・・・・・だから、もう少しだけ、このままでいさせて？」

っ！？！？！？　今のは一番やばかった！　元からこの状況だったから興奮していたのもあるが、この体勢から目を潤わせての上目遣いは卑怯！

か、可愛すぎる！　危なかった・・・・・・！危うくこの子を逆に押し倒していた

ところだ！　というか意味が伝わったのに何で更に温もりを求めてくるの！？
何かあったのは検討がつくけどさぁ！

「ダメ、かな・・・・・・？」

あぁ、もうどうにでもなれ。耐えきれなくなった僕は名も知らない少女を抱きしめた。
その少女は自分の腕の中にスッポリとはまった。女の子って存外小さいんだな・・・・・・

「襲っちゃったら、ゴメン」

「充分襲われていると思うんだけど？」

「キミがこうしてくれって言ったんじゃないか！」

「わかってる・・・・・・ありがとう」

少女も僕のことを抱きしめてきた。実際、僕も人の温もりという物を欲していたんだと思う。だって、こんなにも簡単に夢の世界へと旅立てたのだから・・・・・・

数時間後・・・

「先ほどは色々とすまなかった・・・・・・ゴメン。
セクハラ紛いな事をしてしまって・・・・・・／／／」

「え？　私セクハラされた？　別に私は何も気にしてないけど？」

僕の謝罪の言葉を返してくれ・・・・・・それと少しは気にして欲しい。

あれで何も気にしてないってことはどこまでオッケーなんだ？

「変なことを聞くがどんなことをされたらキミ的にはセクハラになる？」

コレも一応セクハラだと思う。

「え？　う～ん、初めてを奪われたら？」

「初めてって、キス？」

「そうだね～。まあもう一つの方もだけど」

「それ以外は？」

「ワザとじゃないならまだ許せるかな？」

おいおい・・・・・・。キスとあっちはダメで他はワザとじゃなければいいのかよ・・・・・・

僕としては色々困る。でも男としては嬉しい、のか？

「何？　さっそくどうやって触ろうか考えているの？」

「そ、そんなわけないだろっ！／／／」

「別にキミだったら触らせてあげるのに～」

「うぇっ！／／／」

何て爆弾発言を！

「ほら」

「え、ちょっ！？」

彼女は僕の手を取り、その手をーーー胸ではなく脇に挟んだ。そして耳元でーーー

「止めさせない辺り、触りたいんでしょ？　エッチ」

「っ！？！？／／／」

なんて囁いてきた。ま、まさか・・・・・からかわれたのか！？

「な・・・・・・な・・・・・・／／／」

「プッ！　あはは！　顔真っ赤だよ？　面白ーい！」

や、やられた・・・・・・何て様だ。

「～～～／／／」

恥ずかしさのあまり若干涙が出てきた。

「うわっ！　お、男の子なのに涙＋上目遣いとか・・・・・・似合ってるね？」

「全然嬉しくない！」

「まあまあそんなに怒らないでよ？　キミをからかってみたかっただけだから。それに私だって一応女の子だよ？　そんな簡単に胸を触らせてあげる訳にはいかないよ。
キミが私の彼氏だったら話しは別だけどね？」

「・・・・・そうだね」

「拗ねちゃった？　ゴメンってば～」

その後僕は何とか機嫌を取り戻した。

「とりあえずお互いを知っておく為に自己紹介からする？」

「だね」

「じゃあ僕から。僕の名前は蒼月銀。年齢的には中学二年生、だと思う。
一応料理は簡単な物ならできる。ってそんなありきたりな自己紹介はいいや。
確認だけど僕とキミは一度出会っているよね？」

「うん。そういえば幼なじみは助けられた？」

「おかげさまでね。まあもう彼らに僕は必要ないみたいだけどね・・・・・」

『恐い・来ないで』って言われちゃったし・・・・・・

「ゴメン・・・・・・」

「気にしないで。さっ、次はキミだよ？」

「じゃあいきます。私は紅光。私もあのまま中学校に通っていたら二年生でいいんだと思う。とりあえずここまでで良いよね？」

「まあ名前がわかれば良いし。というか同級生だったんだな。親近感が沸いてちょっと嬉しいよ」

「私も。年が近い男の子と話すの久しぶりで楽しいよ」

年が近い男子と話すのが久しぶりだからさっき僕に平気で抱きついたのか？

「え？　女子校に通っていたの？」

「ううん。田舎の方の中学校だから生徒の数が少なくて、数えられるほどしかいないの。
それで中学生に男子がいないの。コレはあとから知ったんだけどね」

だったらさっきまでの少しズレた発言も納得がいく。
それと僕はもう一つ気になっていた事を聞く。

「あのさ、僕はここに来た記憶が無いんだが、キミは「光で良いよ？」え？　じゃ、じゃあ光は／／／ここに来た記憶ある？」

「無いよ。私も、気付いたら銀と一緒に寝ていたの。てか何で私の名前呼ぶとき顔赤くなってんの？」

フレンドリーなのはこの状況では助かる。後者についてはーーー

「女の子の名前を呼ぶのに慣れてないんだよ・・・・・・／／／」

「でも恥ずかしい？」

「ちょっと」

「へぇ～」

「な、何だよその目！？」

「いんや～別に～」

か、完全に向こうのペースだ・・・・・・！

「話しを戻すよ！？「あ、逃げた」うるさいっ！　と、とにかく、僕も光もここに来た記憶は無い。じゃあ今度はここで目が覚める前にどこで何をしてた？」

「私は・・・・・ハッキリ言うと、自分が痩せ細って空腹と疲れで、どこかもわからない場所で意識を失ったよ？　冬だったから凍死か餓死してたと思ってたけど。あれ？　そういえば銀と会った時とほとんど同じ姿に戻ってる・・・・・・！」

「光もか・・・・・・」

「光もかって事は銀も？」

「うん。僕も凍死か餓死をしてたと思う。しかも体付きが光と出会った時と同じのに戻っている。他にも骨折どころかもっと酷い状態だったはずの左腕が自由に動くし、頭部の痛みも消えている。何か、変じゃない？」

「だよね。あのさ・・・・・・こんなこと言いたく無いけど」

「ん？　何か気付いたの？」

「もしかして、私たちーーー死んだんじゃない？」

「否定、できないな。というか、それなら僕の骨折や頭部のキズ。僕と光の体付きが元通りになっていることに合点がいく。残念だけど、それが現段階での最有力の認識で良いんじゃないか？」

「ってことは、ここは黄泉の国で、迎えが来るまでここで待ってろってことかな？」

「かもね」

僕はもう・・・・・現世に悔いは無いし。

「それじゃあさ、ここのリビング的な空間以外にも部屋があるみたいだから、何があるのか見に行こうよ！」

「そうだな」

こうして僕と光はこの空間での設備を確認しに行った。
驚くことに生活に必要な設備・無くても生活できなくは無いがあるととっても便利な物まで全て揃っていた。トイレ・浴室・寝室・物置部屋・キッチン・プール等々。
家具で言えば、洗濯機・ベッド・パソコン・勉強机・新聞・テレビ・ビデオデッキ
なんて物もあった。他にも多くの物があり、本当に黄泉の国かもしれないとも思えてきた。

「ねぇ、お腹空かない？」

「確かに、何も食べていないしな。何か作るか」

リビングにいたのでキッチンにすぐに移動し、冷蔵庫を開けてみる。

「やっぱり何でも揃っているんだな」

一通りの食材は揃っていた。

「何にする？」

「ハンバーグが食べたいかも」

「じゃ、作るか！」

「私も手伝うよ。こうみえても一応料理はできるんだからね？」

「へぇ～。まだ中学生なのに料理できるなんて珍しいね」

「だったら銀もでしょうが」

そんなこんなで僕と光はハンバーグを作った。
僕が話そうとしないのを察して光から話してくれたのだが、光本人も現世には悔いは無いらしい。唯一あるのは『行方不明の姉を捜し出せなかった』こと。
過去については詮索しない方が良いと判断した。

「ご馳走様」

「フフ。お粗末様でした」

「それ、僕の台詞でもあるんだが？」

あはは、と笑い合う僕ら。またこんな瞬間が訪れるなんてね・・・・・

「でもさ、こうしてると私たち」

「うん？」

「新婚夫婦みたいだよね」

「ぶはっ！？」

「えっ！？　ちょっと銀、どうしたの！？」

「いきなりキミが新婚夫婦みたいだと言うからだろ!?／／／」

「ふぇ？　そんなに驚くこと?」

「驚くことだよ!?　まだ会って一日も一緒にいないのに!　そんなこと言われるなんて・・・・・・恥ずかしいに決まっているじゃないか!」

「そうかな～?」

「そうです!」

とりあえず光には色々と教えなければならないことが多いようだな・・・・・・

こうして、僕こと銀と光の黄泉の国での共同生活が始まった。

第三十三問　僕と私と黄泉の国？　前編（後書き）

今回は銀です。

黄泉の国と思われる場所でのなに不自由ない生活。僕はある本を見付けた。
その本の問に光と共に答える。その問が僕と光の関係を変えることになるとは知らずに・・・・・・

次回　バカと銀色と召喚獣　『僕と私と黄泉の国？　後編』

いくぞ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第三十三問　僕と私と黄泉の国？　後編（前書き）

ごめんなさい。

色々と間違いやら、ウソをついてしまったり、ストーリーがアレだとか。

まず訂正を二つさせていただきます。

一つ目・・・・・・清涼祭編の時に出演した『鈴野　雫』ですが年齢設定におかしな部分がありました。実年齢を『２８』→『２３』に変更させていただきます。

度々このようなミスが後から発覚してしまうことを心から謝罪致します。

二つ目・・・・・・レフェルさん申し訳ありません。感想の返信部分で

秀吉と優子が次回出ると記入しましたが、出ませんでした。執筆途中で、出して

しまうと終わり方が宜しくないという結論に至り、出演させることができませんでした。本当に申し訳ありません。

ストーリーがアレになってしまったことについては、優子ファンの皆様からの非難を受ける覚悟はできております。文句は受け付けます。

第三十三問　僕と私と黄泉の国？　後編

問　次の単語を日本語に訳しなさい。

『ｐｏｏｌ』

姫路瑞希の答え
『水たまり、貯水池』

教師のコメント
はい、正解です。水泳用のプールの場合、英語では「ｓｗｉｍｍｉｎｇ　ｐｏｏｌ」となります。
ちょっとしたひっかけ問題ですね。

土屋康太の答え
『天国』

坂本雄二の答え
『地獄』

吉井明久の答え
『楽園、血だまり』

教師のコメント
きみたちの身に何が起こったのですか？

黄泉の国生活、二日目・・・

「・・・・・・ん・・・・・・・」

黄泉の国と思われる場所での生活が二日目に突入した。今日は昨夜話し合った結果、
現世で何が起こっているのかを知る為にメディアを使ってみることとした。
だがまず僕には乗り越えなければならない問題があるみたいだ。それはーーー

「ｚｚｚ・・・・・・」

僕の身体の上で幸せそうに寝ている光である。しかも顔が近い。

「これだと僕はこの状況に慣れてしまうんでは？」

昨夜もくっついてきたし・・・・・・

「ほら、光。起きるんだ」

「・・・・・・うん・・・・・・・？」

軽く揺さぶったら起きた。そして僕の上から退いてくれ。

「あ、おはよう。銀」

「おはよう」

朝食後・・・

「さてと・・・・・・光。何やっているの？」

「え？　着替えているんだけど？」

「それはいい。だが、何故平然と僕の目の前で着替えている！？」

おかげで光の健康的な足とか・綺麗なくびれとか・細いウエストとか・下着とか／／／

「まずかった？」

「昨日触られるのはダメって言っていた割に見られるのは良いのか！？」

「だってまだ下ｇ「ええい！　グダグダ言ってないで僕に見えないところで着替えて来なさい！」そ、そんなに慌てなくても・・・・・・」

無理矢理光を僕の目の届かない場所へ追いやった。

こ、こんなに刺激が強すぎる生活は勘弁して欲しい・・・・・・

お互いに着替えた後、僕はパソコン、光がテレビで情報を得ることとなった。

「どうやらまだ私たちは中二みたいだよ？」

「そのようだね。僕たちが初めて出会った時からまだ十日程度しか経ってない。
向こうとこっちじゃ時間に差は無いみたいだ。というか黄泉の国って電波来るのか？」

「黄泉の国だから都合良く設定されているんじゃない？」

「ほへぇ～」

もう何でもありなのかもしれないな・・・・・・

「あ、ズーム○ンやってる」

「何か気になるニュースやってた？」

「えーっと、驚くようなニュースはやってないよ？　そういえば私たちの死体って
見つかってないのかな？」

「僕もそれについて今調べてみたけど、ニュースにはなっていないよ？
僕は結構目立つところで死んだはずなのに・・・・・・ん？」

突然パソコンの画面が真っ暗になった。テレビもだ。

「な、何だ？」

「ホラー的な展開じゃないよね！？」

「し、知るか！」

い、いったい何か起こるんだ！？　するとパソコンとテレビにーーー

３９　４６　８３　７６　１１　９５　０２　５５
６２　２９

「「・・・・・・・・・・・・・は？」」

何だ・・・・・今の・・・・・・突如として数個の数字が画面上に連続して一つずつ表示された。

「コレって・・・・・・フラッシュ暗算？」

「驚かせないでよ～」

僕も光も項垂れる。あれだけドキドキしたのにオチがコレ（フラッシュ暗算）だぞ？

「しょ、しょうもね～！」

「無駄にドキドキしたわね・・・・・・」

「っていつの間にやら画面が元通りになっているぞ」

「何か今のでやる気亡くした～」

「ごもっとも・・・・・・」

こりゃしばらく休憩だな・・・・・・・

休憩ということで何らかの本を探してみた。おぉ、かなりの本が揃っているな！

「『１４歳からの○学』か・・・・・・」

正直僕はこの本に興味が沸いた。生きているかもわからない今の自分にとっては哲学のことを頭に入れても意味は無いのに・・・・・・。でも僕はこの本を手に取った。

丁度僕は今１４だ。年もあっているんだから良いよね？

リビングに戻り、目次を見る。普通始めのページから読んでいくものだが、

僕の興味を煽る項目が書いてあるページを見付けた。

それはーーー『自分とは誰か』。僕はその項目が書かれているページを開いた。

文章を読み始める。

『君は、自分は自分であると思っている。自分が自分であることは、当たり前だと思っている。その自分って、何だろう。』

「こう問われたら、君は、どう答える？」

「うおわっ！？」

「やっと気付いたんだね」

「脅かさないでよ・・・・・・」

いきなり真横に光がいたので驚いた。

「私は何度も呼んだよ？　銀が気付かなかっただけだよ？」

「え、あ、ゴメン」

「謝られても困るんだけど・・・・・・ていうか銀、何呼んでるの？」

「『１４歳からの○学』だよ」

「また難しい本を・・・・・・！　でも私も興味あるかも」

「意外だな。てっきり別の本でも探しに行くのかと思っていたよ」

「失敬な！　私だってそういうのに興味あるんだよ？」

「じゃあ一緒に読むかい？」

「うん！」

光が僕にくっついてきた。恥ずっ！／／／　これじゃどこぞのバカップルだ！

「あの、そんなにくっつかれると恥ずかしいんだけど／／／」

「私は恥ずかしくないもんっ」

この野郎！　自分が良ければそれで良いのかっ！？

「で、銀はどう答えるの？」

「さっきの問に？　僕はーーー」

『自分とは何か？』この問は僕が今までに出会ったどんな問題よりも難しい。

おそらく答えは無数。いくらでも存在する。人がこの問を見て、答える限り存在する。

でも自分ってのはこの身体の事じゃない。

それは自分の身体だ。自分という存在では無い。

病院から抜け出したあの日から、僕はこんな質問に対しての答えを探していたのかもしれない。あの時、自分自身が何なのか、正直わからなかった。何の為に存在しているのか・何で生きているのか・何で死なないのか・・・・・疑問はいくらでもある。何で神は僕にこんなにも辛い生き方をさせるんだろう？　と、神という存在するかもわからない者に対しても疑問を抱いていた。でも、それを思うことも自分という存在が思ったこと。なら僕とは一体何だ？　自分とは？　僕とは？　蒼月銀とは？

でも今の僕は、一つの答えをもう出していた。光も同じ答えだと信じ、僕は言った。

「『自分とは何か？』この質問に対して、僕だったらこう答える。

それは『心』だと

言い換えるなら、こうやって答えを模索、結論した『意志』だと。

僕ならそう答える」

「やっぱり銀も同じ答えなんだね・・・・・・」

僅かな沈黙の後、光は言い放った。それは僕が望んでいた答えでもあった。

「光も？」

「そう。私も、自分っていうのは今の自分という存在を考え、結論づけたこの意志こそ、自分という存在だと思うの。ねぇ銀。私たちって似ていると思わない？」

「僕と光が？」

「そう。私は思い出したくないからっていう理由で、銀はわからないけど、ここに来るまでに自分に起こった出来事。それを話そうとしないでしょ？」

僕も思い出したくないっていう理由。そして、あの二人のことを忘れる為。

「多分、銀も辛い過去を背負っているんでしょ？　そして私も。でもこの心の痛みは、悲しみは、他人にはどうすることもできない。痛みを、悲しみを知らない人には癒したり、分かち合う事なんてできない。でも、私たちはどう？　お互いに、痛みを、悲しみを、孤独を！　その全てを知っている私たちなら、お互いの痛みを癒すことはできなくても、理解し合うことならできるんじゃない？」

「・・・・・・っ」

光は不意に、僕のことを抱きしめてきた。

「理解して、お互いの痛みをぶつけて、こうやって抱きしめ合うことなら。自分の中の感情を、吐き出すことならできるんじゃないかな？」

僕自身も、光の背中に腕を回した。たまらなく嬉しかった。涙が出た。

泣かないって決めたはずなのに。光も泣いていた。先ほど光が言っていたように、

僕たちはお互いの感情を吐き出した。

「ねぇ、銀」

「何？」

しばらく抱きしめ合っていた僕たちだったが、光がふと顔を放して言った。

「私たちまだ出会って二日目だよね？　でも、私、銀との生活が楽しい。

こうやって似たもの同士で理解し合えるんだから。

それに、こんなことも思っちゃったんだ。

このままずっと・・・・・・銀と一緒にいたいって」

僕は光を押し倒していた。光は少し驚いた様子だったが、抵抗はしなかった。

そして僕はこう言った。

「僕も、光と一緒にいたい」

「それって私のことが好きってこと？　幼なじみはいいの？」

僕の頭に優子と秀吉の顔がチラついた。でもすぐに振り払った。

「確かに二人のことは大切だ。それに、一人に対して僕は、何らかの特別な感情を抱いていたのかもしれない。でもそんなの、今となってはもう関係ない。どうせ、もう会うことはできないんだし・・・・・」

「それってきっと恋をしているんだと思うよ？　その幼なじみに」

「でも僕は今、キミにも同じ様な感情を抱いている」

「えっ・・・・・・／／／　う、浮気だね」

光は顔を赤らめた。でもすぐにいつもの様に僕をからかう時の口調に戻った。

彼女なりの照れ隠しなんだろう。だがそれは僕の中の感情という名の炎を焚き付けるだけだった。

「でも彼女のことはもう諦めてる。独りぼっちになったあの日から」

「・・・・・・／／／」

光は僕の方を見るがすぐに目を反らす。でも僕はそれを許さず、手でこちらを向かせる。

「キス・・・・・していいかな？」

光はしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「いいよ・・・・・・銀だったら・・・・・・／／／」

その言葉を合図に、僕と光の距離がゼロになった・・・・・・

？？？　ｓｉｄｅ

うわ～。最近の学生って早いのねぇ。まさかもうキスしちゃうなんて・・・・・・

「おう！　で、どうだ？　あの二人は」

不意に後ろから声が掛かった。

「あら。自分が拾って来た二人のことが気になるのかしら？」

「そりゃそうだろ？　あの二人、絶対ものになるぜ？　それだけの素質をあいつらは持っている」

「そこまで言うなんてねぇ。まぁこのままだと色々まずい、とだけ言っておくわ」

「何！？　あいつらに何か問題が見つかったのか？」

「問題というか何というか・・・・・・簡単に言うとこのままだと大人の階段を
駈け上がって行きそうなのよね・・・・・・・
それを監視しなければいけないが為に見続けなくてはいけない私の苦しみ、わかる？」

「すみません。わかりません。だったらさっさとこっちに来させたら良いんじゃね？
もう条件は満たしているんだろ？」

「そういう手もあるわね。確かに条件は満たしたわよ」

「っひゃー驚きだね。こんなに早く条件を満たすなんて・・・・・・・
まぁ俺が見込んだだけのことはあるな」

「自信過剰ね・・・・・・こっちに来させるかどうかは『オピュレンティア』に聞いてみないとわからないわね」

「あの方次第と言うことか・・・・・・」

「でも、これでオーケーもらったら最年少記録と最短記録を二つ同時に更新ね」

「へへへ・・・・・・期待しているぜ、二人とも」

三日目・・・

銀　ｓｉｄｅ

昨日のキスの件で僕は光と喋るのが気まずく感じていた。
実際にキスの後僕も光もしばらく喋れなかった。メディアを使っての情報収集はまったく手に着かなかった。とりあえず僕は今のこの気まずい状況を打破したいと思う。
きっと光も同じことを思っているはずーーー

「ねぇねぇ銀。今日は何するの？」

思っているーーー

「昨日みたいにメディアを使う？」

はずーーー

「そうだ！　昨日の本がいっぱいある部屋に行ってみない？」

って、

「何でそんなに明るいんだーーー！！」

「どしたの銀？」

「どうしたもこうしたも無いよ！
昨日、あんなことがあったのにどうしてそんなに平然と、しかも元気良く話しかけてこれるんだよ！？　少しくらい顔を赤らめたりしないの！？　これじゃ一人だけ悩んでいるみたいでバカみたいだっ！」

「銀が考えすぎなんだよ」

「光は何とも感じないのか！？」

「そ、そんなことないけど・・・・・／／／　で、でも！
そんなことで一々赤面してたらこれから大変だよ？」

「待って！　これからいったい何する気！？」

「そ、そりゃ・・・・・／／／　そ、そんなこと女の子に言わせないでよ！
セクハラだよ！　セクハラ！　銀の変態！　エッチ！　スケベ！」

「そんな小一みたいに言葉を並べなくても・・・・・」

「でもセクハラしたこととかは否定しないんだね？」

ハッ！　否定し忘れた！

「も、もしかして私、これから毎日セクハラされちゃうの？
その内入浴中に乱入とか・・・・・」

「するかっ！　だいたい光の裸なんか興味ないっての！」

きっとこの時の僕はどうかしていたんだと思う。普通に女の子の肌には興味津々だったのに・・・・・

「・・・・・（ピキッ）」

あれ？　光の額に怒りマークが出現したような・・・・・・

「へぇ・・・・・・ほぉ・・・・・・私の裸なんて興味がないと？」

「そ、そうだよ」

いや、恐れるな僕。ここで恐れたらいつもと同じパターンだ。

「私の裸には色気が塵ほど無いと？」

「そ、その通りさっ！」

「（ブチッ）・・・・・・ねぇ銀。ホントに興奮しないって言える？」

「い、言えるね！」

「見たことあるの？　触ったことあるの？」

「な、無いけど・・・・・・。でもそんな発育が宜しくない身体じゃあねぇ・・・・・・」

嫌みったらしい顔で言う。

「まだ成長途中なのっ！　だいたいホントに興奮しないのか、試してやろうじゃない！」

「フッ、試すっていったいどうやっｔ！？！？
ちょっ！　ちょちょちょちょっと！　何してんだよ！？
何で急に服を脱ぎ始めてるんだよ！？」

「決まってるでしょ！？　ホントに銀が興奮しないかどうか試してるのよ！」

「そ、そんなん試さなくたっていい！」

「全然良くない！　プライドを傷付けられたんだよ！？　ここはきちんと興奮してもらわなくちゃ納得いかない！」

「した！　したよ！　興奮したってば！／／／」

か、身体の体温が上がってくのがわかる・・・・・！

「それは私が決めること！　ほら！　ちゃんと触ってみなさいよ！／／／」

お互いに顔がトマトのようになっている中、光が僕の光の服を押さえている手を掴んで自分の胸に押し付けた。

「なっ・・・・・・！　や、柔らか・・・・・・・！／／／」

初めて触った女のこの胸はとても柔らかくて、そんでもって何か固い突起物のような物が・・・・・・。って、

「そうじゃないだろっ！！」

「ひゃあんっ！／／／」

「うわぁ！　ゴ、ゴメン！／／／」

叫んだ瞬間に力んでしまったみたいで胸を鷲づかみにしてしまった。
光から甘い声が聞こえた。あんな声出すんだな・・・・・・
とにかく！　力一杯手を引き離す。こうしなければ僕の理性が吹き飛んでいた。

「はぁ・・・・・・・はぁ・・・・・・・・はぁ・・・・・・・／／／」

「ん・・・・・・・はぁ・・・・・・・／／／」

やばい。光の目が潤んでいて頬が赤く、体勢からか上目遣いになってるし！
しかもその目が獣の目なんだよなぁ・・・・・・

「銀・・・・・・／／／」

「待って、落ち着こうよ光。そんな格好でこっちに来ないでくれ！」

光の服は見事にはだけていてエロかった。
しかも僕は先ほどのやり取りで腰が抜けていた。よって光から逃げることができない。
そして僕は光に押し倒された。

「光！？　僕たちまだ中二だよ！？　こういうのは早いって！」

「もう我慢できないの・・・・・・／／／」

それと同時に光の顔が急接近してきた。これはホントにやばい！

「待って待って！　ストーーーーップ！！！」

それでも光は止まらず、僕と光の顔がーーー

シュン（壁がに通路ができる音）

ん？　思わず僕と光の動きが止まる。

「はぁ・・・・・・こんなことになっているんだろうと思ったわ」

とりあえず状況を整理しよう。

光に押し倒される↓壁があったはずなのにいきなり通路ができた！？↓通路から女性が出てきた。

「最近の中学生ってこんなにも盛っているの？」

「えっと、どちら様ですか？」

大人びた印象を持つ若い女性に質問をする。

「私？　私は『鈴野　雫』よ。とりあえず人と話をする時はその体勢は止めてね？」

「「す、すみませんっ！」」

光は僕の上から降り、服装を整え正座する。僕も同じ動作をする。

「まったく、キミたちはまだ中学生でしょ？　それなのにピーピー

とかピーガピーとか
をしようとするなんて・・・・・そういうことはせめて高校生に
なってからしなさい」

なったらいいのか!?　というかピーピーとかピーガピーなんて単
語を恥ずかしげも無く言わないで欲しい／／／

「それで、蒼月君と光ちゃんだっけ?」

「えっ?　何で僕たちの名前を?」

「二人には言いにくいんだけど、実はね、あなたたちは監視されて
いたのよ」

「「えぇぇえええ!?!?」」

「じゃ、じゃあ全部見られていたんですか?」

「そういうことね。あっ、見てたのは私だけだから気にしなくても
いいわよ光ちゃん」

「よ、よかった～」

まあ知らない男の人に裸を見られていたなんてことになったら、ね
ぇ?

ん?　ちょっと待てよ・・・・・・

「もしかして僕の裸も見たんですか?」

「フフ、中々良い身体しているじゃない」

「なっ！　銀の裸を見て良いのは私だけです！」

「何言ってんの光！？　それ勘違いされちゃうからねっ！？」

「まあそんな話しはさておき」

あの、結構僕にとっては重要な話しなんだけど・・・・・・

「二人とも、ちょっと着いて来てくれるかしら？」

「「・・・・・・はい」」

急に真面目な顔になった雫と名乗る女性の言葉に僕と光は顔を見合わせた後に頷いた。
そして僕と光は先ほど雫さんが出てきた通路へ三人で歩いて行く。
百メートルほど歩くと通路から出た。するとそこにはーーー

「わぁ・・・・・・・！」

「凄い・・・・・・・！」

そこには映画やアニメでしか見たことのない、とにかく形容するのなら最新の機器が
所狭しと設置されているどっかの秘密結社の地下施設だ。
僕と光は『意志決定室』と電光板に書かれている部屋へ連れて行かれた。
そこのテーブルを挟んで向かい合うように置かれているソファーに雫さんが向こう側、
僕と光の反対側に座って開口一番にこう言った。

「単刀直入に言うわ。あなたたちの力を貸して欲しいの」

「「・・・・・・は？」」

力を貸して欲しい？　一体どこのアニメ世界だ？

「冗談を言っているんじゃないわ。真面目に聞いているの」

「「・・・・・・」」

「まあいきなり言われても困るわよね？　状況がコロコロと変わり過ぎているもの。
まずあなたたち二人は事実、一度死んでいるようなものだものね」

「ど、どうしてそれを・・・・・！？」

「決まっているでしょ？　あなたたちを監視していたのよ。銀君は病院を出た時、
光ちゃんが銀君と別れた後から、それぞれ監視していたの。当然二人には非難する
権利があるわ」

「非難は、しませんよ。質問、良いですか？」

「時間はいくらでもあるから、好きなだけどうぞ」

「じゃあまず、僕と光が死にそうだったのを助けてくれたのはあなたたちですか？」

「そうよ。栄養不足だったから身体には補充しといたわ。他にも骨折してたり
頭部のキズも治しといたわ。糸はもう無いわよ？　そっちの方が良いでしょ？
まあ治療したのは私じゃないけど」

「そう、ですか・・・・・・」

「じゃあ次は私から、ここはどこですか？」

「そうね。それから話すのが普通よね。ここは『国家機密情報局』その名の通り、
世界の重要な情報と平和を守ることを目的に設立された組織よ。
簡単な説明はバカと銀色と召喚獣第十三問で説明しているからそれを読んでね」

数分後・・・

国家機密情報局という組織についての説明を聞いた。

「組織についての説明をしたところでもう一度聞くわ。あなたたちの力を貸して欲しいの。用は、入隊して欲しい」

入隊、つまりここで命がけの仕事をするということ。でも、ここなら僕が求めていた物が手に入る。例え、守りたいと思っている人が僕のことを嫌っているとしても僕は、
力が欲しい。二度と会えなくても、陰から二人のことを守っていく為に。

「私、入隊します」

「光？」

僕が決断しかねている時に光が言った。

「私にはもう、居場所が無いんだし。それに一度死んだ命だもん。それだったら、この命を誰かの為に役立てたい。だから私は、入隊します」

「本当に良いのね？　死ぬかもしれないわよ？　それに、さっきも言ったけど
入隊を拒否すればここに関する記憶を消して、元の生活に戻れるかもしれないのよ？」

「良いんです。私、父を殺したかもしれませんし。殺していたのなら、もうあの子たちの元へは戻れない」

「わかった。だったらこの資料によく目を通して、記入欄は全て埋めてね」

「はい」

雫さんは光にＡ４サイズの紙を束ねたのを光に渡した。

「それで、銀君はどうする？」

僕の中では、もう答えは出ている。後はそれを口にするだけ・・・・・

「僕も、光と同じです。入隊させてください」

「わかったわ。記入欄は全部埋めてね」

資料を受け取り、記入欄を埋めてゆく。前半は決意表明などだ。意外と面倒だな。

『自分の本名は絶対に明かさないでください。ですのでこれから自分が新たに名乗る名前、コードネームを自分と同じ国籍の名前で考えてください』

コードネームか。さて、どんなのにするかな・・・・・・

「そうだ、銀君はもうコードネームが決められているのよ」

「え？」

「私も詳しいことは知らないけど、銀君が使うコードネームはこの『氷花紫苑』ってのにするように言われているのよ」

「まあ支障はないですし、悪い感じの名前じゃないので、大丈夫です」

この名前は両親が僕がもし国家機密情報局に接触し、入隊の意志を表明した時の為に考えてくれていた名前と言うことは後から知ることだ。

『入隊の意志を表明したあなたは、世間では死んだことになります。よろしいですか？』

『あなたが死んだ場合、当局は一切の責任を負いかねます』

等の項目を全て埋め、提出。

「ご苦労様。それじゃあ歓迎するわ。国家機密情報局へようこそ！」

そう言って、部屋から出た時、外には国家機密情報局員がお祝いの準備をしていてくれた。こんなにも大勢に注目されたのは初めてだ。

「ここが、あなたたちの新しい居場所よ」

居場所・・・・・その言葉が、自分の心の隅々まで浸透していくのがわかった。

第三十三問　僕と私と黄泉の国？　後編（後書き）

今回は銀です

Aランクになった僕らに、ある任務が課せられる。それはミサイルの発射阻止。
それはSへの挑戦でもあり、再開の為のプロセスでもあった。

次回　バカと銀色と召喚獣　『敗北とプロセスとSへの挑戦前編』

いくぞ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第三十四問　敗北とプロセスとSへの挑戦　前編（前書き）

第三十三問　前編の次回予告を変更したことを伝えそびれました。

申し訳ありません。

第三十四問　敗北とプロセスとSへの挑戦　前編

問　次の問題に答えなさい。

欧米の結婚式で行われる風習のひとつに『ライスシャワー』がありますが、これにはどのような願いが込められているでしょうか。

姫路瑞希の答え
『新郎新婦の豊かな人生と、子宝に恵まれるように』

教師のコメント
その通り、正解です。ほかにもフラワーシャワーやペーパーシャワーなどがありますが、
やっぱり姫路さんもお嫁さんにあこがれますか？

氷花紫苑の答え
『それについては名付け親に聞かないとわからないですよ？』

教師のコメント
馬の名前のことじゃありません。

吉井明久の答え
『僕にもライスシャワーをお願いします！』

教師のコメント
拾うつもりですか。

秀吉　ｓｉｄｅ

銀がワシらの前から消えて一ヶ月が経った。既にワシらの日常に笑顔は殆ど無い。
姉上はワシの前では強がっておるが毎晩泣いておるのを知っておる。泣いておる姉上はとても痛々しかった。でもワシには、姉上の心の傷を癒すことはできぬ。今姉上を泣きやますことができるのは銀だけじゃ。ワシも何度か泣いておる。
この涙は、銀がいなくなった喪失感。そして、たった一人の姉上である木下優子という少女を救えない自分の無力感に対する悔しさも含まれておったのかもしれぬ・・・・・・。
学校をズル休みすることもあった。
勉強もこの頃からほとんど手に着かなくなっておった。当然の如く成績は下がった。
学校では猫を被っておる姉上でさえ、否、姉上だからこそじゃろうな。
姉上の初恋の相手である銀。ワシが本当の兄上の様に慕っておった銀。
父上も母上も何も言わんかった。きっとお二人もワシらと同じ気持ちなんじゃろうか？　家族だと思っておった人が突然消えてしまうのは想像以上に辛いことじゃと
思い知らされた。そして今日、また一つーーー

『先日、文月街周辺で警察に、驚きの通報が入ってきました』

朝のニュース。朝食の時に聞くというのは定番。
いつもなら興味を持てるそんなニュースも右から左へなんとやら状態じゃった。

でも、今朝のニュースはとても印象に残った。きっとワシらの心にいつまでも残り続けるじゃろうな・・・・・・

『先日の誘拐事件の翌日から立て続けに暴力団の人間や終夜を徘徊していた学生が
多数、傷だらけの状態で発見されました』

っ！？　先日の誘拐事件というのはワシと姉上が誘拐されたあの時のことじゃ。
因みに銀が警察官を殴り飛ばした映像も放送されておる。
そして先ほどキャスターが言ったことにワシはなんとなく、銀がやったのではないかと
思ったのじゃ。

『被害にあった人たちの証言ＶＴＲです』

『お、思い出させないでくれっ！　あいつ恐えよ！　メチャクチャ恐いんだよ！
背丈は中学生くらいなのにケンカが強いんだ！　それだけじゃねえ！　何回殴っても
よろける程度で全然倒れないんだ！　頭や口から血が出てきているのに・・・・・！
やけくそで包帯巻いてた左腕を鉄パイプとかで殴ってもまったく効果が無いんだ！
まるで、痛みをまったく感じていないかの様だったんだ・・・・・・！』

他にも同じ様な証言がテレビで報道された。

『病院に送られた被害者の中には逮捕された方もいます。ここで、

得た証言から
その少年の特徴を挙げてみましょう。どうやらその少年はーーー
・背丈は中学生
・髪の毛は水色
・左腕に包帯を巻いていた
・裸足だった
などの特徴的な格好だった模様です』

それを聞いてワシは目から涙が出た。間違いなく銀だ。全ての特徴が銀がいなくなった時の格好と同じだ。

「姉上！　銀じゃ！　銀は生きておるぞ！」

真っ先に姉上の元へ向かった。この吉報を最初に銀がいなくなったのを一番悲しんでいる姉上に伝えたかった。まだ寝ぼけ眼の姉上を覚醒させ、テレビの前へ連れて行く。

「見るのじゃ！　全部が銀とそっくりじゃろ！？」

「あぁ・・・・・・！　良かった・・・・・・！　良かったぁ・・・・・！」

姉上がその場に泣き崩れた。相当嬉しかったのじゃろう。
銀はどこかで生きておる。いつかきっとワシらの前に現れてくれる。

『とはいえ、学生の暴力沙汰は勘弁して欲しいですな』

『はい。因みに、この中学生は以前起きた誘拐事件に深く関係しているそうです』

そりゃそうじゃろ。だって銀なのじゃから。

数分後・・・

『それでは本日はここで・・・・・・？　おっと、ここで只今入ったニュースです』

？　いったい何じゃ？

『え～。○○山麓の密林で、先ほど報道した中学生の少年の死体が発見されました』

え・・・・・・

沈黙がその場を支配した。

『その少年の死体からは多量の睡眠薬が検出されました。よって死因は自殺と断定されます』

自殺・・・・・・？　何で・・・・・・

『さっきその少年の話をしていただけあって、悲しいですね』

それ以降のニュースの内容は入って来なかった。ただただ、何も言えずに立ちつくすしかなかった。

「あ・・・・・・あぁ・・・・・・いやぁ・・・・・・いやぁぁぁぁあああああぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁあああーーーーー！！！」

「姉上っ！　しっかりするんじゃ姉上！　姉上は何も悪くない！　気をしっかり保つんじゃ！」

この後、父上と母上を呼び、姉上を連れて病院へ行った。処方箋として精神安定剤を受け取った。この時から、姉上が壊れ始める・・・・・・

国家機密情報局、基地・・・

→の内容から、さらに先の三月上旬・・・

紫苑　ｓｉｄｅ

あれから僕と真奈は死に物狂いで力を付けた。おかげで今はＡランク。

普通に驚かれた。こんなに早く成長することは滅多に無いそうだ。

一番の理由は僕と真奈がまだ子供だということらしい。実際僕はそれなりに強くなった。そんなことを思っている自分がいたり、でもまだ足りない・・・・・・と、心の中ではそんなことを思っている自分もいる。

「銀～」

「いや、紫苑だってば・・・・・・」

今真奈はベッドに腰掛けている僕にのし掛かってきている。

まず読者の皆様には僕と真奈が一緒の部屋に寝泊まりしていることを伝えておきましょう。何故そんな状況なのかって？　それは真奈

がーーー

『紫苑と一緒の部屋が良いです！』

ってあの後駄々をこね始めたんだ。そんな意見が通るハズがないと踏んでいた僕だったが、キスの場面を見ていた雫さんや、雫さんがキスをしていたと話した人たちの後押しが入り、僕と真奈はやや強引に一緒の部屋となってしまったのです。

「偶には良いでしょ？」

「まぁ良いけど・・・・・・。それで、何？」

「銀は、後悔してる？」

「？　何を？」

「ファーストキス」

「っ！？」

真奈め、こっちが聞きづらいことを平然と聞いてきたな・・・・・・僕的にはそっちの方がありがたいんだけどさ。でもーーー

「僕は、してない。寧ろ、嬉しかった」

「え？　何で？」

「えっ、だって、その・・・・・・／／／　僕みたいな男とキスしてくれたから・・・・・・」

「銀って結構自分を卑下するけどさ、結構モテてるんだよ？　ファンクラブ的なのできてるし・・・・・・」

「モテるモテないの問題じゃないよ・・・・・・。それに僕は寧ろ、光の方が後悔しているんじゃないかって思っている」

向こうが銀と僕のことを呼ぶのなら僕も合わせて光と呼んだ方が良いだろうと判断した。

「私が？」

「だって、女の子にとってのファーストキスは特別な物だって聞くし」

「私は、嫌じゃ・・・・・・無かったよ？」

「え・・・・・・？」

「最初は不思議な感覚だったよ。でもこれが誰かを好きになることなんだなって気付いたんだ」

「え・・・・・・それって」

光は僕に顔を近づけて言った。

「そうだよ、私、銀のことがーーー」

『二人とも、ちょっとメインサーバールームまで来て・・・・・・
ごめんなさい。
邪魔したわね』

「「っ！？！？／／／／」」

いきなり入った通信に急遽距離をとる僕と光。タイミング悪すぎですよっ！！

『あぁ、気にしないで続きをどうぞ？』

「「できるかっ！！」」

渾身のつっこみだ。

「それで、何ですか？　折角良い雰囲気だったのに・・・・・・」

「ハ、ハハハ・・・・・・」

僕も失笑をかますしかない。

『ほんっとごめんなさい！　こんどなんとかして埋め合わせをするから！
話しを戻すわよ。オピュレンティアからの言葉よ』

「オピュレンティアからのですか？　わかりました。すぐに行きます」

折角なので、オピュレンティアについての簡単な説明をします。
『オピュレンティアはラテン語で『力』を意味する言葉。
そして、国家機密情報局の意志とも言える存在で、全ての任務はオピュレンティアから下される。だがその姿を誰も見たことは無く、性別、年齢は不明。でも音声間での会話はできるので、人間と思われる。しかも指示したことの内容が完璧。常にその状況に合った的確な指示がされる。必ずしも最善の策を取るとは限らないが、後々になり何故その行動を取ったのか意味を理解できる。何でも国家機密情報局の創設した存在らしい。国家機密情報局の歴史は浅く、まだ百年にも達しない。なので相当な高齢者だと予測されている。（のちのち追加する可能性有り）

メインサーバールーム・・・

メインサーバールームはオピュレンティアからの任務通達などが行われ、
唯一オピュレンティアと会話ができる場所でもある。そして作戦を実行している人々に指示をするオペレーターがいる場所。一言で言えば、ここがこの基地の中枢部。
（のちのち追加する可能性有り）

『お邪魔してしまってすまないね』

「「違いますよ！！」」

こういう冗談も言う。オピュレンティアは相変わらず顔を見せないけど・・・・・

『では、本題に入ろうかな。単刀直入に言うと、次のミッションはかなり難易度が高いだろう。そして、キミたち二人はAランクでも充分な戦績を挙げている。そこで、次のミッションを無事終えたらキミたちをSランクへ昇格させようと思っている』

「あの、そういうのって普通終わったら『ミッションご苦労だった。今回のミッションの成果と今までの戦績からキミたちをSランクに昇格させようと思う』っていう感じに言うものではないんですか？」

『こっちの方がやる気が出るだろう？』

「そうかもしれませんが・・・・・・」

『生きて戻れれば、だよ』

生きて戻れれば、か・・・・・・今回はホントにやばそうだな。

『ミッションの詳しい内容は明日話す。大規模なミッションとなる。武器のチェックをしておきなさい』

「「了解しました」」

明日言い渡されるミッションで死ぬかもしれないのか・・・・・・念のため武器のチェックをし直しておくかな。気を引き締めて明日に望もう！

『あ、それと、夜はまだ長いから二人でやりたいことがあるのならやっておきなさい。

ただし、ある下半身の部位が痛いからミッション不参加などは許されないからね？』

「「そんなことしませんよっ！！／／／」」

折角気を引き締めたのにこれじゃ台無しだ・・・・・。

光、流石に今夜は迫って来ない・・・・・・よね？

メインサーバールーム

後日・・・

『では、今回のミッションを説明する』

言われた通りに今日、ミッションについての説明が始まった。

『今回のミッションの内容はミサイルの発射を阻止することだ。

何でミサイルが発射されることがわかったかって？　なんと犯人は大胆にも犯行予告を送りつけてきたらしい』

「犯行予告が送りつけられたのはアメリカ・イギリス・スペイン・サウジアラビア・

ロシア・中国・日本・ブラジル。他数カ国です」

新しくSランクになった雫さんがオピュレンティアの説明に付け足しをする。

『つまり、どこに着弾するかわからないのだ。だが、発射する基地

の場所はわかっている』

大型モニターに資料となる映像が映し出される。

『基地の場所はボルネオ島だ』

「ボルネオ島は東南アジアにあり、北部の三分の一はマレーシアとブルネイ、南の三分の二はインドネシアの領土となっている島です。以前森林破壊が深刻でしたが、今は以前の様な広大な熱帯雨林を取り戻しています」

広大な熱帯雨林か・・・・・・

『そう、敵の基地はここにある』

「光学映像を表示します」

それと同時に大型モニターの画面が変わる。だがーーー

「あれ？　基地なんてどこにも無いですよ？」

そう、問題の基地がどこにも見当たらないのだ。

『やっかいなことに、敵はホログラム装置を使っている。おかげで、基地の姿が目視
できない。それで今まで発見されなかった。それともう一つーーー』

次にその熱帯雨林のレーダーマップが表示される。

『黄色い点が基地の場所だ』

だとしたら多すぎじゃないか！？　レーダーマップには十カ所以上に黄色い点がある。

『ジャミングされていて、これ以上の情報は得ることができない。我々の機器をも遮断する程の強力なジャミングだ。敵側もそれ相応の科学力を持っていることになる』

「ジャミングの妨害があり、我々の通信機器等が使えない恐れがあります。
なので今作戦ではこちらからのサポートができなくなります」

『今作戦ではいくつかの基地との共同作戦だ。とはいえレーダーマップが使えず、
どれが敵基地の本拠地なのか見当がつかない以上、戦力を分断する必要がある。
同時刻にホログラムなのかそうではないのかを確かめる。そして、当たりの班は
そのまま隠密に潜入。他の班は当たりの基地に辿り着くまでしらみ潰しに捜索して
もらわねばならない。合図をして下手に連中を刺激してしまえば、ミサイルを発射されてしまう恐れがあるからな』

「ですが、わざわざ犯行予告を送りつけてきたのにそんなことされますかね？」

『念の為だよ。紫苑君』

まぁ、一理ある。

『先ほども言ったが、敵も相当の科学力を持っている可能性が高い。油断は禁物だ。
では、二時間後にボルネオ島に移動を開始する。各員、準備にあたれ！』

『了解！』

秀吉　ｓｉｄｅ

「ふぁ・・・・・ん。はぁ・・・・・今日で何日目じゃったかのう」

銀が死んでから数ヶ月。まだワシら家族には心にポッカリ大きな穴が空いている。
でも、ワシがせねばな。折角文月学園への進学が決まったんじゃ。
ここからがワシらの
新しい始まり。カーテンを開け、眩しい日の光に目が一瞬くらむので腕で日の光を
ガードしながら、そんなことを思った。そして、できることなら、銀と一緒に
その始まりを迎えたかった・・・・・・

数分後・・・

ランニングが終わり、帰宅する。健康の為、そして少しでも銀を見習ってみようという思いから始めたランニング。思えば、ワシのこ

うやって見習うというのも銀から学んだ物なのかもしれない。

「ただいま戻ったぞい」

返事はない。そりゃそうじゃろうな。姉上はまだ夢の世界のハズ。今日は土曜日じゃが両親共々仕事で家にはいない。朝ご飯があるじゃろうから姉上を起こして頂くとするかのう。

「姉上～。朝食は食べんのかの？　姉上？」

んむ？　珍しいのう。姉上が既に起きている。ということは既にリビングで食べているかもしれぬの・・・・・・。そう思いリビングの扉を開ける。

「姉上？」

リビングにもいない。では洗面所？　トイレかもしれぬ。だがどちらでもなかった。

ではこういう状況で姉上を待ってみるという選択肢を取ることが無くなったのはこの日のワシが今扉を開けた、台所での出来事がきっかけじゃろう。何故ならーーー

「何やっとるんじゃ姉上っ！！」

「っ！？！？　秀吉・・・・・・！」

ワシは叫んだ。１５年間の人生の中で一番大きな声で。

姉上はワシの足音にも気が付かないほど自分の手で震えながら持っている物に意識を集中させていたのだろう。ワシは自分でも驚くほどの速さで姉上の元へ近づきーーー

パンッ！

台所中に響き渡る音で、姉上の頬をひっぱたいた。姉上のこと叩いたのは、これが始めてじゃ。ビンタされて状況が理解できていない姉上から、握っていた物を取り上げる。

「姉上・・・・・・！　今、何をしようとしていたのじゃ？」

低い声で、ワシは言った。

「・・・・・・」

「答えるのじゃっ！！」

ワシから目を反らし、沈黙を続ける姉上に対してワシは叫んだ。そしてこう問うた。

「何で、何で包丁を！　自分自身の胸元に向けて構えていたのじゃ！？」

そう、姉上が握っていたのは包丁。そんな場面を見てしまった時点で、
何をしようとしていたのかは想像が着く。

「自殺・・・・・・しようと思っていたんじゃな・・・・・・」

「・・・・・・」

「そうじゃろう！？　何故答えないんじゃ！　姉上！」

「・・・・・・・・・・・・・・五月蠅い・・・・・・・」

「何じゃと?」

「五月蠅いって言ってんのよ!!　何でアンタに説教されなくちゃいけない訳!?
アタシの、アタシだけの命なんだから、どうしようと勝手でしょ!?」

パンッ!

もう一度、姉上をひっぱたいた。

「自分だけの命じゃと?　ふざけるな!!!」

「っ!?」

姉上の胸ぐらを掴んで叫ぶ。

「自分だけの命のわけ無いじゃろ!?　この命は、確かに姉上の物じゃ!　じゃがな、
失って良い命なんて在りはしないんじゃ!　姉上にはまだ、生きる理由があるじゃろ!?」

「そんなもの無い!　銀がいない世界なんて、耐えられない!」

「いいや、ある!　その理由が銀が与えてくれているじゃろ!?」

「何でそこで銀が出てくるのよ!?」

「銀が、こんなことを・・・・・・！　姉上が自殺することを望んでおると思うか!?」

「望んでいないに決まっているじゃない！」

「ならば何故!?」

「嫌なのよ！　精神安定剤を服用して、ようやくまともな生活をすることができるなんて・・・・・・！　アンタにはわからないでしょ!?　クスリに縋らなくてはいけない生活をしているアタシの気持ちなんて！」

「いいやわかる！　ワシだって辛いんじゃ！　銀がいなくなって、どれだけ泣くのを我慢したか・・・・・・！　姉上が毎晩泣いておったのは知っておる。自分が銀をワシらの前から姿を消す程にさせてしまったのは自分の所為だと、自分を責め続けて泣いていたことを！　じゃからこそワシは、泣く訳にはいかなかった！」

「どうして・・・・・・」

「そこでワシが泣いたら！　こんなことを姉弟揃ってしてしまうと思ったからじゃ！
ワシが止めることをやめたら、誰が姉上を止めるんじゃ!?　ワシらはこの世界で唯一の姉弟じゃろ!?　姉上の痛みを少しくらいわけてくれても良いじゃろ!?　一人で背負い込むな！　姉上！　いや・・・・・・優子!!」

「っ!!　もう放っておいてよ！」

「姉上！」

姉上はワシをはねのけ、寝間着姿のまま玄関を飛び出した。
ワシはすぐさま姉上の後を追った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

少女は走った。自分が寝間着姿のままだと言うことなど目もくれず。
そしてとある一角を曲がろうとした時――――

ドンッ！

「きゃっ！？」

「うおっ！？」

誰かとぶつかったみたいだ。

「ごめん。大丈夫？」

「っ！」

少女は立ち上がり、再び走り出そうとしている。

「あっ、待って！」

「放してよ！」

ぶつかった少年は走り出そうとする少女の腕を掴む。

「まだ外は寒いんだから、そんな姿じゃ風邪引くよ?」

「え・・・・・・?　あっ・・・・・・・!／／／」

少年は自分が羽織っていた上着を少女に羽織らせる。そして少女は自分が如何ほどな格好なのか気が付いて赤面している。

「それに、泣いていると可愛い顔が台無しだよ」

「別に可愛くなんか・・・・・・／／／」

少年は少女の涙を拭き取る。その少年は銀髪という珍しい髪をしていた。

「姉上・・・・・・・!　こんな所にいたんじゃな」

「秀吉・・・・・・・」

どうやら弟が追いついたようだ。

「すまぬ。お主が姉上を引き留めていてくれたんじゃな?」

「そんなことしてないよ。ぶつかっちゃっただけさ」

「じゃとしても、姉上を留めていてくれたことに対しては礼を言わせてもらおう。

ありがとじゃ」

「別に良いのに。じゃあ、どういたしまして」

「何故じゃか、お主とは初めて会った気がせぬのう」

「そうかな？」

「別に気にせんでくれ。むしろ忘れてもらって構わぬ」

「そんなことしないよ。それより、家まで送って行こうか？」

「それはありがたいのう。姉上がまた逃げ出すやもしれぬからのう。ワシだけでは抑えきれぬ」

「別にもう逃げないわよ・・・・・・／／／」

少女の表情に先ほどの悲しんだ顔はもう無い。

「じゃあ行こうか？」

そのまま三人は歩き出す。家までの距離はさほど遠くなかったが、既に三人は意気投合していた。家族間での会話にも、あまり笑顔は無いのに・・・・・・その会話には笑顔があった。

「わざわざすまぬ。家まで送り届けてもらって」

「ううん。大したことしてないんだから、謝らなくて良いよ」

「あの、ありがとう・・・・・・」

「何があったかは知らないけど、もう泣いちゃダメだよ？　キミが泣いていると、誰かが悲しむ」

「うん・・・・・・！」

「それじゃ、バイバイ」

「またどこかで会えると良いのう」

「縁があればまた会えるさ」

「じゃあ、またね！」

「あぁ、またね」

少年少女は手を振り合って別れを告げる。

「何故じゃろうな・・・・・・久しぶりに銀と話した気がするのじゃ」

「アタシも・・・・・・。あっ！」

「どうしたんじゃ？」

「そういえば上着、返してなかった・・・・・・」

少女は自分が少年の上着を着たままだということに気付き、別れた家の門まで戻る。

「あれ？　いない・・・・・・」

「もう少し当たりを探してみぬか？」

「えぇ」

だがこの二人は、少年を見付けることができなかった。

紫苑　ｓｉｄｅ

良かった。二人ともある程度は元気みたいだな。心配なのは優子の心の状態だな。

「あれがあなたの幼なじみ？」

「そうさ。・・・・・・って、着いて来たのか・・・・・・」

「気になったんだもん」

気付かなかったなぁ。真奈に変なところ見せちゃったかな？

「優しいのね。相変わらず。紫苑を探しているみたいだけど、良いの？」

「良い。会えばしばらく話し込んでしまいそうだ。これからは近所になるかもしれないけど、それ以上でもそれ以下でもないさ」

「紫苑らしい。でも、一つわかった」

「？　何が？」

「銀、あの幼なじみのこと好きでしょ？」

「なっ！？　そんなことないよ！／／／」

「赤面されて答えられても説得力無いよ？　それと、そろそろ時間かもだよ？」

「ホントだ。じゃあ行くか」

「えぇ」

第三十四問　敗北とプロセスとSへの挑戦　前編（後書き）

今回は紫苑です。

ついにミッションがスタート。敵基地に潜入する僕らの班。だがそこには、
僕と真奈では歯が立たない実力を持った二人組がいた。そして僕と対峙する二刀流使いとの出会いが、これからの僕の人生を大きく変えることになる・・・・・・

次回　バカと銀色と召喚獣　『敗北とプロセスとSへの挑戦　中編』

いくぞ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第三十四問　敗北とプロセスとSへの挑戦　中編（前書き）

度々すみません。

作者の無計画ぶりで今回が後編のハズが中編になりました。
次回で本当に過去編は終わります。
これは本当です。

何度も何度もすみません。これかもご迷惑を掛けていくと思います。

第三十四問　敗北とプロセスとSへの挑戦　中編

問　次の問題に答えなさい。

身近にある調味料や食材にも、分量などを誤ると毒となるものがあります。
該当するものを?～?から選びなさい。
?　ニンニク　?ナツメグ　?くさや

姫路瑞希の答え
『?ナツメグ』

教師のコメント
正解です。ナツメグは一度に大量摂取すると、けいれんや幻覚症状をひき起こす可能性があります。姫路さんも、料理のときは気をつけてくださいね。

木下秀吉の答え
『毒を食らわば皿までということわざがあります』

教師のコメント
落ち着いてください。毒を食らわば皿までは『毒を食べてしまったなら、それを盛った皿までなめるという意味から、一度罪を犯したからには、最後まで悪に徹するという』意味です。
決して毒を食べてしまっても皿までなめれば大丈夫という意味ではありません。

木下優子の答え

『秀吉の私の演技』

教師のコメント
どうしたのですか木下さん。何だか哀愁が漂っているのですが。

吉井明久の答え
『毒をもって毒を制すという言葉を知っています』

教師のコメント
では実戦してみてください。

ボルネオ島・・・

「盛り上げって行くぞおらぁあー！！」

「いいねー！！」

「・・・・・・」

「それが青春ってもんだろー！？」

「いぇーい！！」

「・・・・・・」

「さあ！　俺たちがこれからすることは何だ！？」

「はい！　ミサイルの発射阻止です！」

「そのとぉーり！！　そして俺たちは今作戦に参加する第三班だＺＥ☆―！！」

「イエース！！」

「・・・・・・・・・・・・あぁ・・・・・・・（ガクッ）」

もう・・・・・・ダメかもしれない・・・・・・・

「ほらほら～！　紫苑も盛り上がっていこうよ！」

「今青春しておかないとソンするぜー！！」

何でこの二人はこんなに緊張感が無いんだ・・・・・・？

「ええい！　とりあえず静かにする！」

「「・・・・・・」」

あれ？　静かになった。

「二人ともちょっとは緊張感もって下さい！」

「え～！　別にいいじゃん！　まだ作戦開始時刻まで時間があるんだし～！」

「そうだそうだ～」

「ちょっと！　あなたが一応この班のリーダーなんですからしっかりしてくださいよ！？」

「ＷＨＹ？」

この野郎・・・・・！　読者の皆様、失礼しました。第三班で唯一まともな僕が
現状況を説明します。ではまず第三班のメンバーからーーー

第三班メンバー
リーダー　アレン・ブラン　Ｓランク（変態）
その他　宮野・真奈　Ａランク（ちょっとズレている）
その他　氷花・紫苑　Ａランク（まとも）

次に装備
アレン・ブラン　戦闘員用の服装　ハンドガン×２　コンバットナイフ×２
手榴弾×２　発煙手榴弾×２

宮野・真奈　戦闘員用の服装　ハンドガン×２　手榴弾×２　発煙手榴弾×２
鉄製の杖

氷花・紫苑　戦闘員用の服装　ハンドガン×２　手榴弾×２　発煙手榴弾×２
ロングソード

こんな感じです。そして今は作戦開始時刻まで待機している状態。
でも先ほどのテンションの上がり様は真奈と変態先輩が組むといつ

ものこと。
そして真奈と僕はパートナーなので大体がこの組み合わせになる。
まぁ変態先輩が僕と真奈を選んでこっちの生活をさせてくれている様なものだから
僕たちと仲良くしたいとか面倒見たいとか思うのはわかるし、僕もこの人が嫌いじゃないからいいんだけど・・・・・・せめて敵基地の(ホログラムかもしれない)近くにいるんだからちょっと静かにした方が良いと思う。

「ったくよぉ。お前は真面目過ぎなんだよ」

「そうだよ～」

「二人が不真面目過ぎなんです・・・・・・」

こんなんでもちゃんと二人とも書類とかはやっているということを伝えておく。

「どうせお前のことだからこの状況とかの説明を２１行くらい使って説明してんだろ？」

？　にーしーろーやーとぉーにー・・・・・・ホントに２１行使ってた・・・・・・！

「まっさか～。そんなわけないじゃないですか～」

「さて、何を言っているのかわからない紫苑は放っておいて、「えっ・・・・・・」
そろそろ作戦時刻だ・・・・・・」

「そうですね。どうやって調べます？」

「そりゃ、これだろ」

そう言ってスナイパーライフルを取り出す。

「これをぶっ放す。麻酔が効いたら、ビンゴだ」

「妥当ですかね」

「そんじゃ、やってみてくださいよ！」

「サーイエッサー！」

先輩はサイレンサーを取り付け、銃に布をかぶせてライフルを構える。見張りは二人いるようだ。自分では銃には自信があるから任せておけとのこと。

「・・・・・・」

パンッ×２

ドサッ×２

「おっ！　ビンゴだぜ！　どうやら俺たちの所が当たりみたいだ。じゃ、突入だ」

「了解」

「何か呆気なくないですか？」

まず、見張りの二人を回収。敵の制服を剥ぎ取り、僕と先輩が着る。

「よし、とりあえず侵入し、宮野の変装分を入手しなくてはな」

敵基地内部・・・

メインサーバールーム・・・

「失礼します」

「何だ？」

「眠ってください」

そこのリーダーだと思わしき人物に手刀をくらわせ、気絶させる。

「貴様っ！　ぐっ！？」

「ぐはっ！？」

僕に銃を向けようとした連中を天井から降り立った真奈と先輩に不意打ちをくらい、
全員気絶する。

「よ～し、宮野、適当に着ておけよ」

「は～い」

「氷花、俺はこいつらを片付けておくからデータをインストールしておいてくれ」

「了解です・・・・・・って何してんですか!?」

「え・・・・・・ってきゃあぁぁ!」

「ん?」

「なに堂々と着替えを覗いてんですか!?」

「だって目の前で女性が服を脱ぎだしたら見るしかないだろ」

「ダメですからね!　私の裸を見て良いのは紫苑だけです」

「だからそれ止めよう!?　色々と厳しいから!」

こういう発言で僕はムッツリだと噂されたことがある。

「へいへいわかってますって」

「本当にわかっていますか?」

相変わらず変態な先輩だけど、いざというときには頼りにしている。
そんなことを思いつつ、メモリーチップにデータをインストールしてーーー

ヴー!!　ヴー!!

突如けたたましい音が鳴り響く。警報だ！　しかし何故！？

「ちょっ！？　紫苑何やってんのよ！？」

「僕だってわからないよ！　データをインストールしようとしただけで」

「恐らく、何らかの特殊なアクションが必要だったんじゃないのか！？　それより今は逃げるぞ！？」

「「了解！」」

僕たちは情けないが、メインサーバールームの入り口から廊下へ出て通路を走る。

『いたぞ！』

『侵入者は決して生きて出すな！』

銃を構えた敵と鉢合わせになる。向こうは即座に発砲。僕たちはそれぞれ左右の通路の角に隠れて銃弾をかわす。敵はそのまま発砲しながらこちらとの距離を詰める。

「こんな十字路で囲まれたらお陀仏だ！　とにかくここを突破し、広い場所へ出るぞ！」

「「了解！」」

そう言って先輩が自分の身をさらけ出す。

「当たるかっての！」

先輩は見事な動きで縦断に当たることなく敵に接近。そして一蹴する。

僕もここまで狭くなければできるんだけどね・・・・・・

「とにかく行くぞ！　走れっ！」

僕たちは走った。途中何度か敵と遭遇したが、無視。または先ほどのように一蹴を繰り返す。

格納庫・・・

「ここは・・・・・・？」

「どうやら格納庫みたいだな」

「確かに広いけど、武器がいっぱいあり過ぎて乱戦になったら厳しいかもしれないよ？」

「だが俺たちの目的はあくまでミサイルの発射阻止だ。紫苑、場所は覚えているか？」

「はい。格納庫の位置からはそう遠くなかったと思います。ここからあと三階ほど
下の階です」

「充分遠くない？」

「でも、ここは既に七階だ。降りる階は今までの半分以下だ」

その時、僕たちが入ってきたドアとこれから進むドアが同時に開いた。

『ここで何としても抑えろ！』

『最悪、メタルアーマーを使っても構わん！』

メタルアーマー？　嫌な響きだな・・・・・・。僕たちを挟み込んだ敵の装備はアサルトライフルだ。

「挟まれたか・・・・・・各個、迎撃に当たれ！」

「「了解！」」

まず僕たちは散開。先輩はハンドガンを二丁。真奈は杖。僕はロングソードをそれぞれ構え、敵に向かって行く。

「広いからかわせる！」

「でも弾数が多いんですケド！？」

僕も真奈も弾をかわし、時には剣や杖で弾を弾きつつ接近して徐々に距離を詰める。

『何故当たらん！』

「ガン＝カタ舐めるな！」

ガン＝カタという名前の意味は「ガン（銃）」と東洋武術の「カタ（型）」の組み合わせ。主に二挺拳銃を使用し、超近接戦闘に持ち込む事で、多数の敵を短時間で倒す戦闘技法として描写される動きのこと。まあ映画とかの中での話なんだけど、それを現実用に作ったという訳です。（詳しい説明を見たい方は、Ｗｉｋｉｐｅｄｉａでどうぞ！）

ようやく敵との接近戦。これでようやくガン＝カタの出番だ。

僕はここでハンドガンに持ち変える。だってロングソードだと殺しちゃうでしょ？

「そんな攻撃っ！」

発砲し、一番近くにいた二人の銃を弾き飛ばす。そしてハンドガンをハンマーのように使い、気絶。こちらに銃口を向けている敵を把握し、軌道を予測。

指の動きでタイミングを見計らい、回避。そしてアタック。

『ぐっ！』

「まだまだっ！」

こちらに銃口を向けたヤツの動きに合わせて、右飛びをして弾を飛び越える。

そして接近して再びハンマーのようにしてノックアウト。

『ダメだ！　どちらにも当たらん！』

『やむを得まい。メタルアーマーを起動させるぞ！』

「真奈！　乗り込ませないようにね！」

「そっちこそ！」

真奈の方も杖を使い、敵をなぎ払っていく。真奈が使っているのは杖だから人を殺してしまわないかなどという心配は必要無い。神武不殺の道、それが僕と真奈の目指しているものだ。

「ラストっ！」

『ぐあっ！』

よし、誰も乗り込んでないよな。

「先輩！　大丈夫ですか！？」

「こっちも終わった。メタルアーマーとやらも、動かなければ唯の鉄の塊だからな」

はっはっはと先輩が笑っているとーーー

ガガガ・・・・・（シャッターが開く音）

？　何だ？　突然シャッターが開いた。そして間髪入れずに開いた場所から何かが飛び出して来た。

「お、おい。何か動いてねぇか？」

「動いていますね～。あれが例のメタルアーマーとか言うヤツですかね？」

「そうじゃないって祈りたいけど・・・・・・」

すると2、3メートルほどのメタルアーマー？が両腕に装備されたガトリングランチャーを乱射してきた。

「うおぉぉー！　危ねー！　メタルアーマーってもしかして無人機動兵器か！？」

「人が乗っていないからそうかもしれませんね！」

「今はそんなことを言っている場合じゃ無いでしょー！」

メタルアーマーは足に装備されている何と言う名前かは知らんが、ローラーと思わしき物で地上を高速移動し、こちらに急速に接近してくる。何とか物陰に隠れてやり過ごしていたが、これでは身を隠すことさえ困難だ。

「速っ！？　メッチャ速いですよ！」

「対地上武装兵用戦闘兵器か！」

どうやらハンドガンではキズ一つ付かないらしい。しかもそうこうしている内にまた別のメタルアーマーが出てきた。

「また来たー！」

「応戦する！　運良くここは格納庫だ！　ならばそこら辺にある武

器をバンバン使って迎撃しろ！」

「それじゃさっそく！」

僕は近くにあった箱の中からロケットランチャーを取り出す。

「当たれっ！」

放ったロケットランチャーは見事命中。しかも先輩が手榴弾をタイミング良く投げ、
威力が増加された。だがーーー

「げっ！　大破しないぞ！」

「ダメージはあるみたいだけど」

メタルアーマーはまだ健在。機体損傷は目立つがまだ充分戦闘が可能なレベル。

「このままだとやばいよ！　機動〇士やら装〇機兵とかになっちゃうよ！？」

「今問題なのはそこじゃないだろ！？　時間とか状況でしょ！」

「お前たちは先に行け！」

「「え？」」

先輩が叫ぶ。

「このままここで時間を稼がれてたまるか！　お前たちは先に進み、ミサイルを止めろ！」

「でもそれじゃ先輩が！」

「Sランクを舐めるなよ。こういうやばいのは慣れっこだ。だから行け！」

「だとしてもどうやって！？」

「俺が発煙手榴弾を使う！　恐らく人間の体温で位置はバレるだろうが、探索する為に若干タイムロスがあるはずだ。その隙に向こうの扉までフックワイヤーを使って一気に行け！」

「・・・・・わかりました。また後で会いましょう！」

「信じていますから・・・・・・」

「よし！　いくぞ！」

先輩が発煙手榴弾を二つとも投げ、格納庫は煙幕に包まれる。
そして視界が悪くなったので、敵を捕捉する為に一度動きを止める。
今だ！
位置を覚えていた向こう側の扉の近くにフックワイヤーで移動する。
そして扉の方を一度振り返り、通路へ走り抜けた。

「ふぅ、さてさてどうやって倒していくかなぁ・・・・・・」

ミサイル収納所・・・

「来たな・・・・・・」

「時間が無いよ。速くアクセスして、
貰ったこのウィルスシステムを流し込んで止めよう」

「だね」

僕と真奈はようやくミサイル収納所に辿り着いた。急がないと！
僕と真奈はミサイルの制御システムに向かって歩き出す。
でも何だ？　この嫌な感じは・・・・・・？　っ！？　殺気！？

「くっ！」

突如頭上から降り立った男が着地と同時に剣を振るってきた。
何とかかわすが服を斬られる。

「紫苑！？　大丈夫！？　くっ、こっちも・・・・・・！」

僕と真奈に男と女の二人組が立ち塞がる。僕と対峙している男は顔にはメタリックな
赤と黒を主とした仮面を付け、手には黒のグローブをし、背中には二本の巨大な長剣を
背負っている。服装は全体が黒で赤いラインが入った動きやすそうな全身を隠せる
コートを着ている。

真奈と対峙している女は深紅と黄色のメタリックな仮面を付け、深紅の

グローブをし、背中には真奈と同じく杖を背負っている。胴には深紅を主とし、秋を彷彿とさせる色合いの全身を隠せるコートを着ている。

「残念だがここまでだ」

「あなたたちをこれ以上は進ませない」

そう言った後、二人は武器を構える。それに応じて僕と真奈も武器を構える。

「ツーハンデッドソードか・・・・・・」

ツーハンデッドソードは人の背丈ほどの長剣。だが見た目に反し重さは2．5～3キログラム。扱うのは高い技術が必要なのはさることながら何より体力が必要となる。

真奈ともう一人の仮面の女とは距離と取る。

「さぁ、見せてみろ。お前の力を」

来る！

「はぁっ！」

「ぐっ！」

仮面の男は右回転しながらこちらに飛びかかってきた。そして脇の下辺りに暫撃を入れようと剣を振るうが、僕はそれをガードする。本来は避けて攻撃するつもりだったのだが、思った以上に動きが速

かった。

「まだだ」

「うわっ！」

二本目のツーハンデッドソードが振るわれる。その一撃で左に吹き飛んでしまった。

この剣、一撃が重い！　そして吹き飛んだ先で着地し、体勢を立て直した瞬間、

仮面の男はこちらに空中で前転しつつ剣を振るい、飛びかかってきた。

「速いっ！」

またも何とか右に攻撃を避け、振り向き様に横払いに一撃入れるが

仮面の男は

バックステップを取り、こちらの一撃をかわす。

「そら！　そら！　そら！　そら！」

「うぉぉ・・・・・・！」

再び接近して来た仮面の男は長剣の長いリーチを活かし、遠距離での暫撃を浴びせて

くる。そしてこの男の恐ろしいところは人の背丈ほどあるツーハンデッドソードを

僅かな疲れも見せずに攻撃し続けているところだ。相当な体力と腕力があるのだろう。

横払いに振られた剣を刀身に背を向ける様に回転して飛び越え回避

する。仮面の男は
剣を振った勢いを活かし自分も回転し右腕のツーハンデッドソードを再び横に
なぎ払う。だが僕はその回転した隙に一気に近づき、懐に入り込む。

「もらった！」

「あめーよ」

「なっ！」

仮面の男は回転している内に右手の剣を順手から逆手持ちに変え、僕を突き刺すつもりだった様だ。僕はそれを伏せてかわすが、それがミスだった。振り返った男は
伏せている僕に対し、勢いの付いた回し蹴りを放とうとしていた。僕は咄嗟にガードするが、蹴りが途中で蹴りが軌道を変え僕の頭上を通り過ぎようと
したとき踵落としに変わり回し蹴りに対し腕をガードに使っていた為モロにくらう。

「ぐはっ！」

思わずその場に膝をつく。

「くっ・・・・・・・！」

「おいおい、そんなもんかよ？　もっと見せてみろよ。
お前の・・・・・・『選ばれし者』の力を」

『選ばれし者』？

第三十四問　敗北とプロセスとSへの挑戦　中編（後書き）

今回は紫苑です。

仮面の男が口にした『選ばれし者』とは何か？　そして仮面の男は僕が逃げていると言う。確かに僕は逃げて来た。あの二人から・・・・・。でも僕に、あの二人と向き合う資格なんて・・・・・・・

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『敗北とプロセスとSへの挑戦後編』

いくぞ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第三十四問　敗北とプロセスとSへの挑戦　後編（前書き）

またミス発覚です。

前回の中編で秀吉と優子に一方的にですが再会した時の銀の髪の色は既に銀色です。すみませんでした。

第三十四問　敗北とプロセスとSへの挑戦　後編

問　次の問に答えなさい。

美容業界用語のひとつ『ゴールデンポイント』とは、何を指しているでしょうか。

姫路瑞希の答え
『あごの先と、耳の中央を結ぶ直線の延長上の部分』

教師のコメント
正解です。髪をポニーテールにする場合、ゴールデンポイントで結ぶと、最も見栄えがよくなると言われています。姫路さんも試してみてはどうですか？

吉井明久の答え
『ついに埋蔵金の隠し場所を発見！』

教師のコメント
テレビ特番のようですね。

「何だ、その選ばれし者ってのは？」

「直わかる。それよりも、今は戦いを楽しもうぜ！」

「くっ、ぐわっ！」

仮面の男に接近され、ツーハンデッドソード二本の大振りをまともにくらう。
ガードこそしているものの威力を受け流しきれない。
吹き飛ばされた空中で回転し、態勢を整え着地する。
どちらにしろこいつを倒さなくてはミサイルの発射は阻止できない。
勝つしかない！

「はぁっ！」

「そうらぁっ！」

仮面の男の剣のリーチを活かした見事な攻撃。隙のない動き。そして体力。
剣を振るう度にわかる。この人は今の僕よりずっと強いって。

「これはどうだ」

試しにハンドガンを数発撃ってみるものの、最小限の動きでかわされ当たる気配がない。

「おっ！　何だ？　ハンドガンならどうだ？　なんて思っているのか？
なら止めとけ。弾の無駄だ」

「そのようで」

「飛び道具が当たるのはこういう世界を知らない力なき者たちだけだぜ？」

「・・・・・・」

「沈黙か？」

「いや、何でもないさ」

「なら安心だ」

再び斬りかかって来る仮面の男。僕もそれに答えるように突進する。
上段からの暫撃。僕はコレを避ける。次に仮面の男は足払いをするように低位置からの横払い。同じく飛んでかわす。

「やぁっ！」

「へっ！」

「なっ！？　しまった！」

仮面の男の頭上でこちらが斬りかかるが、仮面の男は僕を剣で更に上空へ吹き飛ばした。
そもそも何だこの腕力！　西村並みかそれ以上だぞ！
なんて突っ込んでいる場合ではない！　今のこの状態は非常にまずい。
空中で受け身が取れないことや、攻撃がかわしにくいことは皆さんご存じだろう。
しかもこの状態ではあの男はどんな攻撃でも仕掛けられる。
こちらは受けに徹するしかない！

「いくぜぇっ！」

「くそっ！」

ダメ元でハンドガンやフックワイヤーを放ってもどうなるかは目に見えている。
なのでここは両手での防御に専念することにした。
しかも自分はこちらより高く飛び、僕を飛び越えた。位置関係がまた・・・・・・
まず一撃、これだけでも相当な威力。両手でよかった・・・・・・・
そして次に蹴りを入れてきた。正直に言うとこの時蹴りがくるとは考えていなかったので直撃する。

「しまった！」

二度目のしまった。今の蹴りで地面へ落とされた。しかし体勢を整えることができず、
受け身が取れなかった。

「くっ！」

「折れなきゃ良いな！」

仮面の男の大上段からの暫撃。床に膝をつき、何とか持ちこたえる。
男が言っていた様に剣が折れなくて本当に良かった。
しかしこの鍔迫り合いがいつまで保つか・・・・・・・

「今のお前では俺には勝てない！」

「なにおう！」

「少なくとも今までの戦闘を見て、勝てないことは想像が着いているだろう？」

「くっ！」

悲しいけどごもっともである。

「動体視力、筋力、瞬発力、自惚れかもしれないが、全てにおいてお前を勝っている。
だが、俺とお前との一番の決定的な差は何だと思う？」

「なに！？」

「それは向き合うことだ」

「？」

「わからないって顔をしているな・・・・・・。まぁ当然か。お前が今までそれが
正しいと思っていたことなんだから」

「何を言っている！？」

「お前は向き合っていない。過去と！」

「過去？」

「そうだ。お前が組織に入る前に過ごしていた日々。その日々の中に置いてきた物と」

「僕は何も置いてきて等いないっ！」

仮面の男は自ら退く形で僕と距離を取った。

「僕は全部失ってこっちの世界へ来たんだ！」

「果たしてそうかな？　ならば聞き方を変えよう。お前は何の為に戦っている？　何で力を求めているんだ？」

「それはあの二人の！　・・・・・・はっ！」

「ふっ、あの二人か・・・・・・その二人がお前の戦う理由なんだろう？」

「五月蠅い・・・・・・っ！」

「お前はその二人の為に、こうしてこういう世界での命懸けの戦いをしているのだろう？」

「五月蠅い・・・・・・っ！」

「大切な二人のことを守りたくて、守れる力が欲しくて、こうして戦っているんだろう？」

「五月蠅い！　あんたに僕の何がわかるってんだ！　何にも知らない癖に！」

「知っているさ！　少なくとも俺もお前と同じように、理不尽な人生を生きてきた」

「えっ？」

「自分が生きている意味がわからず、ただただ死に逝くのを待つ日々。俺の過去を話す気はないが、その中で俺は生きる意味を与えられた。あの方に」

あの方？　こいつらにもやはりボスがいるのか？

「あの方は俺にこう問うた。

『生きてみないか？　自分の力で。そして、自分は何も悪くないのに、

何もしていないのに、あんなにも辛い人生を強いたこの世界を自分の力で

変えてみないか？』

ってな。俺にとっては充分すぎる質問だった。当然答えはイエス。

生きる理由が

見つからず、死に逝くのを待つだけだった俺に生きる理由を教えてくれたんだ。

そして俺は力を手に入れた。今ではこうやって世界の代表共を震え上がらせられる

程のな。でも力ってのは恐ろしいぜ？　力は使う人間次第で善にも悪にも染まる。特に、まだお前のような子供はな。だからお前自身でその力の使い方を決めるんだ。

いつか何の為に使うのか、聞かせて欲しいねぇ。だがそれはまたの機会だ」

僕の力は何の為に・・・・・・。それと、この人も・・・・・・・

「話を戻そう。そして俺はその過去と向き合った。そして自分が何をすべきか学んだ」

「それがコレか！？　説教じみたことを言っておきながら、ふざけるなっ！」

「はぁ？　何か勘違いしているようだな」

「何だと！？」

「話は最後まで聞くもんだぜ。俺は過去と向き合った結果、俺もあの方のように生きる意味を無くした人間や理不尽な人生を生きてきた人間に生きる理由を与えているんだぜ？　ちょいと前にも餓死しかけていたガキを二人ほど助けたしな。
おかげで今ではちょっとした兄貴気分さ」

「バカな」

「あれ？　信じてくれないわけ？　まぁ仕方ないよなぁ。世の中良いことなんてせずに犯罪を犯しまくっている悪党ばっかだしなぁ。
そしてそういう偏見も貴様らが勝手に想像し、作り上げてきた物だ！」

「・・・・・・」

「まぁ信じる信じないはお前の自由だが、お前が言うあの二人と一度向き合ってみたらどうだ？　どうせ会って無いんだろ？」

「くっ！」

図星を付かれて何も言えない。

「僕には、優子と秀吉に向き合う資格なんて・・・・・・」

「ふぅ、お前ははき違えている様だから言っておこう。そういう場合の資格ってのは
決めるのはお前じゃねぇ。相手の方だ」

「っ！」

「そもそもお前、その二人が今どんな風か知っているのか？」

「幸せに暮らして・・・・・・」

「どうした？」

「・・・・・・」

いや、違った。あの時、二人は泣いていた。

今日の午前・・・

『お主と話していると、銀のことを思い出すのう』

『そうね』

『銀？』

『ワシらの幼なじみじゃ。とっても優しかったんじゃぞ？』

『自分の命なんて、どうでもいいみたいだった』

『そうなんだ』

『でも、もう・・・・・・会えないんじゃよな』

『えっ？』

『アタシが殺しちゃったのよ。銀という人間を。言葉でね』

『・・・・・・』

『ワシらは願うならばもう一度だけ銀に会いたい。そして、誤りたい』

『銀に酷いこと言ったままで会えなくなるなんて・・・・・・恨まれているでしょうね
せっかく命懸けで助けたのにあんなことを言われるなんて・・・・・・とかね』

この時、二人は泣いていた。

『大丈夫だよ』

『『え？』』

僕は耐えきれなくなって言った。今このことを伝えておかないと、きっと二人は苦しみ続ける。僕という存在が二人を苦しめる訳にはいかない。

『きっと、彼は二人を恨んでなんか無いよ』

『どうしてそう言い切れるのじゃ？』

『何となくだけど、わかるんだ』

『『・・・・・・』』

しばらく二人はこちらを見つめたままだった。でもーーー

『フフッ、何よそれ？　何となくって・・・・・・フフッ』

『全然確証には至っておらんではないか』

『あはは。ゴメン』

でも二人は笑ってくれた。あれは作り笑いなんかではなかった。
本当の笑顔だった。

あの時はそのまま大丈夫だと思っていたけど・・・・・・

「泣いていた・・・・・・」

確かに本当に意味で笑ってくれた。でも結局、彼らに何かできたか？
否、僕はその場しのぎの言葉を言っただけに過ぎない。

「違う。泣かせたんだ。お前がその二人を」

「僕が・・・・・・」

僕が泣かせた・・・・・・

「お前はそれが良いと思い、そうしてきた。
だが二人はそれを望んでいなかったんだろう？　お前はそれを二人の為と思い、
善意でそれをやってきた。だが二人にとってそれは望まぬ善意。
押し付けられた善意だ。悪意と何ら変わらない」

僕が二人に善意を押し付けていた・・・・・・悪意を・・・・・・

「その二人を苦しめているのは・・・・・・お前だよ」

「くっ・・・・・・！」

「お前はその二人と向き合わず、逃げているんだよ。拒絶されるかもしれないという
その辛い現実からなっ！！」

「くっそぉぉー！！」

僕は激情に任せ、仮面の男に斬りかかっていった。

真奈　ｓｉｄｅ

「くっ！」

「彼が心配？」

「そんなことっ！」

横払いに杖を振ると仮面の女は距離を取る。

「でも、誰かの心配をしている場合？」

そう言って近づいて来る。

「私はそんな状態じゃ倒せないわよ！」

仮面の女は私の視線と杖の間に自分の拳を置き、私から杖が見えないようにしている。
そこから三発も杖をかなりの速さで放ってくる。
でも私はそれをなんとか避け、回し蹴りを放つ。それを左腕でガードされる。
その後、突きを放ってくる。私は突き出された杖を掴むがーーー

「ネジ込み式！？」

「ご名答」

掴まれた部分を含めた杖の半分をネジ込み式だということを活かし、分離させる。
そして手元に残った半分の杖でもう半分を掴んでいる私の腕を攻撃、痛みで杖を私は
放してしまう。そして放されたもう半分を掴み、回転し勢いを付け、二本で攻撃してくる。

「くぅっ！」

「杖だけには頼っていないようね。でもまだまだよ」

再び突きを繰り出してくる。でも今度は先ほどのよりも速い。しかも恐ろしく正確に
的を狙ってくる。急所への打撃を防ぐ為にかわしたつもりが、それがフェイントで逆に
急所への一撃へと繋がる。おかげで鳩尾に二発、左の太ももに一発くらってしまった。
これでも結構避けた方だと思う。

「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・はぁ」

「ベルムも彼に色々聞いているでしょうね」

「ベルム？　それが紫苑と対峙している人の名前？　だったらついでにあなたの
名前も教えてくれないかしら？」

「人気者ね。私はルージュよ。それを聞いても、ここから帰らなくちゃ意味無いわよっ！」

「確かに！」

やばい。本当にやばい。私が今まで戦った相手の中で一番強い！
というかこの人が使っている杖が、私と違って木製なんだよね・・・
・・・

「鉄に頼っているようじゃ、私には勝てないわよ」

「そんなこと！」

ルージュは前進しつつ相変わらず凄い速さの突きを連打してくる。
今の状況を比喩するならば至近距離で１５０キロの球を投げられ続けているようなものだ。
ルージュは身体を捻り、杖を振り下ろす。私はそれに合わせて身体を回転させ、杖をかわしつつ回し蹴りを放つ。

「読めてるわ」

「きゃあっ！」

杖を捨てて、蹴りを放った足を掴み、背負い投げをしてきた。自分の蹴りの勢いがあった為、受け身を取るがダメージが残る。そしてその隙を見逃さず蹴りワザでの追撃を繰り出してくる。クリーンヒットをなんとか出さずにかわしきった。

「強い・・・・・・！」

「私は少なくともあなたより経歴があるのよ？　多少の実力差があっても
不思議じゃないでしょ？」

「へぇぇ。私より老けているんですね？」

「あら？　心理戦でもする気？　言っとくけど私まだ十代だから、

挑発されても別に
悔しくも何とも無いのよ？　むしろあなたこそ貧相な胸ね」

「なっ！？／／／　べ、別に良いでしょ！？　だいたいまだ私は１５なんだから仕方
ないじゃない！！」

くぅぅ～！　この人ムカツク！　よりにもよって人が気にしている事を！
だいたい何で国家機密情報局員の女性って大抵がスタイル良いのよ！？
何か特殊な訓練でもしているの！？
・・・・・はっ！　いけない！　ついルージュの挑発に乗せられてしまった。
しかも胸の話題で！

「言ってくれるじゃないですか！」

「まぁ気にする事は無いわ。世の中には貧乳の方が好きって殿方もいるって聞くし
そこの彼はどうなのかしらねぇ？」

「別に紫苑は関係ないでしょ！／／／」

「赤面している時点で無関係では無さそうだケド？」

こ、この人・・・・・・！

「決めた！　アンタ絶対倒す！」

「そうそう。そう来なくっちゃ」

紫苑　ｓｉｄｅ

キン！　キン！　カン！　キン！

剣が何度もぶつかり合う。

「くっそぉぉ・・・・・・！　何で！」

「あまり感情に身を任せ続けるな！　感情は確かに自分の力を上げてくれるかもしれん。だが任せ続けるなら身を滅ぼすぞ！」

「五月蠅い！　何でアンタなんかに！」

何度目かわからない鍔迫り合いが起こる。だがこちらがどんなに力を込めても仮面の男の剣はビクともせず、こちらが色々なパターンの攻撃を繰り返しても一撃も当てられない。何の意味もない自分の行動。こんなにも力の差が・・・・・・っ！

「く・・・・・・！　はぁっ！」

「何っ！？」

驚異的速さでのスピード暫撃。直撃こそしなかったが、仮面の男を後退させる。

「これでっ！」

再び突進する。この時殆どやけくそだった。

「やれやれ。激情に身を任せたヤツを元に戻すにはコレが一番だろ」

仮面の男はツーハンデッドソードを自分の胸の前辺りでクロスさせ、
そのままこちらが
向かってくるのを待つ。

お互いの剣は振られる。だがーーー

キン！

「・・・・・・っ！」

こちらの剣がへし折られる。そんな・・・・・・今、太刀筋がまったく見えなかった。
今までは見えるスピードに落としていたってことかよ・・・・・・！
手加減されていたってことかよ・・・・・・！　ちくしょぉ・・・・・・！

ベルム　ｓｉｄｅ

「さぁっ！　かわしてみろよ！」

だが紫苑は動かない。こいつ避けない気か！？　さっきので戦意を喪失したのか？
だがここで斬られる程度ならば、こいつは不適切だったということ・

・・・・・
そしてそのまま剣は紫苑を斬る。
斬った・・・・・・っ！？　バカな！　どういうことだ！？
だが紫苑はどこも斬られておらずこちらに反撃をしかけていた。
一体何が起きたんだ！？　こちらの攻撃がすり抜けたぞ！

「おい！　お前今何をした？」

「何も」

手刀での連続攻撃。だが俺は全て防ぐ。相手が素手ならこちらも素手で迎え撃つとしよう。

「らぁ！」

「くっ！」

よし、押しているな・・・・・ここで！
絶え間なく続く突きの応酬。そして高速の回し蹴りが放たれる。

「っ！？」

「ヒュッ」

またすり抜けた！？　どうなってやがる！　だが今は次の攻撃に対する対処が優先だ肘打ちが来るな・・・・・だが遅い。
肘打ちを片手で防御する。だがそれはフェイントで紫苑は裏拳を繰り出す。

「くっ！」

「あまいな」

だがその裏拳も防がれる。

「次はこっちの番だぜ！」

しかし一体全体さっき何で攻撃がすり抜けたように見えたんだ？
それがわからないと意味が無いだろう・・・・・！　そうか、そういうことか・・・・・・！

「そら！」

「がっ！」

よし！　当たった！　答えは存外簡単だったな。こっちの攻撃をギリギリで避けることでこちらに当たった様に見せていたんだ。だったらこっちが攻撃が当たるタイミングをズラしてやれば問題ない。
それよかいつのにこんな芸当ができるようになってたんだ？

「どんどんいくぜ！」

まず右腕での突き。それを避けられるがそれで良い。すぐさま左腕も延ばし、
左手と右手で紫苑の頭部を捕らえる。そして顔面に膝蹴りを放つ。

「カウ・ロイ！」

「ぐっ！」

おっ！　両手で防いだか。だがーーー

「ぐはっ！」

両手を頭部を解放し、やや空中で勢いを付けた蹴りを放つ。その蹴りは両手が防御している顔面とは無縁の脇腹を直撃する。しかもカウ・ロイの際の蹴りで両手は痺れている。
脇腹の急所への一撃に思わず蹲る。

「がはっ！　げほっ！」

血を口から吐き出す紫苑。

「おいおい大丈夫か？　こっちはまだ半分程度しか本気を出してないぜ？」

ルージュの方も圧倒しているな。いっそミサイルをぶっ放しちまうか？

ピピピピ

「おっと通信だ。――了解。ようやく時間か。紫苑」

「？」

「俺はまたお前の前に現れる。いつになるかわからないが、必ずだ。その時にさっきの答えを聞かせてくれ。最後に一言言わせてもらおう。お前はこちら側の人間だ。ルージュ、時間だ」

「ええ」

やはり我らが主の選択に間違いは無かった。あいつが相応しい。

紫苑　ｓｉｄｅ

そう仮面の男は言い残し、ルージュとか言う仲間と僕たちが来た扉とは別の扉から出て行ってしまった。確実に僕と真奈を殺せたのにも関わらず。何故だ？　僕の名前を知っていることも、最後に仮面の男が言ったこちら側の人間だと言ったことも
わからない。謎の強敵出現ってところか？　ボロ負けだ。あばらも数本いってる。
なかなか致命傷だな。

「真奈、無事かい？」

「何とか・・・・・・ね」

「そうか・・・・・・良かった・・・・・・」

あれ？　何でだ？　視界が急に狭く・・・・・・
僕の意識が無くなる時、真奈の声が聞こえた気がする。

国家機密情報局、基地　医務室・・・

「・・・・・・・・・・・・はっ！」

目が覚めるとそこは医務室だった。

「起きた？」

「真奈・・・・・・」

すると横から声を掛けられる。声の主は真奈だった。僕と同じくベッドに横になっている。

「ミサイルは！？」

「大丈夫。あの後西村たちが来て代わりに止めてくれたみたい」

「そっか・・・・・・」

「完敗、だったね」

「あぁ」

初めてのミッション失敗。成功したのだが僕たちの中では失敗に等しい。

なんせあれだけ酷い負け方をしたのだから。かすり傷一つ与えられなかった。

「悔しいな・・・・・・」

「完全に力不足だ。僕たちの・・・・・・」

重々しい空気がその場を支配していた。

「おっ！　目が覚めたみたいだね～」

「怪我は大丈夫？」

「こっぴどくやられたんだって？」

「博士、マリアさん、雫さん、先輩・・・・・・」

「どうしたんですか？」

博士、マリアさん、雫さん、先輩の四人が医務室に入って来た。お見舞いにでも来てくれたんだろうか？

「どうしたもこうしたもねーよ。お前らが倒れていたと聞いてな。とりあえず死んで
無くて良かったぜ」

「うんうん。研究に協力してくれる貴重な人材を失いたくないからね～」

「博士？」

「ひぃっ！　ゴメンマリア君！　だからそんな目で見ないで！」

「ゴメンね二人とも。こんなこと言っているけどホントは博士も二人の事をとっても
心配してたのよ？」

「わかってますって」

「果物持って来たから、ここに置いておくわね」

「ありがとうございます」

皆、相変わらずだな。

「で、お前らがやられた敵ってのはどんなだった？」

「仮面を付けた二人組でした。男と女が一人ずつです」

僕が答える。

「名前は私が対峙した女の方がルージュ。紫苑と対峙した男の方がベルムです」

「名乗ってたんだ」

「ルージュって方が教えてくれたのよ。所でルージュが言っていたけど、ベルムって
男から何聞かれたの？」

「それは・・・・・・」

『お前が言うあの二人と一度向き合ってみたらどうだ？　どうせ会って無いんだろ？』

ここであの仮面の男が言っていた言葉が脳裏に走った。

「色々とね。説教された気分だったよ。でも、とても参考になった」

「ほぉ～。敵に塩を送るような事をするとはねぇ」

「私の方はそんなこと言って無かったけどなぁ～」

（挑発されただけだしね・・・・・・）

「まぁとにかく、無事で何より」

「あぁ、二人とも、怪我が治ったら昇進式するからね？　楽しみにしといてね」

「「わかりました」」

負けたのに昇進か・・・・・・気分的には最悪の昇進だな。

数日後・・・

昇進式を済まし、僕と真奈は無事Ｓランクへとなることができた。

がーーー

「え・・・・・・？　アメリカへ？」

「そう。昨日決まったの。Ｓランクになったからにはってことだから仕方ないけど」

しばらくは会えないってことか・・・・・・

「突然すぎるね」

「ホントだよ。それに、私不安でいっぱいだよ・・・・・・」

「僕も。今までずっと二人だったもんね。寂しくなるよ」

「寂しいの？」

「当たり前だろ？　まったく、こういう時だけボケるんだから」

「ゴメン。ねぇ、銀」

久しぶりに聞いたな、僕の本名。

「本名はダメだって・・・・・・なんて言わないさ。こんな時までね」

「あなたがベルムに言われていたことだけどさ」

「うん」

この時僕は真奈にベルムに言われたことを話していた。

「私も、少し変わってみようと思うの」

「え？」

「しばらくはアメリカに行っちゃうから無理だけど、できる限り、過去と向き合ってみようと思うの」

「過去と・・・・・・」

「流石にすぐにどうこうするって気にはなれないけど、向こうで成長して、強くなってまたこっちに戻って来た時、自分がこの人だって思えるパートナーを見つけたら、その時は・・・・・・」

「きっと、真奈なら素敵なパートナーが見つかるよ」

「もしさ、」

「うん？」

「もし、そんなパートナーが見つからなかったら、その時は、銀が一緒に行ってくれる？」

「あぁ。その時は、ね？」

「ありがとう。っと、そろそろ時間だ。私行くね？」

「あぁ」

「あ、それと最後に言わせて欲しいんだけどね」

「何でもどうぞ？」

「私、銀のこと好きだよ。一人の男として」

「え・・・・・？」

思考がストップする。

「それじゃ、またねっ！」

「あっ」

真奈は手を振って行ってしまった。僕もストップした思考を何とか動かし、手を振り返した。そうか、真奈も変わろうとしているんだな。なのに僕は何をやっているんだ？

「光、ありがとう。僕も変わるよ」

木下家・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「あら？　手紙・・・・・」

木下柚葉の朝は早い。受験が終わったとはいえ、
中学三年生の子供二人＋木下家の大黒柱である秀俊の朝食・洗濯・
その他諸々の事を
する為、秀吉が起床する三十分前には必ず起床している。そして今
朝、ポストを覗くと、
いつも見る朝刊・チラシ等の他に一枚の手紙が入っていた。

「ラブレター、とか？」

手紙には

『木下秀吉様・優子様へ』

と、書かれていた。とりあえず中身は見ずに家の中へと持ち帰る。

「秀吉、手紙が入っていたんだけど」

「ワシ宛にかの？」

秀吉が起床した際に聞いてみる。

「あなたと優子宛によ」

「ワシらに？　一体誰じゃ？　まさかどちらでも良いから付き合って欲しいとかの
ラブレターとかが書いてあるのかの！？」

「優子と一緒に見てみたら？　あなたたち宛なんだし」

「それもそうじゃな。では母上よ、ワシはいつも通りランニングに行ってくるぞい」

「は～い。行ってらっしゃい」

数分後、帰宅・・・

「お帰り秀吉」

優子がいた。

「姉上？　・・・・・母上、姉上はどうやら病気のようじゃ、早く病院へ・・・・・・・

姉上、何故ワシの腕を・・・・・・！　姉上！　すまぬ！　冗談じゃ！　姉上が早起きという奇想天外な出来事に突然遭遇してしまった故・・・・・・！　あっ！　ちょっ！

待っ！　そこの関節はそんな方向には曲がらないぃいいいっ！！」

しばらくお待ち下さい・・・

「まったく！　失礼ね！」

「仕方あるまい。姉上は早起きなんてせんのじゃから」

「偶にはするわよ」

「ほ～、ほけきょ」

「もう一回殺られたい？」

「すみませんでした！」

「わかればいいのよ。で、早く見てみましょうよ。手紙」

「そうじゃのう」

秀吉が封筒に入っていた手紙を取り出す。そこにはーーー

『本日の１８：００。〇〇公園へ来て下さい』

「これだけ？」

「みたいじゃのう」

「怪しいわね」

「どうするのじゃ？　行くか、行かぬか？」

「よし、アンタ行って来なさい」

「パシリはごめんじゃぞ。大体コレはワシと姉上宛の手紙なのじゃから二人で行くべきじゃろ」

「・・・・・仕方ないわね。行くだけ行ってみましょう」

１８：００　○○公園・・・

銀　ｓｉｄｅ

来てくれるだろうか。来てもらえなかったらどうしよう。不安八割、期待二割の状態
の心。でも、会わなくちゃいけない。二人の為にも、僕の為にも。
せめて、謝りたい。二人を泣かせてしまったこと、守れなかったこと。
それに、いつになるかわからないけど、それが許されるかわからないけど、二人の傍に
いることが許されるかわからないけど、いつかまたーーー

「銀？」

来てくれたーーー

第三十四問　敗北とプロセスとSへの挑戦　後編（後書き）

今回は紫苑です。

合宿二日目。朝の自習時間。そこは戦場。一言一言が命取り。飛び交う台詞。

『工藤さん』『が』『赤面』『して』『いる』『と』『可愛い』『ね』

「紫苑？（ニッコリ）」←優子

こんな風に・・・・・・

次回　バカと銀色と召喚獣　『二日目と全面戦争と合成台詞前編』

いくよ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第三十五問　二日目と全面戦争と合成台詞　前編（前書き）

もう何度目かわからないですがすみません。

次回予告で前編を入れ忘れていました。なので今回は前編です。

ホントすみません。

第三十五問　二日目と全面戦争と合成台詞　前編

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌
『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってAクラスの人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました』

教師のコメント
Aクラスと一緒に勉強することで姫路さんに得られるものがあったようで何よりです。
今度の振り分け試験での結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくと良いでしょう。

氷花紫苑の日誌
『一言。僕は優子を愛しています』

教師のコメント
氷花君。あなたの純粋で真っ直ぐな心を先生は尊敬したいと思います。
・・・・・・・・・・・・・・提出したしおりの裏表紙に血痕が無ければですが。

土屋康太の日誌
『前略。夜になって寝た』

教師のコメント
前略はそうやって使うものではありません。

吉井明久の日誌
『全略』

教師のコメント
あまりに豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました。

学力強化合宿も二日目に突入。一日目は折檻されたり、女子風呂を覗きに行って
返り討ちにあったり、皆に僕の過去を話したり、話していない過去を振り返ったりと
濃い一日だったからなぁ。二日目はもうちょっと水割りした様な一日になって欲しいと願う。

「・・・・・雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を
狙っている」

その願いは叶わないことは承知していたけどね・・・・・・

「でも、何で自習なんだろう？　授業はやらないのかな？」

近くで一緒に勉強していた明久が問う。

「授業？　そんなもんやるわけないだろ」

そして霧島さんから逃れる為明久の質問を答える形で明久の隣に座る雄二。

当然霧島さんも雄二を追って来た。膝の上は諦めたらしく、雄二の隣を陣取る。

因みに僕は、隣・・・優子　正面・・・秀吉　右前方・・・真奈という配置で勉強していた。そして先ほど説明した明久たちのテーブルは僕たちが利用しているテーブルの隣だ。

「やらない？　どうして？」

「明久。お前はＡクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」

「むっ。失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはＦクラスもＡクラスも大差はないよ」

えっ、そうだったの？　何だろうこの敗北感・・・・・・

「・・・・・この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」

「翔子、それだけじゃ明久にはわからんだろ。つまり、ＡクラスはＦクラスを見て『ああはなるまい』と、Ｆクラスはａクラスを見て『ああなりたい』と考える。

そういったメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題ではないということだ」

雄二って説明上手いよな。近い未来に霧島さんとの間に子供を授かって、
『勉強を教えて』と言われたら確実に今のような見事な解説を披露してくれるだろう。

「あ、代表ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」

おっ、工藤さんが来た。席は明久の正面みたいだ。

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？　久しぶり。優子たちもここにいたんだね」

「愛子も始めからこっちに来れば良かったのに」

工藤さんがこちらに手を振ってくる。それに答える為に手を振り返す。
距離は近いが手を振る。女子が頻繁にやるのを見かけるが僕には未だによくわからない。
女子の世界の挨拶代わりだろう。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Ａクラスの工藤愛子です趣味は水泳と
音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

パンチラ！？　健全な男子が喜ぶ爆弾発言をこの子は恥ずかしげもなく言い放った。
そして隣からは殺気が・・・・・！

『反応したら、滅するから（ニッコリ）』

まさに以心伝心。長年幼なじみをやっているからこそ嫌でもわかる。
そんなこんなで僕は何とか反応せずに顔を持ち上げただけですんだ。
まぁ持ち上げた先にいた秀吉はバッチリ反応していたが・・・・・・

「ん？　どうしたの吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑っているわけじゃないんだ。ただ、その・・・・・・」

あっ、秀吉が足を真奈に踏まれた。

「いっ！？　あ痛っ！　くぅぅ・・・・・・！　ま、真奈？」

「フンッ」

「まぁまぁ、真奈もそこら辺にしといてあげなよ」

「別に私怒ってないし」

足を踏まれたのとその足を持ち上げるときに机に直撃する二段階の痛みを味わったようだ。真奈は、ご機嫌斜めみたいだね。

「あ、さては疑っているね？　なんなら、ここで披露して見せよっか？」

あぁ、またそんな魅力的な提案をしないで下さい、工藤さん。

『見たら関節をボッキリ逝かせるから（ニッコリ）』

そして僕の隣の方を刺激しないで下さい・・・・・・

「・・・・・浮気はダメ（ブスッ）」

「～～～～っ！！！」

→については突っ込んでいたらキリがないので省略。

「・・・・・・・・・・・・明久。愛子に騙されないように」

「あれ？　ムッツリーニ、随分と冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしているんだから、てっきり鼻血の海に沈んでいると思ったのに」

まことにごもっともである。

「・・・・・・・・・・・・ヤツは、スパッツを穿いている・・・・・・・！」

騙された・・・・・・

「俺は目を突かれ損じゃないか・・・・・・・」

「そ、そんな！？　工藤さん、僕を騙したね！？」

ご愁傷様です。

「あはは。バレちゃった。流石は康太君だね。まぁ特技ってわけじゃないけど、最近
凝っているのはコレかな？」

小型録音機を取り出す工藤さん。

「・・・・・・・・・小型録音機」

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えばーーー」

小型録音機を弄る工藤さん内蔵されているスピーカーから声が聞こえてくる。

――ピッ　《工藤さん》《僕》《こんなにドキドキしているんだ》《やらない？》

「わあああああっ！　僕はこんなこと言ってないよ！？　変なものを再生しないでよ！」

「ね？　面白いでしょ？」

相変わらずイタズラ好きだなぁ。こっちのメンバーも流石に今のは聞き過ごせなかったみたいだ。

「・・・・・・・ええ。最っっ高に面白いわ」

「・・・・・・本当に、面白い台詞ですね」

まぁこの二人が聞き逃すはずないよね（笑）

「瑞希。ちょっとアレを取りに行くのを手伝ってもらえる？」

「わかりました。アレですね？　喜んでお手伝いします」

あの二人はどんな物で明久をいたぶるつもりなんだ？

「ねぇねぇ紫苑君」

「うん？　何だい工藤さん？」

嫌な予感が・・・・・・

「優子だと恥ずかしがってあんまり教えてくれないから教えて欲しいんだけど、二人はどこまでいったの？」

「え？　どこと言われてもキスくらいしかまだしてないよ？」

実際こういうことを言うのはちょっと恥ずかしいな／／／

「本当にキスだけ？」

「うん。キスだけ。それ以上はまだしようとは思わないし」

「ふ～ん」

「本当だからね？」

「わかってるって。ちゃんと信じているから。それに二人とも奥手そうだしね」

「ま、まぁ・・・・・・／／／」

「紫苑君も浮気とかしちゃダメだよ～。こんな風に」

「へっ？」

――――ピッ　《工藤さん》《キス》《しよう》

「ちょっとぉぉぉおお！！　何やってくれちゃってんの工藤さん！？」

「紫苑？（ニッコリ）」

「いやいや優子さん。今の一連の会話を聞いていたよね？　さっきのは合成されたでっち上げの台詞で・・・・・・！？　ちょっ！？　何で僕の関節を・・・・・・！？ぐぉぉおおお！！」

「工藤。さっきのは録音した会話を合成したのか？」

「うん。そうだよ」

僕がサブミッションを極められているのを華麗にスルーして雄二が工藤さんに話しかけていた。

「工藤さん。キミが・・・・・・」

「ん？　なに、吉井君」

「あ〜、え〜と、その、キミがーーー」

明久が工藤さんに何かを聞こうとしている。

「ボクが？」

「キミがーーー僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！」

「変態だー！」

思わず叫んでしまった。

「・・・・・ぷっ。あははっ。吉井君はお尻が好きなの？　それともボクの胸が小さいから気をつかってお尻にしてくれたのかな？」

明久のセクハラ発言を笑って流す工藤さん。やり手だな。

「ご、誤解だよ！　別に僕はお尻が好きってわけじゃなくて！」

「明久は胸が好きなんだよね？」

「確かにそうだけーーーって違う！　僕が言いたいのはそっちじゃなくて！」

「あれ？　違った？　それとも巨乳が好きってこと？」

「違うからね！？　確かに胸は大きい方が好きだけど、」

「流石だな二人とも。録音機を前にそこまで言うとは」

「「へ？」」

明久はともかく何で明久を弄っていた僕まで？

「ごめんね二人とも。折角だから録音させてもらったよ」

――――ピッ　《僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！》《僕は》《巨乳が好き》《な》《変態》《なのさ☆》

「ひあぁぁっ！？　これは合成すらしてない分ダメージが大きいよ！？

お願い工藤さん！　今のは消して下さい！」

「僕からもお願いします工藤さん！　土下座でも何でもしますから！しかも僕が言ってない台詞まで混ざっていたのはどういうこと！？」

「フフフ・・・・・・！　そう、紫苑ってばそんなこと思ってたの？」

あぁ、殺気をもはやオーラの様に放っている優子が僕の真後ろに・・・・・！

しかも普段ならドキッとしてしまう笑顔というオプションがあるから更に恐い。

「ゴメンね～紫苑君。弟君に協力してもらって紫苑君の声を真似てもらったんだよね」

「そんな！　秀吉、何でそんな酷いことを！？」

「写真で買収したの♪」

「・・・・・／／／」（本当は写真を貰わずともそのくらいしたのじゃがな。如何せん真奈の持ってない写真をくれると言うのでのう）

買収されたのか秀吉・・・・・。しかも買収されたことを恥ずかしがって
赤面している秀吉をバッチリ写真に納めている康太が僕の視界の端の方に映った。

「二人ともからかい甲斐があって面白いなぁ。ついつい苛めたくなっちゃうよ」

――ピッ　《お願い工藤さん！》《僕にお尻を見せて》
《お願いします工藤さん！》《変態な》《僕を》《慰めて》

「うあぁぁんっ！　どんどん僕が変態になってる気がするよ！」

「もはやこれは羞恥プレイの領域に達しているんじゃないかな！？」

「ねぇ紫苑。あんなことを考えてしまう悪い頭はコレ？」

「悪い口とかのレベルじゃないよ！　頭って一体何を・・・・・・！！！」

「弾けろぉぉっ！」

「ぐはぁぁ！」

優子が僕の頭部にアイアンクローをかまし、頭蓋骨が陥没するのではないかという力で
握りつぶしてきた。痛さが尋常じゃない！

「・・・・・・今の、何かしらね？　瑞希」

「・・・・・・なんでしょうね？　美波ちゃん」

向こうでは明久が姫路さんと島田さんに迫られている。
こっちはこっちで大変なんだよね・・・・・・。少なくとも秀吉と真奈がいる時点で
僕の無事はまず無いと考えるべきだ。

「ホント、紫苑は手が掛かるわね。こうなったらアタシ以外の女の顔が見られないようにしてあげた方が良いのかしら？」

優子さん、いつの間にあなたはヤンデレ属性にお成りになったんですかい？

「優子、何度も言っているがさっきのは声を合成されただけなんだよ？　大体優子は
今までの一連を聞いていたんだからそれくらいわかるよね？　それに半分ほどが秀吉の声真似だし。家で何度も答えているが、僕は≪巨乳が好き≫だってーーーあれ！？
くそっ！　あまりにタイミングが見事だったから一瞬気が付かなかったじゃないか！
あっ！　優子！　待っ！　～～～～～～～～～っ！！！」

ふっ、相変わらず素晴らしいサブミッションだぜ！

「・・・・・・・・・・愛子。おふざけが過ぎる」

ここで救世主登場！

「「ムッツリーニ！（康太！）助けてくれるの！？」」

「・・・・・・・・・・うまくやってみせる」

ここで僕は明久とアイコンタクトを取る。

（明久、ここは康太を信じてみよう！）

（そうだよね。何だかんだ言ってムッツリーニは友達だもんね？困ったときに助けてくれるのが友達ってもんだよね？）

（そうともさ！）

（じゃあ紫苑。まず僕からいくよ！）

（よし！　頼んだぞ明久！）

康太を信用して良いのか確かめる為に。

「頼むよムッツリーニ！　姫路さん。美波。よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかったんだ。《特に雄二》《の》《が好き》って

ムッツリィーニィィーッ！　後半のはキサマの仕業だな！？　うま

くやるって、
工藤さんよりも上手に僕を追い込むってことなの！？」

「・・・・・・・・・・愛子。お前はまだ甘い」

「くっ！　さすがは康太君・・・・・・！」

ふぅ。やはり康太はそう出てきたか。しかも工藤さんと康太との間に火花が見えるのは
気のせいだと信じたい。僕までアレに捲き込まれたくないし・・・・・

「・・・・・吉井。雄二は渡さない」

霧島さんが雄二と聞いて反応している。しかも優子が目を光らせている。
まるで少女漫画に出てくる女の子の目みたいに・・・・・・
でも今の内に僕は優子の誤解を解かせてもらおう！

「優子。落ち着いて聞いてくれ。《変態》《な》僕は別に胸の大きさとかは気に《する》
よ？　気にする年頃だってのはわかるけどね？
僕は自分が好きになった《真奈》《の》《胸が好き》っておいコラ二人とも！
なんて台詞をチョイスしてくれたの！？　もうちょっとマシなのは無かったの！？」

「え？　紫苑ってこの位が良かったの？　以前は小さくても触ってきた癖に」

「余計な事を言うなー！！　しかもあれはキミが無理矢理・・・・・・はっ！」

「「紫苑。ちょっとこっちへ来てくれない（来てくれぬかの）？」」

「・・・・・・はい」

僕が優子と秀吉に連行されそうになったときーーー

「同性愛を馬鹿にしないで下さいっ！」

あぁ・・・・・・何か変なのが増えたよ・・・・・・

「み、美春？　なんでここに？」

「お姉さまっ！　美春はお姉さまに逢いたくて、Ｄクラスをこっそり抜け出してきちゃいましたっ！」

そう言えばあれは清水さんだ。島田さんのことを同棲なのに好きになってしまった変わり者、といっては失礼だな。まぁ同性愛に目覚めてしまわれたお方だ。で、その清水さんが抱擁を島田さんに求めて突撃して行った。

「須川バリヤー」

「け、汚らわしいです！　腐った豚にも劣る抱き心地ですっ！」

腐った豚を抱いたことあるの？　という突っ込みは野暮だろう。

「お姉さまは酷いです・・・・・。美春はこんなにもお姉さまを愛しているというのに、こんな豚野郎を掴ませるなんてあんまりです・・・・・・」

「ちょっと美春！　こんなところで愛しているとか言わないでよ！アキに勘違いされちゃうでしょ！？」

そうか？

「君たち、少し静かにしてくれないかな？」

このカオスの中、久保君が声を上げた。

「あ、ごめん久保君」

「吉井君か。とにかく気をつけてくれ。まったく、姫路さんといい、島田さんといい、Ｆクラスには危険人物が多くて困る」

その発言を聞いて優子が「坂本君は？」と言っていたのはスルーしたい。

「それと、同性愛者を馬鹿にするの発言はどうかと思う。彼らは別に異常者ではなく、個人的嗜好が世間一般と少し食い違っているだけの普通の人たちなのだから」

「え？　あ、うん。そうだね」

まぁ自分自身がそれなのだから否定はできないよね。

「ほら美春。くだらないことで騒いでないで自分の学習室に戻りなさい」

「くだらなくなんかありません！　美春はお姉さまを愛しているんです！　性別なんか関係ありません！　お姉さま、美春はお姉さまのことが本当にーーー」

「はいはい。ウチにその趣味はないからね？」

清水さんの思いは島田さんに届く日が来るのかなぁ？

「・・・・・性別なんか関係ない、か・・・・・・」

久保君が悟りを開いたようだな。

「性別なんか関係ない、ねぇ・・・・・・」

「優子、一応言っておくけど変な想像は止めてね？」

「僕は《秀吉》《が好き》ってちょっと!?」

突然明久が秀吉に好きなどと宣った。

「秀吉、キミは《変態》《な》《僕と》《明久》に好きって言われたら・・・・・・。

ええい！　とにかくその機械をこっちに渡しなさい！　このままだと僕や明久の意志に反して色々とやっかいな誤解が生まれるから！」

「二人とも止めるんじゃ！　ワシの為に争わんでくれ！」

「悪乗りすなーっ！！」

「いや、僕は秀吉の《お尻》なら争ってもいい！」

言い切った！　今合成されているのに気付いていたハズなのに言い切った！
そこは本音でもそう思っているということか。

「アキ、そんなにも木下のお尻が良いの？」

「吉井君、やっぱり・・・・・・」

「とにかく明久！　今はそんなこと言っている場合じゃないだろ！？」

「そうだった！　ムッツリーニと工藤さん！　とにかくその機械をこっちに渡しなさい！　じゃないと力ずくで《お尻を見せて》もらうよ！　っていい加減にしなさい！」

「・・・・・吉井君。そんなにお仕置きされなくちゃわからないんですか？　そんなに男の子のお尻が見たいんですか？」

「今女の子のお尻も見せてって言っていたよね！？　はっ！　し、しまった！　墓穴をぉぉおおおー！！」

あぁ無情。姫路さんと島田さんにシバかれていた明久だったが西村が怒鳴り込んできたおかげで一命を取り留めた。僕も難を逃れたか

と思っていたがその考えは甘かったと
数秒後に思い知らされた。

第三十五問　二日目と全面戦争と合成台詞　前編（後書き）

今回は明久です。

動物は、自分の安心できる場所、基すんでいる場所を住み家と言う。
そして自分たちの最も望む場所、つまり理想としている場所。理想郷。
動物はそれを、アガルタと言う。

次回　バカと銀色と召喚獣　『二日目と全面戦争と合成台詞後編』

よし！　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第三十五問　二日目と全面戦争と合成台詞　後編

騒がしかった学習時間も終わり、今僕らは割り当てられた部屋で待機している。
入浴の時間までは一時間ほどあるしね。
まあ一番の理由は女子風呂を覗く為の作戦会議なんだけどね。

「僕は工藤さんが犯人だと思うんだけど」

「その可能性は高いだろうな」

「ホントにそうかな？」

「何故だ？」

「だってさ、考えてもみなよ。今回僕らが何で女子たちに睨まれているんだっけ？」

「盗撮したって疑われているからでしょ？」

「そう。僕らは『女子の着替えを盗撮したから』睨まれているんでしょ？　だったらさ、おかしいと思わない？」

「あぁ、そういうことか・・・・・・。確かにそれはおかしいな」

「え？　どういうこと、雄二？」

「じゃあまず、明久。お前は工藤愛子が同性愛者だって噂は聞いたことあるか？」

「え？　そんなの聞いたことないけど？」

「だろ？　ムッツリーニ、秀吉はどうだ？」

「・・・・・・・・・・そのような情報は仕入れていない」

「同じくじゃ」

「だったら良いんだ。つまり紫苑が言いたいのはこういう事だ。
『女子が女子の着替えを見ても何ら問題はない』だろ？」

「そう。仮に工藤さんが本当に盗撮していたとしても、着替えるときになればいつでも見ることができる女子の着替えをわざわざカメラに納める必要がある？
だから僕は、疑うんだったら盗撮しそうな男子や、
僕らのことを気にくわないと思っている連中を疑うべきだと思う」

「なるほどね～」

ここで明久がようやく理解してくれたようだ。

「つまり、現状況では犯人の特定はできないということだ」

「はぁ。結局収穫無しか」

「例の火傷の痕を確認できたら良いのじゃが・・・・・・」

「場所がお尻って言うだけあって僕たち男には手が出せないんだよね・・・・・・」

「いっそ、怒られるの承知でスカート捲りでもしてみる？」

「犯人を見付ける前に俺たちが死ぬだろ？」

僕がやった場合は優子に。明久の場合は姫路さんと島田さんに。
雄二がやった場合は霧島さんに。康太がやった場合は工藤さんに。
秀吉がやった場合真奈にそれぞれ息の根を止められる。誰がやってもグロテスクな場面を目撃することになるだろう。

「・・・・・・・・・確認するには女子風呂を覗くしかない」

「やっぱりそうなるんだね・・・・・・」

「女子に頼んでみるのはどうかの？」

「信用を失っている今、頼み事を聞いてくれるとは思えない」

「でも霧島さんなら雄二がデートをするからって頼めば良いんじゃない？」

「そんなのゴメンだ！　だったら明久が姫路と島田に同じ様なことをすればいいだろ？　紫苑だって木下姉に頼めば簡単にやってくれるだろ？」

「まっさか～。姫路さんと美波がそんなことで頼み事を聞いてくれる訳無いって。
それに仮にオーケーを貰ったとしても僕の食費が・・・・・・」

「今の優子ならもっと過激な事を条件にしないと要求を呑んでくれ

ないんだ・・・・・・」

『はぁ・・・・・・』

思わず全員からため息が出る。

「けど、どうしようか？　何か作戦を練らないと先生たちのあの警備を突破するのは難しそうだよ」

「作戦とは言うが、あの場所はただの広い一本道じゃったからのう。正面突破しかないと思うぞい」

「女子を何か別の場所に引きつける、なんてのはどうかな？」

おぉ、それはなかなか良い案じゃないかな？

「・・・・・・・・・・何か良い材料が？」

「無い、けど、誰かが飛び降りるとか？」

「よし、お前が行け」

「それに、大体もっともな理由がない状態で何でそんなことをしようと思ったんだって聞かれたらどうするの？　それに、西村が来たらあっさり取り押さえられちゃうよ？
あの人１００メートルを８秒台で走るんだよ？」

「ぐふぅ・・・・・・」

もう西村の常人の比じゃない能力に関してはあまり驚かないんだね・・・・・・

「秀吉の言う通り、基本は正面から攻める以外はない。しかも作戦を立てる時間もない」

この空気の中、雄二が口を開いた。そして少し間を置き言った。

「だが、方法がないわけでもない」

「え？　作戦があるの？」

「是非聞かせてくれ！」

こういうときやはり雄二は頭が回る。そして頼りになる。

「作戦なんて立派なものじゃないがな。要するに、正面突破を成功させたらいいだけだろう？」

「いや、それが難しいから困っているんだけど・・・・・・」

「しかも戦力差がハンパじゃないんだよ？」

「まぁ聞け。正面突破しか方法がないのなら、それを成功させるだけの戦力を揃えたらいい。質は向こうが上でも、数で上回れれば勝機はある」

「えっと、つまりは覗き仲間を増やすってことかな？」

「そうだ」

確かに物量作戦は最も効果的な作戦の一つだけど・・・・・何か引っかかるんだよな

「それじゃ、すぐにでも話をしてこないと。もうすぐお風呂の時間になっちゃうよ？」

「安心しろ。夕飯時に既に声はかけてある。そろそろ来るはずだ」

するとすぐに扉がノックされた。

「坂本、俺たちに話って何だ？」

訪ねてきたのは須川君たちFクラスのメンバーだ。

「よく来てくれた。実は皆に提案がある」

『提案？』

『今度はなんだよ。正直突かれて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に戻ってダラダラしてぇな～』

皆の士気は低いな。まぁそりゃそうだよね。ようやく勉強から解放されたんだから。

皆が静かになってから雄二は再び口を開いた。

「――皆、女子風呂覗きに興味はないか？」

『『詳しく聞かせろ』』

まぁこうなるよね。

「昨夜俺たちは女子風呂の覗きに向かったんだが、そこで卑劣にも待ち伏せていた教師陣の妨害を受けたんだ」

『ふむ、それで？』

あれ？　ボケとツッコミの割合の差が大きすぎない？

「そこで、風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい。報酬はその後に得られる理想郷（アガルタ）の光景だ。どうだ？」

『『乗った！』』

うんうん。やっぱり雄二は知将だな。世が世なら、天下人になっていたかもね。

「ムッツリーニ、今の時間は？」

「・・・・・・・・・二〇一〇時」

時間も戦力も作戦も申し分ない、ハズなのに、やっぱり何かが負に落ちない。

「今から隊を五つに分けるぞ。Ａ隊は俺に、Ｂ隊は明久、Ｃ隊は秀吉、

D隊はムッツリーニ、E隊は紫苑にそれぞれ従ってくれ」

『『『了解っ！』』』

「いいか、俺たちの目的は一つ！　理想郷（アガルタ）への到達だ！
途中に何があろうとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで突き進め！
神魔必滅・見敵必殺！　ここが我らが行く末の分水嶺と思え！」

『『『おおおおっ！』』』

「全員気合いを入れろ！　Fクラス、出陣（で）するぞ！」

『『『おっしゃぁぁーっ！』』』

女子風呂覗きの為という内容がアレだが、僕たちFクラスが今再び一つになった。

『やっぱりね。紫苑たちだったら今日も来るって思っていたよ。さて、と。
迎撃の為の連絡をしなくちゃね』

「西村先生。流石に今日は彼らも現れないのでは？　昨日あれほど指導したことですし」

「布施先生。彼らを侮ってはいけません。彼らは生粋のバカです。

あの程度で懲りる
ようであれば今頃は模範的な生徒になっているはずですから」

「そうでしょうか？　いくらなんでも、そこまでバカではーーーあ、アレは！？」

――ドドドドド！

『おおおおっ！　障害は排除だーっ！』

『邪魔するヤツは誰であれブチ殺せーっ！』

『サーチ&デェース！』

「に、西村先生！　大変です！　変態が編隊を組んでやってきました！」

「まさか、懲りるどころか数を増やしてくるとは。これだからあの連中は・・・・・・！
布施先生、警備部隊全員に連絡を！　一人として通してはいけません！　私は定位置につきます！」

「は、はいっ！」

☆

僕たちの没料作戦は成功したようで、先生を突破していく。
干渉をしないために先生を孤立させて配置させたのは間違いだったようだな。
まさに『策士策に溺れる』だね。

そうやって油断していると、痛い目を見ることになるらしい。

「そこまでです、この薄汚い豚ども！　この先は男子禁制の場所！　おとなしく引き返しなさい！」

「し、清水さん！　あと、その他女子多数！？」

「しまった！　何か引っかかっているとは思っていたがコレだったか！」

しまった！　敵が僕たちに対抗して数を増やしているかもしれないということを
考えていなかった！　しかも今の情報社会、敵の情報無しに戦おうだなんて考えがあまかったんだ！

「清水さんお願いだ！　そこをどいて欲しい！」

「ダメです！　そうやってお姉さまのペッタンコを堪能しようだなんて、神が許しても私が許しません！」

ふ、二人ともなんてコトを・・・・・・！

「違うよ！　僕の目的は美波のペッタンコじゃないんだ！　信じて！」

「嘘です！　お姉さまのペッタンコに興味がない男子なんているはずありません！」

恐ろしい会話をしていることに気付かない明久の元へあの方が・・・・・

「本当だよ！　ペッタンコは所詮ペッタンコなんだ！　今の僕には美波の地平線のようなペッタンコよりも大事なことが右肘がねじ切れるように痛いいぃぃっ！」

「黙って聞いていれば、人のことをペッタンコペッタンコと・・・・・！」

ペッタンコの化身、島田さんが現れた。
島田さんは明久にワザを掛けた。
明久に８０のダメージ。明久は倒れた。
パーティ全滅。ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ

「氷花、今アンタ失礼なことを考えなかった？」

「いえいえ！　滅相もございません！」

島田さんはいつの間に読心術を身に着けたんだ！？

「み、美波。今は入浴時間じゃ・・・・・・？」

「忘れたの？　ウチと瑞希はＦクラスだから後半組なのよ。――――もっとも、前半組のＡクラスからも参加している人がいるみたいだけどね」

くっ！　となると、メンバーは大凡想像が着くな・・・・・・！

「やっほー。吉井君。何を見に来たのかな？　ボクを覗きに来てくれたのなら嬉しいんだけど♪」

「工藤さん!?　そんな!　どうしてここにいるの!?」

「愛子だけじゃないわよ」

「まっ、優子もいるよね」

「当然でしょ。まったく!　こんなことするなんて、どうやら性欲が溜まりに
溜まりまくっているみたいね。こんなことになるんだったらこっちに来る前に処理しておくべきだったわ」

「ちょっ!?／／／　ゆ、優子!　女の子が「・・・・・・浮気は許さない」性欲なんてはしたない言葉を「翔子待て!　落ち着ぎゃぁぁあああっ!」使っちゃダメだよ!
あと言っておくけど、別に溜まって無いからね!?　しかも処理って何する気!?」

やばい・・・・・・!　帰ったら何されるかわかったもんじゃない・・・・・・!

『諸君。ここはどこだ?』

『『『最期の審判を下す法廷だ!!』』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を!!』』』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！！』』』

『宜しい。これより――――――二一Ｆ異端者審問会を開催する！』

優子の危ない台詞を聞き、ＦＦＦ団が現れた。

「アホか！　今仲間割れしてどうすんだよ！？」

『そんなこと知ったことか！　お前に独り身の辛さがわかるか！』

『『『そうじゃー！　その通りじゃー！』』』

「ええい、雄二！　何とか・・・・・・できないね」

雄二はこっちにアイアンクローをかけられながら、手話で『自分で何とかしろっ！』
とやってきた。いつの間に手話なんて覚えたんだろう？
何にしろ状況は最悪。こちらは仲間割れ。それに対して敵戦力はこちらより数も質も
上回っている。どうしたものか・・・・・・。しかも追い打ちをかけるかのように新手が現れる。

「さてと、そろそろ料理してあげるよ」

「後ろ！？」

「ま、真奈っ！？」

何と背後から真奈率いる別動部隊が現れた。挟み撃ちされたな・・・・・。

正直もう僕らに勝ち目も逃げ場もない。

「ねぇ～秀吉君。誰の裸が見たいのかなぁ～？　正直に言ってくれればまだ個人的に見逃してあげても良いけど？」

「い、嫌じゃと言ったら？」

「教育的指導（お仕置き）が必要かなぁと思うんだけど、どう思う？」

「くぅ・・・・・・！」

あぁ。秀吉が完全に気圧されている。

「さて、おしゃべりはここまで。そろそろ始めようか、康太君？」

「・・・・・・・・・わかっている」

八方塞がり。こうなれば一か八か・・・・・・

『『『氷花覚悟っ！』』』

「付き合ってらんないよ！」

僕は女子の壁がある方向へ全力で走り出す。

「な、何する気よ！？」

「ちょいと壁を、ねっ！」

『『『なっ！　か、壁を走っ！？』』』

「西村ぁぁあああ！」

僕は女子の壁を、壁を走ることで越え、一気に西村の元へ辿り着く。

「ふっ、確かに、お前の身体能力の高さには目を見張るものがある。しかし！」

「っ」

西村が床に自らの拳を叩き付ける。

「この俺に勝てるとでも思ったか？」

「さあね。かるく組み手といきませんか？」

「久しぶりにしごいてやろう」

「そいつは、楽しみですね！」

僕は西村に向かって行った。拳が放たれる、僕は全身を回転させ、突きを受け流すと
同時に懐に入り、遠心力を加えた手刀を顔面に繰り出す。それをガードしようとする
西村。が、これが狙い。ここで手刀から肘打ちに変えーーー

「ぐはっ！？」

「まだまだだな」

「くっ！」

一時、距離を取る。一体何が起きた？　いきなり顔面に西村の拳が入った。

「メオトーデ」

メオトーデ？　っ！　そうか、あれか！

「別名『夫婦手』だ」

「ははっ、やっかいですね。その手法」

この夫婦手とは、現代のスポーツ空手変貌する際に失われた口伝の一つ。

一言で説明すると、両の手をつかず離れず同時に動かす手法だ。

実際今、僕に受け流された右腕の突き、つまり『前の手』のコンマ数秒後に飛び出してきた『後の手』に僕は反応できず顔面に一撃もらってしまったという訳さ。

「それにしても、効きますね・・・・・・」

「どうした？　もう終わりか？」

「そんな訳ないでしょう？」

とにかく時間を稼がないと。西村が皆の方へ行ってしまっては舜殺される。

「やぁっ！」

「ふっ」

西村の夫婦手による突きはやっかいだ。普段こういう素手での勝負の時、
両手でほぼ同時に突き込んでくる敵はそうそういない。
いつぞやの西村との組み手が無かったら今頃ボコボコだろう。
現在僕は両腕を棒の様に動かし、攻撃を受け流している。
因みにコレを化勁という。コロの原理で攻撃を受け流すワザだ。

「ちっ」

「突きに気を取られすぎだ。足がお留守だぞ？」

「くっ！」

両腕をクロスさせて攻撃を防御する。その攻撃でやや後退してしまう。すると僕の肩を叩くものがあった。誰だよ！？　今手一杯だってのに僕の肩を叩くのは！

「（ニッコリ）」

「・・・・・」

僕の方を叩いていたのは優子だった。気付いてみれば僕以外全滅していた。

「もうこんな真似ができない身体にしてあげるわ」

「それは全力で拒否する！」

合宿二日目。こうして、僕らは色々な意味で熱い夜を過ごした。

第三十五問　二日目と全面戦争と合成台詞　後編（後書き）

今回は明久です。

皆さん、学校などでちょっとしたゲームをしたことがないだろうか？　指同士で
叩き合い、数が5になった手は消滅、といったものや、連想しりとりなど、
その種類はさまざまだ。だがそれに罰ゲームが追加されたらどうだろうか？
皆、負けたくないから必死にビリにだけはならないようにするだろう。
お気付きだろうか？　それは既に負けられない戦いになっていることに・・・・・・。負けられない遊びは、もはや遊戯ではないのだよ・・・・・・

次回　バカと銀色と召喚獣　『夢オチと英単語と古今東西』

よし！　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第三十六問　夢オチと英単語と古今東西（前書き）

皆様、あけましておめでとうございます。

今更って感じでしょうが、言わせてください。

あと、更新遅れてすみませんでした（汗）

第三十六問　夢オチと英単語と古今東西

強化合宿三日目の日誌を書きなさい。

土屋康太の日誌
『前略。（＊氷花紫苑に続く）』

教師のコメント
今度はリレー方式ですか。次から次へとよく思いつくものです。

氷花紫苑の日誌
『誰かが僕たちの部屋の前に来る音がしたので目を覚ました。侵入者は４人。
それぞれが違う人の元へ向かって行った。そして僕の元へも一人。
僕は寝込みを襲われまいと逆に侵入者と位置を入れ替え、僕が押し倒すような形になる。
そこで顔を確認すると・・・・・・（＊木下秀吉へ続く）』

教師のコメント
部屋の前に来る音がしたから起きたというと、あなたはどこの殺し屋ですか・・・・・・
しかも木下君もコレに関わっているんですか。

木下秀吉の日誌
『暖かい布団の温もりに突然風邪が吹き込んだ。それを合図に、恐怖の一夜が始まった
（＊坂本雄二に続く）』

教師のコメント

恐怖の一夜ですか？　ですが氷花君からの日誌からはそのような表現は見受けられませんでしたが。

坂本雄二の日誌
『そして翔子が俺の前で浴衣の帯を緩めようとした。俺は慌ててその手を押さえつけ、思い止まるように説得した。ところが、隣では島田が明久に迫っていたり、木下姉が
紫苑に襲われているような絵になっていたり、宮野が秀吉の布団に入り込んでいたりと中々カオスな空間になっており（＊吉井明久に続く）』

教師のコメント
木下君が恐怖の一夜と書いたのが納得いきました。あとでＦＦＦ団に報告しておくとして、君たちに一体何があったのですか？　土屋君が略した部分がとても気になります。

吉井明久の日誌
『後略』

教師のコメント
ここでその引きはないでしょう。

「ううん・・・・・・ん！？」

ふと目を覚ます。すると僕は見慣れない場所で両手両足のそれぞれ手錠で繋がれていた。

つまり身動きが取れない。

「くそっ！　一体何だよこの状況！　何で目を覚まさなかったんだよ僕！」

「お目覚めのようね」

「っ！？」

声が掛かる。声の主はすぐにわかった。

「何でこうなっているかわかるかしら？」

「お仕置きはさっき十二分に受けたはずだが・・・・・」

優子だった。

「わからないなら教えてあげるけど？」

「じゃあお言葉に甘えさせて貰おうかな？」

一体全体何をされるのかわからないが、何か今の優子が妙に色っぽく感じる。

それにしても四肢を手錠で繋いで動けなくするとかどんなプレイだよ・・・・・・

流石に抜け出せないぞ。

「紫苑、あなた溜まっているんでしょ？」

「雰囲気ブチ壊しだよ・・・・・・あと溜まって無いから」

「別にあなたに選択権は無いわ。アタシが一方的にするだけだから」

「フッ、優子にそんなことできるわけ・・・・・・って何してんの!?

何で僕のズボン脱がしてんの!?」

「何ってフェ「はい！　はいそこまで！　これ以上は公序良俗に反する！」一々五月蠅いわね。そんなのどうでもいいのよ。さぁ、あなたはアタシに身を任せていればいいの」

「ちょっ!?　優子、マジ止めっ・・・・・・・！　アッーーー」

合宿三日目　朝・・・

「って夢オチかよ！　しかもあんな夢見るなんて、どんだけ溜まってんだよ！」

「夢オチ!?　がっかりだよ畜生！」

明久も僕と同じ体験をしたようだ・・・・・・

「にしてはやけに重いな、って秀吉か・・・・・・」

夢のおかげで一瞬優子かと思ったがすぐに秀吉だと判断できた。

「んぅ～、真奈～」

「秀吉、僕は真奈では無いんだが・・・・・・。コホン、秀吉君、結局女の子なら誰でも良かったの？」

「すみませんでしたっ！」

僕が真奈の声を真似て耳元で囁いてやると秀吉が飛び起きて土下座をしだした。

「んむ？　いつの間にか朝なのじゃ・・・・・・とりあえずおはようじゃ、二人とも」

「おはよう秀吉、明久」

「とにかく雄二！　起きろコラぁっ！　あ、おはよう秀吉、紫苑」

「ぐふぁっ！」

「んむ？　結局雄二は自分の布団の中にはおられんのかの？」

「秀吉、結局って？」

「いや、別に大したことではないのじゃが・・・・・・雄二は寝相が大層悪いようでのう。明け方はワシの布団の中に入ってきておったもんじゃからーーってやめるのじゃ明久！　花瓶を振りかざしてどうするつもりなのじゃ！」

「殴る！　コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」

「秀吉、因みにその後は？」

「狭かったもんでのう。紫苑の所へ移動したんじゃ」

「紫苑！　お前もか！」

カエサルさんみたく言わないでくれ・・・・・・。あと秀吉、その移動で僕が狭い思いをすることに対しては考慮してくれなかったの？

「おいお前ら！　起床時間だーーーぞ・・・・・・・？」

「死ね二人とも！　死んで詫びるんだ！　あるいは法廷に出頭するんだ！」

「なんだ！？　朝からいきなり明久がキまっているぞ！？　持病か！？」

「そいつは凄い持病だね・・・・・・よっと」

「アウチッ！」

「すみませぬ西村先生、すぐに準備するゆえ」

「・・・・・朝から何があったんだ？」

食堂・・・

「雄二、そう言えば昨夜妙なことを言われたよ」

「ん？　なんだ？」

現在僕らは食堂にて朝食を食べている。その最中明久が昨夜のことに関しての話をし始めた。

「工藤さんに『脱衣所にまだ見つかってないカメラが一台残っている』って」

「なんだと？」

「昨日工藤さんは犯人じゃないってことになったけど、カメラのことを知っているし、どう思う？」

「もし工藤さんが犯人だったら何でわざわざカメラのことを話題にしたの？」

「・・・・・・・・・・確認するしかない」

「やっぱりそれしかないか・・・・・・」

「だが、工藤の情報はありがたいぞ」

「え？　カメラが残っていることが？」

「ああ。それを工藤しか知らないってことは、そのカメラに女子の着替えが撮影されている可能性が高い。それを手に入れたら入浴していない女子の確認もできるからな」

「・・・・・・・・・・隠し場所なら5秒で見付ける自信がある」

そいつは凄いな。康太を入隊するよう勧誘した方が良いのだろうか？

「けど、本当にそんなカメラがあるのかも怪しいよ？」

「いや。最初にカメラが脱衣所で見つかった方がおかしいんだ。あんなに盗撮や盗聴に長けている犯人のカメラが素人に見つけられるなんて考えにくい。そうなるとーーー」

「・・・・・・・・・・二段構え」

「つまり、最初のはカモフラージュだと？」

「そういうことだ」

「用意周到じゃな」

「けど、それならお風呂の時間を避けてカメラを取りに行けば解決ってことだね」

「・・・・・・・・・・それは無理」

「え？　なんで？」

「・・・・・・・・・・時間外だと脱衣所は厳重に施錠されている」

初日の覗き騒ぎの所為かな？

「諦めて今まで通りの方法を貫けってことか・・・・・・」

「そのようじゃな」

「そこで昨日の反省だ。明久、昨日の敗因はなんだと思う？」

「敗因？　う～ん、向こうが女子の半分を防衛に回してきたことじゃないかな？」

「それと、本来入浴時間だったはずのメンバーの参戦もね」

明久の説明に僕が補足する。

「そうだ、昨日の敗因はＡクラスを含め、敵の戦力が大幅に増強されていたことだ」

数でも質でも圧倒的に不利だもんね。

「そこで、こちらも更に戦力を増強しようと思う。Ｆクラスだけではなく他のクラスも味方につけて対抗するんだ」

ふむ、なるほど。その意見には賛成。僕としては電撃作戦を使いたいけど、こちらには
それを行う為の戦力が無いからなぁ。

「む？　明久、どうしたのじゃ？」

「う～ん。なんか、この作戦がいつものやり方と違う感じがしてなんだか・・・・・・。
ほら、向こうの戦力が大きいからってこっちの戦力を増やすっていうのが、

イマイチ僕たちらしくないというか・・・・・・」

「ほぅ・・・・・。明久も頭が少しは回るようになってきたな。
その通り。
このやり方の本当の目的は正面突破だけじゃない」

「んで、他の目的って何？」

「僕たちの保身、でしょ？」

「その通り。いいか？　今のところ未遂で終わっているから大した問題になっていないが、覗きは立派な犯罪だ。作戦が成功して女子風呂に至ったとしても、例の真犯人が
見つからない限り俺たちは処分を受けることになる」

良くて停学、最悪の場合退学になる。

「それを避ける為の戦力増強――つまりメンバーの増員だ」

「増員が処分を逃れる手段になるって？」

「ああ。向こうだって大人数で攻めてくるこちらのメンバーを戦いながら把握するなんて厳しいからな」

おお、なるほど。僕たちはまあ面がわれているから置いておくとして、他のクラスの
メンバーまで参加して僕たちだけが罰せられるのはおかしいもんね。
唯でさえこの学校はクラス間での差別意識があるんだし。
世間からしたら特ダネだもんね。

「なるほど。流石は雄二。汚いことを考えたら右に出る者はいないね」

「知略に飛んでいると言え」

Ａ・Ｆクラスの合同学習部屋内・・・

あれからの話し合いでまずは合同授業で一緒の部屋のＡクラスから巻き込むこととなった。

「Ａクラスなら久保を説得するのが妥当だな。そんなわけで明久。説得に行ってこい」

「うむ。明久ならば適任じゃな」

「・・・・・・・・・・・・頼んだ」

「ファイト」

「あ、うん。別にいいけど」

明久は自分が久保に好かれていることに気付かないからなぁ。

「でも、どうして僕なの？」

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

ヤベッ、気まずい・・・・・・

「あ、あのさ。なんだか凄く嫌な感じがするんだけど、本当に大丈夫だよね？」

「そ、そうじゃな。一応、久保はお主に悪意は抱いておらんと断言できる」

「・・・・・・・・・彼に悪意はない」

「寧ろ好意を持っているというか・・・・・・・」

「なんで三人ともそんな奥歯にものがはさまったような言い方をするの？」

「明久、早く行ってこい」

「え？　でも・・・・・・・」

「大丈夫だ。この中ではお前が久保に一番好かれている。自信を持て」

「あ、うん」

「・・・・・ただし、いざという時はコレを仕え」

そこで雄二は明久のポケットにある物を押し込んだ。その名をスタンガンと言う。

「そ、それじゃ、行ってくるね」

明久が引きつった顔をして言った。そして久保君の元へと向かった。

「皆、明久に敬礼」

「「「「（無事を祈る）」」」」

僕たちには、なんだか明久の背がとても遠い物のように思えた。

「明久。どうだった？」

数分後、明久が帰還した。

「ごめん。失敗だったよ」

「そうか。まぁ、無事で何よりだ」

「いや、そんな危ないことはしていないんだけど」

「でもそうなると、他のクラスを是が非でも引き入れないと」

「だな」

「それはそうだけど、今は一応授業中だよ？」

「それはわかっている。だが、全クラスに声をかけるとなると休み時間程度では
全然足りないからな。なんとしても抜け出すしかない」

でも監視しているのはあの西村だしな。そう簡単には抜け出せないよ。

「こらっ。アンタたち、また何か悪巧みしてるでしょ」

「覗きの話なら諦めたら～？」

島田さんと真奈に気付かれた。これはまずい。西村もこちらに気付いた。

島田さんの相手は明久に任せて真奈はこちらで対応しよう。秀吉では話にならん。

「で、何の話？」

「え～っと」

さて、何の話にしようか？　下手な嘘ではバレるからある程度現実味のある話にしないと・・・・・・

「大学を「嘘ね」はい、すいません」

しかし何故いきなりバレたんだ？

「あのねぇ、まず紫苑は大学のことなんて気にしなくていいじゃない。既に就職を
済ませているようなもんだし。それに彼らは今大学よりも重要な話題があるでしょ？」

「浅はかだったか・・・・・・！」

ここで雄二が目線を送ってきた。

『鉄人にマークされている。島田と宮野を遠ざけろ』

意外だ、真奈がいる時点で僕へのマークは外されたと思っていたのに・・・・・・

西村は念を入れるタイプか？

話を戻して、どうやって真奈を退けるか・・・・・・。秀吉を使えば一瞬だが今回は

秀吉を生贄にするわけにもいかないのでその方法は諦めるが、さてーーー

「そうだ、言い忘れていたけど、合宿が終わったら私居候の身じゃなくなるから」

「え？　住む場所見つかったの？」

「うん。紫苑家の近所だけどね。というわけで、ちょっと早いけど今までお世話になりました」

「こちらこそ、そんなご丁寧に」

真奈がペコリと頭を下げてきた。真奈が僕に頭を下げるなんて・・・・・

つい僕も頭を下げる。

「諸君ここは何処だ？」

「「「最後の審判を下す法廷だ！」」」

「異端者には？」

「「「死の鉄槌を！」」」

「男とは？」

「「「愛を捨て、哀に生きるもの！」」」

「よろしい。これより―２―Ｆ異端審問会を始める」

あれ？　聞かれてました？
突如として僕はＦＦＦ団に囲まれる。
明久の方も上手くやったみたいで、皆もＦＦＦ団と島田さんの行動に便乗して脱出
したみたいだ。僕もＦＦＦ団の騒ぎに便乗して脱出させてもらった。

Ｄ・Ｅクラスの合同学習室前・・・

「・・・・・やっぱりこっちにも監督の先生がいるね」

「当然だな」

「して、どうするのじゃ？　このままでは交渉を進められんが」

「・・・・・・・・・侵入も難しい」

「入り口前に陣取られていますが？」

「簡単だ。一人が囮になって教師を引きつければいい」

「断る」

チッ、断られた。

「やれやれ。それなら、ゲームで決めないか？」

「ゲームって、何？」

「古今東西だ」

実際にやるのは初めてだな。

山手線ゲームという別名もあるって知ってました？

「わかったよ。やってやろうじゃないか」

「よし。それならいくぞ」

順番・・・雄二・明久・僕・秀吉・康太

ジャンケンで順番を決め、大体のルールを聞いて、始まった。

「坂本雄二から始まるっ」（雄二のコール）

「「「「イェーッ！」」」」（僕らの合いの手）

「古今東西っ」

「【A】から始まる英単語っ」

パンパン（手拍子）→雄二の番

適当に【ａｓ】からいくか。

「【ａｐｐｌｅ】！」

パンパン（手拍子）→明久の番

「・・・・・・僕の、負けだ・・・・・・・」

「一つも思いつかんのか！？」

早い！　早すぎる決着！　最速クリアを目指している人もビックリの速さだよ！

「で、でもムッツリーニもこんなのできないよね？」

失礼なことを聞いてるよ？

「・・・・・・・・・・・そんなことはない」

「そ、そうなの？」

「・・・・・・・・・・・やってみせる」

明久と康太の位置が入れ替わる。

「それじゃ・・・・・古今東西、【Ａ】から始まる英単語っ」

パンパン（手拍子）→雄二の番

「【Ａｌｍｏｎｄ】」

パンパン（手拍子）→康太の番

「・・・・・・・・・・【ＡＶ】」

ん？

「ちょっと待って二人とも」

僕の気持ちを代弁するかのように明久が突っ込む。

「なんだ、明久」

「今のムッツリーニの英単語はどうかと思うんだ」

「何を言っている。きちんとＡから始まっていただろうが」

略語だけど。

「ああ、うん。一応そうだけど・・・・・・」

「それなら問題ないだろう。続きをやるぞ」

なるほど、基本はスルーか。

パンパン（手拍子）→康太の番

「・・・・・・・・・・【Ａｋｉｈｉｓａ】」

スルースキル発動！

「はい待って二人とも」

「今度はなんだ明久」

「いつの間に僕の名前は英単語になったのかな？」

「・・・・・・・・・・【名詞】バカの意。またはそれ相応の人物の総称。【―ｆｕｌ】で形容詞」

「何！？　そうやってまるで本当に辞書に載っているような説明はやめてよ！」

なんだか本当に辞書にあるかのような気がしてきた・・・・・・

「とにかく、固有名詞や略語は反則だからね！」

「あー、わかったわかった。んじゃ、続きいくぞ」

パンパン（手拍子）→雄二の番

「【Ａｒｒｉｖａｌ】」

パンパン（手拍子）→康太の番

「・・・・・・・・・【Ａｍｅｎ】・・・・・・ボ」

「ねぇ、今小さい声で『ボ』って言ったよ！？　今のは明らかに『

アメンボ』だよね！？」

「仕方ない、ならば今度は初心者の紫苑からでどうだ？」

「僕は良いけど？　お題変えていい？」

「構わんぞ」

「【日本に現存する世界遺産】っ」

パンパン（手拍子）→僕の番

「【原爆ドーム】」

パンパン（手拍子）→明久

「よーし良いだろう！　いっちょやってやんよ！」

「「また一つも思いつかんのか（つかないの）！？」」

結局明久が先生たちを引きつける囮役を担ってくれた。

B・Cクラスの合同学習室前・・・

「はぁっ、はぁっ、はぁっ・・・・・・。なんとか、撒いた、かな・・・・・・」

「明久、ご苦労だったな」

「苦労、したよ、途中から、大島先生が、出てきて・・・・・」

「そうか、おかげでD・Eクラスの協力を取り付けることができた。良くやってくれた」

「それは良かったよ。これで戦力は一気に増えたね」

「ああ。次はBクラスとCクラスだな。もう一度頼むぞ明久」

「そう簡単に引き受けるわけにはいかないよ。さっきの勝負も納得いってないし、
もう一度勝負だ！」

「別にいいが、時間の無駄だと思うぞ？」

右に同じ。

「ふふっ。そうかな？　僕をさっきまでの僕と思わない方がいいよ」

やれやれ、今度は何で挑む気だ？

「それじゃ・・・・・吉井明久から始まるっ」（明久のコール）

「「「「イェーッ！」」」」（僕らの合いの手）

「古今東西っ」

「「「「イェーッ！」」」」

「【O】から始まる英単語っ」

パンパン（手拍子）→明久の番

「【オーガスト（August）】！」

バカだ・・・・・・

「結局、ワシはこの部分出番ナシじゃったのう」

第三十六問　夢オチと英単語と古今東西（後書き）

今回は紫苑です。

合宿三日目、三度決戦の火ぶたが切って落とされた。大将同士の戦略の読みあい。
乱戦の中、ついに腕輪がそのベールを脱ぐ。

次回　バカと銀色と召喚獣　『ムチと夜這いと撮影会　前編』

ついでに浴衣姿の女子もベールを脱ぐ。

『ついでってどういうこと？』↑次回浴衣姿になる女子一同

「し、仕方ないじゃないか！　だって台本にそう書いて、ギャァァァアア！」

第三十七問　ムチと夜這いと撮影会　前編

以下の英文を訳しなさい。
『Although John tried to take the airplane for Japan with his wife's handmade lunch, he noticed that he forgot the passport on the way.』

姫路瑞希の答え
『ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、途中でパスポートを忘れていることに気がついた』

教師のコメント
はい正解です。

土屋康太の答え
『ジャンは

』

教師のコメント
ジョンです。

吉井明久の答え
『ジョンは手作りのパスポートで日本行きの飛行機に乗った』

教師のコメント
手作りパスポートという言葉の意味をもう一度よく考えてみて下さ

い。

？？？・・・

『結局、手を貸してくれたのはＤ・Ｅクラスだけじゃったな』

『仕方ないだろう。Ｂクラスは代表が代表なだけにまとまりがないし、Ｃクラスは代表が小山だからな。男子連中が尻込みするのも無理はない』

『けど、Ｄ・Ｅクラスが協力してくれるだけでも昨日よりずっと状況が良くなったよ』

『まぁそうじゃな。女子側とて入浴の為に最大でも半数しか出てこられんじゃろうし、
教師を抑えることができればなんとかなるじゃろ』

「こんな事言っちゃアレだけどさ、ちょっと自信がないんだけど」

『急にどうしたんだ紫苑？』

「いや、何というか、召喚獣勝負になっても僕の場合弱点バレてるし、腕輪を使われたらかなりきついんだけど？」

『そこを何とかするのがお前の仕事だ』

「う～ん」

今回の作戦に僕の役割が結構重要になっていたりする。現在僕は皆とは別行動している。
なので、今は無線機で会話をしている。え？
何でそんな物を持ってきているのかって？それは色々あったんだよ。色々・・・・・・
話を戻すと、僕の役割は二つ、
迎撃してくるであろう女子と教師陣の主力部隊を先回りして雄二たちの進路を確保
するというもの。しかも単独でだ。それと女子の主力部隊、基霧島さんたちの部屋の
監視だ。あの部屋に女子の大将格が揃っているといってもいい。
因みに使っているのは康太が貸してくれた盗聴用の小型カメラ。え？　何でそんな物を持ってきているのかって？　それはｒｙ

『その為の腕輪だろ？』

「そうでございますがね」

今僕は学園長から貰った『黒空の腕輪』を装備している。秀吉も然り。
でも今はまだ一つにしていない。キーワードを言えばすぐに本来の姿にできるように
してあるけど。

『紫苑、翔子たちに動きはないか？』

「今のところはね。そっちの準備はＯＫ？」

『今ブリーフィングを終了してこれから出るつもりだがーーー』

『吉井っ、大変だ！』

「どうしたの！？」

『わからん！　ちょっと待ってくれ！　・・・・・・・・・。やられた！　どうやらこっちの作戦が読まれていたらしい！　とにかく俺たちは出るが、本当に翔子たちに動きはないのか！？』

「カメラには会話をしている姿しか映ってないけど・・・・・・！？　まさか！」

『どうした！？』

もしかするとの可能性を確かめる為、僕は霧島さんたちの使用している部屋のドアを開ける。するとーーー

「やられた！　もぬけの空だ！　録画式のホログラム装置を使われたんだ！」

『ホログラム装置だと！？』

「きっと真奈が持って来たんだ！　とにかく僕もすぐそっちに行く！　それまで耐えてくれ！」

『わかった。こちらは分断された戦力を一旦編成し直す！　通信を切るぞ！』

ここで僕らは通信を切る。真奈め～！

「とにかく行くしかないか！」

僕は雄二が行くであろう進路を予測し、その場所へ向かった。

『・・・・・・・・・・』（↑土下座）

『・・・・・・・・・・』（↑土下座）

『・・・・・・・・・・』（↑土下座）

僕が辿り着いたのはこの場面。す、凄い光景だ。

「フフ、気付くのが遅かったみたいだね」

真奈が余裕の笑みを浮かべる。こういう状況でなければ素直に可愛いと思えるのに。

「あぁ、まんまとはめられたよ」

「さぁーてと、あなたの始末はどうしようかしら？」

優子は額に怒りマークを浮かべている。

「援軍ですか、でもあなた一人ではどうすることもできませんよ？」

「紫苑！　待ってたよ！」

「意外と早かったな」

「大丈夫かい？」

「そんな風に見えるか？」

「見えません」

「一言で言うと俺たちの完全敗北だ。もうやり合う必要はないぞ」

「いんや、やるよ。腕輪を実戦で試してないんだし」

「あなたがやるというのなら、構いませんよ？」

「では高橋先生、フェアな勝負でいきましょう。一対一で」

「高橋先生ダメです！　腕輪装備の紫苑には！」

「大丈夫ですよ、宮野さん。心配には及びません」

「心配に及ばないのでしたらちょっと賭けをしませんか？」

「どのようなですか？」

「もし僕が先生に勝ったなら、今夜僕らへの特別指導は免除、ってものです。先生が
勝ったならば僕らを煮るなり焼くなり好きにしていいですよ？」

「いいでしょう「先生っ！」」

何か言いたげな真奈を高橋先生が手で制し、僕と高橋先生の一対一の勝負が決定した。

「「試獣召喚（サモン）！」」

お互いに召喚獣を呼び出す。

『学年主任　高橋洋子　ＶＳ　Ｆクラス　氷花紫苑
総合科目　７７４１点　ＶＳ　４３８２点』

「紫苑気をつけろ、明久の召喚獣も一瞬でやられた！」

「ムチの射程範囲がありえなかったよ！　多分腕輪の能力だと思う。事実点数も減っているし。それに武器が見えなかった」

「情報ありがとう！」

そうなると先生の召喚獣の腕輪の能力は『伸縮関係』の能力かな？
因みに二人が普通に話しているのは僕と高橋先生の勝負が決着がつくまでの間の
執行猶予が与えられたからである。

「リンク！」

キーワードを合図に僕の意識は召喚獣に注ぎ込まれる。この時、学園長が見分けが付くように召喚獣の鎧と目のカラーリングが変化する様になっており、どちらも今は蒼色。

「学園長からの話によると、その状態の時フィードバックが数倍になるとか。
まさかそれを利用して手加減させるつもりですか？」

『まっさか～、そんなわけないじゃないですか。当たらなければいいんですし』

「では、いきますよ？　あなたに挑戦と無謀の違いを教えてあげます」

『そうですか、なら、僕は先生に理屈と現実の違いを教えてあげますっ』

先生の召喚獣がムチを構える。目に見えない攻撃か。フフ、舐められたものだよ。
召喚獣となった僕が会話を切り、先生の召喚獣に全力で接近する。

「早い！」

「確かに早いですが」

先生の召喚獣がムチを振り下ろす。僕はその時、全意識を先生の召喚獣の動きを観察
することに集中する。型・タイミング・振り下ろす向き。それらとタイミングを合わせ、

『『『かわした！？』』』

「っ！？　そんな！」

『先生、生憎ですが、動体視力を超えた速さの物なんて、僕は見慣れているんですよ！』

銃弾とか銃弾とか銃弾とか。

「まだです！」

先生はその後何度もムチを振るうが僕は全てかわす。国家機密情報局で学べる驚異的な
技術は数多い。そして頭上からの攻撃。それは僕が待ち望んだもの！

『今だ！　『白き腕』よ！』

キーワードを合図に召喚獣に装備されている腕輪を発動させる。
そしてムチを掴む。

「くっ！」

『伝導！』

ムチを伝って白銀の腕から発せられる波動衝撃が先生の召喚獣の元へ向かう。
そして先生はそれに反応できていない。勝ったーーー

「試獣召喚（サモン）！」

突如真奈が召喚を開始した。やっぱり止めにきたか。召喚された真奈の召喚獣が
衝撃波がムチから先生の召喚獣に届く前にムチを切断する。

「ちぇ、届かなかったか」

「悪いけど、今高橋先生にやられるのは士気の問題に関わってくるからさ・・・・・・・・中断させてもらったよ？」

「いいよ。別に。僕が真奈の立場だったらそうしていたし。その代わり賭けは、いいよね？」

「・・・・・・いいってさ。私も依存はないし」

真奈が先生と回りの生徒に許可を取り、言った。

「よし！　じゃあ皆、今日はお咎め無しだ！　帰ろうよ！」

僕たちの部屋・・・

「まさか高橋女史まで参戦してくるとはな」

「でも、紫苑がいれば問題ないよね」

「そんな訳ないだろ？」

「その通り。あの戦術はもう通用しない。同じ失敗を繰り返すほど彼女たちは甘くない。
必ず何らかの対抗策を練ってくるはずだよ」

真奈や優子は僕の行動パターンくらいお見通しだろう。

それに、今日は口惜しいけど雄二の策が霧島さんに読まれていたんだから。

「紫苑と腕輪のコンビは最後の切り札だ。それにあれは五分しか持たないから、使いどころを考えなければならない。だがそれは相手も同じ。明日も今日と同じく読み合いになるだろうな。だが今日のように遅れは取らん。

というわけで、まず今日の収穫を確認する。ムッツリーニ」

「・・・・・・・・・・他のクラスでの目撃情報を集めた」

雄二が明日は更なる戦力増強をはかり、今日と同じく正面突破を行うと説明してくれた。

次は向こうの陣形などについてだ。

「向こうの布陣は教師を中心とした防御主体の形だが、色々と弱点がある。

それがなんだかわかるか？」

「微塵もわからないね」

「チョキの正しい使い方を教えてやる」

「ふぎゃぁあっ！　目が、目がぁっ！」

う～ん。今のって霧島さんが雄二によくやる目つぶしだろうか？

かなりの頻度でやられているから自分のワザとしてマスターしてたんだね。

人間、恐怖や苦痛をともなうことは嫌でも記憶してしまうものだし

ね。

「まったく、少しは考えろってんだ。いいか？　召喚獣を呼び出すフィールドには
《干渉》というものがある。これは一定範囲内で別々の教師がフィールドを展開すると、科目同士が打ち消し合って召喚獣が消えてしまうというものだからーーー」

「要するに教師は余程開けた場所以外では複数人数を配置することができないということじゃろう？」

「そういうことだ」

教師が小隊を率いていて、その小隊は近づき合えないと考えればいいかな。
その後、雄二が明日の教師＆女子勢の布陣を予測した紙を見せる。
今日の向こうの布陣の意味も話してくれた。

「俺たちの勝利の為には、どうしてもあるヤツを極力無傷で鉄人の前まで連れて行く必要がある」

「あるヤツ？」

「お前だよ明久。お前が鉄人と戦って勝利する。これはどうあっても外せない条件だ」

「それってやっぱり僕が《観察処分者》だから？　だったら僕より点数が高くて召喚獣が物理干渉できる紫苑の方が良くない？」

「いや、紫苑では逆効果になる」

「なんでさ？」

「組織のことは世界的なトップシークレットで西村も僕もそれを公開したり、悟られる訳にはいかない。明久が行けば、悟られないようにいつも学校で明久たちを追いかけ回している時くらいしか本気を出してこないはずだよ。でも同じく組織の僕が行くと、本気を出される。こう言うのはアレだけど、とても勝ち目はない」

「成る程ねぇ」

「じゃが、そうなると高橋女史の場所を無傷で通過する必要があるじゃろう？」

「ああ。大島先生はムッツリーニに任せるとして、高橋女史とその周辺の女子たちと戦う戦力が必要だ。そこに紫苑を投入する。少なくとも今の戦力では高橋女史の元へ辿り着くことすらできないからな」

そこで、Ａ・Ｂ・Ｃクラスの男子たちを仲間として引き入れる為に優子たち女子に浴衣を着せて写真を撮り、男子たちの劣情を煽る作戦を雄二が提案した。

優子の浴衣姿をわざわざ他の男子に見せたくないけど、ここは我慢するしかないよね？

「紫苑、木下姉と宮野に連絡を取ってくれ」

「気が引けるなぁ～」

とりあえずメールを作成する。

【悪いんだけど、僕らの部屋に来てもらって良いかな？】

Ｐｉｐｉｐｉｐｉ（以後省略）

一二分後に返信が来る。まずは真奈だ。

【何だか瑞希たちにも同じ様なメールが来たんだけど？　これは偶然？
何か企んでない？】

あ、やべ。タイミングをズラすべきだったか。真奈をこちらに来させるのは至難のワザ
だぞ。秀吉からメールさせるべきだったか？　いや、真奈はちゃんと時を場合を
わきまえるから結果は変わらないだろうな。とにかく今は何とか誤魔化すしかない。

【そんなことないよ。また王様ゲームをやることになったから女子も誘おうって
ことになったんだ】

結構無理があるような気がするメールだが、いけるか・・・・・！？

【そう。まあいいや。その代わり、今から屋上に来てくれない？
すぐ終わらせる
からさ。ちょっと話がしたくて。いい？】

え？　何このメール。まるで告白されるイベントが待ちかまえている
るかのような文面
なんですケド？

【構わないけど、真奈は秀吉が好きなんだよね？】

【あらやだ。告白の為の呼び出しかと期待させちゃった？】

【いや、期待してたら優子に殺されるし。とにかく僕は今から屋上
に行くから】

【ありがと。皆は先に行かせるね】

【助かる】

【レイ○とかはしないわよね？】

【するわけ無いだろが！！】

【冗談よ冗談。じゃ、私もこれから行くから。返信終了】

さて、僕は屋上に行くか。真奈らしくない文面だったけど。何かあ
ったのかな？

「雄二、こっちは成功したよ。僕は真奈に呼び出されたので屋上に
行ってくる」

「わかった。後は任せろ」

「あいあいさー」

『バカぁっ！　僕のバカぁっ！　ある意味自分の才能にビックリだよ畜生！』

僕が部屋を出てすぐに聞こえた明久の叫び声が廊下まで響いていた。
因みに西村は真奈からのメールだと言って通ることができた。
数日後に行われる護衛の任務についての話とでも受け取ってくれたのかな？

屋上・・・

「あ、先に付いてたんだ。私より遅かったら女を待たせるなって言ってやろうと思ってたのに」

「そう言われると思ってたから先に来たんだ」

「あらら。読まれてたか」

真奈がジャージ姿で屋上に来た。なんだか新鮮な感じがする。家では薄着だしね。
おかげで僕と秀吉が目のやり場に困っていることなど知らないだろう。優子もだけど。

「それで、どんな理由で僕は呼び出されたんだい？」

「ちょっと、ね。今の私たちについてだよ」

「今の僕たち？」

真奈の表情が真剣なものになった。これは僕も真剣に聞かねばなるまい。

「そう。今の私たちってさ。とっても普通の学生みたいじゃない？」

「青春してるしな」

「でしょ？　あの頃は、そんなこと夢にも思ってなかったもん」

あの頃とは多分僕と真奈が初めて出会った時辺りだろう。真奈が僕に背を向けて続ける。

「自分の生きている意味がわからなくて、自分のあまりに理不尽な人生を恨んで、憎んで・・・・・・最終的には死ぬことも大して恐くなくなって・・・・・・。

そして目が覚めて。紫苑と再開して、組織に入隊した。そして、生きる理由を見付けた。誰かのために自分は命失うことになっても戦うこと。そんな理由を。

『誰かの幸せの為なら、自分が傷ついても構わない。人の為の人になりなさい？』

この言葉、私のお姉ちゃんが、私に最後に教えてくれたことなんだ」

「姉が、いたの？」

知らなかった。今まで真奈が自分には姉がいるなんて言ったことはなかったから。

「いたよ。名前は『紅　水鳥』。自慢の姉だった。何でもできた。私が、皆がお姉ちゃんに頼りきっていた。でも、お姉ちゃんはいなくなった」

「行方不明ってこと？」

「ニュースではそう報道されてる。実際はわからないけど。ひまわり園の話はしたよね？
私はお姉ちゃんみたいになれるように一生懸命努力した。お姉ちゃんの評判に泥を
塗るわけにはいかないしね。それに、私が一人前になれば、お姉ちゃんが戻って来て
くれるような気がしたから・・・・・・」

そうか。つまり真奈は姉がいなくなったのを自分の所為だと思っているのか。
自分がいつまでも姉に頼っていたばっかりに、姉が自分の元から離れていってしまったんだと・・・・・・。
因みに、真奈の過去については皆より一足先に教えて貰っている。
僕もまた然り。

「だから私はこうやって、頑張って頑張って強くなった。
今では自信を持って一人前って言えるほどに。でも、お姉ちゃんは戻ってこなかった。
また、あの時のように、私に色々教えて欲しいのに・・・・・・」

その時の真奈は、とても悲しそうな目をしていた。だからだろうか？
僕は真奈を抱きしめた。

「紫苑？」

真奈が僕の顔を見上げる形になる。

「こういう時は、黙って抱きしめてやるもんだって教えられたから」

「・・・・・・ありがと」

真奈が僕の胸に顔を埋める。

「あ、言っておくけど、紫苑に惚れ直さないわよ？」

「そうしてくれると助かる」

皮肉も、こんな状況ではその場を落ち着かせてくれる材料だ。

「もう大丈夫、ありがとう」

数十秒後、真奈が言った。流石に何秒もこうしているのは色々とまずいからな。

「ごめんね？　こんなことの為に呼び出しちゃって」

「僕は構わないけど、何で僕なの？　秀吉じゃなくて」

「まだ、話せてから・・・・・それに、恐くてさ」

「恐い？」

「私の過去を知って、私のことを嫌いにならないかなって。だって私、実の父親を殺したかもしれないんだよ？　それに、任務の時だって、麻酔銃を使ったりして、できるだけ殺さないようにしているけど、間接的には何人も殺しているんだよ？　世界の為とはいえ、人の命を奪っている様な私のことを、今までの様に見てくれるのかな？」

「迷っているの？」

「そうかもしれない。いくら任務の為とはいえそんなことして良いのかって。何言ってるんだろうね、私。戦うって決めたのに・・・・・・」

迷うこと。それは、僕たちの様な仕事をしている人ならば誰しも通る道だろう。

僕から今、真奈に言えるのは・・・・・・

「この世に正義なんて存在しない」

「え？」

「こっちの世界でそれを学んだよ。こっちの世界に来るまでは、キチンと正義と悪が別れていると思ってた。でも、それは違った。誰もが自分自身の意志を持っている。

そして意見する。その行為が正義を表しているのかもしれないけど、
それは自分の
意志を他人に理解してもらう為の行為であって、決して正義じゃない
と思う。
オピュレンティアだってそうだ。なにもあの人が言っていることだ
けが正しいとは
限らない。あの人がそうすることが正しいと思っているだけだしね？
だから僕はいざとなったら、オピュレンティアの言葉を無視してで
も、自分の意志で
行動するつもりさ。あくまで人間ってのは、考える生き物であって、
自分の意志で動くものだからね。だからーーー」

「最後まで、自分自身の意志で生きる、ってこと？」

「そういうこと」

「フフ・・・・・・」

真奈の顔に笑みが戻った。

「そうね。何を迷っていたのかしら。私も、紫苑の言うとおりだと
思う。私も最後まで
自分自身の意志に従う。今あるこの平和を守りたいから・・・・・・
」

「そして皆の笑顔を守る為に・・・・・・」

僕と真奈は拳を作り、かるくぶつけ合う。

「「これからもよろしく、パートナー」」

僕らの絆はまた一つ深まった。絆なんて言葉を使うなんてテレ臭いけど。

「それじゃ、戻りましょ？」

「そろそろ雄二たちが待ちくたびれてる頃かもしれないしね」

「そうね。そういえばだけど、最近優子に甘えてる？」

「え？　ハハハ・・・・・・すみません」

「優子けっこう寂しがってたよ？　あの子けっこう独占欲強いみたいだからあんまり寂しい思いさせちゃうと後々大変だよ？」

「そうだよね・・・・・・。帰ったらうんと甘えさせてもらおうかな。この際羞恥心なんて捨て去って」

「それが良いよ。でもあんまり見せ付けないでね？　イラッとくるから」

「りょ、了解です」

第三十七問　ムチと夜這いと撮影会　前編（後書き）

今回も紫苑です。

撮影会が無事終わり、寝床につく僕たち。だが今夜はなかなか寝付けない夜になりそうだ。何故なら夜這いしてきた犯人が寝かせてくれないから・・・・・・

「ねぇ、さっき真奈と何してたの？　私のことはほったらかしにして（ニッコリ）」

「・・・・・・（ダラダラダラダラ）」

次回　バカと銀色と召喚獣　『ムチと夜這いと撮影会　後編』

いくよ！　試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第三十七問　ムチと夜這いと撮影会　後編（前書き）

更新遅くなりました。

すみません（汗）

第三十七問　ムチと夜這いと撮影会　後編

ガチャッ

「ただいま」

「お邪魔しま～す」

僕と真奈が部屋に入る。まずそこで僕にのしかかったのは、

「遅い！」

優子の言葉だった。

「何なのよ！　自分から来てくれと頼んでおきながら自分がいないってどういうことよ！？」

「いやぁ、面目ない・・・・・・」

「しかもトイレや飲み物を買いに行ったのならいざ知らず、まさか真奈と一緒に屋上でちょっとしたデートしてるなんて・・・・・・！」

「いや、特にやましいことはｓ「お黙りっ！」はい・・・・・・」

この隙に真奈は僕から離れ秀吉の元へ。流石に自分から誘ったことだから僕を弄るネタに使う気はないみたいだ。

「大体紫苑はいつもいつもーーー！」

優子がガミガミと説教をし始める。
珍しく教育的指導（お仕置き）をしてこないので僕の身体には優しいので助かる。

「聞いてるの！？」

「フフっ、あ、ゴメン。今のは優子のありがたいお言葉に対してじゃなくて怒っている優子がかわいいなと」

「そ、そんなこと言っても説教を止めたりしないからね！？／／／」

とか言いつつも顔をほんのり赤らめる優子がまたかわいいと思ってしまう僕。

「紫苑、帰って来たなら写真に写ってくれ」

「え？　僕は被写体じゃないでしょ？」

「アタシがお願いしたのよ。せっかく浴衣姿になるんなら紫苑と一緒に撮りたいし。
アタシを撮る代わりにこういう個人的な思い出用の写真も撮るっていうのが
条件なの」

「せっかくですから私も便乗させてもらいました」

「んじゃ私も」

奥にいた姫路さんと浴衣姿に着替えた真奈が言った。

「ほら、紫苑。こっち来て？」

「あ、うん」

まず僕と優子のツーショットで一枚。

「秀吉、アンタも来て写ったら？」

「ん？　ワシもよいのか？」

「アタシたち家族みたいなもんでしょ？　家族写真だと思えばいいわよ」

「そうかの？　ではお言葉に甘えさせてもらうぞい」

僕を二人が挟む形で一枚。

「このままの流れでここにいる皆で一枚撮らぬか？」

「え？　私たちも良いんですか？」

「もちろんよ」

「右に同じ」

「そうですか、では明久君、私たちも写りましょうか」

「了解」

「俺はあまりこういうガラじゃないんだが、偶には良いか」

雄二、後で霧島さんに怒られないようにね？
皆が並ぶ中、真奈が秀吉に

「秀吉君、その、私の写真撮り終わったら二人だけで写真撮らない？」

「ワ、ワシで良いのか？」

「うん／／／」

「うむ、心得た」

真奈も一つ思い出を手に入れたみたいだね。
やっぱりキミにはこういう方が似合ってるよ。
そして、プールの時のメンバー全員ではないが、
一枚の集合写真、基思い出を手に入れた。
そういえば僕の携帯が見当たらなかったけど、どこいったんだろう？
部屋のメンバーに聞いてもわからないって言うし。
最悪の場合買いなおしかな・・・・・・

深夜・・・

ん？　足音が聞こえる。先生の見回りかな？

ガチャッ

あれ？　入って来た。しかもこっちに向かって来たぞ？　この時点

で先生じゃないと
いうことは明白だ。なら誰だろう？　まさか犯人が何らかの仕掛け
をしに来たか！？
ならばーーー

「っ、っ！？」

「まったく、いきなり何するのよ？」

「ま、真奈！？」

僕の拘束ワザを防がれたので驚いた。何で部屋が違う真奈がここに
いるんだ？

「何でここにいるのかって顔しているわね？　メールが来たのよ。
ほら」

「どんなよ」

え～っと何々？
【Ｔｏ：宮野真奈　Ｆｒｏｍ：木下秀吉
大事な話がある。皆が起きていると話しにくいので、悪いけど皆が
寝静まった頃に
こちらの部屋に来てくれない？】

秀吉はメールの時は爺言葉じゃないからな。大事な話って秀吉、つ
いに真奈に告白する気になったんだね！？　秀吉の幼なじみ兼、真
奈のパートナーの僕としては喜びを隠せないよ！　でも場所が違う
よね？　普通そこは屋上とかで言うよね？

「大事な話があるって言うから／／／」

恋は盲目、ってか？　真奈もいつもなら場所がおかしくないかということに気付くはずだけど。

「んじゃま、頑張ってくれ。僕は二度寝するから。後はご自由に～」

僕は眠いので寝させてもらおう。さり気なく聞き耳を立てていることは内緒だ。

「む～、何で寝てるのよ？　大事な話があるっていうから来たのに～」

真奈が秀吉を起こそうとしているが寝ているのをわざわざ起こすのもあれかなっている葛藤に悩ませられている中、

ガチャッ

また侵入者だ。今度は誰だ？

一応真奈とアイコンタクトを取り、様子を見ることにした。

暗くてよく見えないが長髪の女子だということがわかった。

そしてその正体が霧島さんだということも雄二にのしかかった時点でわかった。

ガチャッ

それから一分としない内にまた来た。

今度は二人。一人は明久、もう一人は僕の元へ来た。ここまでくると誰だか推測できてしまう。明久の方へ行ったのは島田さんだろう。

姫路さんは多分ここまで大胆な行動に出るとは思えない。そして僕

の方に来たのは、

「きゃっ」

「こんな時間に何の御用ですか？」

予想通り優子だった。

「まさか夜這いに来たの？」

「そ、そんなんじゃないわよっ！　ていうか紫苑が呼んだんじゃない！」

小声で話す僕と優子。僕が呼んだ？　ハテ、そんなことしたっけかなぁ？

「紫苑から一緒に寝たいってメールがきたから・・・・・／／／」

「・・・・・え？」

「え？」

事情説明中・・・

「つまりまたバカをやっていたと？」

「きっと僕がいない間に何かされたんだよ。多分バカな理由で」

「まあ仕方ないと思うしかないわね。はぁ、じゃあここに来たのは無駄足だったって訳ね」

「そうなるね。こっちに否があるんだし、部屋まで送って行くよ」

「お願いするわ。あの中を見つからずに戻れる自信ないもの。でも、せっかくだから
少しお喋りしない？」

「いいよ。こういう状況下でするのもまた趣があるよね」

家でも話はするが、こういうドキドキする状況での会話はしないので楽しみだ。

「あれ！？　やたらと単純！？」

いきなり明久が大声をあげた。

「明久声が大きいよ。西村来ちゃうよ？」

「ご、ゴメン紫苑、ってそんなことより助けてよ紫苑！」

「何をどう助けろと？」

「美波に殺されそうなんだよ！」

「ウチはそんなことしないわよ！」

「その前に二人とも俺を助けろっ！」

良いじゃん雄二。若奥様が夜這いに来てくれたんだよ？

「えぇ！？　よく見たら木下以外は全員起きてるじゃない！　もっと早く言ってよね！？」

その後島田さんが小声で何か言っていたがさほど気にする事じゃないだろう。
とりあえずここにいる女子四名には数分後にお帰り頂かないとまずいな。
いつまでもここが安全とは言い切れないｓ

「お姉さま無事ですか！？　美春が助けに来ましたよ！」

出たっ、変態ストーカーＳＩＭＩＺＵ。というかそんな大声出してよく見つからなかったなぁ。

「み、美春！？　どうしてアンタがここにくるのよ！」

「さっきお姉さまのお布団に入ったら誰もいなかったから、もしやと思ったら・・・・・！
やっぱりここに探しに来て正解です！」

それって島田さんが明久のことを好いているということに気付いているってこと？
って今突っ込むべき所はそこじゃないよね？　僕から言えるのは清水さんの考え方は普通じゃないってことだけだ。

「あ、危なかったわ・・・・・。昨日で懲りたと思って完全に油断していたもの・・・・・」

え？　昨日も来たの？

「お姉さま！　男の部屋に来るなんて不潔です！　おとなしく美春と一緒に裸で寝ましょう！　いえ、勿論イロイロするので寝かせませんけど！」

「やめるんだ清水さん！　それ以上の会話はムッツリーニの命に関わる！」

「・・・・・・・・・・（ボタボタボタボタ）」

「・・・・・・雄二、とにかく続き」

「翔子、お前は本当にマイペースだな！」

「な、なんじゃ！？　目が覚めたら女子が五人もおるのじゃ！　何故真奈と姉上までここにいるのじゃ！？　じかも雄二は押し倒されてムッツリーニは布団を血で染めておるぞ！？　ワシが寝ている間に何があったのじゃ！？」

「秀吉君！　メールについて色々聞きたいことがあるんだけど？」

「いや～、平和だね～」

「そうね～。もう何でも許せちゃうわね～」

「あああああっ！　皆してそんなに騒いじゃダメだよっ！　このままじゃ、鉄人に気付かれてまずいことになるよ！？　というか何で紫苑と木下さんはそんなに和んでるの！？　そんな場合じゃーーー」

『なにごとだっ！　今吉井の声が聞こえたぞっ！』

「「「「「「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」」」」」」

あ～あ。明久のせいで見つかっちゃったじゃないか。

「え？　なに？　なんで全員が『吉井が声を出したせいで見つかったじゃないか』みたいな目で僕を見ているの？」

事実じゃん。

「くそっ！　明久のせいで面倒なことになった！　とにかくお前らは見つからないようにここから逃げろ！」

「なんだか納得のいかない物言いだけど雄二の言うとおりだ！　とりあえずここは僕らに任せて！」

「変な勘違いを持たれるのは嫌だからね」

「で、でも・・・・・」

「お姉さま、躊躇っている時間はありません！　とにかく服を脱いで美春の部屋へ行きましょう！」

「美春は黙ってなさい！」

何でこの状況でそんな誘いを出す余裕があるんだよ・・・・・

『吉井に坂本ぉっ！　お前らだとはわかっているんだ！　その場を

動くなよっ！』

しまった。無駄なことをしている間に西村に結構な距離まで接近されたな。

「鉄人の声だ！　もうかなり近いよ！」

「時間がない！　こうなったら俺が『必殺アキちゃん爆弾』で鉄人の注意を引き付けるから、その間に女子は部屋を出ろ！」

「わかったわ！」

「美波！　そこはわかっちゃダメだ！」

「雄二！　アキちゃん用の制服は調達済みだよ！」

「紫苑もそこで乗るなぁー！　とにかく！　まず僕と雄二と紫苑が飛び出して鉄人の注意を引き付ける。その隙に女子はドアから出て一気に部屋まで走るんだ。いいね？」

「うん。・・・・・・ごめんね。ウチらの為に」

「・・・・・・・・・・ありがとう」

「お姉さま、愛しています」

「捕まらないようにね？」

「女子は私が部屋まで連れて行くから、任せて」

さて、出陣といきますか！

「二人とも、行くよっ！」

「仕方ない、付き合ってやる！」

「また鬼ごっこかぁ」

明久が取っ手に手をかけ、勢いよく開け放つ。

バン！　ガスッ！

「ふぬぉぉっ！？　よ、吉井、キサマぁああ！」

「げっ！？　鉄人が扉で頭を痛打したみたいなんだけど！？」

「そいつはファインプレイだ明久！」

「これ痛いんだよね～」

何度か味わっているだけあってこの痛みについてはよく知っている。

「にげるぞ二人とも！」

「了かーーー」

「させるかぁっ！」

頭を打って出遅れた西村が部屋を覗き込もうとしていたので、西村

の視界を塞ぐ為に、
着ていたジャージを被せて視界を塞ぐ。

「こっこらっ！　何を」

「おまけっ！」

「ぐおっ！？　貴様！」

追加で明久が自分の浴衣を巻き付け帯で縛り付けた。これで結構な距離が稼げる！
でも明久は自分の服を脱いで良かったの？

「今のうちだ！」

この瞬間に女子たちは部屋を出た。これで最悪の事態だけは免れた。

「吉井。貴様はつくづく俺の指導を受けたいようだな・・・・・・！」

「明久、あとは頑張れよっ」

「僕たちはこれでっ」

西村は明久に任せてとんずらかかせてもらおうかな。

「西村先生すみません！　坂本雄二がこっそり持ち込んだ酒を隠す為に注意を逸らせと言ってきたものですから！　それと氷花紫苑が同じく持ち込んだエロ本を隠す為に
時間を稼げと言ってきたものですから！」

「キサマなんてことを言ってくれるんだ!?」

「ちょっと!　僕まで捲き込むのは止めてよ!　そもそも僕はエロ本なんて一冊も持っていない!」

「「「えっ?」」」

「えっ?　何?　その顔は?　言っておくけど本当に持ってないからね!?
ていうか何で先生まで反応しているんですか!?」

こ、こいつら・・・・・・!　だがとにかく今は逃げる!　それ一択!
ファイナルアンサー!

「吉井・・・・・。坂本・・・・・・。氷花・・・・・・。貴様ら・・・・・覚悟は出来ているんだろうなぁぁああっ!」

「「「出来てませんっ!」」」

とにかく僕は走り出す!　僕の考えが正しければ西村は僕を追っては来ない。
何故ならその気になればいつでも逢うことが出来るからな。それと僕を捕まえるのは結構な体力を消耗するはず。しかもその間にあの二人には確実に逃げられる。
だから僕は明久と雄二が右折した角を左折した。彼らに付いて行くと僕まで追われる。理由は別にもあって、彼らと一緒に逃げると見捨てられたり、変な誤解を招くことに

なるからな・・・・・・。
左折すると予想通り僕の方を諦め、明久と雄二の方を追い掛けて行った。
「ふぅ。助かった」
これで一安心だな。後は無事自室に戻るだけだ！

？？？・・・

？　ｓｉｄｅ

『諸君、もうすぐだ・・・・・・もうすぐで時は満ちる』
始まったか。
『時が満ち次第、計画をセカンドフェイズへと移行し【ブルームーンの遺産】を迎えに行く』
「んじゃ、そういうわけだから、誰が行くかを決めようぜ」
「こんなこともあろうかと、私があみだクジを用意しておきました。
１～１０までの
お好きな数字をどうぞ。早い者勝ちです」
「お、気が利くじゃねぇーか。俺は５番」

それから皆が数字を言っていき、俺は最後に残った9を選択。

「え～っと。あ、ベルムさんですね」

ベルムか、妥当だな。あいつはこういうのは得意だしな。

「お！　俺か、ってことでクジで決まったんだけども、あんたも依存はないか？」

『問題ない。このメンバーの中で、お前は遺産と唯一面識がある』

「確かにな。面識があるといえば『ニックス』もだが、タイミングがな。
お二人さんも然り。俺的には『ニジェール』かと思っていたがな」

「俺はこういう役割は苦手だ」

人を説得など出来る自信がない。

「では満場一致ってことでいいよな？」

皆が頷く。

「そんじゃ、色々と準備をしますかね～」

『必要とされる資料はこちらがある程度は用意しておく。各自、セカンドフェイズの
内容は目を通しておくように。解散』

あんたが思っている程、あいつはそんな簡単にはこちらに来ない。
歯止めを効かせるあいつがいるしな。

第三十七問　ムチと夜這いと撮影会　後編（後書き）

今回は紫苑です。

友の疑いを晴らす為始まる聖戦。友の為、明久の思いに答える為、女子風呂覗く為、様々な思考が交差する中で僕の前に強大な壁が立ち塞がる。

次回　バカと銀色と召喚獣　『裸体と聖戦と第四夜　前編』

いくよ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第三十八問　裸体と聖戦と第四夜　前編（前書き）

前回の次回予告に前編を入れ忘れていました。

というわけで今回は前編です。すみません。

第三十八問　裸体と聖戦と第四夜　前編

この強化合宿についてのまとめを書きなさい。

姫路瑞希のまとめ
『他のクラスの人と勉強することで良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習方法や使い易い参考書についても教えて貰うことができたので、今後は更に頑張っていきたいと思います。夜はいつものように騒ぎがありましたが、これはこれで私達の学校らしいと思います。ある人から内緒で素敵な写真も貰えて大満足です！』

教師のコメント
姫路さんは前提的にそつなくこなしている様子だったので伸び悩んでいる科目があったということには驚きました。本来なら先生が気付くべきなので申し訳ないです。ですが、無事に解決できそうなので何よりです。やはり姫路さんにはＡクラスで学習する方が良い影響がありそうですね。次回の振り分け試験では是非とも頑張ってください。それと、バカ騒ぎについては悪影響を受けないように気をつけて下さい。

島田美波のまとめ
『三日目の夜のことが忘れられない。ウチはどうしたらいいんだろう。こんなこと

誰にも相談できないし、アイツとはあれ以来話ができてないし・・・・。瑞希の
気持ちを知っているのに、これって裏切りになっちゃうのかな・・・・・？　けど、ウチのは去年からの気持ちだから。こっちのが先で・・・・・・。ああもう！
どうしていいのかわかんない！』

教師のコメント
一体何があったのでしょうか？　友達にも相談できないというのは尋常では
ありませんね。良かったら先生にも話してみて下さい。一応あなた方よりも長く生きているので少しは力になれるはずです。ただ、気持ちと書いてあるということは恋愛の
話でしょうか？
　それなら先生から言えることは一つです。自分が後から思い出して後悔することの
ないように行動するのが一番です。色々と悩んで立派な大人になるのが学生の仕事ですよ。

氷花紫苑のまとめ
『初めての高校生活、初めての合宿。それら全てが、僕をまた、変えてくれました。
女子風呂を覗く騒ぎもありましたが、この合宿のおかげで僕は彼らと絆を深めることが出来ました。僕は絆なんて言葉を使うようなキャラではないけれど、今回は使わせて
もらいました。そして、元気な友と幼なじみの恋が実ることを祈っています。色々な
ことがあった合宿での体験は、忘れられないものとなりそうです。』

教師のコメント

どうやら、合宿での体験が氷花君をまた一つ、成長させたみたいですね。絆という
言葉、先生も大好きです。この先、氷花君がどのように成長してゆくのか、陰ながら
見守らせてもらいますね。それと、覗き騒ぎについては、今後そんなことをすることがないように注意して下さい。
　氷花君の幼なじみというと、木下君ですか。では、木下君とその友達の恋を先生も
応援させてもらいます。

吉井明久の日誌
『あまりに多くのドラブルがあって驚いた。初日はいきなり意識を失って宿泊所に
運ばれたので記憶がない。その後は覗き犯の疑いをかけられて、自分に対する周りの
見る目について悩まされた。勉強についても、女子風呂を覗く為に頑張ろうと思った
けれども今のやり方でいいか不安が残るし、色々と考えさせられる強化合宿になったと思う。』

教師のコメント
そうですか。

食堂・・・

「・・・・・・・・・・・・・・（モグモグ）」

「ふぁ・・・・・・あふ・・・・・・・」

「流石に眠いぞこら・・・・・・・」

「お主ら、災難じゃったのう・・・・・・・」

なんか明久と雄二が眠そうにしている。その二人に声をかける秀吉。

「災難といえば災難だったかもーーーふわぁぁああ～～～」

「眠そうだね、二人とも」

「そりゃ鉄人と拳で語りあった熱い夜を三日間連続で過ごしたんだからね」

「そういえば紫苑、お主あの後しばらく部屋に戻らなかったがどこで何をしてたんじゃ？」

「ん？　なんだ紫苑。お前も先生に捕まったのか？」

「ううん。昨日は満月だったからさ。折角だからしばらく眺めていたくてね。
違反だけどしばらく中庭とかを見つからないように散歩してたんだ」

久しぶりに見る綺麗な月だったなぁ。若干青みがかっているのが僕は一番好き。

「そういえば紫苑は月が好きじゃったからのぅ。小学校の頃の自由

研究は必ず月に
関してじゃったよな」

「懐かしい思い出だよ」

ホント、懐かしい。あの頃はまだ秀吉と優子も幼くってーーー

「――――ふおぉぉおっ!?」

――――っ!?　何だ!?　どうした!?

「ど、どうしたの雄二!?」

酷く眠そうな雄二が覚醒した。種でも割れたんだろうか？

「・・・・・・・・・・・・効果は抜群」

「あ、ムッツリーニ。おはよう」

「ムッツリーニ。今しがた雄二に見せたのは何じゃ？　えらく興奮しておるように
見えるのじゃが？」

「・・・・・・・・・・・・魔法の写真」

「どれ、ワシらにもその写真を見せてくれんかの？」

「雄二があれだけの状態から覚醒する写真は興味あるな」

「・・・・・・・・・・・・（スッ）」

手にしている写真を康太が見せてくれるみたいだ。僕・秀吉・明久は写真を三人が見える位置に置く。

「魔法の写真だって？　何を言っているんだか。僕らはもう高校生なんだし、たかだか写真程度で気合いなんか入るわけがふおぉぉおっ！」

「ほぅ。これはまた・・・・・・」

「あぁ。なるほどね」

康太が持っていた写真の一枚目は姫路さんと秀吉のツーショット写真。
お互いやや上目遣いになっていて頬に赤みを帯びているのがポイントだ。
え？　姫路さんの胸元が開いていて谷間が見えるのはポイントじゃないのかって？
残念ながら僕の勤め先の支部のあの二人に比べたら、谷間なんて・・・・・。
いや、決して谷間に興味が無いってわけじゃないんですよ？　はい。
ただあの二人にかなり懐かれているから見慣れてしまったというか・・・・・・。

「す、凄いっ！　これも凄いよムッツリーニ！　今僕はキミを心から尊敬している！」

「確かに凄いのう・・・・・・。うまく明久と雄二が写らんような角度で撮ってあるし、もはやプロの業じゃな」

おっとっと。感想を述べている間に二枚目に進んでいたようだ。二枚目は浴衣姿で迫る霧島さんの姿とハーフパンツ姿の島田さんのツーショット写真だ。
う～ん。確かに凄いんだけれど、やっぱり（以下略）。

「して、三・四枚目は？」

「あ、うん。三・四枚目はーーー」

うおっ！　こ、コレは・・・・・・！

「ま、真奈の・・・・・・！」

「ゆ、優子のだ・・・・・・！」

「やっぱり二人はこの二枚が一番好みらしいね」

明久がにやついているがどうでもいい！　まず優子の写真だが、これは撮影会の時のものらしい。優子の健康的な太ももが大胆に露出されていてとてもドキドキする。
恥ずかしそうに頬を赤らめているところとか、見えそうで見えない絶対領域とかいうものがまたいい！　え？　さっきはあんなに微妙そうだったのに急にどうしたんだって？　好きな女の子の写真は別格に決まっているでしょ！　次に真奈のだが、
これは真奈が部屋に押しかけてきたときのだな。真奈が横になっていて、まるで自分と一緒に寝ているかのように見える写真だ。安心

しきっている表情や、やや潤っている
瞳がまた興奮させてくれる。一時期真奈に恋心を持ったことがある
せいか、真奈も写真も優子のと同様に別格になるのかもしれない。

「じゃ、最後の写真はーーー」

まだ見たかったのに・・・・・・。しかたない。五枚目はーーーセ
ーラー服姿の明久。

「・・・・・・・・・・・・綺麗に撮れたので印刷してみた」

「放して秀吉！　このバカの頭をカチ割ってやるんだ！」

「落ち着くのじゃ明久！　よく撮れておるではないか！」

う〜ん。これは、ちょっと、流石に・・・・・・。

「驚いたぞムッツリーニ。まさかここまで凄い写真を撮るとは」

「これで増援も期待できるというわけじゃな」

確かに秀吉の言う通りなんだけどさぁ。

「「・・・・・これ、他の皆にも見せないとダメかな？」」

「うっ！　それを言われると、ワシも・・・・・・」

「お前ら、俺たちの目的を忘れたのか？　大局を見誤る人間に成功
はないぞ」

雄二が厳しい発言を告げる。

「う・・・・・・。それはそうだけど・・・・・・・」

「逆を言えば、これだけ僕たちを未練タラタラにしてしまうこの写真たちなら増援も期待できるのか・・・・・・・」

「そうじゃな・・・・・・・仕方あるまい」

「そうだね。僕が間違っていたよ。この写真は目的の為の手段だし、そんな未練は断ち切る。後でムッツリーニに1グロスほど焼き増ししてもらうだけで我慢するよ」

「1グロスは多すぎだろ」

「でもそれだけする価値があると思う」

「そうか？　まぁいいや。それじゃ早速――――」

雄二がペンで写真の裏に文章を書いた。因みにこんな文章だ。

『この写真を全男子に回すこと。女子及び教師に見つからないよう注意！
尚、パクったヤツは坂本雄二の名の下に私刑を執行する』

この一文がなかったら一人目で奪われそうだな。
その後、雄二が須川君に渡し、他のクラスの男子へも渡っていった。

カチッ　　カチッ

時計の針の音が静寂な部屋にはよく響いた。

「明久。今更ジタバタするな。補充のテストも全て受けたし、写真も回した。やるべきことは全てやったのだから、あとは何も考えずに戦うだけだ」

「D・E・Fクラスは昨日に続いて全員参加のようじゃ。あとはA・B・Cクラスが協力してくれるかどうか、じゃな」

点数を僅かとはいえ消費してしまった僕も含め、皆も補充テストの為、写真を回すことで他のクラスの協力が得られたか確認できていない。

「・・・・・・・・・・・・今日こそ借りを返す」

康太も工藤さんと大島先生に借りを返す為、瞳に炎を宿らせていた。

「作戦開始も近い。最後の打ち合わせを始めるぞ」

精神統一をしていた雄二が刮目し、皆を集める。

「俺たちがいるのは三階だから、三階・二階・一階・女子風呂前の四カ所を突破しないと目的地には辿りつけない」

こういう時に限って、配置が悪い。

「三階の敵はE・Fクラスの仲間が抑えてくれる。二階はDクラスが抑えてくれる手筈になってはいるが・・・・・・」

「Dクラスだけだと少々厳しいじゃろうな」

「Cクラスの協力が不可欠になってくる」

「でも、ここまできたのならやるしかないよ」

「勿論そのつもりだ。それで、二階を突破するとーーー」

「・・・・・・・・・・・・高橋先生」

「そうだ。学年主任の高橋女史が率いる一階教師陣だ。恐らくここには例の最強部隊がいるだろう」

今回の作戦の結果を大きく左右するのがこの部隊だ。真奈や優子もいるこの部隊。
苦戦を強いられることは必須。昨日みたいに僕が召喚獣とリンクしたとしても五分間
しか保たないあれではどこまでいけるか・・・・・・

「明久とムッツリーニを通す一瞬の隙は俺が作る。だが、いくら紫苑がいるとはいえ、高橋女史や翔子たちをそのまま足止めするのは不可能だと思ってくれ」

補足だが、いくらリンクして戦うとはいえ霧島さんの召喚獣の磁力を操る能力や、
工藤さんの召喚獣の重力を操る能力には歯が立たないだろう。

「じゃが、足止めできねば・・・・・・」

「ああ。明久とムッツリーニは前後を挟まれて終わりだ。作戦は失敗。俺は翔子に残りの人生を奪われ、明久は変態として生きていくことになる」

「作戦が失敗しても大して現状と変わらん気がするのじゃが・・・・・？」

「秀吉、ごもっともだけど言っちゃダメだよ？」

「すまぬ」

う～ん。僕は問題ないが、秀吉は失敗しても失う物は何も無いから勝利に対しての
執着心というものが欠けているようだな。秀吉は心から負けたくないという出来事に
出会わなかったんだろうな・・・・・・

「とにかく、高橋女史は自力でなんとかするしかない。Ａ・Ｂクラスが協力してくれたら勝機は充分にあるんだが」

「Ａクラスはともかく、Ｂクラスは大丈夫だと思うよ。Ｂクラスの男子は、僕が知っている限り女子に興味がある連中ばっかりだし」

「あははっ。紫苑の言い方だとＡクラスの男子に女子に興味がない人がいるみたいじゃないか」

「「「「・・・・・・・・・・」」」」

気まずい・・・・・・

「そこまで行ったらあとはお前たちの仕事だ。わかっているな？」

「・・・・・・・・・・・・・・大島先生を倒す」

「そして僕は鉄人、だね？」

こんなにも不確定要素がいっぱいある作戦は初めてかもしれない。

でも、

「・・・・・・・・・・・・・・大丈夫。きっとうまくいく」

「うん」

「当然だな」

「じゃな」

「ああ」

何故だか知らないけど、不安なんてちっとも感じない。そんな不思議な感覚に包まれていた。

――――ピピッ

電子音が響いた。

「・・・・・・よし。てめぇら、気合いは入っているか！」

「「「「おうっ！」」」」

「女子も教師も、Ａクラスも Ｆクラスも関係ねぇ！　男の底力、とくと見せてやろうじゃねぇか！」

「「「「おうっ！」」」」

「これがラストチャンスだ！　俺たち四人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はありえねぇ！」

「「「「当然だっ！」」」」

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣（で）るぞっ！」

「「「「よっしゃぁーーーっ！！」」」」

女子風呂覗く為の聖戦が始まった。

『いたわっ！　主犯格五人組よ！』

『長谷川先生！　向こうの五人をやります！』

やはり早めに潰しに来たか！　しかしっ！

「ふん、雑兵どもが。この俺に敵うと思うなよ。――――試獣召喚（サモン）！」

『Ｅクラス　古川あゆみ　＆　源涼香　ＶＳ　Ｆクラス

坂本雄二
数学　８３点　＆　７７点　ＶＳ　２２４点
』

「勉強してから出直しやがれっ！」

『『きゃぁあああーっ！』』

雄二の召喚獣がＥクラスの女子二人の召喚獣を一蹴した。

「坂本君！　待ちなさい！」

女子に代わって長谷川先生が止めに来た。だがそんなのは計算の内だ！

「長谷川先生。残念ながらここは通しませんよ」

良いタイミングで須川君たちが長谷川先生を通せんぼしてくれた。

「吉井、坂本！　ここは任せて先に行け！　試獣召喚（サモン）！」

『『『試獣召喚（サモン）！』』』

言っていることはとても格好いいのに女子風呂覗きの為なので感動はしなかった。

「頼むよ須川君！」

「任せろ！　それより、きちんと鉄人を倒しておけよ！　そうじゃないとここを

片付けた後で覗きに行けないからな！」

「わかっているよ！　女子風呂でまた会おう！」

そしてすぐさま彼らの士気ある怒号が響く。

『翔子たん！　翔子たん！　はぁはぁはぁあああっ！！』

『島田のぺったんこぉぉーーーっ！』

『姫路さん結婚しましょおーっ！』

『木下さーん！　俺を蔑んだ目をしながら踏み付けて下さーいっ！』

『宮野さん俺と良いコトしましょーーーっ！』

ダメだこいつら、早くなんとかしないと・・・・・・。

それと今優子の名前出したヤツ、僕の優子に手を出したら許さないからな・・・・・・！

「凄い士気じゃな。これならば三階の制圧は問題なさそうじゃ」

「皆の気持ちが一つになっているからね」

「女子風呂覗きにここまでできる野郎共はそうそういないぞ・・・・・」

「でも、ここからが勝負だね・・・・・・」

「そうだなＤクラスだけで戦っているのか、Ｃクラスが参戦してい

るのか」

「でも、ここで立ち止まっているわけにはいかないよ」

「・・・・・・・・・・・・躊躇っている時間はない」

「うん。行こう！」

階段を降りるとそこもやはり戦場だった。でも、

『俺たちの覗きの邪魔はさせない！　試獣召喚（サモン）！』

『先生、覚悟してもらいます！』

『き、君たちまで参加していようとは・・・・・・！』

『化学教師　布施文博　ＶＳ　Ｃクラス　黒崎トオル
＆　野口一心
化学　６６３点　ＶＳ　１４４点　＆
１３２点』

「よし！　Ｃクラスが参戦している！」

「Ｃクラス！　来てくれたんだ！」

これならば二階の制圧も時間の問題のハズだ！

「Ｃクラス・Ｄクラスの野郎共、協力に感謝するっ！　二階はーー
俺たちの背中は
お前らに任せるぞ！」

『協力なんざ、ったりめぇだ！』

『女子風呂覗かなくて何の為の男でぇっ！』

『てめぇらこそしくじるんじゃねぇぞ！』

Cクラスの男子はいつもヒステリックな代表に抑圧されているからその反動がきたのかな？

「あのさ、こういうのって凄く嬉しいよね」

「そうじゃな。仲間が増えていく喜びとでも言うべきじゃろうかの」

戦略ゲームみたいなものかな。他にもピク○ンとか・・・・・・

「その分仲間だった女子が敵だがな」

「そこは気にしない方向で」

問題は次だ。次の一階で戦闘が行われているかいないかで僕にかかる負担が大きく変わってくる。

「これ調子ならA・Bクラスもきっと協力してくれているよね！」

「だといいけどね・・・・・・」

一階行きへの階段を降りる。さて、どうなっているのやら・・・・・・

・

『・・・・・護してくれっ・・・・・・』

『・・・・・メだ！　・・・・・・倒的すぎる・・・・・・！』

戦闘は行われている。だけど、

「よしっ！　これで一階の制圧もうまくーーー」

「いや、違う！　様子がおかしいぞ！」

そう、少なくとも声からは焦りが聞こえる。戦況は優勢ではないということかっ！

踊り場で折り返し、戦場へ到達。するとそこにはＢクラスの男子の姿があった。

しかし十中八九優勢ではなかった。

『Ａクラス　霧島翔子　＆　Ｆクラス　姫路瑞希

ＶＳ　Ｂクラス　加西真一

総合科目　４７６２点　＆　４４２２点　ＶＳ　１６９２点　』

まずいな・・・・・戦場を見渡したがどこもかしこも劣勢だ。

このままでは押し切られる！　Ａクラスが参戦してくれなかったのが致命的だ。

「・・・・・・・・・・雄二。悪戯はここまで」

「明久君。ここは通しませんよ」

「翔子かっ！」

「姫路さん・・・・・・っ！」

「雄二！　僕が高橋先生を倒しつつ時間を稼ぐ！　その内に戦線を立て直してくれ！
試獣召喚（サモン）！」

『Ｆクラス　氷花紫苑　ＶＳ　学年主任　高橋洋子
総合科目　４３５１点　ＶＳ　７９４３点』

やはり勉強面では彼女たちには劣るなぁ。どこまでいけるか・・・・

高橋先生の召喚獣に突撃させる。まだリンクは使わない。

「昨日は遅れを取りましたが、今日は昨日のようにはいきません！」

高橋先生の召喚獣が決して僕の召喚獣には近づかず、僕の召喚獣の回りに円を描くように動く。同時にムチを腕輪の能力でリーチを伸ばし、リボンのスパイラルというワザみたいにムチで攻撃してくる。なるほど、確かに動きつつ高速で繰り出される連続攻撃は避けにくい。しかも高橋先生の召喚獣の為、その動きがべらぼうに速い。

でも僕もそんな簡単にリンクを使うわけにはいかない。全ての攻撃をかわしつつ、槍剣でムチを切断し続ける。高橋先生も負けじとムチの長さを伸ばし続ける。だが高橋先生の召喚獣の点数は確実に減っている。

「くっ！　これでも通じないなんて・・・・・！」

「もうあなたの攻撃パターンは見切った！」

僕は召喚獣を高橋先生の召喚獣の動きに合わせて接近させる。完全にとらえたっ！

だが召喚獣が高橋先生の召喚獣を斬りつけることはなかった。

寸前で高速で飛行する何かが僕の召喚獣を捕らえる。完全に油断していた。

新手が来ることをまったく予期していなかった。

その何かは僕の召喚獣を空中に連れ去り、天井にぶつかる寸前でＵターンし、

回転しつつ床へ急降下する。ま、まずいっ！　あのまま床に叩き付けられたら召喚獣は戦死してしまう！　しかもフィードバックが！

「まさか私達のことを忘れていたわけじゃないわよね？」

「紫苑、あなたは私が止めるわ！」

声の主はやっぱり君たちか。真奈、優子！

『Ａクラス　宮野真奈　＆　木下優子
総合科目　４３８９点　＆　４４１４点』

第三十八問　裸体と聖戦と第四夜　前編（後書き）

今回は紫苑と秀吉です。

明久は西村先生、ムッツリーニは工藤と大島先生、そして紫苑とワシは例の
最強部隊に挑む。
この局地戦、負けるわけにはいかない！

次回　バカと銀色と召喚獣　『裸体と聖戦と第四夜　後編』

いこう秀吉！　うむ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第三十八問　裸体と聖戦と第四夜　後編

以下の問いに答えなさい。
『観測者Ａが速度ｖで走っていると、正面から周波数ｆの音を発し速度ｖ，で走行してくる救急車がやってきた。音速をＶとしたとき、観測者にどのようなことが起きるのかを書きなさい。また、その現象の名称も併せて答えなさい』

姫路瑞希の答え
『観測者Ａには車が発する音の周波数がｆ$^{V+v}_{V-v}$になって聞こえる。
現象の名称・・・・・・ドップラー効果』

教師のコメント
Ｆ１マシンが通過する時もこれと同様の現象が起こっていますね。
物理現象は一見
難しいように思われますが、意外と身近に存在する物です。

吉井明久の答え
『観測者Ａが速度ｖ，＋ｖで撥ねられる。
現象の名称・・・・・・交通事故』

教師のコメント
きちんと相対速度を補正しているあたりが腹立たしいです。

「紫苑はやらせない！　試獣召喚（サモン）！」

咄嗟の判断で明久が召喚獣を呼び出し、持っていた木刀を真奈の召喚獣に投げつける。
そのコントロールは正確で、僕より長い期間観察処分者をやっていた明久だからなせる業だろう。木刀が当たったせいで僕の召喚獣を拘束する力が弱まったので、脱出する。
だが叩き付ける勢いは殺せていないので着地の際に点数がそこそこ減った。そして足に結構な痛みのフィードバックがくる。

「明久、ありがとう！　助かったよ！　足は助かってないけど」

近くに落ちていた木刀を明久の召喚獣に投げ渡す。

「・・・・・雄二。お仕置き」

「くっ！　根本バリアーっ！」

「さ、坂本っ！　折角の協力者にその扱いはあんまりじゃないか！？」

『Ａクラス　霧島翔子　ＶＳ　Ｂクラス　根本恭二
総合科目　４７６２点　ＶＳ　１９３１点』

不意を突いて霧島さんが雄二に攻撃を仕掛けていた。が、雄二は根本君を盾にしてその攻撃を逃れた。しかし圧倒的な力の差で根本君の召喚獣を一撃で葬る霧島さんの召喚獣。

「明久君。おとなしく降参して下さい」

姫路さんからの降伏宣言の要求。

『もうこれ以上は無理だ・・・・・・。あのメンバー相手に勝てるわけがない』

『だいたい、すでにめぼしい連中が入っていないのなら覗く価値がないじゃないか』

生き残っているBクラスメンバーの士気の減少。

「今ならまだ許してあげるよ？」

『学年主任　高橋洋子　総合科目　７６９３点
Aクラス　霧島翔子　総合科目　４７６２点
Fクラス　姫路瑞希　総合科目　４４２２点
Aクラス　木下優子　総合科目　４４１４点
Aクラス　宮野真奈　総合科目　４３４９点
ＶＳ
Fクラス　氷花紫苑　総合科目　４０２９点
Fクラス　吉井明久　総合科目　９８４点』

最も絶望的なのはこの圧倒的戦力差。

「諦めちゃダメだっ！　美波や今戦闘に参加していない女子はお風呂に入っているはず！　覗く価値は充分にあるっ！」

明久の必死の叫びに秀吉が不思議そうな表情で訴えかける。

「明久。なぜここまで圧倒的に不利な状況でありながら諦めないの

じゃ？　お主は
《観察処分者》じゃ。痛みのフィードバックもある。そこまでして写真を取り戻そうとして、苦しい思いをする必要はないじゃろう？
それに、その程度では今更お主の評価は変わらぬはずじゃ」

幼なじみとしても正直この発言はどうかと思う。真奈ですら同感の様で若干目を細める。
秀吉の言っていることは常識から考えれば秀吉の言うことは正しい。でも、死と常に
隣り合わせの生き方を、常人にはできないことを何度もしてきた僕たちにはその考えは逆に不自然に思える。でも明久は、僕らと違う方向からだけどものを見て、さっきの
言葉を言ったんだろう。

「――――でもね秀吉。そうじゃないんだよ」

「そうじゃ、ない？」

「確かに最初は写真を取り戻すつもりだった。真犯人を捕まえて、覗きの疑いを晴らすつもりだった。・・・・・でも、こうして仲間が増えて、その仲間たちを失いながらも前に進んで、初めて僕は気がついたんだ」

「明久。お主、何を言ってーーー」

そうだ、たとえどんな不純な気持ちであっても、その思いはキミの力になる。
秀吉や踏ん切りがつかない誰かさんの為にも、思いっきり言ってやれ、明久！

「――たとえ許されない行為であろうとも、自分の気持ちは偽れない。正直に言おう。今、僕はーーー純粋に欲望の為に女子風呂を覗きたいっ！」、

やっぱりキミの言葉はグッとくるね。

「お主はどこまでバカなんじゃ！？」

「明久君、そこまでして私じゃなくて美波ちゃんのお風呂を覗きたいんですね・・・・・・！
もう許しません！　覗きは犯罪なんですからねっ！」

姫路さんが明久の召喚獣に向かって自らの召喚獣を突撃させる。

「世間のルールなんて関係ない！　誰にどう思われようと、僕は僕の気持ちに正直に
生きる！」

「それで良いんだ、明久！　キミの思いを力に変えて、思いっきり行け！」

そして、明久の言葉が、反撃の狼煙となる。

『よく言った、吉井明久君っ！』

廊下に響くその声。やっときたか・・・・・・！

「だ、誰ですかっ！」

「待たせたね、吉井君。君の正直な気持ちは確かにこの僕が聞き届けた」

「久保君っ！　来てくれたんだねっ！」

「到着が遅れてしまってすまない。踏ん切りがつかず、準備をしながらもずっと迷っていたんだが・・・・・・さっきの君の言葉を聞いて決心がついたよ」

「決心がついたって、それじゃあ・・・・・・！」

「ああ。今この時より、Ａクラス男子総勢二十四名が吉井明久の覗きに力を貸そう！
Ａクラスの皆、聞こえているな？　全員召喚を開始して吉井明久を援護するんだ！」

『『『おおおーーーっ！』』』

「お主らは何を言っておるんじゃ！？　全員正気を保つのじゃ！」

「ありがとう久保君！　君たちの勇気に心から感謝するよ！」

「いや、感謝するのは僕のほうだよ。そうさ、君の言った通り、自

分の気持ちに嘘はつけない。世間に許されない想いであろうとも、好きなものはすきなんだ・・・・・・！」

これで、互角に戦えるだけの戦力は整った。あと僕がやることはーーー

「秀吉、何で彼らがあんなにも一生懸命になれるかがわかるかい？」

「えっ？」

僕が秀吉にそう問いかけた時、

「わかっている！　明久、ムッツリーニ！　階段へ向かって走れっ！」

それと同時に雄二が高橋先生の前に躍り出る。

「高橋女史！　悪いがここは通させてもらうぜ！　行くぞーーー起動（アウトエイクン）っ！」

僕たちの高橋先生を突破する為の秘策、それはーーー

「干渉ですか・・・・・・！　やってくれましたね坂本君・・・・・・！」

「行け明久っ！　鉄人を倒して、俺たちを理想郷（アガルタ）に導いてくれ！」

「任せとけっ！」

そして明久は僕に言った。

「紫苑、ここは任せるよ」

「了解」

作戦通り明久と康太を送り込むことができた。

「Ａクラスの皆！　悪いけどここで僕の手伝いをしてもらうよ！」

「僕は始めからそのつもりさっ！　試獣召喚（サモン）！」

久保君が召喚獣を呼び、僕の隣に並んで言う。

「いや～、やられちゃったよ。流石だね。でも、私吉井君のああいうところ好きだよ」

真奈がやれやれといった感じで言う。

「えっ！？　真奈ちゃんもしかして・・・・・・！」

「違うからね瑞希！　あくまで吉井君のあの心意気が好きだって意味だよ」

まあ真奈は今秀吉が好きなんだしな。

と、そうこう言っている内に戦闘は開始されたようだ。現在雄二が腕輪で指定した科目となっている為、現代文となっている。久保君と僕は文系で優子・真奈は理系で、

姫路さんは数学が得意だったはず、ということで文系と決めていた。

僕自身文系だが、現代文は４００点いっていないと思うな。そして

ここにはAクラスの男子が12人ほどいる。相手は五人なのにね。でもようやく互角といった感じだ。

『学年主任　高橋洋子　現代文　972点
Aクラス　霧島翔子　現代文　369点
Fクラス　姫路瑞希　現代文　333点
Aクラス　木下優子　現代文　347点
Aクラス　宮野真奈　現代文　325点

VS

Fクラス　氷花紫苑　現代文　366点
Aクラス　久保利光　現代文　381点』

主要メンバーの点数はこんなところだ。高橋先生の点数が高い。べらぼうに高い。
あの人は文系だったのか？

「ねぇ秀吉、男として認めてもらいたいってよく言っていたよね？」

「う、うむ」

秀吉は先ほど自分がああ言ってしまったせいか、はたまた自分が行っても足手まといだと思っているのか、召喚しようとしていない。

「秀吉がイマイチ男としてみてもらえないのは、顔付きは仕方ないとして、こういう
場面で男らしいことをしてないからじゃないかな？」

僕も召喚獣を乱戦に入れる。無双的な強さを誇っている高橋先生狙いだ。

「でも、今ワシが参戦したところで、戦力にはならんぞ？」

どうやら後者のようだ。

「だとしてもね、人間、できないとわかっていても、やらなくちゃいけない時があるんだよ」

「できないと・・・・・わかっておるのじゃな・・・・・」

あとは秀吉次第だ。

僕の召喚獣は高橋先生の召喚獣に接近し斬撃をする。が、かわされてムチでの連続攻撃が来る。それをかわしていると、

「でも、その言葉はワシの心には響いたやもしれぬ。試獣召喚（サモン）！」

「秀吉！」

「ワシもやるぞい！」

「よし、『アンロック』、秀吉」

秀吉と腕輪を交換し、

「『ロック』、そして『リンク』！」

僕の意識を召喚獣へ！　そして召喚獣のカラーリングが変化する。

「先生！　来ますよ！」

「そのようですね・・・・・！」

先生は先ほどと同じように僕の召喚獣の回りを高速で移動しつつムチで攻撃を
仕掛けてくる。しかしそれはもう見切った！　この状態ならば先ほどより楽にかわせる。槍剣を戻して高橋先生の召喚獣に接近し腕を掴み、一本背負いを決める。そして床に
叩き付けられた状態の先生の召喚獣に光弾のシャワーを浴びせる。
これによりーーー

『学年主任　高橋洋子　総合科目　０点』

「そんな・・・・・・」

「先生！」

『高橋先生を氷花が仕留めたぞ！』

『このまま押し切れ！』

よし、これで皆の士気が更に上がった！　このままいけば押し切れる！
だがこの時、一体の召喚獣が僕に接近していたのを気配で感じ取り、攻撃を受け止めた。攻撃してきたのは優子だ。

「先生だけじゃないのよ・・・・・・！」

ごもっともだ。じゃあ、フェアな勝負といこうか。僕は召喚獣とのリンクを解除する。

「ムッ、何のつもり？」

「コレばっかりに頼っていたら腕が落ちるからね。僕じゃなくて召喚獣で決着を
付けようと思ってさ」

「後悔しないでよね」

「しないさ。負けるつもりはないしね」

「いくわよっ！」

優子が召喚獣を突撃させる。優子の召喚獣の武器は巨大なランスだ。
リーチは魅力的
だがその長さ故に小回りがきかない武器だが・・・・・・
会話で少し時間を稼げたので槍剣を再びよぶ。優子の召喚獣の突進
突きを上に飛ぶ様にかわし、一撃いれようとしたのだが、読まれて
いたようで薙ぎ払うようにランスを
振ってきた為、僕の召喚獣ごと弾かれてしまった。

「あらら、読まれてたか」

「イメトレしたのよ。真奈から色々教えてもらったりとかね」

なるほど、どうりで・・・・・・。そんな真奈は現在秀吉と、久保君は姫路さんと
それぞれ交戦中だ。
そんな中、優子が再び召喚獣を接近させてきた。今度は召喚獣ごと回転し、
ランスで足を狙うように回転切りを放ってきた。僕はタイミングを合わせてランスに

召喚獣を飛び乗らせる。これにより、ランスを封じて安全に攻撃ができる！
だが優子の召喚獣は既にランスから手を放していて、斬撃を入れようとしていた僕の
召喚獣に肩からのタックルをかましてきた。でも僕も咄嗟の判断で飛ばされる瞬間に
顔面に蹴りを入れる。が、体勢が悪いせいかあまり威力はないみないだ。
始めからランスがこうなることを読んでいたのか・・・・・・

「う～ん、完全に動き読まれてるよ。どうしようかな、これ」

「一応アタシは紫苑とは長い間付きあってんのよ？　真奈からのアドバイスも
組み合わせればこのくらいできるわ」

「そうらしいね。だったら今度は攻め方を変えてみようかな？」

今までは受動型だったけど、今からは攻めに行く！

「行くよ！」

「来なさい！」

今度は僕の方が召喚獣を突撃させる。優子がランスを構えるが突いてこない。
さてはギリギリまで引き付ける気だな？　いいだろう、その勝負受けて立つ！
僕と優子の召喚獣の距離が、ランスの長さと同じくらいになった時、突き出してきた。

その位置がちょうど鳩尾辺りだ。避けにくい所を狙ってきたか！
僕の召喚獣は槍剣をその刀身にぶつけ、滑らせるようにしてそのまま優子の召喚獣に接近する。脇腹に痛みが走る。受け流しきれなかったか・・・・・・！　だがこちらもそのがら空きの身体に斬撃を入れる。

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　氷花紫苑
現代文　１８９点　ＶＳ　１６３点』

倒し切れていない、浅かったか！　肉を切らせて骨を断つ簡単な方法だが、失敗すればこちらが致命傷を負うことになる。

「危なかった。もう少し深くやられていたら致命傷だったわ」

「こっちも同じく。何度もやれる方法じゃないね、こりゃ」

再びこちらから攻めさせる。お互いに武器と武器がぶつかり合う。こういう鍔迫り合いでも点数は少量だが減っていく。それが続くと点数が少ない僕の方が不利になる。
出来るだけ早くこの状況は打破したいところだ。だが中々打破出来ない。こちらの攻撃を全てガードしている。隙あらば攻撃をしてきて確実に点数を持って行かれる。
二度目が通用するかはわからないけど、あれをやってみるか・・・・・・

「飛んでけぇっ！」

槍剣を回転させ、優子の召喚獣の元へ飛ばす。

「やっぱりきたわね、アタシがその対策を怠っているとでも？」

「あっ！」

飛ばした槍剣をその後戻し、光弾で攻撃。っていうのが流れなんだけれど、現在槍剣を戻せない。何故なら槍剣が優子の召喚獣に抑えられているから。

槍剣を戻せるのは槍剣が何にも振れていないときだけだもんなぁ。

やられた。

でも、僕の召喚獣は素手でも戦える。

まずは突進。優子の召喚獣は先ほどと同じように構えたまま。カウンター狙いだな。

ギリギリの距離で突いてくる。擦りはしたが受け流すことに成功する。そのまま懐に

入り突きの勢いを利用した回し蹴りを放つ。それは顔面にクリーンヒットし、優子の

召喚獣を吹き飛ばす。たたみかける為、急接近する。優子の召喚獣は低位置への

薙ぎ払いを行うが、ジャンプしてかわす。

「そこっ！」

「っ！　やられるか！」

どうやら優子はこちらが飛んだところを狙っていたらしく、正確にランスを突き出していた。が、それは読んでたよ！　ランスを掴み、そのままランスで大車輪をするようにして移動しつつ優子の召喚獣へ飛びかかる。武器を遠のけ、馬乗りになる。戦死こそしていないがこちらはいつでも戦死させられる状態だ。

「降参、してくれるかな？」

「・・・・・悔しいけど、アタシの負けね」

「他の皆は」

回りを見渡すとAクラス男子の召喚獣が何体も戦死しているが、霧島さんや姫路さんの召喚獣も消耗しきっている。残り点数が二桁程度しかない。久保君と秀吉は今も尚戦い続けている。もうじき、ここの戦闘は終わる。明久、康太、キミたちも勝ったよね？

数分後・・・

「これでっ！」

「・・・・・・くっ！」

『Aクラス　霧島翔子　VS　Fクラス　氷花紫苑
総合科目　0点　VS　32点』

勝った・・・・・・！

「紫苑、ご苦労だったな！」

雄二が駆け寄ってくる。

「ありがと、他の皆が消耗させてくれてたからね。皆の勝利ってやつだよ」

『うぉおおー！』

『坂本！　これで！』

「ああ！　ご苦労だった、Ａクラス男子諸君！」

雄二がちょっとした演説を始めていると、上の階を担当していてくれた他のクラスの男子もやって来た。そしてそのまま女子風呂へ・・・・・・。

「秀吉、お疲れ様」

「お主もな、紫苑。いや～やはり勝てんかったわい」

「でも惜しいところまではいってたじゃない」

疲れて床に座り込んでいる秀吉に声をかける。秀吉はあの後、真奈に戦死させられはしたが、充分点数を減らしてくれていた。善戦した、というべきだろう。

「二人は見に行かなくていいのかい？」

「残念ながら、特に興味はないしね」

「右に同じくじゃ」

久保君が僕たちに問うた。もし見に行ったりなんかしたら、半殺し位にされるだろうしね。

「とりあえず、僕らは部屋に戻るけど、久保君はどうする？」

「どうせワシら以外の男子は向こうに行っておるんじゃ。折角じゃから遊びに来ぬか？」

「ふむ、そうだね。ではお言葉に甘えさせてもらおう」

その後、僕らの間にちょっとした友情が芽生えた。

『割にあわねぇーっっ！！』

何か変な空耳が聞こえたが気のせいだろう・・・・・・

処分通知

文月学園第二学年
全男子生徒
総勢１４９名
上記の者たち全員を
二週間の停学処分とする

文月学園学園長　藤堂カヲル

『自分の人生の汚点としてこのことを覚えておこうと思う』

～とある生徒の反省文より抜粋～

第三十八問　裸体と聖戦と第四夜　後編（後書き）

今回は銀です。

当然の如く停学処分にされた僕たち。だが自宅謹慎なんてするわけもなく、僕たちは出掛けることになった。こういうときに限って、職場の知り合いとかに会ったりしませんか？

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『僕と皆と最後の休日』

楽しかったよ・・・・・皆と過ごせた、最後の休日・・・・・・

第三十九問　僕と皆と最後の休日（前書き）

え～と、今回のを読むに当たって、先に説明しておかなくてはいけないことがあります。

・紫苑と真奈は、家ではそれぞれ銀と光で呼ばれている。

・この作品ないでの『ピー』というのは効果音ではなく、基本的にはここでは書いてはいけないような単語などを省く為に使用しております。

・今回、手抜きと思われるかもしれません・・・・・・

第三十九問　僕と皆と最後の休日

停学処分一日目・・・

「秀吉～、準備できた～？」

「今行くのじゃ」

「二人とも本当に出掛けるんだね」

現在午前9時、着替えるのが面倒なのか光（家では光）はまだパジャマ姿で問うた。

「自宅謹慎なんてつまらないじゃないか」

「確かに、いつものワシらからすれば、じっとしていることなんて我慢出来ないからのう」

「まぁ私は止めないけどね・・・・・・。私も予定あるしね。んじゃ、行ってらっしゃ～い」

『行ってきま～す』

因みに今日は振り替え休日なのだ。合宿四日目が日曜日だった為である。
なので真奈と優子もゆっくりできるというわけだ。
優子はいつ起きるのかわからないけど・・・・・・。因みに光の引っ越しは組織の人々が済ませてあるので、今晩光は向こうに移る。

でも結構な時々遊びに来るそうだ。

「待ち合わせ場所はたしか、噴水の所だよね？」

「うむ、あってるぞい」

僕たちは今待ち合わせ場所である噴水の所へ向かっている。
実は昨夜に雄二からメールが来たのだ。

【Ｔｏ：坂本雄二　Ｆｒｏｍ：木下秀吉　氷花紫苑
明日、９時半に噴水広場の前に集合！　持ち物は各自に任せる。】

→というものだ。
メンバーは多分男子だけだろう。女子も誘われているんだったら真奈と優子が一緒に
行こう？　と行ってくるはずだし。
そうこうしている内に噴水広場に到着。

「おっ！　来たな、おはよう二人とも」

「おはよう雄二」

「おはようじゃ、雄二」

「やっぱり家でじっとしているのは性に合わない？」

「ああ。俺たちは動いてなんぼだからな」

「・・・・・・・・・・・・おはよう」

「ムッツリーニ、おはようじゃ」

「さてと、後は明久だけだな」

まだ時間的には間に合うけど、いつ来るのやら。・・・・・・。

「ところで雄二、確認だけど今日は僕たちだけで良いんだよね？」

「そうだぞ。偶には俺も翔子の目から逃れてゆっくり休日を過ごしたいんだ。
家にいると確実に襲撃してくるからな・・・・・・」

「苦労しておるのう」

「・・・・・・・・・・・・殺したいほど羨ましい」

康太、キミの言いたいことはわかったからＦＦＦ団に連絡するのは止めてくれ。
あんな格好をした連中がここに一気に集まって処刑を始めたら最悪通報されちゃうよ。
そんなことをしている内に、

「僕が最後みたいだね。おはよう皆」

「おう、おはよう明久」

皆とあいさつを済ませる。

「で、どこからだっけ？」

「予定ではゲーセンからだよね？」

「明久はお金大丈夫？」

「大丈夫大丈夫、今日はキチンと持って来てあるから」

「んじゃ、移動するか」

ゲームセンター・・・

「さ～て、何からやろうかな」

「俺はやっぱりこれだな」

パンチングマシン雄二がお金を投入して右手にグローブを装備した。

「うらうらうらうらうら！！」

何度も何度も殴り続ける。相当ストレスが溜まっていたんだろうな～。

そのせいか、雄二がスコア表で第二位になったようだ。

「ちっ、これでもダメか。一位のヤツはどんな馬鹿力持ってやがるんだ？」

「確かに雄二が超えられないパンチ力ってのも珍しいよね」

「・・・・・・・・・・・・プレイしたのはボクサーだったり？」

「雄二に勝てる同年代というのはそうそういないしのう」

どんなやつかと思って覗いてみると・・・・・・あ、アレ？　S・Gって名前で記録されているけど、それって確かこの前僕がイライラしている時にやった記録だった気が・・・・・・。

因みに、S・・・・・・蒼月　G・・・・・・銀。

「あ、あれは・・・・・・」

僕が見付けたのはゲームセンターには必ずと言っていいほど置いてあるガンシューティングゲームだ。仕事場でも結構やっているからそれなりに出来ると思う。

「秀吉、コレやってていい？」

「ん？　シューティングゲームか、紫苑こういうの得意そうじゃな。折角じゃからワシもやってよいかのう？」

「じゃあ協力プレイだね」

ゲーム機にセットされている銃を手に取り、秀吉と共に１００円を投入する。

協力プレイの選択肢の方を打ち抜く。

「ワシはこういうのをあまりやったことないからすぐに死んでしまうやもしれんのう」

「大丈夫、秀吉のことは、僕が絶対守るから」

心配そうにしている秀吉の方を向き、言ってあげる。

「なっ！？　ど、どうしてそういう恥ずかしいことを恥ずかしげもなく言えるのじゃ
／／／」

「え？　何か恥ずかしいこと言ったっけ？」

「～～～／／／　別に良いのじゃ。そういうことは姉上に言ってあげるべきじゃ」

「優子に言う機会があればね」

そんなことを言っている内にゲームについての説明が終わっていたようだ。
でもどうせ仕事場のと大して変わらないから大丈夫だろう。
さぁ、第一ステージスタートだ！
まずは敵の隠れている位置を覚え、姿を現した瞬間攻撃される前に撃つ。

「何か知らんが一発も発砲されなかったんじゃが・・・・・・」

「そりゃ撃たれたら危険じゃん」

ザコ敵は全部一発でやられる設定は同じみたいだな。だがここで僕は信じられないことに気付いた。

「あ、あれ？　ねぇ秀吉」

「ど、どうしたんじゃ紫苑？　何故撃たないんじゃ？　しかも物陰に隠れないとダメージを受けるぞい？」

「いや、その、マガジンはどこ・・・・・・？」

「へっ？」

どうやらそのエリアの残りの敵は全て秀吉が倒してくれたようで。
次のエリアに進む。
移動の途中で秀吉が教えてくれた。

「紫苑、お主知らんのか？
リロードするには物陰に隠れれば自動的にやってくれるぞい」

なん、だと・・・・・？　実際のやってみると本当に勝手にリロードしてくれた。
なんて便利なんだ！

「す、凄いね！　仕事場のじゃ実際の銃と同じようにマガジンを交換してトリガー引いて、ようやくリロード出来るっていうのに！」

「え・・・・・？」

そうとわかればこっちのもんだ！　敵の位置を記憶、物陰から出てきたら発砲、
弾が無くなったらリロード。コレの繰り返し。しかもこのゲーム機の敵の反応速度は
遅いのか、まったく発砲されない。気付けばあまりにも一方的な戦

況となっていた。
そしていつの間にか見物人がちらほらと見え始めた。
「改めてお主の実力を認識したのじゃ・・・・・・」
「言っとくけど、真奈の方がコレ上手いんだよ?」
「・・・・・・」
「あっ、コレってショットガンとか使えないの?」
数分後・・・
「これで、ラストォッ!」
その銃弾でラスボスの体力を0にした。それによりムービーとエンディングが流れる。
それを眺めつつ、持っていた銃を手で回転させ、セットされていた位置に戻す。
実際やってみてわかったが仕事場のとは随分勝手が違うらしい。
先ほどのリロードまでの流れ・武器交換・敵の行動、種類等々・・・・・・
振り返ると意外と多くの人がいた。なんでこんなに目立ってんだろ?
でも危なかった、もう少しで秀吉がゲームオーバーになるところだったよ。
守るって言っておいて守れなかったら恥ずかしいもんね。
「ごめん皆、待たせちゃったね。やっと終わったよ」

一番近くにいた秀吉たちと外に出ながら言う。

「僕、ノーダメであのゲーム全クリしちゃう人初めて見たよ・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・驚異的な強さ」

「これが現役の実力ってヤツか」

「紫苑より上手い真奈の実力って一体・・・・・・・」

「？」

何故か皆遠い物を見るような目をしていた。

「それで、次はどこだっけ？」

「・・・・・・・・・・・・・・予定ではボーリング」

「ボーリングなら普通のヤツでいけるよ」

「逆にボーリングの普通じゃないのってどんなのじゃ？」

「さあなっと、ん？　あれは・・・・・・」

道を歩きつつ談笑していると雄二が突然ある店の前で足を止めた。

「雄二、どうしたんじゃ？」

「何で雄二がランジェリーショップの前で立ち止まっているのさ？」

「・・・・・・・・・・・・何を見た！？」

「おい、あれ、翔子たちじゃないか？」

「「「「え？」」」」

店の中をよく見てみると確かに霧島さんや優子が見える。というかプールの時の
（葉月ちゃんを除く）女子メンバーがいる。そういえば帰りの電車の中で島田さんと
姫路さんが出掛ける約束をしたなどと言っていたような気がする。
でもそれ以前に
ランジェリーショップの前で店内を除いている男子高校生５人の絵は中々痛いものがあると思う。僕としては早急にここを立ち去りたい気持ちでいっぱいだ。

「あのさ、雄二「やばい！　気付かれた！　逃げるぞ！」ええっ！？　ちょっと！」

今度は突然雄二が走り出す。どうやら霧島さんに見つかったらしい。
とりあえず雄二に合わせて僕たちも走り出す。雄二は霧島さんからは逃げられないと思うけどなぁ。
これからも・・・・・・

ボーリング場・・・

「はぁ、はぁ、はぁ。なんとか撒いたな」

「はぁ、はぁ、はぁ。あのままいてもこっちには来なかったと思うんじゃが？」

「はぁ、はぁ、はぁ。とりあえず、券を買おうよ」

「券なら僕が買ってくるよ。はぁはぁ言ってるキミたちだと警察呼ばれそうだしね」

「・・・・・・・・・・・・はぁ、はぁ、かたじけない」

パコーンっ！

「よしっ！　スペアだ！」

「中々やるな明久」

現在絶賛ボーリング中。全員四階投げ終わってスコアは雄二＞僕＞明久＞秀吉＞康太
の順番だ。因みにビリが全員にジュースを奢ることになっている。

「・・・・・・・・・・・・今日は調子が悪い」

「なんか、負けたままなのは悔しいよね」

「流石に紫苑もボーリングは普通なんじゃの」

「あはは、何でも凄い技術を持っているわけじゃないからね」

「んじゃ、いっちょ投げてくっか」

「ガター期待してるよ」

「期待するだけ無駄だがな」

と、雄二は投球。その球は力強くピンに向かっていき、

パコーンっ！

ピンを全てピットに押し込んだ。つまりストライクだ。

「願いは通じなかったようだな明久」

「ちぇー」

「次は僕だね」

ボールの油を拭き取り、いざ投げようとした時、

パコーンっ！

『やったー！　ストライクだよ！　見た見たー！？』

『もう何度も見てるようりちゃん』

『一々反応を求められてもリアクションに困るのですが』

『え～！　酷いよ二人とも～』

こ、この声はまさか・・・・・・！　声の主の方を見ると、やはり僕の同僚がいた。

「・・・・・・（ササッ）」

「どうしたんじゃ紫苑？　お主の番じゃぞ」

「いや、その・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・紫苑が投げないと俺が投げられない」

「うん。わかってるんだけどさ・・・・・・」

「なら早く投げるのじゃ」

「・・・・・・はい」

泣く泣くアプローチに立つ僕。ボーリング終わるまでに気付かれないわけがない。

あの三人のことを何て説明しよう。悠里は絶対僕を弄る為に誤解を生む発言をするから何としてもこちらが先に言わないといけないからなぁ。

パコーンっ！

うっ！　5ピンしか倒せなかった。集中力不足か・・・・・・！

『あれ？　あれって紫苑じゃない？』

『ホントだ。紫苑さんだ』

『確かに先輩ですね』

やばい！　気付かれた！　ここは戦略的撤退を！

「ゴメン！　ちょっとトイレ行ってくる！」

「え？　いや、せめてもう一球投げてからにしてよ・・・・・・」

しかし、トイレに逃げ込んでどうする？　時間が経ってもあの三人が待ちかまえているかもしれないし・・・・・・！

数分後・・・

「どういうことかな？　紫苑」

「・・・・・・・・・・・・事と次第によらなくても処刑は決定している」

「ま、諦めるんだな」

「紫苑お主、まさか姉上の他にも・・・・・・！？」

僕は今、正座で座らされている。実はあの後雄二と明久がトイレに籠もっている僕を
引きづり出して来たんだ。何事かと思っていたらあの三人がすでに

話を付けていたのだ。

「いや！　違うんだよ秀吉！　彼女たちはあくまで知り合いなだけで、決してそういう関係じゃないんだからね！？」

「ええっ！？　そんな・・・・・あたしとの関係は遊びだったの？」

「悠里！　後で何でも奢ってあげるから今はお願いだから黙ってて！」

「とりあえず、この三人とどういう関係なのかな？」

「え、ええっと、それは・・・・・・」

くぅっ！　まだ何て説明するか思いつかないときに襲撃されたから返答できない。

同僚と言うわけにはいかないし・・・・・。助けてＭｙ　Ｇｏｄ！

「う～んとね、去年の九月辺りに、一緒にお風呂に入ったことがあるよ？」

悠里、キミは僕のことが嫌いなの？

「紫苑、死んでくれるかな？」

「・・・・・・・・・・今すぐＦＦＦ団を招集する必要がある」

「いや、その必要は無いぞムッツリーニ」

「この状況に最適の人間が来たからのう」

「え？　誰が来たｎ「そうねぇ、アタシにも詳しく聞かせてくれないかしら？」」

僕の肩に手を置く絶望の魔人。振り返ったら殺される。振り返らなくても殺される。

もしこれがシミュレーションゲームの選択肢ならばどちらもゲームオーバーへ

まっしぐらだろう。現在ある選択肢は以下の４つだと思う。

1. 振り返り、誰が来たのかを確かめる。
2. 振り返らずに無視を決め込む。
3. 現実逃避。
4. 全力で戦略的撤退。

どれもこれもまともな選択肢がない。唯一まともそうなのが４だが逃げたとしても家に帰れなくなると思うので結局ダメだ。あれ？

なんだか僕の視界が段々薄れていくよ？

なんだでだｒ――――

「え～、紹介します。僕と真奈の同僚で、灰色の短髪の彼女が『星野　菖蒲（あやめ）』さん。

黄色のロングヘアーではね毛の癖毛がある彼女が『山吹　悠里』。

薄紫のロングヘアーの彼女が『河森　詩穂』。こんなところかな」

見事な半殺し（レア）具合にされ、脅迫されていたので彼女たちに許可を取り、

正直に話す。そもそも何で優子たちがここにいるのかというと霧島さん曰く、雄二に
発信器を取り付けていたらしい。雄二は抗議したがその申し出は却下された。

「へ～、ほ～、それで、何で一緒にお風呂に入ったのかしら？」

「欲情した紫苑が無理矢理・・・・・・」

「ほ～」

「悠里、本当にもう勘弁してください・・・・・・！」

「うり、そこら辺にしておきましょう」

「これじゃ話が進まないよ？」

「は～い。では改めて、紫苑からも紹介があったように、『山吹悠里』です」

「同じく、『河森　詩穂』です。よろしくお願いします」

「『星野　菖蒲』です。以後、お見知りおきを」

「こちらこそ初めまして、アタシは紫苑の彼女の『木下　優子』よ」

優子、わざわざ彼女って部分を強調しなくても良いと思うんだ・・・・・・

「ところで、さっきの話はどこまでが本当なのかしら？」

ああ、聞かないで欲しかった・・・・・・

「欲情したってのは嘘だけど、一緒にお風呂に入ったっていうのは本当だよ？
因みにしほりんとの三人でね。ああでも大丈夫だよ彼女さん。紫苑は鉄の理性で貞操は守ってるから」

「紫苑、後でボッキリお話しましょうね？」

「・・・・・・はい」

優子との主に肉体言語でのお話会が決定したところで、優子たちと一緒来ている
工藤さんがこんなことを言った。

「それにしても紫苑君の同僚ってさ、可愛い子がいっぱいだね。
向こうではハーレム状態だったりして」

工藤さん、優子の怒りの炎に油を注ぐのは勘弁してくれ！

「そんなことはないですよ？　この二人は先輩に助けてもらって今の人生が送れて
いるわけで、懐いているだけです。ペットと思っていただければ問題ないかと。
それに私は先輩に懐いているわけでもなければ、一人の男として好きなわけでも
無いですし。彼女持ちの男性を奪うような真似はしたくないですしね」

おお！　ナイスフォローだ星野さん！　でもペットという表現はどうなんだろう？

「氷花君、浮気はしちゃダメですからね？」

「優子泣かせたら承知しないわよ？」

「大丈夫、それは絶対無いから」

釘を刺された。僕ってそんなに信用少ない？

「それでは、邪魔しちゃ悪いですし、私達はここら辺で」

「先輩、顔にドロを塗るような真似をしてすみません」

「紫苑ゴメンね、いつかお詫びするからさ。それじゃ紫苑、なな～、また向こうでね～！」

「うーん！　バイバ～イ！」

詩穂と星野さんが会釈を、悠里が手を振る。この三人と親友な真奈も手を振り返す。

支部の方へ行ったら何を言われるのやら・・・・・・

「・・・・・夫の無事を確認するのは妻のつとめ」

「その確認の方法が過剰すぎんだよお前は！」

後ろで何やら騒がしいがもう何もかも放り出して現実逃避したい気分だ。

とある店の前・・・

あの後女子メンバーと別れ、僕と秀吉は三人に連れられ、とある三人の行き付けの店へと案内された。

「明久よここは何の店なんじゃ？」

「まあまあ、入ればわかるって」

そう言われ入店する。見てみなくてもわかっていたことだがＴＳ○ＴＡＹＡだ。

「男の楽しみを知らないであろう二人に俺たちからのプレゼントだ」

「はぁ・・・・・・？」

「何やら凄く嫌な予感がするんじゃが・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・着いた」

「えっ？　いや、着いたってここは！／／／」

そう僕と秀吉が連れてこられたのは成人向けのコーナー。つまり、その・・・・・・

「な、何でこんな所に来る必要があるんだよ！？」

「さっきも言っただろ？　こういう楽しみを教えてやろうと思ってな」

「だ、ダメじゃ！　こんなものを見ているのがバレたら真奈の信頼を裏切ることに！」

「・・・・・・・・・・・・・バレないようにする方法なら教えてやる」

「で、でも！」

「まあまあ、とりあえず見てみなよ？　ね？」

そう言われ渋々コーナーの中へはいる僕たち。

「でも、そもそも買えないんじゃないの？　僕たちまだ１８じゃないし・・・・・・」

「今日のレジは若い男性だから問題ない。目を瞑ってくれる」

「あ、ほら。これとか秀吉好きそうじゃない？」

「わ、ワシはそういうのは興味無いのじゃ。絶対そういういかがわしい物など・・・・・・」

「ひ、秀吉？」

秀吉が明久が選んだＤＶＤを見たまま凝視している。何事かと思い、見てみると理由がわかった。

「紫苑はコレとか、コレかな？」

明久が大して探す動作を見せず選んでいく。さては始めから僕たちを連れてくる気だったな！？　まさかこんな策略にはまるなんて、不覚！

とまあ言ってはいるが結局僕と秀吉は買ってしまったんだ・・・・・・

その夜・・・

「「「「「・・・・・・・・・・・・・」」」」」

会話がない。わかっていただけていると思うが、僕と秀吉は今二人と会話がしにくい。

「ひ、秀吉！　この後こっちの部屋に来てくれるかな！？　ちょっと男同士で話したいことがあるし！」

「お、おお！　そうじゃな！　ワシも丁度話がしたいと思っていた所じゃ！」

ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡと笑い合う僕ら。ダメだ、空気が重い。

（（怪しい））

数時間後　リビング・・・

明かりを亡くし、完全に真っ暗な状態のリビング。せっかく買ったのだからとりあえず見てみようということになった。まあ、コレが愚かな選択だったというのはわかりきっていたのにねぇ・・・・・・

「今ならまだ引き返せるけど・・・・・・」

「こ、ここまで来てしまったんじゃぞ!?　今更無理じゃ！　多分・・・・・・」

理性がダメだと言っていても本能やら好奇心が見ろと言う。この時僕らの中の理性は降伏していたと思われる。

「じゃ、じゃあ、入れるよ?」

「う、うむ。まずは紫苑のから・・・・・・」

そう言って僕はＤＶＤをセットする。しばらくするとＤＶＤの内容が始まり・・・・・・

数分後・・・

無言でＤＶＤを取り出す。心臓の鼓動が部屋中に響いているんではないかと思うくらいに僕はドキドキしていた。恐らく秀吉も同じ気持ちだろう。

「ぼ、僕最低だ・・・・・・！／／／」

「あ、姉上と光が本当にやられているんではないかと思えたのじゃ・・・・・・／／／」

僕が買ったのは出演している女優が優子に凄く似ているのだ。自分の彼女のを見ている気分だった。秀吉のは女優が光によく光に似ている。

「秀吉・・・・・・僕、結構やばいんだけど・・・・・・／／／」

「わ、ワシも、今部屋に戻って光の寝顔を見たら何をしでかすかわからぬ／／／」

うっ！　そういう秀吉も顔が真っ赤になっている。男だとわかっていても優子と同じ顔をしている人が顔を真っ赤に染めてモジモジしていたら興奮しちゃうよ！
今は唯でさえ成人向けのＤＶＤを見てしまったわけだし・・・・・・！

「ひ、秀吉・・・・・・／／／」

「何じゃ、銀・・・・・・？／／／」

僕は秀吉が座っているソファーに乗る。何故か僕たちはお互いに静止しようとせず、
そのまま僕たちの間の距離は無くなっていきーーー

「何やってんのよアンタたちはー！！」

「げふぅっ！？」

「ぎ、銀！？」

いきなり僕の身体に衝撃が走る。ソファーから思いっきり転げ落ち、後頭部を痛めた。

「いったー！　な、何が起こったんだ！？」

「何が起こったじゃ無いでしょうが！」

「ゆ、優子！？」

そこには完全にご立腹な状態の優子と光が仁王立ちしていた。

「帰って来た時から怪しいとは思っていたけど、まさかこんなことになるなんてね！」

「ゆ、優子、これは、その・・・・・」

「二人ともさぁ、男同士は結婚出来ないって知ってるよね？」

「「はい！　あの時はどうかしてました！　ホントすみません！」」

「じゃあすまないって思っているんだったら、題名、読み上げてくれないかな？」

え？　マジで・・・・・？

「えっと、光？」

「よ・み・あ・げ・て！」

「うぅ、『美人ＯＬが社内セクハラの餌食になりピーピー』／／／」

「秀吉君も」

「き、『巨乳女子高生のピーピー』／／／」

し、死にたい・・・・・・！！

「うんうん、ありがとう。で、この作品に出ている女優さんが私達に似ているのはどういうことかな？」

「つまり銀はアタシが他の男にセクハラされて嫌がっているのを見て興奮する変態なわけね？」

「ち、違うよ！　こ、これはあくまで撮影であって、お互いの了承があってのことだから興奮できるのであって、実際に優子がされていたら僕はその男を殺すよ！？」

「でも、変態なのは変わらないわよね？」

「うぐうっ！」

「秀吉君って普段私のことをそういう風に見てたんだ～。ふ～ん、意外とエッチなんだね」

「こ、これは明久たちにそそのかされて！」

「でも、最終的には自分で買ったんでしょ？」

「うぐうっ！」

そうだよ！　元はと言えば明久たちのせいじゃないか！　絶対復讐してやる！

→（やつあたり）

「そういえば、ボーリング場での件がまだだったわね？」

ガシッと肩を拘束され逃げられなくする優子。

「優子～、優子の弟を痛めつけちゃってもいいかな？」

「ひ、光！？　今はっきりと痛めつけると言わんかったか！？」

「全然オッケーよ光。ウチの愚弟は苛められるのが大好きなドMだから」

「姉上！？　何勝手にワシをドMだと決め付けておるのじゃ！？」

「そっか～、なら秀吉君が喜んでくれるように全力でやらなきゃね～」

「いやいや光、全然手加減してくれて良いぞ？　ワシはそっちの方が嬉しいのじゃが？」

「秀吉、キミが優子から関節技をくらっている時に時々見せていた

笑みはそういうことだったんだね・・・・・・？」

「何故銀まで悪ノリを！？　そうか、いつもの仕返しというわけじゃな！？
覚えておれぎゃぁぁああ！？　い、いいい痛いのじゃ光！　ワシの大事な骨が折れてしまうのじゃ！　あ、でも胸が・・・・・・」

秀吉、僕はキミが最後にボソッと言った言葉を聞き逃さなかったぞ！

顔を綻ばせて幸せそうな顔をしてさ！　いい気なもんだよ！

「さぁて、銀、あなたにも気持ちよくなってもらおうかしら？」

「ゆ、優子？　僕は決して秀吉みたいにドMじゃないから関節技で気持ちよくなんてならないく、首が！　首は不味いって！　ほ、ホントにや、ばーーー」

首はホントにやばかったと思う。うん。勉強になったよ。うん。

停学処分二日目・・・

とある都市の演説会場・・・

「うぅ。まだ首が痛む」

「自業自得よ。でもそのケガで今日の護衛任務に支障をきたさない

でよ？」

「わ、わかってるよ～」

「やれやれ、今日から一人暮らしか～」

「僕もなんだからそんなこと言わないでよ」

「紫苑は良いじゃない。秀吉君と優子とはいつでも幼なじみっていう面目で会えるんだから」

「だったら真奈も早く秀吉に告白しちゃいなよ。彼女になればいつでも会えるよ？」

「でもさ、もしフラれたらどうしよう」

「いつも積極的なのに珍しいね」

「うっさい！／／／／　紫苑は乙女心ってもんがわかってないからダメなんだよ！」

「はいはい。すいませんでした」

『お前ら、いつまで遊んでいるんだ？　そろそろ配置に付け』

「「りょうか～い」」

この日から、僕の人生は大きく変わった。

第三十九問　僕と皆と最後の休日（後書き）

今回は紫苑です。

え～と、フムフム、じゃあこっちの方が良いんだね？　わかった。
え？　もう本番始まってる？　ちょっ！？　早く言ってよ！　え～、皆さんすみませｎ

次回　バカと銀色と召喚獣　『番外編　舞台裏とＮＧシーン集等々』

いくぞ！　試験召喚獣、サモッいった！　舌噛んだ！

番外編　舞台裏とNGシーン集等々（前書き）

テスト期間中とはいえ更新が遅れてしまいました。

すみません。

あと、以後オリジナルストーリーの際、サブタイトルは【～と～】だとは限りません。そして予告の最後の部分で言うのが、試獣召喚！ではなくなります。さらに予告をしているキャラと言っているキャラは違う場合があります。

番外編　舞台裏とＮＧシーン集等々

『バカと銀色と召喚獣　舞台裏』それは、原作とこの作品の設定を残したまま敵も味方も関係なく、ただただ戯れる企画である。そしてこの番外編では全てのキャラが仲良しだ。言うなれば一種のテレビ番組だ。この場所ではキャラクター同士の座談会やＮＧシーンを等を見ていく。では、本文へＧｏ！

「さぁ、今回も始まりました！　『バカと銀色と召喚獣　舞台裏』！」

「今回もって言っていますが今回が初めてです」

「そんな細かいことは気にしない！　皆さん、早朝でも夜でもこんにちは！
『イタズラする為なら手段を選ばない』がモットーで、ここでの司会を務めさせて頂く『山吹　悠里』です」

「同じく、司会を務めさせて頂く『河森　詩穂』です！」

「「よろしくお願いしま～す！」」

「さて、突如始まったこの企画！　どれだけ好評なのか、もしくは不評なのか！？」

「文句を付けられても仕方ないですよね？」

「うんうんまったく。ではさっそく、休憩中や打ち合わせをしている皆さんを直撃しよっか！」

「おー！」

移動中・・・

「さ～て、誰から会うかな？」

「あっ、紫苑さんだよ」

「よ～し、し～お～ん～！」

「え？　誰、ってうおわっ！？」

「ゆ、悠里・・・・・・いきなり抱き付かれるとビックリするんだが？」

「いいじゃんいいじゃん。女の子に抱き付かれて嬉しいでしょ？」

「ま、まぁ・・・・・・」

「私もいますよ紫苑さん」

「あ、詩穂も・・・・・・えっと、なんかマイク持っているけどどうしたの？」

「実は今作者の考えた企画で、私達がこうやって登場キャラクターをインタビューしているんだよ～」

「あ～、作者がね～。今ここには僕しかいないんだ。皆の所に行くかい？」

「いんや、まずは紫苑と色々話してからにさせてもらうよ」

「ではかるく自己紹介をしちゃって下さい」

「了解。僕の名前は『氷花　紫苑』、これはコードネームなんだけどね。んで本名が
『蒼月　銀』。こっちの名前を知っている人はあまり多くない。年齢は１６だと思う。
その他の細かい設定は後々追加されていくんじゃないかな？」

「どーもです。ではこの場をお借りして、初期設定との変更点と追加事項を
挙げていこうかと思います」

「おお、それは助かるな。作者も困っていたし」

「私が作者から渡された資料を見て、現時点での変更点を箇条書きで書いておきますね
・　所属したのは中三の始め→中二の終わり
くらいですね。変更点は既に訂正されているのであまり無いみたい

ですね。もしくは
作者が気付いていないだけかもしれませんが。続いて追加事項です。
・　国家機密情報局
←
Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ『国際的』
Ｃｏｎｆｉｄｅｎｔａｌ『機密』
Ｐｒｏｔｅｃｔ『保護』
Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ『組織』
つまり、以後ＩＣＰＯと表記させていただきます。既に国際刑事警察機構というのが
存在していますがそれは表のＩＣＰＯです。裏のＩＣＰＯが国家機密情報局という訳
です。

・ＩＣＰＯの支部の名前
原作では文月学園が日本のどこにあるのか書いていないので、～支部という風に書け
ないのです。なので支部に名前を付けることになりました。以後、本編でも使っていく予定です。因みに私たちが所属しているのが『月下』という名前です。以上が、現在
作者が思い付いている追加事項です。後々増えるかもだそうです」

「因みに、次回から開始するＩＣＰＯが主のオリジナルストーリーが終了後、改めて
全体の説明を入れるらしいです」

「やれやれ、僕たちの将来が心配だよ・・・・・」

「ではそんな暗い空気を明るく照らす」

「紫苑さんのＮＧシーンを見させていただきます！」

「えっ！？　ちょっ！？　それは恥ずかしいから勘弁して欲しいんだけど！？」

「「それでは、どうぞ！」」　「無視！？」

毒とお弁当とＢクラス戦より

「じゃあ、逝ってくるよ」

「・・・・・すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

「紫苑、すぐに何かしらの応急処置をしてやるからの」

「そんな暗い顔しないでよ。それに、謝るくらいだったら次の戦争、よろしくね」

意を決し一気にかきこむ。

さあ、いったいどんな奇妙奇天烈破天荒な味がーーーあれ？

「ん？　意外と普通だけ・・・・・」

（え？　ちょっと紫苑？　台詞は？　ゴばぁっ！　だよ？　紫苑？）

「ク、ククカカ。クカカキクカケククカカクキキカウケキキカカウキ

カカウケカクキキ！」

「えー！？　ちょっ！？　紫苑！？　どうしちゃったの！？　別に一方〇行の真似はしなくて良いんだよ！？」

「クキクカキカウケキキクカククキケキキク！」

「よくわからんが、明久、このノリにあわせて突っ込んでみるんだ！」

「わ、わかったよ！　その幻〇をブチ殺す！」

「クキャッ！」

地図と宝とストライカーシグマＶより

「くっそ、数学が、解けない。仕方ない。この手は使いたくなかったが・・・・・。誰も見てないよな？」

僕は数学が苦手。Ｄクラス戦の時は偶然あんだけとれたけど、普段は平均点より下回ることの方が多いのである。その度に優子や真奈に教えて貰っていたんだけどね。

でも今回の問題は運が良いことに選択問題。もうこうなったら奥の手を使うしかない！

「貫けっ！　パーフェクトグングニル！」

カンッ（ボールを入れるカゴに当たった音）

サクッ（当たったパーフェクトグングニルが跳ね返って紫苑の目に刺さる音）

「ぎゃぁぁあ！　目が、目がぁっ！」

四人と暗躍者とウエディング体験より

「何でアンタの話を聞かなきゃいけないのよ!?　ここまで私に恥をかかせておいて、恥を上塗りするつもり!?　ここで私が紫苑に『幼なじみでいよう?』なんて言われたら、私はどうすればいいのよ!?　今まで、ずっと紫苑のこと好きだったのに・・・・・・。こんなに惨めな思いは初めてよ！　紫苑なんか大嫌い！　もう顔も見たくない！」

最低だな、僕。優子を泣かせちゃったよ、笑顔を守るって、約束したのに。

でも、それでも僕は・・・・・・。

「僕を嫌いになろうと構わない。でも、僕の正直な気持ちは、あの時から、ずっと変わらない僕の優子に対する思いは、言わせて貰うよ?」

「え?」

「優子、ううん。木下優子さん。あなたのことがしゅっ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・』

「っ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜／／／」

「せめて、せめて最後のだけは勘弁して欲しかった！」

「あっははは！　最っ高！　さっすが紫苑だよ！」

「一番良いところで咬む。もう狙ったとしか思えませんね」

「もう二人なんて嫌いだー！」

「あぁっ！　紫苑待ってよー！」

「行っちゃったね・・・・・」

「やり過ぎたかな？」

「今度謝りに行こっか？」

「そうだね。では、気を取り直して次の出演者を捜しに行こう！」

「――――!?　――――!?」

「――――?　――――!?」

「――――!　――――!?」

「んん?　誰かと誰かが騒いでいる声がする!」

「この部屋ですね」

「新たな出会いがある気がする、ってことでオープン!」

「「「あ・・・・・・」」」

「・・・・・あれ?」

そこには優子と真奈を押し倒す秀吉の姿が・・・・・・

「こ、こここここれはギャルゲー界では禁忌(タブー)とされている寝盗り!?」

「し、しかも3P＋近親相姦!?」

「「失礼しまs「「「待てーい!!」」」」ひっ!」」

「まあまあまあまあ落ち着くのじゃ二人とも」

「そうよ、急がば回れと言うじゃない?」

「そうだよ、慌てるのは良くないことだよ?」

「でででもさり気なくななの胸を木下君が鷲づかみにしてたし！」

「ブッ！」

「え・・・・・えぇ！？　ま、まぁ確かに触られたような感覚があるけど・・・・・・／／／」

「うわぁ、秀吉、アンタって・・・・・・」

「な、何じゃ姉上！　どうしてそんなゴミクズを見るような目でワシを見ているのじゃ！？」

「とんでもないことに捲き込まれた気がします・・・・・・」

「ま、まさかこのまま５Ｐに突入！？」

「せんよ！？　そんなのに突入せんからな！？　って何で真奈は微妙にガッカリしておるのじゃ？　まさかその５Ｐというのをしたいのか？」

「女性にそんなこと聞くなんてセクハラです木下君！」

「セクハラよ秀吉」

「うわ～セクハラだよ。いるよね～こういう人」

「うぅ、秀吉君にセクハラされた・・・・・・」

「た、確かに先ほどの発言には不適切な聞き方をしてしまったやもしれぬが」

「「セックハラ！　セックハラ！　セックハラ！」」

「五月蠅いぞお主ら！　先ほどからワシのことをセクハラ呼ばわり！　ん？　しかし
セクハラ呼ばわりされるということはワシは男として認めてもらえているということで、別に非難されてもあーだこーだ言う必要は・・・・・」

「「「セクハラを認めた・・・・・・」」」

「ち、違うぞ！　今のは決してセクハラをしたのを認めたわけでは・・・・・！」

「もう、お嫁に行けない・・・・・・」

「（ブチッ）ふぬぁぁあああーーー！！！」

しばらくお待ち下さい・・・

「では、気を取り直して皆さんは自己紹介をしていただきます」

「・・・・・・『木下　秀吉』じゃ。年齢設定は無いからわからぬ」

「『木下　優子』よ。年齢は同じく不明で、秀吉はアタシの弟よ」

「『宮野　真奈』がコードネーム。本名が『紅　光』。優子たちからは真奈、月下に所属しているももたちからはあだ名で『なな』って呼ばれてるよ。年齢設定は紫苑と同じ１６歳だよ」

「秀吉、いい加減機嫌直しなさい」

「・・・・・・（プイッ）」

「はぁ・・・・・・秀吉、直さないと真奈にエロ本のことバラすわよ？」

「さ、さーて、頑張っていこうかの！」

「どうしたの秀吉君？　急に元気になったけど」

「何でもないのじゃ！　何でも・・・・・・」

「？」

「そういえばだけど、私たちがあだ名で呼んでいるということを説明してなかったよね？」

「それじゃあ今やっちゃいましょうか」

「あたしは悠里って部分からとって『うり』」

「私は詩穂って部分から『しほりん』って呼ばれてます」

「んで、ここにはいない『あーや』だけど、菖蒲から『あーや』って呼ばれているんだよ」

「そういえばどうして星野はいないんじゃ？」

「あーやはこういうの苦手なんだって。っていうことであたし達に任されたわけ」

「なるほど、星野の性格からすれば納得もいくのじゃ」

「話は変わるけど、昔の紫苑ってどんなだったの？」

「今とあまり変わらないぞい。強くて優しいワシの兄みたいな存在じゃ」

「もうすぐ本当にお義兄さんになっちゃうんだよね？」

「姉上のおかげでな」

「ま、まぁ・・・・・／／／」

「紫苑さんってきっと立派なお父さんになりますよね？」

「なるなる。きっと他の奥さん方にも大人気だよ～」

「浮気は絶対にしないだろうけどね」

「子どもは何人じゃろうな？」

「確かにそれは気になる！　木下さんは何人で、男の子と女の子はどのくらいの比率がいいの？」

「一人ずつかな・・・・・・／／／」

「いつもは強気の姉上も紫苑の話題ではしおらしいもんじゃのう」

「うっさい！　そういうアンタはどうなのよ！？」

「何がじゃ？」

「あんただって好きな人の話題が出たら大慌てする癖に！」

「なっ！？　そ、それｈ「だ、誰！？」うぇっ！？」

「誰なの！？　秀吉君が好きな人！」

「だ、誰って言われても・・・・・・」

「ねぇ、アレってさ・・・・・・」

「だよね～、じゃあ木下君がななの好きな人なんだ・・・・・・」

「言えなかったら言わなくていいから特徴を教えて！」

「うええ！？　な、何でそうなるんじゃ！？」

「いいから言って！　巨乳！？　メガネ属性！？　それともどっかのメイドさん

とか！？」

「ち、違う！　そういうんじゃないのじゃ。特徴を言えば良いのじゃろう？
まず見た目も中身も優等生で、常に明るい。顔にはやや幼さが残っとるように
見えるのう。演劇以外じゃったらワシに勝っている物が無いと思うのじゃ。
じゃからよく自分とは釣り合わないと思える高領の花ってヤツじゃ」

「う～ん、まだ特定できないなぁ。他には？　紫苑は知ってる？」

「こ、これ以上は言えんぞい・・・・・・」

「でも幼なじみの紫苑が知らないわけ無いよね・・・・・・よし、紫苑に聞く！」

「うえぇ！？　それは困るんじゃが・・・・・・！」

「因みにアタシはそういう相談を受けたことないからわからないわよ？」

「優子も知らないんじゃやっぱり紫苑だよ！　優子、紫苑探し手伝って！」

「いいわよ、どうせ暇だし」

「むしろ真奈を止めて欲しいんじゃが！？」

「嫌よ」

「即答!?　あまりにも酷いのでは!?」

「別にいいじゃない。それにアタシ、アンタがそうやって困っている姿が結構
お気に入りなのよ♪」

「外道!　この外道!　自分の姉とは思えぬ!」

『ちょっと待ったぁぁあ!!』

ドガンッ!（ドアを蹴り開ける音）

「な、何事じゃ!?」

「秀吉!　今の発言を撤回するんだ!」

「あ、明久!?　何故こんなところへ!?　しかも何故ドアを蹴り開けて入って来る
必要があり、メイド服なんぞを着ておるのじゃ!?」

「弟の困っている顔がお気に入りだから外道?　あまい、あまいよ秀吉!　ヘンゼルとグレーテルに出てくるお菓子の家より甘いよ!」

「凄いスルースキルです・・・・・!」

「あの木下君のツッコミを全て無視し、自分の言いたいことだけをハッキリと言ったよ!　これが主人公の補正ってヤツの力か・・・・・!」

「山吹に河森よ、今驚くべきところはそこじゃないぞい・・・・・・」

「秀吉！　聞いてるの！？」

「う、うむ・・・・・（何故ワシは明久に説教されるかんじになっておるのじゃ？）」

「いいかい？　さっきの木下さんの発言なんて優しいもんだよ。僕の姉さんなんか実の弟に女装させるのが趣味な変態で、僕に対してお嫁に行けなくなるチュウをするとか言ってくるんだよ！？　しかもその内容がまたお嫁に行けなくなった姉さんに対し、罪の意識を抱いて生きていかなければならないとかいう内容で、それからーーー」

「待てい！　明久よ、玲どのについては舞台裏のワシらは知っておるが、本編ではまだ未登場なのじゃからここでその玲どのの話題を出すのはいかがなものかと思うんじゃが・・・・・・」

「黙らっしゃい！「何故じゃ！？」とにかくだね、さっき程度で自分の姉を外道だなんて言ってはだねーーー」

「優子、コレ終わりそうもないから行こう？」

「それもそうね、じゃあ、アタシたちはこの辺で」

「あ、はい。どうもで～す」

「私達も移動しよう？　アレを止めようとすると捲き込まれそうだ

し・・・・・・」

「そだね・・・・・・・」

移動中・・・

「あ！　こ、ここは！」

「第三十七問　後編に僅かに登場した謎の組織の人たちの休憩場所！」

「これは入ってみるしかないっしょ！」

「お、お邪魔しま～す」

ドアを開ける二人、そこには、

『？』

中にいた全員が振り返る、同時に二人は絶句した。何故ならーーー

「「と、ともだちーーー！！！？」」

〇十世紀少年に登場すると〇だちそっくりに布で顔を全員が覆っていたからだ。

「あっ！　ちょっ！　二人とｍ――――」

二人は意識を失う寸前に一番近くにいたと〇だちに声をかけられた。

番外編　舞台裏とＮＧシーン集等々（後書き）

今回は真奈です。

厄災の序章、壊れる日常、終わる平和。再び私の前に現れたルージュ。ルージュは私に言った。「ブルームーンの遺産は貰う」と。

次回　バカと銀色と召喚獣　「ｐａｒａｄｉｓｅ　ｌｏｓｔ」

これから起こる出来事に、あなたはどうやって対応するのか、見せてもらうわ

第四十問　ｐａｒａｄｉｓｅ　ｌｏｓｔ（前書き）

毎度毎度更新が遅くなりすみません。

先日大きな地震がありました。最後にテレビを見た時には死者と行方不明者数が
４７００人を超えたとか。
作者は運良く被害にはあいませんでしたが、被害に遭ってしまった方々の無事を
作者は祈っております。

第四十問　ｐａｒａｄｉｓｅ　ｌｏｓｔ

「蒼月と」

「紅の」

「「ゆ～るゆるラジオ！」」

「ねぇ、この企画何？」

「作者曰く、僕たちはオリキャラだから話と話の間にある部分で、登場出来ないじゃない？　だったら専用に作ってしまえばいいじゃないか！　ってことでできた企画らしい」

「でもどうしてゆ～るゆるラジオって名前なの？」

「ほら、僕たちの日常って血生臭かったり、ドス黒い感情が入り交じってたりして相当ストレスが溜まるやつばかりじゃない？　だからせめてここだけではゆる～い内容でリラックスしてもらおうという意図らしいぞ？　本名で呼び合ってＯＫみたいだし」

「ほほう。作者も良いとこあるじゃん！　見直したよ！」

「まあ僕たちに作っちゃうと他のオリキャラたちから苦情がきて、どんどん増えていくかもだけどね」

「ただでさえ異常に多いのに、コーナー名考えるのも一苦労だよ」

「でもその代わりにこういうオリジナルストーリーの時に『バカテストが無い！』って困ることは無くなったよね。っとまあこんなことを言っている間にスペースが減っていくので、さっさと始めようか」

「始めるって何を？」

「そりゃラジオなんだからラジオらしくいこうよ！　ぶっちゃけた話、
現在インターネットラジオステーション　音〇で放送されている、
【文月学〇放送部】のコーナーをパクっちゃえばいいし」

「うわぁ！　ぶっちゃけた！」

「んじゃ光、ハガキを読んでくれたまえ！」

「一回目なのにハガキは来てるんだ・・・・・。じゃあいくよ、ペンネーム、
【原作キャラなのにワシたちにもコーナーが無いのじゃが】さんから・・・・・」

「いきなり重いのがきたね。しかも送ってきた人たちと書いてある内容がわかるハガキでございますね」

「その辺はウチの作者さんに相談してみるといいでしょう。原作者の井上〇二さんが
作ってくれるかどうかはわからないけど、
ウチの作者さんだったら作ってくれるかもだよ？」

「ということですので、頑張ってくださいね」

「お次はペンネーム、【最近は幸せです】さんから。え～っと、『担当の蒼月さん、
光さん、こんにちは。』「こんにちは」『先日、原作9巻の後書きでバニーガールの格好をしたのですが、お二人はどう思いますか？
感想を聞かせて下さい（特に蒼月さん）』だってさ」

「家にいる時答えなかったからか・・・・・・！」

「改めて答えるけど、普通に可愛いと思うよ！　特に恥じらいからか真っ赤になってまでけなげにポーズを取っているところが良い！　真っ赤になっているのが良い！　大事なところだから二回言ったよ！」

「そうっすか・・・・・・」

「銀は？」

「言えないよ・・・・・・」

「じゃあ言わないってことね？」

「そうです」

「じゃあそんな時の対処法がハガキに書いてあるので」

「え・・・・・・？」

「『銀のエッチなブツたちの隠し場所はどこ？』だって」

「因みにやっぱり言うっていうのは「ナシ！」だよね・・・・・・」

「で、場所は？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「場所は？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

演説会場・・・

僕たちは今、とある演説会場にいる。今日、お偉い議員だか大臣だかが演説をするらしい。んで、僕たちはその護衛。え？　ＳＰがいるだろって？でもそうはいかないんだよね。今回のは本当にお偉い人らしく、僕たち組織のことを知っている人物だ。しかも数年前に僕と真奈が戦ったベルムやルージュみたいな連中が出てくるかもしれない。そこまでの人間が出てくるとは思えないが、念の為だ。

因みにだが、僕たちは護衛の際、ＳＰの人たちの警備態勢を混乱させない為に私服姿だ。当然見晴らしの良いビルの屋上に僕はいる。西村・真奈・他の構成員たちもそれぞれ散っている。

『そろそろ時間だが、異常はあるか？』

「異常、ありません」

僕と同じように他の皆も報告をする。今回の護衛任務のチーフが西村である。

説明し忘れていたが今回の護衛任務は大がかりなものなので、他の多くの支部から

構成員が集結している。この中で堂々と殺人を犯そうとすれば容易に防ぐことができる。

僕たちも異変に気が付いたら自由に止めに入って良いそうだ。一般人には悟られない様にするのがベストだ。そんな中通信が入る。

『各員、議員の立ち位置から5時の方向の一番低いビルを見ろ』

「5時の方向のビル・・・・・・？」

言われた場所のビルのを見ると、そこに確かに何か見える。でも布で隠すように

しているので十中八九スナイパーだろう。かるく数１００メートル離れているけど

僕たちは訓練しているので余裕で見える。

「誰かいますね、どうします？」

『俺が行く。各員は警戒態勢を解くな』

「了解」

解くなって言っても、西村が行ったならあのスナイパーはもうお終

いだろう。
逃げられる訳がない。と、僕は思っていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

スナイパーの背後に一つの影が降り立つ。

「そこまでだ」

銃を向ける西村。

「そのまま布を取り、手をあげたまま立ち上がれ」

しかし、スナイパーは微動だにしない。

「聞こえていないのか？　布を取り、手を挙げて立てと言っている」

すると、スナイパーはクスクスと笑い始めた。

「あらあら、意外と見つけるのが遅かったわね」

「・・・・・貴様、何物だ？」

布を取り去り、深紅のコートを風に靡かせつつ、言った。

「私の名前はルージュ。前に聞いたことがあるでしょう？　『黄金のエンブレム』の
持ち主、西村宗一さん？」

「お前は・・・・・！　数年前、宮野が言っていたヤツか！
だが、貴様が何故エンブレムの存在を知っている！？」

「質問に答える義理は無いわね。計画に無関係なあなたに」

「そうか、ならば・・・・・・力ずくで聞こう！」

紫苑　ｓｉｄｅ

あのスナイパー、ルージュ！　あいつだったのか！

『紫苑！　アレって！』

「あぁ、まず間違いないだろう。ルージュだ」

真奈からの通信が入る。過去にボロ負けした相手だけに反応してしまうのはわかる。
今の会話の終了と同時にルージュが西村から逃げる為、ビルから別のビルへ飛び移った。西村は直前のルージュの攻撃で遅れを取り、後を追うことができない。
そもそも西村はこの現場のチーフの為、離れることが出来ないのだ。
私服を脱ぎ去り、下に着込んでいたＩＣＰＯの制服になる。

『氷花！　宮野！　ヤツを追え！　実際に戦ってみてわかったが、あいつの実力は
Ｓランククラスだ。他の連中では歯が立たん！』

「もう追ってますよ！」

真奈が通信の後、すぐにルージュの方へ向かい始めていた。ルージュと真奈はその間もビルからビルへ飛び移り、鬼ごっこを展開している。やや遅れを取る形になっているが、僕もその後を追う。

「ルージュ！」

「フフ・・・・・・！」

真奈がスピードを上げた。ルージュは余裕のようでスピードを依然保っている。

だが今度はビルから飛び降り、ビルの壁を垂直に走っていく。そんなことしてると

目立つと思うんですけど。裏組織の人間って目立っちゃまずいんじゃないの？

だが真奈は今そんなことを気にしている余裕は無いらしく、同じく飛び降り、垂直に

壁を走る。

真奈　ｓｉｄｅ

ルージュは空中で振り返り言ってきた。

「プレゼントよ」

投げてきたのは手榴弾。私は普段懐にしまっている携帯型圧縮式杖を展開し、バッターの様に空高く打ち上げる。爆発させないように

打ち上げるのって結構難しいんだよね。

携帯型圧縮式杖・・・・・携帯電話サイズに縮められた鉄製の杖のこと。

そして打ち上げた手榴弾をハンドガンで撃ち抜き爆発させる。下に落ちるまで爆発しなかったら一般人に被害が及ぶことになるからだ。

『きゃぁぁあ！』

『な、何だ！？』

『爆発だー！』

爆発がいきなり往来の空で起きたんだからパニックにもなるよね。

私はルージュの近くに着地して言う。

「危ないでしょうが！　一般人に被害が及んだらどうすんのよ！？」

「そうさせないのが、あなたたちの仕事でしょう？」

数年前に会った時と同じ格好。場所と状況は大きく違うけど、よく覚えている。

「それで、おねーさんに何の用かしら、宮野真奈ちゃん？　おねーさん忙しいんだけど？」

どうして私の名前を？

「決まってるでしょ？　あなたを捕まえる為に追い掛けてきたのよ」

「あなたにおねーさんが倒せるのかしら？」

「前と同じと思わないでくれる？」

「それに、今回は二対一だ」

「紫苑？」

紫苑が追い付いて来たようだ。

「真奈、悪いけど今は一対一に拘っている場合じゃない。早く倒さないと一般人に被害が出る」

紫苑の言う通りだ。今は確かに一対一の構図に拘っている場合じゃない。

「っていうことだからさ、悪いけどこのまま二対一でやらせてもらうわよ」

「あらあら、おねーさん大ピーンチ。助けてニックス～」

「「っ！？」」

不意に数枚の手裏剣が紫苑に投げられていた。紫苑はバックステップでかわすが、

まるで動きを予測していたかのように手裏剣同士をぶつけ、軌道を変えバックステップをした紫苑を狙う。紫苑は携帯型圧縮式剣を展開して弾いた。

携帯型圧縮式剣・・・・・携帯電話サイズに縮められた剣のこと

『ルージュ、名前呼ばないで下さいよ。不意打ち失敗したじゃないですか』

「ゴメンゴメーン。だってピンチだったんだもの」

『私にはそんな風に見えませんでしたが？』

ルージュと会話をしながら私達の前に現れたのが白いメタリックな仮面をして、
忍者装束の格好した見るからに忍者と呼べる新手だった。特徴的なのが首に巻いた地面に付きそうなくらいの長いマフラーのような青白い布だった。

「新手か・・・・・！」

「くっ！」

「それじゃニックス、後は任せたわよ～」

「彼の方は、です」

そう言った瞬間ルージュは逃走した。人がいない車道をかなりのスピードで走っていく。

「真奈！　ルージュを追え！　ニックスとか言う方は僕がやる！」

「わかった！」

私もルージュを追う為に走り出す。ニックスとか言う方は本当に紫苑しかやらないようで私を足止めしようともしなかった。

『え・・・・・速っ』

『車と追いかけっこしてるの？』

逃げながらも私に気付いた人たちだろう。驚くのも無理はない。追い掛けているのはルージュなのだがそのスピードが走っている車を追い抜かそうとしているかの様な速さなのだ。

しかし、ルージュも速いわね。これでも全力で走っているけどなかなか追い付けない。寧ろ引き離されているのかしら？　結構走るのには自信あったのにな・・・・・・

ここで、ルージュの目の前を積み荷がある大型トラックが横切ろうとしていた。

だがルージュはそれに素早く反応し、車両の下へ滑り込んだ。少し遅れて私もトラックを飛び越えてかわした。

「フフッ」

「っ！？」

トラックを飛び越えたら目の前で蹴りを放つ体勢のルージュがいた。なんとか反応し、蹴りを防御した私はトラックの上に着地する。ルージュもそのままトラックの上に乗った。

「どう？　このままおねーさんと愛の逃避行ってヤツをやってみる

？」

「悪いけど、私にはそっちの気は無いのよ！」

「それは残念ね。本当に残念・・・・・・・・・・・・」

「え、あ、あの・・・・・・」

何か本当に残念がっているのでこっちが悪いことをした気になってしまった。
もしかしてルージュってそっちの気があるの？

「ねぇ、あなたは自分の大切な人が消されたことはある？」

「消された？」

「そっ、よく物騒な連中が言うでしょ？　消せってね。でもそっちの消すじゃなくて、存在そのものを無かったことにされるの。始めからいなかった、嘘の様な存在とされる」

「そんな経験は無い。むしろ、消されたのは私の方だしね」

「そうよね、あなたは、紅光という人間は、世間から消滅したんだものね」

「っ！？　ど、どうして私の本名を！？」

「さぁ、何でかしらね？　でも、今始まっている計画で、彼はあなたたちの前から

消える。『ブルームーンの遺産』は貰うわね」

「『ブルームーンの遺産』？　それって何のこと？　それと、誰が消えるっていうの？」

「直にわかることよ。これから起こる出来事に、あなたはどうやって対応するのか、見せてもらうわ。対応の仕方次第では、私達のあなたへの評価が変わるわ」

「評価って何よ!?　バカにしてんの!?」

「少なくとも、おねーさんはあなたを高く評価しているわ。でも、ウチのボスはあなたを高く評価していない。でも・・・・・・」

「？」

「何で、――――――にーーーーたのーーらね・・・・・・」

声が小さかったのでよく聞こえなかった。

「聞こえないんだけど。はっきり言ってくれない？」

「まっ、またおねーさんと会いたかったら、頑張ることね」

そう言うとルージュはビルを壁キックしながら去っていく。

「待って！　痛っ！　くっ・・・・・・！」

後を追い掛けようとしたら足に痛みが走った。

「気付かなかった・・・・・・」

右足が腫れていたのだ。蹴りを入れられた時にくらったのだろう。

そのことに気付けなかったなんて・・・・・・！　悔しい・・・・・・。

私はまた、ルージュに負けたのだ。

紫苑　ｓｉｄｅ

「っ」

キン　カン　コン　チュイン　ギャギャ　コン　キン

「遅いですね」

確かにこのニックスとか言う人、べらぼうに速い。速さだけなら西村よりも上だ。

距離を取る為バックステップをする。すると持っていた二本の小刀をしまい、

「――流五月雨手裏剣！」

手裏剣を数枚投げてきた。数は、六枚か。避けられない速さじゃ、何！？

「手裏剣の軌道を変えた！？　くっ！」

六枚全てが軌道を変え、拡散しながら僕を通り過ぎて行った。だが体が見えない何かで拘束されている。

「ワイヤーか！」

「逃がしませんよ。あなたに、我が里に伝わりし力を見せてあげます。凍れ！」

「な、何だ！？」

ニックスが叫んで両手をワイヤーに合わせた瞬間ワイヤーが氷を纏ってこちらに
向かって来た。僕は剣ですぐさまワイヤーを切り落とし、難を逃れた。

「この世界はいつの間に超能力者たちが戦う世界になったんだよ」

「古来よりこういった能力を持った人間はいましたよ」

だとしたら、何でそんな情報がこちらに入ってこない？　ＩＣＰＯへは世界のどの国
よりも早く正確な情報が舞い込んでくるというのに。

「でも、力を持たない普通の人々は私達をバケモノ扱いし、差別し、挙げ句の果て私達を皆殺しにしようとしてきました。ですが、私達は遠い昔に先祖が力を持たない普通の人々と結んだ今で言う友好条約。これに従い、復讐はせず、自衛の為だけに使ってきました。でも、あなた達はそれを破り、私の里を滅ぼした！　ただ銃や兵器を使ってくる軍隊程度になら負けませんでしたよ。でも、相手は私の里の皆みたいに特殊な訓練を受け、同等の身体能力を持

った人間を送り込んで来たんですよ」

「そんな・・・・・・」

僕はその話に聞き入っていた。彼女が嘘を言っているとは思えなかったんだ。

意志に満ちた声、行動。そして何より、実際にそういう力を彼女は使って見せた。

「皆殺されました。生き残ったのは私だけです。様々なショックが重なり私は記憶喪失になりました。行く当てもなく、記憶を失っている私に、手を差し伸べてくれる人たちがいました。そして、今の私の主の力を借りて、ハッキングさせてもらったんですよ。そこで、ある情報を手に入れました。何だと思います？」

「わからない・・・・・・」

「この国のお偉い人がとある組織に命令したんですよ。『私の故郷の里を滅ぼし、
そこにいるバケモノ共を皆殺しにしろ』とね」

「そんな！」

「事実ですよ。そしてその組織の名前も掴みました。ＲｅｖｅｒｓｅＩＣＰＯつまり
裏のＩＣＰＯ。『国家機密情報局』ということですよね？」

「！？」

「そして、彼らは私の里を滅ぼした「嘘だ！」嘘じゃ無いんですよ。

全部本当の事です。しかも、私の里だけじゃない。もっと多くの村が、里が！　滅ぼされたんですよ！
でも、そんな大量虐殺を構成員に伝える訳にはいかない。だから機密事項ということで永遠の闇に葬られることになったんですよ。誰にも知られず、気付かれることもなく、あなた達の最高司令官殿はその事を処分することに成功していた」

「じゃあ、オピュレンティアは・・・・・」

「そうです。全部知っているのですよ。始めから最後まで、全部。でも、そのオピュレンティアとかいうのにも、一つ見落としがあった」

「見落とし？」

「そう。もし、また私達のような能力者が現れたら？　そいつらの生き残りが、復讐を始めたら？　大変な事態です。だからそのオピュレンティアは世界の首相達と話し合い、あなたの様な存在を作ったのですよ！」

ニックスは僕を指さし言い放った。

「・・・・・僕？」

「ええ。まだあなたは何も知らないようですがね。それより、いいのですか？」

「何がだ？」

「私は先ほど『この国のお偉い人がとある組織に命令した』と言い

ました。ここで、
私の目的があなたの足止めだとしたら？」

「！　まさか！」

「さてさて、演説会場はどうなっているでしょうか？　爆発音が聞こえたとしても、
ＳＰとかあなた達組織の人間で議員さんを守れるでしょうか？」

「くっ！」

僕はニックスの言葉を聞き終わる前に演説会場へ走り出していた。

「『ヴェントゥス』、同じく一族の生き残りとして・・・・・・頼みましたよ・・・・・・」

演説会場・・・

そこには、ありえない景色が広がっていた。逃げまどう人々の中心に巨大な竜巻が
発生していた。でも、何かを破壊することもなく、移動することもなく、ただただ、
議員と竜巻を発生させている犯人であろう奇術師のような格好をした人間を閉じ
こめているだけだった。先ほどから、竜巻に近付こうとしている人間は全て吹き飛ばしている。あの西村でさえも近づけていない。それでも、中の会話はハッキリと聞こえる。

『なぁアンタ、『雪の里』のことを覚えてるか？』

『ゆ、『雪の里』？　そんなの知らない！』

『覚えてねぇのかよ。日本にあった能力者達の里でアンタが最後に滅ぼせと命令した場所だよ』

『な、何のことだ・・・・・！　本当に知らないんだ！』

『知らばっくれるのはお得意だよなぁ、政治家ってのは。俺たちバケモノの事なんざぁ覚えてねぇってか？　あっはははははは！！！　笑っちまうぜぇ！　平和主義を掲げている日本が大量虐殺だぜ！？　矛盾してるじゃねぇか！所詮建て前だけってか？　国民には何にも知らせず、裏では残虐な行為に手を染める。そして里の人間達には慰霊碑も作らない。まぁ、当然だよなぁ。アンタからしてみればあいつらはバケモノなんだからよぉ？』

『お・・・・・お前は一体・・・・・』

『あぁ？　俺か？　俺はヴェントゥス。世界で最後の『魔法使い』さ！　死ね』

まずい！　そう思った時にはもう遅かった。突如竜巻が止み、何かが高速で吹き飛んでいった。竜巻の中にはヴェントゥスとかいうヤツがいるということは・・・・・！

飛んでいったのは議員ということになる。既に議員を追い、ＳＰとＩＣＰＯの何人かが捜索に出た。西村が追い掛けなかったということは、もう・・・・・

「あースッキリしたぜ！　やっぱ悪人を吹き飛ばすのが一番だな」

「貴様！」

「うぜぇよおっさん」

「何！？　ぐおっ！」

「西村！」

西村がヴェントゥスに向かって行ったが再び風が発生し、西村を押し戻した。
次にヴェントゥスは僕の方を向いて言った。

「よぉ、氷花紫苑君。それとも本名で言った方が良いのかな？」

こいつ、僕の本名を知っている！？

「俺とお前となら、気が合いそうだな」

「合うわけ無いだろう！」

「どうかな？　人の本性ってのは本人すら気付いていないかもしれないぜ？　なぁ、
『黒のエンブレム』の所持者君」

「なっ！？　エンブレムまで！」

「今日の所はこれで退散させてもらうぜ。目的は果たしたしな。ん

じゃあーな」

「何をっ！？」

再び風が今度はヴェントゥスの背中から発生し、ヴェントゥスはまるで空を飛ぶように去って行った。

支部　月下・・・

支部に帰還した僕・真奈・以下数名。今回の護衛任務での死傷者は議員ただ一人だけだそうだ。

『・・・・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・・・・」

全員疲れ切っていた。というより、自信を無くしていた、と言う方が適切かもしれない。

あの真奈でさえ一言も話さない。

「だ、大丈夫ですよ皆さん！　今回は超能力者みたいな連中が出てきたんですから、

あたし達みたいな無能力者たちが勝てる訳無いんですよ！」

「ちょっ！　うり！」

『だとしたら、あいつらが出てきたら諦めろって言うのかよ？』

「あう、その、すみません」

『・・・・・・いや、俺も、ゴメン・・・・・・』

悠里が励まそうとしてくれているが、今は無理みたいだ。いつもなら悠里が励ましたらＦクラスの皆みたく元気になる人は多いのに。

『・・・・・・・・・・・・』

重い空気が場を支配している。でも、

『落ち込んでいるところ悪いけど、皆には話を聞いてもらうよ？』

オピュレンティアからの通信だ。でも、今の僕はオピュレンティアが信じられなくなっていた。本当にこの人の言うことを鵜呑みにして良いのか？彼の出した任務を遂行するだけで良いのか？　何より、

『だからそのオピュレンティアは世界の首相達と話し合い、あなたの様な存在を作ったのですよ！』

ニックスとの戦闘中に彼女が言っていた言葉の意味を知りたかった。

第四十問　ｐａｒａｄｉｓｅ　ｌｏｓｔ（後書き）

今回は真奈です。

オピュレンティアが突如行う訓練。だが訓練場でイレギュラーが発生する。

謎の部隊の襲撃、下される新たな任務。そして、文月学園の皆は・・・・・

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『アンノウン』

そんな・・・・・・嘘、だよね・・・・・・・・銀・・・・・・・・！

第四十一問　アンノウン（前書き）

すみません。サブタイトル変更しました。

第四十一問　アンノウン

「木下姉弟の～」

「シチュエーション妄想局っ」

「姉上、何じゃコレは？」

「作者が考案したアタシたち専用のコーナーよ」

「それは了解じゃ。しかし、何じゃこの、シチュエーション妄想局というのは」

「日頃光に対してよからぬ妄想をしているアンタにはピッタシじゃない」

「なっ！？　何を言うのじゃ姉上！　それじゃったら姉上だって例の薄い本の内容を自分なりに妄想しておるではないか！」

「そんなの誰だってやるわよ。だいたいコレ自体二次小説っていう一作者の妄想から生まれた物なんだし。それ非難するんなら、このに〇ファンに投稿している全ての作者を非難することになるわよ？」

「うぅ・・・・・！　そう言われるとその通りなのじゃ」

「まぁ、アタシもアンタもそういう妄想をしているってことで丁度良いじゃない」

「・・・・・本音は？」

「コーナーが貰えるならなんでもよかった」

「ぶっちゃけたのぅ・・・・・・」

「冗談よ。面白そうだったから引き受けたの。さて、コーナー開始といくわよ」

「で、コレは一体何をするんじゃ？」

「その名の通り、妄想するのよ」

「シチュエーションをか？」

「そ、でも、ちゃんとシチュエーションが決められているわ。まず第一回目だから作者が決めたヤツだけどね。二回目以降は後書きの部分でお題を募集して、お題が来たら、それをやるかもね」

「来なかったら？」

「そん時はそん時よ。さて、第一回目のシチュエーションはこちら！」

【放課後の明久と雄二】

「？　コレは別に妄想するまでも無いというか」

「さぁ！　もうそ～スタート！」

『今日は疲れたよ～』

『あぁ、まったくダルいぜ』

『鉄人はどうかしてるよ。小テストで０点取ったら補習だなんて』

『そうだな～、まぁお前の場合暗記科目以外はまいかい０点だがな』

『失敬な！　僕だって１０点とか１２点とか取れるよ！』

『その程度で威張るな』

『そうだ！　この前新しいゲーム買ったんだ！　家でやらない！？』

『いいな。んじゃ、今から行くか！　どうせお袋は今日遅いしな』

数時間後・・・

『くそっ、このっ・・・・・・！』

『そらっ、よし！　俺の勝ちだな！』

『ちぇ～、僕の負けか～』

『もうこんな時間か・・・・・・。明久、俺はもう帰るな』

『わかった～。あっ！　そういえば明日保健の小テストがあったような・・・・・！』

『保健、か・・・・・・・』

『？　どしたの雄二？』

『なぁ、明久』

『何？』

『今から俺と・・・・・・勉強しとくか？』

『えっ！？　ゆ、雄二！　ダメだよ！　そんな・・・・・・！』

『良いだろ？　別に、どうせお前は一人暮らしだし』

『そ、そうだけど・・・・・・もう、しかたないなぁ雄二は』

『どうせお前のことだから、期待してたんだろ？』

『・・・・・・・・・・バカ』

「そして吉井君は坂本君に「姉上――――！！！！！」何よ？　五月蠅いわね」

「何よではあるまい！！　何じゃ！　コレは！？」

「何って妄想よ。放課後の吉井君と坂本君の」

「こんなもの姉上くらいしか喜ばんわい！」

「大丈夫よ。漫画研究部が裏で販売してる薄い本にはこんな感じの

内容が細々と書いてあるから」

「そういう問題では、ないわい！！　こんなＢＬシチュエーションをやってどうするんじゃ！？　男性の読者がドン引きじゃぞ！？」

「男性の方々の中にもＢＬを読む人もいるわよ？」

「ええい黙らっしゃい！　少なくとも姉上のドロドロな妄想劇にワシが耐えられんのじゃ！」

「はいはいわかったわよ。この作品を読んでいる読者の皆さん、もしこの作者にだけど書いて欲しいシチュエーションがあったらご連絡下さい。この作者の文章力に任せていいという人のみでお願いします。因みに無かった場合はこちらでやっていきます」

「ふぅ、次回もＢＬは勘弁じゃ・・・・・・」

ＩＣＰＯ支部　月下・・・

あれから数分にわたってオピュレンティアは話し続けていた。内容は所謂説教。

『――はい。お説教は終了。こっちだって好きでこんな面倒な話をやっているわけでは無いんだからね？　面目上、必要でしょ？

皆もわかってると思うけど、今回の一件でＩＣＰＯの面目は丸潰れ。
しばらくは仕事入ってこないかもね』

オピュレンティアの言ったことは本当で、ＩＣＰＯは今信頼を失っている。

『しかも、世界中で同じ様なことが、起こっちゃってるんだよね～』

ざわざわと皆が騒ぎ出す。僕も初耳だ。日本での襲撃だけでも信頼が失われるのに
世界中でこんなことが起きていたら最悪ＩＣＰＯの存続自体が危うい。

『で、その現場で目撃されているのがこの、仮面を付けている連中ね。
殺された政治家達の共通点は今のところ不明。現在調べてくれてるところ。それと、
臨時国会やるみたいだね。まあこんなことがあったんだから当然だよね』

そう言った途端画像がモニターに映し出される。場所と時間はそれぞれ違うが、内容はほぼ同じ。全ての画像に仮面を付けた組織の連中が映し出される。中にはルージュやニックスと呼ばれるヤツもいた。

『彼らの目的はまだ不明だが、今の自分たちでは太刀打ち出来ないということは、
わかっているね？』

僕も含め、皆無言で頷く。

『というわけで、この後、第〇演習所で訓練をやってもらうよ。一番きついプログラムでね』

一番きついプログラムかぁ。やるのは久しぶりかも。終わった頃には全員ヘトヘト状態だ。皆曰く、『そのプログラム終了後にタオルやら飲み物やらを用意してくれている方々は天使に見える』とか何とか・・・・・・

第〇演習場・・・

真奈　ｓｉｄｅ

『ぐあ～、づがれた～』

『これでまだ、一日目だって言うから、驚きだよなぁ』

現在例の一番きついプログラムで数時間訓練を行ったところ。それで休憩時間。
台詞から想像付くと思うけど、辛い。私も疲れた～。

『先輩は、昔こういうのを何度もやったんですか？　あ、ドリンク持って来ました。
どうぞ』

今ドリンクを持って来てくれたのは後輩の神城奏風（かみしろかなた）ちゃん。茶色の髪で短髪、メガネ属性のある女の子。可愛いんだ～この子。

「ゴメンねいつも。何でかなぁ、かなちゃんより早くドリンクの在処に辿り着けた例しが亡いんだけど・・・・・・」

『そりゃ終わった瞬間に私がダッシュで貰って来てるならですかね』

「なら私も今度からダッシュで行こうかな」

『いいんです。先輩はちょっと休憩してて下さい。私が持って来ますから』

「でもそれだとかなちゃんに悪いし、何より私が罪悪感を感じちゃうし」

『じゃあ感じちゃって下さい』

「酷いっ！」

とまあこの会話からわかるように、とても気が利く女の子なのだ。彼女は今高校1年生で現在学校に通っている。因みに言っておくと、私や紫苑が所属している月下は全世界のＩＣＰＯの支部で構成員の平均年齢が最も若いのだ。だから所属しているのは殆どが学生だったりする。年齢が同じでも私と紫苑のことを先輩と呼ぶ人もいる。私としてはそういうの苦手なんだよな～。

「というかかなちゃん。私のこともいい加減先輩って呼ぶの止めてよ～。
うりたちみたいになって呼んでよ～。あと敬語もナシ～」

『で、でも、先輩は年齢的にも経歴的にも私の先輩ですので』

「じゃあ先輩命令だよ。以後禁止、オーケー？」

『うぅ、でも・・・・・・』

「それでもダメって言うなら、揉むよ？」

『ひぃ！　それは勘弁して下さい！』

「ふふふ～、私はかなちゃんの素の喋り方知ってるんだよ～？　早く直さないと大変なことになっちゃうよ～？」

そう言って私はかなちゃんの胸を鷲づかみにする。この前知ったことなんだけど、私とかなちゃんは同じＤカップなのに私は１センチ負けてるらしい！　ちくしょ～、私の方が長く生きてるのに～！

『ひゃあ！？　ちょっ！　ダメですってばぁ！／／／』

「かなちゃんもしかしてまた大きくなった？　それともしばらく揉んでなかったから？」

『変わってないですってば！　ちゃんと測りましたもん！　あっ、そこはダメです！　そこ・・・・・弱いんですからぁ・・・・・・／／／』

私はかなちゃんの服の中に手を滑り込ませる。そこから先の私の手の行方は皆さんのご想像にお任せしますね☆　それにしても消え入るような声になってきたかなちゃん。か、可愛い・・・・・・！　学園ではまだ素に成りきれてないのかなぁ？　というか、学園の皆だとやったら怒ら

れそうだし。それが一番大きかったりするのかも。

「そことは、どこのことかなぁ～？」

『そんなの・・・・・・はぁ・・・・・・言えないよぉ・・・・・・／／／』

「おお！　敬語が直ってきたよ！　ほらほらもう少し！」

『はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・あっ！　やめて、よぉ・・・・・・凄く・・・・・・恥ずかしい、からぁ／／／』

おお！　遂に直った敬語！　でも、かなちゃんの甘い声を聞いてたら私が変な気分になっちゃったし、これは・・・・・お持ち帰り？

「ゴメンねかなちゃん。本当はこれで解放する約束だったけど、かなちゃんがあまりに可愛いから、お持ち帰りすることにしたよ！」

『ふぇぇ！？　そんなのダメだよ！　約束が違う！』

え？　前回百合の気は無いって言ってなかったかって？
ワタシソンナコトイイマシタッケ？

「いやいっそ、このままこの場で頂くというのも・・・・・・！」

『い～や～！！』

「フフフ、さぁこのまま私と大人の階段ｗ「こらっ」あいたっ」

『あ、氷花先輩』

「真奈・・・・・また何やってんの？　ここには健全な男子がいっぱいいるんだからそういうのは止めなさい」

「紫苑は私のお母さんかよ～」

「違うけどさぁ、それに、神城さんにはちゃんと彼氏がいるんだし」

『ななさん、俺の奏風に手を出さないでほしいんすけど～』

「お～お～、今日もラブラブなの～？　九條君？」

『そこまでじゃないっすよ』

今紫苑と一緒にこちらに来たのが『九條（くじょう）　靖也（せいや）』君。かなちゃんの彼氏だ。私より先に彼氏持ちになったかなちゃんを偶に憎たらしく思ったりする。

「因みに、靖也はさっきまで二人の行為を見て『百合か！？　これは百合展開
なのか！？』って大興奮してたよ」

『先輩！？　なにカミングアウトしてぐぁぁあ！』

『氷花先輩、今の話を詳しく』

おおっ、かなちゃんが華麗なコブラツイストを披露してくれたよ。

「僕が真奈が神城さんの胸を触りだした辺りで止めに行こうとしたんだけど、靖也があの光景をもう少しだけ堪能したいって泣き付いてきたから助けるのが遅くなっちゃったんだ。ゴメンね神城さん。真奈の代わりに謝るよ」

『いえ、氷花先輩は悪くないんです。悪いのはこの野郎ですから』

『奏風よ、仮にも俺は彼氏なんだから野郎呼ばわりは酷くないか？』

『ぜんっぜん酷くないと思うわ。あぁ、お二人とも、私はこの野郎をシめるので、また後でお会いしましょう』

「ん～！　まったね～！」

いや～、あの二人が偶に羨ましく思うよ。九條君がヘルプの求めているけど無視する。

「ところで紫苑」

「ん？　何？」

「ズボンのここ、穴空いてるよ？」

「げっ、ホントだ。気付かなかったよ。訓練の時かな」

「私で良かったら後で縫ってあげるよ」

「え、いいの？」

「そのくらいいいって」

「じゃあ、お願いするよ」

「うん！」

数時間後・・・

『本日の訓練は終了よ～。さぁ、汗臭い野郎共は戻って来て大浴場に行きなさい！
汚いまま歩き回らないでよ。女子達も汗臭いままじゃあ好きな人に退かれるわよ！
汗フェチとかいう人もいるけどね』

雫さんによるアナウンスが入る。言い方がまるで母親だ。

「さってと～、汗でベトベトになるのは嫌だから早く大浴場に行こ～っと」

帰り際、かなちゃんと合流しそのまま大浴場へ行った。ふ～、いい湯だった。
そういえば紫苑を見かけなかったけど、まあ平気だよね？

休憩室・・・

今私達は休憩中。皆思い思いな事をしている。ゲームをしたり、宿

題をしたり、
本を読んだり、昨日のテレビ番組のことを話している人もいる。

皆、こんな普通の生活が今では当たり前になっている。裏の世界の人間は、皆一様に
辛い人生を歩んできた者ばかり。私より酷い人生を歩んできた人も多くいる。
紫苑なんか『まだ僕は楽な方じゃないか』って言ってた。雫さんみたいにスカウト
された人もいる。でも聞いた話によると、雫さんも辛い人生を歩んだらしい。でも、
ちょっとした偶然で普通の生活に戻れただけのことだと言っていた。

つまり、こっちの世界の人間は、不幸な人生を歩んできた人達の集まり。学園の皆
みたいな幸せな人生を歩んできた人達とは光と影の様な関係、そう私は思ってる。表の世界にも、辛い人生を生きながらもこちらに来ていない人もいるだろう。
でも、これだけは言える。互いに互いを理解することは出来ない。
絶対に・・・・・・。

「なな」

「あーやどうしたの？」

あーやが何かを探すような素振りを見せつつも私に話しかけてきた。

「紫苑先輩見ませんでしたか？」

「え？　紫苑？　いないの？」

「はい。帰ったのなら入退記録をみればわかるんですけど、先輩はどうやらまだ帰っていないようなので、ここかと思い来たのですが」

「見つからない、と」

「はい」

「う～ん、あーやのことだから自室とかも見て回ったんだろうし、いっそのこと
エンブレムの反応で探しちゃう？」

エンブレム・・・・・・Sランクの人間のみ所持するとても重要な物。１０種類の色の
物がある。Sランクになると同時にオピュレンティアより授かる。
色と数字の順番は
関係していない。それぞれのエンブレムには発信器が内蔵されていて、持ち主の居場所
が常にわかるようになっている。渡す色はオピュレンティアが決めているが、その意味は今のところ誰も知らない。（以後追加や変更があるかもしれません）
西村→黄金のエンブレム　　氷花→黒のエンブレム　　宮野→赤のエンブレム
以上が、現在作中でわかる持ち主とエンブレムの種類である。

私が昇進した時に貰ったのは赤いエンブレム。赤は私の好きな色だったというのも
あって私はすぐに気に入った。形はトランプの赤いダイヤをイメージするとわかり易いと思う。外枠には金色の縁が付いている。厚さは鉛筆一本分よりちょっと薄い位だ。

紫苑のは三日月型の物だった。話を戻して、あーやがそうですねとメインサーバールームへ行こうと休憩室を出て行こうとしたその時――

ドゴォォン！！　　ヴー！　ヴー！　ヴー！

支部の内部にまで響きわたる爆発音（と思われる）が聞こえた後、けたたましい警報が聞こえた。一体何が起こったの！？

『警告、警告、侵入者あり、侵入者あり、繰り返す。侵入者あり。第〇演習場に侵入者あり』

侵入者！？　そんな、ありえない！　ＩＣＰＯの演習場に侵入者だなんて！　動物が行き来することなら日常的にあるけど、侵入者だなんて初めてのことだよ。

『第〇演習場へ直ちに部隊を編成し投入せよ。対人戦闘を想定し、各自装備を判断せよ』

せっかくお風呂入ったのにまた汗かくことになるのは嫌だけど、緊急事態みたいだし仕方ない。すぐに準備をしに行かなくちゃ！

「あーや、ゴメン！　私行ってくる！」

「はい！　私もナビゲートをしてサポートします！」

ここで私とあーやはそれぞれの持ち場に着いた。

再び、第〇演習場・・・

『各部隊に通達、アンノウン部隊が移動を開始しました。そちらにデータを送ります』

通信の後データが送られてきた。動いているのがアンノウン部隊の反応ね。でも、この動いていない反応は？

『動いていない反応にお気付きかと思います。それは黒のエンブレムの反応なんです。紫苑先輩なら追撃すると思うのですが、接触していた先輩とコンタクトの意味も
兼ねてＡ班は先輩と接触して下さい』

「通信は出来ないの？　というか、何で紫苑はあんな所にいたの？」

わざわざ接触しなくても、ＩＣＰＯの構成員なら皆持っているバッジから通信すれば
問題ないはずなのに。

『それが、先ほどからこちらからコールをしているのですが出てくれないんです。
もしかしたら妨害電波の中ということも考えられます。それと、紫苑先輩が皆さんよりずっと早くアンノウン部隊と接触していた理由ですが、単純に戻っていなかっただけ
みたいです』

エンブレムの反応ってオピュレンティアが決まった間隔で使用して

いる特殊な電波の波長を変更している為、妨害されないらしい。まったく便利なもんだよね。

「皆！　私達はC班だからアンノウン部隊の追撃に向かうよ！」

『『了解！』』

それから数分間、私達C班は追撃する為に追跡したんだけど、途中で反応が消えてこれ以上の追跡が不可能になった時、通信が入った。

『宮野さん、応答願います』

「出たよ、何？」

『エンブレムの反応の発信源に来たのですがエンブレムが見当たらないんです。
ですが、代わりに小型の機械を見付けました。恐らくこれが、エンブレムの反応を
出していた物と思われます』

「わかった。私達もそっちに一度向かうね。それから、本部と、他の班に連絡を入れておいて」

『了解しました』

通信が終わる。でも、不可解な点がある。

『ななさん、今の通信の内容が本当だとしたら』

「九條君も気付いた？」

通信の内容は同じ班のメンバー全員が聞いていた為、九條君も内容を聞いていた。
そしてどうやら皆も気付いたようね。今の通信の内容がおかしいことに。

『あの、エンブレムの反応ってオピュレンティアが決めた間隔で電波の波長を変更しているから妨害されないっていうことっすよね？
　でも、それがレーダーの反応として出ていて、しかもその波長と全く同じ波長を出しているってことは・・・・・・』

「うん。置いていったのは恐らくアンノウン部隊で、しかも、アンノウン部隊はその波長を知っている」

『これって凄くまずいことっすよね！？』

「その通りだよ」

『波長を知っているってことは、アンノウン部隊をどっかの組織の一部だと仮定して、その組織は誰かのエンブレムを持っているってことになるっすよね！？』

「でも、それは考えられない。Ｓランクの戦闘員はそう簡単には死なないだろうし、
それ以外の人たちが外に出て、生命の危険が迫った場合エンブレムが自動的に緊急救援のコールを発するからそれもない。監禁されているとしても、所持者の意志に応じて
エンブレムがこれまた緊急救援のコールを出すから考えられない。

つまりーーー」

ここまで、言えば皆も気付いたみたいね。考えられるのは最悪のパターン。

「誰かが意図的にデータを変更して、黒のエンブレムの反応に見せかけた」

『それってつまり、』

「そう、考えたくないけど、組織の内部に裏切り者がいるってことだよ」

『・・・・・・・・・・・・』

長い沈黙、でも同じ班の白鳥君が声を上げた。

『あれ？　でも、何でこんなことをしたんだ？』

「可能性の一つに過ぎないけど、私は、私達をここまで誘き出す為だと思う」

『誘き出す？　・・・・・・・ってことは！』

『月下が危ない！』

「でも、あくまでこれは仮定に過ぎない。でも、最悪の事態を想定してこれから行動
するわよ？」

『・・・・・・・・・・・・（コクリ）』

その後私達は全班合流。到着と同時に月下との連絡が途絶えたと報告を受けた。
そして、私は先ほど二人に話したことを全ての班の人達に言う。そして今は
ミーティング。あまり長くはやってられないから手短に終わらせなきゃ。

「各班のメンバーはそのままに、私達はこのまま支部、月下へと移動する。各班の数と月下の出入り口数は同じだからそれぞれ自分の班と同じアルファベットの出入り口
から侵入。侵入次第情報を調達。入手次第各班に連絡を入れること。無闇な単独行動は禁止。占拠されていた場合皆の命に関わるから。常時隠密行動を心がけること。メインサーバールームをゴールとして考えて進行して。質問は、ある？　・・・・・ない
みたいね。準備はいい？」

『・・・・・・・・・・・・（コクリ）』　『はいっ！』

「それじゃ、移動開始！」

出入り口C・・・

『まさか、ただの訓練が実戦になるなんて思わなかったっす（ボソッ）』

「私も、九條君。こっからは無言で行くわよ？」

『・・・・・・・・・・・・（コクリ）』

一班は三人。この班のメンバーは私と、九條君と白鳥君。
まずは廊下、この長い廊下には月下に寝泊まりしている人達用の部屋が設けられている。
廊下だと人の目に付きやすいから心配したんだけど、運良く誰とも遭遇しなかった。
その後、メインサーバールームの前まで来たが、誰とも会わなかった。もしかして既に立ち去った後なの？

【突入するわよ？】

【【了解】】

手のアイズで会話する。突入するけど、誰も死んでいないことを祈りたい。
そう思いつつ、私達はメインサーバールームへ突入した。

「っ！　皆！　大丈夫！？」

周囲の安全を確保しつつ叫んだ。オペレートしてくれていたあーや達はロープで縛られていた。口もテープで塞がれていた。
叫ぶのはまずいが、私はもうここには誰にもいないだろうという確証を持っていた。

「うり、何があったの！？」

「・・・・・・・・・・・・カメラを見れば、わかるよ」

「・・・・・・・・・・わかった。九條君、白鳥君。皆の拘束を解くから手伝って」

あのうりが元気がない。一体何があったの・・・・・・？

『『わかりました』』

皆の拘束を解き終わり、拘束されていた博士達を連れて来た他の班と合流して、私はカメラを起動する。そこに写っていたのはーーー

後日・・・

『さて、今は私が喋っているのは、日本全ての支部と、日本近隣国全ての支部に聞こえているはずだ』

昨日見たあの映像が何度も何度も頭にフラッシュバックする。

『今回何が起こったかは、コレを聞いている皆なら、知っているはずだ。コレは非常にまずい自体だ。過去に一度、似たようなことがあった。でも、今回とは、また訳が違う。前置きはこのくらいにしておこう。これより緊急任務を言い渡す。この任務は今行っているあらゆる任務より優先するものとする』

そして、今この場にいない彼に、問いかける・・・・・・・・・・・・・・・

『Sランク、在籍国は日本。月下所属、コードネーム氷花紫苑。本

名、蒼月銀を、処刑せよ』

そんな・・・・・嘘、だよね・・・・・・・銀・・・・・・・！

昨日、あの映像を見た後、私は泣いた。信じたくはなかった。でも、そこに映っていたのは紛れもなく紫苑の、銀の姿だった。

『作戦開始は明日から。その頃には、近隣諸国にいる構成員達も到着している頃だろう』

そこからの話は頭に入ってこなかった・・・・・・・・・・・・・・

後日・・・

木下家・・・

知らず知らずの内にここに足を運んでしまった。付け焼き刃かもしれないけど、二人にを心配させるわけにはいかないから・・・・・・

「はーい、あ、光。どうしたんじゃ？」

「あの、さ。これから私、行かなくちゃいけないんだけどね、あと、本当は本人が言うべきなんだけど、かなり急いでたみたいだから、私が代わりに伝えるね」

「本人とは誰じゃ？」

「え？　あぁっ、銀からね。銀」

「銀？」

「うん。えっと、私もだけど、仕事で忙しくなるから暫く戻って来られないかもしれないの」

でも、まだ、悲劇は始まったばかりだった・・・・・・

「ちゃんと連絡とかが出来るかどうかわからないけど、ちゃんと生きて戻ってくるからね？　あとーーー」

「その、光。話を遮るようで悪いんじゃが」

「ううん、全然いいの！　それで、えっと、何？」

「先ほどからお主が言っておる、銀というのは、誰の事じゃ？」

第四十一問　アンノウン（後書き）

今回は真奈です。

失ったもの、それは記憶　それは、どんな人間にとっても・・・・・無くしてはならない大切なもの　消えたもの、それは思い出　自分が築きあげてきた、自分を証明する、存在の証・・・・・・

次回　バカと銀色と召喚獣　『ｂｒｏｋｅｎ　ｍｅｍｏｒｙ』

何だか久しぶりのように思えるよ。キミもそう思わないかい・・・・・真奈

え～、シチュエーション妄想局のリクエストは本当に募集しています。

第四十二問　ｂｒｏｋｅｎ　ｍｅｍｏｒｙ（前書き）

シチュエーション妄想局にリクエストしてくださってありがとうございます。
一二回では妄想しきれないので、番外編ということで、いずれまとめてやらせていただきます。

第四十二問　broken memory

『坂本夫婦のマル秘、恋愛テクニック講座』

「・・・・・原作では一回だけで終わっちゃったから」

「こんのバカ作者ぁ！　何で二回目をやろうなどと思った!?」

「・・・・・作者によると原作のコーナーが一回しかやってないのにオリジナルのコーナーが二回目をやるのはどうなんだろうって」

「ここは二次小説の世界だろ！　そんなの関係ないし咎める人間はいないだろうが！」

「・・・・・さて、前回に引き続き皆さんに恋愛の秘訣を教えていこうと思う」

「だからお前は俺の話を聞け」

「・・・・・因みに、蒼月と光がやっているラジオに来る恋愛関係の相談はこっちでやっていくことになると思う」

「それはそれは、ハガキを出してくれた人がその相談にのってもらえないとは可哀想に」

「・・・・・ではハガキの紹介」

「（早く終われ）」

「・・・・・『仲良し夫婦のお二人に相談があります』」

「このハガキの差出人とコレ以降の差出人達よ、俺は今イエス・キリストと同じ状態にされている。それなのにこいつと本当に夫婦と呼べる関係なのかをよく考えてみてくれないだろうか」

「・・・・・『ボクには今好きな人がいます。でもその人はボクのことをライバルかそれ以下としか見てくれません。なので、その人ともっと仲良くなりたいのですがどうすればいいでしょうか?』」

「俺は恋愛とかには詳しく無いから協力出来ないぞ?」

「・・・・・でも雄二は作戦とかを考えるのが得意だから期待してる」

「期待されてもなぁ」

「・・・・・ハガキへの返答ですが、私はとにかく、その人と関わることが大事だと思う」

「関わるって、どんな風にだ?」

「・・・・・学校でだったら会話をしたり、一緒に食事をしたり、勉強をするとか。校外でだったら一緒に出掛けてみたり。二人きりが恥ずかしかったら友人と一緒でもいい。皆で~をするっていうのを口実にその人と一緒にいられるし、

話せるし。そしてさり気なく誘ってみる。そしたら意外と簡単にOKくれるかもしれない。同じ様な趣味があればそれについて話すとその人もくいついてくると思う」

「い、意外だ・・・・・・。翔子が恋愛に関してまともなことを言っている・・・・・・！」

「・・・・・こんな私の意見で参考になるとは思えないけど、私はいつも差出人の恋を応援してる。以上、『シュークリーム』さんからのおハガキでした」

「ん？　シュークリーム？　それにボク口調って、まさか差出人ってくdぎにゃぁああ！　目が、目がぁぁああ！！　いきなり何しやがる翔子！」

「・・・・・このコーナーは差出人の恋愛事情を守秘しています。そしてウチの夫が誰かと感づいた場合」

「感づいたらどうなるんだ！？　あと俺は夫ではない！」

「・・・・・忘れるまで、拷問をする」

「な、何だと！？　冗談じゃねぇ！　そんなのされてたまるか！　ってダメだ！　この状態では逃げられない！　くそっ！　来るな！　止めろ翔子ぉぉ×ｋｈ▲ぁ□！」

「・・・・・愛子、頑張って」

真奈　ｓｉｄｅ

木下家・・・

「えっ・・・・・・秀吉君、今、何て言ったの？」

「じゃから、銀とは誰じゃ、と」

「何、言ってるの・・・・・？　銀だよ？　秀吉君と、優子の幼なじみで、優子のことが好きで、秀吉君のことを実の弟のように「ひ、光？　ちょっと待ってほしいのじゃ」」

「ワシらに幼なじみなどはおらんぞ？」

「そんな・・・・・・嘘、でしょ・・・・・・」

「嘘ではないんじゃがのう」

「・・・・・・・・・・・そう、ごめん、ね。時間取らせちゃって」

「別に構わんのじゃが、光、何かあったのか？」

「大丈夫、何も・・・・・・ないよ」

「とてもそうは思えんのじゃが。ワシで良ければ相談に乗るぞい？」

「ありがとう・・・・・・でも、大丈夫だから・・・・・・またね」

「う、うむ・・・・・・・」

そうだ・・・・・裏切り者と見なされた人の記憶とデータは全世界と人々から消されるんだっけ・・・・・・。だから秀吉君は銀のこと覚えていないんだ・・・・・・

月下・・・

『・・・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・』

どこもかしこも会話が無い。沈黙が支配してる・・・・・・

『皆、おはよう』

無情にも、作戦開始前最後のミーティングの時間が訪れる。

『沈んでいるところ悪いけど、これも仕事だから。やってもらうよ？』

今、彼らの中にオピュレンティアの言葉に耳を傾けている人間はいないと思うよ。

『作戦内容は昨日話した通り。変わったことと言えば、軍隊に応援

要請を出したことかな』

軍隊に？　何故そんな表の人間にも感づかれるかもしれないことをするのだろう？

「質問いいですかねぇ？」

博士？

『何だい博士？』

「どうしてわざわざ軍隊に応援要請なんか出したのか疑問なんだけどさぁ」

『答えよう。なに、大した理由ではない。頭数が多いことにこしたことはないだろう？』

「どこの国所属のですかぁ？」

『米軍だ』

「どうも～、因みにぃ、軍隊に対して誰に指示出させたんです？」

『誰に、というか、アメリカの国防総省に指示を出させた』

「出撃したのは陸・海軍ですかねぇ？」

『あぁ。隠密行動は厳守と言わせておいた』

「わかりましたぁ～。質問は以上で～す」

『他に、質問がある者は？　いないな？　ならば早速キミたちにも出撃してもらおう』

通信は終了。だがここで、声をあげる人達がいた。

『俺、やだよ・・・・・・先輩と戦いたくないよ・・・・・・』

『私も・・・・・・あんなに、優しくしてくれたのに』

『僕、先輩が裏切ったなんて信じられないよ・・・・・・！』

銀・・・・・皆、あなたのことを信じてるんだよ？　あなたがその信頼に応えなくてどうするのよ・・・・・・！

「ほら皆、ボーッとしてないで、動いた動いた！」

博士が突然声をあげた。だがーーー

『博士っ！　何であなたはそんなにも落ち着いていられるんですか！』

『ちょっと靖也っ！』

九條君が怒鳴った。一応かなちゃんが制止させているけど、でも私も気になる。何で

博士はそんなにも落ち着いているのか。

「あ～、ゴメンゴメン。言葉が足らなかったねぇ。もう一回言い直そうかな。ほら皆、ボーッといてないで、一銀君とコンタクト取る為に、動いた動いた！」

「えっ、博士？　命令出てますけど良いんですか？」

マリアさんのご指摘はごもっともなんだけどね・・・・・・。でもこの後博士は皆が
驚く様なことをサラッと言ってのけた。

「あのねぇマリアくん。いくら僕だって命令無視をする時くらいあるよ？
友人を助けたいからね」

『『『・・・・・・・・・・・・え？』』』

「んぅ？　何で皆ハトが豆鉄砲を食ったような顔をしてるの？」

「いや、だって、博士は研究キチだから・・・・・・」

「酷いなぁ皆。僕だってねぇ、上司に不満を持つことあるんだよぉ？　今回の任務、
微塵も納得してないしね。それに、大事な友人を殺すのを手伝うなんて御免だからね」

『『『（友人という言葉を使うとは意外だ・・・・・・）』』』

不本意だがこの時、皆の心が一つになった。

「だいたい、あの銀君だよぉ？　僕たちを裏切るなんてこと、無い

と思うし。だから、まず会う。そして話す。その為にも、皆動いて欲しいんだけど？」

暫しの沈黙・・・・・・そしてーーー

『そうだよな・・・・・・俺たちが先輩を信じなくてどうするんだ！』

『まずは信じなくちゃ！』

『よし！　やるぞ皆！』

『『『おー！！』』』

皆が自分の今なすべき事をやろうとしている。それは、銀を信じて、行動すること。

「あ、皆もそれ見てたんだ」

私にも出来ることがあると思い、まずはもう一度監視カメラの映像を確かめようと
したら、もも・しほりん・あーやの三人が監視カメラの映像を再生していた。
映っているのは仮面を付けた人達に指示を出し、皆を拘束する銀の姿。

「あたし、信じたくないからさ・・・・・・このカメラに紫苑、ううん、銀って呼んだ方がいいのかな？　このカメラに写っている銀が、本物とは思えなくてさ」

「だから、ここに映っている銀先輩が本物かどうかを確かめてるんだよ」

「あの人には、いなくなってほしくないですから」

「皆・・・・・・！」

「あたし、まだ銀に助けてもらった時の借りを返してないからさ」

「同じく！」

「私は、まぁ、色々と・・・・・・」

「ありがとう！」

うりもしほりんもあーやも、銀のことをこんなにまで・・・・・・！　自分達が拘束されたとしても、銀のことをコレっぽっちも疑ってない！　それが私には、溜まらなく嬉しかった・・・・・・！

「ほらっ！　ななも一緒に探そうよ！」

「うん！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

？・・・

ここは、日本のどこにあるのかもわからない森・・・・・・。自殺の名所と呼ばれていたこともある。そこへ、多くの人間の足音が響き渡る。長年、人が立ち入らなかった為、人の血に飢えているのだろうか。夜の森からは異様な気配が漂ってきている。
はたまた、何か別の理由かもしれないーーー

「いいか、各部隊散開しろ。目標を確認したら各部隊に連絡後、速やかに捕縛もしくは射殺せよ」

一人の男が通信を切る。風格、威厳共に部隊の隊長だと思わされる。

「しかし、また何とも不気味な場所に来させられたものだな」

「中佐、ここ、日本では自殺の名所らしいですよ？」

中佐の漏らした言葉に一人の部下が反応する。

「勘弁してくれ。死体の運搬なんてしたくないぞ」

「でも、射殺しても捕縛しても運搬はしますけどね」

「生きているのと死んでいるのとでは全然違うさ。送り出した部下の中にも、不気味な森だと言っていたヤツもいたしな。早いとこ出て行きたい。呪われてしまいそうだ」

「自分も同感です」

「お前は、今回の目標、何だと聞いている？」

「自分には、詳しい情報は聞かされていません。強いて言うなら髪の色が銀色で、性別は男、くらいです。そういえば隊員の中では色々な噂が飛び交ってますよ？」

「どんなだ？」

「【もの凄いウデの犯罪者で軍隊程度なら無傷で圧勝する】とか【数百人を殺した】やら【国が秘密裏に行っている実験から逃げた実験体】等々、さらには【実はまだ１８にも満たない子ども】っていう噂もあります」

「やれやれ、私の部下達は相当噂話が好きらしいな」

「中佐は何か知っているんですか？」

「いや、私にも詳しいことは聞かされていない。お前が先ほど述べたのと同じだ。あと、忠告された程度だな」

「忠告、ですか？」

「あぁ、『一人だからといって油断していると、死ぬぞ？』とな」

「・・・・・・・・・・・・（ゴクッ）」

思わず唾を飲んでしまう隊員。それほどまでに自分の上官の顔が険しかったのだ。

「言われなくとも、始めから油断するつもりなどはない。どんなに相手が微弱でも、全力でやる。そうやって生きてきたからな」

（噂でも、出ているのか。それならば、私が小隊を指揮するよう命じられた理由にも
納得出来る。しかし、相手は本当に子どもなのか？　もし子どもならば、何故国に追われるような自体になっているのだ？）

（気配が増えたな。この人数・・・・・・３０、いや、５０はいるな・・・・・・。
一個小隊ってところか・・・・・・。こいつら軍人の割には気配を消すのが上手い。
でもーーー）

「こんばんは、そんな物騒な物を抱えて狩でもしているんですか？」

『何っ！？』

『いつの間に！』

（でも、軍隊程度では歯が立たないことを教えてあげようかな）

タタタンッ！　タタッ　タタッ

その銃声と共に戦闘が始まった。
だが、それは一方的な展開になっていった。

「遅いよ」

腕をムチのように振るい、次々と軍人を沈めていく。そもそも接近

されたこの状態では最新式のアサルトライフルといえども同士討ちの危険性がある為あまり撃つことが出来ないのだ。ナイフに切り替えようとする者もいるが、その前に沈められる。

（武器に頼りすぎるのはどうなんだろ？　ん？　別方向から気配・・・・・）

「っと」

合流した別部隊が仲間を援護する為に射撃を開始する。だが、最上限の動きで銃弾を全て避けていく。

『（弾が当たらない！？　しかも、木という障害物を利用せずに、まるで弾が見えているかのように！）』

弾をヒラリヒラリと避けていくその姿に彼が子どもということを認識する余裕など彼らには無かった。そんなことを考えているとすぐさま自分達が殺られる。そう認識させられていたのだ。

（あんまり撃たせると木が傷つくな・・・・・。それに、他の部隊がこっちにやって来る。そうなると面倒だ）

少年は急に加速する。いきなり目の前に来て、一人が強烈な腕による一撃で沈む。その勢いを利用し、唯一あまり動揺していなかった軍人に突進し体当たりする、だが直前で足で踏み込み、体当たりし

たので、本人は体勢を崩さず、体当たりされた軍人は吹き
飛び木に直撃する。すぐに少年は方向転換し残っている三人に攻撃
を仕掛ける。

「しっしっ」

三人共武器をライフルからナイフに変更していた。だが、敵うはず
は無い。相手が
悪過ぎたのだ。
化勁（コロの原理で敵の攻撃を受け流す技）でナイフの攻撃を全て
受け流している。
左腕で防御の役割を果たしていた片腕を上方へ弾き、右足で踏み込
み肘打ちを鳩尾に
入れる。当然手加減はしている。

（残り二人・・・・・・）

残った二人の丁度間に移動し、両腕で手首を狙って手刀を放ち、そ
の勢いを利用し、
空中で二人の顔面に回し蹴りを入れる。だが彼らも伊達に軍人はや
っていない。顔面に一発蹴りを入れたくらいでは沈まない。自分か
ら見て右の軍人に接近。先ほどの蹴りで対応が遅れ、ストレートな
突きしか出来ず、あっさりと懐に入られる。そこから顔面に手刀、
半回転して肘打ち、そのまま足払い、倒れた軍人の背中に盤打を流
れるような
動きで行う。
次は気絶していないもう一人の方へ向かう。軍人のナイフ裁きは一
般人
から見れば凄いものなのだが少年は一般人の比ではない動体視力で
ナイフの動きなど遅く見えるのだ。軍人が突きを放った瞬間、右腕

で受け流し、左足を地面に滑らせる
様に移動、そのまま半回転し、左腕で首に手刀、体勢を崩した軍人に対し、もう一度
半回転し、二発目の手刀を浴びせる。手加減をしているとはいえ首を攻撃されたので
軍人も沈む。

「さて・・・・・よっと」

足下に落ちているナイフを蹴り上げる。宙を舞っているナイフを地震の後方へ蹴る。
そのナイフが刺さった位置は先ほど体当たりで吹き飛ばした軍人の顔のすぐ横。
当たってはいるが擦っている程度。だが当てされた本人は動けない。まともに見て
いないのにナイフを蹴り、それを反撃しようとしていた自分の顔に擦らせたのだから。下手な行動をすると殺される。そんな恐怖が彼を支配していた。でも、ナイフを蹴った本人は何事も無かったかの様な優しそうな笑顔で男に言った。

「このナイフ、すいませんが貰いますね」

「中佐、全部隊からの連絡が途絶えました」

「なるほど、確かにこのままでは殺られるな」

「そんなことを言っている場合ですか！？」

「いや、正確には、」

カチャッ

中佐と呼ばれる男の後頭部に押し付けられる固い感触。

「もう手遅れだ」

「・・・・・っ！」

「下手なことはしない方がいい」

（この声、本当に子どもなのか！？　信じられない、私の部隊を全滅させたこと以上に何故このような少年がこれほどの技術をもっているのか）

「キミ、一つ教えてくれないかね？」

「いいですよ。僕に答えられることだったら何でも」

「キミはいったい、何物なんだ？」

「僕ですか？　う～んそうですね、強いて言うなら、嘘つき、ですかね？」

パァンッ！

真奈　ｓｉｄｅ

三日後・・・

月下・・・

あれから三日、私達は未だ銀と接触出来ていない。アメリカの国防総省の通信を全てハッキングでこちらにも聞こえるようにする。博士が質問してくれたおかげでどことオピュレンティアが繋がっているのかすぐにわかった。ＩＣＰＯ内での情報と国防総省の情報から銀の大凡の位置は割り出せるが流石に銀が相手だからそう簡単に接触出来ない。というよりもーーー

「雫さん、何か、おかしくないですか？」

「ななちゃんも気付いた？　私も変だと思うわ」

「やれやれ、どうやらオピュレンティアは僕たちに協力しろ～とか言ってるケドさぁ、僕たちにまわってくるのは事務的な内容ばかり。まぁ簡単に言うとだよ、僕たちと銀君を接触させないようにしてるよね」

そうなのだ。月下にまわってくるのは出撃の命令じゃない。どれもこれも情報整理などの事務的な内容ばかり。三日目になっても出撃命令が出ていない。何よりＳランクの人間である真奈が部隊に組み込まれていないことがそもそもおかしいのだ。

「これじゃぁ、いつになっても銀に会えない・・・・・・」

「ななちゃん・・・・・・」

「ふぅ。じゃあ、僕の出番かな」

「えっ、博士？」

「この状況は明らかにおかしい。だから、これから僕はオピュレンティアに謁見を求める」

「そんなのっ！『残念だが、それをさせる訳にはいかない』っ！？」

『な、何だ！？』

『どうして俺たちが！？』

突然人が傾れ込んできた。銃などを持っている。でも、着ている制服は私達と同じＩＣＰＯの制服。しかも先頭に立っているのはーーー！

「オピュレンティアの命により、お前たちをここから出すわけにはいかない」

「西村！」

あいつ・・・・・！　仲間を信じることも出来ないの！？

「ふざけないで！　あなた達にこんなことをする権利は無いでしょう！？」

「口は慎め宮野。オピュレンティアは我々に直々に命令を下した。『月下の構成員を拘束』しろとな」

「なっ！」

「あの方は全てお見通しだ。お前たちが命令に従わず、行動することを読んでいた。お前たちは国防総省の通信を全てハッキングしていることも、今日辺りに独自に動きだすこともな」

「当たり前でしょ！？　親友の・・・・・・大切な人が、誤解で殺されそうになってるのよ！？」

「誤解？」

「ええそうよ、どうせあなたに言ってもわからないんでしょうけどね。だから私達はそれだけを希望にこの納得のいかない命令に従って行動してきた！　微塵も仲間を信頼しようともしない癖に、人を裏切り者呼ばわり？　笑わせんじゃないわよ！」

「仲間？　それは違うな宮野。俺たちはあくまで同じ組織に所属している人間なだけだ。仲間などという関係ではない」

「それって強がり？」

「言ってくれるな・・・・・・！」

西村が私に銃を向ける。私も構える。でも、博士が手で私を制した。

「真奈君、もういいよ。西村宗一、そこを退いてくれるかなぁ？」

「そうはいかない。これはオピュレンティア直々の命令だ。いざという時は力ずくでも構わないとのことだ」

「僕はオピュレンティアに言っているんじゃないんだよ。キミに言ってるんだ。そこを退け」

博士の口調が変わった・・・・・・

「オピュレンティアの意志が俺の意志だ」

「はっ、あんな独裁者様の意志が自分の意志だって？　笑わせるねぇ」

「何だと？」

「確かに僕たちはあの方に忠誠を誓った身だよ。でもね、例え主といえども、これ以上主の勝手気ままを見過ごすわけにはいかない」

「気ままとは、聞き捨てならんぞ」

『『『・・・・・・・・・・』』』

『行けよっ！　宮野！』

『『『っ！！？』』』

「先輩！？」

静寂を破ったのはアレン先輩。どうしてここに！？

「説明は後だ！　今すぐ銀の所に行け！　手遅れになるぞ！　ヘリをまわしてある！」

「はい！」

「ナンバースリー！　貴様ぁ！　行かせるな！」

『『『はっ！』』』

西村の部下達が私の前に立ちはだかる。

『邪魔なのはてめぇらの方だ！』

『ぐはっ！』

「九條君！？」

九條君が西村の部下の一人を殴り飛ばした。でも、そんなことしたら！

『ななさん、行ってください！』

『ここは私達が！』

『銀先輩を頼みます！』

「かなちゃん！　白鳥君まで・・・・・！　ありがとう！」

私は皆が作ってくれた道を進み、そのまま出口へ。

「真奈君、コレを持って行くんだ」

博士が私に何か投げ渡してきた。これって、そうか、出来たんだ。

「はい！」

「宮野、こんな事になってるんだろうと思ったからお前が使う装備は用意してある。
愛用の物じゃなくて申し訳ないがな」

「大丈夫です。先輩」

「そこを退けナンバースリー！」

「悪いな西村！　俺は月下の連中と同意見でね。お前の邪魔をさせてもらうぜ？」

「いいだろう。白黒ハッキリ付けてやる！」

「先輩、大丈夫ですか？」

「心配すんな。俺はまだお前に心配される程弱くねぇよ」

「じゃ、後ろは任せますね」

「おう！」

私は月下を出て、近くに待機させられていたヘリに乗り込む。
待っててよ、銀。今すぐそっちに行ってやるんだから！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

数時間後・・・

？・・・

「・・・・・・３・２・１、今だっ」

タイミングを合わせ、一人の少年は飛ぶ。

ダムッ

「ふぅ、着地成功～ってところかな？」

着地したのは走行中の貨物列車の上。今少年はこの上に飛び移る為にタイミングを計っていたのだ。

「少し、休めるかな・・・・・・いや、やっぱり無理か・・・・・・」

少年の銀色の髪が風に靡いている。だが、それが一層強くなる。聞こえてくるのは
ローターの音。
そこから、一人の少女が飛び乗って来る。その少女の深紅の髪も、

風で美しく靡いている。

「銀・・・・・・」

「何だか久しぶりのように思えるよ。キミもそう思わないかい・・・・・真奈」

「何で？　何であんなことしたの？」

「何でって言われてもなぁ」

「じゃあ、質問を変えるわ。二つ質問」

「どうぞ？」

「一つ目。あなたが、私や優子に言った言葉は、嘘？　それとも本当？」

「・・・・・・フフッ、フハハッ、フハハハ！　全部嘘だよ！　まぬけ！」

「そう・・・・・じゃあ、優子に言った『好きだ』って言葉も、私に言ってくれた『パートナー』っていう言葉も、全部嘘なの？」

「あぁ、コロっと騙されてくれて、ホント大助かりだよ。それにしても、ククッ・・・・・！　面白いくらい簡単に・・・・・！　ハハッ！」

「・・・・・そっか、わかったよ。もういい。それじゃ、もう一つの質問」

少女が笑っている少年に銃を向ける。

「そんなに力が欲しいの？」

少女の声のトーンが一オクターブ下がった。

「あぁ、欲しいね。誰しも求めるものだろ？　その為に、僕はＩＣＰＯに入隊したんだ！」

「なら、あなたは、ここにいちゃいけない！」

「ならば消してみろっ！　キミの手で、この僕を！」

二人が互いに銃を向ける。そしてーーー

バァンッ！　バチュン！

エンブレムを持つ物同士の戦いが始まった。

第四十二問　ｂｒｏｋｅｎ　ｍｅｍｏｒｙ（後書き）

今回は真奈です。

飛び散る火花・交わる拳、私が見たいのは、そんなものじゃない。
私が見たいのは、あなたの本当の顔・・・・・・

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『黒の片鱗』

私は見付けたんだ！　一筋の希望を！

第四十三問　黒の片鱗（前書き）

半月も更新できずにすみませんでした。

第四十三問　黒の片鱗

「・・・・・・・・・・・・・・土屋と」

「工藤の」

「「性活小噺っ！」」

「はい。二回目が始まりました性活小噺のコーナー。担当するのは」

「・・・・・・・・・・・・・・土屋康太と」

「ＯＶＡがあったのに台詞が一言も無く、一瞬映っている程度の出演者、工藤愛子で
お送りいたしま～す」

「（やばい、気まずい・・・・・・）」

「さて、ムッツリーニ君、今回のお題は『同程度の露出なのに水着は良くて下着はダメ』についてだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・っっ！！（ドバッ）」

「あぁ、うん、まぁこの時点で鼻血を噴出するってことはわかってたけどね」

「・・・・・・・・・・・・・・ほっとけ（そういえばさっき俺のことムッツリーニと）」

「このお題についてだけど、ムッツリーニ君はどう思う？」

「・・・・・・・・・・・・・愛子、それより先に聞きたいことがある（また・・・・・・・）」

「何だいムッツリーニ君？」

「・・・・・・・・・・・・・俺の呼び方についてだが」

「それがどうしたんだい？　何だかんだ言って人気があってＯＶＡではキッチリ出番が確保されているムッツリーニ君」

「・・・・・・・・・・・・・何でも、無いです・・・・・・（ダメだ、切り出せない）」

「だよね～。ムッツリーニ君はムッツリさんだもんね～」

「・・・・・・・・・・・・・イラついている、よな？（攻め方を変えてみるか）」

「ん～？　そんなことないケド？」

「・・・・・・・・・・・・・そんなことある。お前はイライラしていると額を弄る癖がある」

「えっ！？　ウソっ！？　あっ（ハメられた）」

「・・・・・・・・・・・・・やっぱりイラついてた」

「・・・・・・別に良いじゃん」

「・・・・・・・・・・・・良くない。お前がイライラしていると
こっちも不快な気分になる」

「・・・・・・ごめんなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・ふぅ、憂さ晴らし程度ならば付き合う
が？」

「えっ、ボクなんかの憂さ晴らしに付き合ってくれるの？」

「・・・・・・・・・・・・・同じコーナーを担当する俺の役目だ」

「そっか・・・・・・・うん、ありがと（今はそんな見方だけれど、
いつか・・・・・・・）」

「・・・・・・・・・・・・・気にしなくていい」

「んじゃ、早速行こっか！」

「・・・・・・・・・・・・お、おい！　あまり引っ張るな」

「アレ？　そういえば今回お題についてノータッチだったよ・・・・
・・？」

「・・・・・・・・・・・・・細かいことは気にしたら負けだ」

真奈　ｓｉｄｅ

列車の上・・・

バァンッ！　バチュン！

互いが放った銃弾は空中でぶつかり、二発とも弾ける。
それを合図に、銀が動き出す。
急速に接近してくる銀。私はハンドガンで牽制するも、いとも簡単に接近戦に
持ち込まれる。体勢を低くし低空へ蹴りを放つ。だが銀は軽く飛んで蹴りをかわし、
頭部に突きを入れようとしてくるが掴んで防ぐ。私の後ろに着地した銀は手刀を繰り出してきた。私はそれを足で受け止める。銀はその足を払いのけて私の側面へ移動し、
後頭部に手刀を繰り出す。伏せることで手刀を回避した私は足払いをする。足払いで
完全に体勢を崩した銀にもう片方の足で蹴りを入れる。ここで一旦距離を取ってくる

「ちっ」

「何か、動き鈍ったんじゃない？」

「・・・・・五月蠅いよ」

そりゃそうだよね。恐らく銀はここ三日間殆ど飲まず食わずのはず。

追跡が厳しい
から食事をしている余裕なんて無いはず。あと睡眠も出来ていないと思う。そんなことをしていたら狙撃されてあの世行きになっちゃうから。
簡単に言うと銀は一次的欲求を満足に満たせていないってこと。ある程度は訓練されているとはいえ相手が世界となるとSランクの私達でも長くは持たない。つまりここで
銀を確保しなくちゃ確実に銀は組織に殺される。守ってあげられる私達がいない状況で捕縛させるわけにはいかない。銀が肉体的＋精神的に弱ってきている今がチャンスなんだけど、説得という手が仕えないのはいたい。原因は二つ。
一つ目が銀の意志による問題。多分銀のことだから私達に迷惑をかけず、自分だけが
犠牲になろうと考えているんだろうね。でもこれは力ずくで何とかなる。
問題は二つ目。確実に今私と銀の戦闘は監視されている。だから、説得を始めた場合
私諸共始末されるかも。それに、月下の皆にもそれなりの処分が下される。
でも、だからこそ、銀はあんなことを言ったのかもしれない。

「はっ」

今度は私から動く。空中で身を捻り、回転して遠心力をプラスした蹴りを放つ。
バックステップを取り回避をする銀。やっぱり・・・・・・いつもより反応速度が
下がってる。日頃銀の動きを見てるからわかる。
回避した銀に着地後すぐに裏拳、ガードをするが反撃できていない。
このままたたみかける！　私が押している形になっていく・・・・・

・ここで！

「っ！」

「こっちおいで！」

右腕に装備しているフックワイヤーを放ち、銀に巻き付ける。そのまま引き寄せ、回し蹴りをお見舞いする。ワイヤーに巻かれていたということもあり、キレイに回転し、
銀は貨物コンテナの上に突っ伏すことになる。

私は、銀が先ほど言った言葉は全部ウソだと読んでいる。さっきも言ったけど、私達の
戦闘の様子は監視されている。多分会話も拾われていると思う。だから銀はＩＣＰＯに対する明確な悪意を表明すると共に、私達に怒りを覚えさせようとしたんだ。
そうすれば、銀のことを殺す覚悟も出来るし、例え銀を殺してしまっても、後悔など
せず、ましてや悲しんだりしなくてすむから・・・・・。だから私も銀のウソを利用して咄嗟にあんなことを言ってみたけど、銀は気付いたかな？　遠回しにウソに乗ったっていう合図のつもりだったんだけど。
それを確認できるチャンスが一度だけある。この貨物列車の進路には一つだけトンネルがあって、その中でだったら監視の目は外れる。
もし別に乗り込んだ人がいるとしても、
トンネル内部だったら音が反響して会話は相当近くに寄らなければ聞こえないし。
近くに来られれば私か銀が気が付くし。

そして私は見付けた、一筋の希望を・・・・・それは、監視カメ

ラに写っていた映像。訓練の時、私と銀はある約束をした。

『ズボンのここ、穴空いてるよ？』

『げっ、ホントだ。気付かなかったよ。訓練の時かな』

『私で良かったら後で縫ってあげるよ』

『え、いいの？』

『そのくらいいいって』

『じゃあ、お願いするよ』

『うん！』

というものだ。そう、この時約束したはずなのに監視カメラに写っていた銀のズボンには穴が空いていなかった。ズボンを履き替える時間なんて無かったはずだからつまり
アレは銀じゃない！　だから私は、今銀を連れ戻す為に戦う。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「銀・・・・・・？」

「クックッ・・・・・！　アッハハハハハ！！！　やっぱりだ！
やっぱりキミは厄介な存在だ」

「っ・・・・・・！」

「キミという存在は、あってはならない！」

「何を根拠に！」

「わからないのか？　自分という存在の価値に」

「私の価値？」

「そうさ！　容姿端麗・学業優秀・運動能力はオリンピックを総ナメ・人脈も厚く・
家庭的・そして裏世界では正義の味方ときた！　これだけ素晴らしい人生を送れて
いるのにもかかわらず、幸せではないとは言うまい？」

「あなたが戻って来てくれるのなら、言わないかもね」

アレ？　コレって本音？　それともウソ？　ウソだとしたら私とんでもなくダメ人間みたいな解釈になっちゃうんだけど!?

「フフッ。知れば誰もが望む。キミの様でいたいと、キミの様でありたいと！」

「私を望む？」

「さっきも言っただろう？　自覚がないのかよ。キミが望めば、誰もが手を差し伸べてくれるのに・・・・・・」

「えっ・・・・・・」

今のって・・・・・・

「憎いよ、キミが、キミのことが・・・・・・果てしなくね」

「っ！」

ここにきて銀が強烈な気当たりを放ってきた。
ウソ・・・・・・銀の気当たりってこんなに強かったの！？

「むん！」

銀の盤打により私がいた部分の鉄のコンテナが大きく凹む。隙が出来ていない今の状況では当たりにくいはずなのにどうして？　それに、それだと私からの反撃も普通に行うことも出来るのに・・・・・・

私は空中を走るように連続で蹴りを繰り出す。銀は全て防御する。私が着地する頃にはお互いの距離はほぼゼロ距離の至近距離。この距離だと銀お得意の劈掛拳はあまり仕えないはず。まあでもそうなると私お得意の足技が仕えなくなるんだけどね。
私も銀も至近距離での手業での勝負となる。突きを繰り出してはかわし、腕を掴んでは振り解き、その様な動作をお互い何通りと繰り返す。でもーーー

「っ！　ちぃ」

「・・・・・・」

手業で私が勝った。おかしい。今まで銀に手業で勝った事なんて殆ど無いのに。
それに銀は近接戦闘用の八極拳も教わっているはずなのに。なんで私が勝つ？

そんなことの答えなんて、あまりにも簡単過ぎる・・・・・・！

「フフ・・・・・・！　わかっただろ？　もうキミは、あらゆる面で僕を超えているよ。もう、僕がいなくとも、キミらに何ら不安は残らない」

「何言ってるのよ!?　今の、手を抜いていたでしょ!?　何度かあったじゃない！　私に一撃入れるチャンスなんていくつもあったじゃない！」

「そんなことない。もしあったとしても、それは僕が見落としていただけさ」

「ふざけんな！　演技するなら、もっとそれらしくしてみなさいよ！　こんなんじゃ、私一人すら騙せないよ!?」

「・・・・・・・・・・・・」

「それに私達に不安は残らないですって!?　人一人いなくなったんだよ!?　不安にならない訳がないでしょ!?　大切な友人が、仲間がいなくなって不安にならない訳がないでしょ!?」

「忘れたのかよ!?　裏切り者は殺された後、Ｓランク以外の人間の記憶からは抹消される！　そしてもう、優子や秀吉は僕のことを覚えていないんだろ!?

だったら！　もう僕なんていなくなってもなんら問題が残るわけじゃないじゃないか！　僕の代わりなんてそれこそ五万といる！　僕みたいな大して辛い過去を抱えているわけでも無い人間がこっちの世界にいる時点で間違ってんだよ！　僕は入隊する時、守りたいか

ら戦うと決めた！　でも、もうその守る物はもう無い！　全部無くなったんだ！　だから、もう僕に戦う理由なんて無いんだよ！」

「あっ・・・・・・でも・・・・・・・！　それでも・・・・・・・！」

私の声はもう届かない。それを確信した。説得はもう無理。力ずくしか無い。そう、
力ずくしか残っていないはずなのに・・・・・・何で体に力が入らないの？　何で、、戦えないの？

「おかげで、日々抑圧されていた感情が一気に溢れてきたがね。それと同時に、頭痛に悩まされるようになったけど、今ではもう慣れた。いい眠気覚ましだ。それに、
オピュレンティアが僕に黒のエンブレムを渡した理由がわかるよ」

銀が話しをいったん切る。先ほどはあんなに激しく放っていたのに、今の銀からは、
敵意を感じない。もう、拳を交える必要が無いと判断されたのだろうか？

「光、今、僕が生きている理由は、キミなのかもしれない」

「私が、理由？」

そしてそのトンネルは目の前――――
いつも私達に向けている優しい笑顔で、銀は言った。

「だからさ、光・・・・・・必ず、幸せになれ」

「えっ・・・・・・っ！？」

銀は携帯型記憶抹消装置を取り出した。ダメだ！　間に合わない！

「やめて！！！」

「全部、忘れちゃえ」

銀が、ボタンを押した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

トンネルを抜けたと同時に銀が急接近する。銀は肘打、腹部に掌底、顎に掌底を反撃の隙を与えずに繰り出す。少女は全ての攻撃をくらう。

フィニッシュの顎への掌底で少女の体は吹き飛び、車上からはみ出す。

でも、例え車上からはみ出て落ちるところでもフックワイヤーを使えば簡単に車上へ

復帰することも可能なのだが、フックワイヤーは起動しない。理由は簡単、ナイフが

突き刺さっていたからだ。つまり少女が車上へ戻る術は無く、このまま谷間へ落ちるのみ。そもそも、少女は気絶していているから無理なのだ。

そして少女を車上から落とした少年は誰にも聞こえない位の小さな声で呟いた。

「・・・・・さよならだ・・・・・・光・・・・・・」

ニジェール　ｓｉｄｅ

全てがこちらの読み通りに事が運ばれている。恐ろしいくらい完璧に。正確に。
でも俺にはモヤモヤしたものがある。何なんだ？　このモヤモヤは？

「迷ってるの？」

「・・・・・迷う？」

隣で落ちてきた女・・・・・基、紅光を川岸で手当てしているルージュが話しかけてきた。

「バカな、俺に迷いなど無い。そんな感情は必要ない」

「ううん、あなたは迷ってる。今自分がやっている事が、本当に正しいのかどうか」

「何故そう思う？」

「顔に出てる。一応それなりに長い付き合いなんだからさ、おねーさんにはわかるわよ？」

「そうか・・・・・では、次からはバレないようにしよう」

「頑張ってね」

「で、お前はどうなんだ？」

「私？」

「あぁ、お前は迷わないのか？」

「おねーさんは迷わないよ」

「それこそ何故？」

「私は、見付けなくちゃいけないの。だから、目的が達成されるまでは、迷わない。
例え、光を傷つけることになろうとも」

「その目的は、ルージュとしてか？　それとも・・・・・・

――――――紅光の姉としてか？」

「・・・・・・勿論、光の姉としてよ」

「そう、か」

気のせいか？　今、ルージュの目に、ウソの色が見えた気がしたが・・・・・・

「ねぇ、私ってしっかりと光のお姉さんになれてると思う？」

「・・・・・俺には家族とか、姉妹とか、そういうことはわからないから、上手くは言えないが、しっかりやれていると思うぞ？一人の妹の為にここまで出来る姉はそういない」

「ありがと・・・・・・もう一ついい？」

紅光の応急処置が済んだようで、手の動きを止める。だが、目は紅光の方を向いている。その目は、姉としての目だ。色々な意味が込められているその目は、酷く寂しそうな目をしていた。

「お前が俺に相談なんて珍しいな。別に構わないが」

「悪いわね・・・・・・じゃあ、あなただったら、本物と偽物、どっちがいい？」

「・・・・・・・・・・・・」

何故だろう・・・・・・この質問を、俺は答えてはいけない気がした。

でも、今答えなければ、ルージュを、紅水鳥を傷付けてしまう、そんな気もした。

「・・・・・・ゴメン。やっぱり今の質問は「俺は」・・・・・・」

「俺は、偽物でいい」

「どうして？　本物じゃなくていいの？」

この時、ある程度の想像はついた。どういう意味合いで紅水鳥が俺にこんな質問をしたのか。

「本物なんて言葉は、俺には不釣り合いだ。俺自身、偽物だから・・・・だから、俺には偽物の方が釣り合っている」

「・・・・・・・・・・・・」

「お前は本物の方が良いと思っているんだろうが、でももう、そんなの関係ないんじゃないか？」

「えっ？」

「人の記憶を作るのは思い出だ。どれだけその人と一緒に過ごしたかで決まる。例えそれが短い期間だったとしても、お互いがお互いのことを強く思っていたならばそれは、強く、鮮烈に刻まれる。お互いの心にな。だから、例え本物だろうと偽物だろうと、一緒に過ごした記憶がある限り、それはその人にとっての本物になる。だから、

――――――お前は、紅光の、本物だ」

「・・・・・・・・・・・・あなたって、狡いわよ。普段は素っ気無いかんじに振る

舞ってるのに、こういう時は、その人が望む言葉を言ってくれる。
今のは、私の思い
違いかもしれないけど、私は、凄く嬉しかった」

「喜んでもらえたようで何よりだ」

女を泣かせてしまうのは男として最低とかヴェンが言っていたが、
嬉し涙なら、大丈夫だよな？

「・・・・・・・ぅ・・・・・・・ん」

「妹が起きるぞ？　俺は席を外しておくから、姉妹水入らずの時間
を少しでも過ごしておけ。それとーーー」

「？　あぅ」

「妹の前でみっともない顔でいるのは、やめておけ。姉としての面
子が台無しだ」

俺にとってのデフォルト装備であるハンカチで、紅水鳥の涙を拭く。

「・・・・・・色々ありがと／／／」

「気にするな。準備が出来たら来てくれ」

俺はそう言い残し、二人だけの空間を作る手助けをしてやる。

ヴェントゥス（以後、ヴェンと表記）　ｓｉｄｅ

「あっ」

「どうしたんですか？」

俺と同じく待機状態のニックスが声をかける。

「いや、立ったなって」

「何がです？」

「フッ、お前にはまだ早いものさ」

これはわかるもんにしかわかんねぇからなぁ。というか、ニックスにそういう話しは無縁かもしれねぇし。

「・・・・・セクハラじゃないみたいなのでいいですけど、何か癪ですね」

「セクハラって・・・・・俺普段からそんなことしてないぜ？てかお前どこ見て判断してんだよ」

「まぁいいです。ヴェンが電波を拾ってたと水鳥さんとニジェールに言っておきましょう」

Σ無視された！？

「やめろよ・・・・・・俺が変な誤解を受けるだろうが」

「いや、もうあなたは充分変態ですよ」

「変を通り越して変態呼ばわりしてくるとは、流石ニックスだ」

「・・・・・・気持ち悪いです」

「聞こえてんぞ～？」

ニジェール　ｓｉｄｅ

今、空は夕焼け。向こうは、どうなっただろうか？　興味がない、というとウソになる。あの状態の紅光にどう向き合ったのか？　ルージュとしてか、姉としてか。否、俺が知るべきではない。俺がしったところで、何も出来やしないのだから・・・・・・

「待たちゃったかしら？」

「もういいのか？」

「えぇ。伝えたいことは、全部伝えたしね」

目の辺りがまた赤くなっている。さてはまた泣いたな？

「あのことも言ったのか？」

「・・・・・えぇ、言った。そしたらあの子、何て言ったと思う？」

「想像はつくが、自分で言いたそうなお前が言え」

「じゃあ、言うわねーーーー」

そこから言った言葉は、俺の想像通りの言葉だった。その言葉を本当に嬉しそうに言っていた。また涙を流すことになった紅水鳥だが、不覚にも俺は一瞬、その時の姿に見蕩れてしまった。

「お前、意外と泣き虫なんだな」

「・・・・・悪かったわね／／／」

もう一度、涙を拭いてやる。

「因みに、だが、紅光は大丈夫か？」

「えぇ、もうあの子は大丈夫」

「そうか、なら、俺も安心だ。行くぞ？」

「そうね、そろそろ行かなくちゃね」

近くに着陸させてあったヘリに乗る俺たち。運転するのは俺だ。一応運転技術くらいはある。飛び立ってから紅水鳥が声をかけてきた。

「今日はありがと」

その言葉と同時に、頬にとある感触があった。それは柔らかくって、少し湿って
いて・・・・・・ってコレは！

「ちょっ！　ばっ！　お前！　な、何を！？」

「ん～？　さぁ～何でしょうね～？」

「～～～～っ／／／！」

この後、あまり運転に集中できず、途中で交代してもらったのはかなり屈辱的だった。

第四十三問　黒の片鱗（後書き）

今回は水鳥です。

満月の夜、四人の人間が拳を交える。因縁がある蒼月銀とベルム。
そして紅光と
対峙するのは、ナンバー５の男で、最もオピュレンティアに忠実な番犬。その番犬に下された命令はーーー

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『ブルームーンの遺産』

お前に教えてやるよ、俺が知る限り、最悪の計画を

第四十四問　ブルームーンの遺産

「蒼月と」

「紅の」

「「ゆ～るゆるラジオ！」」

「さて、早くも二回目が始まりましたゆ～るゆるラジオ」

「今回はちょっとしたコーナーを設けているので、それをやっていきたいと思います」

「その名も、『バカテスのｉｆ』」

「このコーナーは私達が考えたｉｆが実現してしまった場合を答弁してみようというものです」

「記念すべき第一回は、『もしもキャラ全員の性別が逆転したら』というものです」

「コレってそこまで問題起こるの？」

「あまいね光、キミはコレによってどんな事態になるのか全く理解できていないようだな」

「はいはい。わかったから進めて」

「まず、月下のレギュラー達が不味いことになる」

「何で？」

「僕や靖也は女になる。そして光達は男へ。で、ちょうど三問前でキミは神城さんにセクハラをしていたよね？」

「セクハラじゃないよ？　スキンシップだよ？」

「これが男になると・・・・・・うえっ」

「・・・・・ゴメン。確かに私も見たいとは思わないわ」

「優子なら喜びそうだけどね。で、コレが文月学園になると」

「Ａクラスの皆、やばくない？」

「いいや、女子の面々がやばいんだよ。霧島さんは幼なじみの女の子を監禁したり手錠をかけたりしているかなりのドＳで変態になる。工藤さんは女の子相手に実践派だよ☆って言ってセクハラしていることになる。優子は女の子の絡みが大好きで、双子の妹に関節技を平気でかける鬼のような兄に。光についてはいわずもがな。島田さんは女の子を殴るのが趣味だという極悪非道に。姫路さんは・・・・・まぁ、まだまともな方かな。ある意味一番酷いのが清水さんだよ。もうここには書けないような単語を書かなくてはいけなくなりそうだからね」

「じゃあ元男子の皆は相当酷いんじゃない？　女子でコレな訳だし」

「ところがどっこい、それが違うんだな～」

「意外とまともなの？」

「そうなんだよね。まず明久。ちょっと頭が残念だけど、明るくて、困っている人がいたら見過ごせない。中々でしょ？
秀吉は、自分が女の子っぽい体と言動をしているのに女だと言い張る子になる。そんなのは分かり切っているのにね？
康太は男子の盗撮が趣味＋特技で男子の下着が見えそうになったりすると鼻血が出て
しまうメチャクチャ初心な子。普通に可愛いと思う。
久保君については言わなくてもわかるでしょ？
雄二は頭のキレがよくて、リーダーシップが取れている姉御キャラになるよ」

「うわぁ・・・・・・。何か凹むなぁ」

「まぁつまり、普段まともなのは女子ではなく男子って事だよね」

「だったらさぁ、これからずっと女子になってみる？」

「えっ？」

「だって今よりずっとまともなキャラになれるんだよ？　やらない手はないよね？
ほらっ、性転換する薬とかはまだ出来ていないからまずは格好と心だけでも、ね？」

「あ、あははははは・・・・・皆ゴメン！」

その後・・・・・・男子キャラの皆は女子達に女装を強要させられたという・・・・・・・

光　ｓｉｄｅ

夢を見ていた。二種類の夢だ。片方はお姉ちゃんとのひまわり園での日々の夢。
もう一つが、知らない人達に囲まれている夢。皆白衣を着ている。
医者かな？
周りを見渡すと、私の他にもう一人男の子がいた。誰なんだろう？
わからない。でも、どうせ夢を見るんだったら、楽しい夢がよかったなぁ。

「・・・・・・・ん・・・・・・・む」

「起きた？」

「・・・・・・お姉、ちゃん？」

「そうよ。光。元気だった？」

アレ？　おかしいな。どうしてお姉ちゃんがこんな所にいるんだろう？
確かお姉ちゃんは行方不明になっていて、どこにいるかわからないはずなのに・・・・・・

あっ、そっか、これはまだ夢なんだ・・・・・・嬉しいな。こんな良い夢が見られるなんて、今日は運がいいなぁ。だったら、心ゆくまでこの夢を堪能しよう。

「・・・・・・（ニッコリ）」

「？」

ギュー

「？　いひゃい、いひゃいいひゃいよお姉ちゃん！　えっ・・・・・・アレ？」

アレ？　痛い。お姉ちゃんに頬を引っ張られて痛い。何で？　どうして痛いの？
痛い？　ってことは、これってーーー

「ようやくお目覚め？　この寝ぼすけめ」

「お姉ちゃん！！」

夢じゃないんだ！

「お姉ちゃん・・・・・・お姉ちゃん・・・・・・・！」

「光・・・・・・」

私が抱き締めたら。お姉ちゃんも抱き締めてくれた。本当に、本当にお姉ちゃんだ。

しばらく抱き締め合っていた私達だが、私としては、まず、お姉ちゃんに言わなくちゃいけないことがある。

「おかえりっ！」

「・・・・・・えぇ（少しだけ、ね・・・・・・）」

「今までどこ行ってたの？　どれだけ私が心配したか知ってる？」

「・・・・・・」

「お姉ちゃん？」

何で黙りこくってるんだろう？

「・・・・・・いい？　光、よく聞いて？」

「う、うん」

お姉ちゃんが凄く真剣な目になったので私も真面目に聞き入ることにする。

「今、あなたはとっても大切な人の為に戦っているの」

「？」

「その人はあなたを大きく変えた。逆に、あなたも彼を大きく変えた」

「（コク）」

「そして今、その人が世界中から狙われているの。もうじき全世界から軍隊が送り込まれる。そして、ＩＣＰＯの構成員も増員されていくわ」

「そう、だろうね」

「だから、今すぐあなたは彼を追わなくちゃいけないの」

「・・・・・フフ・・・・・・！」

「光？」

なぁんだ、そんなことだったんだ。

「まったくもう、私が銀のことを忘れるわけ無いじゃん」

「え？　どうして・・・・・・？」

「フッフッフ、何で私が銀のことを忘れてないかを教えてあげるよ」

目に付いていたコンタクトを外してっと。

「コンタクト・・・・・・？」

「そう！　博士が行ってくる直前に渡してくれたんだ。しかも、じゃじゃーん」

このコンタクトは記憶抹消装置の光を無効化することが出来るんだ

って。博士曰く、自分の作った物の対策用の物を作るのは簡単だって。

「それって発信器の反応？」

「正解～。だから私はコレさえあれば銀の居場所がわかっちゃうんだよ」

因みに発信器を付けたのは、列車から落とされる直前の猛攻の時。
猛攻の合間を縫って
付けてやった。銀が私の記憶を消そうとしてくるのはある程度予想してたからね。
そうなった場合は記憶を消されたと思わせる為に演技しなくちゃいけなかったからさ。
だってこのコンタクトって上の了承を得たわけでも無いし、元々作る必要性なんて無いし。

「流石ね。心配事も必要なくなっちゃった」

「じゃあ、今度は私からお姉ちゃんに聞きたいことがあるんだけど」

「何を聞くの？」

「お姉ちゃんが、ルージュだよね？」

「・・・・・・えぇ」

やっぱりね。

「そっか・・・・・・何となくそんな気はしてたんだよね」

「バレてたってことか」

「約2年と半年前、お姉ちゃんは私の前から姿を消した。どうして？」

「やらなければならないことをやる為よ」

「やらなければならないことって何！？　どこで何してるかもわからないのに大切な家族のお姉ちゃんがいなくなるのを、心配しないわけ無いでしょう！？」

「・・・・・光は、何か勘違いをしているようね」

「何を！？」

「私のやらなければならないことっていうのは、あなたの家族捜し」

「どういう、こと？」

私の家族捜し？　それじゃあまるで・・・・・・

「そのままの意味よ。あなたの本当の家族を見付けることが私がルージュとなった理由よ」

「そんな・・・・・じゃあ、私は・・・・・・！」

「そうよ。あなたの『紅　光』という名前は私達紅家が付けたもの。でもあなたには『紅　光』ではない別の名前、本名がある。だから私とあなたは姉妹でもなんでもない。ただの他人なのよ」

ウソだ・・・・・そんなのウソだよ・・・・・誰か、誰でもいいから・・・・・・
ウソだって言ってよ・・・・・・・！　お願いだから・・・・・・・！

「だから、私のことをお姉ちゃんと呼ぶのは、止めた方がいいわ。
私はあなたのお姉さん
では無いのだから」

「・・・・・・・・・・・・・・」

お姉ちゃんは、私に背を向けて立ち去ろうとする。

「それじゃあ、私は行くわね。光」

っ！　何で？

「・・・・・・・で？」

「えっ？」

「・・・・・・何で今、私のことを光って呼んでくれたの？」

「・・・・・・何でででしょうね」

「・・・・・・お姉ちゃんこそ、何か勘違いしてない？」

「私を姉と呼ぶのはやめなさいって言ったでしょう・・・・・・」

「お姉ちゃんがどう思っているかは知らないけどさ「止めろって言

ってるでしょ！？」」

「止めて・・・・・お願いだから・・・・・・！」

「人の記憶を作るのは思い出だよ。どれだけその人と一緒に過ごしたかで決まる。
例えそれが短い期間だったとしても、お互いがお互いのことを強く思っていたならば
それは、強く、鮮烈に刻まれる。お互いの心に。だから、例え本物だろうと偽物だろうと、一緒に過ごした記憶がある限り、それはその人にとっての本物になる。だから、

――――紅水鳥は、紅光の本物だよ」

「っ！？　何で・・・・・・！　何で、そんなことを言うの？」

「例え血が繋がっていなくとも、あなたが私のお姉ちゃんだから・・・・・」

お姉ちゃんがこちらに振り向いて言った。

「ゴメンね、こんな泣き虫なお姉ちゃんで」

「ううん。そんなことないよ。お姉ちゃんはとっても強いよ」

「・・・・・ありがとう。名残惜しいけど、光はもう行かないと」

「そうだよね・・・・・じゃないと、銀が危ない。一緒には、行

ってくれないんだよね？」

「えぇ」

「うん。わかった。じゃあ、行ってくるね」

「行ってらっしゃい。気を付けてね」

「お姉ちゃんもね！」

そして私達は、手を振り合い、正反対の方向へ歩き出す。
多分お姉ちゃんは、ルージュとしてのお姉ちゃんを倒さない限り戻って来てはくれないよね。だったら、私がルージュをお姉ちゃんを倒す。でも今はその前に、銀を助けなくっちゃね。

銀　ｓｉｄｅ

港のコンテナ地帯・・・

まだ小学生低学年の頃、ある絵本を読んだ。タイトルは覚えていないが、その本がえらく気に入っていた。確か、最後に主人公が皆を幸せにするということだけは覚えている。
でも、ハッピーエンドとは言い切れなかったような・・・・・どうなったんだっけなぁ。

ヒュッ

「っ！？」

不意に弓矢が飛んできた。気を抜いていた所為か気付けなかった。
もう追っ手が！？

「・・・・・・・・・・・・追っ手じゃないのか？」

いくら待っても攻撃されない。何だったんだろうと思い、コンテナに刺さった矢を見てみると、

「矢文？　また古典的な・・・・・・」

矢文を読んでみると、こんなことが書いてあった。

『お前が知らない両親についての情報を知りたくないか？　知りたくばそのコンテナ地帯の〇〇番コンテナへ来い』

父さんと母さんの情報！？　でも、ＩＣＰＯで閲覧できる父さんと母さんの情報はＳランクの僕でも名前と年齢、あとはＳランクのナンバー1と2だったということ位なのに。これは確実に罠だと考えていいだろう。僕が両親の情報を知りたがっているのは周知の事実。月下の皆やオピュレンティアなら知っている。行けばどうなるかは火を見るより明らかだ。でも・・・・・

「・・・・・・・」

僕はその○○コンテナへ足を進めていた。この時僕は、死に場所を求めていたのかもしれない。

○○コンテナ・・・

「ここか・・・・・おい！　来てやったぞ！　さっさと僕を殺しにかかったらどうだ!?」

人影も気配も無いので叫んでみた。それでも誰も現れない。まさかイタズラ？　そんな
ハズは・・・・・・!?　誰かいる！

『おっ！　良かったぁ～、来てくれたか。いや～、もし来てくれなかったらどうしよう
かと思ってたぜ』

暗き闇の中より満月が照らし出すその姿はーーー

「よぅ、久しぶりだな」

「お前・・・・・・！　ベルム！」

こんな時に！

「まあ慌てんなよ坊主」

「慌てずにいられるか！」

「う〜ん、これじゃあ大事な話も出来ないな。じゃあ、こっちの顔ならーーー」

そう言ってベルムは両胸のやや上の位置にある飾りに触れる。すると、ベルムの装備している仮面が薄れてゆき、そこから洗われた顔はーーー

「親近感があって、話しやすいか？」

「っ！？　せ、先輩・・・・・・！？　そんな・・・・・・」

「驚くのも無理はないか。先輩だと思っていたヤツが敵だったんだからな」

凄く落ち着いて話すベルムだった先輩。正直言うとショックを隠せない。

「約二年前のあの時から、少しは変わったか？」

「えぇ。それなりに。こっちに世界にいると否が応でも変わりますよ。特に今この瞬間のような状態ならね」

「そうか。今ならわかるだろうが、あの時俺たちが攻撃を仕掛けたのは俺たちの基地の一つだ。あそこからは既にどうでもいい情報しか残してなかったから失っても惜しくはないしな」

「そうでしたか。では何の用ですか？　ベルム、と言った方が良いですか？」

「呼び方は自由にしてくれ。で、用ってお前、知りたいからここに来たんじゃないのか？」

「知りたいから？　まさか本当に父さんと母さんのことを教えてくれるとでもいうんですか？」

「あぁ。ほらっ」

先輩が輪ゴムで丸めてある資料の束を投げてくる。

「とりあえずお前の両親のプロフィールやら経歴やらだ」

資料を読んでみると本当に父さんと母さんのプロフィールなどがまとめられていた。
どれもこれも僕の知らないものばかり。僕はこの時資料に見入っていた。

「さてと、お前さぁ、自分がどんな存在か知ってるか？」

「僕が、どんな存在か？」

「そうだ」

「唯の一人の人間ですよ。常人より戦闘能力がやや高い」

「そうだよなぁ。お前はまだなーんも知らないんだもんなぁ」

「どういうことですか？」

「ブルームーンの遺産。コレがお前の正式名称だ」

ブルームーンの遺産？　コレが僕の名前？

「少なくとも裏のＩＣＰＯの存在を知っている連中なら、誰しもが知っていて呼んでいる名前だ。知りたくはないか？　何故自分がその様に呼ばれているのかを。ブルームーンの遺産とはそもそも何なのかを」

そんなの、決まっているじゃないか。

「教えて・・・・・くれるのなら」

「いいだろう。お前に教えてやるよ、俺が知る限り、最悪の計画を」

光　ｓｉｄｅ

現在銀達がいるコンテナ地帯の付近・・・

「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・」

今私は銀に取り付けた発信器を頼りにここまでやって来た。あれから数時間走りっぱなしだけど、お姉ちゃんと会えた私は元気１００倍！　これくらいきっと何でもない！

「はぁ・・・・・・でも、やっぱり疲れる・・・・・・っ！？」

突然周囲のコンテナから人影が飛びかかってくる。私は蹴り技で対

抗して対峙する形で
落ち着く。それと同時にそいつの部下だと思われる連中が私の周囲を囲んだ。

「誰！？」

『こうして会うのは初めてだな。Ｍｓ．宮野』

月光がその姿を映し出す。
あぁ、こいつか・・・・・だとしたら、ある程度何しに来たかは予想が付くなぁ。

「我が名は『アレクサンドル・フィエーリ』ロシアの支部、『ラジガスト』所属のＳランクだ。我が主、オピュレンティアの命により、Ｍｓ．宮野、貴様を捕らえに来た」

「邪魔しないでくれる？　今あなた達と遊んでいる時間は無いの！」

「そうはいかない！　我が主からの命令が下った以上、貴様を何としてでも捕らえる。
それが今オレのする最優先事項だ」

「五月蠅いよオピュレンティアの番犬。犬なら犬らしくハウスしててくれない？」

「言っておくが、既に月下は制圧した。援軍などは来ない。もっとも、我が主の命により、死者は出ていないから安心しろ」

良かった・・・・・誰も殺されてなかった。

「貴様らの存在は世界全体の秩序を乱した。粛清を今ここで、まずはお前に行う」

「粛清？　笑わせないで。あなたは独裁者にでもなったつもり？それとも、神でもなったつもりのオピュレンティアからの使者気取りかしら？」

今の発言でアレクサンドルとその部下達から殺気が放たれる。あら、ヤリ過ぎちゃった？

「貴様・・・・・・！　我らのことだけならまだしも、我が主までも。許さんぞ！」

「あっそう。だったら命令を無視して今すぐ私を殺しにかかったらどうなの？」

「・・・・・・いや、我が主からの命令だ。お前たち、あくまで殺すな。捕らえろ！」

くっ！　急がないといけないのに！

銀　ｓｉｄｅ

「その昔・・・・・・忍の里などでは、身体能力の高い者同士が子供を作り、より忍に
適した人間を生み出す行為が行われていたそうだ」

今僕は先ほどと同じ場所でベルムの話を聞いている。

「そのとんでもねぇ行為を今も行っている所があった。それが、裏のＩＣＰＯ。つまり、国家機密情報局だ」

そんなことを行っているなんて聞いたことないけど・・・・・・

「聞いたことがないのも無理はない。コレを知っているのはその計画に関わった者とオピュレンティア、そして世界の国会機密情報局を知っている連中くらいだからな。１０数年前のをきっかけに、しばらく行われていねぇが、最近、またその行為を行おうとする動きがある」

「何故ですか？　そもそも何故一度取り止めになったものをもう一度。しかも今の話からすると、その行為を世界は黙認しているのか!?　下手すれば強姦だ!」

「当然だ。ＩＣＰＯは国家にとっての絶対のタブーだぜ？　黙認しない方がおかしい。下手な発言をして他国やオピュレンティアの怒りをかったら、国家諸共滅ぼされちまう。と言っても、オピュレンティアが怒る姿なんて見たこと無いけどな」

「信じられない・・・・・・！」

何てふざけた組織なんだ。そんな組織に僕は・・・・・・！

「気にするな、お前たち構成員に責任は無い」

「でも！」

「それが世界だ。諦めろ」

「諦めろって・・・・・・・！」

そんな簡単に・・・・・・諦められるわけがない・・・・・・！

「因みに再びやろうとする理由は簡単だ、女がSランクになったからだ」

「真奈のことですか？」

「そうだ」

「まさか・・・・・・！　真奈に子どもを！？」

今の話しを聞けば簡単に想像できる。最悪だ。

「まぁ落ち着け。話すことはたくさんある。そうだな・・・・・・古い順に話そうか」

「そんなのどうでもいい！　真奈についての話を！」

真奈がどんな目に合うかなんてすぐわかる。それなのに他の話なんて聞いていられるか！

「おいおい良いのかよ？　お前とその両親についての話が面どいこ

とになるから先に
話させてくれよ。まだ宮野は大丈夫だってのは俺が保証するからよ」

「くっ・・・・・・！　わかりました」

「んじゃ続き。まず、１０数年前に行われた最後のその行為。子を産んだのはお前の両親だ」

「えっ・・・・・・」

「長年その行為を続けてきたが中々良い結果が出ない世界とＩＣＰＯの上層部は苛立っていた。だがＳランクの女は何度か出てきている。しかし、幸か不幸か、戦死するなどのケースが後を絶たなかった。いくらＳランクになったとはいえ、まぐれでなった者では意味が無い。だから、―Ｓランクになって一年以上の経歴を持つ者のみで試すという方針にしていたんだ。だが１０数年前、最高の素材が現れた」

「それがーーー僕の母さん」

「そうだ。お前の母『蒼月　桜花』は最高の素材だった。元々高い実力を持ち、Ｓランクとなってからはその力を存分に振るい、ついにはナンバー２にまで、昇りつめた。
で、ここでお前の父『蒼月　常磐（ときわ）』が登場するわけだ」

父さん・・・・・母さん・・・・・・

「お前の父はその時Ｓランクでナンバー１の地位についていた。地位に興味は無かった

ようだがな。で、この二人の関係だが、中々良好なものだったそうだ。今までのは半ば
強制されていた部分こともあったからなぁ。二人の仲が本当の恋仲になるようなことは
無かった。でも結果として、二人は実際に恋仲となり愛を育んだ。
ＩＣＰＯとしては予期せぬ結果となったわけだ。まぁその行為が成功すれば、愛なんてあろうと無かろうと
どうでも良かったんだが。世界とＩＣＰＯの上層部は喜々した。なんせ世界最強の二人の男女、つまり最高の血を持つ最強の兵器が手に入るのだから。だがここで問題が二つ生じた」

「どんな？」

「人間、誰しもが抗えない物がある。それは老化だ。誰しもいずれは年を取り死ぬ。当然
お前もだ。一々別の人間を生み出すのにはそれなりの機関が必要。
だがそんなのを待ってはいられない。もう一つは頭数だ。こちらもどうにもならない問題だ。だから上層部は、
こんな答えを出したんだ。『老化を阻止できないなら、何度でも作り直せばいい。頭数が
足りないなら、増やせばいいじゃないか』ってな。これが何を意味するか、わかるか？」

「・・・・・クローンを作った」

漫画じみてるけど・・・・・ＩＣＰＯの科学力だったら可能だから。

「そうだ。今のＩＣＰＯの科学力なら、人間のクローンを作るなど容易いこと」

「でもクローンを無数に作ったとしても、身体の成長は時間がかかる！」

「そんな問題は大した生涯にはなってないぜ？　薬品を使ったりすればどうとでもなる。
寿命の短さは仕方ないが、何度も作り直せばいいから問題ない。身体の成長を促す
薬品の他にも多数の物が使われる予定だった。オリジナルのお前で実験した結果は上々。身体強化・自然治癒力の向上化など、その他多数のことに成功した。オリジナルで成功してるんだからクローンで失敗するはずがない。クローンさえ使えれば、オリジナルには普通の生活をさせてやろうという意見も出ていた。だが、それはクローンの犠牲があってこそだ。蒼月、お前は普通の生活を送り、そのクローンは日々兵器として平和の為戦い続ける運命を辿るはずだったんだよ」

「だった？」

「そう。その運命を壊す為に立ち上がったのが、お前の両親だ」

「父さんと母さんが？」

「まだオリジナルのお前に普通の生活をさせることが完全に決定していなかったという点と、お前の両親がクローンを作っていた研究所を襲撃したんだ。親としては当然の行為だ。どこに自分の子どものクローンを兵器として戦わせ死なせるのを良しとする親がいるんだよ。クローンって時点ではらわた煮えくりかえっているってのに」

この時、自然と僕の頬には涙が流れていた・・・・・

「で、お前の両親はその研究所を破壊。クローンも全て殺し、データも全て消去。当然コレは裏切り行為そのものだ。二人は組織を追われる身となったわけだ。でも、二人の行為は無駄に終わる。オピュレンティアがその行動を随分前から予測し、既にクローンの第一号は完成していたんだよ」

「オピュレンティア・・・・・・！」

「幾らナンバー1と2の二人でも世界全てとＩＣＰＯを敵に回して生き残れるはずもなく、殺された。皮肉にもクローンが完成したことにより、お前の自由が認められた。
丁度、お前の両親が殺された日にな」

「くっ・・・・・・・！　ちくしょぉ・・・・・・・！」

よくも・・・・・・！　よくも父さんと母さんを・・・・・・！

「そして、蒼月の名を持つ両親が残した最高の血と、最先端の科学力を結集して作られた
お前を、世界とＩＣＰＯの上層部、オピュレンティアは皮肉を込めてこう呼ぶーーー

――――『ブルームーンの遺産』ってな」

第四十四問　ブルームーンの遺産（後書き）

今回は水鳥です。

ナンバー5との力の差に苦戦を強いられる光は、思いの強さを力に変えて戦う。

次々と語られる衝撃の事実に、ＩＣＰＯに復讐心を燃やす銀をベルムが誘う。その時、黒が目覚める。

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『叫び』

今ならわかる。私と銀の出会いは偶然なんかじゃないってことが。

今回では語りきれなかった光についての処遇は次回に持ち越しです。

すみません。

第四十五問　叫び（前書き）

毎回のことですが、更新が遅くてすみません。

あと、今回はコーナーはお休みです。もしかしたら次回も・・・・・・

第四十五問　叫び

満月は放つ月光が照らし出す蒼月の名を持つ少年は、今何を思うのか・・・・・・・

銀　ｓｉｄｅ

何と言えばいいかわからない。僕の存在って、何なんだろう？　そういうことを考えさせられる。人間？　兵器？　クローン達のオリジナル？　違う。僕はーーー

――ブルームーンの遺産だ

「どうだった？　昔話の感想は？」

「・・・・・・最悪だ」

でも、まだだ。まだ、終わってない。

「・・・・・・次を、頼みます」

「宮野の、いや、紅のか？」

「やっぱり、本名も知っているんですね」

「まあな。でもお前は知らないだろうが、あいつ本名は『紅　光』じゃあ無いんだ」

「え・・・・・？　そうなんですか？」

長い間一緒にいたのに、知らなかった。

「紅が意図的にお前に教えなかったんじゃない。あいつも知らなかったんだ」

「じゃあ、光の本名って？」

「それは俺にもわからない。紅の本名と、本当の家族を見付ける為に、ルージュが頑張ってる」

「何でルージュが頑張るんです？」

「ルージュがあいつの仮の姉、『紅　水鳥』だからだ」

『紅　水鳥』。その名は光の口から聞いたことがある。自分の目標であり、行方不明になってしまった自慢の姉だと。

「僕って・・・・・意外と無知なんですね。こっちの世界へ来て、ある程度のことは知っているつもりだったのに」

「そういうもんさ。この世の全てを知っている者なんていない。あのオピュレンティアでさえ、全てを知っているわけじゃない。知らないことだってある」

そんなもんなのかなぁ？

「そんなもんさ」

今心を読まれたのか？

「話しが逸れたな。紅のこれからの処遇についてだったよな？　えっと、一言で言うと、お前の子どもを生んでもらうことになるな」

・・・・・まぁ、僕が生まれる経緯を聞いていたら、こう言われることは想像できたわけだが・・・・・・

「それ、何とかなりませんか？」

「無理だな」

即答された。

「マジですか？」

「マジだ」

「どうしても？」

「どうしてもだ」

・・・・・・・・・・・・どうしよう。

「なぁ、一つ聞くが、お前は紅のことどう思っているんだ？」

「え？　光のこと、ですか？」

「あぁ。俺がこう言うのはナンだが、あいつ結構いい女だと思うぜ

？」

「な！？　い、いきなり何言ってんですか！」

「だってよぉ、顔良し・性格良し・スタイル良し。細身の、引き締まったって言うんかな？あの体付きで出るとこはキチンと出てる。顔に幼さがやや残ってるが、逆にそれが良い。他にも勉強は出来るし、料理もそれなりに出来るらしいし。しかも一番大きいのは俺たちみたく辛い過去を持っていて、こっちの世界を知っていること。だから相当のことが無い限りお前のことずっと愛してくれると思うぜ？」

た、確かに光は→な感じでか～な～り魅力的だけれど・・・・・・って！

「ちょっと待ってください最後の一文！　何で光が僕のこと好きみたいになってるんですか！？　あれはもう昔の話でしょう！？／／／」

「そうなのか？　俺はてっきりまだお前のことを好きなんだと思っていたが？」

「あ、有り得ないです！／／／　今光には好きな人が出来てるんですよ！？」

「ったく、お前は女心ってもんをまったくわかっちゃいねぇな」

「先輩はわかるんですか？」

「いんや、わかんね」

「わかってないじゃないですか！」

「でも俺の読みが正しければ、まだ紅はお前のことが好きだぜ？」

「何で、そう言いきれるんですか？」

「そいつは秘密。でも、このことだけは確実だ。では質問を変えてもう一度聞こう。今のお前にとって『紅　光』とは何だ？」

今の僕にとって・・・・・光とは何か・・・・・・・それは・・・・・

「今の僕の、『心の支え』、です」

「ふむ、上出来だな」

「え？」

「じゃあここで提案だ。もし、紅をオピュレンティアやＩＣＰＯの上層部達から守る手があるとしたら？」

「あるんですか！？」

「あるさ。紅も俺たちの組織に加わればいい」

確かに、そうかもしれないが・・・・・・

「でも、光がそんな簡単にＯＫくれるのかわかりませんよ？」

「そこを何とかすんのがお前の仕事だ。それに、こっちに来たとしても今まで通り学校には通えるぜ？　その学校には西村がいるがな」

問題はそこなんだよな。

「まあ一旦その話は置いておくとして、お前はどうするんだ？」

ついにきたか・・・・・・

「ははっ、どうするんでしょうね・・・・・・」

今の僕には、居場所が無い。自分を必要としてくれる場所が、人がいない。だから僕は死を選ぶつもりだったのにな・・・・・・さっきの光の話を聞いてしまったら、まだ生きなくちゃいけないって思うしかないじゃないか・・・・・・！

「・・・・・僕には、まだやらなくちゃいけないことがある。だから、」

「だから？」

「だから・・・・・・僕をそちらの組織に加えてください」

むしのいい話だってのはわかってる。でも、光を救う為なら、どんなことだってしてやろう。悪魔に魂を売ることになっても構わない。

「あぁ。いいぜ。大歓迎だ。お前が来てくれれば、ヴェンやニックスも喜ぶ」

そういってベルムは、僕に手を差し伸べてくれた。

「僕を、必要としてくれるんですか？　僕は、オピュレンティアやＩＣＰＯの上層部が望んだ心無き戦闘マシーンではないんですよ？」

「当たり前だろう？　俺が、いや・・・・・・俺たちが必要としているのは『蒼月　銀』。お前だ」

「っ！」

あぁ・・・・・・見つけた。僕を必要としてくれる人を。そして・・・・・・居場所を。僕は躊躇いもなく、その手を握り返す為、手を伸ばした。

光　ｓｉｄｅ

コンテナの上・・・

さてと、相手は五人。内一人は強敵。ってことはまず、雑魚から倒してからボスと戦うってのが定石だよね！

「やれっ」

『はっ！』

『しっ！』

アレクサンドルが指示を出すと共に仕掛けてくるヤツの部下。その内二人が突きを繰り出してきた。でもーーー

「はぁっ！」

二人の突きが当たらない位置に伏せ、一人の顔面に蹴り、左手を軸にしてもう片方に足払いをしつつ、蹴りで別の三人目に吹き飛ばす。残った一人が向かってくるが踵落としを決めてやる。

「こんなんじゃ、お話にもならないけど？」

「そのようだ。お前たちは下がっていろ。オレがやる」

私と対峙するアレクサンドル。

「一つ聞きたい」

「何？」

「何故お前は蒼月の為にここまで出来る？　あいつは裏切り者だぞ。オピュレンティアを、お前を裏切ったんだぞ？」

「そうかもしれない。でも、私は銀を信じたい。かつて私を変えてくれた銀を」

そこには義務感や責任感なんて無い。あるのは、銀を助けたいって思いだけ。

「オレにはわからないな。何故そこまで一人の人間に固執するのか・・・・・・」

「あなたには一生わからないでしょうね。何も考えず、従うだけの

あなたには」

「従うのは当然だろう？　我が命を救い、新たな役目を与えてくださったお方だ。そのご恩をオレは忘れない」

心酔してる・・・・・信じ切ってるんだ。

「あなたの信じる物がオピュレンティアならば、私は銀。お互い自分の信じるもののために命をかけましょう？」

誰にだって信じるものの一つや二つ持ってて当たり前。この場合、私が銀で、向こうがオピュレンティアだっただけ。

「いいだろう。お前にその覚悟があるのならばっ！」

先手を打ったのはアレクサンドル。情報によれば、こいつはコマンドサンボという軍用武術だったはず。だとしたら気をつけなければならないのは関節技や絞め技。下手すれば簡単に首の骨を折られてしまう。

こちらに跳びかかってくる途中で身を捻って、膝による打撃と同時に足を掴もうとしてくる。当然ここはバックステップで回避――

「っ！」

後ろにアレクサンドルの部下が・・・・・！　しまった！　ヤツの言葉から完全に一対一だと思いこんでいた！　これではアレクサンドルの技を回避出来ない！

「くらえっ！」

「がっ！」

「『死神の輪』！」

アレクサンドルの技が炸裂する。現在の体勢を説明するのならば、俯せの状態にのしかかられ、両足で四肢を封じられている状態で両腕での締めを受けている。

う、うぐっ・・・・・・まずいよ、コレ・・・・・・！　両手両足が封じられて首を絞められている。このままじゃ、気道が潰される・・・・・・！　この男、本気で私を殺す気なんだな・・・・・・！

「あまかったな。敵の言葉を鵜呑みにし、一対一の感覚で戦おうとするなど」

「ぐっ・・・・・・が・・・・・・！」

「所詮女などこの程度。オレは女が戦うということそのものが嫌いだ。女は男より戦闘力は劣る」

なるほど・・・・・・こいつ、男尊女卑の考えの持ち主なんだな・・・・・・私そういうのきらいなんだよねぇ・・・・・・！

「女はただ子を産み続けていればいい。もしくは、男の欲求を満たしていればそれでいい。いつぞやの日本が行った従軍慰安婦のようにな！」

皆さんは従軍慰安婦という用語をご存じだろうか？

従軍慰安婦というのは太平洋戦争中に日本の監督下に置かれ、軍人・軍属に性的な奉仕をしていた女性達のことだ。制度としての慰安婦は、軍相手の「管理売売春」という商行為をおこなう存在であり、

慰安婦には報酬が支払われていたが、過酷な性労働を強いた性的な奴隷に等しいとする主張もある。（詳しくはウィキ〇ディア参照）
つまりこの男が言いたいのは、『女はただ男の言うことを聞いているだけの存在でいろ』ってことだよね！？

「あああ・・・・・・！」

「何っ！？」

「ああ！」

私は力任せにアレクサンドルの拘束を抜け出した。そのままアレクサンドルを吹き飛ばす。

「流石は、Ｓランクといったところか」

「あなたには女も強いんだって事を教えないといけないみたいだね」

「無駄だ。女は男には勝てない。それを証明してやる」

再び接近戦になる。
こいつ、たとえ攻撃を受けてもこちらに迫ってくる。確かに組技や関節技なら打撃よりも相手を無力化しやすい。
充分に接近したアレクサンドルが突きを放つ。それを防ぐ為に腕を使うが、その腕をとられてしまう。
腕をとられた！　一本背負い！？

「がっ！」

違う、腕をとったと見せかけたヒジでの打撃だ。ここはいったん距

離を取って・・・・・・・

「あまいぞ！」

「っ！？」

バックステップをすることを読まれてた！？

アレクサンドルは光が距離を取ることを先読みし、自ら飛び光の上にのしかかっている。言うならば肩車状態。

「ふっ！」

「いっ！」

そのまま光の体勢を前に崩し、自分もろとも一回転する。そしてコンテナの上に叩き付けられた光に回転の勢いを利用した踵落としをきめる。痛みに耐えながらも体勢を立て直す。くっ、強い。これがナンバー５の実力・・・・・・！

「・・・・・やはりわからないな。ある程度拳を交えた者同士なら、お互いの心がわかるものだが・・・・・それでもオレにはわからない。お前と蒼月には何があるというのだ？」

「・・・・・銀は、私を変えてくれた。私に、もう一度、生きたいって思わせてくれた。始めは自分と銀が重なって思えた。そんな親近感だった・・・・・そしてそれは一緒に生活していくうちに恋心に変わった。私は銀が好きなんだって自覚した。でも私は、銀には既に好きな人がいるって気付いてた。だから、結局失恋しちゃったんだけどね・・・・・。一年とちょっとして、再開した。向こうで必死に忘れようって思ってた。でも、忘れられなかった。ど

うするべきかと思っていた時、こんなことになった。今この状況で、銀を助ける為に動けるのはもはや私だけ。今銀は、孤独の中にいる。孤独という闇の中にいる。私はそこから銀を引きずり出す！」

「だがそれはお前の一方的な思いではないのか？　蒼月が助けを求めているのか？　今俺が蒼月と同じ状況に置かれたのなら、迷わず死を選ぶ。どうせ助からないのだ。わざわざ苦しみを長引かせる必要ないだろう？」

「違う。助からないんじゃない。―誰も助けてくれないから《・・・・・・・・・・》でしょう？」

「っ！」

「だから、今ならわかる。私と銀の出会いは偶然なんかじゃないってことが。今銀は助けてと願うことさえ出来ない。願ったところで、それは絶望へと変わるから。私は銀を絶望させない。あなたの傍にはあなたに希望を与えてくれる人達がいるってことを教えてあげなくちゃいけないからさっ。だからーーー

―――そこを退けっ！　アレクサンドル！」

「たとえお前がどんな大義名分を掲げようと、オピュレンティアの命は絶対だ！　あの方の命は、我が命に変えても遂行する！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

僕がベルムの手を握ろうとしたその時、声が響いた。

『ダメだ』

っ!?　な、何だ、今の声は・・・・・・

『その手を握ってはいけない』

「くっ！　う・・・・・ぐっ・・・・・・・・！」

酷い頭痛がする。何なんだ・・・・・・これは・・・・・・！

「？　おい、どうした？　頭痛か？」

「ぐ、あぁ・・・・・・！　あああああぁぁああああ！！」

あまりの痛さに思わず跪く形になる銀。

『俺に体を預けろ。いつかの時みたいに。お前の中の負の感情を解き放て』

「いやだ・・・・・・！　僕は、決めたんだ！　う・・・・・・ぐっ・・・・・・！」

銀の右目が変色していく。蒼かったその目は、今や漆黒の夜空の黒よりも深く、暗い黒をしていた。

「・・・・・・・・・・・・」

「おい、どうした？　大丈夫か？」

「・・・・・・ククク・・・・・・！」

突然銀が横払いにベルムの顔面目掛けて手刀を放つ。

「なっ！？　おいおい、どっちなんだよ」

やがてゆらゆらと立ち上がる銀。その目を見た時ベルムが何かに気付いた。

「ん？　お前のその目・・・・・・あぁ、なるほど。じゃあ俺があいつから解放してやるよ」

急接近するベルム。その速さはまさに驚異的。スピードだけで言うならば依然銀が戦ったニックスよりは劣る。が、ベルムにはその代わりにあの西村と同等の筋力が備わっている。その男が放つ全力の一撃は正に凶器そのものである。

全身を回転させ放つ一撃はムエタイのティー・ソーク・トロン。噛み砕いて言えばヒジ突きである。

「っ！？　チッ・・・・・・！」

銀は何故か動かない。何か見えない力に動きを制限されているみたいに。回避が間に合わないと判断したのか両腕で防御をするつもりのようだが。

「そんな防御、粉砕してやるぜ！」

ティー・ソークがヒットする。

「何っ！？」

「蒼月、いや銀。ちょっと眠ってな。おめぇが寝ている間にこいつを消しといてやるからよ」

ティー・ソークを止め、ムエタイの突き、蹴り、ヒジ突きなどの基本的な技で追い詰めていく。銀は先ほどから動きにぎこちがない。体が言うことをきいていないみたいに。

「てめーはさっさと寝てろ！　このままじゃ死ぬぞ？」

「安心しろ、俺が消すのは世界が望まなかった銀じゃない。世界が望んだお前の方だ。お前だってわかってんだろう？　自分のこと。自分の名前も。銀ってのは自分と正反対の存在であるあいつのことだって」

「ちぃっ！」

ぎこちない動きではいつか隙ができる。それをベルムは見逃さない。

「そこだっ！」

銀の突きを受け流して銀の後頭部にヒジ。下手すれば人は死んでしまう一撃だが、

「人が気絶するレベルにしておいた。ほら、出てこいよ」

思わず倒れ込む銀。だが、その目が突如開かれる。その目はもう右目だけではなく、左目も黒に染まっていた。

全身をバネの様に使い、地面を飛ぶ。そこから立っていたベルムの首に両足を巻き付ける。そのまま跳びかかった勢いを利用し、自分が跳びかかった方向へ頭から地面へ叩き落とした。

「うおっと、危ねぇ危ねぇ」

だが、ベルムは叩き落とされる寸前に両手で先に地面に手を突いていた為、ダメージはない。そのまま両者が共に距離を取る。

「よぉ、会うのは初めてだな。世界が望んだ心無き戦闘マシーン、『蒼月　黒夜（こくや）』君？」

第四十五問　叫び（後書き）

今回は光です。

銀と表裏一体の存在、黒夜。それは、銀の中の悪意・憎しみ・恨みなどの負の感情の集合体。世界が望んだその存在を、ベルムが否定する。

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『望まれた者』

てめぇっていう黒がある限り、あいつっていう銀色は、一生輝くことが出来ねぇんだよっ！！

第四十六問　望まれた者（前書き）

え～、皆様にお知らせがいくつかあります。
今回から、一問一問の文字数を減らして、更新する回数を増やしていきたいと思います。

もう一つ目は、活動報告をお読みなっている読者の皆様方は既に知っていると思いますが、オリキャラの一人である『百瀬　悠里』ですが、名前を変更させていただいて、『山吹　悠里』とさせていただきました。あと、彼女の一人称を『私』から『あたし』へと変更しました。

皆様へお伝えしておきたいことは、以上です。では、本編をどうぞ。

第四十六問　望まれた者

黒夜　ｓｉｄｅ

「初めまして、『蒼月　黒夜』君」

「・・・・・・・・・・・・・」

「何だよ、何か喋れよ」

「・・・・・俺は人と喋る気はない。俺と会話するのは銀だけでいい」

「可愛くねぇなぁ」

「俺は人に好かれようとは思っていない。俺はただ、戦うだけだ。それが俺の存在理由なのだから」

「違うだろ？」

「何？」

「戦うのがお前の存在理由、だから戦う？　違うね。お前は自分の存在理由の為に戦ってるんじゃない。お前は、自分が銀をこちらの世界に連れてきてしまったから罪悪感を感じ、戦ってるんじゃないのか？」

こいつ、何で俺の本心を・・・・・・

「もしお前が木下姉弟誘拐事件の時、銀の感情をある程度コントロールしてやれば、
木下優子に『恐い』なんて言われずに事を済ませることが出来たはずだ。あの時銀は木下優子に『恐い』と言われなければ、木下家の前から姿を消すこともなかっただろう。そして、元の優しく暖かい人生を歩ませることが出来たはず。自分が銀の人生をブチ壊した。その責任感からお前は、また取り返しの付かないことになる前に、銀が俺たちと組むことを防いだ。違うか？」

「・・・・・そうだ、俺が銀の人生をメチャクチャにしたんだ！
銀は、人を殺すことが出来るようなヤツじゃない。銀は、こっちの世界には相応しくない。そもそも、俺が銀をこちらの世界に連れてこなければこんなことには・・・・・！」

「だが、銀はあの時から力を求めていたぞ？　木下姉弟を守る為に。それに、こちらの世界に来たものの、結局あちらの世界に戻れたんだ。結果オーライだろ？」

「違う、それは都合の良い解釈だ。それに、この状況を作り出したのはお前たちだろ！？」

「だから俺たちのところへ来ないかと言っていたんだ」

ふざけるな、何が来ないかだ。銀を自分達の仲間にしたいだけじゃないか。

「別に銀を殺人鬼にするわけでもなければ、どっかの国を襲撃するつもりはない」

「では何の為に」

「銀と一緒に世界を変える。あいつも俺たちと同じく世界に対し理不尽を感じ、復讐を誓った人間だ。それと、一応言っておくが、あいつは自らの意志で俺たちと手を組もうとしたんだぜ？」

「違う！　あれは紅光を助ける為だ！」

それしか方法が無かったからだ。

「それはお前が認めていないだけだ。本当はわかっているんだろう？　銀の本心を」

あぁ、そうさ。嫌と言うほどわかる。銀の本心が。膨大な憎悪が、今銀の中にある。

「それでも、銀をお前たちには渡さない」

「銀がこちらに来るのを望んでいてもか？」

「・・・・・・そうだ」

でもそれでは、何の解決にもならない。俺じゃ銀は救えない。

「お前、銀のことが大切だからそう言ってんのか？」

「当然だ」

「なら尚更銀を解放しろ。お前が今ここで俺を倒し、こちらの組織に加わるのを阻止したとしても、その後どうする？　月下は既に制圧され、構成員は今拘束されている。銀の処分が済み次第それなり

の処分が下される。現在銀は世界中の国という国が追っている。事実をお前が知っているとしても、誰が信用する？　誰が助けてくれる？　銀が殺されるのは時間の問題だ」

「銀は、俺が守る」

「確かにお前が自分の手で守りたいのはわかる。しかし、それはお前のエゴだ。お前が銀に押し付けているだけに過ぎない。言い換えるならば、余計なお世話」

「・・・・・・・・・・・・・」

確かに、こいつの言う通りかもしれない。俺がやっているのは・・・・・ただのエゴなのかもしれない。でも、あの時銀はこう言った。

「『最後まで、自分自身の意志で生きる』」

「何？」

「以前に銀が言っていた言葉だ。銀は、例え全てから否定されようとも、生きた。何故？　それは月下に所属している、自分の大切なヤツらを守る為だ！　あいつらに、どんなに嫌われることになろうとも、早く楽になる道を選ばなかった。銀はそれを自分自身の意志で選んだ」

「だが、銀がこちらに来ると言ったのも事実だ」

「そうだな。それは認めよう。でも、こっからは俺の意志だ。今この体は銀じゃない。俺なんだ。だから、俺は自分自身の意志で銀は、お前たちには渡さないと決めた」

だから俺は、お前たちと、世界と戦う。抗い続けてやる。この命ある限り。

「はぁ～・・・・説得は無理なわけか・・・・・やれやれ、結局お前をブッ倒して銀を連れて行くしかないのか・・・・・はぁ」

ベルムは諦めたように大きな溜め息を吐きつつ、頭をポリポリと掻いていた。

「んじゃ、やるかっ。改めて自己紹介しておこう。俺の真名は『ラセット・マーセル』。コードネームは『ベルム』その意味は『戦争』。俺は戦いが大好きでね。正直、今ワクワクしてんだよ。強い相手と戦えそうだからな。さぁ始めようぜっ！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

コンテナの上を高速で移動する二つの影。その影は幾度となくぶつかり合い、その回数が増えるほど激しさが増す。

「邪魔だーっ！！」

「通さぬ！」

光のカウンターの蹴りがヒットする。アレクサンドルも負けじと蹴りに耐え、アッパーを決める。

「私が・・・・・私が・・・・・・助けなくちゃいけないんだ！」

「我が主の為に！」

アッパーを放った腕を空中で体で掴み、両足で挟み込む。そのまま回転する勢いで、

「『腕ひじき捻り落とし』！」

（受け身を取った！？　あの状態から・・・・・・！　何て反応速度なの！）

（こいつ、あの状態から投げ技を仕掛けてくるとは・・・・・・！）

「主、主って、それじゃあなたは人形と変わらない！　自分自身の意志で考え、行動しないのなら、それは生きているとは言わない！　死んでいるのと同じだっ！」

「オレという存在は一度死んだのだよ！　オピュレンティアに命を救っていただいたあの時に、オレは生まれ変わったのだ！　その瞬間から、オレはオピュレンティアの忠実な部下となったのだ！」

アレクサンドルが連続でパンチを繰り出しつつ、膝や肘も組み合わせて放つ。光はそれを全て防ぎつつ自らも攻撃する。

「部下だとしても、考えることもあるでしょう！？」

「オレはあの方のお役に立てているということを感じられればそれで良い！」

光の足を先ほど光がかけた技のように掴み、光をほぼ俯せ状態にして掴んでいる足の骨を折る為の関節技をかける。

「オレはただ、感じるだけだ」

「どうして考えないの!?　あなただって人間でしょう!?」

光は柔軟な体を活かし、自分を拘束しているアレクサンドルを蹴りにいった。それにより拘束を止め、距離を取る。

「黙れっ!!」

一際大きな声でアレクサンドルが叫ぶ。

「もう過ちは犯せない。あの時のような過ちはもう犯せないんだ!!」

「だからオピュレンティアに考えてもらってるわけ!?　自分じゃ何も考えず!」

互いの想いを叫びつつ、何度も何度もぶつかり合う。もはや二人は自分の体のダメージは無視していると言っていいだろう。

「失った命や時間は戻らない!　オレもお前も、全てを失ってこちらの世界にやって来たのではないのか!?　心に空いてしまった穴を、埋めてくれたのは誰だ!?」

「それは・・・・・・!」

連続パンチでの接近戦を再び仕掛けてくるアレクサンドル。隙を見つけ正拳突きを放つ。それに対し自分から回転し裏拳を放つ。光は裏拳を伏せてかわし、両手をコンテナにつき、体をコマの様に回転して蹴る。

「家族から、友人から、母国から、世界から見捨てられた我々の心に出来た穴を埋めてくれたのは誰だ!?　俺たちに『死』以外の選択肢を与えてくださったのは誰だ!?　自分と同じ様な過去を持つ人間に、救いの手を差し伸べる組織を作ったのは誰だ!?」

攻防の中、アレクサンドルのヒジがクリーンヒットする。

「全てオピュレンティアだ!　あの方を否定するということは、あの方によって命を救われた人間全てを否定することになる!　蒼月や、お前自身さえも!」

「げほっ」

血反吐を吐いてしまう光。

「オピュレンティアがいなければ、今の我々はない。あの方は表の世界の理不尽さを教え、こちらの世界で我々の全てを変えてくれた。言い換えるならば、オピュレンティアは『我々にとっての創造主』!」

「はぁ・・・・・はぁ・・・・・」

「今からでも遅くはない。蒼月を諦め、拘束されろ。それに従うならば月下の連中への処分はオレがオピュレンティアに進言し、出来るだけ軽くしてやることが可能だが、どうする?」

「・・・・・・めない」

「ん？」

「・・・・・・私は、諦めない」

再び構える光。その目には、如何なることによっても意志を曲げない強い光が宿っていた。

「今私が皆の処分を軽くするなんてことの為に銀を諦めて帰って来たら、皆に一生恨まれちゃうよ・・・・・・」

皮肉を言いつつも、立っているのがやっとな光。でもそれは、アレクサンドルも同じ。

「私達にとって銀はかけがえのない大切な人なの。私達の過去みたいに失ったりしたくない。だから、銀を助け出すまで、私は絶対に諦めない！」

黒夜　ｓｉｄｅ

ガッ

鈍い音が響く。互いの拳がぶつかり合った音だ。

突いては反らし、突いては反らし、こちらでもそんなことの繰り返しが暫く続いていた。互いに何発か受けているものの、ややベルムが優勢。

「どうしたよ!?　あの時の連中みたいに俺を殺ってみろよ!?」

「・・・・・・っ」

俺と銀は互いの記憶を共通の物として扱える。つまり銀が見たことしてきたことなら大体のことは俺にも出来る。だから銀が知っている体さばきや武術は俺も行うことが出来る。戦闘に関することは銀より俺が、それ以外のことは銀がそれぞれ能力値が高い。つまりは能力地の振り分けの違いと考えれば楽だ。

「・・・・・おい」

「んだよ?」

こいつさっき・・・・・・

「何でお前があの時のことを知っている?」

俺が銀の中で目覚めたあの時のこと。

「見てたからさ」

「見ていた?」

互いのパンチがクロスして互いの顔面を直撃する。

「へっ・・・・・・自分たちの計画の一部だ。確認したくもなるだろう?」

「では木下姉弟誘拐はお前が仕組んだのか？」

「直接俺がやったわけではないけどな。例のヤクザもどき達に報酬を出すことで、依頼したのさ」

「何故そんなことをした？」

「お前を目覚めさせる為さ。銀の中に眠っているとはいえ『黒夜』が生きているんじゃ銀は世界に『銀』として認めてもらえないだろう？」

また俺か・・・・・・

「そして、今日という日を待ちわびた。『蒼月　黒夜』を消す、この時を！」

ヒジ、ヒザでも連続攻撃。それは早く、正確で、的確に急所を狙ってくる。

「何故そこまで俺を消すことに拘る！？」

「この期に及んで何を言うかと思えば・・・・・・。絵の具を想像してみな」

「絵の具？」

「そう。『黒』と『銀色』を同じ量混ぜたらどうなる？」

上段からのヒジ。片腕で防ぐが、その腕に回転を加え、角度を変えてそのまま裏拳を繰り出される。だが防御しきれないわけじゃない！

もう片方の腕でそれを防ぎにいったその時ベルムがニヤリと笑った。
裏拳を止め、防御しにいった俺の腕を掴み、逆方向からヒザが飛んできた。

ガスッ　ガッ

顔面にヒザが入った後、その足で蹴りの追撃をくらった。ちっ、何て威力の蹴りだよ・・・・・・

「当然、黒が銀色を塗り潰す。結果、銀色は消滅、黒が残る。やや黒が薄れるかもしれない、が、その黒には銀色がもっていた光沢が付加される」

先ほどの蹴りで反応が遅れた俺は腹部にヒザを一撃と、強烈なアッパーを顎に受け、吹き飛んでしまう。

「ははっ！　まさにお前と銀のようだよな!?　てめぇっていう黒が銀を塗り潰す！　てめぇっていう黒がある限り、あいつっていう銀色は、一生輝くことが出来ねぇんだよっ！！」

「ゴフゥッ・・・・・ガハッ・・・・・・」

血反吐を光と同じく吐いてしまう。
やはり、こうなるか・・・・・ここ数日、ほとんど飲まず食わずで睡眠もとっていなかったからな・・・・・・。俺より先に体がまいってしまうか・・・・・・。たとえ俺が
問題なくても体がアウトだと何の意味もない。頼む、この体よ・・・・・もう少しだけ保ってくれ。

『・・・・・・・・・・・・・』

そして、黒夜とベルムの戦闘を見つめる者が一人・・・・・・・

第四十六問　望まれた者（後書き）

今回は黒夜です。

俺とベルム。紅光とアレクサンドル。二つの戦いは終わりを迎えようとしていた。互いに自分の守りたい者の為、信じる者の為、自分の力を相手にぶつける。その戦いでそれぞれが得る物とは・・・・・・

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『想いの果てに』

ゴメンな・・・・・・銀。

第四十七問　想いの果てに（前書き）

結局長くなりました（汗）

原作四巻から本当に短くなると思います。

書きそびれましたが、

《今回のお話には暴力シーンやグロテスクな表現が含まれています》

あと、次回でオリジナルストーリーはひとまず終了です。その後、オリキャラ全員の紹介をした後、『シチュエーション妄想局』のお題をこなしていきたいと思います。

第四十七問　想いの果てに

アレクサンドル　ｓｉｄｅ

数年前の過去の記憶・・・

オレは高校の教師を目指していた。昔から教師に憧れていて、ずっと夢だった。教師の
免許を取り、正式に採用が決まった時は、それはそれは喜んだ。初めての授業をする前夜は中々寝付けなかったものだ。

後日、学校に来るように言われた時間より一時間早く来たオレは学校をまず見て回ることにした。すると朝練をしている部活がいくつかあった。野球・サッカー・陸上等々。
生徒達は皆一生懸命だった。目には光を宿していた。体は大人に近づいて来たものの、心は完全に大人ってわけじゃないんだな、そう思った。通り過ぎようとしたら、

カキーンッ！

そんな音と共に野球のボールが飛んできた。ボールはオレの目の前で止まった。
そしてそのボールを追うようにして来た一人の部員がオレに声をかけてきた。

「すみませーんっ。そのボール投げてもらえますかっ？」

オレはその声に答えるようにボールを投げ返してやった。ノーコンでは無いと思っていたが変な方向へ飛ばしてしまわないように気を

つけた。ボールはその野球部員のグローブにキッチリ収まった。

「あざーっす」

とりあえず一安心だ・・・・・そういえば彼がオレのこの学校で最初に会話した生徒第一号だ。

その後、職員室へ行き世話になる皆さんにあいさつを済ませた後、担当するクラスの授業までどんな風に授業をするか復習する。初めてだからといってマジメ過ぎると生徒達は飽きたり眠くなったりする。かといってはじけすぎると授業の進行が遅くなったり、他の教師達から不真面目とか思われかねない。程よいサジ加減を見定めていこう。生徒の名前を覚えることも怠らなかった。

数分後・・・

ガラッ

高校の時以来足を踏み入れる事の無かった高校の教室。やはり緊張するな・・・・・・

でも、ここまで来たのだからやることをするのみ！

「初めまして、自分は『スマルト・バルセチア』今日からこの学校で教師を務めることになりました。どうぞよろしくお願いします」

黒板にチョークで自分の名を書く。それからかるく自己紹介をした。その中に今朝の野球部の生徒もいた。授業をスタートした。担当教科は化学。

「混合物を成分物質ごとに分けていく操作を『分離』という。で、この分離だが主な七種類を挙げていくぞ。

・　液体とその液体に溶けていない固体を分離する操作を『ろ過』
・　固体と液体の直接の変化を利用して固体の混合物から昇華しやすい物質を分離する操作を『昇華』
・　溶媒に溶ける物質の量が温度によって変化することを利用して目的物質だけを析出させ、不純物を除く操作『再結晶』――」

こんな感じに授業は順調に進んでいった。そして授業が4分の3終了した辺りで、オレにとって永遠に忘れることの出来ない事件が起きた。

何やら校門が騒がしい警備員と数人の男女らがもめているようだった。でも、異変が起きた。警備員が突然倒れたのだ。銃声と共に・・・・・。サイレンサーを付けていないのか、事を悟られても構わないらしい。銃声を聞いた生徒達はパニックに陥った。すぐさまオレは生徒達に落ち着くように指示を出した。それとほぼ同時に校内放送で教師が武器をなりそうな物を持ち、廊下に出て生徒は教室でバリケードを作り、警察が来るまで持ち堪えるように言い渡された。

そこからオレは必死だった。何としてでも生徒を守り通す。その一心だった。教室にある武器となりそうな物・・・・・選んだのはパイプイスだった。それから犯人が来るのを廊下の角に身を隠し待ちかまえていた。すると突如爆発音が聞こえ、校舎が崩れ始めた。そこら中から火の手が上がり、燃えさかっていた。この時オレは気付いていなかった。否、気付けなかったのだ。犯人達は自分達が内

部にいるのにもかかわらず何故校舎を爆発させたのかということに・・・・・・。だからオレは生徒達に叫んでしまった。

「逃げろっ！」

と。この時俺はこの判断が正しいと思っていた。犯人から身を守る為にバリケードを作ったのに、そのバリケードが生徒達の退路を断っているのでは持ち堪える以前に焼死か瓦礫によって押し潰されてしまうからだ。生徒達はすぐさま教室から出て逃げようとした。でも、そこにあるものが立ちはだかった。

「・・・・・・・・・・・・・」

一人の少女だ。それもまだ小学生低学年くらいの幼さの。白かったワンピースを着ていた。でも、彼女がまともな人間ではないことくらいそこにいる人間なら誰にでも想像がついただろう。だって彼女の手には自分と同じくらいの刀身の日本刀が血を滴らせ、身に着けているワンピースは元は白だったであろうワンピースは今は真っ赤に染まっていた。しかも足下には多量の血、血、血。そしてその悪魔の様な少女はこう言った。

「ねぇ、この子が欲しがってるの。この子がね、私に囁くのーーー

あなた達の血を吸わせて欲しいってっ！！！！！」

そこからは地獄絵図としか言いようがなかった。飛び散る血、肉片、首・・・・・・。
ホラー映画よりもずっとグロテスクで、迫り来る嘔吐感を我慢できなかった。響き渡っていた悲鳴も、じきに聞こえなくなった。

「う～ん？　あんまり美味しくなかった？　ゴメンね。やっぱり雑魚の血じゃ不味いよね」

悲鳴の途絶と共に聞こえたその声。

「ねぇおじさん」

何かを投げられる。それはーーー

「――――1番マシな血の雑魚だって」

今朝の男子生徒の首だった。

「――――――――っ！！！！！」

オレは叫びにもならない声を発し、落としていたパイプイスを拾って殴りかかっていた。

ガンッ

パイプイスは届かなかった。何故？　答えはすぐにわかった。悪魔

とパイプイスの間に朱い壁があったのだ。

「この子が教えても良いって言うからいいこと教えてあげる。私がこの子に血を吸わせてあげる代わりにね、この子は私を守ってくれるの。それとねーーー」

朱い壁の脇を通り、笑顔でオレにこう言った。

「大人の血は要らないんだ」

その微笑みは、妖艶ながらオレに死を直感させてくれた。

次の瞬間悪魔の足下の血が１０センチ程の長さの無数のハリの様になって中に浮かんでいた。

パァンッ！

再び銃声が聞こえる。どうやら撃たれたのはオレではないらしい。目の前の悪魔のようだ。額に穴が空いている。体も大きくのけぞり、くの字に曲がっていた。後ろを振り向くと警察がいた。今まで声に気付けなかったようだ。それほどまでに目の前の悪魔に集中していたということだろうか？　警官が近寄ってきて何かを話しかけてくるがそんなのは耳に入らない。オレは先ほど投げられた男子生徒の首を抱き締めることしかできなかった。

「だから言ったでしょう？　この子が私を守ってくれるんだって」

そこには悪魔がいた。もはや悪魔では表現しきれない程に、幼い悪魔が。
浮かんでいたハリの様な物が一斉に放たれた。

目を覚ましたオレがいたのは病室だった。重傷だったらしい。近くにいた警官は皆死亡。学校での死亡者は教員数名とオレが担当していたクラスの生徒だけだった。あの後あの悪魔は逃げたらしい。だがそんなことはもうどうでもよかった。警察が来てくれたあの時、あのまま生徒達がバリケードを作ったまま教室に立てこもっていたら生徒達は無事だったんじゃないか？　つまり、あの時自分が言った

『逃げろっ！』

あの言葉が、生徒達の未来を奪ってしまったという事実だけだった。

現在・・・

だからオレはもう、自分で考えるのを止めた。全てオピュレンティアに任せていた。
でも、オレが力を付けたのは、あの時失ってしまった生徒達の無念を晴らすため！

「オレは、負けられない！　生徒達の無念を晴らすまでは！」

逆立ちのような状態から両足で二撃、回転してヒジ。

「・・・・・やっと、理由を話してくれた」

「何？」

「あなたの目の奥にも哀しみ、憎悪、そんな感情がくすぶっていたのはわかってた」

オレが突きを繰り出した瞬間、っ！？　ヤツの姿が消えた。

「私は、あなたがこちらの世界に来て、力を手に入れた理由を知りたかった」

どこだ！？　上！？

それと同時に上空に対し、蹴りを放つ。

「オピュレンティアの番犬のあなたじゃなく、一人の人間としてのあなたと戦いたかった！」

だがその蹴りは方向を変えた蹴りによって打ち落とされる。

そうだ・・・・・オレは何をやっているんだ・・・・・オレが今やろうとしているのは、あの時と同じじゃないか！　またオレは、人の未来を奪うのか？　っ！　違う、オレの心は！

「こんなに弱くなんかない！」

素早く体を変え、着地したヤツを追撃する。でも、背を向けたまま避けられる。

「心に迷いがある今のあなたじゃ、私には勝てないよ」

っ！　オレは、オレは・・・・・もう・・・・・！

「今私が、解放してあげる」

オレの突きを受け流し、腹部にヒジ↓頭を掴んで顔面にヒジ↓頭を放して顎に蹴り↓着地後上を向いた顔を踏み台にして飛ぶ↓空中で

回転して、その遠心力も利用して踵落としを決める。

「『紅い閃光』！」

オレは、もう一度・・・・・・・・・・・・・・

「はぁ・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・銀、今行くからね」

黒夜　ｓｉｄｅ

ガッ　ゴッ

手刀を繰り出す。ガード後、顔面へのハイキックがすぐさま飛んでくる。まただ、目では追えているし反応も出来る。でも、体が動いてくれない。おかげで強烈なのをくらってしまう。

「しぶといな。まだ倒れてくれないのか？」

こちらがパンチを繰り出すも、受け流されて後頭部へのヒジを受ける。やばいな、避けることができない。俺はヒザを折ってしまった。

「げほっ！　ゴホッ！」

また血を・・・・・・

「さてと、そろそろトドメ、っ！？　ゴホッ！　げほっ！　うぼぇっ」

突如ベルムが血反吐を吐く。何だ？　どうしたんだ？

「・・・・・・時間が無い、か・・・・・・・・」

「・・・・・・・？」

「持病でな。未だ治らない。ＩＣＰＯの医学力をもってしても、完治は出来ないらしい。
延命がやっとさ」

こいつ、そんな体で・・・・・・

「でも、親父の夢を叶えてやりたいからな・・・・・・。さて、お喋りはここまでだ。いいかげんトドメをさせてもらうぜ」

ベルムが構えたその時、俺の視界にある物が映った。ん？　何だ、アレ・・・・・・？　全長が７０センチほどで二足歩行で、尻尾が生えていて・・・・・・まさかーーー

――試験召喚獣！？　バカな！　何でこんなところに！？　そして何の意味で俺の視界に入った！？　影で姿形はよく見えないが、それが試験召喚獣だと俺には確信めいたものがあった。俺は脳をフル回転させ、試験召喚獣が現れた意図を探った。そして、ある一つの答えに行き着いた。

「死ねっ」

横に回転して間一髪で、トドメとなる一撃をかわす事に成功した。

そのまま立っているのがやっとな状態だが何とか立ち上がる。

「まだやるのか？　こっちも時間がないからちんたらやってらんねぇんだっ」

今までで一番早いベルムの突進。そこから強烈な突きが繰り出される。俺はそれを腹部で受け止め、両腕でその腕を掴む。残っているありったけの力で。そして・・・・・・何て言えばいいか位わかるさ。

「・・・・・アウェイクン」

その言葉と同時に身に着けていた腕輪から小さな召喚フィールドが形成される。

「何っ！！？」

俺が行き着いた答え。それはーーー

「試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！」

召喚フィールドがある俺とベルムの間から試験召喚獣が魔法陣と共に現れる。操作方法は詳しくは知らないが、

「うおおぉおぉぉぉお！！！」

この距離なら、細かい操作は必要ないっ！

試験召喚獣による一撃がベルムに腹部に直撃する。吹き飛んだりしないものの、踏ん張りながらも勢いで後退していく。人間の何倍も

の力を持っている私権召喚獣による一撃。頼む、起き上がらないでくれ・・・・・・！

「・・・・・・・・・・・・・・・」

踏ん張っている体勢のまま、暫く制止する。やがて手をこちらに伸ばす。届かない距離なのにもかかわらず。

「っ！」

全身が凍り付くような凄まじい気を感じる。それは紛れもなくベルムから放たれている物。頭が垂れていて目を隠している前髪の隙間から見えるベルムの目に吸い込まれるように見つめていた。否、目が離せなかった。俺はこの時『恐怖』というものを初めて味わった。

「・・・・・・――――――――――」

何か言っていたがよく聞こえなかった。そしてその言葉を言い切ったと同時にベルムは崩れ落ちた。それから、俺も続くようにヒザをつく。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

僅かに歩き始める。その足取りは重く、立っているのがやっとのようだ。

その後、近くのコンテナを背もたれにして座り込む。

ははっ、笑っちまうぜ。あんな大口たたいといてコレかよ・・・・・・

結局何にも出来なかった。ベルムを倒しただけだ。こんな風に終わ

るんだったら始めから銀を行かせるべきだったな。俺は結果的に銀を殺す手伝いをしたわけか。最低だ。俺は銀の人生を最後までメチャクチャにしたのか・・・・・・

「ごめんな・・・・・・銀・・・・・・・」

第四十七問　想いの果てに（後書き）

次回予告　今回は光です。

それぞれの決着。その終わり方が一番良いものなのかはわからない。でも、今はそんなことを考えている暇はない。別のことを考えなくちゃ。それぞれの始まりをさ

次回　　バカと銀色と召喚獣　『新しいスタート』

私で良ければ、傍にいますよ？

第四十八問　新しいスタート（前書き）

オリジナルストーリー終了！

第四十八問　新しいスタート

光　ｓｉｄｅ

「つっ・・・・・・！」

痛みが走り、動きを止めてしまう。
アレクサンドルとの戦闘であばらなどの骨にもダメージが・・・・・・！
あんまり激しい動きはしたくないな。でも、そうさせてはくれないみたい。

『・・・・・・』

新手か・・・・・・。正直きついな。でも、やらなくちゃいけないよね。
構えをとる。新手の連中も戦闘する意志を認めたようで武器を取る者、素手での構えをとる者がいる。見た限り８人。勝負は一瞬――――

その時、影が降り立った。

「西村っ！？」

「行けっ！　ここは俺が何とかする。だから行けっ！」

罠かもしれない。でも、もう銀との距離は１００メートルも無い。
この中に罠なんてあるの？　躊躇っている時間はない。

「・・・・・・っ」

西村を一瞥してから私は銀の元へと足を進めた。

「やれやれ。俺もヤキが回ったな・・・・・・」

「銀っ！」

銀をようやく見つけた。でもぐったりしていてまるで死んでいるかのようだった。

「・・・・・・！？　息してない！」

確かめてみたけど脈拍も反応も無い。死んでいるかのようじゃなくてホントに死んでる！

「死なせない・・・・・・！　死なせないからね！」

私はすぐさま心臓マッサージと人工呼吸を繰りかえ・・・・・・人工呼吸！？　人工呼吸ってやっぱり口と口だよね・・・・・・うぅ、何か無駄に恥ずかしい・・・・・・／／／でもそんなこと言ってる場合じゃない！

「・・・・・・んっ・・・・・・（ポー）」

・・・・・・・・・・って！　惚気てる場合じゃないんだってば！　てか緊張し過ぎて空気を送り込まないって何！？　それじゃキスしただけじゃんっ！

「・・・・・・ふぅ、よし！」

自分の頬を何度か叩いて気合いを入れる。人工呼吸をするだけなのに無駄な時間を使ってしまった・・・・・・ｏｒｚ。でも何度かしている内に慣れてきてしまった。そしてーーー

「おっ・・・・・・・おぉ・・・・・・・」

息を吹き返した！　やった！

「銀！　大丈夫！？」

「・・・・・・・・・・・・・」

って、返事があるわけ無いか・・・・・・・

ピピッ

ん？　通信？　誰からだろ・・・・・・月下から！？

「はい！　宮野です」

『真奈ちゃん？　良かった、そっちは無事そうね』

「雫さん！　はい、こっちは銀を見つけました。ちゃんと生きてますよ。そっちは今どうなっているんですか？　拘束されたって聞きましたけど」

『真奈ちゃんも銀君も無事らしいわよ。えっと、よくわからないんだけど西村宗一が突然やって来て解放してくれたのよ。で、もうそ

っちについている頃だと思うけど』

私と銀が無事だということで電話越しでも皆の声が聞こえる。

「そう、だったんですか。確かにさっき会いましたけど」

なんだ、味方になってくれたんだ。完全に信用できる訳じゃないけど。

『あと、そっちに九條君達が向かって行ったわよ？　こっちもそろそろ合流できると思う』

『ななさん！』

『着いたみたいね』

「九條君、かなちゃん、新垣君、白鳥君！」

『あんまり大勢で行くのもあれなので、とりあえず４人で来ました』

「ありがとう皆！　助かるよ」

『ななちゃん。生きているとしても油断できないわ。皆と一緒にすぐ戻って来て。新手のヤツらはこっちで何とかするから』

「はい、わかりました。皆には悪いんだけどこれから月下に戻るよ？　休憩しなくて大丈夫？」

通信を切り、皆に問う。

『大丈夫だよなな。蒼月先輩の一大事なのに休憩なんてしてられないよ！』

『そうっすよ！』

『右に同じ』

『（コクッ）』

何か嬉しいな、こういうの。

「じゃあ、全速力で戻るよ！」

銀を九條君に背負ってもらってかなちゃんに肩をかしてもらいながら私達は月下へと戻って行った。

『・・・・・・セカンドフェイズ、終了』

そう言い残し、声の主は消えた。

月下・・・

医務室・・・

あの後、月下へすぐさま戻り医務室へ駆け込んだ。

「これはまた酷いな。身体中ガタガタだ。栄養不足にも陥っているし、睡眠不足。寧ろよく生きていたと感心してしまうよ。初めてウ

チに来た以時来かな」

先生が診断書を見せてくれる。まあ全部わかるわけじゃないんだけど、簡単なところだけ。

「まあガタガタまではいかないが、ボロボロなのはキミもだがね」

「あはは・・・・・。でもこうして無事に銀を助けることが出来たんだからボロボロになったかいがあったってものですよ」

「治療するのはボクだけどね」

ここで、先生が真剣な表情になる。

「確かに、彼は特別らしいね。再生が速い。とはいえ、無理は出来ない。暫く目を覚まさないだろう。しかも、起きたとしてもはたしてどうなるのか」

「今回の後遺症が残るって事？」

うりが代わりに聞いてくれる。

「いや、心の問題だよ」

「心、ですか？」

「そうだ。精神的な病気にかかってしまうんじゃないかってこと」

心の問題に発展されると、私達からの干渉が難しくなるよね。

「そうなるとボク達が頑張るしかない。蒼月君の身近にいたボク達がね」

数日後・・・

菖蒲　ｓｉｄｅ

あれから数日、先輩は目を覚まさなかった。皆が交代して傍にいることになりました。その方が先輩も安心するだろうから。あと、先輩が眠っている間に色々ありました。裏切りなどを防ぐ意味も込めて、【月下の構成員は全員月下にいる間は本名を使うこと】という規則を設けたのです。

あと、先輩への疑いは晴れた。先輩に付けていた発信器には録音機能もあって、先輩とベルムの会話がバッチリ録音されていた。これにより、疑いが晴れました。そして、月下からオピュレンティアと世界各国の国家機密情報局の存在を知っている人間達への追求が始まった。どうなるかはあらかた想像がつきますが・・・・・そしてまた、今日もーーー

「先輩・・・・・・」

今も先輩は眠り続けている。まるで初めからこうだったかのように。もしかしたらこのまま一生目を覚まさないかもしれない。そうなるのは困ります。私は先輩の蒼い瞳が好きなんです。もう一度あの目を見たい。あの目で、笑顔でいる先輩が見たい。

「あなたは・・・・・・まだ眠り続けるんですか？」

先輩の前髪を上げ、イスから身を少しだけ乗り出し、じっくり先輩の顔を見つめる。

「お寝坊さんですね。・・・・・・？」

空いていたもう片方の手を先輩が掴んでいた。

「・・・・・恐いんですか？　大丈夫です。ここはあなたの居場所。皆、あなたのことを慕っています。皆、あなたのことが好きなんです。そしてあなたは、皆の希望なんです。希望は、皆に持たせてしまったら途中で逃げ出すことは許されません」

私は前髪を持ち上げていた手と、先輩に掴まれていた手で先輩の手を包み込んであげる。

「あなたは生きるんです。生きなくちゃいけないんです。だから、早く起きてくださいね？そのために、時間が必要なのならば・・・・・私が、私で良ければ、傍にいますよ？」

・・・・・こんなこと、他人に言ったのは初めてだ。今私は、どんな顔をしているのだろう。

「・・・・・・・ぅ・・・・・・・ぁ」

恥ずかしい想いをしたかいがあったというもの。先輩が目を覚ました。

「先輩・・・・・・」

思わず頬がゆるんでしまった。顔も赤い。こんな顔で先輩と喋れと

言うのか、何ということでしょう。

「・・・・・・・・・・・・誰・・・・・・・・？」

「えっ？」

「キミは・・・・・・・誰だ？」

・・・・・・・・・・・・・何ということでしょう。

光　ｓｉｄｅ

銀が目を覚ましたって聞いて医務室に飛んできた。でも、これほど理不尽だって感じたことはないよ。だってーーー

――銀が、私達を覚えていないんだから。

「ゴメン。覚えていないんだ。自分が何者なのかとか、ここがどこだとかそういうことは覚えている。でも、無いんだ。思い出が。生きてきたという感覚が」

何でよぉ。何でこんなにも・・・・・・！

その後、診察や心の整理などをつけるため、面会は終了となった。

数時間後・・・

「どういう・・・・・・ことですか!?」

私は今、オピュレンティアの説明を受けていた。

『どうもこうもない。言ったとおりだ』

「無理です！　今の銀に、また文月学園に通うなんて！　だって、今の銀は、心も体もボロボロなんですよ!?　そんな状態で、高校生活なんて無理です！」

『無理を承知で言っているのだ。彼にはやってもらわねばならない』

「そんなの、私が認めない！」

『キミにそんな権利はない。今、彼の居場所はそこだけだ。いつまでも寝ているわけにはいくまい。いつかは復帰してもらわねば困るのだよ』

「だったら、もう少し時間をおいてーーー」

『時間はない』

「・・・・・どういうことですか？」

『この前の議員殺害の件について。キミを思うところがあるだろう？』

確かに、私はまだ実力が足りない。お姉ちゃんには、まだ勝てない。

『あの件でハッキリしたはずだ。我々と同等の力と科学力を持ち、敵対する組織が存在していることが。そして、彼の力は必要不可欠。リハビリは早急に行う』

「だったら、私が『無理だ。キミは『蒼月』ではない』っ！」

じゃあ私は、意味が無い。

『だから、キミに支えてもらいながら高校生として、社会的にも人間的にも早く復帰してもらわねばならないんだ。残酷だな、でも、仕方ない。これが世界の決定だ』

やっぱり、この世界は狂っている。世界の代表も、結局自分と自分の国の保身ばかり。銀という一人の男の子のことなんて何にも考えていない。そんな世界ならーーー

――私が壊してやる。

「・・・・・わかりました。引き受けます。・・・・・・でも、私には、世界のことがわからない・・・・・・わかりたくもないっ！！」

私はそれ以上は何も喋らず、部屋を出て行く。

『・・・・・・・・・・・・・』

後日・・・

文月学園Ｆクラス・・・

「今日は、転校生を連れて来た」

ザワザワ　ザワザワ

ザワつく教室。

「入れっ」

「はい」

入ってきたのは一人の青年。髪の色は珍しい銀色。

「自己紹介をしろ」

「はい。初めまして、『氷花　紫苑』と言います。これから約半年間とちょっと、よろしくお願いします」

第四十八問　新しいスタート（後書き）

次回予告　今回は銀です。

本編での物語が一息ついた。これにより、オリキャラ達の説明を始める！

オリキャラ多いから頑張れ作者！

次回　バカと銀色と召喚獣　『オリキャラ紹介　～多いから大変です～』

いくぞ！　試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

オリキャラ紹介　～多いから大変です～（前書き）

遅くなり大変申し訳ありません！

紹介文ですが、現時点の物語の進行度では教えることが出来ないこともあるので、そこについてはご理解の程をよろしくお願いします。

また、不明や無いという部分には『?』が入っています。

何か他にもこういうのを教えて欲しいというのがございましたら遠慮無く書き込んでください。現時点で教えることが出来ることでしたら追加で書かせていただきます。

オリキャラ紹介　～多いから大変です～

オリキャラ達の紹介です。（『リト○バスターズ』風）【レギュラー・準レギュラーのみ】
いずれまた追加するかもです。

なお、コレより以前の本編を一期、コレ以降の本編を二期と表記。
あと、国家機密情報局の略称を変更しました。

国家機密情報局　通称
Ｒｅｖｅｒｓｅ『裏』
Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ『国際的』
Ｃｏｎｆｉｄｅｎｔａｌ『機密』
Ｐｒｏｔｅｃｔ『保護』
Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ『組織』

本名：　　偽名：

呼称：

容姿：

能力：

好きな物（人・事）：

嫌いな物（人・事）：

要約：

所属まで：：

組織内にて：：

現在：：

人間関係：：

召喚獣：：

国家機密情報局所属・・・・・・

『僕って、記憶を失う前もこうだったの？』

思い出を失った悲劇の主人公

本名：：蒼月　銀　　偽名：：氷花　紫苑

呼称：：銀（君・先輩）　蒼月（君・先輩）　氷花（君）　紫苑

性格：：基本的に冷静沈着。体が先に行動するよりも頭で考えてから行動するタイプ。
一期では体が先に動く場合もあったが、二期では一期よりも冷静さが増している為常に
動くのは頭から。

容姿：　コード〇アス　反逆のル〇ーシュ　ロス〇カラーズ』の操作キャラクターである『ライ』に似ている。銀髪。

能力：　成績はAクラスの中堅レベル。運動能力が非情に高く、間隔が狭いビル群ならば壁キックで移動することも可能。あらゆるスポーツもルールさえ覚えれば大体出来てしまう。基本的に一人暮らしのため家事・炊事の能力は持ち合わせている。

好きな物（人・事）：　『月下』とその構成員　記憶作り　他人の幸福　柑橘類の食べ物

嫌いな物（人・事）：　オピュレンティア　世界　大人（『月下』所属以外の）　傍観者　他人の不幸　政治家

要約：　木下姉弟の元幼なじみ。元というのは木下家が銀のことを覚えていないため。覚えていないのは彼の所属している組織の者が記憶を消す装置で記憶を抹消したためである。優子の彼氏だったが、優子が銀についての記憶を消されたため関係は消滅。両親についての情報を集めている。1期では1刀流だったが2期からは2刀流となる。使用武器は剣とハンドガン。黒のエンブレムを所持している。

所属まで：　所属したのは中学2年生の2月。優子と秀吉の誘拐事件の時に、優子が発した言葉により心を打ち砕かれ、自分はもう二人に不必要な存在と思い木下家を離れた際に、死にかけていたところをアレン・ブランによって拾われた。入隊の際に光と深い関係になり、キスをしたこともある。

組織内にて：　国家機密情報局の日本支部の一つである『月下』所属している。因みに光には『月下』内に設置されているシューティ

ングゲームで未だ一勝も出来ていない。組織内では世界に１０しかいないＳランクで、現在ナンバー８（アレン・ブランが組織から離反したため）。『蒼月　常磐』と『蒼月　桜花』の息子で、別名『ブルームーンの遺産』と呼ばれる。先日組織内の裏切り者とされ、世界から命を狙われる。その時に自分についての真実を知らされる。誤解は解けたものの、思い出を失う。尚、知識は持っている。

現在：　現在はオピュレンティアの命により、文月学園に復学。再びＦクラスへ。思い出を無くしている為人との接し方などを『月下』の構成員の仲間達から教わるが、時間が足りず、まだ無愛想になってしまう。光の案により、光の幼なじみという設定になっている。因みに『黒空の腕輪』の記憶もまとめて消えており、現在破損中で使えなくなっていても誰も気にすることはない。また、召喚獣の操作の勘などを全て忘れている。

人間関係：　１度リセットされたためあまりない。現在関係があるのが『月下』の構成員達のみである。以前は皆のリーダーやお兄さんポジションだったのだが、今や無口で無愛想な弟キャラへと変貌している。

召喚獣：　復学したため、１度召喚獣のデータが初期化されている。見た目事態はあまり変わっていない。装備が槍剣から双剣へと変更されたくらいだろうか。復学したため、１度召喚獣のデータが初期化されている。剣は片方が片刃剣を２つ合わせた様な形状。刃が２本に別れている。もう片方がそれより少し長くシンプルなデザインの剣。こちらにはハンドガードがついている。腕輪についてはまだ秘密。

『他人の幸福の為に自分を不幸にできるのって、とっても凄いことだと私は思うよ？』

世界と運命に翻弄される銀の良き理解者

本名：　不明　（紅　光）　　偽名：　宮野　真奈

呼称：　なな（さん・先輩）　光（さん・先輩）　紅（さん・先輩）
　真奈（さん・先輩）　宮野（さん・先輩）

容姿：　容姿はやや幼さが残る美少女。紅髪。スタイル抜群でDカップの胸を持っている。スリーサイズは直公開するかも・・・・・・。銀曰く、容姿端麗・学業優秀・運動能力はオリンピックを総ナメ・人脈も厚いというのだが事実である。最近では文月学園の彼女にしたいランキングで1位を取った。だがこれを本人は知らない。

能力：　成績はAクラスの上位レベル。銀と同等の運動能力を持つ。更には銀と同じく基本的に一人暮らしの為、家事・炊事は完璧。但し射撃能力は銀より一枚上手。

好きな物（人・事）：　お姉ちゃん　母　『月下』とその構成員　他人の幸福　原作の主要メンバー　ひまわり園の皆　とあるバンドグループの曲

嫌いな物（人・事）：　オピュレンティア　世界　大人（『月下』所属以外の）　傍観者　他人の不幸　政治家　父　ＤＶ

要約：　銀の良き理解者の一人にして、現在銀のことを最もよく知る人間。性格は明るく人当たりがよい。銀と同じく基本的に冷静。本当の家族ではないが『紅　水鳥』の行方を追っていた。現在秀吉

と銀の二人に好意を持っており、どちらの方が好きなのか決めかねている。決め手となる何かがあればよいのだが・・・・・。使用武器は杖とハンドガン。赤のエンブレムを所持している。

所属まで：　中学１年生の時に母親が殺される。それを期に、父親からのＤＶを姉と共に受ける。ある時家を出て『ひまわり園』という孤児院に姉と共に子ども達の世話を手伝うという約束で居候する。だが数ヶ月が経ったある日、姉の『紅　水鳥』が失踪してしまう。さらに『ひまわり園』の皆と出かけた先で父親と再会し再びＤＶを受け、立て続けに絶望してしまう。ある時生存本能が働き、父親をガラス皿で殴ってそのまま家を出た。この時の父親の生死は不明だが、逆に言えばこれのおかげで光は銀に出会い、裏の世界へと足を踏み入れる。

組織内にて：　銀と同じ支部『月下』に所属。また、世界に１０人といないＳランクのナンバー９である（『アレン・ブラン』が組織から離反したため）。射撃能力は銀を上回っているが、逆に近接戦闘では銀が上。

現在：　世界とオピュレンティアのことを信用しなくなる。現在も引き続き文月学園のＡクラスに所属。何かと銀のことを心配するようになる。それが原因で色々な勘違いを生んでしまうのはまた後のお話・・・・・・。

人間関係：　人間関係はとても良好。誰とも分け隔て無く接するのが良いところでもあり、悪いところでもある。彼氏などが出来れば改善されると思われる。特に仲の良いのはあだなで『うり』・『しほりん』・『あーや』・『かなちゃん』呼んでいるこの四人である。（下部に本名などを記載）。自分のことは『なな』と呼ばせていて、自分でもこのあだなを気に入っている。

召喚獣：　無双ゲームとかに出てきそうな和風の立派な装備。濃い赤が主の白のラインが引かれている。下半身はスカート。武器は獣の爪。
腕輪の能力は『飛翔翼』背中に翼が生えて、飛行能力を得る。キーワードは『ウィング』（本編でキーワードを発するのをすっかり忘れていました。以後気をつけます）

『こうゆう皆のお姉さん的な立場、気に入っているのよねぇ』

『月下』に所属する頼れるお姉さん

本名：　香雨（こうあま）　瑠璃（るり）　　偽名：　鈴野　雫

呼称：　香雨（さん）　瑠璃（さん・先輩）　鈴野（さん・先輩）　雫（さん・先輩）

容姿：　容姿はほんわかした顔立ちをしている。歩いていたら普通に振り向かれるレベル。
髪の毛は康太より若干薄い青い髪で、長さは光と同じくらい。スタイルの良さは『月下』でもトップクラス。女子からは尊敬と嫉妬の目で見られる。

能力：　世界トップレベルのハッキング能力を持つ。日々世界各国の明かされない情報を覗き見ていて、その国のファイヤーウォールなどを突破することでその腕を鍛えている。家事と炊事も当然出来る。

好きな物（人・事）：『月下』とその構成員　他人の幸福　アメ
　今の自分の立ち位置　酒　昼寝　女の子の胸　とあるバンドグル
ープの曲

嫌いな物（人・事）：　オピュレンティア　世界　傍観者　他人の
不幸　政治家

要約：『月下』に所属する銀や光達のお姉さん的な存在。年齢は『
吉井　玲』と同級生で２２歳。常に大人の余裕を醸し出している。
『月下』の構成員の皆のことをとても大切に思っており、相談役に
なったりもしている。また、思春期男子の心をくすぐる技を数多く
知っていて、日々女子に教えていたりするので男子達は主導権を女
子に握られっぱなしである。

所属まで：　アメリカの高校在学中にＲＩＣＰＯに入隊。その後Ｓ
ランクとなる。どこかの大手企業の令嬢だったという噂がある。（
詳しくはいずれ本編で明かすのでその時まで）

組織内にて：　『月下』に所属しており、銀や光達の先輩。戦闘班
とは別のＳランク。ナンバーは５。基本的に『月下』に寝泊まりし
ている為、『月下』が家代わりとなっている。自分についてはあま
り語らず、その過去を知っているのは親友で飲み仲間のマリアのみ。
マリアとはお互いに秘密をいくつか共有している。また、『月下』
の構成員（子供達）の前では真顔と笑顔くらいしか見せていない。
それは皆を引っ張って行く立場に自分がいるからという責任感から
来る物かもしれない。最低でも１日１回は女の子の胸を揉まないと
調子が出ないらしい。被害者には合掌がおくられるのは日常茶飯事。
さらに女の子レーダーなる物があるらしく、逃げ切るのはほぼ不可
能。因みに恋人が欲しいという願望は無いという。

現在：　銀を裏切り者扱いしたことで、世界とオピュレンティアに疑念を抱くようになる。因みに、【月下の構成員は全員月下にいる間は本名を使うこと】という規則を思い付いたのはこの人。

人間関係：　上記と被ってしまうが『月下』の構成員のお姉さん的存在。その性格と明るさから皆に慕われている。その為、皆の良き相談相手でもある。

召喚獣：　？

『僕の糖分がぁ～！！』

研究と糖分が生き甲斐のズレまくり博士

本名：　アゼリア・オーキッド　　偽名：　エピスティミ・ブレーン

呼称：　博士

容姿：　容姿は元ネタがあり、『コードギ〇ス』の『プリン伯爵』がモデル。メガネをかけている。着用しているのはだいたい実験服である。

能力：　天才的な頭脳の持ち主。天才といっても実際に天才ではなく天性の才能の持ち主というべき。また、独創的な発想を持ち合わせている。そのおかげでＲＩＣＰＯで数々の兵器や装置を作り出してきた。あと、甘い物は別腹らしい。

好きな物（人・事）：　『月下』とその構成員　他人の幸福　甘い物　研究

嫌いな物（人・事）：　オピュレンティア　世界　傍観者　他人の不幸　政治家　苦い物　倫理を無視した研究

要約：　上記にもあるが、研究に熱中すると風呂にも入らないので少々不衛生。『月下』に所属する研究キチ。何かやる前に必ずと言ってもいいほど糖分を摂取する。研究に熱中すると周りが見えなくなり、我に返ると3日後の夜だったなどはよくあること。その度に助手のマリアが苦労している。同時にマリアには頭が上がらない。今ではたんこぶを作る日数が3日に1度のペースとか。だが作る物はどれも1級品で、数多くの物を作ってきた。今は文月学園の試験召喚獣システムに興味があるらしい。口調がやや特徴的。だいたいの会話に『ぁ・ぃ・ぅ・ぇ・ぉ・～』のいずれかが入る。

所属まで：　とある研究に関わっていたが、その研究は生命倫理などを無視したような非道なものだったため、研究から離反。その時偶然マリアと出会う。だがその存在を外部に知られるわけにはいかなかった組織に二人とも殺されかけたところを救われる。このことから研究にしても命を常に尊重するようになった。また、銀が生命倫理を無視したような計画の一部にされていたことを酷く哀しみ憎んでいる。

組織内にて：　『月下』に所属しているSランクナンバー1の人間。雫と同じく基本的に『月下』に寝泊まりしている。といっても睡眠時間よりも研究時間の方が長い。普段はマイペースで急いで行動することは無い。でもマリアに急かされたときは話が別。あと、身体データなどのデータ取りは『月下』の構成員の皆に協力してもらっている。また、研究キチだが、友達だと思っている人間の危機など

には声のトーンが下がり、普段からは想像がつかないような表情になり、口調が変わる。第四十二問が例としてあげられる。

現在：　雫同様世界とオピュレンティアに疑念を抱く。

人間関係：　『月下』の構成員（子供達）には人気だが、大人達には苦労をよくかけている為、最近は反省しているとか。原因は主にマリア。でも嫌われているわけではない。それでも何だかんだ言ってこの二人は良いコンビである。

召喚獣：　？

『博士～？　またボキボキされたいですか？（ニッコリ）』

助手とざるの二つの面を持つ苦労人

本名：　アイボリー・S（スタンダード）・ラミル　　偽名：　マリア・ルーミー

呼称：　アイボリー（さん・先輩）　ラミル（さん・先輩）　マリア（さん・先輩）　ルーミー（さん・先輩）

容姿：　薄橙の『姫路　瑞希』のような髪型の美人である。軟らかい表情をすることが多い。胸のことをちょっと気にしており、『月下』の構成員の中ではタブーである。格好は博士と同じく実験服とタイトスカートを着ていることが多い。

能力：　『月下』の構成員に聞くとまず必ず『ざる』だと言われる。とにかく酒に強い。アルコール度数９６％のウオッカ（スピリタス）

を飲んでもビクともしない。その為、酒の席には必ず雫がいる時限定で参加する。皆がダウンして寂しく一人酒というのを避けるためだ。あと、唯一博士に言うことを聞かせることが出来る人間である。家事と炊事も当然出来る。

好きな物（人・事）：『月下』とその構成員　他人の幸福　研究　酒　とあるバンドグループの曲

嫌いな物（人・事）：オピュレンティア　世界　傍観者　他人の不幸　政治家　倫理を無視した研究　お金目当ての行動

要約：『月下』に所属するAランクの研究者。雫の親友。以前述べたが『月下』は世界で最も所属している構成員の平均年齢が若い支部なので、年が近く話が合う人間が少ないため、年が近いせいか意気投合した結果である。お互いにお互いのことをよく理解し合っている。お互いの過去をも・・・・・。『能力』の蘭と被るが、『ざる』である。あと、博士に唯一言うことを聞かせることが出来る人物である。

所属まで：偶然にも『アレクサンドル・フィエーリ』が教師をやっていた高校の生徒だった。だが、あの事件があったのでアレクサンドルとは一瞬顔を合わせた程度。家がちょっとした裕福な家庭だった。でもそれが原因で強盗に入られる。その時両親は死亡。その後の遺産を巡って親族間での争いと遺産目当てで近づいてくる大人達により人間不信に陥る。さらに唯一友達だと思っていた子もあの事件で殺されたため全てが信用できなくなり自殺を図ろうとしたところを偶然博士が居合わせそれを止める。それ以来博士の助手となることを決意し、今に至る。

組織内にて：雫とは違い、ちょっと頼りないお姉さんを想像して

もらうと分かり易いと思う。慌てたりすることがありややそそっかしい。博士曰く落ち着いていればかなり優秀。雫とは親友で、お互いのお互いのことをよく知っている。本音が話せる真の友。あと、キレたら『月下』に所属している誰よりも恐いとか・・・・・・

現在：　雫同様世界とオピュレンティアに疑念を抱く。あと、第四十二問の博士を見てちょっと見直している。

人間関係：　組織内にてに書いたが、ちょっと頼りないお姉さん的存在なので雫とはまた別に意味で慕われている。

召喚獣：　？

「そばはざるそばが一番です」

ポーカーフェイスが得意な常識人

本名：　氷川　白雪　　偽名：　星野　菖蒲（あやめ）

呼称：　あーや（さん・先輩）　氷川（さん）　白雪　星野（さん）　菖蒲

容姿：　基本的にはポーカーフェイスを崩さない美少女。髪は白に近い灰色。肩に掛かるか掛からないかという長さ。だが顔に掛からない左右の前髪は胸の辺りまで伸ばしている。胸のサイズはC。『霧島　翔子』とは違う大和撫子。

能力：　ポーカーフェイスが得意。大抵のことではこの表情を崩さない。なので何を考えているのかよくわからないことがある。冷た

い食べ物ならいくら食べても平気。家事と炊事を3人の中で1番はやく覚えた。

好きな物（人・事）：『月下』とその構成員　他人の幸福　とあるバンドグループの曲　冷たい食べ物　雪　静かな場所　涼しい場所

嫌いな物（人・事）：オピュレンティア　世界　大人（『月下』所属以外の）　傍観者　他人の不幸　政治家　『月下』以外の騒がしい場所　暑い場所　炎

要約：　冷静沈着であまり表情をコロコロと変えない。悠里・詩穂と共に行動することが多い。目撃証言は少ないが、天然だという噂がある。人付き合いが苦手。以前告白されたことがあるがバッサリと切り捨てたため男子からは告白するには人1倍勇気が必要だとか。あと何故かブラではなくサラシを巻いているらしい。女子達の猛烈な勢いに負け、フンドシは何とか防がれたらしい。

所属まで：　冷静沈着であまり表情をコロコロと変えない。悠里・詩穂と共に行動することが多い。目撃証言は少ないが、天然だという噂がある。人付き合いが苦手。以前告白されたことがあるがバッサリと切り捨てたため男子からは告白するには人1倍勇気が必要だとか。あと何故かブラではなくサラシを巻いているらしい。女子達の猛烈な勢いに負け、フンドシは何とか防がれたらしい。

組織内にて：　『月下』所属のDランクである。雫と同系列。組織入隊1年は誰でもここからということらしい。オペレーターとして悠里・詩穂と共に頑張っている。この二人と行動することが多く、基本ツッコミ役。この三人の時以外にもそのツッコミを放っている。誰に対してもですます口調を使う。『月下』にはツッコミ要員が少なくて困っていたので記憶を失う前の銀には大歓迎されたとか。

現在：　実は銀のことを光の次に心配していた人物。『月下』の構成員と同じように世界とオピュレンティアに疑念を抱く。

人間関係：　人付き合いが苦手のためあまり仲の良い人がまだあまりいない。でも仲の良い人には『あーや』と呼ばせている。また、こちらからも『なな』・『しほりん』・『うり』・『かなさん』と呼んでいる。

召喚獣：　？

「ほらほらっ、時間は限られているんだからさ、今の内に青春しようよ！」

イタズラ好きなムードメイカー

本名：　纏廼（てんの）　黄日癒琥（きびゆく）　　偽名：　山吹　悠里

呼称：　うり　纏廼（さん・先輩）　黄彌癒琥（さん・先輩）　山吹（さん・先輩）　悠里（さん・先輩）

容姿：　元ネタがある。『Ａｎｇ◯ｌ　Ｂｅａｔｓ！』の『関根しおり』に似ている。髪の長さや色も同じ。胸はＣに近いＢカップ。

能力：　ムードメイカー。そのテンションと性格からか周りの空気を明るくする。あと、困っている人を放っておけない。お人好しではないが正義感が強い。辛党である。霊感があるらしい。家事と炊事は苦手。

好きな物（人・事）：『月下』とその構成員　他人の幸福　とあるバンドグループの曲　幼い頃に出会った男の子　イタズラ　辛い物

嫌いな物（人・事）：オピュレンティア　世界　大人（『月下』所属以外の）　傍観者　他人の不幸　政治家　暗い空気　過去を聞かれること

要約：イタズラ好きで『月下』に無くてはならないムードメイカー。詩穂・菖蒲と行動を共にすることが多い。人懐っこい。正義感が強く、ダメなことはダメとハッキリ言う。とは言っても自分自身イタズラをしている為あまり説得力が無い。でも正義感が強いという点では皆に認められている。数年前に会えなくなったが好きになった男の子のことを今でも好きで、会えたら告白しようと思っている。週に何度かどこかへ出掛けているが行き先は誰も知らない。

所属まで：明るい彼女にも触れられたくないのが過去。まだ誰にも話していない。聞こうとすると誤魔化して逃げてしまう。皆には詳しくは教えず、巫女をやっていたとだけ教える。聞かれたくないような過去を持っているのにも関わらず今の明るさを振りまいている彼女は賞賛に値すると思われる。補足だが、悠里の家計では黄日癒琥という名前は長女か長男が名乗らなくてはならない名前らしい。本人はこの名前は女の子っぽくないという理由から好んで使いたくはないらしい。

組織内にて：『月下』所属のDランクである。雫と同系列。オペレーターとして菖蒲・詩穂と共に頑張っている。この二人と行動することが多く、基本ボケ役。また詩穂を弄っては楽しんでいる。偶に詩穂の逆鱗に触れてキレられたことが数回。そのたびにごめんなさいを連呼していた。イタズラをしてもどこか憎めないそのキャラ

から男女からともに人気が高い。

現在：　『月下』の構成員と同じように世界とオピュレンティアに疑念を抱く。そして、【月下の構成員は全員月下にいる間は本名を使うこと】という決まりに反対している。本人曰く黄日癒琥という女の子っぽくない名前で名乗りたくないということらしい。

人間関係：　人間関係はとても良好。特に仲の良い人達は『なな』・『あーや』・『しほりん』・『かなちゃん』とあだ名で呼んでいる。皆には自分のことも『うり』と呼ばせている。

召喚獣：　？

「これからあなたは私に手も足も出ずに敗北する運命なのです！って、言えるのはゲームの中だけですよね～」

小動物系でゲーマー系

本名：　藤咲　霞（かすみ）　偽名：　河森　詩穂

呼称：　しほりん　藤咲（さん・先輩）　霞（さん・先輩）　河森（さん・先輩）　詩穂（さん・先輩）

容姿：　元ネタがある。『Ａｎｇ◯ｌ　Ｂｅａｔｓ！』の『入江みゆき』に似ている。髪の長さや色も同じ。胸はＤに近いＣカップ。

能力：　あらゆるゲームが得意で、シューティングでもかなりの腕前。ゲーセン荒らしと恐れられていたらしい。花言葉に詳しい。家

事と炊事の能力は持ち合わせている。

好きな物（人・事）：『月下』とその構成員　他人の幸福　とあるバンドグループの曲　家族　花　花言葉　ガーデニング　ゲーム

嫌いな物（人・事）：オピュレンティア　世界　大人（『月下』所属以外の）　傍観者　他人の不幸　政治家　花を荒らす何か　裏技　恐い物（お化けなど）　血　『月下』と兄以外の男性　兄を殺した犯人

要約：花とゲームという異色の組み合わせが好きな小動物系な女の子。気が弱く、運動が苦手。悠里・菖蒲と共に行動することが多い。よく悠里に弄られている。だがキレたらどこからともなく取り出したカッターナイフを手に謝るまで追い掛け続けるという恐怖の一面を持つ。悠里曰くヤンデレを素質があるとかないとか。子供の頃に花の本を読んでいたため花言葉に詳しく、大抵の植物の花言葉を覚えている。また、家族を殺された時の事件から血液恐怖症になる。ある程度の血ならば耐えられるようになったが、多量の血を見ると発狂してしまう。

所属まで：（説明が難しいので詳しくはいずれ本編で）小中高と親の薦めで有名な進学校に通っていた。勉強は苦手ではなく、普通に出来るレベルなのだが、学校が学校な為、勉強面で周りに劣等感を感じるようになる。運動は子供の頃から苦手で同じく劣等感を感じる。またこれが原因でゲームが好きになる。だが、劣等感を感じていたのは気のせいではなく、相当なイジメを受ける。イジメをしている側に学校に多大な寄付金を出している会社の息子がいて、学校側は見て見ぬフリをしていた。性的暴行さえなかったが、されそうになったこともある。いっそ自殺をしようかと考えていた時に励ましてくれたのが兄だった。その時の詩穂にとっては兄の存在だけ

が生きている理由だった。だがある日、家に帰ると家族とギリギリ判別できる程度になった惨殺された死体を発見した。その後病院の精神科に入院。自殺を図ったところを紫苑に止められ、その後悠里・菖蒲と共に『月下』に入隊。

組織内にて：　『月下』所属のDランクである。雫と同系列。オペレーターとして菖蒲・悠里と共に頑張っている。この二人と行動することが多く、基本弄られ役。大人しく小動物系なので悠里以外からも弄られやすい。訓練所などの敷地内で花の世話をしていたりする。また、大人しいためそういう女子が好きな男子には人気。

現在：　『月下』の構成員と同じように世界とオピュレンティアに疑念を抱く。そして、【月下の構成員は全員月下にいる間は本名を使うこと】という決まりに悠里が反対している理由を聞くと、それをネタに悠里を弄り始めた。

人間関係：　人間関係はとても良好。特に仲の良い人達は『なな』・『あーや』・『うり』・『かなちゃん』とあだ名で呼んでいる。皆には自分のことも『しほりん』と呼ばせている。

召喚獣：　？

「まさか自分がオタクなる日が来るとはあの頃は夢にも思わなかったっす」

日本のアニメ文化を尊重することを忘れない男

本名：　土々呂（ととろ）　青磁（せいじ）　　偽名：　九條　靖也

呼称：　トトロ　青磁（さん・先輩）　九條（さん・先輩）　靖也（さん・先輩）

容姿：　元ネタ無し。オリジナルである。髪の色は青と緑の中間色。

能力：　アニメなどに詳しい。撃たれ強い。家事は出来るが炊事はまだまだ。

好きな物（人・事）：　『月下』とその構成員　他人の幸福　とあるバンドグループの曲　奏風　アニメ　漫画　同人誌

嫌いな物（人・事）：　オピュレンティア　世界　大人（『月下』所属以外の）　傍観者　他人の不幸　政治家　オタクを軽蔑する人　戦争

要約：　『月下』随一のオタク。日々、コレクションを増やしている。そのためコレクションを置くスペースが無くなりそうだという他人からすればどうでもよい悩みを持っている。名字にちょっとコンプレックスを感じているらしい。銀と光からすれば後輩で現在高校1年生。奏風と同じ学校へ通っている。そして奏風の彼氏でもある。また、奏風の要望により、色々手伝っているらしいのだが・・・・。使用武器はナイフとハンドガン。

所属まで：　少年兵だったという過去がある。どこかもわからない見知らぬ土地で訓練を受け、戦争に参加していた。戦争の最中に重傷を負い、生還は不可能だと思われていたところを奏風とその家族に助けられる。その時恩を感じ東雲家に留まる。人としての感情を取り戻しつつあった。しかし、戦争が激しさを増し、東雲家にも戦火が降りかかり、奏風の両親は死亡。責任と義務を感じ、奏風を1

生守ることを誓う。行く宛もなく彷徨っていたところを偶然任務でその地に赴いていた光に拾われ、『月下』に入隊。

組織内にて：　銀や光と同じ系列のBランクの上位。少年兵だった頃の経験を生かし、メキメキ成長している。直Aランクに昇格する。少年兵だったとは思えないほど表情が豊かで、銀にとても懐いている。そして銀が憧れで目標でもある。よく奏風とのじゃれ合いが見られる。その名字から、トトロというあだ名を持つ。

現在：　『月下』の構成員と同じように世界とオピュレンティアに疑念を抱く。

人間関係：　とても良好。でも奏風とは恋仲。

召喚獣：　？

「どこかでそんなタイトルのラノベを見たような気がしますよ」

先輩想いの官能小説家

本名：　東雲（しののめ）　沙耶　　偽名：　神城　奏風

呼称：　かな（さん）ちゃん　東雲（さん・先輩）　沙耶（さん・先輩）　神城（さん・先輩）　奏風（さん・先輩）

容姿：　メガネをかけた委員長キャラをイメージしてもらえればわかり易いと思う。茶髪である。胸はDカップで、光より1センチ大きいらしい。

能力：　官能小説を執筆すること（体験取材したものもある）。プロレス技が得意。家事と炊事をよく靖也に教えている。

好きな物（人・事）：　『月下』とその構成員　他人の幸福　とあるバンドグループの曲　靖也　読書

嫌いな物（人・事）：　オピュレンティア　世界　大人（『月下』所属以外の）　傍観者　他人の不幸　政治家　戦争

要約：　『月下』所属の高校1年生。光や銀の後輩。入隊の際、光に拾われその実力と技量を見てそれに憧れる。光のことを凄く慕っており訓練の後には必ず飲み物とタオルを持って行くほどだ。そのおかげか光達と靖也共に仲が良い。だが光のセクハラには対処仕切れていない。また実はネット小説を書いている。しかも官能小説という部類を。これがまた人気らしく、その維持のため靖也に色々手伝ってもらっている。（内容は書けるかわかりません）

所属まで：　（靖也の所属までと同じ）

組織内にて：　銀や光と同じ系列のBランクの中堅。靖也は止めたが、いつまでも靖也に守られてばかりは癪じゃないということで同系列のところで現在頑張っている。光のことを凄く慕っている。また菖蒲達とも仲が良い。因みに奏風が官能小説家だという事実を知っているのは靖也だけである。

現在：　『月下』の構成員と同じように世界とオピュレンティアに疑念を抱く。

人間関係：　とても良好。でも靖也とは恋仲。

召喚獣：　？

仮面の組織・・・・・・・

「盛り上げって行くぞおらぁあー！！」

本名：　ラセット・マーセル　　偽名：　アレン・ブラン
ベルム

呼称：　先輩　ラセット（さん・先輩）　マーセル（さん・先輩）
　アレン（さん・先輩）　ブラン（さん・先輩）　ベルム

容姿：　元ネタあり。『Ｒ〇ＢＯＲＮ』の『ザクロ』

能力：　戦闘能力は今のところ銀や光を上回る。自分の正体や目的を隠していたが西村とも互角の戦闘が可能。話術も持ち合わせている。

好きな物（人・事）：　『月下』とその構成員　他人の幸福　とあるバンドグループの曲　戦闘　仮面の組織のメンバー　女性

嫌いな物（人・事）：　オピュレンティア　世界　傍観者　他人の不幸　政治家

要約：　偶にふら～っと『月下』に遊びに来る兄貴肌。『月下』の構成員達にもそれなりに信頼されている。銀と光をこちらの世界に招き入れた人間。そのため銀と光もよく慕っていた。だが実際はテ

ロ的行為を行っている仮面の組織の幹部の1人。組織の計画のためにその力を振るう。しかし持病を持っていてあまり長くはない。

所属まで：　？

組織内にて：　ＲＩＣＰＯでも仮面の組織の方でも兄貴キャラは変わらない。仮面の組織ではコードネームとしてベルムと名乗っている。まだまだ若いニックス・ヴェン・ニジェールなどを子供扱いする一面もある。だが実力は認めていて信頼もしている。でも、実際は全員が全員の本名を知っている。何をしたいかなども。仮面の組織も結束力が強く、誰かが助けを求めれば助けに行く。

現在：　黒夜との戦闘で敗北するも、戦闘を見ていた仮面の組織のメンバーに連れ去られた。

人間関係：　良好。皆の兄貴という立場。

召喚獣：　？

『おねーさんにお任せあれ』

光の姉を演じる紅家の長女

本名：　紅　水鳥　　偽名：　ルージュ

呼称：　お姉ちゃん　紅（さん・先輩）　水鳥（さん・先輩）　ルージュ（さん・先輩）

容姿：　光の幼さが抜けて、大人びた雰囲気を纏ったイメージ。髪は腰辺りまで伸ばしている。髪の色は光と同じで胸のサイズはＦ。

能力：　戦闘能力は光を上回る。

好きな物（人・事）：　他人の幸福　とあるバンドグループの曲
仮面の組織のメンバー　光　母　ひまわり園の皆

嫌いな物（人・事）：　世界　傍観者　他人の不幸　政治家　父親
ＤＶ

要約：　仮面の組織の幹部であると同時に光の姉を演じていた人物。光とは血縁関係が無く、光の本当の家族を探している。

所属まで：　ひまわり園に居候するというところまでは光と同じ。だが数ヶ月経ったある日、突然現れた黒いフードを被った男に勧誘され、組織に入隊。

組織内にて：　その性格からなのか、はたまたお姉さん気質でよく慕われている。

現在：　光に自分との血縁関係が無いことなどの真実を伝える。その時のニジェールと光の言葉により、血縁関係が無くとも自分は光の姉として生きていていいんだということに喜びを感じる。そしてニジェールが気になり始める。

人間関係：　組織内にてと同じ。ニジェールのことが気になる。

召喚獣：　？

「人のために嘘を付くのはあなたの先輩特許じゃないです」

氷と水を操る一族最後の生き残り

本名：？　　偽名：ニックス

呼称：ニックス

容姿：白い忍者装束。地面に着きそうな長さの青白いマフラーのような布を巻いている。

能力：水と氷を自在に操る

好きな物（人・事）：？

嫌いな物（人・事）：？

要約：議員襲撃の際に銀と戦闘を行った仮面の組織の幹部。里を亡ぼされた復讐をするために仮面の組織に入った。水と氷を自在に操る能力を持つ。

所属まで：本人曰く、里を亡ぼされ記憶喪失になっているときに仮面の組織に手を差し伸べられて入隊。

組織内にて：？

現在：？

人間関係：　仮面の組織内のメンバーとは良好。

召喚獣：　？

「あ～～～、ダル～～～」

めんどくさがりな魔法使い

本名：　？　　偽名：　ヴェントゥス

呼称：　ヴェン　ヴェントゥス

容姿：　？

能力：　風を操る魔法が使える

好きな物（人・事）：　？

嫌いな物（人・事）：　？

要約：　議員襲撃の際に議員を殺害した人物。自称：世界で最後の魔法使い。風の魔法を使う。仮面の組織の幹部の１人。

所属まで：　？

組織内にて：　？

現在：　？

人間関係：　仮面の組織内のメンバーとは良好。

召喚獣：　？

「俺にも、救いたかった人がいた」

謎が多いクールキャラ

本名：　？　　偽名：　ニジェール

呼称：　ニジェール

容姿：　？

能力：　？

好きな物（人・事）：　？

嫌いな物（人・事）：　？

要約：　現在あらゆる事が謎に包まれている仮面の組織の幹部。銀とは何やら接点があるようだが・・・・・・

所属まで：　？

組織内にて：　？

現在：　？

人間関係：　仮面の組織内のメンバーとは良好。

召喚獣：　？

所属不明・・・・・・

「この子がね、言ってるの。逝かせちゃえって」

血を愛し狂気を纏う少女

本名：　？　　偽名：　？

呼称：　？

容姿：　？

能力：　血を自在に操る

好きな物（人・事）：　血　持っている刀

嫌いな物（人・事）：　？

要約：　アレクサンドルが過去に勤めていた学校に現れた謎の少女。自分が持っている刀を『この子』と呼び、対話をしているかのように喋る。血を自在に操る能力を持っている。

所属まで：　？

組織内にて：　？

現在：　？

人間関係：　？

召喚獣：　？

「ゴメンな・・・・・・銀」

銀が内に秘める悪意の集合体

本名：　蒼月　黒夜　　偽名：　？

呼称：　黒夜

容姿：　銀と同じ。

能力：　銀より戦闘能力が1枚上手。万全の状態ならばアレンとも互角に戦える。だが家事・炊事などの一般的な能力は銀の方が上手。

好きな物（人・事）：　銀と同じ

嫌いな物（人・事）：　銀と同じ物＋自分

要約：　銀が兵器として作られた理由であると同時に、銀の危機を

何度も救った銀のもう1つの意志。銀のあらゆる負の感情の集合体と言われている。

所属まで：　銀と同じ。

組織内にて：　？

現在：　銀本人からも感じ取れないため、詳しいことはわかっていない。

人間関係：　？

召喚獣：　？

新たなオリキャラ。文月学園所属・・・・・・（また増えてすみません）

「文月学園七不思議って知ってるか？」

本名：　スプルース・A（アーチ）・前火　　偽名：　？

呼称：　ルース（くん）　前火（くん）

容姿：　元ネタ無し。オリジナル。金髪。

能力：　生徒間の情報に詳しい。運動能力が高い。神経が図太い。

成績はAクラスの下位レベル。

好きな物（人・事）：　サボリ　娯楽　風が吹く場所

嫌いな物（人・事）：　風が吹かない場所　勉強　剣道

要約：　銀が文月学園に復学してから最初に出来た友人。誰にでも気さくに話しかける。アレンのような兄貴タイプ。一応Ａクラスに所属しているがあまりまじめではない。授業をサボることもある。サボる時は屋上で何かをしている。同じくサボっていた銀と友人になった。よく、亜麻理（新キャラ）と共に行動している。

所属まで：　？

組織内にて：　？

現在：　文月学園２－Ａ所属。サボリをしているせいかＡクラスの面子からはあまり良い印象を持っている人は少ない。だが、漫画研究部が作っているＢＬ本には攻め側として登場することがしばしば。似合わないが、生徒会役員の１人だ。役職は渉外。

人間関係：　亜麻理と深い関係にあるという噂が。

召喚獣：　流れるラインを持つ鋭い型の青黒い鎧を装備している。背中には青黒いマントがある。武器はハルバード。腕輪の能力は『装甲』。同じフィールド内にいる自分と味方の召喚獣の防御力を飛躍的に高める。キーワードは『鋼』。

「ここは中々良い学校だな。君もそう思わないかい？」

独自のペースを持つ姉御肌

本名：　蒼月　亜麻理　　偽名：　？

呼称：　蒼月（さん）　亜麻理（さん）

容姿：　ボンッ・キュッ・ボンッという言葉を余すことなく再現している。Ｆに近いＥカップである。髪の色は亜麻色で短髪。ニーソックスを穿いていることが多い。

能力：　他人を弄るのが上手い。女子にもモテる。成績はＡクラス中堅レベル。不思議なカリスマ性があり統率能力に長けている。

好きな物（人・事）：　前火弄り　動物全般

嫌いな物（人・事）：　勉強　退屈

要約：　銀と同じく転校生である。銀が文月学園に復学してから２番目に出来た友人。銀の名と同じだが詳細は不明。銀達と同年代のハズなのに大人の雰囲気を醸し出している。前火とは仲が良く、良く共に行動する。その為授業をサボることもしばしば。姉御肌なので同性にもモテる。転校初日から生徒会に所属。役職は書記。

所属まで：　？

組織内にて：　？

現在：　文月学園２－Ａ所属。サボリをしているせいかＡクラスの面子からはあまり良い印象を持っている人は少ない、というわけで

もない。

人間関係：　前火と深い関係にあるという噂が。

召喚獣：　前火の召喚獣とは対照的に、流れるラインを持つ丸い型の灰桜色の鎧を装備。背中には灰桜色のマントを装備。武器は無いが、両腕に特殊な装備をしている。『波動衝撃腕』みたく何も出ないが、もの凄い握力と腕力がある。武器とぶつけ合っても何ら問題もない。

腕輪の能力は『ウォークライ』。同じフィールド内にいる自分と味方の召喚獣の攻撃力を飛躍的に高める。キーワードは『撃（げき）』。

オリキャラ紹介　～多いから大変です～（後書き）

次回予告　今回は秀吉と優子です。

『シチュエーション妄想局』、拡大版！　きたきたきたわ～！　ついにこの時がやってきたのよ！

次回は長らくまたせてしまった『シチュエーション妄想局』のリクエストにお答えしたＳＳをやらせてもらうぞい！

司会はもちろんアタシ、木下優子と

木下秀吉でお送りするのじゃ。

では、次回をお楽しみに～

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『シチュエーション妄想局』拡大版

Ｂ＆Ｌは、世界を変える。

変えんぞ！？

題名や内容はこちらで考えさせてもらいますがよろしいでしょうか？

番外編　シチュエーション妄想局　拡大版　パート1（前書き）

ホント、無計画ですみません。

番外編　シチュエーション妄想局　拡大版　パート1

「木下姉弟の～」

「シチュエーション妄想局っ」

「「拡大版～！！」」

「クックック、。。。（　。＾∀＾。）。アーッハハ八八ノヽノヽノヽノ　＼　／　＼！！」

「大変じゃ！　姉上が興奮しすぎて顔文字化してしまったのじゃ！」

「・・・・・ふぅ、少し落ち着いたわ」

「それは何よりじゃ」

「さて、今回は拡大版ということで皆様にリクエストしていただいたカップリングで妄想していくわよ」

「それでは、」

『レッツ、妄想！』

下記のｓｓは全てフィクションです。本編・原作のキャラ・団体とは無関係です。

夢幻さんリクエスト　【銀×優子】。

『お熱いようで』　時間軸　3巻内容終了後

銀　ｓｉｄｅ

銀&優子の部屋

カリカリ　　カリカリ

宿題、めんどい・・・・・・

ガチャッ

「ふぅ・・・・・・さっぱり」

「ん。お帰り」

「ただいま～。あ、アイスもらったけどいい？」

「問題ないよ」

今から文句は言えないし。元から無いけど。

「宿題？　マジメねぇ～」

優子がベッドに座ってそう言う。

「いやいやいや、学校では優子も優等生という猫被ってんじゃん」

「学校ではね～。ん？　ペン止まってるけど？」

「・・・・・わからなくて」

「だらしないわねぇ～。銀ってばホント数学はダメなんだから」

「面目ない・・・・・・」

優子はこちらに近づいて来た。どうやら勉強を見てくれるようだ。

「で、どこがわからないの？」

「ここからがちょっと」

「ふ～ん、ふんふん」

学校でもこうやって教えているんだろうな。皆の頼れる存在なのだから。

「・・・・・じゃ、説明するから、アイス持ってて」

「んぐっ」

わざわざ僕の口に突っ込まなくても・・・・・関節キスだし。

「――この点ＡはＸ軸上を通るから――」

前から思っていたが、優子も光も無防備すぎるんじゃなかろうか？
　風呂上がりで、濡れた髪とかうなじとかシャンプーの香りとか・・・・・

「――代入して、式ができるのね？　で、これとこれを連立方程式にして――」

あと何より、服装だ。服装。時期的に暑くなってきたけど、二人とも露出が激しい服を着ているからこちとら意識しまくってるわけですよ。

「――で、XとYの値が出るから、これを式に代入して出た答えが、この問題の答え。わかった？　って、聞いてる？」

毎夜毎夜僕と秀吉が苦労しているのを知らないんだろうな～。たしかに寝やすそうだけどさ～。

「・・・・・ふ～」

「うぉわっ！？」

びっくりした！　耳に風吹かれたから変な声出しちゃったよ。

「やっぱり聞いてなかったわね」

「うえ？　ぅあっ・・・・・」

「あ～はいはいそ～ですか～、アタシの説明は聞きたくないと」

「あっ、やっ、ちがっ」

しまった。優子に教えてもらっているのを忘れてた。あとアイスが溶けてる。

「アタシも～知～らない」

「うぅ、ゴメン、優子」

「・・・・・・まったく、次考え事してたらキスするわよ／／／」

「・・・・・・プッ、ククッ・・・・・・アハハハハ！」

「な、何で笑うのよ！？／／／」

何で僕が笑っているのかって？　この時点で勘の良い人は気が付くだろう。優子は僕と付き合うことになっても、自分からキスをしてきたことはないのだ。全部僕からだ。優子は口ではああ言うものの、いざするとなると恥ずかしくなるのだという。でも押しには弱いので、ちょっと強引でもしてくれる。で、自分からしてきたことがない優子がいきなり自分からするというので僕は笑ってしまったというわけだ。

「いや・・・・・・優子が僕にキスできるのかと思ってね」

「で、出来るわよ！　キスくらい／／／」

「へぇ～、じゃっ、してもらおうかな？」

僕はイスに座ったまま優子に笑みを浮かべる。

「～～～～～っ／／／」

優子顔真っ赤。可愛いな。

「・・・・・・ん・・・・・・／／／」

そして優子は僕にキスをした。でも今日の僕はＳっ気に目覚めているらしい。イタズラを思いついた。

「・・・・・・んぅ！？」

アイスを適当な場所に置いたあと、優子の頭部と腰に手を回し、離れられないようにする。そのまま優子の口に舌を入れる。

「んぁ・・・・・・ぅ・・・・・・／／／」

「・・・・・・ん・・・・・・」

「ふぁ・・・・・・ぁっ・・・・・・んぅ／／／」

久し振りのディープキス。僕と優子を繋ぐ銀色の糸が二人が離れると同時に切れた。

「・・・・・ば、ばかぁ／／／」

「もう一回しない？」

「だ、ダメよ！　変な気分になｒ、んぅぅぅ！」

優子が全部言い切る前に僕は口を塞ぐ。ゴメンね優子。僕もう変な

気分なんだ。手の位置を変えてお姫様だっこの体勢。そのままベッドへ優子を降ろし、僕は優子が逃げられないように馬乗りのような体勢になる。

「夜は、まだまだ長いよ？　先にイかないでね？」

「ひっ！」

この時の僕は、凄く良い笑顔だったという。そして二人の夜は明けていく・・・・・銀が置いたアイスに見守られながら。アイスは二人の熱気にやられていつもより早く溶けていく。銀の宿題をやっていたノートに染みを残して・・・・・

夢幻さんリクエスト　【鉄人×明久】　片思い的な感じになります。

『愛は鉄をも溶かすらしい』　時間軸　特になし

西村　ｓｉｄｅ

出会いというのは突然やって来るというが本当だった。何せ、そいつは入学式の日にセーラー服を躊躇いもなく着てきて体育館に突入してきたのだからな。そして今日も――

「くぉらー！　待たんか貴様らー！」

「ゲッ！　やばいよ雄二、鉄人だ！」

いつも通りあいつらは俺に追い掛けられている。もはやこれは日常茶飯事化しているのだろうな。

「んなこたぁーわかってる！　よし明久、久し振りに必殺アキちゃん爆弾だ！」

「フッ、僕がいつもいつもそんな簡たンゴペ！？」

「うぉりゃー！」

「んぎゃー！」

坂本が吉井を俺に投げつけ、その隙に自分が逃亡を図る必殺アキちゃん爆弾（というらしい）。確かに久し振りに見たな。だが、

「あまいわっ！」

「ぐぎゃっ！？」

俺は投げつけられた吉井を片腕で掴み、そのまま坂本目掛けて投げつける。

「な、何！？　ぐはぁっ！」

「・・・・・ぼ、僕の扱い、酷すぎる・・・・・・主人公なのに・・・・・」

生徒指導室・・・

今、俺の目の前には見慣れた光景が広がっている。何度か殴られた痕が残る正座をする問題児二人、という光景が。

「やれやれ、お前らは何度言ったらわかるんだ？」

「先生、隣のバカは何度言ってもわからないと思います」

「それは雄二もでしょ！？」

「二人共だ」

「先生、俺は今日用事があるのでもう帰らせてくれませんかね？」

「ちょっ！？　僕のことはスルー？」

「ほう、どんな用事だ？」

「今朝おふくろがプチプチを潰し始めたおかげで家の家事が滞っているんだ」

プチプチを潰し始めたと言われたところで今朝の話。今はもう放課後だぞ？

「坂本、嘘を付くならもっとマシな嘘をだな」

「鉄人、俺の目が嘘を言っているように見えるか？」

・・・・・・・・・・・・・コレは困った。嘘を付いているようには見えんな。

「まったく雄二、プチプチを何時間も潰し始める母親なんているわけないじゃないか」

「明久、世界は、お前が思っている以上に、広いんだぞ？」

「・・・・・・いいだろう。今日はもうこれで勘弁してやる。あと俺のことは西村先生と呼ぶように」

「よっしゃ！」

「えぇー？」

「俺は吉井と1対1で話したいことがあるからな」

「えぇーーー！！！？」

「じゃ、頑張れよ明久」

「鬼！　悪魔！　鬼畜野郎！」

「ハハハハ！　何とでも言いやがれ！　じゃあな～」

そう言って坂本は部屋を出て行く。さて、二人きりになったが・・・・・・

「で？　僕と1対1で何を話すって言うんですか？」

「今、お前は幸せか？」

「はい？」

「幸せかと聞いている」

「まぁ、皆が、いますから」

「・・・・・・そうか」

その皆の中に俺は入っていないんだろうけどな。

「それだけだ。もう行っていいぞ」

「？　そうですか。じゃ、僕は行きますんで」

「あぁ、もうするなと坂本にも言っておけ」

「はーい」

そのままドアから出て行くと思われたが、ドアに手をかけた時、吉井はこう言った。

「・・・・・・鉄人のことも、一応、入ってますから」

そんな言葉を残して、吉井は部屋から出て行った。フッ、まったくあいつは・・・・・・

「・・・・・・だから、西村先生と呼べと言っているだろうが」

ドア一枚を挟んだ向こう側で、学校１の問題児は笑みを浮かべていた。

夢幻さんリクエスト　【銀×秀吉】　第三者視点でいきます。あと、優子↓銀　光↓秀吉
どちらかというと、カップリンクが逆になりましたがよろしいでしょうか？

『男の娘でも愛さえあれば問題無いよね！？』　時間軸　光が日本帰国後

優子　ｓｉｄｅ

「～♪」

「～♪」

「・・・・・やばい、うざい」

「ねぇねぇ優子、あの二人、「ゴメン、それ以上は聞かないで」・・・・・わかった。察しろってことだね」

真奈、銀が組織入隊時に知り合って銀の現パートナーが聞く。そう、今私達の前では――

「銀、味見してみてはくれぬか？」

「いいよ」

「では、あ～ん」

「んっ」

「どうじゃ？」

「うん。おいしいよ。流石秀吉だね（なでなで）」

「て、照れるのじゃ／／／」

桃色の結界が台所を支配していた。何！？　何なのこの空間は！？

毎朝毎朝～！

「・・・・・」

バキッ

あらいけない。リモコンを壊してしまうところだったわ。

「うわっ、凄い握力だね。私も事を起こす時の為に鍛えておくよ」

「良い心がけね、真奈」

「とりあえず、リンゴをっと、」

グシャッ

「優子もどうぞ」

「ありがとう」

グシャッ

「あれ？　秀吉、何で二人分もお弁当を作ってるの？」

「片方は、銀のじゃ／／／」

「あ～、だから昨晩『銀は明日姉上と真奈の弁当を作るだけで良いぞ』って言ったのか」

「う、うむ。銀ほどではないが、ワシもそれなりに料理が出来るようになったから、銀に食べて欲しかったのじゃ／／／」

「そっか。嬉しいよ秀吉」

「か、勘違いするでないぞ！　あくまで料理を勉強したのは、母上の手伝いをしたかったからで、銀の為じゃないんじゃからな！　食べて欲しいというのは感想を聞かせて欲しいという意味で、改善点を教えて欲しいってことじゃ！／／／」

何が「銀の為じゃないんじゃからな！」よ！？　ツンデレのつもり！？　あんたにツンデレは似合わないっつーの！　しかも感想を聞かせて欲しいってハッキリ言っちゃってるじゃない！　改善点を教えて欲しいって、後付する意味無いわよ！

「・・・・・優子、もしかして毎朝コレ見てるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・これから真奈もそうなるのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・マジですか」

「いやぁ～、柚葉さんもこんな親孝行な子を持って幸せだなぁ」

「そ、そんなことないのじゃ／／／」

何？　それアタシにケンカ売ってんの？　アタシだって銀にバレないように母さんから料理を教えてもらってるのに・・・・・！

「・・・・・・・・・・・・・・・優子、殺っちゃダメかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・私的には今すぐやっちゃいたいんだけどね。でも、それじゃいつまでも繰り返し。だから、手っ取り早く終わらせるには――」

「私達が二人を振り向かせる、と？」

「そうね。まぁでも、」

「一応言っておくがの、銀が初めての相手じゃからな。ワシがお弁当を作った」

「そっか。じゃあ僕は、秀吉の初めてを1つもらったってことか。何か嬉しいな」

「べ、べつに・・・・・・銀にじゃったら他にも初めてをあげても良いぞ？／／／」

ブチッ×２

「今は、殺っちゃっていいんじゃないかしら？」

「だよね～」

その後、銀の家に２人の叫び声が響き渡った。

文月学園Ｆクラス・・・

「あれ？　今日秀吉と紫苑は？」

「何でも、ケガをしたので休むそうですよ？」

夢幻さんリクエスト　【秀吉×光】　ちょっと長くなりました。

『正夢？』　３巻内容終了後

秀吉　ｓｉｄｅ

「ワシは、光のことが好きじゃ！　じゃ、じゃから、その・・・・・・

・ワシで良ければ、お付き合いして欲しいんじゃ！」

人生初の告白じゃった。生まれてこの方、恋なんてしたこととしたことなく、おなごに興味はあると言っていたものの、特に気になるおなごはおらんかったので日々明久達に女だ女だと言われておったが、ワシにようやくできた気になる存在。『宮野　真奈』。本名『紅光』。１目見た瞬間からじゃった。重症じゃった。それから、月日が経って、今日、告白した。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

長い沈黙がその場を支配していた。そして、光が口を開いた。

「・・・・・・私で良いの？」

「も、もちろんじゃ！　光じゃないと嫌なんじゃ！」

「秀吉君・・・・・・うん、これから、よろしくね？」

「っ！」

そしてワシは思わず光に抱き付いてしまった。

「！」

そこで、目が覚めた。良い夢じゃったな・・・・・・

「～♪」

今無性に喜びたい気分じゃ。今日は朝から運が良いと思うじゃ。枕も柔らかくて寝心地が良くて、

「あっ／／／」

「・・・・・・・・・・・・・は？」

『あっ』？　何で今声が聞こえたんじゃ？　そういえば何でワシの視界が閉ざされておるのじゃ？　真っ暗とは言わんが、何か肌色というか・・・・・・あと、手に握っている物がやたら柔らかいような・・・・・・っ！！？　こ、これはもしやお約束の・・・・・！

「・・・・・・・（チラッ）」

「・・・・・・・（ニッコリ）」

光がいた。それもとびきりの笑顔で。

「ねぇ秀吉君」

「・・・・・・・・・・・・・はい」

今のワシは、さしずめ蛇に睨まれたカエルといったところじゃろうか。

「私のおっぱい柔らかかった？」

くっ！　こ、この質問は・・・・・・！　今ワシはもの凄く高度な返答を要求されておる！ワシは原作でツッコミキャラじゃが、ここ

は2次小説の世界！　こちらではワシは原作のようなツッコミは出来ぬ！　しかも、原作でツッコミとはいえ至極まともなツッコミじゃから読者の皆様が望むような素晴らしい返答が出来るかわからんし、つまりｒｙ！

「ねぇ、どうだった？　柔らかかった？　興奮した？　ずっと触っていたい？」

ひぃぃ～！！　これは理不尽じゃ神よ～！　こ、こうなったら、ワシも覚悟を決めねばなるまい・・・・・・！

「・・・・・・・・・・す、素晴らしい胸だと思うぞい。大きさといい形といい揉み心地といい、正に胸の中の胸と言うべｋ」

パアンッ！！！　←平手の音

数分後・・・

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

朝食の席。沈黙が、支配していた・・・・・・

「えっと、２人とも、何かあったよね？」

銀の何かあっただろうということをわかった上での質問。そりゃそうじゃろうな。何せワシの頬が思いっきり手の型で赤くなっておるんじゃから。

「秀吉君に胸を思いっきり鷲掴みにされた。私が声出すまで止めてくれなかった」

「「うわぁ・・・・・・・（ひきっ）」」

銀と姉上がテーブル、正確にはワシから距離を取った。

「ちょっ！　待って欲しいのじゃ！　アレは不可抗力だったんじゃ！　朝起きたら体勢がそうなっていたからであって、決してワシがワザとやったわけじゃないんじゃ！／／／」

「しかも私の胸のことについて批評してた」

「「うわぁ・・・・・・・（ドン引き）」」

銀と姉上がさらにワシから距離を取った。

「あ、あれは光がどうじゃったかと聞いてきたから／／／」

「・・・・・・秀吉」

「な、何じゃ姉上」

「あんた・・・・・・・変態ね」

「そ、そんな・・・・・・・・！／／／　ぎ、銀も、そう思っておるのか！？」

「大丈夫だよ、秀吉」

「銀・・・・・・！」

そ、そうじゃよな。銀はいつもワシと同じ立場の人間じゃから庇ってくれるはずなのじゃ。

「例え変態でも、秀吉は僕の幼なじみだから」

「2人共嫌いじゃぁああ！！」

数分後・・・

自室・・・

「グスン・・・・・・」

今日が休日でホント良かったのじゃ。あのまま学校になど行けぬ。いったら大恥をかくところじゃよ。因みにワシは今部屋の隅に体育座りをしている。

ガチャッ

「あ～、そんなに落ち込まなくとも・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「も～、シカトは止めて欲しいんだけどな～」

光といえど、今日は騙されんぞ。

「まぁその、ゴメンね秀吉君。イジメ過ぎちゃったかな」

「どうせワシは変態じゃよ」

「も～、そんなことないってば～」

「・・・・・・（ビクッ）」

光がワシの首に腕を巻き付け、顔を首のすぐ横に持ってきた。

「・・・・・・今日は騙されんぞ」

「ありゃりゃ、ホントに騙されてくれないみたいだね。それじゃー」

うっ！　胸が背中に当たってる・・・・・・！

「今朝秀吉君が胸の中の胸だと言ってくれたコレならどうかな？」

「・・・・・・・・・・・・っ／／／」

「ねぇ秀吉君。勝負しよっか？」

「な、何のじゃ？／／／」

今押し付けられているこの胸の感触を誤魔化すためにも少しでも会話で・・・・・・！

「今から5分以内に私が自分のことを秀吉君に許させたら私の勝ち。5分以内に秀吉君が私のことを許さなかったら秀吉君の勝ち。どう

？」

「それは些か光が不利ではないか？　それにワシが得するだけじゃと思うんじゃが」

「そうかな？　まだ私は罰ゲームを言ってないよ？」

どんな罰ゲームを提案する気じゃ？

「もし秀吉君が負けたら私の買い物に付き合ってもらうよ？　で、私が負けたら――」

ふぅ、ワシは負けても損はないらしいのう。しかも買い物に付き合うってことはで、デートになるんじゃなかろうか？　それならいっそワザと負けても良い気がするのじゃ。

「今日秀吉君の前ではずっと裸でいてあげる」

・・・・・・・・・・・・へ？

「ちょっ！　それは！」

「さぁさぁ秀吉君！　キミには私を今日1日中辱められる勇気があるかな～？」

卑怯じゃー！！

「～♪」

「楽しかったようで何よりじゃ」

結局ワシは負けた。そりゃあ光の裸が見たくないわけではないが、そんなことされたら色々な物が保たないのじゃ／／／

「フッフッフ、ああいう勝負事では私が1枚上手のようだね」

そんなドヤ顔で言わなくともわかっておったのじゃがな。少なくともワシより5枚位上手じゃよ。

『あ、ねぇねぇキミ達』

「「？」」

こういう連中、最近よく見かける気がするのじゃ。

『これからちょっと時間あるかな？』

ナンパ、というヤツじゃな。

「ワシは男じゃが？」

『へ～、キミ男の娘なんだ。全然そうは見えないけどなぁ～』

何か今ニュアンスが違った気がするんじゃが気のせいじゃろうな、うん。

『ちょっとだけ付き合ってくれたらお金払うからさ。ダメ？』

「私、お金如きじゃ体を売るような安い女じゃないんです。失礼しますね？」

おぉ、あっさり断ったのじゃ。

『そこを何とか・・・・・・お願いします！』

ど、土下座、じゃと？　日本人の断れない精神に働きかけてくるとは・・・・・・！　しかもここは天下の往来。人通りも多い。今ワシらへの視線が多数あるのじゃ。

「ふぅ、秀吉君」

「何じゃ？」

「あーん、ってしてて。あと、演技、よろしくね？」

「う、うむ」

一体光は何をする気じゃ？

「あの、止めてください。顔を上げてください」

『・・・・・・』

男は様子を見るようにこっちを見上げる。「真奈、これからどうするんじゃ？」そう聞こうとしたその時、

「ん／／／」

「・・・・・・・・・・・・・」

光の顔が目の前にあった。ワシは、今何をされておるんじゃ？　唇に柔らかい何かがってちょっ！？

「んぅ・・・・・・・・んん～！？！？！？／／／／」

「ん・・・・・・・はぁ・・・・・・・ぁむ／／／／」

口の中に何か入ってきたのじゃ！　わ、わかった！　ワシはキスをされておるんじゃ！　しかも深い方の！　光は逃がさないとばかりにワシの首に両腕を回してきた。

「ぅん・・・・・・・はぁ／／／／」

「～～～ぷはっ／／／／」

ようかく解放されたワシは全身の力が抜けて思わずその場にへたり込んでしまった。

そしてワシをこんなにした張本人である光はというと――――

「ごめんなさい。見ての通り私達これから色々しなくちゃいけないことがあるんです。例えば――――子作り、とか」

『「っ！？！？」』

ワシもナンパしてきた男も光の爆弾投下にビックリ仰天！　光が何を言っているのかサッパリ理解できない！

「それじゃ、行こう。あなた？」

『す、すみませんでしたぁー！！』

ナンパ男は1目散に逃げ出した。

「お～、効果抜群だね。ね？　秀吉君」

「・・・・・・・・・・・・・」

「アレ？　秀吉君？　お～い」

この後、銀が来てくれてワシと荷物を運んでくれたとか。

「！」

す、凄い夢を見てしまったのじゃ。夢であることが惜しいくらいの・・・・・・

そういえば今日は休日じゃったよな。なら、偶には2度寝しようかの。もしかしたら続きが見れるかもしれんし。この柔らかい枕ならすぐに寝られそうじゃ。

「あっ／／／」

「・・・・・・・・・・・・・はっ？」

『あっ』？　何で今声がｒｙ。　そういえば何でワシの視界がｒｙ　真っ暗とは言わんが、何か肌色ｒｙ。あと、手に握っている物ｒｙ。　こ、これはもしやお約束の・・・・・・！

「・・・・・・（チラッ）」

「・・・・・・・（ニッコリ）」

光がいた。それもとびきりの笑顔で。

「ねぇ秀吉君」

「・・・・・・・・・・・・・はい」

こ、こんなことがありえるんじゃろうか・・・・・・！

「私のおっぱい柔らかかった？」

理不尽じゃー！！

「はい。ここまで」

「え？　姉上？　どうしたんじゃ？　まだリクエストは残っておるぞい？」

「秀吉、ページ数見てみなさい。もう２２ページ目よ」

「本当じゃ・・・・・・」

「そういうわけで、申し訳ありませんが『んけｍる』さん、『ａｓｔｙｕ』さん。次回と次々回に書かせてもらいます。本当に申し訳ありません」

「流石姉上、キチンと猫を被っておるな」

「秀吉、ちょっとこっち来なさい？」

「い、いや姉上？　今はちょっと手が離せなくてあぁぁーー！！！」

「問☆答☆無☆用」

番外編　シチュエーション妄想局　拡大版　パート1（後書き）

次回予告　今回も優子と秀吉です。

まだまだ続く妄想！　そしてその妄想は世界を捲き込む！

そこまで大きい話じゃったか！？

次回　バカと銀色と召喚獣　『シチュエーション妄想局　拡大版　パート2』

妄想よ、永遠なれ

最近姉上がキャラ崩壊しているのじゃ・・・・・・

番外編　シチュエーション妄想局　拡大版　パート2（前書き）

遅くなり申し訳ありません。

番外編　シチュエーション妄想局　拡大版　パート2

「木下姉弟の～」

「シチュエーション妄想局っ」

「「拡大版～！！」」

「今回は『ａｓｔｙｕ』さんのリクエストを妄想させてもらうわね」

「今回は百合の花が咲き誇る気がするのじゃ」

「それではっ」

『レッツ、妄想！』

下記のｓｓは全てフィクションです。本編・原作のキャラ・団体とは無関係です。

ａｓｔｙｕさんリクエスト　【優子×光】

『秘密の共有』　時間軸　３巻内容中

優子　ｓｉｄｅ

アタシと真奈には人には言えない秘密がある。

「真奈～」

今部屋にいるのはアタシと真奈だけ。他の皆はちょっと席を外している。

「ん、どしたの優子？」

腕を回して寄りかかるようにして真奈に抱き付く。

「こうしたかっただけ」

「変な優子～」

クスクスと笑う真奈。アタシが変になるのは真奈の前だけよ。そんなツッコミは心の中だけにする。

「何か優子って、あんまりこういう事をしてこない人かと思ってたから、ちょっと意外だな」

アタシがこういう事をするのはｒｙ。そんなツッコミはｒｙ。

「じゃあこんなことをするアタシとしないアタシ、どっちが良い？」

「う～ん」

会話に混ぜて好みを聞いてみる。

「私は支部の方では今の優子みたいな事を普通にやってるからこういうことをする優子の方が接するときは楽だな」

「へ～、真奈がそう言うならそうする」

「ありがと～」

「でも、真奈」

「うん？」

ちょっとヤキモチを焼いてみる。

「支部の方ではアタシ以外の女の子とこういうことやってるの？」

「うん。まぁ、ね・・・・・・もしかしてヤキモチ焼いてる？」

「・・・・・・うん」

「クス、わかった。支部の方ではあんまりしないようにする。だから、ね？」

「ならいい」

出来ればするのはアタシだけにして欲しいものだけど、欲張りは良くない。なので欲張りではないアタシは我慢することにする。

「そういえば優子、今日は機嫌良かったね」

「そう？」

「うん。♪マークが飛び交ってたよ？」

「だって光と秘密が共有できたし」

「そんなに嬉しかった？」

「うん！　だって恋人との秘密の共有よ？　嬉しくないわけ無いじゃない！」

そう。アタシと真奈の秘密というのは恋仲だということだ。なったのはつい先日。まだまだ成り立てだ。因みに告白してきたのは光から。ちょっと意外だった。

「初めが銀なのはちょっと納得いかないけど」

「でもまぁ仕方ないかな。逆に銀がいなければ私と優子も出会わなかったんだし」

「そうね、そういう意味では銀に感謝しなくちゃね」

しょうがないわね。妥協して銀は許す。

「光、キスしたいんだけど」

「唐突だね。また」

「してくれないの？」

「し、したいけど・・・・・・戻って来たらどうするの？」

「どうせ足音で光は気付くでしょ？」

「うっ、そうだけど・・・・・・」

「アタシとキスするの、嫌？」

「嫌じゃないけど、その・・・・・・なだ慣れなくて」

光のこういう初々しいところ好きなのよね。

「アタシに告白出来たんだから出来るわよ」

「う、うん・・・・・・ん／／／」

「んっ」

口付けをかわすアタシ達。あぁ・・・・・・幸せ。おっといけない、鼻血が・・・・・・

「・・・・・もぉ、恥ずかしいんだから偶には優子からやってよ。てか鼻血どうしたの？」

「ヤダッ☆。鼻血に関してのツッコミは不要よ」

「不公平だよ～！」

「世の中公平には出来てないのよ」

光が頬を膨らませている。可愛い。

「じゃあ秀吉君とキスしてkんぅぅぅ！」

「んっ。キスしたわよ」

「・・・・・不意打ちなんて狡い。しかも言い切らせてくれなかったし」

「あの愚弟にだけは光の唇は渡さないわ！」

もし強引にでも奪ったら、５ォ連打ァ！　をかますしかないわね。

「じゃあ真奈、皆が戻って来たらお風呂行きましょ？」

「うんいいよ。背中流しっこする？」

「する！」

と、その前に、今夜も攻めて来るであろうバカ達を排除してからだけど。フフフ、これでまたアタシと真奈の絆が深まるわ・・・・・・！　そして偶然を装いつつ光の体を・・・・・ジュル。あらやだ涎が。

光　ｓｉｄｅ

「？（ブルッ）」

何でだろう。優子からメチャクチャ視線を感じる。気のせいだと思

うけど召喚獣の戦いも私の周りに召喚獣が集まってきてる気がする。そして優子から凄い視線を感じる。また何かされるのかな？　そして優子からｒｙ。そのせいで男子たちが怯えてるんだよ？　気付いてる？　優子、あと・・・・・・涎出てるよ？

ａｓｔｙｕさんリクエスト　【悠里×詩穂】

『』　時間軸　特になし

悠里　ｓｉｄｅ

「ど、どうしよう・・・・・・」

今あたしは『月下』内の通信室の前にいる。目的はしほりんにお弁当を渡す為だ。丁度今は昼休憩の時間なのでしほりんもこれから昼食をとるだろう。でも問題はどうやって渡すかだ。

『作りすぎちゃって、一緒に食べない？』

いやいや、ないわ～（＊´Д｀）＝３ハァ。あたし普段はあまりお弁当を作ってこない人なのにいきなりたくさん作って来てしまったとなるとちょっとおかしいと思う。

『しほりんの為に作ってきたんだけど・・・・・・』

・・・・・誰？　この人。あたしこんな恋する乙女みたいなキャ

ラだったっけ？　とりあえず却下。何でお弁当渡すだけにこんなに手間取ってるんだろ・・・・・・しほりんとの約束もあるのに・・・・・・そうだ、約束があったじゃん。

「しほりん、あーや、お昼にしよう？」

「そういえばそんな時間だね」

「では、食堂に行きましょうか」

食堂・・・

「はい、うり」

「ありがとう、しほりんのも」

「お弁当の交換ですか？」

そう、あたしとしほりんは昨日お互いにお弁当を交換しようという約束をした。しほりんのお弁当が食べられるとあって、つい返事をしてしまった。だがこれがいけなかった。失念していたのだ。あたしは料理が苦手だということを。なので昨日あーやに『料理教えて』と泣き付いたのだ。あーやに借りができたが、おかげで納得のいくお弁当をしほりんに渡すことが出来た。あーやに口止めのお願いをし忘れていたが、本人はアタシの気持ちを知ってか知らずか知らなかったという風に振る舞ってくれている。あぁ、あーやありがとう。その気遣いが嬉しいよ（喜＜ω＞）ノ。

「うん。うりと昨日約束してたんだ」

「そうですか、私は仲間はずれですか・・・・・・」

「ち、違うんだって！　あーやにも言おうとしてたんだけど、忘れてて」

「今度はあーやも一緒に、ね？」

「まぁ、いいです。次回は誘ってくださいね？」

「うん、そうしよう」

昨日あーやとやったやり取りをもう一度繰り返すことになった。ごめんねあーや、ホントはしほりんのお弁当を独り占めしたかっただけなんだよ；；。まぁそのこともあーやに見透かされてたけど。あーや無駄に鋭いんだもんなぁ～

「あ、この卵焼きおいしい」

「よかった～、口に合わなかったらどうしようかと思ったよ」

「どれどれ私も」

「どう？」

「確かに、これはおいしいです。今度教えてほしいですね」

「大げさだよ。こんなので良かったら教えるね」

う～む、確かにおいしい。あたしも今度からお弁当にして料理の腕を鍛えようかな。

「うりのからあげ美味しいね」

「えっ？　あ、そ、そう？　ありがとう。練習した甲斐があったよ」

「え～、この腕で練習されたら私なんかすぐ置いてかれちゃうよ」

「そんなことないって、昨日さんざん練習してやっとこさこれだよ？」

「ホントに～？」

「うりが練習とは、しほりんに美味しいお弁当をあげる為に必死ということですね」

「ちょっ！　からかわないでよあーや」

こうして楽しい食事の時間は過ぎてゆく・・・・・・・

休憩室・・・

「あっ」

「ＺＺＺ」

ソファーにしほりんが仰向けに寝ていた。

「まったく、無防備だよしほりん」

こんな状況でしほりんに好意を寄せている男が来たらどうするんだよ。イタズラされちゃうぞ？

「綺麗な髪・・・・・・さらさらしてる」

かくゆうあたしもイタズラする方なんだが。

「いい匂い・・・・・・」

傍から見たらあたし変態だね。運よく人がいないから良いけどさ。でも、こんなに無防備なしほりんが悪いんだよ。さて、次は何しようか。

「・・・・・・（チラッ）」

ふむふむ、下着の色はピンクかぁ。この時詩穂の頬がうっすらと赤く染まっていたことに悠里が気付くことはなかった。

「や、やっぱりさ・・・・・・」

この時のイタズラの定番って言ったら、

「キス、だよね・・・・・・／／／」

しほりんの桃色の唇・・・・・・とっても柔らかそう。

「～～～～～っ／／／」

あたしは勇気を振り絞ってしほりんの唇に自分のを近付ける。ゆっくり、ゆっくりと・・・・・・そして2人の距離はゼロに――――

「うり、ここで何しているんですか？」

「きゃぁぁあ！！」

「ひ、悲鳴をあげられると何か悪いことをした気になりますね」

悪いことをした気になるじゃなくてしたんだよ！　千載一遇のチャンスだったのに！

「な、何でもない！」

菖蒲　ｓｉｄｅ

悠里は私が話しかけた後に走り去って行きました。

「ふぅ、これで良かったですか？」

「うん。バッチリ」

先ほどまで寝ていたはずのしほりんが勢いよく起き上がります。この時点で読者の皆様が想像できると思いますが、いままでのはしほりん画策の演技だったのです。本人曰くうりがどんなことをしてくるのか知りたかったという。

「どうだった？」

「良い絵が取れました」

そして私はカメラマン。あんなうりの姿を見られたのですから大満足です。

「でも、少しうりが可哀想では？」

「そうかも、じゃあ今度アメをあげようかな」

『アメと鞭』ですか、しほりんって結構腹黒いということを最近知りました。

「あーや、今私が腹黒いとか考えなかった？」

「（ブンブン）！」

どうやら読心術も持ち合わせているようです。

ａｓｔｙｕさんリクエスト　【康太×愛子】　長めです。ギャグっぽくなりました。

『俺と愛小と保健体育？』　時間軸　３．５巻あたり

康太　ｓｉｄｅ

チュンチュン

「・・・・・・・・・・・・・・ふぁ・・・・・・・・ぁ」

小鳥の囀りが聞こえる。うむ、いい朝だ。今日も学校があるのでいつも通り登校の準備を済ませる。

「あ、康にぃ行ってらっしゃーい。そしてあたしも行ってきます！」

「・・・・・・・・・・・・・・気を付けてな」

妹の○○だ。我ながらかなり活発な妹を持ったものだ。え？　何故○○っていう表記なのかって？　むしろ俺が聞きたいくらいだ。９．５巻で妹の名前だけは出てこなかったからな。仕方のない処置だ。土屋家一同で原作者さんに問いただしたい。

学校のとある場所・・・

ムッツリ商会の朝は早い。部活で朝練のため早く来ることもある顧客たちのためにもこうして朝早く投稿する必要があるのだ。理由は他にもある。校内のいたる所に設置してある隠しカメラの回収だ。貴重な映像が入手でき、売り上げにも大きく貢献しているこのカメラ。当然見付かったらタダじゃすまないが、それだけのことをする価値のある物だと俺は断言できる。とはいっても最近このカメラ、あまり映像を入手できていないのだ。何故かというと、俺の宿敵にして天敵の『工藤　愛子』によってカメラが発見されているためだ。そのたびにこちらにわざわざ出向いてきて俺を死の淵へ追いやった

り買い物に付き合えだの戯言を吐いてくる。こんなムッツリの俺と買い物しても楽しいことなどないだろうに。やれやれ、学習能力の無いやつめ。

「ムッツリー二、今やっておるかの？」

「・・・・・・・・・・・・いらっしゃい」

本日最初のお客様。と、このようにいつも通りの日常を過ごすはずだった。アイツが現れるまでは・・・・・・

数分後・・・

さて、そろそろＨＲが始まるな。この続きはまた――

「ねぇねぇ、康太君、康太君」

俺の名を呼ぶ声が聞こえた。しかも俺のことを康太と呼ぶのは紫苑か愛子位のもの。そして今の声からして愛子が俺を呼んだのだろう。それはいい。しかし、肝心の愛子の姿が見えない。

「・・・・・・・・・・（キョロキョロ）？」

「ここだよ、康太君」

また声がした。しかし未だに愛子の姿はない。何だ？　からかわれているのか？

「だからこっちだってば！　下だよ！」

「下？」

下を見てみた。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

は？　言葉を失った。行儀悪いのは分かっているが口があんぐりだ。

いや、うん、ちょっと待て。落ち着け俺。こういうツッコミ役は俺の管轄外のはずだ。ツッコミは明久や紫苑の方で処理してもらいたい。

「うん、康太君が口あんぐりな状態になるのも無理はないよね。いや～、ボクも部活終わった時はどうしようかと思ったよ」

まぁ、このまま俺の心理描写を延々と書いていても読者の皆様には状況がサッパリ呑み込めないだろう。一言で今の状況を説明すると、こうだ。

召喚獣サイズの愛子がいた。

教室・・・

ガラッ

「あ、おはようムッツリーニ。今日は鉄人が運よく忘れ物したから遅刻は免れたね」

「・・・・・・・・・・・・・・あ、あぁ、ちょっと職員室に寄っていた」」

「ふ～ん、それはそうとムッツリーニ、やけに挙動不審だけれど？」

「・・・・・・・・・・・・・・気にするな」

「う、うん」

ええい！　こんな時だけ鋭い！　いつもはバカのくせに！　とにかく、俺は今バッグの中に入っている爆弾？　を見られるわけにはいかない！

回想・・・

そう、召喚獣サイズの愛子がいたんだ。愛子の召喚獣ではなく、あくまで、愛子本人が。

「・・・・・・・・・・・・・・どうしてこうなった？」

「それがボクにもサッパリでさ。部活の朝練が終わって着替え終わっていざ教室へ向かおうとしたら急にこうなっちゃった」

「・・・・・・・・・・・・・・」

頭が痛い。原因不明の人間の縮小。珍事だな。

「・・・・・・・・・・・・今このことはだれが知っている？」

「まだ康太君だけだよ。時間が時間だったから人が少なかったし、距離的な問題もあったから」

できれば猫の手も借りたい状況だ。

「それに、こんな姿だったら変なことされちゃうかもしれないから・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・何か言ったか？」

「う、ううん！　何にも言ってないよ！」

「・・・・・・・・・・・・とにかくだ、一旦高橋先生に愛子は保健室で休んでいると報告しておこう」

「そうだね。それがいいよ」

「・・・・・・・・・・・・今は時間がないからとりあえずバッグの中へ入れ」

「わかった、でもあんまり揺らさないでね？」

愛子を一先ずバッグの中に入れ、いざ出発という時に愛子がバッグから顔を出した。

「・・・・・・・・・・・・どうした愛子？」

「康太君、とりあえず愛子って普通に読んだんじゃ怪しまれるから今のボクのことは『愛小』って呼んでよ」

べつに呼称で困っているわけじゃない！　しかもそれでは結局愛子を呼んでいることには変わらんだろ！？　文字が違うだけで発音は一緒なんだぞ！

回想終了・・・

授業中・・・

さて、一応乗り切ってはいるがこれからどうしたものか・・・・・・。召喚獣システムの故障なら話は早かった。しかし人間の縮小となると話は別だ。こういう時こそ悪友で頭の回る雄二の知恵を借りたいところだが、もし愛小の姿を見られたらなんかマズイ気がする。主に俺の命が。

キーンコーンカーンコーン！

『では、これで終了とする。号令』

『起立！　礼！』

本日４度目の授業終了を告げるチャイムが鳴った。つまり昼休みになった。

「ムッツリーニ、一緒に食べない？」

「・・・・・・・・・・・・すまない、ちょっと今日は」

明久が昼食を共にしないかと誘ってきた。普段なら受けているところだが、今回は状況が状況なため断らせてもらう。

「何かあるの？　まぁ詳しくは聞かないけど」

「・・・・・・・・・・・・すまん」

ガラッ

不意に教室のドアが開いた。

「・・・・・・土屋、いる？」

「ゲッ、翔子！」

マズイ、雄二の婚約者「違う！」『霧島　翔子』だ。その後ろには秀吉の姉『木下　優子』。秀吉の思い人『宮野　真奈』もいた。ムサイ男共の巣窟であるＦクラスに天界の神から使わされた天使のようなこの３人が一体何用だろうか？　見ろ、男子どもはイスラム教の礼拝の如く３人を崇めているぞ。霧島翔子だけなら雄二関係だと推測できるのだが・・・・・まさか！

「翔子、何しに来た？」

「・・・・・雄二に会いに来た、というものあるけど、１番の理由は愛子のこと」

「工藤がどうかしたのか？」

「今朝から保健室にいて、クラスに顔見せてないからお見舞いに行こうと思ってたんだ。愛子のことだったら土屋君が何か知ってるんじゃないかと思ってね」

「えっ？　愛子ちゃん大丈夫なんですか？」

「それを土屋君が何か知ってるかもだから一応聞きに来たってわけよ」

やっぱりそれか！

「そういうわけで土屋君、愛子大丈夫そうだった？」

「・・・・・・・・・・・・本人曰く軽い疲労だから見舞いは不要だと言っていた」

マズイ・・・・・・ここで3人に行かれたら愛子が保健室にいないことがバレてしまう！　それだけは避けなければ！

「ちょっと土屋、何でウチらに教えてくれなかったのよ」

「・・・・・・・・・・・・愛子から出来れば言わないでほしいと言われてたから」

「まったく、な～にが大丈夫なのかはわからないけど、代表、一応行くってことでいいわよね？」

「・・・・・うん。私も心配」

何!?　それはマズイ!

「あ、だったら私も行きます。私も愛子ちゃんが心配ですし」

「当然ウチも行くわよ」

島田と姫路、お前らもか!

「んじゃ、だったら俺たちも行くか?」

「そうだね、あんまり大勢で行くのも迷惑かもしれないけど、行こうかな」

雄二と紫苑も、このままでは全員で押しかけることになるのは確実!　一体どうしたら!

「そういえばさっきムッツリーニはどこかへ行こうとしておらんかったかの?」

「あ、そういえば」

「さてはアンタ、1人で行こうとしてた?」

「・・・・・・・・・・いや、そんなことは」

愛小となってしまった愛子に食べ物をやらねばならないが。

「あ〜、なるほどね」

「確かに、土屋君が行った方が愛子も喜ぶような気がするな～」

？　どういうことだ？

「そうね」

「・・・・・・じゃあ、土屋、愛子は任せた」

「・・・・・・・・・・・・・あ、あぁ。愛小は任せろ」

教室を出る時に聞こえた『愛子は任せろだってさ、きゃー！』『危うく2人の時間を邪魔してしまうところでしたね』『・・・・・・危ないところだった』などという会話は無視しよう。

学校のとある場所・・・

とりあえず人気のないところに来てみた。ここでなら多分問題ないだろう。

「・・・・・・・・・・・・・愛小はどれ食べる？」

「じゃあメロンパンかな？」

購買で勝ったパンを見せて選ばせる。

「う～ん。やっぱ体が小さくなったから食べる量も減るんだね。これだったらラーメンのプールとか出来そうだよね？」

「・・・・・・・・・・・呑気なヤツ」

何でこいつはこんなに落ち着いてるんだ？　これでは1人考え込んでいる俺の方がバカみたいじゃないか。

「こうでもしないと気を紛らわせないんだもん。一応これでもちゃんと考えてるんだからね」

それが本当かどうかはわからない。でも、もし本当に悩んでいたのなら、無神経な発言だったな。失言だ。後で謝ろう。

「保健体育ってこういう体に異常が起きた時の為にも学んでおくものなのに、全然役に立たないよ。まったく、これじゃ意味ないよ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・そう言うな。仕方がない。こんなこと普通じゃ起きない。だから学ぶことが出来ない」

「仕方ないって、そんな簡単に割り切れないよ・・・・・・」

愛小の声が段々小さくなっていくのがわかる。俺は女の子を元気にする方法というものを知らない。そもそも女の子というものにあまり関わったことがないのだ。それに、ここまで親しくなった女の子というものは愛子が初めてだ。今は愛小だが。

「・・・・・・ん」

無意識の内に俺は愛小の頭を撫でていた。

「何？」

「・・・・・・・・・・・・・愛子がおとなしいのは性に合ってない」

「それってボクは煩いってこと？」

「・・・・・・・・・・・・・悪く言うなら。でも良く言えば元気だということ。俺にはない面だ」

「それって褒めてるの？　貶してるの？」

「・・・・・・・・・・・・・さぁな」

「む～」

頬を膨らませて一著前に怒っている愛小。何だかその姿がおかしくて笑みがこぼれる。こういうのも、偶には良いかもしれないなって思ってしまう。

放課後・・・

特に何事もなく放課後を迎えてしまう。こうも何もないと拍子抜けしてしまう。マンガやラノベなら次々とバレそうになるが、やはり現実とは違うということか・・・・・・（文字数などの事情により）

「結局元に戻らなかったね」

「・・・・・・・・・・・・・そうだな」

「今日、どうしようかな・・・・・・」

こんな小さい体で生活するのは1夜だけだとしても相当大変だろう。

つまり――――

「康太君の家行ってもいい？」

こうなるわけだ。

愛小ｓｉｄｅ

自宅・・・

「・・・・・・・・・・・・・ただいま」

そっとバッグの中から顔を覗かせてみる。玄関を見てみると1人っこにしては靴の数が多い。

「康太君って兄弟いたんだっけ？」

「・・・・・・・・・・・・・兄が2人、妹が1人」

「4人兄弟なんだ～」

「・・・・・・・・・・・・・あぁ」

その後は康太君の部屋へ移動。わぁ、男の子の部屋って初めてだか

ら緊張するなぁ。

「・・・・・・・・・・・・何をそんなに畏まっている？」

そりゃ好きな人の部屋なんだから緊張するに決まってるじゃん！

なんてことは口が裂けても言えなかった。

「男の子の家に来たのなんて初めてだし」

「・・・・・・・・・・・・そうなのか？　実戦派とか言っているからもう既に経験済みかとばかり」

「は、はぃぃ！？　あのね、ボクだってちゃんとそういうことの初めてはとってあるんだよ！？　そういうことの初めては好きな人とが良いに決まってるじゃん！」

「・・・・・・・・・・・・ふっ」

「い、今鼻で笑った！　『なんだコイツ実戦派じゃねぇじゃねぇか』とでも言いたそうな顔だった！」

「・・・・・・・・・・・・そんなことはない」

むきぃぃ！　いつもはボクが弄る側なのにぃ！

「えいっ（チラッ）」

「・・・・・・・・・・・・グハッ（ブシュッ）」

って、出血量が足らない！？　しまった、今のボクは愛小化してる

から量が少ないんだ！

「愛小貴様・・・・・・！　せっかく今日は面倒見てやっているのにこの仕打ち・・・・・・！　許すまじ！」

「きゃぁぁあ！　襲われる～！　犯される～！　強姦される～！」

「・・・・・・・・・・・・変なことを言いながら逃げ回るな！」

康太の妹　ｓｉｄｅ

今日は部活が早めに終わった。理由はあたしが通っている学校のテニス部は男女が曜日によってコートを使い分けていて、今日は男子がコートを使う日なのだ。なので女子は筋トレや体力作りなどで今日は終了となった。今日はどこかへショッピングという気分にもなれなかったので家でゴロゴロすることにした。

「ただいま～」

っと、返事はなし。でも見たところ靴はある。これは康にぃの物だ。じゃあ既に帰宅していたということになる。しかも何やらドタバタと音が聞こえる。１人で何騒いでんだろ？　好奇心に駆られ、喉を潤してから康にぃの部屋を覗いてみようと思う。そして部屋の前に立ったら女の人のこんなセリフが聞こえてきた。

『責任、とってくれる？』

このセリフだけで、あたしに何があったのかを理解させるには十分

な判断材料だった。

数秒前・・・

康太　ｓｉｄｅ

マズイ、妹が返って来た。そういえば今日は部活が早めに終わる日だった！　早くこの現状を収集しないと大変な誤解を招くことに！

「・・・・・・・・・・・・このっ！」

「そんなんじゃ捕まらないよ～」

小さくなった体で縦横無尽に逃げ回る愛小。予想以上の機動力に俺は翻弄されていた。

しかも妹は会談を上ってくる。あの行動力のある妹のこと、きっと部屋で騒いでいたら覗きに来るに違いない。今愛小はこちらに背を向けて逃げている。もう時間がない。俺は決死？　のダイブをすることにした。

「わっわわ」

急にダイブしてきた俺に反応できず愛小は俺の手の中に納まった。

ふぅ、事態収拾完了。っと、思ったんだが――

シュンッ

うん？　いきなり視界が真っ暗になったんだが？　それと同時に何

か柔らかく、少し湿っぽい感触が唇に。そして目の前に元の大きさに戻った愛子がいた。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

しばらく何も言えない俺と愛子。落ち着いて物事を判断するとどうしても覆せない１つの事実が出来上がる。俺は愛子にキスをしてしまったのだ。どちらからともなく離される唇。こんな時に名残惜しさを感じてしまうのは何故だろうか。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

再び訪れる沈黙。愛子が重く閉ざされた口を動かすことにより、長い沈黙を終わらせた。

「・・・・・・・・・・責任、とってくれる？／／／」

女性にとってのファーストキスの重さはいくら俺とて理解している。でも、俺には気になることがあった。

「・・・・・・・・・何故、そんなことを言う？　確かに、俺が愛子のファーストキスを奪ってしまったのは事実だ。でも、だからといって俺に責任取らせなくてもいいんじゃないか？　お前なら、もっと良い男を捕まえられると思うが？／／／」

「・・・・・・・・・・気付いてよ、鈍感」

ど、鈍感って・・・・・・俺はそんなものになったつもりはないんだが。でも、この場で愛子がその言葉を使うということは、意味は

1つに絞られる。でももし、これが俺の自惚れだったとしたら？・・・・・その時はその時だ。もう後戻りはできない。

「・・・・・・・・・・・・愛子はもしかして、俺のことが好きなのか？」

「そうだよ。やっと気付いてくれたんだね。鈍感でムッツリな康太君／／／」

「・・・・・・・・・・・・・っ！！／／／」

「と、とにかく！　ボクの気持ちは伝えたからね！？　あ、明日から覚悟しといてよ！／／／」

愛子はその後、顔を真っ赤にして出て行った。自惚れじゃなかった。ダメだ。ドキドキが止まらない・・・・・！

土屋家夕食の席・・・

いつも通り世間話や学校の話で盛り上がる我が家。だが俺には話の内容など入ってこない。愛子のことで頭が今は支配されている。でも、俺を正気に戻らせる発言を妹が言い放った。

「・・・・・今日、康にぃが女の人の初めてを奪ったらしい」

爆弾を投下した。

「「「「康太、ちょっとそこに正座しなさい（しろ）」」」」

ａｓｔｙｕさんリクエスト　【雫×マリア】　ちょっとシリアス

『酒の席にて』　時間軸　本編と同じ

マリア　ｓｉｄｅ

とあるバー・・・

ここは私と雫の行きつけのバー。月下には未成年が殆どだからバーとかはないんですよね。マスターにはもう完全に顔を覚えられている。お得意様だ。

「マスター、いつものお願い」

「・・・・・・・・・・・・（ペコッ）」

ここのマスターは無口だ。だがそんなところが店の雰囲気とよく合っていて私は素敵だと思う。

「こうやってあなたと飲みに来るのって何回目かしら？」

「流石に数えてないので覚えてませんよ？」

確かに、もう何度目になるだろうか？　雫とここに来るのは。友人になってから幾度となくこの店で一緒の時間を過ごした。

「・・・・・どうぞ」

マスターがいつものワインを用意してくれた。ワインは飲むだけじゃなく、楽しみ方があるのをご存じだろうか？　『色』・『香』・『味』だ。私はオリキャラ紹介のところでは酒が好きだと表記されていたが、作者さんが酒といっても色々あるということを忘れていた。一応言っておくが、私はビールやカクテルよりもワインが好きだ。雫も同じく。

「ありがと・・・・・相変わらず良いワインね。流石マスター」

「・・・・・（ペコッ）」

「今日はどうだった？」

「いつも通り博士に振り回されて大変です。そっちは？」

「今日はゆったりとしてたかな？　あと、新人3人を鍛えてた」

「あ～、休憩してた時に見えたあの3人がぐったりとしてたのって雫が原因でしたか」

「通信関係を担当する以上膨大なデータを一気に処理していかなくちゃいけないし、その中から向こうにいる人が必要としているデータを抜き出してあげなくちゃいけないでしょ？　だからまだまだ頑張ってもらわないと」

「で、弱ったところを襲うと？」

「・・・・・・・・・・・・」

「図星なんですか」

「まぁその話は置いといて」

置いとかれた。

「今回の、どう思う？」

「紫苑君のことですよね？」

「えぇ」

「何か、あるんだと思います。近い内に、その何かはよくわからないけど、デカい、何かが」

「そうね・・・・・・私もそう思う。紫苑君の出生とか秘密を教えたり、はたまた勧誘してくるってことは何かする気なんでしょうね。あの仮面の組織は」

「それに、今回の1件でオピュレンティアへの疑心感が広まりましたよね」

「組織自体が空中分解、なんてことにはならないでほしいケド」

「そう願いたいですよね」

あそこがなくなったら、私には・・・・・・ううん。私だけじゃなく多くの人が居場所を失う。それだけは、嫌だ。

「でもね、今回の1件で私が1番恐れたのは、それじゃないの」

「え？」

「紫苑君に対し、皆が今まで通りに接してくれるかってこと」

「あっ」

そういえばそうだ。仕組まれたことはいえ、1度組織を裏切るような形になったのだから受け入れられない可能性だってあったんだ。しかも、今の紫苑君は記憶を失っている。

「でも、そんな心配は杞憂に終わったけれど」

「そうですね。今の話を聞いた後皆の行動を思い出すと、そう感じますね」

「本当に良い子達よね。それなのに、私は皆を疑って・・・・・・何やってんだろうね？」

「でも仕方なかったと思います。誰でも私たちの立場だったらそう思っていたはずです」

「そう言ってくれると少し助かるわ。ねぇ、もし私が紫苑君みたいなことになったらどうする？」

「信じるに決まってるじゃないですか！　縁起でもないこと言わないでください！」

「でもどうして？　どうして信じてくれるの？」

そんなの・・・・・・決まってるじゃないですか。

「・・・・・・好きだからに決まってます／／／」

「え、あ～うん。ありがとう／／」

「って、そっちも照れてるじゃないですか！」

「だ、だって反則でしょ・・・・・・」

「雫が言わせたんじゃないですか！」

「だって、どう思ってくれるのかとか気になるし」

「私は常に雫の願う言葉を言ってあげますから、気にすることないんですよ？」

私にはこんなことか、ワインを一緒に飲みに行くことしか出来ないから。

「ありがとう。マリア、お願い、だから、私の前からいなくならないで・・・・・・！」

雫が、涙を落としていた。そしてその涙はワインに落ちる。

「大丈夫です。私こう見えてもとくに取り柄がない人間ですから」

「自分のこと卑下してどうするのよ？　あなたには取り柄があるわ。

私の恋人っていう取り柄が」

その言葉と同時に雫と私の距離はゼロになる。

「酔ってはいないから」

私の耳元で、あなたはそう囁いた。

番外編　シチュエーション妄想局　拡大版　パート2（後書き）

次回予告　今回は木下姉弟です。

次回はシチュエーション妄想局第3弾！

んけmるどののリクエストを消化していくのじゃ。

気のせいか、このコーナー百合の花が咲き誇っている気がするわ。

・・・・・・気のせいじゃ。

B&Lに栄光あれ！

姉上・・・・・・もう、戻れないんじゃな。

番外編　シチュエーション妄想局　拡大版　パート3（前書き）

毎度毎度遅くなりすみません。

キャラ紹介に『紅　水鳥』を追加。忘れていました（汗）

番外編　シチュエーション妄想局　拡大版　パート3

んけｍるさんリクエスト　【雄二×翔子】

『変わった日常』　時間軸　特になし

雄二　ｓｉｄｅ

最近、俺の日常が変化しつつある。以前まで行われていた。翔子による奇襲。翔子によるランニング&発声練習。翔子による投降後のお仕置き。翔子によるｅｓｃ。１つ１つ挙げていたらキリがないのである程度割愛させていただく。

読者の皆様も、感じたことはないだろうか？　自分の日常が変化した瞬間を。そこで今回は、読者の皆様に俺の日常の変化を御覧に入れたいと思う。だが１日すべてを書くとなると大変な量になるので、今回は朝だけにさせていただく。

こんなことを書いたあかつきには、ＦＦＦ団が黙っちゃいないだろうが、俺は明久みたいにバレたりする心配がないので問題ない。俺の身を案じてくれた読者の皆様には、ここで感謝の意を表したいと思う。さて、前置きが長くなってすまない。３行間を開けて始まるぞ。準備はいいか？

チュンチュン

小鳥のさえずりが聞こえる。最近の俺は鳥のさえずりで目が覚める。

これも翔子の長年に渡る奇襲のおかげだろう。でも俺は瞼を開けない。意識だけを覚醒させ、待つ。

とっ、とっ、とっ

階段を誰かが上る音が聞こえる。新築なので『ぎっ』などという擬音は出ない。

ガチャッ

俺の部屋の扉が開く。そして躊躇いのない動きでベッドの上に乗る。そして動作の主は瞼を開けない俺に対しこう言う。

「・・・・・・雄二、朝」

声の主の正体はご察しの通り翔子だ。いつも通りモーニングコールをしてくれる。最近の俺はこのモーニングコールでないと瞼を開けない。

「・・・・・・雄二、起きて（ゆさゆさ）」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・今日も学校。遅刻する」

「・・・・・・・・・・・・・・」

だが今日の俺はイジワルだ。いつもならとっくに瞼を開けて翔子に朝の挨拶をしているのに、今日はまだ寝たフリをする。翔子がどう出るかを知りたいのだ。

「・・・・・・雄二、朝だから起きて」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・雄二、起きてない？」

何で確認を取る？　返事は帰ってこないぞ？　とか思っていると翔子の気配が近づいてくる。そして唇に柔らかい物が押し付けられた。

「・・・・・・／／／」

キスしたのか。可愛いじゃねぇかおい。あとで仕返してやろう。そして今翔子の顔は真っ赤に染まっているんだろうな。翔子は自分が迫るのは問題ないくせに俺が迫ると恥ずかしがる。おいおい、今までのヤンデレ風味の翔子さんはどこ行きましたか？　ジョブチェンジしちゃったんですか？

「ん・・・・・・ふぁ、ぁ・・・・・・おはよう翔子」

「・・・・・・あ、お、おはよう雄二。今日良い天気／／／」

「どうした翔子？　顔が赤いが、熱でもあるのか？」

「・・・・・・え、ゆ、雄二？」

そう言って俺は翔子に顔を近付け、自分のおでこを翔子のおでこにくっ付ける。

「熱はないようだな」

「・・・・・雄二、何かオオカミ／／／」

「そんなことない。俺はいつも通りだ」

翔子の前だけだなんて言えるかっ。

「・・・・・雄二、今日お義母さんが出かけるから朝食は任せるって」

「あいよ～」

最近、この何気ない朝の１ページが楽しみだったりする。

台所・・・

「～♪」

上機嫌で朝食を作る翔子。エプロンを装備して俺ん家の台所で調理をするこの姿も見慣れたもんだな。余談だが翔子のエプロン姿はよく似合っていた。

「・・・・・雄二、できた」

「サンキュ」

今日の朝食は定番のハムエッグのようだ。朝食を食べつつ、いつも通りの他愛もない話をする。こういう食卓での会話が家族間のコミ

ユニケーション第1歩だとかなんとかなので、俺と翔子もこうして行っている。逆に行っていない方が珍しいかもだが。
え？　何で雄二が翔子のことをあーだこーだ言わないのかって？
理由は簡単だ。俺は今目の前にいる翔子と交際、というとあれかもしれないが、まぁ所謂恋仲というヤツなのだ。

「・・・・・・雄二、愛子から相談を受けた」

「工藤から？　どんなだ？」

「・・・・・・好きな人に思いを伝える勇気が出ないって」

「工藤には好きな人がいたのか？」

「・・・・・・うん」

意外だ、あの工藤に好きなやつがいたとは・・・・・・それにしてもなんだ・・・・・・以前にも似たような話をしたことがあるような・・・・・・アレ？　何で思い出せないんだ？

「なぁ翔子、以前もこんな話したことなかったか？」

「・・・・・・そういえばそうだった。でも雄二は忘れて」

「ぎゃぁぁあ！！　何でだぁぁあああ！！」

今日も朝からスタンガン（最大出力）の餌食になってしまった。

数分後・・・

「うぅ・・・・・・翔子、何で俺はスタンガンの餌食になっていたんだ？」

「・・・・・・ごめんなさい。私がウッカリしてて」

「あ、あぁ・・・・・・」

ウッカリ俺はスタンガンの餌食になったのか・・・・・・まだ恋仲ってだけなのにウッカリでスタンガンの餌食になるということは、ミスをした時はどうなるんだろうな？

「・・・・・・雄二、そろそろ」

「お？　もうそんな時間か」

俺が寝ていた間にいつの間にか登校する時間が来ていたようだ。しかも既に食器類は片付けられている。ホントに、よく気が利いてくれる俺には勿体無い女性だ。まったく。

「んじゃ行くか翔子」

「・・・・・・うん」

いつも通り2人で登校。玄関を出た所で、俺は思う。俺は今幸せだ。でも、翔子が本当に幸せかどうかはわからない。でも、俺は翔子の幸せの為に全力を尽くすつもりだ。翔子の望むことはできる限りやりたいと思う。それが、翔子の気持ちを否定し続けた俺の償いになれば良いなと思いながら。あ、そういえば――

「翔子」

「・・・・・・・何、雄ｚ――――」

俺は翔子の唇にキスをする。

「・・・・・・・ゆ、雄二？／／／」

「俺が寝ている時にした分のお返しだ」

「・・・・・・・お、起きてたの！？／／／」

「あぁ、寝てるフリして翔子がどうするのかを楽しんでた」

「・・・・・・・（ぷくー）」

翔子が若干頬を膨らます。このちょっと怒っている時の翔子も可愛いと感じてしまう俺はもう、翔子にベタぼれなのかもしれないな。

『諸君ここは何処だ？』

『『『最後の審判を下す法廷だ！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！』』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

『よろしい。これより―２―Ｆ異端審問会を始める』

あちゃー、見られてたか。俺としたことがしくじったな。

「翔子、すまんが先に行く！」

「・・・・・・あ、雄二・・・・・・・」

『待てこらぁー！！』

『デストロイ&デース！！！』

『ふひひひっひひひひひひひｈっひっひひひひひひひひひひひひｈっひひひひｈっひいいひｈっひいひひひひっひっひひ・・・・・・！！！』

「・・・・・・（クス）待って、雄二」

少女は追いかける、自分が将来を共にすると確信した伴侶を。そして少年も、自分の愛すると誓った少女と共に生きる為に、今日も死神装束の集団から逃げ続ける。

「捕まってたまるかー！！！」

んけｍるさんリクエスト　【銀×光】

『Ｓっ気です』　時間軸　２巻内容中　木下姉弟とは同棲しておらず、光とだけという設定。光も竹原教頭のたくらみを知っている。

銀　ｓｉｄｅ

清涼祭初日・・・

文月学園・・・

今日は清涼祭当日。昨日は学園長から頼まれたお仕事（竹原教頭のたくらみを阻止）について色々考えていたからなぁ。自分の担当している場所が無くなるのはかなり困るしね。
とりあえず当日だからな、真奈に現状の確認もしておきたいし。

Ａクラス・・・

「・・・・・お帰りなさいませ、ご主人様」

迎えてくれたのは霧島さん。浴衣の似合う和風美人かと思いきや、メイド姿も似合っている。雄二も恐らくこの後ここに来るだろうからその時の反応が楽しみだ。

「霧島さん、こんにちは。真奈指名できる？」

「・・・・・わかった」

そして霧島さんと入れ替わりに真奈が来る。

「お帰りなさいませ、ご主人様。今夜もメイドとの熱い夜をご期待ください」

なんかアレンジされてた。

「えっと、今のは？」

「代表から教わった」

ふぅ・・・・・霧島さん、良い仕事をしてくれる。今度雄二をグルグル巻きにしてプレゼントしてあげよう。

「真奈、今のところこっちはどう？　ここはＦクラスの次に竹原教頭の刺客が来そうな所だけど」

「今のところ大丈夫。何ら問題はないよ。それに何かあったら無線で知らせるし」

「わかった、じゃあ折角来たんだし何か頼んでいこうかな」

「嬉しい！　流石紫苑、そういうところも好きだよ～」

「恥ずかしいからあんまり言わないでくれ。周りの人達に聞こえたらどうするんだよ」

「それも良いんじゃない？　学園公認のカップルってことで」

「僕は毎日ＦＦＦ団に置き駆けまわされる毎日が続くよ」

「では、ご注文をどうぞ」

スルーされた。まぁいい。

「じゃあ『アイスクリームのオレンジ味』を1つ」

「ご注文を繰り返します『アイスクリームのオレンジ味』をお1つ、以上でよろしいですか？」

「うん、いいよ」

「では、少々お待ちください」

「あ、ちょっと待って」

「何？　追加する？」

「うん、追加する。『メイドとの甘いキス』を1つ」

「（ピクッ）そ、そのようなメニューはございませんが？」

思いっきり反応している真奈。ちょっとからかってあげようかな。

「え？　でもここに載ってるんだけど」

「どこ？」

メニューを覗く為僕の方顔を乗り出してくる真奈。必然的に髪が鼻の近くに来るので、髪からシャンプーの良い匂いが漂ってくる。そして真奈、隙だらけだよ。

「どこにもないんだけdひゃぁぁああ！」

「こらこら煩いぞ、真奈。他の客たちに迷惑だ」

「大変失礼いたしましたっ！　って、何すんの!?」

「何って何？」

「だ、だって、その、耳を／／／」

「耳を、どうしたの？」

「甘噛みしてきたから／／／」

「あぁ、ゴメンゴメン。だって目の前に美味しそうな耳が出されたからつい」

「ついじゃない！　おかげで恥ずかしい思いしたよ！」

「それは謝るよ」

「まったく！　じゃあ少し待っててね」

「ちょっとちょっと、キスまだなんだけど？」

「あれは紫苑が適当に言ったデマカセでしょ？」

「まぁね。でもしたいって思ってるのは本当だよ」

「なっ！／／／」

頬を真っ赤にする真奈。何度見ても飽きないな。

「それと、言い忘れてたけどそのメイド服姿凄く似合ってる。とても綺麗だよ」

「ぅ、あ、あぅ／／／」

「あぁ、何で僕は今日サングラスを持ってこなかったんだろう。サングラス越しじゃなきゃとても直視できない眩しさだよ」

「ふぁぁぁぁ～～～／／／」

みるみる内に小さくなっていくな。あぁ、相変わらず真奈のこういうところが可愛いくて止められないよ。

「～～～っ！／／／」

「あっ」

真奈が顔を真っ赤にして走り去ってしまった。僕が好きな、彼女の紅色の髪が風で宙に舞っている。あんまりこれを他の人には見せたくないんだよね。それにしてもしまったな、やり過ぎたか？　と思ったらすぐまた引き返してきた。

「ちょ、ちょっと来て！／／／」

「おいおい、あんまり引っ張らないでよ。僕はキミの物なんだから」

「そういう恥ずかしいセリフはちょっと待って！／／／」

『止めて』じゃなくて『待って』か。やっぱり真奈も嬉しいんだね。
それに実際可愛いんだから仕方ない。

更衣室・・・

どこに拉致られるのかと思ったらAクラスの方々がクラス内に設けた更衣室だ。でも何故か女子の方。真奈と僕は向かい合って立っているが、真奈がこちらと目を合わせようとしない。

「ちょ、ちょっと待って／／／」

「（クスクス）」

「何がおかしいの！？／／／」

「だって真奈、さっきからずっと顔真っ赤だよ？」

「誰の所為よ！／／／」

「真奈が可愛いんだから仕方ない」

「ま、またそういうことを・・・・・！／／／」

「じゃあ真奈、目を閉じて？」

「ま、待って！　まだ心の準備が！」

「その割には逃げようとしないし、こんな人気のない所に連れて来てるのに？」

「それは、その・・・・・・あっ」

真奈が言い切る前に顔を接近させていく僕。そしてこれからされるであろうことを想像して、また真っ赤になる真奈。しかもチャッカリ唇を突き出している。

「え？　あれ？」

「どうしたの？」

「だって、おでこ・・・・・・」

「心の準備ができてないんでしょ？　だから僕は自分の中の気持ちを抑え込んでおでこで我慢したんだよ？」

「強引にでもやってくれればよかったのに／／／」

「もしかして真奈は強引にやられる方が好きなの？」

「そ、そんなことないわけじゃないこともないなんてこともないよ」

何だ？　どっちなんだ？

「その、だから・・・・・・／／／」

「真奈、そろそろ注文が来る頃じゃないかな？」

「え、あ・・・・・・」

「それじゃ、戻ろっか？」

「ま、待って！」

真奈に後ろから抱きつかれる。無意識だろうけど、真奈の標準より大きい胸が思いっきり押し付けられている。

「キス、しようよ？／／／」

うわ、上目使い＋若干涙目＋頬を赤く染める＝∞の方程式が完成してるよ。

「心の準備は？」

「で、出来たから！／／／」

「わかった」

「ん・・・・・・／／／」

そして僕は真奈の唇に自分のを押し付ける。何秒経ったかわからないけど、とびきり甘いキスをしたことだけは間違いない。

「・・・・・・バカ／／／」

「真奈の前でだけね」

『それにしても、このメイド喫茶は綺麗でいいな！』

『そうだな。さっきいった2―Fの中華喫茶は酷かったからな！』

『テーブルが腐った箱だったし、虫も沸いていたもんな！』

やれやれ、僕と真奈の時間を邪魔する無粋な連中がいるようだ。

「真奈、メイド服を1着貸してもらえるかな？」

「わかったけど、紫苑／／／」

「ダメだよ真奈。僕も理性とかかなぐり捨ててもっとキスしたいけど、時と場所を考えよう。ここだと誰かに見られるかもしれないし。それに僕はFクラスとしてあいつらの営業妨害を阻止しなくちゃいけないから」

「わ、わかったよ／／／」

「家に帰っていっぱいしよう」

「うん！」

さて、真奈から1着メイド服を借り受けて、いざ！　返信！　字が違った。変身！　変身シーンは省略！

変身完了、『雨咲智美』！　行きまーす！

んけｍるさんリクエスト　【靖也×奏風】

『危ない遊び』　時間軸　特になし　今回から二人の会話文の時も「」↑を使います。

靖也　ｓｉｄｅ

整備室・・・

カチャ　カチャ

そんな音がこの空間には1番ふさわしいと俺は思う。ここは『月下』にある武器の整備室。あるのは各個人の武器が収納されているロッカーと整備用の道具、机、椅子などが整理整頓されて並べられている。俺も自分の武器の整備をしようと思いここに来た。博士達の開発部の方でも整備はしてくれるんだけど、偶には自分でしないといざという時忘れて整備出来ませんなんてことになったら大変だからな。

「あ、靖也、丁度良いところに。ちょっと手伝ってくれない？」

「あいあい」

声をかけてきたのは俺の愛しの彼女『神城　奏風』だ。本名は『東雲　沙耶』だけど。俺はソファーの方に座っている『月下』の制服姿の奏風に近付いて「何を手伝えばいい？」と聞く。

「うん。何か銃のトリガーを引く時に引っかかるような感じがする

の」

「どれどれ？」

俺が奏風から銃を受け取り、トリガーを引いてみたところ、確かに一瞬何かに引っかかるような動作が入る。普通ならあまり気にしない些細なことだけど、見た目からでもわかるように奏風はとても几帳面な性格をしているのから気にするんだな。

「どう？」

「確かにおかしいな。詳しく見てみるか」

「お願いしていい？　私だけだと何か見落としているものがあるかもしれないし」

「任せとき」

そう言って一旦奏風は横に移動する。代わりに俺が元々奏風のいた場所に座って、奏風の銃を分解し、どこか変なところがないかチェックする。

「何かわかった？」

隣に立っている奏風が前かがみになって様子を聞いてくる。

「いや、特に変なところは見当たらないｚ」

奏風の方を向いて報告をしようとしたのがいけなかった。何がって？　今の奏風の格好がだ。どんな格好をしているのかというと。上

がタンクトップ1枚なのだ。いつの間に脱いだんだ・・・・・そして何より今この部屋は暑い。そういえば今日この部屋の空調を整備するからエアコンは使えないとか言っていたような気がする。おかげでタンクトップは奏風の汗を吸い、ブラが透けて見えてしまっている。しかも肌にピッチリ張り付いてな胸を強調しているかのようになってしまっている。さらに前かがみなのでその豊満な胸の谷間を間近で見ることになってしまった。いや、男としては拝むべき瞬間なんだが。

「どうしたの？」

「いや、その、何でもないぞ？　何でも・・・・・・」

思わず目を反らしてしまった。でもその行動は正解だろう。凝視していたのがバレたら何と言われるか・・・・・・

「う～ん、落としたりした記憶は無いけど、何がいけないのかな」

「そ、そうだな」

マズイ、1度意識してしまったものはしばらくし続けることになる。考えるようすの奏風にバレないようにチラチラと見る。男なら自分の好きな異性の、彼女の身体に興味を持つのは当然のことだよな？　言い訳がましいけどこんなチャンス滅多に無い。奏風の執筆に少し付き合わされることはあるけど、まだ俺たちは未経験だ。最後までいったことなんてないし、裸なんて見たことがない。肌蹴た姿なら多少あるけど。

「もう1回見てわからなかったら博士あたりに頼もう」

「そうだな。それが良いんじゃないか？」

そういうことで俺は奏風に銃のパーツたちを渡す。確認をしている奏風の胸を見まいと上半身を起こしたら今度は奏風のうなじが目に飛び込んできた。うなじなら、バレないよな？　その後俺は奏風が確認を終えるまでうなじの匂いなどを堪能させてもらった。彼氏という特権を使って、先ほどよりも密着しながら・・・・・傍から見たら変態だな。そんな自己嫌悪をするのにも終わりがやってきた。

「ダメ。やっぱりわからない。仕方ないから博士に任せよう」

奏風が背伸びをした後、汗がついたメガネを一旦取って言った。でも既に奏風に酔っていた俺はまともな返事を返すことが出来なくて「そうだな。それが良いんじゃないか」という生返事を返してしまった。

「ちょっと大丈夫？　さっきまったく同じセリフを言っているけど？　具合でも悪い？」

久しぶりに見た奏風の素顔。俺が頼んでもあまりメガネを取ってくれないのにこの状況下で取られるなんて完全に予想外だ。奏風に酔っていた俺は奏風の振り返る動作の際に肩から落ちてしまい、今は膝枕の格好だ。しかも奏風を見上げる際にどうしても視界に胸が入ってくる。

「靖也？」

心配そうに見つめてくる奏風。今俺が抱きしめたりキスしたら怒られるかな？　でも、俺達もう付きあってるんだろ？　だったら、良いんじゃないか？　それに、そんな格好をしている奏風も奏風だ。

何かされても、文句は言えない。いや、言わせない。

「奏風・・・・・・」

何かを求めるような、そんな切ない声で、俺は奏風の名を呼んでしまった。

奏風　ｓｉｄｅ

「奏風・・・・・・」

丁度良い、頃合いかな？

「待って靖也。今私汗臭いからシャワー浴びてきた後でしよ？」

「・・・・・っ、あ、うん。じゃあ俺も浴びてこようかな。んじゃ」

そう言って足早に去って行く靖也の後姿を見送りながら私は脱いでいた制服を着る。誰も入ってこなくてよかった。こんな姿靖也以外の男子には見せたくないし。それにしても、あんな欲情しきった目をしてるのにバレないと思ってたの？　ここに来たのに武器の整備をしていないのが良い証拠。

「フフッ・・・・・」

指で唇をなぞるように触れる。その行動と表情は普段の私からは想像もつかないでしょうね。『妖艶』、そんな単語がピッタリ。最近

靖也の反応がつまらないんだからしょうがないわよね？　ドキドキしたなぁ・・・・・・いつ襲われるのかもわからないこのスリル。堪らない・・・・・・！　あの目、あの私に酔っているあの目、嬉しい。そう素直に感じる。氷花先輩といると見劣りするかもしれないけど、靖也も結構な優良物件なんだから。私はあなたを逃がさない。

「靖也・・・・・・フフッ」

誰もいない空間で私は愛しの彼の名を呼ぶ。その声は誰にも聞かれることなく自然と消える。さて、次はいつどこでどうやって攻めてみようか・・・・・・？　楽しみだなぁ。その時々の靖也の表情が。次はどんな私を見せてあげようか。ねぇ、どんな私が見たい？　どんなことでもしてあげるよ？　靖也のあの表情・あの目・あの靖也は私の物。私だけの物。他の誰にも渡さない。絶対に・・・・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

彼女はこの危ない遊びをしばらく行い続ける。彼女の気が済むまでか、それとも、欲望に耐えられなくなった獣が彼女に牙をむくその時まで・・・・・・

んけｍるさんリクエスト　【光×奏風】　すみません、逆になりました。あと短いです。

『趣味の共有』　時間軸　特になし

光　ｓｉｄｅ

奏風の部屋・・・

ゴロゴロ　ゴロゴロ・・・・・・・

暇・・・・・・

カタカタ　カタカタ・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・」

そう、私は退屈していた。今はかなちゃんの部屋の上でゴロゴロしている。せっかく恋仲のかなちゃんの部屋に来たっていうのに「すみません、この部分を書き上げたらでお願いします」と、言われたもんだから少し待つことにしたんだけど・・・・・・

ゴロゴロ　ゴロゴロ・・・・・・

暇、暇暇暇暇・・・・・・！！！

「暇―！！」

「（ビクッ）ど、どうしたんですか？」

かなちゃんがパソコンから目を離してから私の方をやっと振り向いてくれた。

「だって暇なんだもん。かなちゃんさっきからずっとそれ書いてる

し。そんなに長いの？」

「あぁ、ゴメンなさい。私コレ書いてる時は集中しちゃうとなかなか他のことに手が出せなくなっちゃうんですよ」

「まぁ、わからなくもないけど・・・・・」

「でも今のおかげで手が離れたんでもう大丈夫ですよ」

「ん。ならいいんだけど」

「今日はななさんが小説書いてみます？」

「マジっすか」

余談だけど、私はかなちゃんの書いている小説を読ませてもらっている。まぁ、うん、エロかったです。自分自身ではそれなりには耐えられると思っていたんだけど、意外と無理でした。

「いいじゃないですか、読まれてるのって結構恥ずかしいんですよ？」

「そりゃそうだろうけど」

「ってことで、さぁ！」

うぅ、かなちゃんの目がキラキラしてる！　アレは、いじめられる目だ！

「そ、それはまたの機会ｎ「さぁ！」」

はぁ、とため息をついて私は諦める。恐らく今のかなちゃんには何を言っても無駄だと悟ったから。

数時間後・・・

新たな発見。こういうのを書くのって結構時間が必要なんだということ。まずキャラ設定・次にシナリオ（起承転結とかは難しかった）・あと、メインのエッチシーン（コレが1番恥ずかしかった）。でも今回はかなちゃんの書いている小説のキャラを借りて書いてみた。

「どう？／／／」

「へ～、ほうほう。ななさんってマゾですか？」

「な、何でそうなるの！？」

「だってプレイがそうとしか思えない風に書いてあるんですもの」

「でも私がそういうわけじゃ・・・・・・」

「こういうのは自分がしてもらいたい風に書いちゃうんもんです。特に初心者は」

「（ガーン）・・・・・・ＯＴＬ」

四つん這いの状態で打ちひしがれている私にかなちゃんは笑顔でこう言い放った。

「大丈夫ですよ。私はどっちでもイケルくちですから（ニッコリ）」

「全然大丈夫じゃないからっ！」

「いやいや、愛さえあればお兄ちゃんでも問題ないとあるラノベのヒロインも言ってますし！　きっと同性でもなんら問題はないですって！」

「あわわわわ」

追い込まれ、ベッドに押し倒される。因みに馬乗り。これは、マズイんじゃないかな？

「ぅ・・・・・・」

「最近色々目覚めそうです・・・・・・！」

「いつの間にか私とかなちゃんの立場が逆転してる・・・・・・！」

「そうですよねぇ。あっ、胸大きくなりました？」

馬乗り状態のかなちゃんが私の胸を触りながら言ってくる。でも測ってないからわからないんだけど。

「わかんないよっ」

「感じましたね。ななさんって胸弱いんですねぇ」

「か、かなちゃん、ちょっと・・・・・・」

「はい？　何です？」

上半身を起こす。よかった、とりあえず起こしてもらえた。

「その、ね？　やっぱり私達ってまだなったばっかじゃない？　だからさ、まだ早いんじゃないのかなぁ～って思うんだけど」

「えっ、そうだったんですか？」

何故か意外そうな顔のかなちゃん。何で？

「ななさんってマゾだからいじめられるの待ってるんじゃないかと思って」

「待ってないって！　あと、マゾじゃないから！」

「そう、だったんですか・・・・・すみません。私だけ先走ってしまいました。こんなんじゃななさんの彼女失格ですよね・・・・・・」

今度はかなちゃんが落ち込んでいる。

「ゴメンなさい。私、勘違いしちゃって・・・・・・グス、ななさんの気持ちも無視しちゃって・・・・・・」

あれ？　なんだか凄く落ち込んでない？

「私、ななさんと特別な関係になれたのが嬉しくて・・・・・・つい、はしゃいじゃって・・・・・・しかも、いきなりこんなことす

るなんて、図々しいですよね・・・・・・ウザいですよね」

落ち込み過ぎじゃない!?　涙まで流してるし!

「そ、そんなことないって!　かなちゃんの気持ちは凄く嬉しいよ!?　それに、私のこと思っての行動なんだから嫌いになるわけないって!　私はかなちゃんのこと大好きだよ!?」

思わずフォローに回る。

「ホントですか?　でも、ななさんのことマゾ呼ばわりしたし・・・・無理やりだったし・・・・・・」

「別に気になんてしないって!　そ、それに・・・・・私もどっちかっていうと・・・・・Mかな～って自覚あるし・・・・・・だ、だからどっちかっていうと無理やりの方が好きかな～、なんて・・・・・・／／／」

「なんだ、じゃあ問題ないですよね?」

ケロッとした顔でかなちゃんが言ったそのセリフ。何にも無かったかのようなその爽やかな顔に私は少しの間思考が停止していた。え?　どゆこと?

「やっぱりななさんは、マゾでしたね～。私の読み通り。それに、優しいななさんならフォローに回ってあんなことをつい口走っちゃうんじゃないかと思いました」

「え?　え?」

「な～なさん」

「んむぅっ！？」

思考が停止していたから近づいてくるかなちゃんに反応できなくて、私はキスされる。まぁ、避けるつもりも無かったけど。そのキスの中で、私は思う。騙されたんではないかと。

「フフ～、ななさんがマゾだってわかったし、無理やりもＯＫだってわかったし、後はもう・・・・・・ジュル」

騙されたー！！

「あ、あの・・・・・・かなちゃん？」

「何ですか～？」

「何するつもり？」

「ピー」

「ハッキリ言うなー！　って、あっ！　ちょっま！？　あっ――――！！」

「この後ななさんは、私においしく頂かれたのでした」

「変なモノローグ付けるなー！」

んけｍるさんリクエスト　【光，奏風，悠里，詩穂，菖蒲，雫，マリア】

『イン・カラオケボックス』　時間軸　第三十九問後　ノーカップリンクです。

Ｎｏ　ｓｉｄｅ

とあるカラオケボックス・・・

とある町のとあるカラオケボックスの風景、それは何とも華やかなものであった。座っている順に紹介していこう。

「おぉ～、かなちゃん上手～い！」

１人は、肩の少し下まで伸ばした美しい紅色の髪を持つ少女。名は『宮野　真奈』

「～♪」

１人は、ショートヘアーの長さに茶髪でブロンドがかかっている少女。名は『神城　奏風』

「よ～し、しほりん、今度はデュエットやろ！」

１人は、ロングの黄色い髪にはねている癖毛がある少女。名は『山吹　悠里』

「え～、私ちょっと自信ないよぉ～」

1人は、同じくロングに、藤色の髪を持つ少女。名は『河森　詩穂』

「偶にはこういう所も良いですね」

1人は、ショートヘアーで白に近い灰色の髪を持つ少女。名は『星野　菖蒲』

「かなちゃん得意だったのね。ちょっと妬いちゃうわね」

1人は、セミショートの長さに、瑠璃色の髪の若い女性。『鈴野　雫』

「私あんまりこういう所来たことないので未だに緊張してます」

1人は、ロングに肌色に近い色の髪を持つ若い女性。名は『マリア・ルーミー』

以上7人の女性。隣のカラオケボックスに入っていた野郎どもがこっそり見に来るほどの美人達なのだが、彼氏持ちが1人だけで他6人は独り身である。といっても内2人は絶賛恋愛中だが。

「ふぅ、こんなもんですかね」

「凄いよかなちゃん！　上手だった！」

「あはは、どうも」

今歌い終わった奏風が軽く会釈して次の人へと交代する。

「さぁさぁしほりん、あたし達の初めての共同作業が始まるよ！」

「別に初めてでもないと思うよ」

自分の発言を軽くいなされて若干落ち込んでいる悠里の手を引いて詩穂は前のステージの部分へと連れ出す。

「しほりんがデュエットに応じた！」

「恐らく、1人で歌うのは恥ずかしいからという考えがあってでしょう」

その言葉とほぼ同時に音楽の前奏が流れ出す。

「「〜♪」」

2人の曲中のアクションに対し皆のテンションが更にヒートアップ。

「あっ、雫がさりげなく写真撮ってます」

「こういう時しか撮れない1枚ってあるでしょ？　お！　ナイスショットじゃない！？」

ナイスショットというのは、2人が対になるようなポーズを撮った瞬間をとらえたことにより出た言葉である。

曲が終わり、2人が席に着く。

「いや〜楽しかったねしほりん」

「はうぅ、今思うとかなり恥ずかしいことしてた気がするよ／／／」

「まぁでも、しほりんさんの普段から考えるとギャップがあって面白かったですよ？」

「あんなしほりん滅多に見られないもんね」

「雫さん、さっきの写真あたしにもください！」

「はいは～い。現像化したらあげるわね」

メンバー達は一旦休憩するようである。既に2時間はぶっ通しで歌っていたのだから、当然と言えば当然あるが。

「ねぇねぇ、そういえば皆は彼氏とか出来た？」

そしてカールズトークへと発展する。大概こういう会話の発端は皆のお姉さん的存在である雫だ。

「「「「・・・・・・・・・・」」」」

「（スッ）」

「（サッ）」

早くも4人の少女が沈黙を選び、1人は自分だけ彼氏がいるという理由での気まずさから目を反らし、1人の女性は巻き込まれまいと体ごと反らす。

「え？　ちょっと、何で誰も反応しないのよ？　かなちゃんはわか

るとしても。特にマリア」

「雫のそういう話に巻き込まれない為です」

「えぇ！？　ハッキリ言われるとちょっとショック・・・・・・で、そっちの４人」

「わ、私は、その～／／／」

「あたしも、好きなヤツくらいいるけど・・・・・・でも、会えるかすらわからないし／／／」

「私は今のところ特には」

「右に同じ、です」

「え～、あなた達が学校生活で何やってんのか不安になってきた。普通に学校行っていれば恋が始まるようなイベントはあると思うんだけど・・・・・・」

ガールズトークの発端は早くも手を頭にあてていた。

「詩穂ちゃん菖蒲ちゃん。気になる人とかもいないの？」

「う～ん、いないですねぇ」

「気になる、くらいなら」

「「「「「「誰（ですか）！？」」」」」」

菖蒲の発言を機に、他の６人が身を乗り出す。

「そ、そんな血走るような目で見なくても。大した問題ではないと思うのですが」

「いやいやいや、だってあーやのだよ？　あの『恋？　何それ？食えんの？』って言いそうなあーやの気になる人だよ？」

「なな、しばきますよ？」

「あたしも気になるよ！　始めふんどしを穿いていたあーやだよ？サラシは今でも巻いてるけど」

「うり、しばかれたいのですか？」

「まぁまぁ、ここは観念して、言ってみなさいって」

「どこにも観念する要素はなかったと思うのですが・・・・・・言っておきますが言いませんよ？」

「え～、何でですか？」

「ここで言ってもフィクションとかだと思われないからですよ。読者の皆様に間違った認識をさせたくないですからね。ここでは確定している事実だけを述べるべきです」

「「「「「「「あ～」」」」」」」

それ以上、誰も言えなくなった。

「そういえば、うりの好きな人についてはあんまり知らない気がする」

「エッ？」

新たな話題になるであろう悠里は野太い声をあげた。そしてこう思ったであろう。

「（墓穴掘った・・・・・・！）」

「私も聞きたいんですけど、中々教えてくれなくて・・・・・・」

そして真奈の発言に便乗する者は増えていく・・・・・・

「私も同じくです」

「これは、聞きがいがあるわね」

「うりちゃん、話してごらんよ？」

「先輩、観念すべきです」

詰め寄る他メンバー。この少女にもう逃げ場は「あたしのもフィクションかもしれないし！」「作者曰く決定事項だって」「（ガーン）」無かった。

この後、顔を真っ赤にしながら出会い～今までの経緯を根掘り葉掘り皆に話すハメになった悠里であった。

番外編　シチュエーション妄想局　拡大版　パート3（後書き）

次回予告　今回は銀です。

新たなる始まり。そんな言葉が似合う学園生活になってほしいと願った僕だが、やはり現実は厳しいと思い知らされた。

次回　バカと銀色と召喚獣　『始まり』

試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第４巻内容スタート

第四十九問　始まり（前書き）

これからはこんな感じでいきます。

読者の皆様に説明することがいくつか。

まず、前話の前書きにも書いたのですが、『紅　水鳥』の紹介追加。

2つ目に新キャラの紹介に、生徒会の役員だということを追加しました。

そして今回のお話に生徒会長が登場するのですが、まだレギュラーなどではないので、またいずれ紹介します。

第四十九問　始まり

Ｎｏ　ｓｉｄｅ

？・・・

そこは、とある研究施設。そこらじゅう壁と床が純白に輝いている。そこのとある１室。そこは実験場のようにとても広い空間が存在していた。そして、その空間に１人の人間が立っていた。

『準備はいいですか？』

「いつでもいけるよ」

準備はいいかと声をかけたのは、その空間を監視しているモニタールームからの声だ。それに対し、問題ないと答える。

『では、実験開始』

『システムをオンにします』

「承認する」

この声と共に、特殊なフィールドが声の主を中心に形成されていく。大きさは半径１０メートル程だと思われる。

「試獣召喚（サモン）！」

するとどうだろう。まるでその単語が引き金になったが如く、声の

主の足元にその人とそっくりな７０～８０センチ程の大きさの何かが召喚される。

『第１段階成功』

『実験内容を第２段階へと進めてください』

「わかっているさね」

モニタールームからの指示に従い、予め決めておいた実験の第２段階を始める。
今度は、その何かがピョンピョンと飛び跳ねる。その他歩く・走る・止まる・パンチ等々の１連の動作を試す。

『第２段階成功』

『実験内容を第３段階へと進めてください』

「あいよ。ふっ」

声の主が腕を１振り。すると今まで形成されていた謎のフィールドがみるみる内に収縮していき、じき消えてなくなった。そして、今まで存在していた何かは謎のフィールドの消滅と共に消え去った。

『・・・・・成功だ』

『やりましたよ！　藤堂博士！　召喚獣実験成功です！』

モニタールームが歓喜に包まれる。そして、広い空間にいた開発者様は、

「・・・・・当然さね」

『藤堂　カオル』は、とても満足そうな表情をして、そう言った。

銀　ｓｉｄｅ

通学路・・・

「紫苑、体の具合は大丈夫？」

「あぁ、何ら問題はない」

「そう、良かった」

今僕の隣を歩いているのは『紅　光』、だが日常では偽名として『宮野　真奈』と名乗っている少女だ。といっても、『紅　光』ですら本名ではないという事実が最近発覚したので、彼女の本名は何なんだろうといささか疑問を感じる。

今僕たちは『文月学園』への通学路を歩いている。

「依然通っていた記憶があるとはいえ、緊張するな」

「うん・・・・・そうだと思うよ」

「すまない。失言だった」

「ううん、大丈夫。気にしないで」

真奈は僕が記憶の話をすると今のように落ち込む。気を付けていたつもりだったんだけど、しくじったな。

そうもしている内に文月学園にご到着。

「ここか・・・・・・」

校門をくぐるとそこには、学舎が広がっていた。流石に世界が注目している試験校なだけあって、大きい。

僕が校舎に見とれていると、真奈が僕の正面に立ちこう言った。

「そう。ここが私が通っている文月学園。紫苑、文月学園にようこそ」

その差しのべられた手を、僕は握る。彼女とは、とても長い付き合いになるだろうし、これからも色々教わっていこう。

僕と真奈が握手をしたその時だった。不意に視界に入る茶色とピンクと赤の影。別に気にする必要はなかった。でも、気になったのは仕方ないと思う。だってその内の赤と茶色が、――――キスしてたんだから

「？　紫苑、何見ているの？」

真奈が振り向いた時には既にキスが終了し、赤は茶色から逃げるように校舎に入った後だった。う～んそれにしても・・・・・・

「真奈」

「何？」

「この学校ではキスが日常茶飯事なのか？」

「・・・・・・・・・・・・え？」

これが、僕が文月学園に抱いた第１印象だった。

廊下・・・

「なるほど、美波と吉井君がねぇ・・・・・・」

僕は今さっき見た光景を真奈に説明し終えた。実はあの後に死神装束の集団や、男子生徒にアイアンクローをかましている女生徒を見たり、死神装束の集団を見たりした。この学園、いささか問題があるのでは？

「まぁとりあえず、見た光景は後で説明するから、学園長室に行ってらっしゃい」

「わかった。ではまた後で」

真奈はＡクラスへの廊下を、僕は校長室への廊下を歩く。といっても目の前まで案内してもらったわけだが。

コンコン

『あいよ、入んな』

「失礼します」

ノックをしてから学園長室に入る。如何にも、とでも言うべきか、中々学園長室らしい空間が広がっていた。

まず学園長と思わしき人物が大きめの事務用テーブルのイスに腰掛けていた。そしてもう1人、何か話していたと思われる僕と同じ制服を着ていて僕よりやや背の高い青髪の生徒が事務用テーブルの前に立っていた。2人とも来客に反応し、こちらを振り向いた。

「アンタが、『氷花　紫苑』でいいんだね？」

「はい」

「そう緊張しなくていいさね。楽にしな」

「わかりました」

「名乗ってもらったんだ、アタシらも挨拶といこうか」

「わかりました」

生徒の方がうなずく。

「まずアタシから。アタシは『藤堂　カオル』。知っていると思うが、ここの学園長で、『試験召喚システム』の開発総責任者だ」

「俺はこの文月学園の生徒会長、『香雨　桔梗』だ。初めまして、氷花君」

握手を求めてきた生徒会長。なるほど、生徒会長だったのか。

「よろしくお願いします」

「・・・・・・・・・・・・」

「あの、生徒会長さん？」

「何だ？」

「何故手を放してくれないんですか？」

「少し思う所があってな。安心しろ、もう放す」

言った通り手を放してくれた。この人、何かを感じ取っていたのか？

「桔梗、もう1人は？」

「どうやらまだのようですね」

もう1人ってことは僕以外にもまだいるのか。転校生が多いのか？

この学校。

コンコン・・・

「来ましたね」

「あいよ、入んな」

『失礼する』

僕の時の同じ対応で転校生を招き入れる。

「『蒼月　亜麻理』だね？」

蒼月の名字・・・・・この名字はあまりいないハズだが。僕と接点があるのか？　後で調べてみよう。

「悪いが、少々時間が推しているので素早く済まさせてもらおう。俺は『香雨　桔梗』だ。ここの生徒会長をやっている」

「よろしく」

こちらも僕と同じ対応。

「あなたが生徒会長殿か？」

「そうだ」

「単刀直入に言おう。私を生徒会に入れてくれ」

「ほう・・・・・」

凄いな。転校初日から生徒会に入るとは。しかし生徒会長が認めてくれるのか？

「貴様は有能か？」

「少なくとも、無能ではない」

「いいだろう。丁度2年の役員が少なくて困っていた。いきなり入れろと言うのであれば、それなりの覚悟はあるのだろう？　いきなり働いてもらうぞ？」

「問題ない。書類整理などなら慣れている」

「では、放課後生徒会室に来い。同じく役員のバカが貴様が所属するAクラスにいるハズだ。探して連れて来てもらえ」

「承知した」

・・・・・何だか僕と学園長蚊帳の外なんだけど。

「桔梗、時間が」

「すみません。2人には悪いが、今日は生徒総会がある。この時期にやるのも変な話だが、2年男子のバカどもがやらかしてくれてな。おかげで臨時に開くこととなった」

記憶が正しければ、学力強化合宿の時にやった覗き騒ぎか。あれは2年男子全員が参加したからなぁ。

「そこで、丁度良いから2人にはそこで自己紹介をしておらおうと思っているんだが、いけるかい？」

「はい」

「問題ない」

「んじゃ、ちょっと時間が推してるから蒼月の方には廊下を歩きな

がらで自己紹介するとしようかね。体育館まで移動するよ」

第四十九問　始まり（後書き）

次回予告　今回は紫苑です。

全校生徒の前での自己紹介って緊張するなぁ。しかもあの会長さん何か凄いこと言っている気がするんだよね。そして僕は、屋上で彼らに出会ったんだ。

次回　バカと銀色と召喚獣　『生徒総会』

試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第五十問　生徒総会

『召喚獣システム』

それは、これからの人類の技術と科学の発展には欠かせないとても大きな進歩だった。
化学とオカルトと偶然により発明されたそのシステム。
召喚フィールドという特殊なフィールド内でのみ召喚獣という物は使用することが出来る。この召喚獣というのは設定次第では物理干渉が出来たり、装備を変更することもできる。しかも、物理干渉をする際にはゴリラ並みの力を持っている為、将来様々な場所での活躍が期待されている。
だが、そのシステムにも欠陥があった。どのような欠陥かというと、『適正』というものが存在している。言葉の意味の通り、まだこのシステムを使用できる人材が不足しているのだ。研究にかかわっていた人間でも、開発者である『藤堂　カオル』以外使用できる者はいなかった。当然、これぱっかりはサンプルが必要不可欠である。サンプルが無ければ、誰にでも使用できるよう改良を加えることもできない。

Ｎｏ　ｓｉｄｅ

「さて、どうしてもんかねぇ」

藤堂カオルは悩んでいた。研究者の端くれである彼女にとってはとてももどかしいものに思えたはずである。自分が世界に唯一の研究

をしていて、その研究の成果を国に、世界に認めてもらえるチャンスなのだから。

「博士、やはり適性を持つ人間を探すべきでは？」

「・・・・・はぁ、それしかないようだね」

助手の提案に少し迷うものの、それしか方法がないと思うや、すぐさま適性を持つ人物を日本中から探し出した。そして、『召喚獣システム』研究所に、９人の少年少女が集められた。

紫苑　ｓｉｄｅ

体育館・・・

「今日、何故時期はずれな生徒総会を行ったか、わかるな？」

ただいま生徒総会の真っ最中。生徒会長さんは壇上に立つやいなや高圧的な口調で並んで座っている全校生徒に告げる。その様子はまるでヘビに睨まれたカエルとでも言うべきだろうか？

「おい、そこのバカ、答えてみろ」

あ、『吉井　明久』が指名されてる。

「えっと・・・・・強化合宿の時に２年男子が全員で女子風呂覗

きをしたから？」

「愚問だったな。そんなことは誰にでもわかる。それがたとえ、創立以来初の『観察処分者』である吉井明久でもな」

「・・・・・はい、すみません」

「俺だってこんな面倒な話はしたくはない。だが言わねばならないような状況をどっかの誰かさんが作ってくれたのでな。ありがたくその状況を使わせてもらおう。

いいか貴様ら、ここにいる全員が知っての通り、ここ、文月学園は学力上昇を図るシステム、『試験召喚獣システム』を世界で初、取り入れた言わば試験校だ。これがどういう意味かわかるな？　試験校であるが故のメリットはある。しかし、試験校であるが故のデメリットがあるということを忘れるな。試験校であるが故の最大の弱点は貴様らの結果だ。過程がどうあれ、いかなる理由があったとしても、我々が文月学園の風評を悪くするようなことを行ってはならない」

既に校舎の破壊や今回の集団覗き事件。もはや絶望的だと思うんだが・・・・・・

「我々の結果次第で『試験召喚システム』の未来が変わる。貴様らの結果が良ければそれでよし。だが、悪ければそこまでだ。学園長の顔に泥を塗るのはやめろ」

学園長室でも思ったけど、生徒会長さんってやけに学園長に従ってるな。あの二人には何かあるのか？

「しかしそれでも、貴様らがこれ以上問題を起こすようなら、我々

生徒会も動かざるをえないな。貴様らは知らんだろうが、文月学園の生徒会の権力という物は中々大きくてな。権力を振りかざすような真似はしないが、教師、又は学園長の許可を取りさえすれば、試召戦争などに介入することもできる」

つまり、生徒会長が言いたいのは・・・・・・

「以後、何か問題を発生させたクラス、もしくは生徒が所属するクラスには生徒会直々に制裁を下す」

会場が波の様にどよめく。しかし、生徒会長は続ける。

「別に些細な問題に一々あれこれ言うつもりは無い。我々か教師の目に余る行いをした場合、情報が入り次第、試召戦争に他学年の生徒会メンバーが介入させてもらう」

あくまで他学年による介入。そういう点もキチンと考えてあるのか。

「これは既に試召戦争のルールに追加されている。学園長も了承済みだ。資料もＨＲ中に担任から配布される。よく目を通しておけ。異議のあるものは放課後、生徒会室に来い。以上だ」

『生徒会長の香雨君、ありがとうございました。続きまして、転校生の紹介です』

さて、いよいよ出番か。

『紹介します。『蒼月　亜麻理』さんと、『氷花　紫苑』君です』

「蒼月だ、よろしく頼む」

「氷花です、よろしくお願いします」

＞省略＜

その後は教師方のありがた～いお言葉を頂戴し、生徒総会は終了となった。
生徒達がそれぞれの教室に戻り始める。

「ご苦労だった、いきなり全校生徒と教師全員の前に立って緊張したか？」

壇上脇で待機していたところに生徒会長が迎えに来てくれた。僕達も彼の後に続いて壇上脇から出る。

「そうでもない」

「少しだけ」

どうやら生徒達が退場し終わったらしいな。体育館には後片付けをする生徒会の人達しか見られない。

「そうか。ならいい。生徒会長として、一応心配しただけだ。この後は個々の教室でのかるい自己紹介と授業になるだろう。それに、近い内に期末テストもある。赤点を取ってくれるなよ。特に蒼月」

「わかっている。生徒会の顔に泥を塗るようなことはしないさ」

「わかっているならいい。ではいずれ」

「・・・・・氷花紫苑だったな？」

「そうだけど？」

生徒会長が片付けにまわったところで蒼月さんが話しかけてきた。

「先ほどは時間がなくて挨拶出来なかったからな。ここやらせてもらおう。初めまして、『蒼月　亜麻理』だ。以後、よろしく頼む」

「こちらこそ、『氷花　紫苑』です。よろしく」

「同じ転校生ということで仲良くしようじゃないか。私はＡクラスにいる。いつでも遊びに来てくれ。転校してきたばかり故、いかんせん知り合いが1人2人その程度しかいないんだ。会いに来てくれると嬉しい」

「わかった、必ず行く。僕もＦクラスにいるからいつでも来てくれ。それと、Ａクラスには僕の知り合いもいるから仲良くしてくれると思う」

「Ｆクラス？　キミは勉強が苦手なのか？」

「いや、その知り合いと色々話してね。こちらの方が都合がいいんだ」

「そうか。因みにその知り合いの名前は？」

「『宮野　真奈』だ」

「承知した。見つけたら話しかけてみよう。では、そろそろ我々も移動するとしようか」

蒼月さんが体育館を出て行くのを見て、僕も少し遅れて追う。

「僕、トイレに行ってから教室行くよ」

「そうか、またな」

トイレの個室に入り、通信機を使う。

「こちら紫苑です、『月下』応答願います」

『こちら月下です。どうしましたか？』

「学園で少し気になる人物に遭遇した」

『どのような人物ですか？』

「僕と同じ『蒼月』の名字だった」

『わかりました。つまりその肩を調べればよいのですね？』

「そうなる」

『ではその人の名前を教えてください』

「『蒼月　亜麻理』だ」

『ではその人の情報をまとめ次第、転送します。今日こちらに来るようでしたらその時にでも』

「了解」

通信終わり。彼女は普通の人間だといいんだけど。

時間軸が第四十八問に戻る。・・・

Fクラス・・・

「氷花、お前の席はあそこだ」

「わかりました」

軽い自己紹介が終わり、指定された席に着く。

「氷花はまだこの学校に慣れていない。何かわからないことがあったら教えてやってくれ。では、授業を開始するぞ」

昼休み・・・

正直助かった。何がって？　Fクラスの反応だよ。以前の僕の認識通りで、男子共は女子にしか興味がないようで、男子の僕には大し

た興味を示さなかったからだ。女子も女子で、少しだけ話しただけだ。でも、何やら会議っぽいのを開いてたのを見たな。何かあったのか？
でも、今は昼休みだ。休憩も兼ねて屋上に行きたい。あそこならそんなに人はいないハズだ。

「紫苑、いる？」

「あぁ、真奈、どうした？」

「お昼一緒に食べよ？」

ん？　この感覚は殺気？　凄いな、クラスの大半からこの気を感じるんだけど。さっさと移動した方が良さそうだな。

「わかった。今行く」

屋上・・・

「やあやあ、また会ったね。氷花君」

『コイツが亜麻理の言ってたヤツか？』

先客がいたみたいだな。しかも片方は蒼月さん。しかも胸元のボタンを開けていて少しセクシーとかいうヤツだろうか？　もう片方は金髪の男子だ。ハーフとか？
そんな2人が、屋上の端っこで昼食をとっていた。

「あれ？　蒼月さんとスプルース君もここにいたんだね」
「おや、もう名前を憶えてくれたのか？　嬉しいぞ」
「転校生だし印象強いから」
「さて、俺は邪魔だろう。去るとしよう」
何故か立ち上がる彼。それを腕で制止させて蒼月さんがこう言った。
「すまない2人とも、このバカも一緒に昼食というのはダメだろうか？」
「別に僕は構わない」
「私もいいよ」
「と、言っているが？」
「チッ、まぁいいや。そっちが良いんなら遠慮はしない」
舌打ちをしつつ、1度伸ばした足を再び折るえっと、何だっけ？
「おっと、そっちの氷花ってヤツには自己紹介をしてなかったな。俺の名前は『スプルース・A・前火』だ。Aってのはミドルネームだ。呼び方はルースでも前火でも何でもいい」
「すまないな。こいつは不良を気取っているバカなんだ。でもこのバカが生徒会に所属しているとは驚きだろう？」

「え？　前火君って生徒会役員だったの？」

「要らんことを・・・・・・」

「別によかろう？　大した情報ではない」

「そういう問題じゃないだろ」

「私にとってはその程度だ」

「てめぇ・・・・・・」

「2人って仲良いんだね？」

「あぁ、Cまで全部やった関係だ」

「えぇ！？／／／」

「真奈、Cって何だ？」

「何だ知らんのか？　Cというのはだな「紫苑に変なこと教えないで！」おや・・・・・・」

真っ赤になっている真奈を蒼月さんが弄っている光景が繰り広げられている。

「なぁ、Cって何だ？」

「あぁ、ピーのことだ」

「へ、へぇ・・・・・・」

「まぁでも、アイツの言っていることは冗談だから気にするな」

「冗談だったんだ・・・・・・」

「当たり前だ」

ちょっと拍子抜けだ。でも冗談であんなこと言うなんて彼女は結構大物なのかもしれないな。

「なんだ前火、もうバラしたのか？　つまらん男だ」

「勘違いされたままなのは困るだけだ」

「・・・・・・・・・・」

「どした？」

「何でもないよ。さて宮野君、さっきは中々面白かったよ」

「こっちは別に面白くないよ・・・・・・」

「真奈、食べる時間が無くなるよ？」

「わかってるよ・・・・・」

「2人に聞いておきたいことが1つあるんだがいいか？」

「何？」

「『文月学園七不思議って知ってるか？』」

第五十問　生徒総会（後書き）

次回予告　今回も紫苑です。

前火から告げられる文月学園七不思議と、生徒会長に対する警告。
麒麟児と呼ばれるその人。そして、原作キャラ達との再会。

次回　バカと銀色と召喚獣　『謎とFクラスと生徒会長』

試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第五十一問　謎とFクラスと生徒会長

研究施設・・・

見た目は設備の良い学校の教室。そんな場所に集められた9人の男女学生。年齢はバラバラ。同年代が何人かいるが、だからといって何ら意味はない。

皆が皆、適当な場所に腰を下ろしている。誰からも喋ろうとはしない。そして誰も知らない。自分達が何故こんな場所に集められたのかを。沈黙が支配する空間で1人が口を開く。

「なぁ、俺達って何で集められたんだ？」

「・・・・・・・・・・・・わからない」

「そっか・・・・・・・」

それ以上は何も聞かなかった。否、聞こうとすることが無駄だと判断したのだ。

「私達、いったい何をしなくちゃいけないんでしょうか？」

「嫌な予感がする」

その予感はこの時まだ、正しかったとも、そんなことはなかったとも言えない。だが、彼らの運命の歯車はこの時から狂ってしまったのかもしれない。

ガラッ

「待たせたね」

不穏な空気を掻き消すかのように、白衣を着た1人の科学者が現れた。その人の名を『藤堂　カオル』という。

「これからアンタ達には、実験に協力してもらうよ？」

「はい！」

小学生低学年と思われる1人の男の子が挙手する。

「ん？　何だいガキんちょ」

「僕たちは何をするんですか！？」

「それを今から説明する。全員、ついて来な」

彼らは以前藤堂カオルが召喚獣実験を行った時と同じ場所へ連れてこられる。

「アンタらにはここで、『召喚獣システム』の実験を行ってもらう」

紫苑　ｓｉｄｅ

屋上・・・

「「『文月学園七不思議』？」」

「そうだ、それについて知らないか？」

知らないかと聞かれても知らないと答えるしかない。文月学園七不思議なんて記憶をなくす前の僕も知らなかったことだ。

「悪いけど、わからない」

「私も知らない」

「そうか・・・・・ならいいんだ」

「でも、どんなものなのかってのには興味あるよ」

「もし情報を提供してくれるのであれば、こちらも知った時情報を教えられると思う」

「わかった。俺も知っている限りは教えよう。文月学園七不思議ってのは、

【1、　何故か女子のレベルが高い
2、深夜文月学園を徘徊する影
3、消える学園長
4、『文月学園裏生徒会』
5、『召喚獣システム』
6、地下室の棺桶
7、『召喚獣軍用プロジェクト』】

っていう7つの謎のことだ」

「なかなか豪華な内容だね。特に最後の」

『召喚獣軍用計画』が本当だとしたら洒落にならない。

「そして最初のやつが意味不明だ」

「え？　寧ろ最初のやつこそが1番重要だろ」

ゴメン、僕も蒼月さんの言ったことに賛成。1番どうでもいいと思う。

「てゆうか、そこは大人の事情なんだから謎にしても困ると思うよ？」

「何っ？　そうなのか？」

「さて、七不思議とやらも早くも1つ解決だな」

【文月学園七不思議その1を解決した】

「ほら、テロップも出てきたことだし」

「やはりお前の言う七不思議など宛にならんな」

「俺、結構マジだったのに・・・・・・」

自信満々に言い出した七不思議とやらもサラッと流されてしまい、へこみ気味な彼。

「そういえば、２人は生徒会役員だったよね？」

「あぁ、私は新人だが」

「生徒会長ってどんな人なんだ？」

「それについては俺が答えよう！」

「私はまだよく知らん。寧ろこっちが聞きたいぐらいだ。宮野君は何か知っているか？」

「私もよくは知らないな。あの人と関わることがあんまりないし、学年も違うし」

「他の役員に聞いてみてはどうか？」

「はいそこ！　俺を無視するな！」

「なんだ前火、いたのか？」

「ルース君いつからいたの？」

「気配が無かったな」

「なに今気づきましたって顔してんだお前ら！　それに氷花は『２人は』って言ってたよな！？」

「ハテ、記憶にございませんが？」

「とぼけんなこらぁ！」

さて、彼を弄るのはこの辺にしておいて、

「で、どんな人なんだ？」

「教える前に1発殴らせろ」

そういうのは苦手だから勘弁してほしい。

「ったく・・・・・・まぁいい。俺の口からアイツに関して言えることは、とにかく敵に回さないことだ」

「そんなに怖い人なの？」

「アイツは『麒麟児』って呼ばれる男だからな。アイツは3―Aのクラス代表、つまり3年の主席だ。その学力はウチんとこの代表おも大きく上回る。そしてその学力もさることながら、武道も嗜んでいると聞く。試召戦争では戦略家として名をはせ、そのカリスマ性を活かし、生徒会を束ね、今や生徒会長として生徒全員を束ねている」

「なるほどな、お前が敵に回すなと言う理由が分かったよ」

「完璧超人ってヤツだね」

「誰から見てもそう思わせるのが、アイツが麒麟児と呼ばれる所以だ。そして、今アイツが興味を示しているが、氷花、お前だ」

「何でここで僕が出てくるんだ？」

「当然だろう？　あれだけの高得点を出しておきながらＦクラスなんておかしい。誰もが設備も良く、進路にも良い評価をもたらすＡクラスを希望するはずなのに、何故だ？」

「ほぅ・・・・・それは私も興味あるな」

マズイ、良い言い訳が思いつかない・・・・・・

ブブブブ　ブブブブ

「すまん、メールだ」

文面を読んだ彼が言う。

「どうやら仕事が入ったみたいだ。悪いがここで失礼する」

「メールに救われたな、氷花君」

「言えない事情があるのなら、深くは詮索しないが、会長自ら直々に来るかもしれない、気をつけとけよ？　おもしろそうだからなんてふざけた理由は抜かすなよ？　まぁ会長も俺と同じく、言えない理由があるのなら深くは詮索しない。安心しろ、あの人はちゃんと常識をわきまえている。ではな」

そう言って2人は屋上から去ってゆく。

「生徒会、油断しないでね紫苑」

「大丈夫、そんなヘマはしないよ」

ギィ

不意に屋上のドアが開いた。

「あれ、あの3人？　他にはいないのかな？」

入って来たのは『吉井　明久』・『姫路　瑞希』・『島田　美波』の3人。確かあの3人は三角関係的な感じだったハズだが。

向こうもこちらに気づいたようだが、口元に人差し指を当てて静かにしててくれというポーズをとった。どうやら僕達はあまり喋らない方が良さそうだな。

「・・・・・ねぇ、アキ」

「ん？　なに、美波？」

何やら始まったぞ？　3人とも台本を見て言っている。演技でもやってるのか？

「今更なんだけど・・・・・あ、アキにきちんとウチの気持ちを伝えておこうと思うの」

「え？　そんなの、今更言われなくても・・・・・・」

「それでも聞いて欲しいの。・・・・・・・・・・・・こういうことは、ハッキリさせておきたいから」

「う、うん。わかった、それなら聞かせて欲しい。美波の、本当の気持ち」

な、なんだ？　告白的な雰囲気だが・・・・・何でそんな演技をする必要があるんだ？

「わざわざ・・・・・わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ・・・・・あのね、ウチは、アキのことが・・・・・アキのことが・・・・・嫌いなのっ！」

・・・・・斬新な告白だな。

「み、美波・・・・・・？」

吉井明久も困惑している様子。何なんだ、コレ？

「初めて会った時からずっとアキのことが嫌い！　あれからずっと友達として傍にいるのがずっと辛かった！　本当は友達でいるなんて、我慢できなかったのに！」

「・・・・・止めた方が、良いのかな？」

「そうしたいのはやまやまだが・・・・・」

もしこれが試召戦争とかいうヤツの作戦とかなんだとしたら、邪魔するのはマズイ。でもこんな奇抜な作戦が存在するのか甚だ疑問だが。

「美波・・・・・」

「アキ・・・・・」

沈黙の中、彼はこう言葉を紡いだ。

「僕もずっと、同じ気持ちだった」

彼は大物になると僕は確信した。島田美波さんに殴られてはいたが。

Fクラス・・・

「なるほど、そんな作戦だったのか」

「大まかに説明するとじゃがな」

「いや、十分だ。ありがとう」

あの後、真奈と共にFクラスに行き、残念な結果になってしまった作戦についての話を聞かせてもらった。真奈はさすがに他クラスの作戦に首を突っ込むのはマズイと判断してクラスに戻っている。

「さっきは作戦を実行するため急ぎだったから自己紹介が出来なかったな。遅くなったがさせてもらおう。俺はこのクラスの代表『坂本　雄二』だよろしく」

『坂本　雄二』。僕の記憶では元神童で、その頭のキレは現役。Aクラス代表の『霧島　翔子』と付き合っていて、婚約を迫られているとか。

「今、失礼なことを想像しなかったか？」

「そんなことない。よろしく、『氷花　紫苑』だ」

読心術の心得があるらしいな。注意しないと。

自己紹介は省略

「さて、今回の作戦名、『明久と島田のラブラブパワーで嫉妬のツインドリルが天を貫く作戦』だが、その１回目はくしくも失敗に終わった」

「その作戦名は何？」

「今俺が適当に考えた作戦名だ。だがそんなものはどうでもいい。今俺たちにとって重要なのは、清水を嫉妬させることだ。だから、作戦に変更はないことを改めて伝えておく」

「つまりもう１度彼らにやってもらう、と？」

「そうだ、やってもらわねば困る」

「で、でもあんなセリフ無理よ！　録音されているかもしれないのよ！？」

「そ、そうだよっ！　それに美波があんな可愛いセリフを言えるわけがあれ？　右手の感覚が無くなってきたような？」

「あ、それなら木下君。お手本を見せてもらえませんか？」

「んむ？　別に良いが」

『木下　秀吉』。僕の元幼馴染で僕の元カノの『木下　優子』の弟。その演劇に対する心意気は他人の声真似や、演劇の台本をある程度なら簡単に制作できてしまうほどの能力を身に着けさせた。そのおかげで勉強は少々残念な結果になってしまったが。

「よし、と」

「え？　え？」

かるく台本を暗記したのだろう。台本を置き、吉井明久の手を取る。

「わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ・・・・・・。あのね、ウチは・・・・・アキのことが好きなのっ！」

第五十一問　謎とFクラスと生徒会長（後書き）

次回予告　今回は紫苑です。

対Dクラスの為の演技、その手伝いをすることになる僕。だがその手伝いの途中で、生徒会長が現れる。

次回　バカと銀色と召喚獣　『探り』

試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第五十二問　探り

半年後・・・

研究施設・・・

「試獣召喚（サモン）！」

その言葉がキーワードとなり、幾何学模様の魔方陣が現れ、『召喚獣』が呼び出される。

『召喚獣、呼び出しに成功』

『各部、異常なし』

『武器・腕輪の生成、問題ありません』

『んじゃ、始めるとしようか。――、実験を開始する。腕輪を発動させてみてくれ』

今日も『召喚獣システム』の開発総責任者、『藤堂カオル』により、実験は開始する。

「わかりましたー『アクア』！」

その言葉と同時に、召喚獣に装備されている腕輪が輝きだし、召喚獣の手の先から水が噴き出す。

「すっげー！　水が溢れ出てくる！」

『水の噴出量、誤差がありますが問題ありません』

『腕輪の出力、召喚獣への負担、共に問題ありません』

『いけるか・・・・・・？』

モニタールームの誰もが成功を確信したが、突如、水の噴出が止まった。

『失敗か・・・・・・。原因を調査、頼むよ』

『わかりました』

藤堂カオルはモニタールームを出て、召喚獣を呼び出した少年の元へと向かう。

「ねーねー、これって失敗？」

「そのようだね」

「ちぇ～。でも、またやるんだよね？」

「あぁ、もちろん。このシステムは、今全世界が注目しているシステムだからね。私のプライドにかけて必ず成功させてみせる」

「うん！　僕もこのシステムが完成するのを楽しみにしてるね。その為に、いっぱい、頑張るね！」

「あぁ、期待してるさね」

今日もその少年は元気に笑顔を振りまいていた。

紫苑　ｓｉｄｅ

「――――とまぁ、こんな具合じゃ」

「す、凄いわね・・・・・・」

「そ、そうですね・・・・・。私が告白されたわけじゃないのに、思わずドキドキしちゃいました・・・・・」

「そこまで褒められると照れ臭いのじゃが・・・・・・。まぁワシは勉強もせんでこればっかりやっているような人間じゃからな。これくらいは当然じゃな」

木下秀吉が照れ臭そうに頬をポリポリ掻いている。
でも、本当に凄いと思う。こっちでも演技はやっているが、こっちのとはまた違う良さがあると思う。それと吉井明久、こんなことで泣くな。演技だと言っていただろうが。

「とにかくじゃ。このままでは清水が嫉妬するどころかまったくその逆の結果になりかねん。ムッツリーニ、先ほどの屋上での会話は清水に伝わっておるのか？」

「・・・・・・・・・・・・微妙。一応、途中でまた接触不良を装

っておいた」

なるほど。島田美波の性格から考えて、演技とはいえあの場面でいきなり好きだのなんだのと言えないのを予測しての判断か、流石だ。ムッツリーニのあだ名は伊達じゃなかったか。

それにしても原ｓ、ゲフンゲフン！　文月学園メンバーとはほとんど初対面で、彼らに対する知識しか持ち合わせてはいないとはいえ、一々フルネームで呼ぶのは面倒だな。読者の皆様にもあまり親切ではない。以後、地の分とはいえ名字で呼ぶことにしよう。

「序盤のセリフは台本通りじゃから、向こうも真偽について訝しんでおるところじゃろう。まだ取り戻せる範囲じゃ。ここからきっちりと恋人同士を演じてもらうぞい」

「「うっ・・・・・・」」

手本は見せたんだ。後は２人がやるだけだ。

「先ほどは姫路の出番に入る前に中断となってしまったようじゃが、ここから先は姫路にも参加してもらうかの」

「は、はいっ。頑張りますっ」

「うむ。よろしく頼むのじゃ」

「ところで、僕は何を手伝えばいい？」

「ちゃんと考えてある。氷花にはＢクラスとＤクラスの動きを常にチェックしておいてほしいんだ。２クラスは隣同士だから大丈夫だと思う。わかる限りのことでいい」

「了解だよ」

「・・・・・・・・・・・・連絡する時はこれを使え」

そう言って土屋君が手渡してくれたのは通信機。便利な物持ってるなぁ。

「それじゃ、そっちは任せた」

「わかってると思うが、バレないようにな」

「わかってる」

教室を出て行くとき吉井君が僕を止めるような素振りを見せたが何だったんだ？

廊下・・・

ちょっとちょっと、どうゆうことコレ？　何か普通に他のクラスの皆さんは点数の回復テストを受けてらっしゃるんだけど？　違和感がないわけではなかったけど普通に授業の時間じゃないか。さっき吉井君が僕を止めようとしたのはこういうことだったのか。どうせならオレ○ジ君みたくもっと全力で止めて欲しかったものだ。

「まぁ、おかげで仕事は楽なんだけどね」

完全に独り言である。傍から見たら怪しい人だ。

「ご苦労だな、転校早々自分のクラスの為に他クラスの監視とは」

「あっ」

生徒会長が何故か現れた。

「生徒会長こそどうしたんですか？　今は授業中では？」

「お前もそれを見越して他クラスの監視に来たのであろう？　ならばこちらも問題ない。今はほとんどのクラスが自習だ。３年は受験があるから時間があるなら赤本でも解いているさ。俺１人いなくなろうと騒ぎになど到底ならない」

「ごもっともで。で、僕に何か用でもあるんですか？」

「前火からも聞いているだろう？　俺はお前に興味がある。いや、言い換えるなら、お前を疑っている」

「疑う？　よりにもよって何故僕を？」

「惚けるな。何故お前は転入試験でＡクラスに転入出来るレベルの点数を取っておきながらＦクラスに転入した？　あらゆる点でＡクラスはＦクラスより勝っている。世間からの目も良いし、就職や進学にも役立つ。なのに何故？　面白いからなどというつまらない返事はしてくれるなよ」

いつかは来ると思っていたこの質問。でもまさかこんなに早く来るとは思ってもみなかった。

「黙秘権を使わせてもらいます」

「人には言えない事情、そう受け取っていいんだな？」

「構いません」

今はこれを通せばいい。いくら生徒会長とはいえ他人のプライバシーには干渉できない。

「・・・・・そうか、わかった。言えない事情とあらば仕方がない。潔く諦めさせてもらおう」

「助かります」

「ではな。次回の期末テストでは赤点を取ってくれるなよ？」

「わかってますよ」

そう言うと生徒会長は踵を返して去って行った。意外だったのはすんなり諦めてくれたことだ。こちらとしては助かるわけだが。

さて、生徒会長は無事クリアしたことになるのだろう。ならばこちらはこちらでＢ・Ｄクラスの監視でも続けようか。

「そうだ、１つ聞きたいことがある」

どうやらまだ終わっていなかったみたいだ。しかもさっきみたいな見透かす目をしてきている。僕ってそんなに怪しいかな？

「なに、大したことじゃない。とある女性について聞きたいだけだ」

生徒会長が、僕の目を真正面から見据え、僕の一挙手一投足を何1つ見落とすまいということが嫌でもわかるその目で、こう言った。

「『香雨　瑠璃』という人をどこかで聞いたことがないか？」

第五十二問　探り（後書き）

次回予告　今回は亜麻理と紫苑です

香雨瑠璃のこと何故か知っている生徒会長。当然情報は明かさなかったが、生徒会長は何やら動きを見せるようだぞ？　さぁ、どうする氷花君？

結局次回に関する予告しなかったのか・・・・・・

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『帰宅路の襲撃者』

試験召喚獣、試獣（サモン）召喚！

第五十三問　帰宅路の襲撃者

研究施設・・・

「っ！　ゴホッ！　ゴホッ！」

「！　大丈夫か!?　■■！」

突如1人の小学生低学年ほどの女の子が咳き込む。だが、これは初めてではない。彼女は病気なのだ。

「う、うん・・・・・・大丈夫。このくらいなら・・・・・・ゴホッ！　ゴホッ！」

「待ってろ！　すぐ人を呼んでくる！」

集められたメンバーの中で、2番目に年上の青年が普段皆が集まっている部屋から駆け足で出て行く。

「大丈夫だからな。心配するな」

「うん。ありがとう■■」

「気にするな」

「しかし、病気持ちの子がいるとはな」

実はこの実験に集められた子たちの中には病気持ちの子いる。ケガなどを負うこともなく、激しい運動をすることもないこの実験では

あまり気にすることもないのだが、やはり保護者には反対された。しかし、当の本人は人の役に立つためということで実験に参加している。

「そこは、年長組の自分と■■が何とかするさ。それに、しっかり者のキミにも期待しているからね？」

「変な期待を寄せないでください。今の自分なんかにできることなんてたかが知れているんですから」

「まぁそうかもね。でも、キミなら何とかしてくれそうな気がするんだよ」

「何で大学生のあなたが小学生に期待しているんですか？　いざという時に何もしないわけないですよね？」

「あっはっは。大丈夫、僕だってやるときはやる男だよ」

「だと良いんですが・・・・・・」

小学生の少年は１０年以上年が離れている青年に対し溜息をする。少年からすれば、青年がなよなよしていてあまり頼りに見えないのだろう。

「■■、人を呼んできたぞ！」

そんな彼らの知らぬ場所で、届かぬ場所で、ある計画が持ち上げられていた。その計画の名は――

Fクラス・・・

あれから監視を続けること約1時間半。ここからの位置で見える変わったことと言えば土屋君によるBクラス使者の暗殺行為。それと、根本がAクラスに行き霧島さんと話をしていたこと。これについては坂本君に報告済み。ある程度の対処はしておいたそうだが、肝心の彼は教室にいる。当然と言えば当然だがこれで大丈夫なのかいささか不安。

「秀吉、例のDクラスとの交渉は大丈夫？」

「うむ。清水を引っぱり出すことはできた。放課後に旧校舎2階の空き教室で待ち合わせという手はずになっておる」

余談だが、今回僕はこの交渉には参加しない。当然と言えば当然のこと。僕はまだ転校生っていう設定なんだからこの学校のことはほとんどわからないハズなのだから、交渉の席にいたところで何の役にも立てない。

「雄二よ。Dクラスを開戦に踏み切らせる為の策はあるのかの？」

「勿論だ。とっておきの作戦がある」

坂本君が自信ありげな発言をした次の瞬間――――

バンッ

突如勢いよく開く教室のドア。開けた本人は何か急いでいるかのような雰囲気の霧島さん。

「・・・・・・雄二・・・・・・・っ！」

「翔子、何をそんなに慌てているんだ？」

「・・・・・・何でそんな冷静なの？　雄二は、どうしてまだ学校にいるの・・・・・・！」

おかしい。何で霧島さんは放課後でもないのに学校にいるのは何故かと聞いているんだ？

「翔子、まず落ち着け。何があったんだ？　根本から何を言われた？」

「・・・・・・お義母さんが倒れたのに、心配じゃないの・・・・・・！？」

「はぁ？　あのおふくろが？　風すら引かない全身健康体だぞ？」

（坂本君、多分これが根本の策なんじゃ）

（恐らくそうだろうな。俺が翔子に勝てないとふんで翔子に俺を連れ出させ、俺を交渉の場に出させないつもりだ）

小声で話している内に霧島さんは坂本君に近付く。

（氷花、端折って話す。俺のロッカーの中にある現代文の教科書を――――）

「・・・・・・雄二、早く・・・・・・！」

「すまん、多分俺はこのまま連れて行かれる！　氷花、さっき言ったことを頼む！　それと翔子、倒れたのであれば家じゃなくて病院だと――――」

「わかった」

そのまま坂本君はほぼ無抵抗のまま霧島さんに拉致られてしまった。

「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」

あまりに突然のことだったのだろう。吉井君たちは全く反応出来なかったらしい。

固まっている3人を尻目に、僕は坂本君に言われた通り彼のロッカーの中の現代文の教科書を取り出す。するとしおりでも挟んであるのか、とあるページが簡単に開く。そこには1枚のメモ用紙。

「とりあえず皆、これからのキミたちの行動は決定だ」

「えっ？　どういうこと？」

「コレを見て」

僕が渡したのは坂本君が残したものだと思われる1枚のメモ用紙。

内容は十中八九交渉時の作戦について。

「ふぅ。とりあえずこれで一安心、というわけじゃな」

「よかった。清水さんを挑発する作戦は雄二に任せっきりだったから」

「・・・・・・・・・・・・氷花の報告のおかげ」

「いや、最悪の場合を想定して動いていた坂本君の判断だよ」

一応一安心できる状況になったということか。これで交渉はほぼ成功することは間違いない。後は明日の試召戦争が問題になってくるのか。

「悪いけど、僕の出番はここまでだ。吉井君、木下君。健闘を祈る」

「任せて」

「右に同じく、お疲れ、じゃ」

「お疲れ様」

月下・・・

「こんにちは」

いつもと同じだと思われる風に入室。そしていつもと変わらないお

互いの挨拶。唯一変わっていることと言えば僕の記憶のことについてだけど。

「瑠璃さん」

「ん～、な～に～？」

「『蒼月　亜麻理』についてはどうなりましたか？」

「どうにもならないわ。彼女、一般人とみていいかもしれないわね。少なくとも、データ上は、だけどね。ほい、彼女の経歴とかをまとめた書類」

「ありがとうございます」

年齢は１６、出生日は3月末。出産記録に怪しい部分は見当たらず。普通の小学校卒業、中学校も同じく。文武両道で、特に問題もなく今の生活を続けている、両親も健在。資料全体に目を通したが特に不審な点は発見できなかった。僕の思い過ごしか・・・・・・

「どうだった？」

「はい、確かにデータ上は何ら不審な点はなかったので、僕の気の所為ですかね？　まぁ、一応これからもマークを付けてはおきますけどね」

「そうね、それが妥当かしら」

「あ、そういえば今日、瑠璃さんのことを知っているかと聞かれましたよ」

「え？　私のことを？　誰？」

「『香雨　桔梗』っていうウチん所の生徒会長ですよ」

「桔梗・・・・・そう、まだ私のことを・・・・・・」

「姉弟ですか？」

「えぇ、義理のね」

義理の姉弟か。何があったんだろう？

「まぁ、深く詮索するつもりはありませんので」

「そうしてもらえると助かるわ」

「今日は、ありがとうございました」

「いえいえ～、こっちも桔梗のことわかったから。もし桔梗のことで何かあったら言ってね」

「わかりました」

どこか懐かしむように自室に戻っていく瑠璃さんが、何故か弱弱しく見えた。

帰宅路・・・

妙だ。そう思い始めたのは今しがた。何故か人がいないのだ。ここは別に路地裏とか通り魔が出る場所でもない。まだそんなに夜遅いってわけではないし、夕方とも言えない中途半端な時間。人がいてもおかしくはないはず。でも先ほどから数百メートル歩いているが誰とも合わない。流石に変だと思う。

「・・・・・・・・・・・・・」

立ち止まってあたりを見渡す。やはり誰もいない。そう思っていたが、誰かが歩いてくるのが見える。顔は微妙に見えない。やがて電灯に映し出されるであろうその顔に僕は興味を持てず、再び帰路に付こうとしたその時――

『人払いは済ませてある』

歩き出そうとした足は動けなかった。原因は先ほど投げかけられた言葉。

『さぁ、話してもらおうか。お前の知っていること全て』

殺気!?

咄嗟に僕は振り返り身を引いた。すると今しがた僕がいた場所に木刀が振られていた。

そして振った主の姿が電灯の光に晒された。

「これは、いったい何の真似ですか？　生徒会長」

「・・・・・・・・・・・・得物を持て」

恐ろしく低い声で生徒会長は言葉を連ねる。

「断る」

「そうか。ならば素手が得物だと判断し、お前に攻撃を開始する」

「待っ！」

こちらの言葉は生徒会長が木刀を持ち突進してくることで遮られる。

「いきなり攻撃を仕掛けてくるなんて、僕が何かしたんですか！？」

「お前は嘘をついた」

「嘘？」

再度振られる木刀を避け、立ち位置が逆になる。それにしてもこの人、並の人間じゃない。

「そうだ。お前は瑠璃姉さんのことを何か知っている。確かにお前の嘘は一級品だよ。だが俺は騙されない。俺がお前に問いかけた時、お前の目の光が僅かに揺らぐのを見た」

やはり今の僕では以前の僕のようにはいかないか・・・・・。嘘がバレるなんて。

「さぁ、吐いてもらおうかっ」

「だが断る！」

「っ！　逃がさんぞ！」

戦略的撤退！　いきなり襲われることになるなんて・・・・・・。
冗談じゃないぞ。
この人足も速いな。僕について来るなんて！　闇夜の中を僕らは走り続ける。どうやったのかはわからないが、かなり広い範囲を人払いしたらしい。そのおかげで逃げやすいが。
それにしてもしつこい。次はそこの角を――

「「っ」」

『おいおい、こんな夜遅くに2人で何やってんだよ』

次の角を右に曲がろうとしたその時、角から人影が現れる。

「・・・・・前火か」

「ロース君？」

「何だその美味しそうな名前は？　ルースだ。覚えとけ。それと、コイツは俺が何とかしとくから、とっとと家に帰んな」

いけないいけない。つい間違えてしまった。しかし今はそんなことはどうでもいい。

「邪魔するのか？」

「邪魔するさ。このままだと色々と狂っちまうからな」

「関係ない。姉さんの情報が手に入ればそれでいい」

「自己中が・・・・・ちょっと頭冷やしてやんよ」

よくわからんが、今の内に逃げるべきだろうな。ここで戦うのは得策ではない。最悪2対1の構図になりかねない。

僕は気を全開している2人を尻目にこの場を離れる。離れてすぐに、突風が後ろから吹き込んできた。

数分後・・・

何だったんだいったい・・・・・生徒会長とロース君、あの2人はただの生徒会役員じゃないのか？　少なくともあの生徒会長を何とか出来る自信があるロース君も並みの人間じゃないと見ていいのか？　それにロース君が言っていた『色々と狂う』というのは何だ？今のところはわからないことだらけだな。学校と『月下』の方で情報を集めるとしよう。

ん？　あの後ろ姿は・・・・・・

「木下君か？」

「おぉ、氷花ではないか。おぬしの家もこの辺なのか？」

「まぁね」

後姿から判断した人物を振り返った人物は同一の人物だったようだ。
当の本人は片手に買い物袋を持っている。

「それにしてもお主、ワシよりだいぶ早く帰宅した割には今から帰宅なのかの？」

「寄る所があってね。そこにいたらこの時間になってしまったんだ。そういう木下君は？」

「本屋に行っておったのじゃ。姉上に頼まれての」

はぁ、と深いため息をつきながらガックリ肩を落としている。相変わらず苦労しているのだな。ゆう、じゃなくて木下さんは昔から木下君の扱いが雑だからなぁ・・・・・・

「せっかくじゃから家まで一緒にどうじゃ？」

「そうさせてもらうよ」

そこから僕達は木下家へ着くまで交渉についてと明日の試召戦争についての対策に考えを巡らすのだった。

第五十三問　帰宅路の襲撃者（後書き）

次回予告　今回も紫苑です。

Dクラスの意外な宣戦布告。こうなったからには今は目の前の試召戦争に集中するため生徒会長たちのことは一先ず頭の隅へ追いやろう。さて、僕の役目は・・・・・・

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『試召戦争なう』

試験召喚獣、試獣召喚（サモン）！

第五十四問　試召戦争なう（前書き）

遅れてしまい申し訳ありません。

第五十四問　試召戦争なう

研究施設・・・

『どうですかな、研究の方は？』

「アンタらが提供してくれる資金やプランのおかげで、とりあえず順調に進んでいるさね。心配はご無用だよ」

研究者、『藤堂カオル』は来客を迎えていた。その来客というのは毎回決まった間隔で来る国からの監査官の１人。それをうんざりした様子で対応している。

『それは何より。完成は近いですかな？』

「まぁ、大した差異はないわけだが、当初の予定より数ヶ月早く完成が拝めそうだよ」

『それはありがたい。我々としても、『召喚獣システム』の完成はとても待ち遠しい。今や世界各国が首を長くして待っておるのです』

「・・・・・お世辞はいいよ。それにその喋り方、気に入らないさね。用が済んだならとっとと失せな」

『こちらとしては上からの命令を遂行し終わるまでは帰れません。それで？　今日はどのような実験を？』

「召喚獣の実体化。要は物理的干渉がどこまで有効か、そして危険は無いかを調べる。理論上は可能なことだからね」

『なるほど、ではあそこにいるのが、日本全国から集めた適性検査で『S』を叩き出した子供たちの1人と見てよろしいですかな?』

監査官の目に映ったのは特殊な空間、召喚フィールドを展開している部屋のど真ん中に立って実験の開始を待っている様子の1人の少年の姿。今回の実験は物理干渉に関する実験の為、手軽なブロックのおもちゃからレンガまで。様々な重さの物が用意されている。

「あぁ、そうだよ」

『・・・・・・惜しいものですな』

「何がだい?」

『いえいえ、こちらの話です。では、命令ですので実験を観察させていただきますよ?』

「・・・・・・好きにしな」

怪訝そうな顔をしつつも『藤堂カオル』は実験開始を宣言する。

Fクラス・・・

『我々Dクラスは、Fクラスに対して宣戦布告を行う!』

例の交渉の翌日、昨晩の生徒会長による襲撃の翌日、朝のＨＲの終了直後に言い渡されたＤクラスからの宣戦布告。

「？　なんじゃと？」

「木下君、交渉は失敗したんじゃないのか？」

「そのはずなのじゃが・・・・・・」

実は昨晩木下君からの話によると交渉は失敗したらしい。詳しい内容を聞く気はないが、恐らく清水さんが原因と見ていいだろう。

「ムッツリーニ。状況はわかるか？」

「・・・・・・・・・・・昨日何があったのかはわからない。ただ、今日は朝から清水が興奮していた」

「清水が？　だとすると、挑発は成功していたんじゃないか？」

「明久。お主、あの後に何か話しておったのか？」

「い、いや。別に。それよりも試召戦争だよ！　Ｂクラスじゃないとは言え、今の僕らには厳しい相手なんだから早く準備を始めないと！」

彼、嘘つくの下手だな・・・・・・。何かあるのがモロバレだ。

「賛成。昨日の交渉について詮索したところで試召戦争が有利になることはない。だったら、今すぐ対策の為の作戦を皆に伝えて行動させた方がいい」

「そうだな。真実はどうであれ、まずは目先の試召戦争だ。ここまでやってDクラスに負けたら何の意味の無い」

兎にも角にも、坂本君が考えていたDクラスとの試召戦争の環境は整った。後は彼の指示に従って行動し、クラスの一員として溶け込むのみ。余計な深入りはすまい。

「坂本君、作戦はある？」

「当然ある。だが、先に戦力の確認をする。今姫路と島田以外に戦えるヤツがどの程度いるのかを調べる」

そこからの坂本君の行動は早かった。教壇に立ち、クラス全員に自分の残っている点数を書かせ提出させた。その後、残点下位１０名に点数の補充とその科目を指示。この科目を指示する点で不明なところがあったから後で彼に聞いてみたところ、心理戦の類が関わっていたようだ。いずれ僕も身につけておかねばならないスキルの１つだな。

「氷花、早速だが今回の試召戦争には出来る限り参加してもらうぞ」

開戦直前、僕は坂本君から告げられた。

「恐らく俺達Ｆクラスは学年の中でも１番試召戦争をするクラスだろうからな。お前にも早いうちに慣れていてもらいたい」

「わかったよ」

「それとな、実はムッツリーニに氷花、お前の転入試験の成績についての情報を流させてもらった。そこで、氷花には防衛ラインの後方に待機してもらいたい。それだけでも、敵の進軍が鈍るはずだ。最悪、勝負して戦死しても構わん。お前と周りの判断に任せる」

「了解したよ」

「それともう1つ、保険みたいなもんだが――」

『いよっしゃぁああーっ!!』

試召戦争開幕。我らがクラスは→の叫び声と共に全員が行動を開始。先行部隊が主要重要ポイントに走って向かう。早く行き過ぎても問題なので、時間を適当に見計らって教室から動く。

主要重要ポイント・・・

ふむ、見た所坂本君の作戦通りに展開しているな。坂本君の作戦によってDクラスの女子がたったの7人しかいない。これで数での戦力差はこちらが約3倍。質が問題ではなくなってくるんじゃないか？

『あの銀髪、氷花ってヤツじゃない？』

『やばっ、ちょっと連絡行ってきてくれる？』

僕の存在に気づいた女子が仲間に指示を出し、恐らく清水さんにだろうが報告しに行った。これで相手は6人。ここで僕が参戦しても良いが、それでは坂本君の指示を無視したことになってしまう。判断に任せるとは言われたが、ここは作戦通り行動するのが良いだろう。

そこで僕は行動する。連絡に行った人が丁度教室に入って清水さんに報告をしているであろうタイミングだ。ここで、僕は階段を使って上の階へと向かう。

『あれ、氷花は？』

『それが、今さっき階段で上の階へ行っちゃったの』

『え～、後追っとく？　以前Fクラスは Bクラスに勝った時屋上から教室内への奇襲で根本にトドメ刺したんだし』

当然以前のBクラス戦での情報は彼女らの耳にも入っているだろう。そこで当然こうした疑心が生まれてくる。今代表の平賀君は補給試験中だろうから教室にいるだろうし。いくら防御を固めているとはいえ姫路さんのこともあるから警戒せざるを得ないはず。

屋上・・・

そして僕はこの位置で待機。警戒してDクラスが主要防衛ポイントの戦力を割けばそれで良し。戦力がこちらで釣れればなお良し。予めこちらで待機していた横溝君とバトンタッチ。彼が連れて来ていた社会科の福原先生と共に待ち惚けすることに・・・・・

「そういえば、福原先生」

「はい、何ですか氷花君」

「最近、ナレーションはどうですか？」

「えぇ、中々良い感じです。ですが、2期が終わってしまったので次ナレーションするのはいつになるやら」

「あぁ・・・・・・ご愁傷様です」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

空き教室・・・

時は試召戦争。場所は3階の空き教室。そこに、『吉井　明久』はいた。試召戦争とは無関係なこの場所に、何故彼がいるのかというと――――待っているのだ。

誰を？――――自分が白黒つけなくてはならない相手。『清水　美春』を。

彼は今、考えていた。それは彼らしくない行動。

『観察処分者』

それは、学園創立以来初の不名誉な称号・バカの代名詞・教師の雑用係。など、誰から見てもそれを持つ彼のことを優秀だとは言わないだろう。

そして彼は、事実バカである。考えるより先に行動する。その彼が

何を考えるのか。それは『島田　美波』という1人の女生徒のことである。ここでは割愛させてもらうが、彼は今彼女と喧嘩している。彼はバカである。故に、言葉では彼女の心も、その彼女を傷つけた彼のことを憎む『清水　美春』の心を動かすことは出来ない。

こんな時、彼より言葉を巧みに操り、語彙も多い悪友の『坂本　雄二』ならどうするだろうか。言葉だけで、2人の心を動かすことができるかもしれない。否、それは出来ない。

【言葉より行動がモノを言う】

世の中には、口達者は数え切れないほどいる。そもそも、言葉というものは、やっかいな代物だ。“口で言うのはタダ”、そこで人はありとあらゆる問題について言葉巧みに表現し、それを喋ろうとします。当然雄二ならそうするだろう。でも、明久には出来ないのだ。何故か。それは、彼がバカだからである。

「こんなところに1人でいてくれて良かったです。貴方に話がありましたから」

彼は今も行動し続ける。自分のその行動が、何かを変えることが出来るかもしれないから。

第五十四問　試召戦争なう（後書き）

次回予告　今回は紫苑です。

文月学園の制服に再び裾を通して初めての召喚。こちらは負けても時間が稼げればいいという気楽な物だけれど、明久の方は違うんだろうな。

次回　　バカと銀色と召喚獣　　『試験召喚獣で語る』

第４巻内容、終了。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2244l/

バカと銀色と召喚獣

2011年11月6日02時19分発行